

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 29

平成24年度発掘調査報告

(第2分冊)

玉 縄 城 跡

笹 目 遺 跡

今 小 路 西 遺 跡

円覚寺旧境内遺跡

玉 縄 城 跡

天 神 山 城

新 善 光 寺 跡

米 町 遺 跡

平成25年3月

鎌倉市教育委員会

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 29

平成24年度発掘調査報告

(第2分冊)

玉 縄 城 跡

笹 目 遺 跡

今 小 路 西 遺 跡

円覚寺旧境内遺跡

玉 縄 城 跡

天 神 山 城

新 善 光 寺 跡

米 町 遺 跡

平成25年3月

鎌倉市教育委員会



天神山城 全景



米町遺跡出土の瀬戸水滴

ご あ い さ つ

近年、鎌倉の街では古い家屋や店舗の建て替えが相次いでいます。その中で、埋蔵文化財に影響のある工事も多くなっています。このため、個人専用住宅等建設に際しては、昭和59年度から国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が調査主体となって発掘調査の実施にあたってまいりました。

先人の遺産である文化財を守ることは、現在に生きる我々の責務であり、市内のおよそ6割の地域が埋蔵文化財包蔵地となっている本市の場合、特に市民の皆様のご理解とご協力なくしては、埋蔵文化財の保存や発掘調査の実施が困難であることは言うまでもありません。

本書は平成16～21年度に国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が実施した個人専用住宅等の建築に伴う発掘調査の記録として14ヶ所の調査成果を掲載しています。

調査の実施にあたり埋蔵文化財に対する深い御理解をいただくとともに、調査の期間中、物心両面にわたり多大なご協力をいただきました事業者・工事関係者の皆様に心からお礼を申し上げます。

平成25年3月29日
鎌倉市教育委員会

例 言

- 1 本書は平成24年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査に係る発掘調査報告書である。
- 2 本書所収の調査地点は別図のとおりである。また掲載分冊については、第1分冊に掲載した表のとおりである。
- 3 現地調査及び出土資料の整理は、鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。
- 4 出土遺物及び調査に関する図面及び写真等は、鎌倉市教育委員会文化財課が保管している。
- 5 各調査の成果は、それぞれの報告を参照されたい。

総目次

(第2分冊)

例言	II
目次	III
7 玉縄城跡 (No.63) 植木字植谷戸198番地点	
第一章 遺跡の概観	5
第二章 調査の概要	15
第三章 調査結果	17
第四章 まとめと考察	41
8 笹目遺跡 (No.207) 笹目町316番10地点	
第一章 本調査地点の位置と歴史的環境 (図1・2、表1)	63
第二章 調査の概要	67
第三章 発見された遺構と遺物	71
第四章 まとめ	97
9 今小路西遺跡 (No.201) 御成町176番7地点	
第一章 遺跡の位置と歴史的環境	121
第二章 調査の概要	125
第三章 検出遺構と出土遺物	129
第四章 まとめ	180
10 円覚寺旧境内遺跡 (No.434) 山ノ内字瑞鹿山398番地点	
第一章 本調査地点の位置と歴史的環境	205
第二章 調査の概要	212
第三章 発見された遺構	217
第四章 発見された遺物	240
第五章 まとめ	266
11 玉縄城跡 (No.63) 植木字植谷戸48番6地点	
第一章 遺跡の位置と歴史的環境	288
第二章 調査の概要	291
第三章 検出遺構と出土遺物	293
第四章 まとめ	295

12 天神山城 (No.384) 山崎字宮廻656番19地点

第一章	遺跡の位置と歴史的環境	302
第二章	調査の概要	304
第三章	検出遺構と出土遺物	308
第四章	まとめ	314

13 新善光寺跡 (No.284) 材木座四丁目579番8地点

第一章	遺跡の位置と環境	331
第二章	調査の概要	337
第三章	検出遺構と出土遺物	342
第四章	まとめ	353

14 米町遺跡 (No.245) 大町二丁目993番1外地点

第一章	遺跡の位置と環境	375
第二章	調査の概要	381
第三章	検出遺構と出土遺物	384
第四章	まとめ	393

鎌倉市全図

平成24年度の緊急発掘調査地点 (1~8)
本書掲載の平成16~20年度発掘調査地点 (①~⑭)
※遺跡名は一覧表を参照



玉縄城跡 (No.63)

植木字植谷戸 198 番地点

例 言

1. 本報は「玉縄城跡」内、植木字植谷戸 198 番における埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 調査期間 2006年2月2日～同年4月6日
調査面積 98m²
3. 本調査地点の略称はTUU198とした。
4. 調査体制
担 当 者 馬淵和雄
調 査 員 松葉崇・松原康子・沖元道(資料整理)・根本志保(資料整理)
調査補助員 鈴木弘太・岩崎卓治(資料整理)
作 業 員 浅香文保・佐野吉男・田口康雄・渡辺輝彦(社団法人鎌倉シルバー人材センター)
5. 本報作成分担
遺構図整理 沖元
遺物実測 根本・松原・岩崎
同墨入れ 根本・松原・岩崎
同観察表 松原
同写真撮影 沖元
原稿執筆 馬淵・沖元
編集 沖元
総括 馬淵
6. 現地調査及び資料整理に際して以下の方々からご助言とご協力を戴いた。記して感謝の意を表したい(敬称略、五十音順)。
汐見一夫・下高大輔・中野晴久・藤澤良祐

目次

本文目次

第一章 遺跡の概観	5
1. 玉縄地域の地勢と調査地点の位置	
2. 歴史的環境	
第二章 調査の概要	15
1. 調査にいたる経緯	
2. 調査方法	
3. 調査の経過	
第三章 調査結果	17
第1節 概要	
1. 層序	
第2節 各説	
1. I面～II面上層	
2. II面下層	
3. III面	
4. IV面	
第四章 まとめと考察	41
1. 遺構の変遷と年代	
2. まとめ	

挿図目次

図1 調査地点と周辺の遺跡・旧跡	8	図14 III面遺構全図	27
図2 明治15年頃の玉縄城周辺	10	図15 III面包含層出土遺物	28
図3 玉縄城縄張図	13	図16 建物1・L字柱穴列、III面小穴出土遺物	29
図4 玉縄城中心域の地形「1954年」	14	図17 IV面遺構全図	30
図5 調査区設定図	16	図18 IV面包含層出土遺物	31
図6 調査区・深掘り土層断面図	18	図19 溝2、同出土遺物	32
図7 I面～II面上層遺構全図	20	図20 溝2出土遺物(2)	33
図8 I面～II面上層出土遺物	21	図21 溝1・4・5、同出土遺物	34
図9 柱穴列1～4、同出土遺物	22	図22 遺構外出土遺物	35
図10 柱穴列5～9	23	図23 遺構変遷図	42
図11 土坑1～5、II面上層小穴出土遺物	24	図24 調査地点及び周辺の遺構検出状況	43
図12 II面下層遺構全図	25		
図13 II面下層包含層・II面下層出土遺物、土坑7・8 同出土遺物、II面下層小穴出土遺物	26		

表 目 次

表 1 出土遺物観察表(1)……………36	表 5 出土遺物産地別構成比……………40
表 2 出土遺物観察表(2)……………37	表 6 韃羽口面每出土比……………40
表 3 出土遺物観察表(3)……………38	表 7 鉄滓面每出土比……………40
表 4 出土遺物計量表……………39	

図 版 目 次

図版 1……………44	7 - 2 2区IV面溝2覆土内耳鍋(図19-14) 出土状況(北から)
1 - 1 昭和30年頃の玉縄城	7 - 3 2区II面下土師器皿(図15-4) 出土状況(北から)
1 - 2 調査地点遠景(矢印の下、南から)	7 - 4 1区IV面全景(南から)
1 - 3 本支谷に入る道(調査地点は右手奥)	7 - 5 2区IV面全景(西から)
図版 2……………45	図版 8……………51
2 - 1 1区II面上層全景(東から)	8 - 1 1区IV面溝2(西から)
2 - 2 1区II面上層全景(南から)	8 - 2 IV面溝2全景(東から)
2 - 3 1区II面上層全景(西から)	8 - 3 溝2中央部土層断面(西から)
図版 3……………46	8 - 4 2区溝2内土師器皿出土状況(東から)
3 - 1 1区II面上層西南隅 盛り上り部分 (北東から)	図版 9……………52
3 - 2 2区II面上層全景(東から)	9 - 1 2区IV面溝4(南から)
3 - 3 2区II面上層全景(南から)	9 - 2 溝4内角材(北から)
図版 4……………47	9 - 3 溝4南壁土層断面(北から)
4 - 1 1区II面下層全景(東から)	9 - 4 1区IV面溝5(北から)
4 - 2 1区II面下層全景(南から)	9 - 5 1区溝5南壁際土層断面(北から)
4 - 3 2区II面下層全景(北から)	図版 10……………53
図版 5……………48	10 - 1 1区IV面溝5内遺物出土状況(北東から)
5 - 1 1区II面上層調査区東切石列(東から)	10 - 2 1区調査区東壁土層断面(西から)
5 - 2 1区II面上層調査区東切石列(南から)	10 - 3 2区調査区南壁中央部土層断面(北から)
5 - 3 1区II面上層土坑5(北から)	図版 11……………54
5 - 4 1区II面下層中央深掘り土層断面(南から)	出土遺物 1
図版 6……………49	図版 12……………55
6 - 1 1区III面全景(東から)	出土遺物 2
6 - 2 1区III面全景(南から)	図版 13……………56
6 - 3 1区III面P.103土層断面(南から)	出土遺物 3
図版 7……………50	図版 14……………57
7 - 1 2区III面下白磁皿(図15-12)出土状況 (北から)	出土遺物 4

第一章 遺跡の概観

1. 玉縄地域の地勢と調査地点の位置

玉縄地域は三浦半島の基部にあって、鎌倉市の北西部に位置し、北と西を藤沢市に、東を横浜市に接する。「玉縄」という地名は、鎌倉市玉縄・関谷・植木・城廻・岡本を中心として、藤沢市村岡東・高谷・渡内をも含んだ、一帯の総称である。大船・山崎辺から北方を見たとき、鉄道の向こうに視界いっぱいに広がる山塊がそれで、ほぼ全域が中世山城である玉縄城とその支城群からなる。

この山塊は横浜市西南部から延びてきた第3紀層からなり、藤沢市側の古地名を取って「村岡丘陵」と呼ばれる。横浜市から江ノ島に向かって南西に流下する柏尾川の右岸にあって、標高は30～80mほど、大小の谷戸が入り組んだ複雑な地形を呈する。相模野台地の南端に位置し、柏尾川によって南の片瀬丘陵と寸断されている。

柏尾川は村岡丘陵と片瀬丘陵の間の低地を北東からいくらか蛇行しつつ西流し、村岡丘陵を過ぎた藤沢市川名の辺で北から来た境川に合流する。そして、片瀬丘陵を左岸に見ながら、江ノ島付け根の相模湾に流れ込む。村岡丘陵は柏尾川と境川とに挟まれ、両河川に側面を削り落された形になっている。丘陵先端部分は現在では柏尾川から600mほど離れているが、これは近代の大がかりな造成によって南半部が失われたものであり、明治十五年(1882)測量の『迅速測図』の時点では、尾根はほとんど川岸まで到達していることがわかる。丘陵部以外の平坦地は柏尾川と境川の形成する沖積地となる(藤沢市教育文化センター2000)。

村岡丘陵は三浦半島の基部を扼する位置にあって、平安時代後期以来有力武士の拠点であり、またしばしば重大な抗争の舞台ともなった。丘陵中央部のとりわけ険阻な地を占めたのが玉縄城である。城域中心部は現在の行政区分では鎌倉市城廻および同植木に含まれる。現在の清泉女学院構内がかつての本丸で、標高は60m前後ある。最高点は同学院東側にある「諏訪壇」と呼ばれる丘陵で、本丸を環状に囲む山稜の一部をなし、約80mの標高がある。玉縄城中心部の丘陵側面は急峻な崖となっていて、周囲の標高10m弱～30m前後の平地から隔絶されている。城から相模湾までは約5kmの距離を隔てる。

今回の調査地点は城域東南の谷戸内にあり、本丸南面の大手にある「御厩曲輪」と呼ばれる平場から東南に延びる「太鼓櫓」の南東側山裾に位置する。大手から東に降りる「七曲」坂から下った谷の、一つ南側の谷戸の中にある。地番は鎌倉市植木字植谷戸198番。本地点から谷尻まで約100m強、地主のS氏家は江戸時代から代々この地に住み、先祖が近世玉縄藩の御典医だったという。

2. 歴史的環境

旧石器時代

玉縄の近在では、これまで藤沢市内の伊勢山(白旗付近)と渡内一丁目の二箇所からナウマン象の化石が出土している。いずれも下末吉ローム層相当の13万年前の地層からで、後者は玉縄城の南西約1.3kmにある(以下「玉縄城から」といった場合は清泉女学院校地を起点とする)。1975年と1980年に同一個体とみられる象の化石が発見され、採集地の地名から「天岳院標本」と称される。この地点からはほかに様々な動植物の化石が出土したが、人的営為は確認できていない。藤沢市内の旧石器時代の遺跡はこれまでに相模野台地上に50例以上を数え、玉縄から1.8kmほど西にある藤が岡二丁目の御幣山遺跡では、2006年の発掘調査で、立川ローム層中のB1層からナイフ形石器・搔器・二次加工痕ある剥片などを含む石器ブロックや、礫の集中が発見された(長澤・横山ほか2007)。玉縄地域でも北西1.3kmの

関谷東勝院遺跡から、表面採集ながら有舌尖頭器が発見されている。また、玉縄城から2km余り東の粟船山で、両横に調整痕のある頁岩製縦剥ぎの剥片が採集されており、いずれ資料の増加が期待できる。

縄文時代

南関東は縄文時代草創期の遺跡が多いことで知られ、2008年の時点で埼玉・千葉・東京・神奈川4県で全国の40%近い約50箇所を数える。なかでも藤沢市は11遺跡(20地点)という、全国的にみても高い集中度を示す(藤沢市教育委員会2009)。国内的にもきわめて稀なこの時期の住居跡も、遠藤の慶応大学湘南藤沢キャンパス内遺跡で発見されている。相模野台地上の広い範囲に遺跡が存在するが、玉縄の近くにもいくつかあり、半径2km以内に御幣山遺跡・渡内遺跡・柄沢遺跡群の3地点が確認されている。このうち西に1kmほど離れた、村岡丘陵基部に位置する柄沢遺跡E地点からは、口縁部と体部上位に横位の多条平行隆起線文帯を置きその間に大ぶりの山形文を配するものや、数条の平行隆起線によって縦・斜め・曲線を描いたものなど、関東地方には稀な土器が出土している。

縄文時代早期になると藤沢・鎌倉両市で遺跡が急増する。藤沢市では市域北半部を占める相模野台地全体に確認できる(59遺跡70地点)。早期中葉三戸式の斜格子状沈線文土器や、早期後半とされる子母口式の絡条体圧痕文が出土している。また東海系入海式の刻目文土器などもあり、他地域との交流をうかがわせる。玉縄地域でも北西1.3kmの鎌倉市関谷東勝院遺跡から大浦山式土器が出土しており、同じく関谷の山居遺跡からも早期の土器が見つまっている。また調査地点から400m弱北の玉縄城東側斜面(城廻字打越165地点)で、縄文早期の可能性のあるガラス質黒色安山岩製礫器が発見されているほか、繊維の含まれた土器も出土している(馬淵1986)。

縄文時代前期は海進期で、村岡丘陵は古大船湾の入口にあたる。この一帯では海面が現在の水面より10mほど高かったとされるので、丘陵のすぐ脇まで汀線が迫っていたことになる。この時期になると藤沢市内で遺跡は50箇所を数え、台地のみならず当時の海岸線に近い砂丘低地にも遺跡が発見されるようになる。玉縄地域では城の西南約1.5mにある藤沢市村岡東二丁目の十二天遺跡において顕著な人的活動の痕跡がみられ、遺構こそ検出されていないものの前期初頭の花積下層式、静岡県富士川町木島遺跡を標式遺跡とする前期初頭の木島式土器、胎土に植物繊維を含み羽状縄文をもつ前期中葉の黒浜式、前期後半では特徴的な半裁竹管文の諸磯式などのほか、「ソーメン状」と称される浮線文をもつ十三菩提式や、集合条線文をもつ踊場式土器などが出土している。玉縄地域でも本地点北400mの前出城廻字打越165地点をはじめ、関谷東勝院遺跡や山居遺跡で竹管文系土器が少なからず出土しているので、調査地点を含む玉縄地域に活発な人的活動があったことは間違いない。

縄文中期の遺跡は、藤沢市側では砂丘低地も含めた市内全域におよび、99箇所を数える。分布はきわめて濃密で、砂丘低地も生活の舞台となっている。玉縄地域でも前出の十二天遺跡では中期初頭の五領ヶ台式土器が出土しているが、小片にとどまる。城から西に1.3kmの柄沢ナデッ原遺跡では、23軒の竪穴住居と10棟の掘立柱遺構で構成される環状集落が発見された。集落の外径は約130m、中央部は遺構が空白で、広場となっていたことが推測される。土器年代は勝坂期の古段階に属する。また柏尾川対岸にある向川名貝塚^{むかいかわな}は直径3m、層厚数10cmほどの小規模な貝塚で、中期後半に位置づけられる。

縄文時代後期では、藤沢市側で70箇所の遺跡が確認されている。村岡丘陵はこの時期の遺跡の多いことが知られ、関谷東勝院遺跡で堀之内Ⅰ・Ⅱ式や加曾利BⅠ・Ⅱ式の柄鏡形、あるいは円形の住居や環礫配石遺構・貯蔵穴等が検出された。玉縄地域では本調査地点から北に1.3kmの位置にある関谷島ノ神遺跡で、後期初頭の比較的短い期間に営まれた柄鏡形住居5軒が報告されている。村岡東の高谷遺跡や、柏尾川を挟んだ向川名遺跡(川名仲丸遺跡)などでも検出例がある。

晩期の遺跡は激減し、近隣では藤沢市で5箇所を数えるにとどまる。いずれも土器のみの発見であり、遺構はこれまで確認されていない。うち4箇所が、玉縄からそう遠くない村岡丘陵上や柏尾川沿いにある。玉縄近辺では、本地点南東700mの二伝寺砦遺跡から晩期に特徴的な、いわゆる「飛行機鏃」が出土している。柏尾川沿いの向川名遺跡と大源太遺跡からは土器も出た。片瀬丘陵下の柏尾川右岸に立地する大源太遺跡からは、県内でも縄文時代最末期と目される浮線文土器が出土した。

弥生時代

相模地方の弥生時代は、中期中葉の中里式の時代に水田稲作中心の集落が形成され始めるが、本格的に集落が展開するのは中期後半の宮ノ台式期である。鎌倉・藤沢市域でも同様に、中期中葉の遺跡はこれまで江ノ島植物園内遺跡にしか確認されておらず、本格的な農耕社会の開始はやはり宮ノ台期以降とみなければならない。宮ノ台式期の土器は玉縄地域では十二天遺跡で採集されており、資料のうちには宮ノ台でも古式に属するものがある。また玉縄城から南西に800mの二伝寺砦遺跡からも住居址が確認されている。

後期に入ると、前半においては、相模地方の土器様相に西の東海地方からと東の東京湾側からというおおむね二つの系譜が認められる。藤沢市においてもやはり市域西部には前者の、東部には後者の傾向が認められる。玉縄地域の十二天遺跡一帯は市域東南域にあり、後者の久ヶ原式土器を主体とする。近在では御幣山遺跡や二伝寺砦遺跡がある。しかし、後期も後半になると次第に東京湾側の特徴は薄まり、全体として一つの様相にまとまっていく傾向にある（藤沢市教育委員会2011立花実執筆分）。

古墳時代

弥生時代末期から古墳時代の初めにかけて、おそらく生活基盤の多様化に伴い、集落は砂丘低地や段丘の下段面に降りてくるようになる。また内陸部の相模野台地上平野部にも進出する。藤沢市片瀬の大源太遺跡からは同市内唯一の鏡である「変形四獣鏡」が出土している。玉縄地域ではまだ明確な集落は確認されていないものの、本地点から直線距離で西にわずか150mほどの陣屋坂東側の調査で、台付甕や高坏が多数出土しており、報告者は近在に住居の存在を予想している（大河内1994）。

古墳時代後期、柏尾川と境側の合流地点付近の砂丘地帯で、円形（環状）の溝や埴輪片など古墳の痕跡がいくつか発掘調査で見つかっており、この付近に後期の高塚古墳が存在したことは間違いない（寺田ほか2008）。

大磯から三浦半島にかけての丘陵部には横穴墓が多い。とりわけ片瀬川左岸の川名から竜口寺にかけての片瀬丘陵の斜面は濃密な分布を示し、かつては200基以上存在したといわれる。神奈川県の横穴墓はおおむね6世紀後半に始まるが、鎌倉・藤沢一帯で最も古いとされる川名新林横穴群なども、この時期に属する。玉縄地域では関谷下坪にある洗馬ヶ谷横穴群が知られる。玉縄城の北側外郭山上にあり、2号穴奥壁には戦闘場面を描いた線刻画がある（鎌倉市指定史跡）。また十二天遺跡に数基の横穴墓が存在する。

律令時代

律令時代初期の相模国は八郡で構成され、鎌倉市と逗子市の全体、藤沢市東半の一部および横浜市戸塚区南部はおおむね鎌倉郡に、藤沢市は大半が高倉郡に属していた。高倉郡は和銅年間（708～715）に「高座」郡に名称が変わったとみられる（荒井ほか1991荒井執筆分）。玉縄地域は鎌倉・高倉両郡の境界に位置し、いずれに属していたかは明確でないが、承平五年（935）成立の『和名類聚鈔』に出てくる「岡本郷」の地名は現在の鎌倉市岡本一帯とみられ、位置からいって調査地点もこの郷に属していた可能性がある（服部ほか1972服部執筆分）。

この時期の遺跡は鎌倉・藤沢両市内に数多い。砂丘低地にも濃密に分布する。本地点近在の遺跡とし

(No.63 玉縄城跡)

本調査地点 植木字植谷戸 198 番 1. 城廻字打越 165 番地点 (馬淵 1980・1981)「相模玉縄城一城廻字打越 165 番地点の発掘調査」『鎌倉考古学研究所研究調査報告第三集』(馬淵 1986) 2. 植木相模陣 374 番他地点 (大河内 1987～1988)『玉縄城跡発掘調査報告書』(大河内 1994) 3. 城廻字打越 200 番 (田代・汐見 2001) 未報告 4. 城廻字打越 329 番 1 外 (田代・宗臺 1998～1999)『東国歴史考古学研究所紀要第 1 集』(大畑 1999) 5. 植木字植谷戸 6 番 1 外 (田代 1999)『東国歴史考古学研究所報第 3 集』(大畑 1999) 6. 城廻字城宿 357 番 2・15 (宮田 1999)『玉縄城跡発掘調査報告書』(森 2000) 7. 植木字植谷戸 70 番 1 外 (原 2001)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 20 第 1 分冊』(原他 2004) 8. 植木字植谷戸 198 番の一部 (継 2001)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 20 第 1 分冊』(継・伊丹 2004) 9. 植木字城宿 467 番 (馬淵 1980)『鎌倉考古』2・4 (馬淵 1980) 10. 玉縄五丁目 3 番 27 (馬淵 1981)『鎌倉考古』9 (馬淵 1981) 11. 城廻字打越 200 番 1 (齋木 1978) 未報告 12. 植木字植谷戸 1 番 (永井 1982～1983) 未報告 13. 城廻字城宿 340 番 1 地点 (藤井秀男 1987) 未報告 14. 植木字相模陣 370 番地点 (齋木 1989～1990) 未報告 15. 植木字相模陣 436 番 1 (玉林 1978) 未報告 16. 植木字植谷戸 48 番 6 (宮田・滝沢 2007) 未報告 17. 植木字植谷戸 192 番 4 外・207 番 1 (福田 2008) 未報告 18. 植木字植谷戸 213 番外 (継 2000) 未報告 19. 植木字植谷戸 78 番 2 外 5 筆 (継・汐見 2001) 未報告 20. 植木 179 番 1 他 4 筆 (浜野 2000) 未報告 21. 洗馬ヶ谷横穴群 (赤星 1959)

ては、前出の二伝寺砦遺跡があり、これまでの数次の調査で平安時代前期の竪穴住居が何軒か見つかっている。

平安時代後期

10 世紀になると律令体制の矛盾が露わとなり、各地で大きな争いが起きる。あらたに登場してきた「兵」が争乱の平定で名を上げ、国衙の軍制改革の中で押領使 (国衙軍事部門の統括者) などとなって次第に地歩を固めていく。この傾向は平安京から遠い坂東の地でより顕著であり、桓武平氏の祖として知られる高望王はその代表的な一人であった。彼は関東八平氏の一つ、村岡氏の祖ともされる。そして村岡丘陵は、桓武平氏村岡流の本拠となる。それは同時に南関東の大豪族発祥の地となったことも意味する。

高望王は桓武から四代目、寛平年間に朝敵を平定して平姓をもらい上総介となったと伝える。その後裔は坂東に土着して国衙官人になったという。本調査地点からほんの 1.2km 南西に、高望王の後裔の居館址と伝えられる場所もある (「村岡城址」)。村岡氏は三浦氏・千葉氏・鎌倉氏 (大庭氏) の祖ともいい、平安後期の坂東武士団にあってきわめて有力な幹流のひとつである。しかし、誰の代から村岡を名乗ったかは諸系図に違いがみられ、また村岡氏を出自とする上記の一族についてもどの代に始まるかはそれぞれ異なる。以下簡単に見ておきたい。

『桓武平氏系図』(群書類従本) では、

高望王—平良文 (村岡五郎)—忠頼 (陸奥守、号村岡五郎、千葉氏祖)—忠通 (村岡五郎)—景通—景政 (鎌倉権五郎)

とあり、良文以下三代はいずれも村岡五郎を称している。村岡氏の出とされる三浦氏は景政の弟景名の一門といわれるが、この系図では景通の甥為直が三浦平太夫を称し、その子為経が三浦平六郎を名乗ったところから発する。ここには景政と大庭氏との関係は見え、景政三代の孫と伝える長江太郎義景も現れない。

『尊卑文脈』には、

高望王 (上総介)—良茂 (常陸大掾)—良正 (下野介)—致成 (滝口太郎)・景成 (鎌倉権守)—景正 (鎌倉権五郎)—景経—景忠 (大庭太郎)—景義 (大庭権守)・景親 (大庭三郎)

とあり、『千葉大系図』では、

高望王—良文—忠通 (領於相模国鎌倉郡郷)—景通—景将 (景正)

となっている。また『三浦系図』では、

高望王—良文—忠通—為通—景成 (鎌倉権守)

となる。これらによれば、高望王以下三～四代は総・常・武・野の北関東から武蔵北部にかけてもっぱら勢力を張っており、この一族が相模国に進出したのはそれ以後ということになる。したがって平良



図2 明治15年頃の玉縄城周辺(『迅速測図』)

文が「村岡」を称したとするなら、それは武蔵国村岡(埼玉県熊谷市)である可能性は高い。『新編武蔵国風土記稿』によると、そこが忠通の本拠であり、村の西北方にその墓と伝える茶臼塚がある。服部清道によれば、忠通が伝えられるように相模守に叙せられたとすれば、このときに彼および彼の一族が居を相模に移したのではないかと、という(服部ほか1972)。妥当な推測であろう。とするとこの場合は、藤沢市の地名「村岡」は、忠通一族の移住後彼らに因んで定着したということになるのだろうか。

平安時代後期、村岡はおそらく鎌倉郡の一部であった。この時代の遺跡・旧跡は村岡に多く、上述の村岡城址を村岡氏の居館と伝える。この地の御霊神社は鎌倉権五郎景政を祀るものだが、鎌倉市坂ノ下から当地、そして横浜市戸塚区にかけて七社を数える。これらを結んだ線が、鎌倉党の勢力範囲を示すと同時に鎌倉の西の境界をも示すのだろう。鎌倉氏は景政以来大庭御厨の開発領主としても知られる。御厨の東の境界は、鎌倉市長谷の神明社から御霊社とほぼ同じ線を藤沢市川名付付近まで向かい、境川と柏尾川の合流点以北は境川沿いにそのまま北上する。神明社は御厨の信仰の核なので、これはその東の四至を示していよう。一方御霊社の線は合流地点から柏尾川沿いに東行するので、平安時代後期の村岡

は大庭御厨と鎌倉郡に挟まれた境界域に位置することになる。

玉縄の地名が始まったのもこの頃とみてよい。天養元年と同二年(1144・1145)、源義朝は大庭御厨 鶴沼郷を鎌倉の内だとして、侵入事件を起こした。この有名な事件の顛末を収めた天養二年(久安元年、1145)の官宣旨(『天養記』)に「玉輪^{たまのわ}荘」の地名が出てくる。それによれば、玉輪荘は俣野川(境川)を境として大庭御厨と接しているというから、上述の地域と重なり、この荘園名がいつしか現在の玉縄の地名に変化したのだろう。

鎌倉時代

鎌倉幕府が成立すると、村岡丘陵は鎌倉への北西からの入口として重視された。村岡郷は建久二年(1191)という早い時期に、鶴岡八幡宮に寄進されている。玉縄近在の人物としては鎌倉時代初期の大庭景義・景親兄弟がおり、その消息は『吾妻鏡』に盛んに伝わる。治承寿永の内乱で平家方についた景親は頼朝に滅ぼされるが、景義は頼朝の信任を得て、本領の大庭御厨のほか通称名となった懐島や、波多野義常の遺領松田郷などを安堵された記事が見られる。大庭御厨は村岡からも程近く、その動静は玉縄地域にも影響を与えたに違いないが、詳細は不明である。

鎌倉時代後期、鎌倉新仏教諸派の活動が盛んとなり、そのうちの禅・律・浄土などは山腹に方形、または長方形の横穴を穿って僧侶や入道した武士などの墓とした。これらは「やぐら」と呼ばれ、藤沢市東南部を含む鎌倉地方にはかつて約3000基を超える数が存在したといわれる。村岡丘陵近在では藤沢市川名一帯に多かったが、近年の造成で大半消滅した。先述十二天遺跡の山裾にも、岩盤を方形に掘り窪めたやぐら様の遺構が見られる。谷戸内にこれら禅・律・浄土などの宗派の寺院が存在した可能性があるが、記録を欠く。

弘安五年(1282)、時宗宗祖一遍^{じしゅう}たちは山内から鎌倉に入ろうとして執権北条時宗^{ときむね}に出会い、拒否される。一行はその夜を山内の路辺で野宿したあと翌日片瀬にまわり、4ヵ月半を念仏修行して過ごした。以来鎌倉西北部および藤沢東南部には時宗の足跡が濃く残る。正中二年(1325)、本地点から西2kmの藤沢市西富に遊行道場藤沢山清浄光寺が開かれている。遊行寺の通称で知られ、開祖は遊行四代呑海、彼が近在の俣野出身(東俣野は横浜市、西俣野は藤沢市)であったことからこの地に作られた。

鎌倉最末期の元弘三年(1333)5月、相州村岡は南下してきた新田義貞の軍と北条軍との戦場となり、前者の側の飽間(秋間)一族数人が戦死したことが、埼玉県東松山市徳蔵寺所在の板碑に記されている(重要文化財「徳蔵寺板碑」)。かつて鎌倉氏の祖村岡一族の蟠踞した村岡は、鎌倉入りをめぐる攻防の要衝となった。

南北朝・室町・戦国時代

駿河国今川氏と結んだ伊勢宗瑞(「北条早雲」)は、明応七年(1498)足利茶々丸を討滅し、混乱の極みにあった伊豆を平定する。明応五年(1496)から文亀元年(1501)までの間に小田原城を制圧して相模国に進む(黒田2005)。宗瑞は関東の動乱に乗じて次々に相模東部の上杉支配地を収めていく。当時相模東部から三浦半島にかけて圧倒的な勢力を持っていた三浦道寸義同を平塚岡崎城に破り、永正九年(1512)、三浦半島の付け根に位置する鎌倉北端の玉縄に広大な城を築いた。玉縄城は三浦一族を半島内に封じるとともに、東相模の経営拠点として後北条氏にとってきわめて重要な城となった。城の縄張りには早雲自身によるという。村岡丘陵は、近代に削られる以前、玉縄城から南東の柏尾川まで長く延び、衝立のように三浦半島に対峙する地形をしていた。「石川忠總留書」(『埼玉県史 資料編』8-6)に、山内・扇谷両上杉の抗争が再発した明応三年(1494)9月19日、「相州玉縄要害没落」とみえ、玉縄地方にすでに何らかの拠点の存在したことがわかるが、詳細は不明である。平安時代後期、桓武平氏の城郭であった村岡の丘は、鎌倉最末期の戦乱の舞台を経て、戦国時代にまたもや城郭として採用されたことに

なる。中丸和伯氏は、玉縄周辺が「鎌倉時代のはじめからあらゆる点で要地であった」といっている（中丸1958）。初代城主は早雲の次男氏時で、以後天正十八年（1590）六代氏勝が豊臣方徳川軍の大將本多忠勝に開城するまで続いた。

玉縄城について

玉縄城に関しては、かつて大河内勉が多方面からの詳細な考察を加えており、ぜひ一読されたい（大河内1994）。また、豊富な研究のある玉縄北条氏についても、近年重要論文が集成されるなど、隆盛の気配を見せているので（浅倉編2012など）、ここでは概観するにとどめる。

現在その大半が戦後の造成により失われているが、戦前の赤星直忠による踏査と1955年頃に撮影された航空写真が旧状を伝える。それによれば、直径800 mほどの環状をなす山稜内に本丸を置き、その外側に家臣団などの居館を配し、さらにその外周にもう一卷きの山稜部を有する複郭構造を持つ。そしてそこから支尾根を利用して放射状に郭を延ばし、周囲の長尾台（横浜市）・御幣山（藤沢市）・二伝寺（同）・村岡（同）・天神山（鎌倉市）などに支城が配されるという、相模野丘陵南端の複雑な地形を利用した強固な構造を誇る城であった（赤星1959）。ただし当初からそうであったとは考えにくく、玉縄城100年の歴史の中で徐々に城容が拡大・整備されていったと大河内は推測している（大河内1994）。

近年の研究によれば、玉縄城城主歴代（玉縄北条氏）は次のとおり（丸囲み数字が歴代次数）。

- ①氏時（早雲庵宗瑞二男）—②為昌（宗瑞長子氏綱二男）—③綱成（氏綱養子、のち義兄為昌養子）—④氏繁（綱成長子）—⑤氏舜（氏繁長子）—⑥氏勝（氏繁二男）

永正九年（1512）8月、鎌倉に入った早雲庵宗瑞は、「枯るる樹にまた花の木を植ゑ添へてもとの都に成してこそ見め」と詠んだという（『快元僧都記』天文三年十一月二〇日条）。後北条氏は寺社領を除いて鎌倉を直轄領とし、重臣の大道寺氏を代官に、後藤氏等鎌倉在住の有力者を小代官に任じた。永正十七年（1520）と天文十六年（1547）には検地をおこなっている。後北条氏はまた、鎌倉の社寺の敷地・所領を安堵あるいは寄進し、鶴岡八幡宮を造営した。八幡宮は鎌倉に入った里見実堯軍により大永六年（1526）12月、諸堂を焼失したが、天文元年（1532）氏綱が再興に着手、10年をかけて正殿・上宮拜殿・上宮廻廊・式内社・神宮寺・門・池・段葛・赤橋・下馬橋・浜の大鳥居などを整備・再建した（『快元僧都記』）。この造営に際しては、京都・奈良・伊豆・小田原・鎌倉など各地の職人が呼び寄せられ、玉縄の職人も大工番匠として加わっているため、両地の建立物に技法的共通性があったことが推測される。また「快元記」からは、氏綱がたびたび鶴岡八幡宮に参詣していたことや、玉縄城主北条為昌やその家臣が造営に関わっていたことがうかがえる。藤木久志によれば、この時期仮遷宮や大町八雲神社の祇園会などは、町衆でおおいに賑わったという（藤木1993）。

永禄二年（1559）、早雲の孫で小田原城当主であった氏康が、所領支配のため領主ごとに家臣団の名簿を作らせるが（『北条氏所領役帳』）、その中に村岡領主として玉縄城三代城主北条綱成の名がある。綱成は剛勇で知られ、扇谷上杉氏を討った河越合戦のとき目覚ましい活躍を示した。彼の軍団を「玉縄衆」と呼ぶ。

鎌倉市内でこの時期の後北条氏関連遺跡が発見されている。天正十七年（1547）、荏柄天神社造営のため北条氏康は、かつての大倉幕府跡東南角の六浦道沿いに、商人・道者から関銭を徴収する関所を設けた。ちょうどその地点と思われる場所の調査で、大型の礎石建物が発見され、関所建物の一部と推測された（馬淵ほか1990）。

（馬淵）

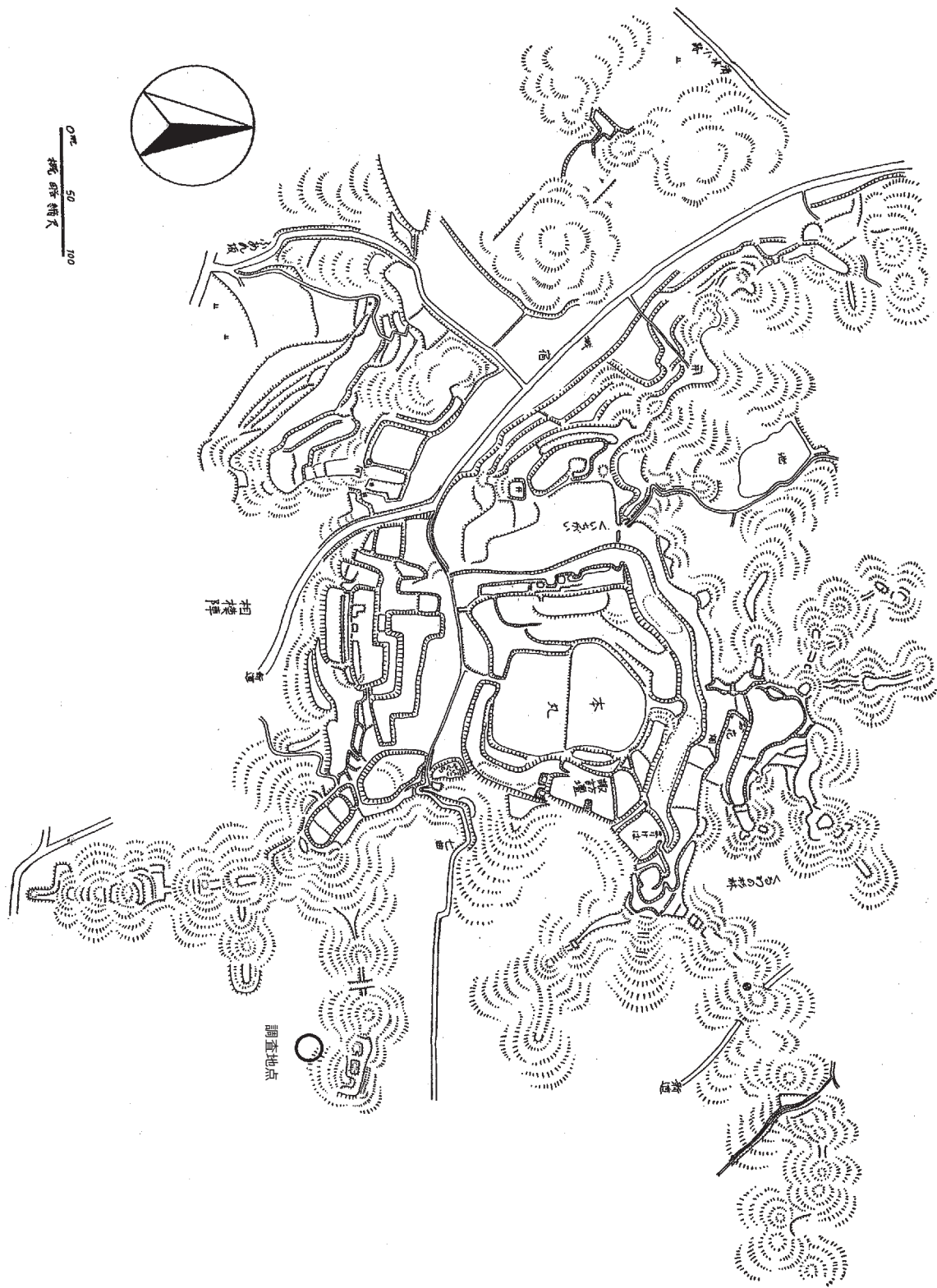


図3 玉繩城縄張図 (赤星直忠氏調査、赤星1959第6図版を改変)



図4 玉縄城中心域の地形「1954年」

(玉縄城跡発掘調査報告書—植木字相模陣374番地他地点—(1994年)より転載)

引用・参考文献(発掘調査報告書については前掲「図1・2調査地点名」の項も参照)

赤星直忠 1959『鎌倉市史 考古編』吉川弘文館

秋山重美ほか 1996『二伝寺砦遺跡発掘調査報告書』二伝寺砦遺跡発掘調査団

荒井秀規ほか 1991『図説 ふじさわの歴史』藤沢市

木下良ほか 1997『神奈川の古代道』藤沢市教育委員会

黒田基樹 2005『戦国北条一族』新人物往来社

- 高柳光寿 1959『鎌倉市史 総説編』吉川弘文館
- 田代郁夫ほか 1998『若尾山(藤沢市No.36)遺跡 —藤沢市立大道小学校内地点— 発掘調査報告書』東国歴史考古学研究所
- 土屋浩美ほか 1999『二伝寺砦遺跡 —藤沢市渡内3丁目535・536地点—』東国歴史考古学研究所ほか
- 寺田兼方・服部清道・杉山博 1972『藤沢市史』第4巻 藤沢市
- 寺田兼方ほか 2008『藤沢市川名新林横穴墓群発掘調査報告書』
- 長澤邦夫・横山太郎ほか 2007『御幣山遺跡(5次調査)』有限会社吾妻考古学研究所
- 中丸和伯 1958「第二篇第三章 後北条時代」『横浜市史 第1巻』
- 藤沢市教育委員会 1983『藤沢市文化財調査報告書』第18集
- 藤沢市教育委員会 2009・2010・2011『大地に刻まれた藤沢の歴史』I・II・III
- 藤沢市教育文化センター 2000『ふじさわの大地—一人々の暮らしと自然—』

第二章 調査の概要

1. 調査にいたる経緯

植木字植谷戸198番において、個人専用住宅建設の照会があった。工法は鋼管杭打ち込みによる基礎工事を含むものであり、設計変更は困難と判断された。当地点は玉縄城跡の縄張りにおいて、南西外郭部として位置づけられる丘陵の東側山裾にあたり、地下の遺構の損壊を免れないため、鎌倉市教育委員会により発掘調査が実施されることになった。

2. 調査方法

掘削方法

掘削にあたっては残土を場内処理とし、置き場所の確保のため面積98㎡の調査区を東西に二分割した。そして前半(西半部)を「1区」、後半(東半部)を「2区」と仮称した。両区とも地表下60cm前後の表土部分を重機で掘削し、以下を人力で掘削した。

測量基準

調査区の長軸を概念上の基準軸とし、測量はこれに直交または平行する軸線を5m間隔で設定しておこなった。のち資料整理の際、世界測地系の数値を導入した。調査区はX-71 945～71 960 Y-28 730～28 750の間にある。

3. 調査の経過

調査は2006年2月2日に始まり、4月6日に終了した。その間の経過は以下の通り。

2月2日	重機により、1区表土掘削	3月16日	重機により、1区埋め戻しと2区表土掘削
2月6日	機材搬入		
2月21日	1区I面全景写真撮影	3月24日	2区I面全景写真撮影
3月3日	1区II面全景写真撮影	3月28日	2区II面全景写真撮影
3月13日	1区III面全景写真撮影	4月4日	2区IV面全景写真撮影
3月15日	1区IV面全景写真撮影	4月6日	機材撤収

(沖元)

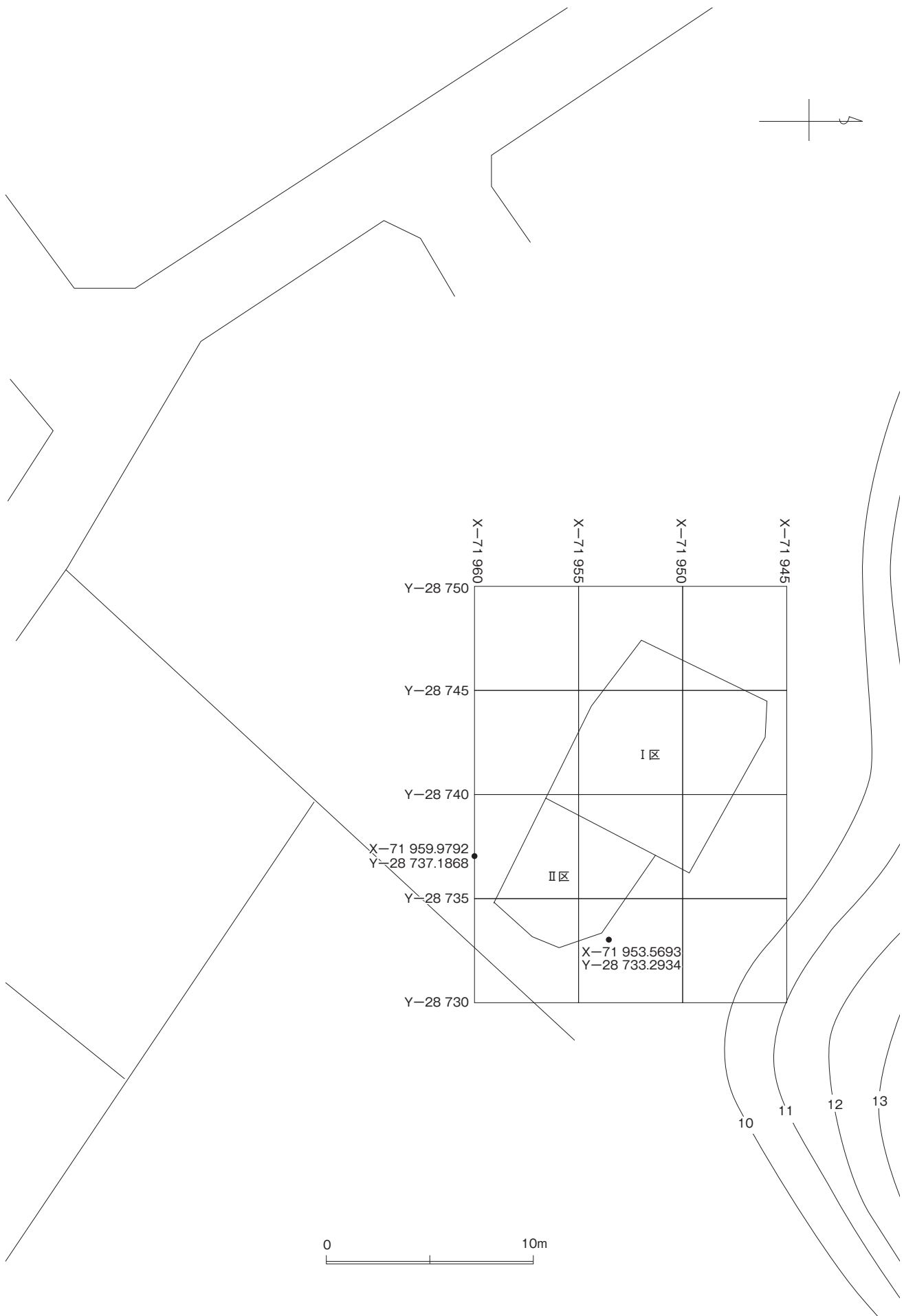


図5 調査区設定図

第三章 調査結果

第1節 概要

1. 層序

地表面と表土

地表面の標高は、調査区中央部北側で9.60m、同南側で8.90 mと、山裾から谷中央部に向けていくらか傾斜がある。これを除くと近世後期～近代の耕土となり、幕末頃から一帯が畑地だったことがわかる。

I面～II面上層

耕作土の下に現われる最初の面で、標高8.40（南）～8.70 m（北）程度、やや谷中央部に向かって下っている。面を構成するのは灰褐色粘質土で、拳大泥岩塊を多く含む。調査区中央部から西南域にかけては、I面下に破碎泥岩とローム塊の版築面が見られ、柱穴様の小穴も確認できたので、これを当初「II面」と称し、次述の「II面下層」と同じII面「群」と考えた。しかしII面下層には溝があるが、この「II面」はそれを埋めて平面を造成していることから、むしろI面下層の遺構群と把握して、ここでは併せて提示することとした

II面下層

II面上層を構成する泥岩塊による版築層は厚さ20cmを超えるところがあり、これを剥がすと標高8.19～8.34 mに、泥岩塊を多く含む暗灰褐色ないしは暗褐色の粘質土が現れる。この上面からは小穴等の遺構が確認できたので、II面下層とした。しかし、後述の溝2の上層の掘り直しらしき浅い溝もあったことから、II面上層との隔絶が認められたので、ここでは分離して提示する。

III面

特に1区においてII面下層構成層の下に締まりの強い褐色～暗灰褐色粘質土の粘質土層があり、遺構も確認できたのでこれを「III面」とした。標高8.20 m強で、おおむね平坦な面といえる。2区においてはII面下層に結びつき、遺構に恵まれなかった。

IV面

III面構成土は10～20cmほどの厚みがあり、これを除くと標高8.10～8.20 mで、締まりの強い黒褐色の粘質土が現れ、上面に溝等の大型遺構が数条検出されたので、「IV面」とした。これがこの遺跡における最終生活面である。

基盤層

生活痕跡は上記IV面までにとどまるが、1区西壁際・同中央部・2区南壁際に確認のための深掘り坑を設定した。その結果、IV面以下は無遺物の基盤層であることが確認されたので、IV面からほぼ1 mまで掘り下げたところで(1区中央部)、掘削を終えた。

(馬淵)

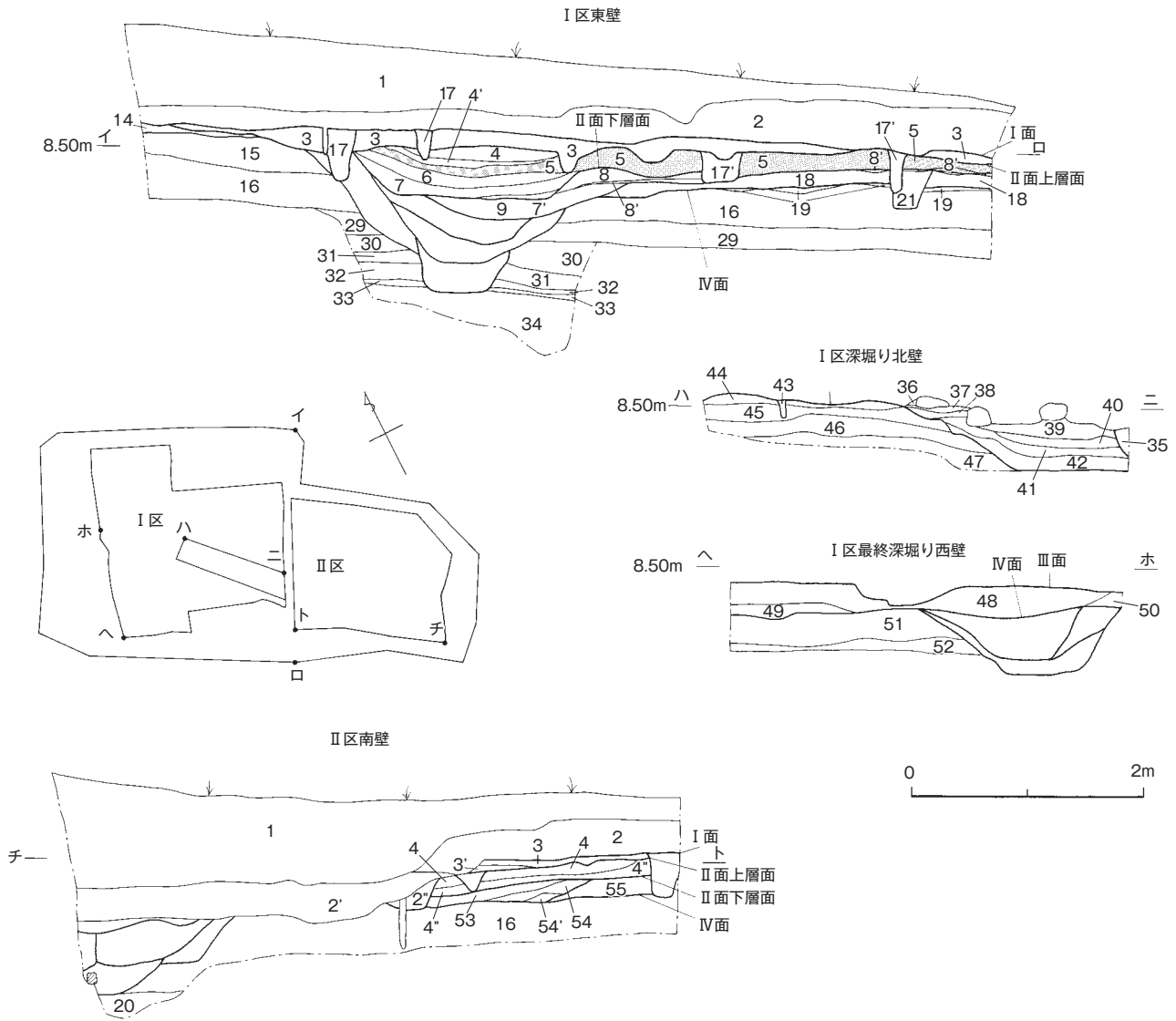


図6 調査区・深掘り坑土層断面図

- | | | |
|--------------------------------------|--------------|---------------------------------------------|
| 1. 表土 | 18. 暗灰褐色粘質土 | 拳大以下の泥岩含む |
| 2. 灰褐色砂質土 近世後期～近代の耕作土 | 19. 黒褐色粘質土 | 炭化物多量に含む |
| 2'. 青灰色粘質土 近代の水田耕作土 | 20. 黒褐色粘質土 | 植物遺体多量に含む |
| 2''. 青灰色粘質土 若干の泥岩含む 畦畔杭の裏込め | 21. 暗茶褐色粘質土 | 柱穴埋土 |
| 2'''. 灰色粘質土 畦畔の杭跡 | 29. 暗褐色強粘質土 | 少量の泥岩粒子・炭化物・火山灰む |
| 3. 暗灰褐色～灰褐色粘質土 半拳大泥岩多く含む 上面がI面 | 30. 黒褐色強粘質土 | 混入物ほとんどなし |
| 3'. 暗灰褐色粘質土 若干の泥岩含む | 31. 黒褐色強粘質土 | 29・30に比べやや明るい 混入物極めて少ない |
| 4. 暗灰褐色～明灰褐色粘質土 拳大以上の泥岩含む上面がII面上層面 | 32. 青灰色弱粘質土 | |
| 4'. 明灰褐色粘質土 泥岩少ない | 33. 暗褐色弱粘質土 | |
| 5. 明黄灰色粘質土 泥岩版築層 | 34. 暗茶褐色弱粘質土 | 植物遺体を多く含む |
| 6. 暗褐色粘質土 地山黒色土・赤褐色ロームの混土 2～4cmの泥岩含む | 35. 灰褐色粘質土 | 粘性やや強く、しまりあり 5mm～2cm大の泥岩粒含む |
| 7. 茶褐色～黒褐色粘質土 | 36. 灰褐色土 | 粘性、しまりやや弱い 1cm～3cm大の泥岩含む |
| 7'. 暗褐色粘質土 炭化物多量に含む | 37. 灰褐色土 | 粘性、しまりやや弱い 1cm～5cm大の泥岩含む |
| 8. 灰褐色～暗褐色粘質土 炭化物・泥岩小塊含む上面がII面下層面 | 38. 灰褐色土 | 粘性あり、しまり強い 1cm～5cm大の泥岩粒、関東ローム粒多く含む、炭化物僅かに含む |
| 9. 青灰色砂質土 泥岩・凝灰岩粒子ブロック多く含む | 39. 灰褐色粘質土 | 粘性強く、しまりやや弱い 1cm～10cm大の泥岩多く含む、炭化物少し含む |
| 14. 茶褐色粘質土 地山黒色土・泥岩塊含む | 40. 暗灰褐色粘質土 | 粘性、しまり強い 1cm～5cm大の泥岩含む、炭化物多く含む |
| 15. 黒褐色強粘質土 凝灰岩粒子少量含む | | |
| 16. 黒褐色強粘質土 混入物ほとんどなし 上面がIV面 | | |
| 17. 暗灰褐砂質土 柱穴埋土 | | |
| 17'. 灰色粘質土 柱穴埋土 | | |

41. 暗灰褐色粘質土	粘性、しまり強い 炭化物含む	49. 暗灰褐色粘質土	粘性、しまり強い 2 mm ~ 5 cm大の泥岩含み、炭化物少し含む
42. 暗灰褐色粘質土	粘性、しまり強い 1 cm ~ 3 cm大の泥岩、炭化物少し含む	50. 黒灰褐色粘質土	粘性あり、しまり強い 人頭大泥岩含み、炭化物僅かに含む
43. 灰褐色砂質土	しまり弱い 1 cm ~ 3 cm大の泥岩、炭化物僅かに含む	51. 黒灰褐色粘質土	粘性、しまり強い 2 mm ~ 3 cm大の泥岩、炭化物含む
44. 灰褐色粘質土	粘性やや強く、しまりやや弱い 5 mm ~ 3 cm大の泥岩含み、炭化物少し含む	52. 黒灰色粘質土	粘性、しまり強い 2 mm ~ 3 cm大の泥岩、炭化物少し含む
45. 黄灰褐色砂質土	粘性、しまり弱い 1 cm ~ 10cm大の泥岩非常に多く、炭化物少し含む	53. 暗褐色粘質土	2 ~ 4 cmの泥岩含む 上面がⅡ面上層面
46. 暗灰褐色粘質土	粘性、しまり強い 1 cm ~ 10cm大の泥岩少し含み、炭化物多く含む	54. 黒褐色粘質土	炭化層、もしくは炭化物を多量に含む層
47. 暗灰褐色粘質土	粘性、しまり強い。1 cm ~ 10cm大の泥岩、炭化物含む	54'. 暗茶褐色粘質土	54と55の混土
48. 褐色粘質土	粘性あり、しまり強い 2 mm ~ 5 cm大の泥岩多く含み、炭化物含む	55. 暗褐色粘質土	炭化物、泥岩小塊含む 上面がⅡ面下層面

第2節 各説

1. I面～Ⅱ面上層

面の概要(図7・8)

検出高：8.40 ~ 8.70 m 面構成土：灰褐色粘質土・破碎泥岩版築 検出遺構：柱穴列9列・土坑5基・小穴154穴(柱穴列9列含む) I面出土遺物：土師器皿R種中型(1)・土器質焙烙(2)・砥石(3)

I面～Ⅱ面上層出土遺物：土師器皿R種小型(4)・渥美甕(5)・瀬戸底卸目付大皿(6)・瀬戸縁釉小皿(7)・瀬戸美濃碗(8)・瀬戸美濃腰折皿(9)・瀬戸美濃丸皿(10) 特記事項：9の腰折皿は古瀬戸後Ⅳ期新段階のもので、15世紀後半。10の丸皿は登窯第1小期のもので17世紀前半。

柱穴列1(図9)

位置：X - 71 948.56 ~ - 71 953.41 Y - 28 740.13 ~ - 28 743.65 平面形：直線 規模：東西5.84 m 主軸方位：N - 35° - W 重複関係：土坑1・2・3に切られる、柱穴列7と重なる 出土遺物：(P.7) 瀬戸美濃魚形皿(1)・(P.8) 土師器皿R種大型(2) 特記事項：柱間は安定せず、時期の重複も考えられるが、ひとまず同一遺構として提示した。P.6には杭の抜き痕と思われるものが確認できた。1の魚形皿は大窯第3段階後半のもの。

柱穴列2(図9)

位置：X - 71 947.98 ~ - 71 953.97 Y - 28 740.25 ~ - 28 744.37 平面形：直線 規模：東西6.97 m 主軸方位：N - 34° - W 重複関係：土坑4を切る、柱穴列3に切られる、柱穴列7と重なる 出土遺物：図化可能なものなし 特記事項：P.2内の石は泥岩のため礎石とは考えにくい。

柱穴列3(図9)

位置：X - 71 948.70 ~ - 71 954.68 Y - 28 740.14 ~ - 28 744.58 平面形：直線 規模：東西7.30 m 主軸方位：N - 36.5° - W 重複関係：柱穴列2・土坑4を切る、柱穴列7・9と重なる 出土遺物：(P.6) 土師器皿R種極小型(3) 特記事項：P.7には杭の抜き痕と思われるものを確認した。

柱穴列4(図9)

位置：X - 71 948.83 ~ - 71 950.85 Y - 28 742.57 ~ - 28 745.54 平面形：直線 規模：南北3.45 m 主軸方位：N - 56° - E 重複関係：柱穴列2と重なる 出土遺物：(P.8) 土師器皿R種極小型(4)・土師器皿R種小型(5)

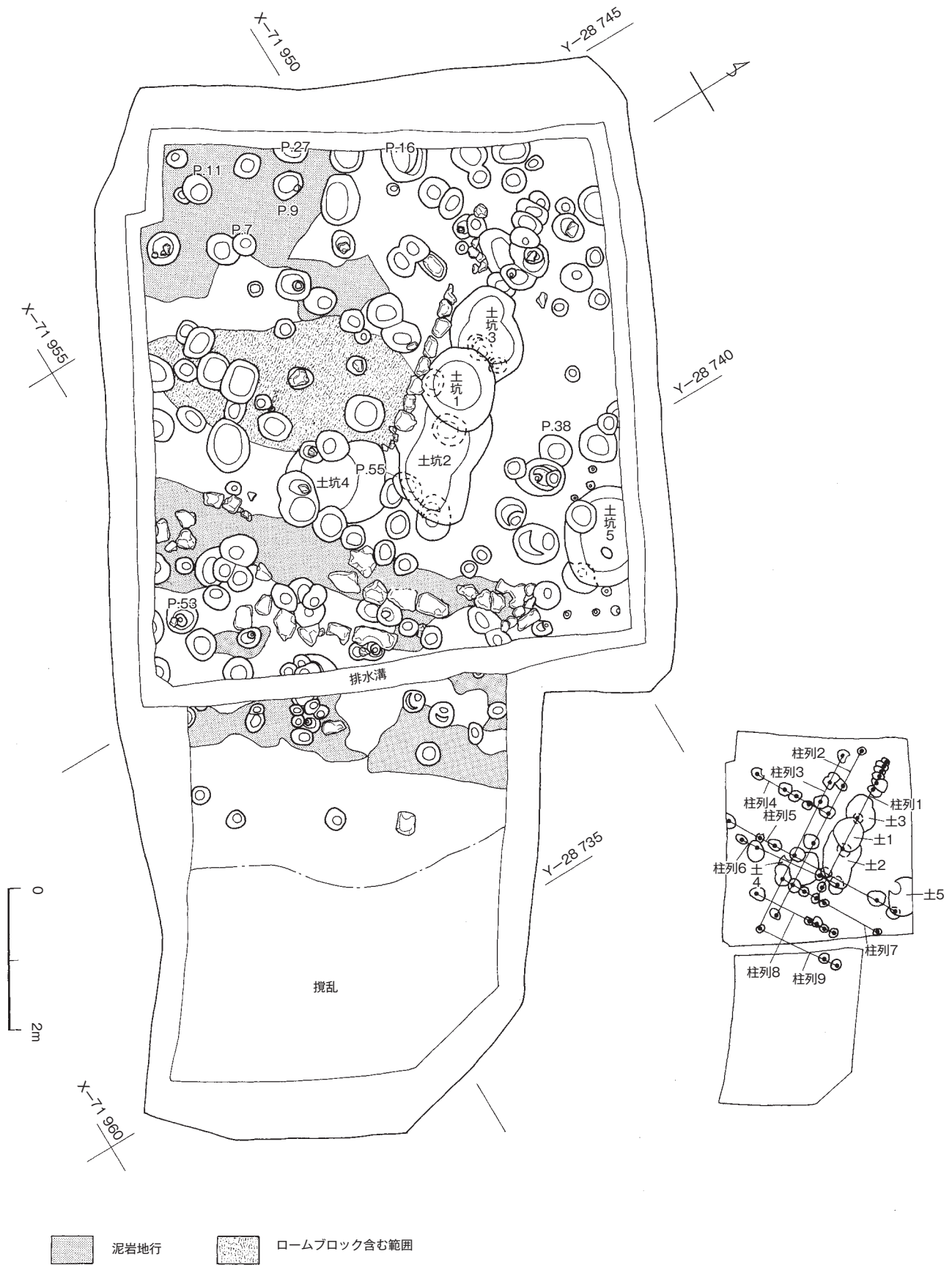


図7 I面~II面上層遺構全図

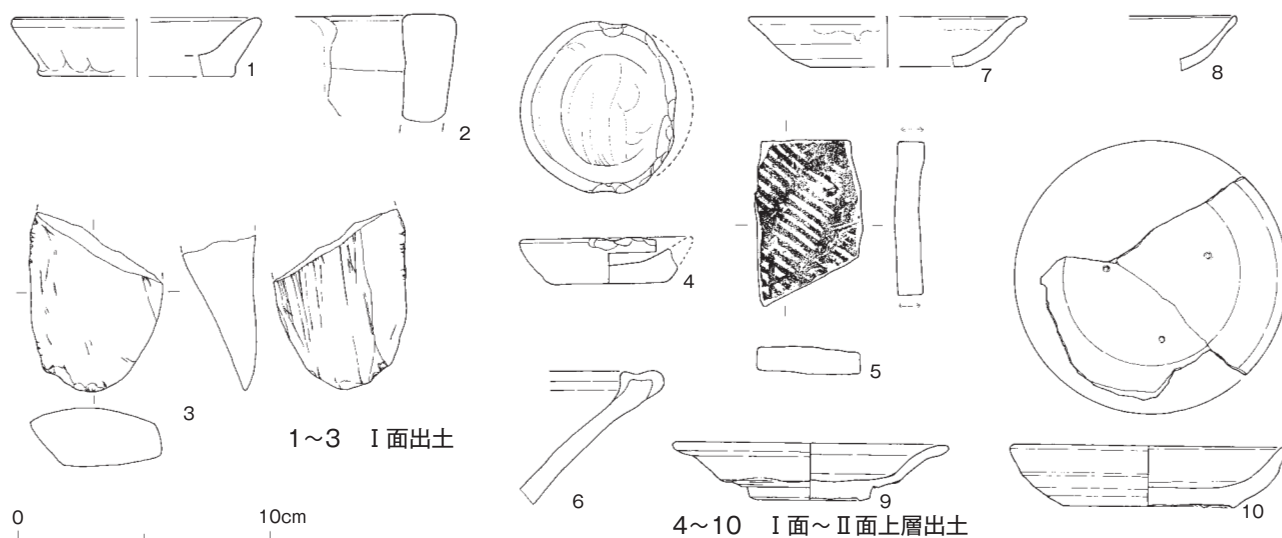


図8 I面~II面上層出土遺物

柱穴列5 (図10)

位置：X - 71 949.81 ~ (- 71 953.93) Y - 28 738.28 ~ (- 28 744.51) 平面形：直線 規模：南北7.37 m 主軸方位：N - 56° - E 重複関係：土坑4を切り、土坑5に切られる 柱穴列3と重なる 出土遺物：図化可能なものなし

柱穴列6 (図10)

位置：X - 71 951.12 ~ - 71 953.69 Y - 28 740.07 ~ - 28 743.18 平面形：直線 規模：南北4.26 m 主軸方位：N - 53° - E 重複関係：土坑4を切り、土坑2・P.55に切られる 出土遺物：図化可能なものなし

柱穴列7 (図10)

位置：X - 71 950.67 ~ - 71 953.23 Y - 28 738.05 ~ - 28 741.65 平面形：直線 規模：南北4.35 m 主軸方位：N - 56.5° - E 重複関係：土坑4を切る 柱穴列1・2・3と重なる 出土遺物：図化可能なものなし 特記事項：P.5とP.6の間に泥岩列があるが、軸線上に並んだので同一遺構として提示した。

柱穴列8 (図10)

位置：X - 71 952.12 ~ - 71 954.25 Y - 28 738.63 ~ - 28 741.64 平面形：直線 規模：南北3.46 m 主軸方位：N - 56° - E 重複関係：なし 出土遺物：図化可能なものなし

柱穴列9 (図10)

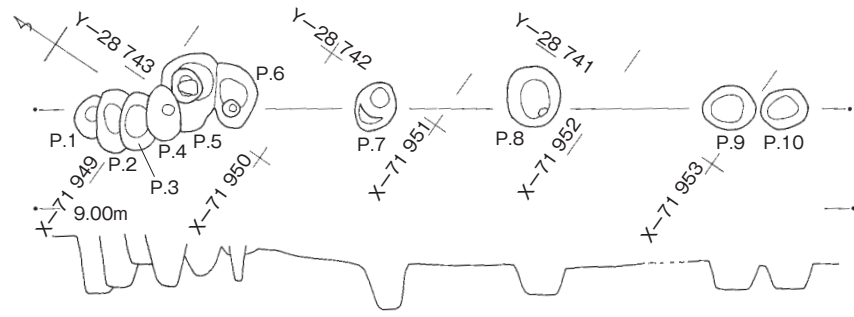
位置：X - 71 952.48 ~ - 71 954.67 Y - 28 737.68 ~ - 28 740.39 平面形：直線 規模：南北3.34 m 主軸方位：N - 52° - E 重複関係：柱穴列3と重なる 出土遺物：図化可能なものなし 特記事項：P.1には杭の抜き痕と思われるものを確認した。

土坑1 (図11)

位置：X - 71 949.52 ~ - 71 950.48 Y - 28 741.16 ~ - 28 742.30 規模：東西119cm×南北105cm×深さ15cm (底面高8.53 m) 平面形：楕円形 断面形：浅皿形 主軸方位：N - 89.5° - W 重複関係：柱穴列1・土坑2・3を切る 出土遺物：図化可能遺物なし 特記事項：一帯に横並びで存在する土坑群の一つ。非常に浅く性格不明。

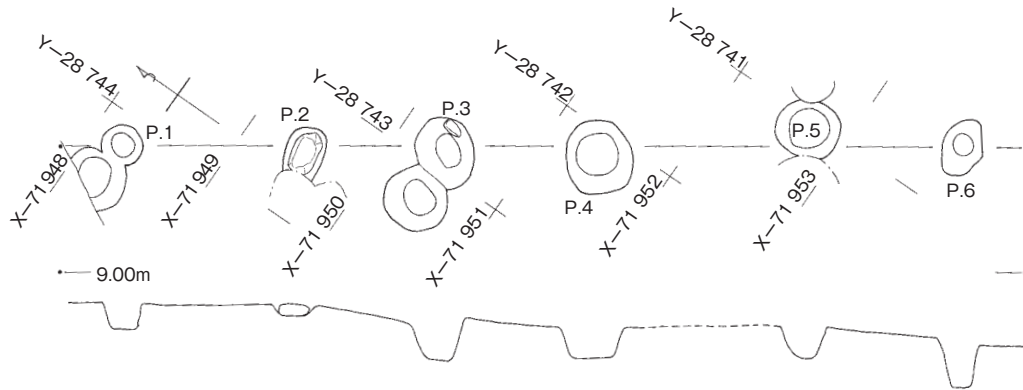
土坑2 (図11)

位置：X - 71 949.87 ~ - 71 951.49 Y - 28 740.10 ~ (- 28 741.53) 規模：東西(197cm)×南北142cm



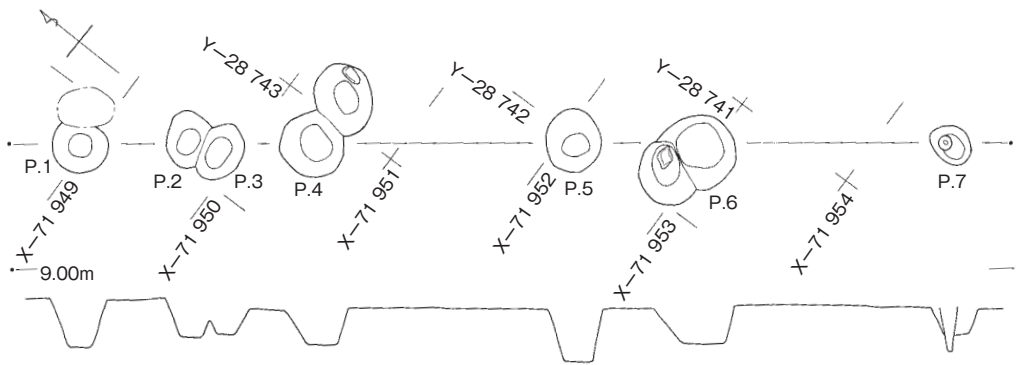
柱穴列1			
No.	長径	短径	深さ
P.1	35	(30)	46
P.2	50	(30)	42
P.3	45	(30)	16
P.4	43	27	35
P.5	65	49	37
P.6	53	36	31
P.7	43	33	39
P.8	48	42	20
P.9	42	34	24
P.10	38	31	19

単位cm



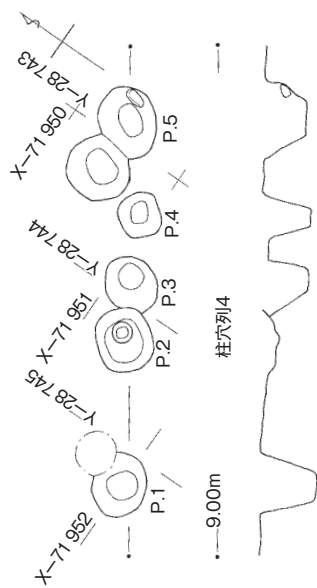
柱穴列2			
No.	長径	短径	深さ
P.1	33	32	23
P.2	(46)	30	8
P.3	58	45	33
P.4	68	53	28
P.5	50	44	27
P.6	47	33	39

単位cm



柱穴列3			
No.	長径	短径	深さ
P.1	44	40	40
P.2	45	38	32
P.3	47	(34)	23
P.4	52	48	29
P.5	50	43	43
P.6	65	59	32
P.7	36	28	38

単位cm



柱穴列4			
No.	長径	短径	深さ
P.1	51	42	44
P.2	51	43	14
P.3	47	40	36
P.4	35	32	37
P.5	58	45	33

単位cm

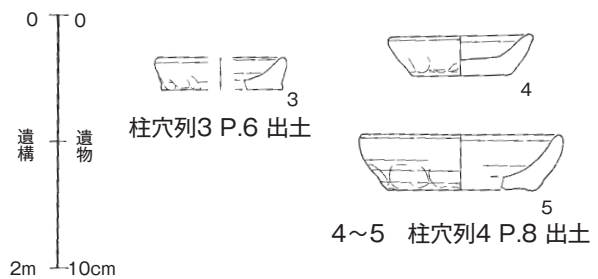
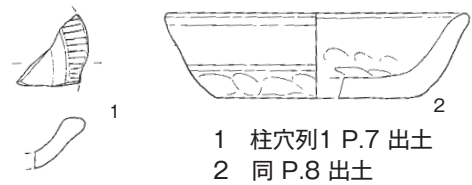
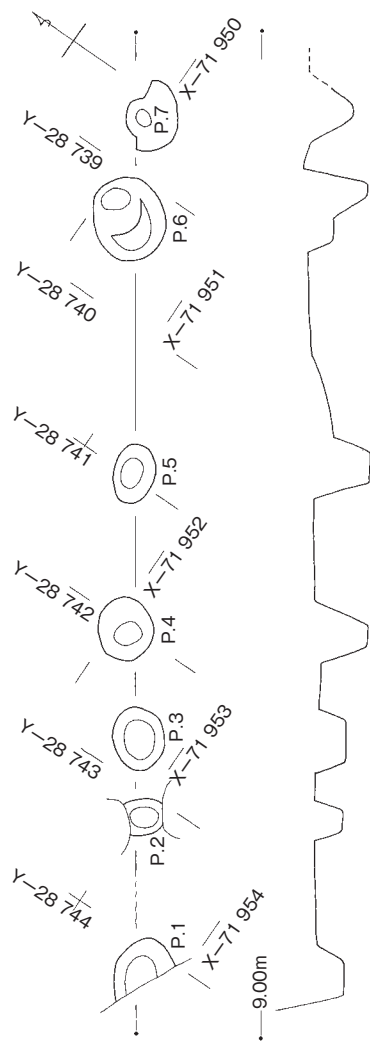


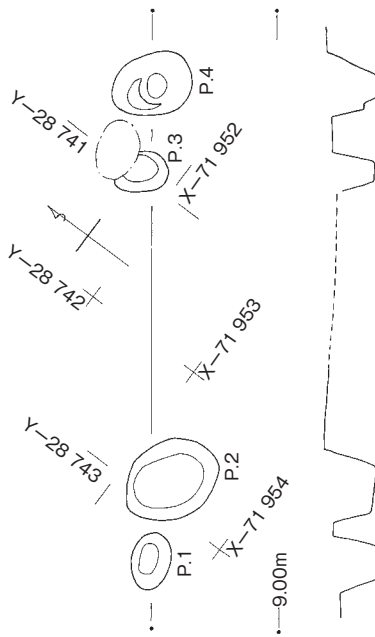
図9 柱穴列1~4、同出土遺物



柱穴列5	
No.	長径 × 短径 × 深さ
P.1	- × 47 × 22
P.2	(38) × 29 × 22
P.3	52 × 40 × 25
P.4	50 × 43 × 43
P.5	47 × 33 × 45
P.6	66 × 56 × 52
P.7	57 × - × 33

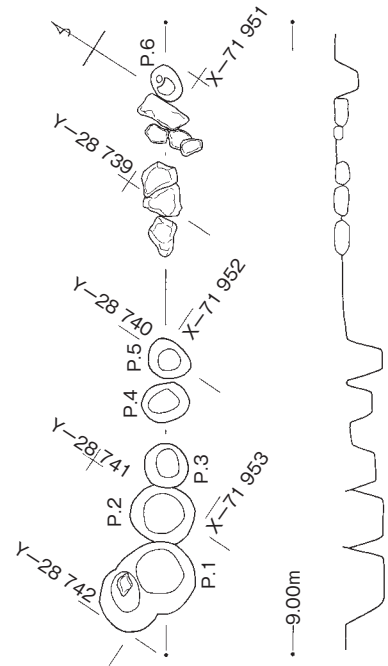
単位cm

0 遺構 10m



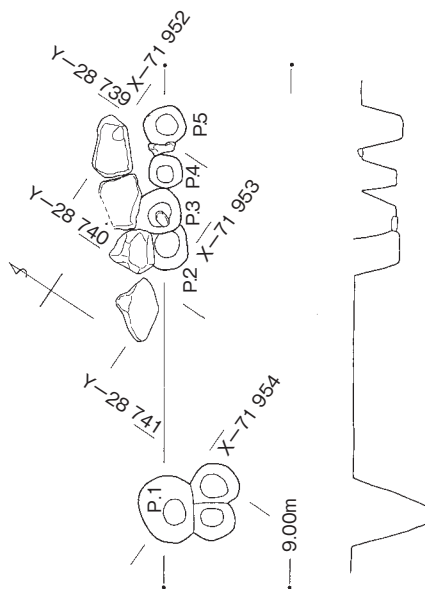
柱穴列6	
No.	長径 × 短径 × 深さ
P.1	46 × 31 × 36
P.2	80 × 61 × 34
P.3	43 × 29 × 24
P.4	65 × 48 × 37

単位cm



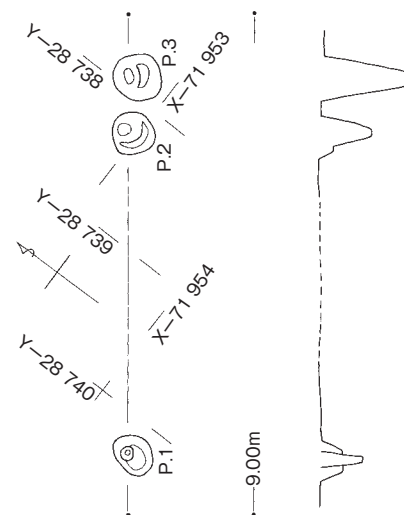
柱穴列7	
No.	長径 × 短径 × 深さ
P.1	61 × 57 × 31
P.2	45 × 50 × 27
P.3	35 × 34 × 23
P.4	36 × 30 × 19
P.5	36 × 29 × 28
P.6	28 × 22 × 17

単位cm



柱穴列8	
No.	長径 × 短径 × 深さ
P.1	54 × 46 × 62
P.2	38 × - × 37
P.3	37 × 36 × 33
P.4	27 × 26 × 31
P.5	32 × 30 × 35

単位cm



柱穴列9	
No.	長径 × 短径 × 深さ
P.1	36 × 28 × 38
P.2	36 × 36 × 43
P.3	37 × 36 × 69

単位cm

図10 柱穴列5~9

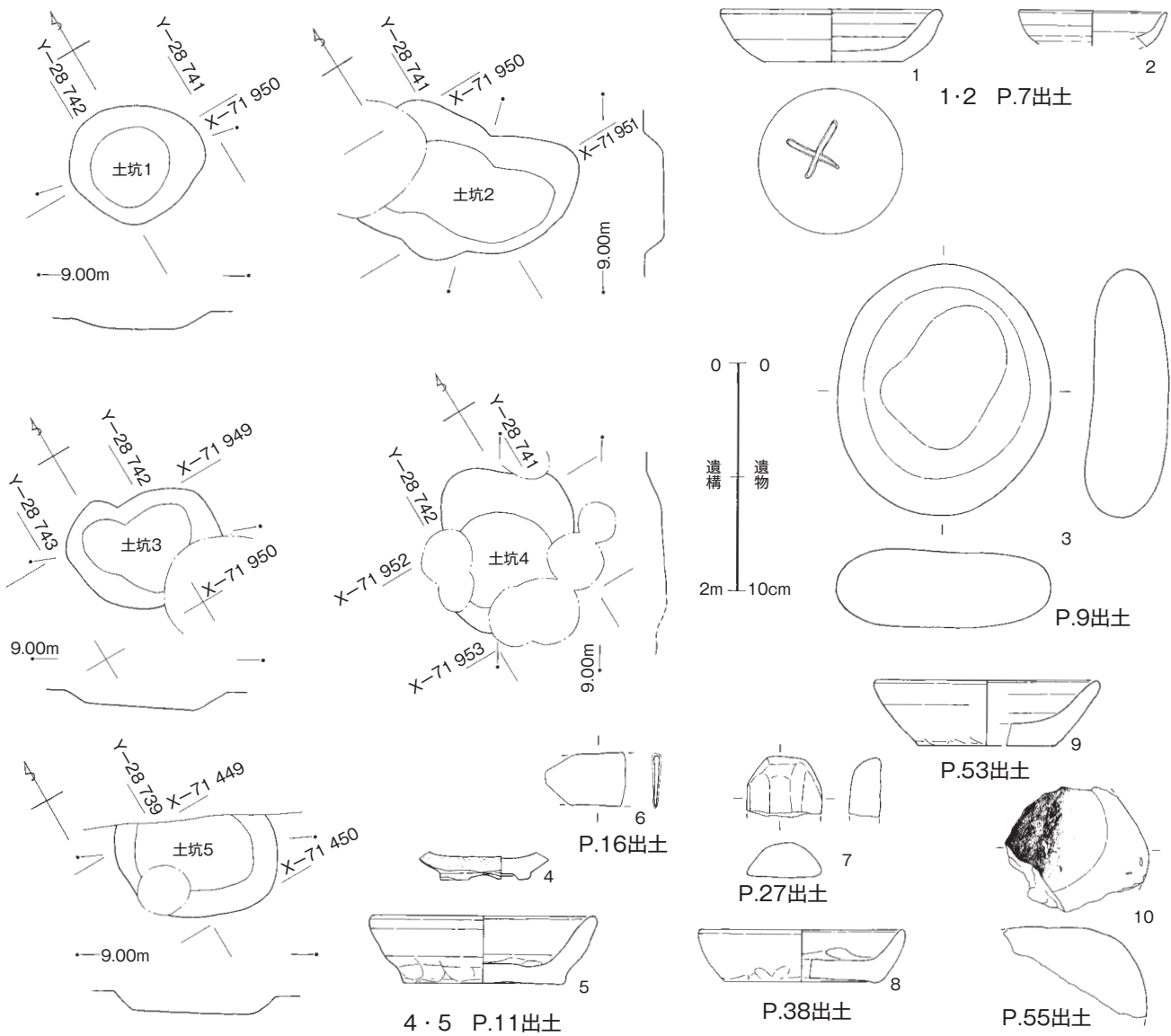


図11 土坑1～5、I面～II面上層小穴出土遺物

×深さ21cm（底面高8.46m） 平面形：不整楕円形 断面形：浅皿形 主軸方位：N-42°-W 重複関係：柱穴列1・6を切り、土坑1に切られる 出土遺物：図化可能遺物なし 特記事項：一帯に横並びで存在する土坑群の一つ。非常に浅く性格不明。

土坑3（図11）

位置：X-71 949.64～(-71 949.85) Y-28 741.53～-28 742.81 規模：東西(149cm)×南北107cm×深さ16cm（底面高8.56m） 平面形：不整楕円形 断面形：浅皿形 主軸方位：N-47°-W 重複関係：柱穴列1を切り、土坑1に切られる 出土遺物：図化可能遺物なし 特記事項：一帯に横並びで存在する土坑群の一つ。非常に浅く性格不明。

土坑4（図11）

位置：X-71 951.49～-71 952.85 Y-28 740.79～-28 742.15 規模：東西117cm×南北144cm×深さ11cm（底面高8.42m） 平面形：隅丸長方形 断面形：浅皿形 主軸方位：N-30°-E 重複関係：柱穴列2・3・7に切られる 出土遺物：図化可能遺物なし 特記事項：非常に浅く、性格不明。

土坑5（図11）

位置：X(-71 448.82)～-71 450.04 Y(-28 738.09)～-28 739.55 規模：東西143cm×南北(88cm)



図12 II面下層遺構全図

×深さ17cm(底面高8.48m) 平面形:楕円形 断面形:浅皿形 主軸方位:N-64°-W 重複関係:
柱穴列5を切る 出土遺物:凶化可能遺物なし 特記事項:非常に浅く、性格不明。

I面~II面上層小穴出土遺物(図11)

(P.7)土師器皿R種小型(1)・瀬戸美濃小皿(2)・(P.9)台石(3)・(P.11)白磁皿(4)・土師器皿R種中型(5)・(P.16)刀子(6)・(P.27)不明石製品(7)・(P.38)土師器皿R種小型(8)・(P.53)土師器皿R種中型(9)・(P.55)使用痕ある石片(10) 特記事項:3の台石は7世紀代にも類例がみられるため、年代を特定することはできないが、中世よりも前のものであろう。4の白磁は15世紀。

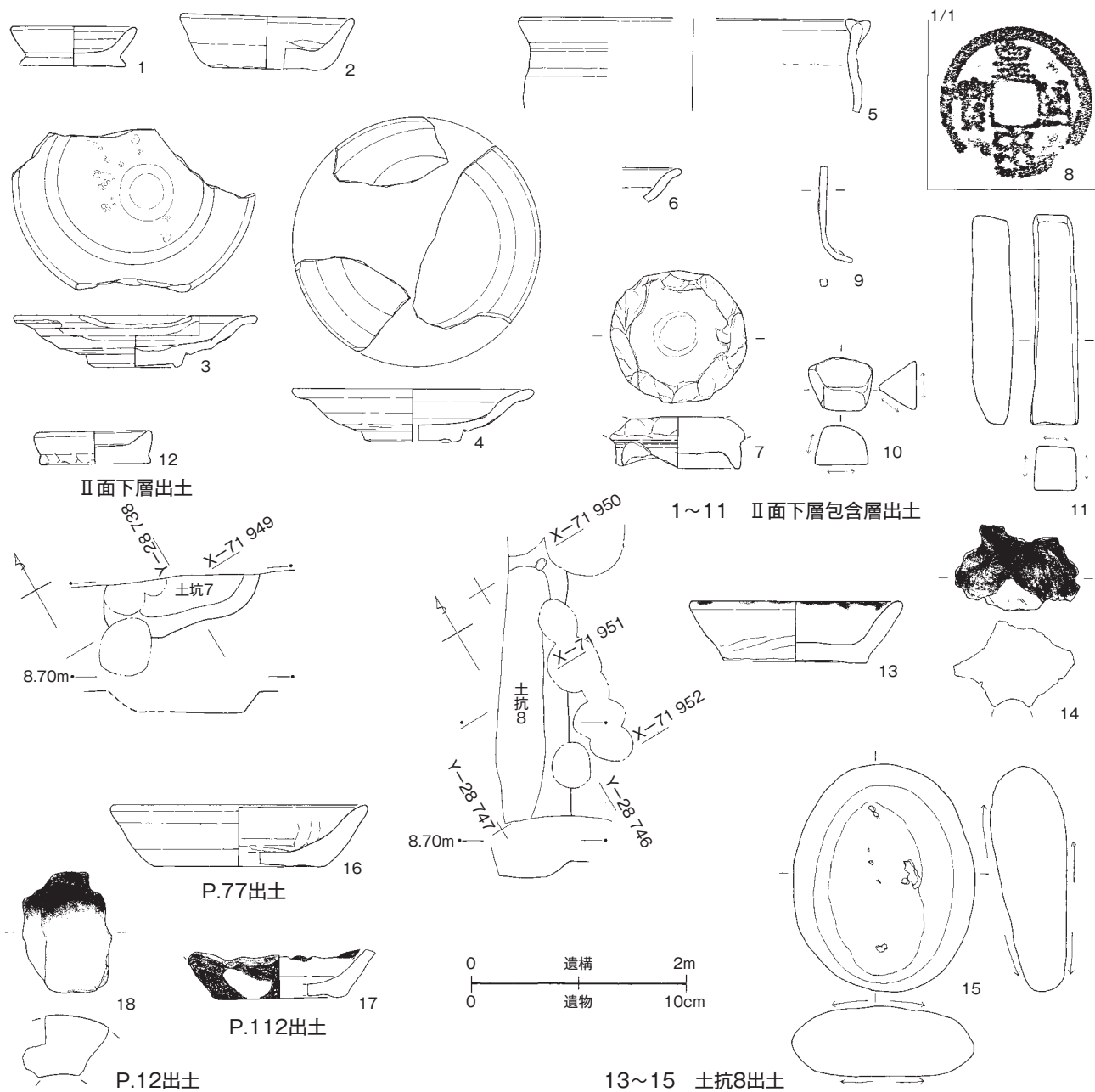


図13 II面下層包含層・II面下層出土遺物、土坑7・8 同出土遺物、II面下層小穴出土遺物

2. II面下層

面の概要 (図12・13)

検出高：8.19～8.34 m 面構成土：暗褐色粘質土・暗灰褐色粘質土 検出遺構：土坑2基・小穴76穴

II面下層包含層出土遺物：土師器皿R種小型(1・2)・瀬戸美濃腰折皿(3・4・6)・瀬戸美濃口広有耳壺(5)・竜泉窯系青磁碗(7)・皇宋通宝(8)・鉄釘(9)・砥石仕上げ砥(10)・砥石中砥(11)

II面下層出土遺物：土師器皿R種小型(12) 特記事項：3・4の腰折皿は古瀬戸後IV期新段階、5の口広有耳壺は大窯第1段階のもの。7の青磁碗は15世紀初頭前後。

土坑7 (図13)

位置：X(-71 948.39)～-71 949.45 Y(-28 737.67)～-28 738.78 規模：東西149cm×南北(45cm)×深さ21cm(底面高8.36m) 平面形：不整楕円形 断面形：浅皿形 主軸方位：N-64°-W 重複関係：小穴に切られる 出土遺物：凶化可能遺物なし 特記事項：浅い楕円状の土坑。性格は不明。



図14 皿面遺構全図

土坑8 (図13)

位置：X(-71 949.89)～(-71 952.23) Y(-28 745.77)～(-28 746.94) 規模：東西(69cm)×南北(263cm)×深さ17cm(底面高8.65m) 平面形：隅丸長方形または長楕円形 断面形：浅皿形 主軸方位：N-34°-E 重複関係：P.80に切られる 出土遺物：土師器皿R種中型(13)・轆羽口(14)・台石(15) 特記事項：西側及び南側が調査区外のため実際の大きさ、性格ともに不明。15の台石は図9-3と同様のもの。

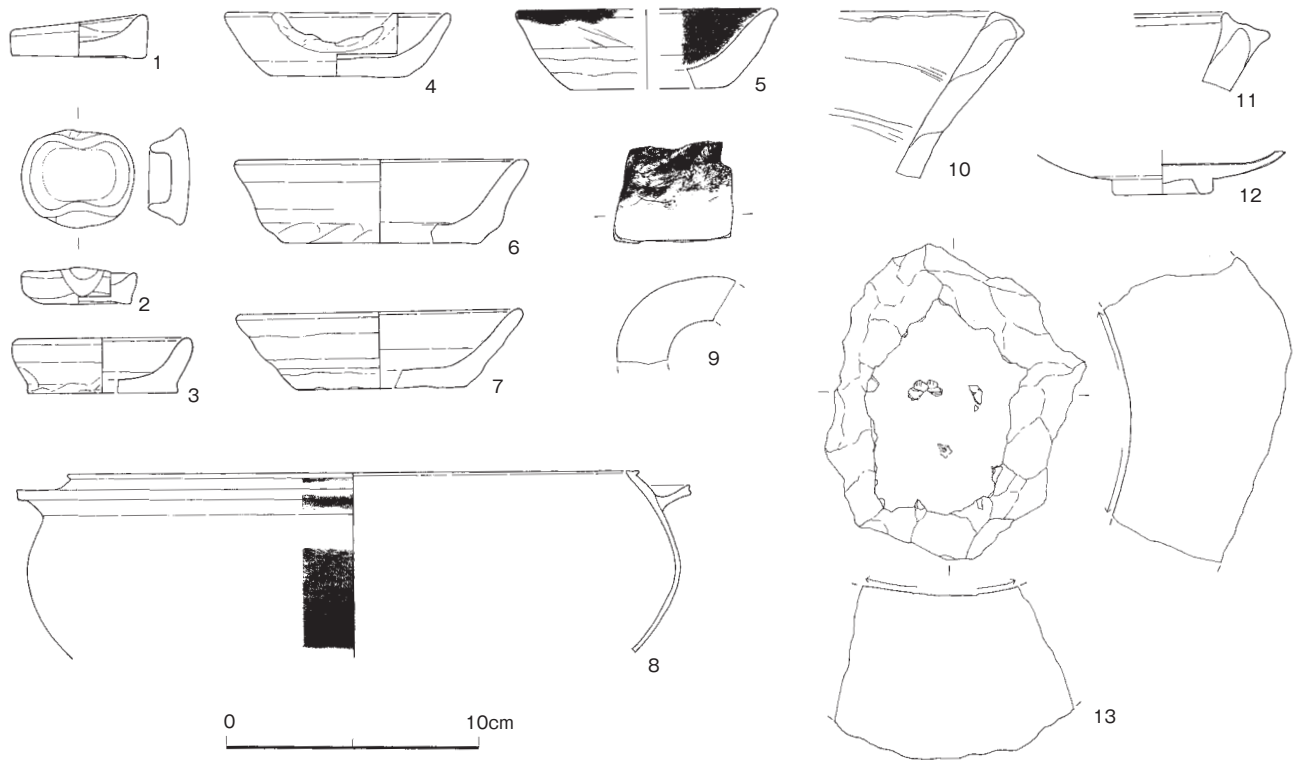


図15 III面包含層出土遺物

II面下層小穴出土遺物(図13)

(P.77) 土師器皿R種大型(16)・(P.112) 土師器皿R種中型(17)・(P.124) 轡羽口(18)

3. III面

面の概要(図14・15)

検出高:8.22 m 面構成土:暗灰褐色粘質土 検出遺構:建物1棟・L字柱穴列1列・小穴81穴(建物1棟、L字柱穴列1列含む) III面包含層出土遺物:土師器皿R種小型(1~3)・土師器皿R種中型(4・5)・土師器皿R種大型(6・7)・伊勢系鋳鍋(8)・轡羽口(9)・常滑片口鉢II類(10・11)・白磁皿(12)・石皿(13) 特記事項:12の白磁は15世紀後半のもの。13は大型の石皿の破片か。

建物1(図16)

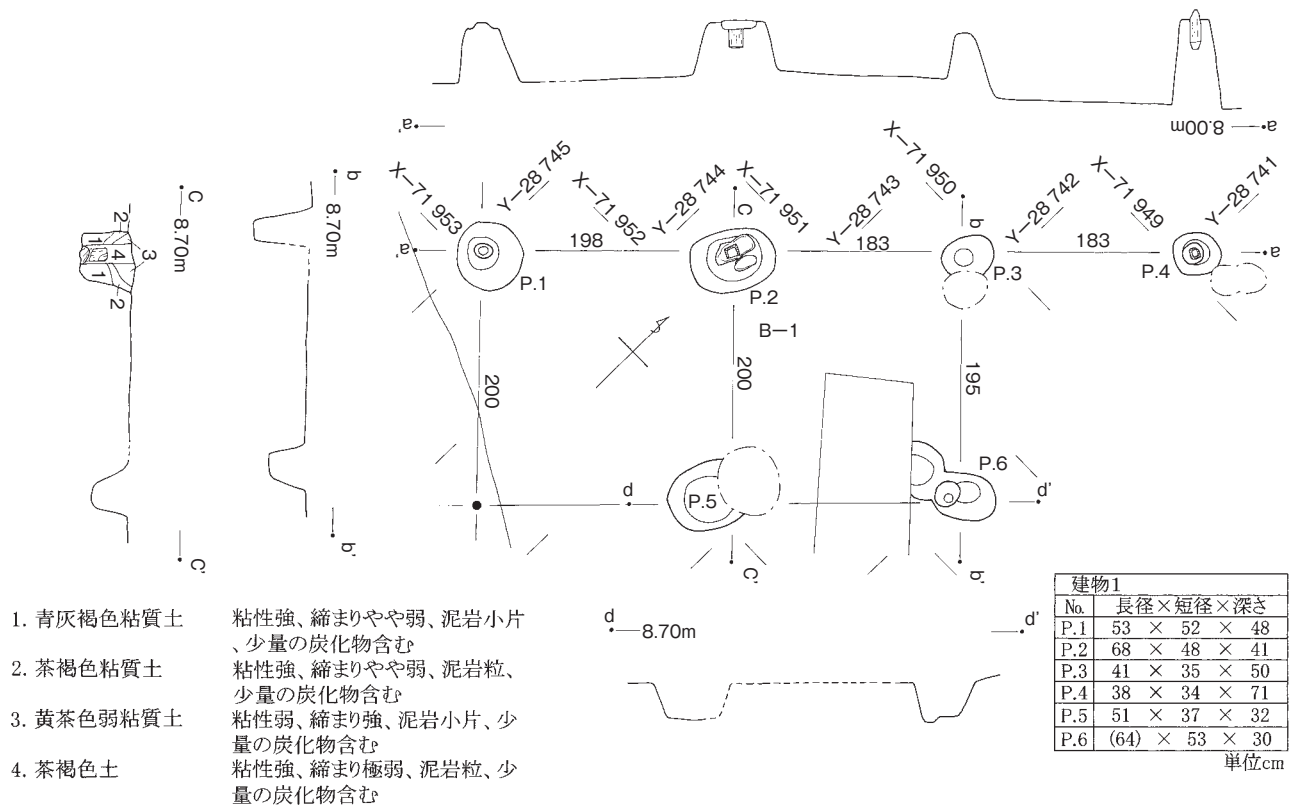
位置:X(-71 948.68) ~ (-71 944.34) Y-(28 740.65) ~ (-28 745.18) 規模:東西1間, 2.32 m × 南北3間, 6.17 m 主軸方位:N-44°-E 重複関係:L字柱穴列と重なる 出土遺物:図化可能遺物なし 特記事項:柱間は安定しないが、柱穴が並んだので建物として提示した。P.2では礎石にのる柱根が確認された。

L字柱穴列(図16)

位置:X(-71 947.92) ~ (-71 954.60) Y(-28 741.16) ~ -28 744.12 規模:東西1間, 3.16 m × 南北4間, 5.97 m 主軸方位:N-24°-W 重複関係:建物1と重なる 出土遺物:図化可能遺物なし 特記事項:建物1とは軸方位を完全に異にする。切合いが不明なため前後関係は不明。

III面小穴出土遺物(図16)

(P.90) 常滑片口鉢II類(1)・(P.91) 淳化元宝(2)・(P.93) 瀬戸緑釉小皿(3・4)・(P.94) 轡羽口(5)・(P.95) 土師器皿R種小型(6)・瀬戸緑釉小皿(7)



1. 青灰褐色粘質土 粘性強、縮まりやや弱、泥岩小片、少量の炭化物含む
2. 茶褐色粘質土 粘性強、縮まりやや弱、泥岩粒、少量の炭化物含む
3. 黄茶色弱粘質土 粘性弱、縮まり強、泥岩小片、少量の炭化物含む
4. 茶褐色土 粘性強、縮まり極弱、泥岩粒、少量の炭化物含む

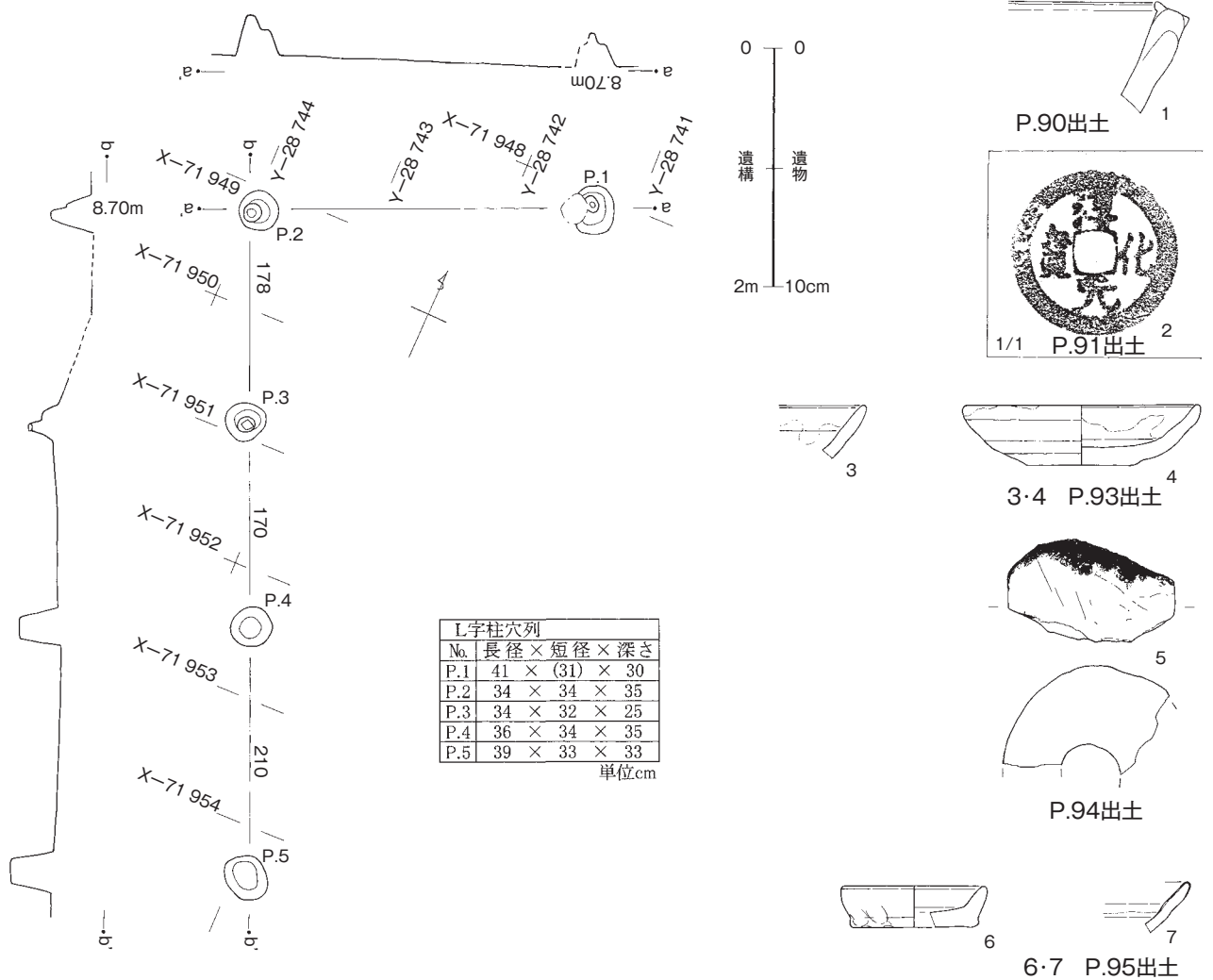


図16 建物1・L字柱穴列、Ⅲ面小穴出土遺物

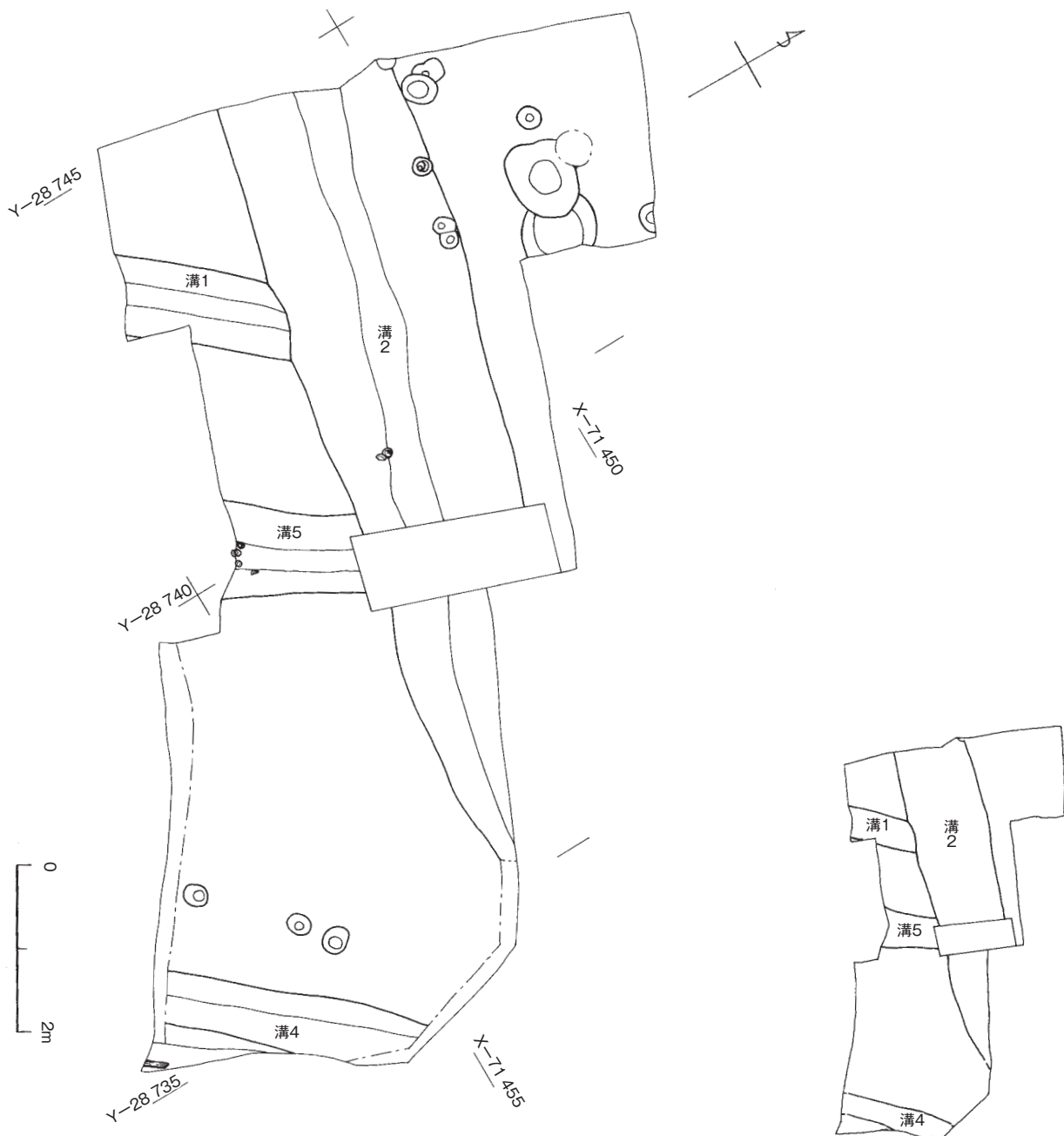


図17 IV面遺構全図

4. IV面

面の概要 (図17・18)

検出高：8.10～8.20 m 面構成土：黒褐色強粘質土 検出遺構：溝4条・小穴12穴 IV面包含層出土遺物：土師器皿R種小型(1～3・5～7)・土師器皿R種中型(4・8・9)・伊勢系鍔鍋(10)・韃羽口(11・12)・常滑片口鉢Ⅱ類(13・14)・瀬戸縁釉小皿(15)・不明石製品(16)・篋状木製品(17)・不明木製品(18)・円盤状木製品(19)・加工骨(20)

溝2 (図19・20)

位置：X - 71 949.70 ～ - 71 953.43 Y(- 28 335.20) ～ (- 28 344.92) 断面形：逆台形 規模：幅2.40 m × 長さ(9.87 m) × 深さ0.85 m 主軸方位：N - 77° - W 流下方向：西→東 出土遺物：土師器皿R

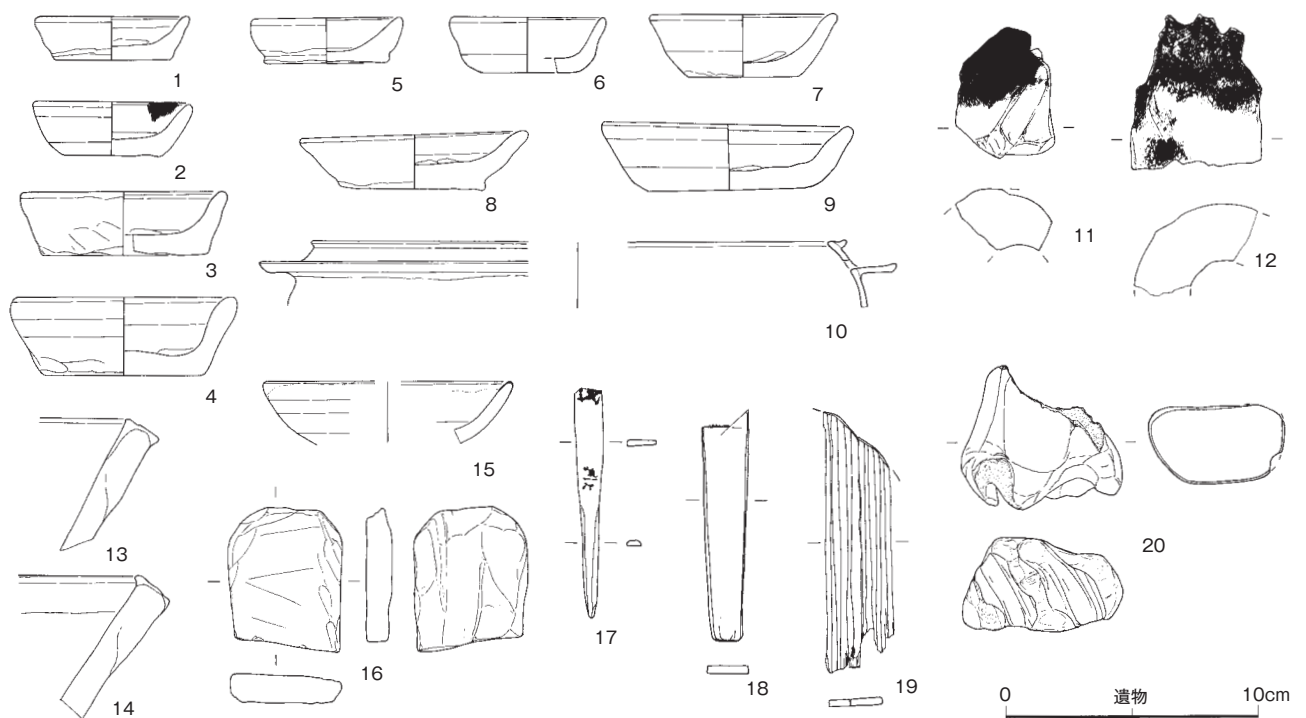


図18 IV面包含層出土遺物

種小型(1~5)・土師器皿R種中型(6~10)土師器皿R種大型(11~13)・内耳土鍋(14)・籬羽口(15)・瓦器香炉(16)・常滑甕(17・18)・常滑片口鉢Ⅱ類(19)・瀬戸美濃播鉢(20~22)・摩耗陶片(23・24)・瀬戸緑釉小皿(25)・砥石荒砥(26)・棒状木製品(27) 特記事項：東西に延びる溝。山際に沿って伸びる溝と考えられる。14の内耳土鍋出土例は市内でまだ数点しかない。16の瓦器香炉は米町遺跡(二丁目2308番1地点『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告17(第2分冊)』)に類例が見られる。22の瀬戸美濃播鉢は大窯第1段階あたりのもの。

溝1(図21)

位置：X - 71 952.33 ~ (- 71 954.17) Y - 28 741.85 ~ (- 28 744.08) 断面形：漏斗形 規模：幅0.97 m × 長さ(2.02 m) × 深さ0.78 m 主軸方位：N - 42° - E 流下方向：北→南? 出土遺物：凶化可能遺物なし 特記事項：溝2に流れ込んでいると考えたいが、検出範囲が狭いため正確な流下方向は不明。

溝4(図21)

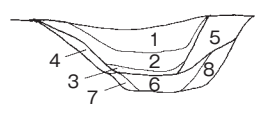
位置：X (- 71 950.33) ~ (- 71 953.59) Y (- 28 733.94) ~ (- 28 736.32) 断面形：逆台形・深皿形 規模：幅(1.03 m) × 長さ(3.25 m) × 深さ(0.65) 主軸方位：N - 43° - E 流下方向：北→南? 出土遺物：瀬戸美濃播鉢(1)・青花小皿(2)・備前播鉢(3)・産地不明陶器大皿(4) 特記事項：溝2に流れ込んでいると考えたいが、検出範囲が狭いため正確な流下方向は不明。1の播鉢は大窯第3段階。

溝5(図21)

位置：X (- 71 951.85) ~ (- 71 953.79) Y (- 28 738.94) ~ (- 28 740.85) 断面形：逆台形 規模：幅1.21 m × 長さ(1.78 m) × 深さ0.65 m 主軸方位：N - 32° - E 流下方向：南→北? 出土遺物：土師器皿R種小型(5~6)・土師器皿R種中型(7)・土師器皿R種大型(8)・木地皿(9)・使用痕ある石片(10) 特記事項：溝2に流れ込んでいると考えたいが、検出範囲が狭いため正確な流下方向は不明。10は大きさ、形状、摩耗箇所から考えて礎石の可能性もある。

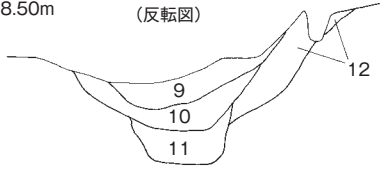


a — 8.50m — a'

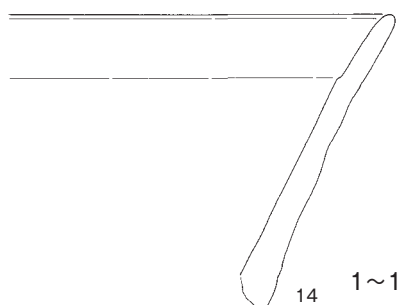
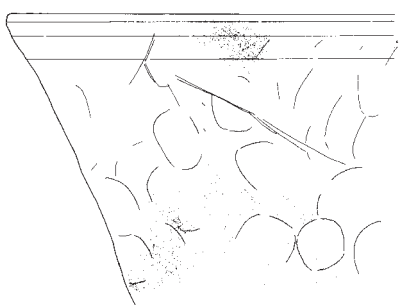
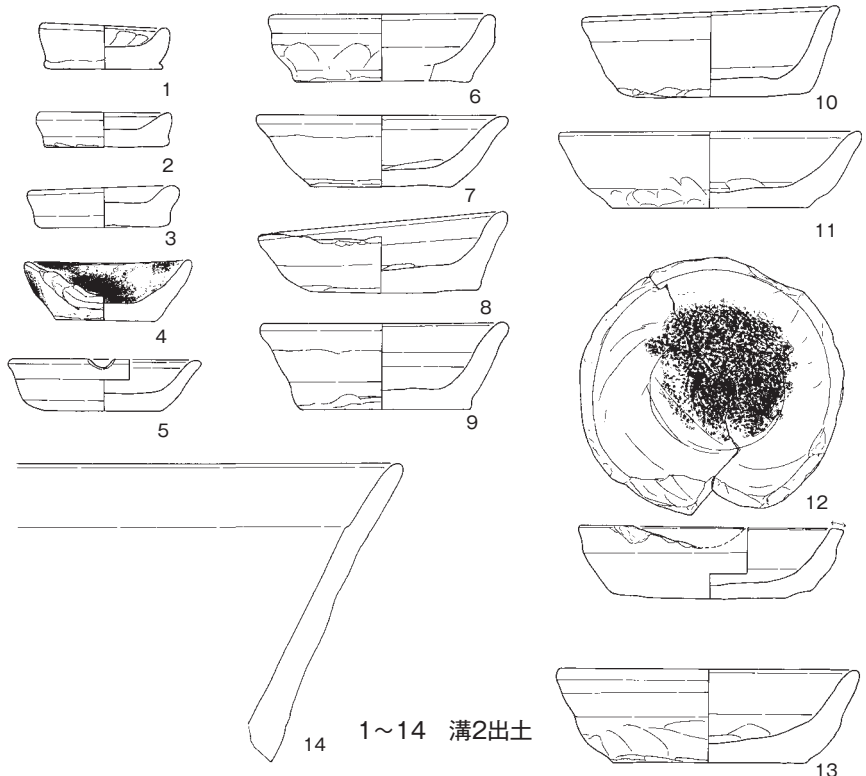


- | | |
|--------------|------------------------------------------|
| 1. 暗褐色粘質土 | 粘性強、縮まり弱、多量の木片、泥岩粒～小片含む |
| 2. 暗灰褐色粘質土 | 粘性強、縮まり弱、多量の木片、泥岩粒～小片含む |
| 3. 黒灰褐色砂質土 | 粘性強、縮まりやや弱、泥岩粒含む |
| 4. 黒灰褐色粘質土 | 粘性強、縮まりやや弱、少量の泥岩粒、微量の炭化物含む |
| 5. 黒灰褐色粘質土 | 粘性強、縮まりあり、泥岩粒、少量の炭化物含む |
| 6. 黒灰褐色粘質土 | 粘性強、縮まり弱、泥岩粒多く含む |
| 7. 黒灰褐色粘質土 | 粘性強、縮まり弱、泥岩粒少し含む |
| 8. 黒灰褐色粘質土 | 粘性強、縮まり弱、泥岩粒少し含む |
| 9. 暗褐色粘質土 | 地山黒色土・赤褐色ロームの混土 |
| 10. 暗茶褐色粘質土 | 9. よりロームを多く含む 多量の炭化物・青灰色泥岩及び凝灰岩粒～ブロックを含む |
| 11. 黒色粘質土 | 泥岩塊含む |
| 12. 暗茶褐色強粘質土 | 泥岩粒子少量含む |

b' — 8.50m — b' (反転図)



0 遺構 2m
0 遺物 10cm



1~14 溝2出土

図19 溝2、同出土遺物

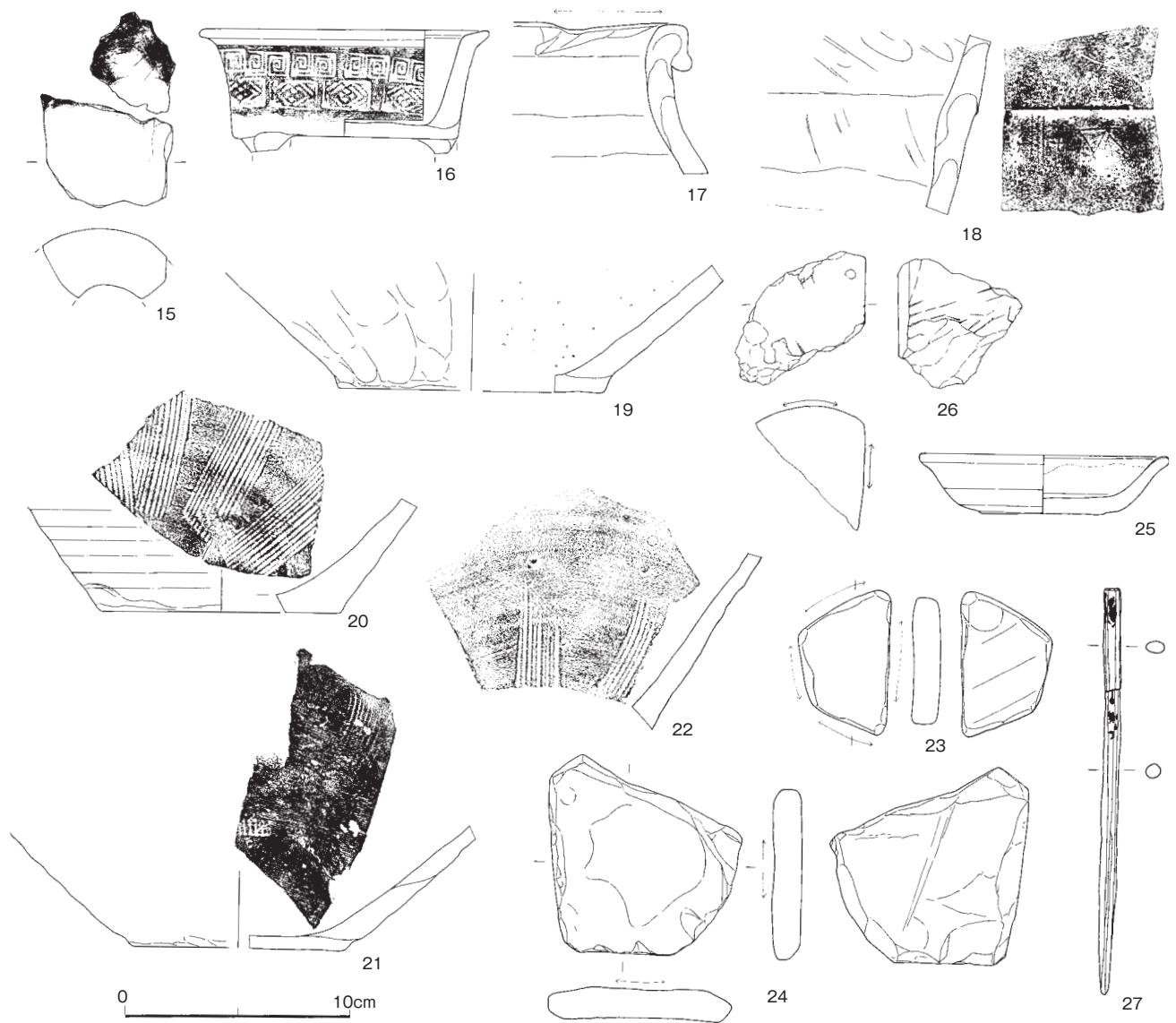
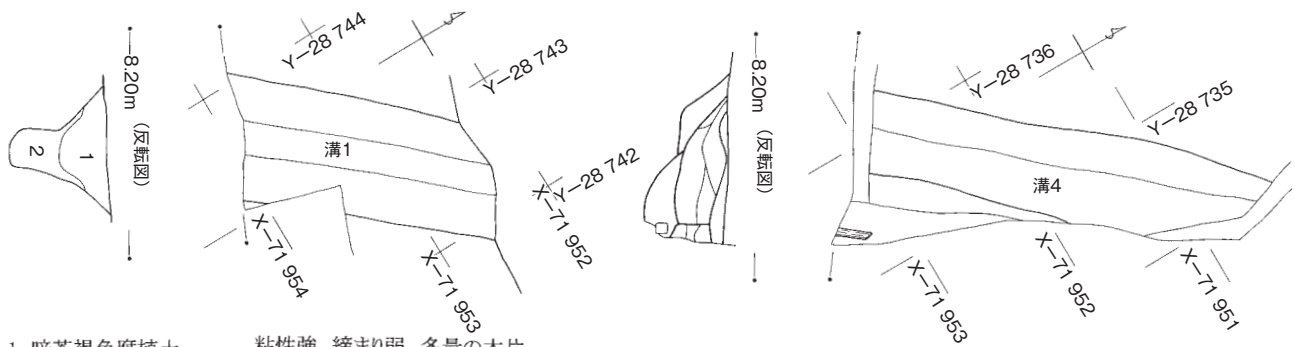
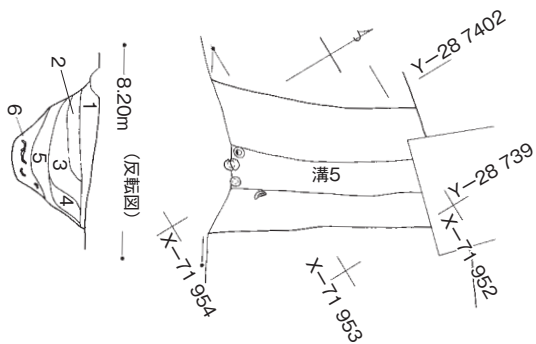


图20 沟2出土遗物(2)

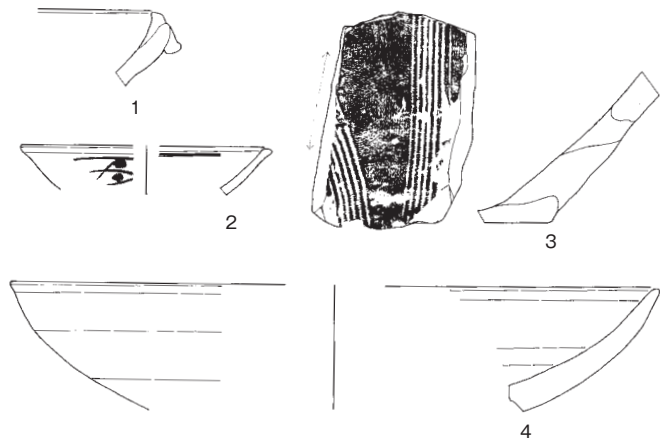


- 1. 暗茶褐色腐植土 粘性強、縮まり弱、多量の木片、泥岩小片、少量の炭化物含む
- 2. 暗灰褐色強粘質土 粘性強、縮まり弱、細かい木片・火山灰と思われる物質含む

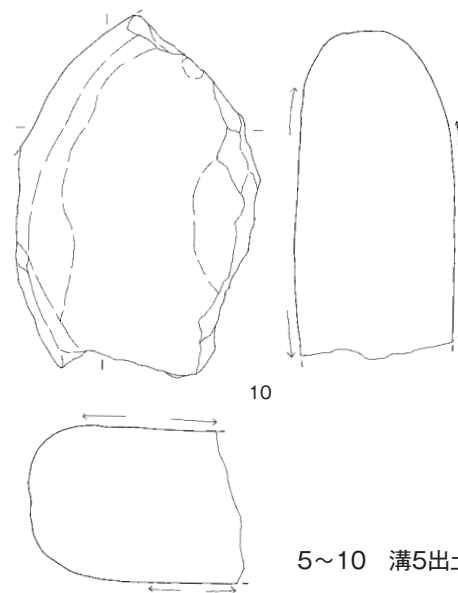
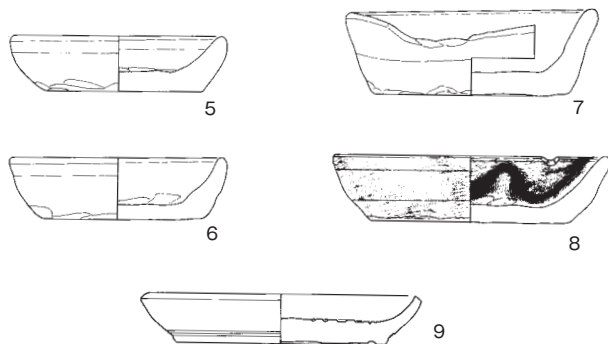
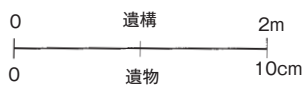
- 1. 暗青灰色粘質土 2~4cmの泥岩片少量ふくむ
- 2. 泥岩層 暗青灰色の拳大泥岩による地行層
- 3. 暗青灰色粘質土 混入物少ない
- 4. 暗青灰色粘質土 混入物少ない
- 5. 青灰色粘質土 泥岩多く含む
- 6. 暗茶褐色粘質土 混入物少ない
- 7. 暗青灰色砂質土 泥岩粒・砂粒含む
- 8. 暗青灰色粘質土 泥岩粒・砂粒含む
- 9. 暗灰色粘質土 炭化物含む
- 10. 黒褐色粘質土 炭化物・遺物含む



- 1. 暗茶色弱粘質土 粘性やや強、やや縮まりあり、泥岩粒・炭化物・灰白色火山灰少量含む
- 2. 暗灰褐色弱粘質土 粘性やや強、縮まり弱、1~3cmの泥岩小片含む 炭化物やや多し
- 3. 暗灰褐色弱粘質土 2に類似し、泥岩小片はやや多い
- 4. 暗灰色粘質土 粘性強、縮まり弱、1~5cmの泥岩小片少量、微量の炭化物含む
- 5. 暗茶褐色腐植土 粘性強、縮まり弱、泥岩粒、微量の炭化物含む
- 6. 暗灰色粘質土 粘性強、縮まり弱、1から5cmの泥岩小片やや多く含む 炭化物含む



1~4 溝4出土



5~10 溝5出土

図21 溝1・4・5、同出土遺物

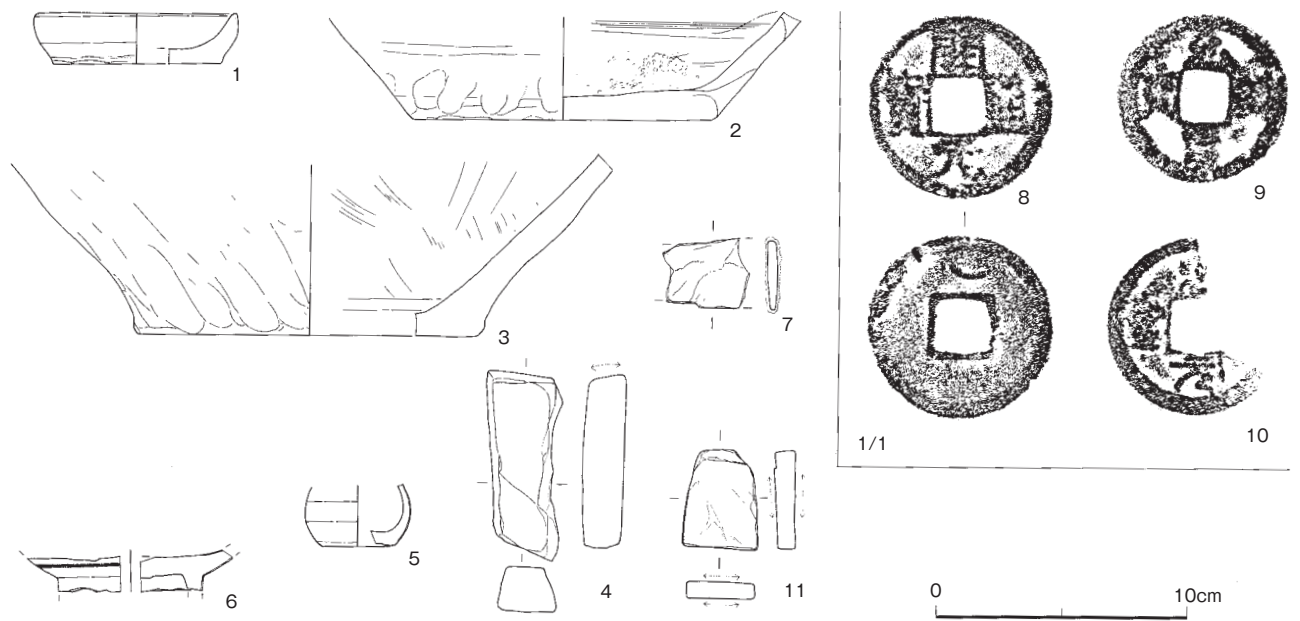


图22 遺構外出土遺物

遺構外採集遺物 (图22)

土師器皿R種小型(1)・瀬戸大平鉢(2)・常滑片口鉢Ⅱ類(3)・摩耗陶片(4)・伊万里仏華瓶(5)・
 船載施釉陶器碗(6)・不明鉄製品(7)・開元通宝(8)・錢種不明(9・10)・砥石中砥(11)

(沖元)

表1 出土遺物観察表(1)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図8-1	I面	土師器皿 R種 大型	口径(9.8)cm 底径(7.6)cm 器高2.3cm 回転ロクロ 底面糸切り 胎土は赤橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯を含む砂質土 やや粗土
2	I面	土師質 焙烙	口縁部片 方型になる 胎土は淡橙色、赤色粒・砂粒・白色粒を含む砂質土
3	I面	砥石	残存長(6.5)cm 残存幅(5.3)cm 最大厚(2.7)cm 淡褐色 きめ細かく堅い 周辺が刃状に薄い 表面は滑らかで、擦過痕あり
4	I面～II面上層	土師器皿 R種 小型	口径6.7cm 底径4.5cm 器高1.8cm 回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色、砂粒・白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む 口縁部の一部を打ち欠く
5	I面～II面上層	渥美 甕	胴部片 胎土は灰色、緻密土 叩き痕あり 断面の2辺が磨耗
6	I面～II面上層	瀬戸 卸目付大皿	口縁部片 ロクロ成形 胎土は黄灰色、砂粒を含む 灰釉漬け掛け
7	I面～II面上層	瀬戸 緑釉小皿	口径(9.6)cm 底径(4.5)cm 器高2.5cm ロクロ成形 体部外面下半回転ヘラ削り 胎土は淡黄褐色、砂粒多めに含みやや粗 口唇部内・外面に白濁した灰釉ヶ掛かる
8	I面～II面上層	瀬戸美濃 碗	口縁部片 ロクロ成形 胎土は淡灰褐色、砂粒・礫含む 茶褐釉
9	I面～II面上層	瀬戸美濃 腰折皿	口径(10.7)cm 底径4.8cm 器高2.3cm ロクロ成形 削り出し高台 外面下半回転ヘラ削り 胎土は淡黄褐色、砂粒・粘土粒含みやや粗 内面と外面下位まで灰釉や厚く掛かる 古瀬戸後IV
10	I面～II面上層	瀬戸美濃 丸皿	口径(10.8)cm 底径7.0cm 器高2.4cm ロクロ成形 外底部削り出し 胎土は淡灰褐色、白色粒含みやや粗 全体に長石釉が薄く掛かり、細かく貫入が入る 内底面に三箇所、外底面に一箇所の目跡 登窯第1小期
図9-1	柱穴列1P.7	瀬戸美濃 魚形皿	"縁部分 胎土は黄灰色、白色粒・砂粒含みやや粗 全体に透明感のある灰釉掛かり、貫入が入る 形状は魚形になると思われ、口唇部には串状工具による沈線がはいる 大窯第3段階後半あたりか"
2	柱穴列1P.8	土師器皿 R種 大型	口径(12.0)cm 底径(8.0)cm 器高3.4cm 回転ロクロ 底面糸切り 胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・雲母・礫を含む砂質土 やや粗土
3	柱穴列3P.6	土師器皿 R種 極小型	口径(4.9)cm 底径(4.8)cm 器高1.3cm 回転ロクロ 底面糸切り 胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯を含む
4	柱穴列4P.8	土師器皿 R種 極小型	口径(5.5)cm 底径(4.0)cm 器高1.6cm 回転ロクロ 底面糸切り 胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯を含み、やや粗土
5	柱穴列4P.8	土師器皿 R種 小型	口径(7.8)cm 底径(6.0)cm 器高2.2cm 回転ロクロ 底面糸切り 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・雲母を含み、やや粗土
図11-1	I面 P.7	土師器皿 R種 小型	口径(9.7)cm 底径(6.2)cm 器高2.5cm 回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・雲母を含み、やや粗土 外底面に十字の陰刻あり
2	I面 P.7	瀬戸美濃 小皿	口径(6.4)cm ロクロ成形 胎土は灰黄色、砂粒含みやや粗 内側に艶のない茶褐釉が掛かる 外面の釉葉は摩耗によりほとんど残存しない
3	I面 P.9	台石	縦11.1cm 横9.4cm 厚さ2.4cm 平たい円形 上面の中央が磨耗し滑らかになっている 群馬県の荒砥宮川遺跡の7世紀前半のものに類例がみられる
4	I面 P.11	白磁 皿	底径(4.0)cm ロクロ成形 胎土は淡黄灰色 内面に淡灰色の釉、貫入あり 削り出し高台、畳み付き部分斜めに削りとなっている 15世紀
5	I面 P.11	土師器皿 R種 中型	口径(9.7)cm 底径(6.9)cm 器高3.0cm 回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・雲母・粘土粒を含む弱砂質土やや粗土
6	I面 P.16	刀子	遺存長(3.5)cm 最大幅(2.2)cm 最大厚(0.2)cm
7	I面 P.27	不明石製品	遺存長(2.7)cm 幅3.3cm 最大厚(1.5)cm 灰オリーブ色 砂粒多く含むが堅い 蒲葺状に削られている
8	I面 P.38	土師器皿 R種 小型	口径(9.0)cm 底径(6.9)cm 器高2.3cm 回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・雲母・礫を含む砂質土 やや粗土
9	I面 P.53	土師器皿 R種 中型	口径(9.7)cm 底径(6.0)cm 器高2.9cm 回転ロクロ 底面糸切り 板状圧痕あり 胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・雲母・礫を含む砂質土 やや粗土 薄く煤付着
10	I面 P.55	使用痕ある 石片	遺存長(5.6)cm 遺存幅(6.4)cm 最大厚(3.2)cm 暗赤褐色 堅緻 表面は全体に滑らかで、中央がかすかに窪み炭化している
図13-1	II面下層包含層	土師器皿 R種 小型	口径(5.7)cm 底径(5.0)cm 器高1.8cm 回転ロクロ 底面糸切り 胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・雲母を含み、やや粗土
2	II面下層包含層	土師器皿 R種 小型	口径(8.0)cm 底径(5.4)cm 器高2.4cm 回転ロクロ 底面糸切り 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・雲母・礫を含む砂質土 やや粗土
3	II面下層包含層	瀬戸美濃 腰折皿	口径(11.2)cm 底径4.5cm 器高2.4cm ロクロ成形 削り出し高台 外面下半回転ヘラ削り 胎土は灰黄色、砂粒・礫含みやや粗 内面と外面途中まで灰釉や厚く斑に掛かる 内底面に大きい目跡あり、粘土屑も付着 口縁部の一部を打ち欠いている 古瀬戸後IV
4	II面下層包含層	瀬戸美濃 腰折皿	口径(11.5)cm 底径(5.0)cm 器高2.5cm ロクロ成形 削り出し高台 外面下半回転ヘラ削り 胎土は灰黄色、砂粒・礫含む 内面と外面下位まで灰釉掛かる 古瀬戸後IV
5	II面下層包含層	瀬戸美濃 口広有耳壺	口径(16.1)cm ロクロ成形 胎土は灰黄色、砂粒・礫含みやや粗土 外面と外面口縁部下まで鉄釉掛かる 口唇部内側よりに重ね焼きの痕あり 大窯第1段階あたりか
6	II面下層包含層	瀬戸美濃 腰折皿	口縁部片 ロクロ成形 胎土は灰黄色 灰釉掛かる
7	II面下層包含層	竜泉窯系 青磁碗	底部片 底径(5.6)cm ロクロ成形 削り出し高台 素地は淡灰色、釉は灰緑色、半透明、外面は高台外側まで掛る 内底面周囲を故意に打ち欠く 15世紀初頭前後
8	II面下層包含層	皇宋通寶	初鑄1038年 北宋 楷書
9	II面下層包含層	鉄釘	残存長(5.2)cm 幅0.3cm 厚0.4cm 重量2.6g
10	II面下層包含層	砥石 仕上砥	縦2.5cm 横3.0cm 高さ1.8cm 淡緑灰色 砥面3～4面 特に底面が滑らかに磨耗し、硯の研磨に使用したものと思われる 鳴滝産
11	II面下層包含層	砥石 中砥	遺存長(10.0)cm 幅2.1cm 厚2.0cm 淡緑灰色凝灰岩 砥面4面 上野産 近世のものか?
12	II面下層	土師器皿 R種 小型	口径5.1cm 底径5.0cm 器高1.4cm 回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・礫・雲母を含む粗土
13	土坑8	土師器皿 R種 小型	口径9.6cm 底径6.4cm 器高2.9cm 回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・礫・雲母を含みやや粗土 口縁部に油煤付着
14	土坑8	鞆 羽口	胎土は橙色～灰褐色、砂粒・海綿骨針・赤色粒子・雲母を含む粗土 断面の一边が磨耗
15	土坑8	台石	長10.6cm 幅8.6cm 厚3.5cm 灰色 扁平な楕円型 両面とも中央が滑らかに磨耗 図9-3と同様のもの
16	II面 P.77	土師器皿 R種 大型	口径(11.9)cm 底径(7.5)cm 器高2.9cm 右回転ロクロ 底面糸切り 板状圧痕あり、内底部ナデ 胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・礫を含む
17	II面 P.112	土師器皿 R種 中型	口径(10.5)cm 底径(8.0)cm 回転ロクロ 底面糸切り 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・礫・雲母を含み 口縁部から外側にかけて油煤付着
18	II面 P.124	鞆 羽口	胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・雲母を含みやや粗土 外側に厚く鉄滓溶着

表2 出土遺物観察表(2)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図15-1	Ⅲ面包含層	土師器皿 R種 小型	口径5.0cm 底径5.2cm 器高1.3cm 回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・雲母を含む
2	Ⅲ面包含層	土師器皿 R種 小型	口径4.5cm 底径3.8cm 器高1.5cm 回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・雲母・礫を含む粗土 耳皿(側面二か所内側につぶす)
3	Ⅲ面包含層	土師器皿 R種 小型	口径(6.6)cm 底径(5.8)cm 器高2.1cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色、多量の砂粒・雲母・赤色粒子・海綿骨芯を含む砂質土
4	Ⅲ面包含層	土師器皿 R種 中型	口径8.6cm 底径5.5cm 器高2.5cm 回転ロクロ 底面糸切り、薄く板状圧痕あり 内底部ナデ 胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・礫を含む弱砂質土粗土 口縁部を半月型に打ち欠く
5	Ⅲ面包含層	土師器皿 R種 中型	口径(10.0)cm 底径(6.4)cm 器高3.1cm 回転ロクロ 底面糸切り 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・礫を含む弱砂質土粗土 口縁部から内側にかけて厚く油煤附着
6	Ⅲ面包含層	土師器皿 R種 大型	口径(11.4)cm 底径(8.0)cm 器高3.3cm 回転ロクロ 底面糸切り 胎土は淡橙色、多量の砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・礫・雲母・泥岩粒を含む粗土
7	Ⅲ面包含層	土師器皿 R種 大型	口径(10.9)cm 底径(6.7)cm 器高3.0cm 回転ロクロ 底面糸切り スノコ痕あり 内底面ナデ 胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・礫を含む粗土
8	Ⅲ面包含層	伊勢系 鏝鍋	口径(22)cm 胎土は淡橙色、胎芯暗灰色 微砂・赤色粒子・雲母含み、硬く焼き締まる 口縁部下に径0.4cmの小孔貫通 鏝下面～胴部外側に煤附着
9	Ⅲ面包含層	輪 羽口	胎土は橙色～灰橙色、砂粒・赤色粒子を含むやや粗土 外側に厚く鉍滓溶着
10	Ⅲ面包含層	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片 胎土は橙色、砂粒・長石粒・石英粒多く含む 内側下位は使用により磨耗
11	Ⅲ面包含層	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片 胎土は橙色、砂粒・長石粒・石英粒含む
12	Ⅲ面包含層	白磁 皿	底部片 3.8cm ロクロ成形 削り出し高台 胎土は灰白色、緻密 釉は淡い水色、不透明で内側と外側高台外1cm位まで掛る 15世紀後半の舶載品か
13	Ⅲ面包含層	石皿	遺存長(12.0)cm 遺存幅(9.8)cm 最大厚(6.6)cm 灰色 内側は滑らかな凸面をす
図16-1	Ⅲ面 P.90	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片 胎土は橙色、器表は茶色 砂粒・長石粒・礫含む
2	Ⅲ面 P.91	淳化元寶	初鑄990年 北宋 楷書
3	Ⅲ面 P.93	瀬戸 緑釉小皿	口縁部片 ロクロ成形 胎土は黄灰色 口縁部内側に灰釉掛る
4	Ⅲ面 P.93	瀬戸 緑釉小皿	口径(9.6)cm 底径(4.5)cm 器高2.5cm ロクロ成形 外底面糸切 胎土は灰黄色、砂粒・礫含みや粗い 口縁部内側に灰釉掛る 内底面は滑らかに磨耗 外面も磨耗しており釉薬が剥落した可能性もある
5	Ⅲ面 P.94	輪 羽口	胎土は橙色～灰色、砂粒・赤色粒子・礫を含む粗土 外側に鉍滓溶着
6	Ⅲ面 P.95	土師器皿 R種 小型	口径(5.7)cm 底径(5.0)cm 器高1.7cm 回転ロクロ 底面糸切り 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・雲母を含み、やや粗土
7	Ⅲ面 P.95	瀬戸 緑釉小皿	口縁部片 ロクロ成形 胎土は黄灰色 口縁部に灰釉掛る
図18-1	Ⅳ面包含層	土師器皿 R種 小型	口径(5.9)cm 底径4.7cm 器高1.7cm 回転ロクロ 底面糸切り 板状圧痕あり 内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・雲母含む
2	Ⅳ面包含層	土師器皿 R種 小型	口径6.2cm 底径4.0cm 器高2.1cm 回転ロクロ 底面糸切り、板状圧痕あり 内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・泥岩粒を含む 口縁部に油煤附着
3	Ⅳ面包含層	土師器皿 R種 小型	口径(7.9)cm 底径(6.6)cm 器高2.5cm 回転ロクロ 底面糸切り、板状圧痕あり 内底部ナデ 胎土は黄灰色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・泥岩粒を含む粗土
4	Ⅳ面包含層	土師器皿 R種 中型	口径(8.6)cm 底径6.4cm 器高3.1cm 回転ロクロ 底面糸切り 内底面ナデ 胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯を含む
5	Ⅳ面包含層	土師器皿 R種 小型	口径(5.8)cm 底径(4.7)cm 器高1.8cm 回転ロクロ 内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯を含む
6	Ⅳ面包含層	土師器皿 R種 小型	口径(6.0)cm 底径(4.0)cm 器高2.2cm 回転ロクロ 胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・泥岩粒を含む
7	Ⅳ面包含層	土師器皿 R種 小型	口径(7.2)cm 底径(4.5)cm 器高2.5cm 回転ロクロ 底面糸切、薄く板状圧痕あり 胎土は橙色、赤色粒子・海綿骨芯少し含む
8	Ⅳ面包含層	土師器皿 R種 中型	口径5.1cm 底径4.9cm 器高1.4cm 回転ロクロ 底面糸切、板状圧痕あり 内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・海綿骨芯・雲母含む
9	Ⅳ面包含層	土師器皿 R種 中型	口径(9.5)cm 底径6.2cm 器高2.6cm 回転ロクロ 底面糸切、内底部ナデ 胎土は灰黄色、砂粒・海綿骨芯・雲母含む
10	Ⅳ面包含層	伊勢系 鏝鍋	口径(21.0)cm 胎土は灰黄色 少量の雲母含み、硬く焼き締まる 口縁部下に径0.6cmの小孔貫通 鏝下面～胴部外側に煤附着
11	Ⅳ面包含層	輪 羽口	胎土は淡橙色、砂粒・白色子を含むやや粗土 外側に鉍滓溶着
12	Ⅳ面包含層	輪 羽口	胎土は淡橙色～灰橙色、砂粒・赤色粒子を含むやや粗土 外側に厚く鉍滓溶着
13	Ⅳ面包含層	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片 胎土は淡橙色、砂粒・白色粒・雲母含みや砂質
14	Ⅳ面包含層	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片 胎土は橙色、器表は茶色 砂粒・長石粒・礫含む 図10-1と同一個体か?
15	Ⅳ面包含層	瀬戸 緑釉小皿	口縁部片 口径(9.9)cm ロクロ成形 胎土は黄灰色 口縁部に灰釉掛る
16	Ⅳ面包含層	不明石製品	長5.6cm 幅4.5cm 厚1.1cm 赤間ヶ石 製作途中のものか
17	Ⅳ面包含層	筥状木製品	遺存長(9.2)cm 幅1.15cm 厚0.2cm 漆附着
18	Ⅳ面包含層	不明木製品	遺存長(9.3)cm 最大幅(1.9)cm 厚0.3cm
19	Ⅳ面包含層	円盤状木製品	遺存長(10.5)cm 遺存幅(2.0)cm 厚0.3cm
20	Ⅳ面包含層	加工骨	遺存長(5.8)cm 最大幅6.4cm 最大厚3.7cm 大型獣(馬か?)四肢骨の関節部分 突部が磨耗
図19-1	溝2	土師器皿 R種 小型	口径5.2cm 底径4.6cm 器高1.8cm 回転ロクロ 底面糸切、内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・雲母含む
2	溝2	土師器皿 R種 小型	口径5.2cm 底径4.6cm 器高1.8cm 回転ロクロ 底面糸切、内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・雲母含む
3	溝2	土師器皿 R種 小型	口径5.7cm 底径5.4cm 器高1.6cm 回転ロクロ 底面糸切、内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・灰黒色ブロック・海綿骨芯・雲母含む
4	溝2	土師器皿 R種 小型	口径6.5cm 底径4.1cm 器高2.2cm 回転ロクロ 底面糸切、内底部ナデ 胎土は淡橙色 全体が黒っぽく炭化し、内側には厚く黒灰色の物質が付着する 口唇部は平らに削られ、側面の一部は故意に打ち欠かれる
5	溝2	土師器皿 R種 小型	口径7.2cm 底径4.7cm 器高2.0cm 回転ロクロ 底面糸切 板状圧痕あり、内底部ナデ 胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・雲母含む 口縁部を一か所小さく打ち欠く

表3 出土遺物観察表(3)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
6	溝2	土師器皿 R種 中型	口径(8.8)cm 底径(6.8)cm 器高2.6cm 回転ロクロ 底面糸切 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・雲母・気孔含む 口縁部を一小所小さく打ち欠く
7	溝2	土師器皿 R種 中型	口径(9.8)cm 底径5.8cm 器高2.9cm 回転ロクロ 底面糸切 内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・雲母含む
8	溝2	土師器皿 R種 中型	口径9.4cm 底径6.7cm 器高2.8cm 回転ロクロ 底面糸切 内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・泥岩粒・雲母含むやや粗土
9	溝2	土師器皿 R種 中型	口径9.5cm 底径6.7cm 器高3.5cm 回転ロクロ 底面糸切 内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・泥岩粒・雲母含む
10	溝2	土師器皿 R種 中型	口径9.8cm 底径7.4cm 器高3.4cm 回転ロクロ 底面糸切 内底部ナデ 胎土は灰黄色、砂粒・海綿骨芯・気孔含む
11	溝2	土師器皿 R種 大型	口径(11.8)cm 底径7.7cm 器高3.7cm 回転ロクロ 底面糸切 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・砂粒・海綿骨芯・気孔含む
12	溝2	土師器皿 R種 大型	口径(10.3)cm 底径7.8cm 器高(3.8)cm 回転ロクロ 底面糸切 薄く板状圧痕あり 内底部ナデ 胎土は橙色、赤色粒子・砂粒・海綿骨芯含む 全体に灰褐色を帯びる 内底部に漆と思われる黒色物質が付着する 口縁部は平らに削られている
13	溝2	土師器皿 R種 大型	口径(11.8)cm 底径(7.7)cm 器高3.7cm 回転ロクロ 底面糸切 内底部ナデ 胎土は橙色、赤色粒子・砂粒・海綿骨芯・雲母含む
14	溝2	内耳土鍋	内耳部分は不明 口縁部から体部片 復元口径(32.3)cm 胎土は淡橙色、砂粒・白色粒子・雲母含む 内側は灰色を帯び、外側は煤付着 体部外面指頭痕
図20-15	溝2	輪 羽口	胎土は淡橙色～橙色、砂粒・赤色粒子・気孔を含むやや粗土 外側に鈎滓溶着
16	溝2	瓦器 香炉	口径12.8cm 底径10.0cm 体部器高4.9cm 三カ所に脚貼付 胎土は灰褐色、砂粒・白色粒子・黒色粒子・雲母含む 器表は灰色を呈す 胴部外側は雷文・矩形の中に違菱文の押印が二層に巡る
17	溝2	常滑 甕	口縁部片 胎土は灰赤褐色、長石・石英粒を含む 口縁部上面は磨耗
18	溝2	常滑 甕	胴部片 胎土は灰色、長石・砂粒を含む 器表は茶色 外側に矩形枠内に不明文様の叩き目あり
19	溝2	常滑 片口鉢Ⅱ類	底部片 底径(12.0)cm 胎土は赤褐色、長石・石英・砂粒を含む 内側下位は使用により磨耗
20	溝2	瀬戸美濃 搦鉢	底部片 底径(10.8)cm 胎土は淡橙色、比較的精良 内外とも底面も含めて茶褐色の釉掛る 条線は11本
21	溝2	瀬戸美濃 搦鉢	底部片 底径(9.5)cm 外底部回転糸切り 胎土は黄灰色、気孔含む 内外とも底面も含めて暗茶褐色の釉掛る 条線は9本 内面は使用により激しく磨耗し、条線や釉ガ一部失われている
22	溝2	瀬戸美濃 搦鉢	胴部片 胎土は黄灰色、やや砂質で気孔含む 内外面とも暗茶褐色の釉掛る 条線は10本 内面下位は使用によりやや磨耗、条線や釉ガ一部失われている 大窯第1段階あたりか
23	溝2	磨耗陶片	常滑甕胴部片使用 縦6.5cm 横4.1cm 厚さ1.3cm 胎土は灰色、長石・砂粒含む 断面の3辺顕著に磨耗、1辺はやや磨耗
24	溝2	磨耗陶片	瀬戸美濃胴部片使用 縦8.8cm 横8.5cm 厚さ0.8cm 胎土は灰色、白色粒子・灰黒色ブロック含む 器の表面と断面の4辺に磨耗いた部分がある
25	溝2	瀬戸 緑釉小皿	口径(10.8)cm 底径5.4cm 器高2.6cm ロクロ成形 回転糸切 胎土は黄灰色、堅緻 口縁部に灰釉掛る はさみ皿? 内底面は滑らかに磨耗する
26	溝2	砥石 荒砥	遺存長(5.5)cm 遺存幅(5.3)cm 最大厚(5.0)cm 灰色 砥面2面残存 元は蒲鋒形の製品か 紀州大村
27	溝2	棒状木製品	長13.1cm 幅0.9cm 厚0.6cm 一端が尖る 漆状黒色物質付着
図21-1	溝4	瀬戸美濃 搦鉢	口縁部片 胎土は黄灰色、やや砂質 内外面とも茶褐色の釉掛る 大窯第3段階
2	溝4	青花小皿	口縁部片 口径(10.0)cm 胎土は灰白色、堅緻 透明釉の下に藍色の模様を描かれている 漳州窯か
3	溝4	備前 搦鉢	底部片 胎土は灰色、白色粒子・灰黒色粒子含む、堅く焼き締まる 内面及び外側の一部、断面の一部が滑らかに磨耗 条線は7本
4	溝4	産地不明 陶器大皿	口径(26.0)cm 胎土は灰色、精良 器表は茶褐色 焼締陶器
5	溝5	土師器皿 R種 小型	口径8.4cm 底径6.5cm 器高2.1cm 回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は黄灰色、微砂粒・赤色粒子・海綿骨針・礫を含む
6	溝5	土師器皿 R種 小型	口径8.3cm 底径6.6cm 器高2.5cm 回転ロクロ 底面糸切り 薄く板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄灰色、砂粒・黒色粒子・海綿骨針・雲母・礫を含む
7	溝5	土師器皿 R種 中型	口径9.7cm 底径7.8cm 器高3.4cm 回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は黄灰色、砂粒・黒色粒子・海綿骨針・雲母・礫を含む 口縁部の一部を打ち欠く
8	溝5	土師器皿 R種 大型	口径(10.8)cm 底径(7.5)cm 器高2.7cm 回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・海綿骨針・雲母を含む 口縁部の一部を小さく打ち欠く 二次焼成により全体が灰黒色を呈し、内面にはさらにタール状の付着物あり
9	溝5	木地皿	口径(10.6)cm 底径8.4cm 器高2.0cm 輪高台 轆轤目がよくでている
10	溝5	使用痕ある 石片	遺存長(13.8)cm 遺存幅(9.6)cm 厚6.1cm 灰色 扁平な丸石の一部と思われる 平らな二面には滑らになった部分がある 砥石の可能性もある
図22-1	遺構外出土	土師器皿 R種 小型	口径(7.8)cm 底径(6.7)cm 器高2.0cm 回転ロクロ 底面糸切り 胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母・泥岩粒礫を含む砂質土
2	遺構外出土	瀬戸 直縁大皿	底部片 底径(12.0)cm ロクロ成形 胎土は黄灰色、砂粒・白色粒を含む 外側下位、内側は中位まで灰釉漬け掛け 内底面はやや滑らかに磨耗 外底部回転へら削り
3	遺構外出土	常滑 片口鉢Ⅱ類	底部片 底径(8.6)cm 胎土は赤褐色、長石・石英・砂粒を含む 内面は良く使い込まれて滑らかである
4	遺構外出土	磨耗陶片	常滑甕胴部片使用 縦7.5cm 横3.0cm 厚さ1.8cm 器表面は暗赤褐色 胎土は赤褐色 長石片・石英片・小石片含む 1面がよく使い込まれて磨耗している 長軸が元は横位である
5	遺構外出土	伊万里 仏華瓶	胴部～底部片 素地は灰白色、堅緻 外側は底部近くまで淡い水色を帯びた不透明の釉が掛る
6	遺構外出土	舶載 施釉陶器碗	底部片 底径(5.7)cm ロクロ成形 胎土は黄灰色、白っぽい粘土の大き目のブロック含む 高台の豊付き部分は破損 外側は青い絵付けのうえにたまご色の釉を施す 内底面は無釉、滑らかに磨耗 中国を含む南方産
7	遺構外出土	不明鉄製品	残存長(3.5)cm 最大幅2.8cm 厚さ0.25cm
8	遺構外出土	開元通寶	初鑄621年 唐 楷書 背文上月
9	遺構外出土	錢種不明	磨耗により
10	遺構外出土	錢種不明	欠損により
11	遺構外出土	砥石 中砥	残存長(3.9)cm 幅3.0cm 厚0.8cm 淡緑灰色 砥面2面 上野産

表4 出土遺物計量表

		I 面		I 面～II 面上層		II 面下層		III 面		IV 面		調査区全体		
古代以前	土師器	2	1.53%	0	0.00%	1	0.66%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.35%	
	石皿	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.39%	0	0.00%	1	0.12%	
	台石	1	0.76%	0	0.00%	1	0.66%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.23%	
土器	土師器皿	R 種	96	73.28%	22	68.75%	113	74.34%	167	64.48%	132	61.97%	574	67.21%
	土器質	土鍋	0	0.00%	0	0.00%	2	1.32%	1	0.39%	0	0.00%	3	0.35%
		風呂	0	0.00%	1	3.13%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%
		内耳土鍋	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.47%	1	0.12%
		焙烙	1	0.76%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%
	伊勢系	鏝鍋	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.39%	1	0.47%	2	0.23%
瓦質土器	香炉	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.47%	1	0.12%	
土製品	韃羽口	7	5.34%	0	0.00%	8	5.26%	32	12.36%	3	1.41%	57	6.67%	
国産陶器	常滑	甕	3	2.29%	2	6.25%	5	3.29%	8	3.09%	18	8.45%	37	4.33%
		II 類片口鉢	2	1.53%	0	0.00%	0	0.00%	4	1.54%	3	1.41%	10	1.17%
		摩耗陶片(甕)	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.47%	2	0.23%
		大皿	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.47%	1	0.12%
	瀬戸	口広有耳壺	0	0.00%	0	0.00%	1	0.66%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%
		大平鉢	0	0.00%	1	3.13%	0	0.00%	1	0.39%	0	0.00%	3	0.35%
		縁袖小皿	0	0.00%	1	3.13%	0	0.00%	3	1.16%	2	0.94%	7	0.82%
		瀬戸美濃碗	0	0.00%	1	3.13%	1	0.66%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.23%
		瀬戸美濃皿	2	1.53%	2	6.25%	3	1.97%	0	0.00%	0	0.00%	7	0.82%
		瀬戸美濃丸皿	0	0.00%	1	3.13%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%
		瀬戸美濃播鉢	0	0.00%	0	0.00%	1	0.66%	0	0.00%	5	2.35%	7	0.82%
		魚形皿	1	0.76%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%
	渥美	甕	0	0.00%	1	3.13%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%
		摩耗陶片(甕)	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.47%	1	0.12%
備前	播鉢	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.47%	1	0.12%	
舶載	青磁碗類	同安窯系	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.47%	1	0.12%
		竜泉窯系	0	0.00%	0	0.00%	1	0.66%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%
	白磁	皿	1	0.76%	0	0.00%	1	0.66%	1	0.39%	0	0.00%	3	0.35%
	その他	青花皿	1	0.76%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.47%	2	0.23%
施釉陶器碗		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%	
鋳滓	鉄滓	6	4.58%	0	0.00%	5	3.29%	32	12.36%	0	0.00%	45	5.27%	
金属製品	銭	中国銅銭	0	0.00%	0	0.00%	1	0.66%	1	0.39%	0	0.00%	3	0.35%
		不明	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.23%
	鉄	釘	1	0.76%	0	0.00%	2	1.32%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.35%
		刀子	1	0.76%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%
		不明鉄製品	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%
石製品	砥石	鳴滝	0	0.00%	0	0.00%	1	0.66%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%
		上野	0	0.00%	0	0.00%	1	0.66%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.23%
		紀州大村	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.47%	1	0.12%
		その他	1	0.76%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%
	その他	使用痕ある石	1	0.76%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.47%	2	0.23%
		不明(赤間石)	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.47%	1	0.12%
不明	1	0.76%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%		
石材・石	石材	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%	
	焼土丹	1	0.76%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%	
	玉石	1	0.76%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%	
	石	1	0.76%	0	0.00%	2	1.32%	4	1.54%	3	1.41%	10	1.17%	
	軽石	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.39%	0	0.00%	1	0.12%	
	礎石?	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.47%	1	0.12%	
木製品	漆器以外 木製品	箸(両口)	0	0.00%	0	0.00%	1	0.66%	0	0.00%	1	0.47%	2	0.23%
		皿	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.47%	1	0.12%
		串状木製品	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.47%	1	0.12%
		棒状木製品	0	0.00%	0	0.00%	1	0.66%	0	0.00%	2	0.94%	3	0.35%
		籠状木製品	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.47%	1	0.12%
		円盤状木製品	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.47%	1	0.12%
		不明木製品	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	4	1.88%	4	0.47%
骨角製品	加工骨	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.47%	1	0.12%	
木材	不明	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.47%	1	0.12%	
自然遺物	木	丸木	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	15	7.04%	15	1.76%
		竹片	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.94%	2	0.23%
		木片	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.47%	1	0.12%
	骨	獣骨	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.39%	2	0.94%	3	0.35%
不明骨片		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.39%	1	0.47%	2	0.23%	
近世	伊万里仏華瓶	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%	
合計		131	100%	32	100%	152	100%	259	100%	213	100%	854	100%	

表5 出土遺物産地別構成比

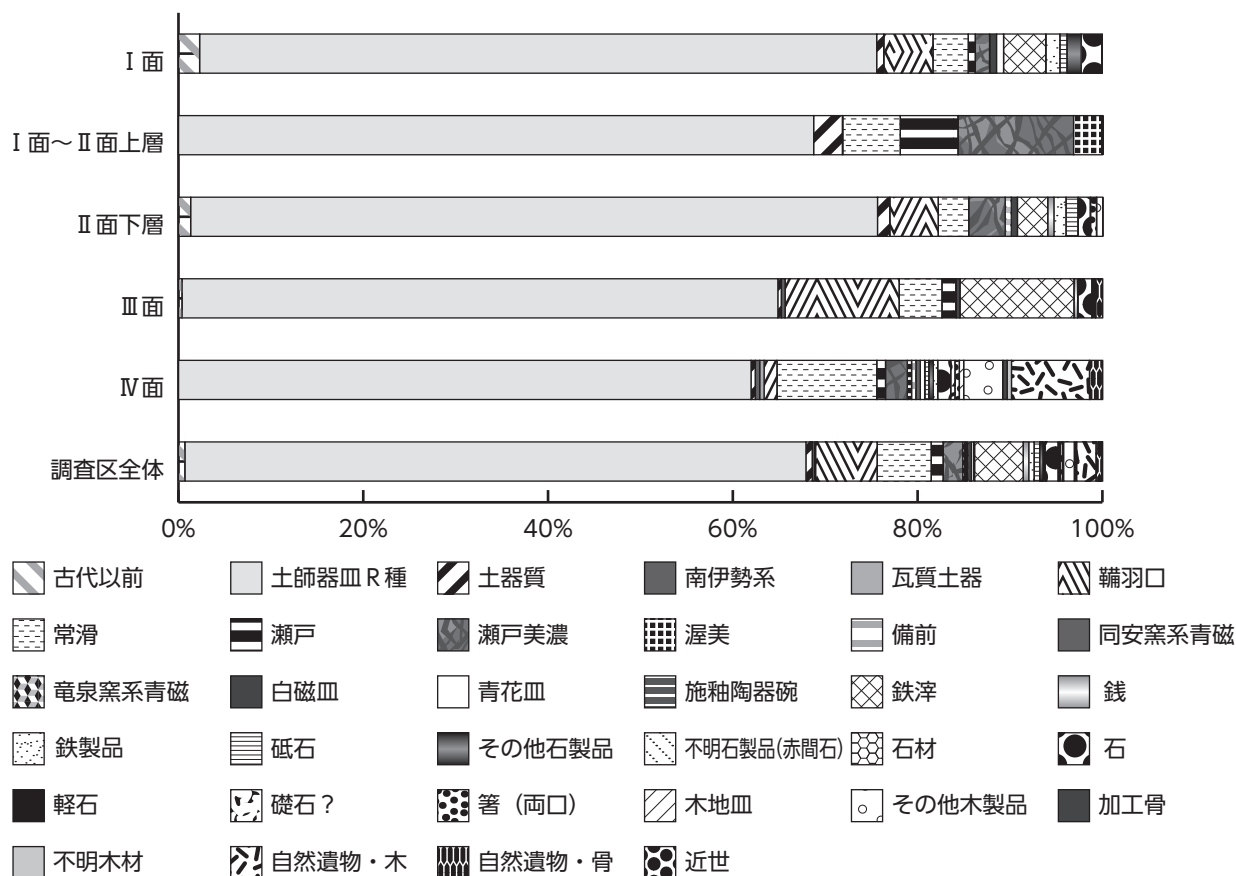


表6 韃羽口面毎出土比

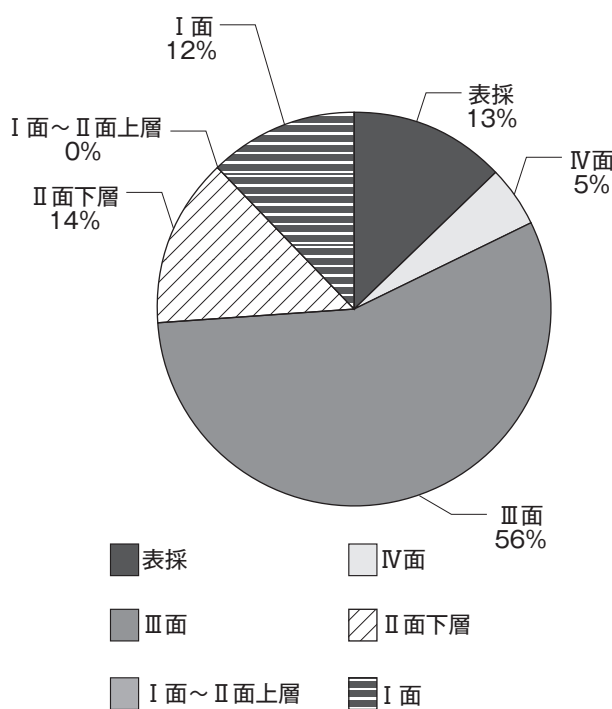
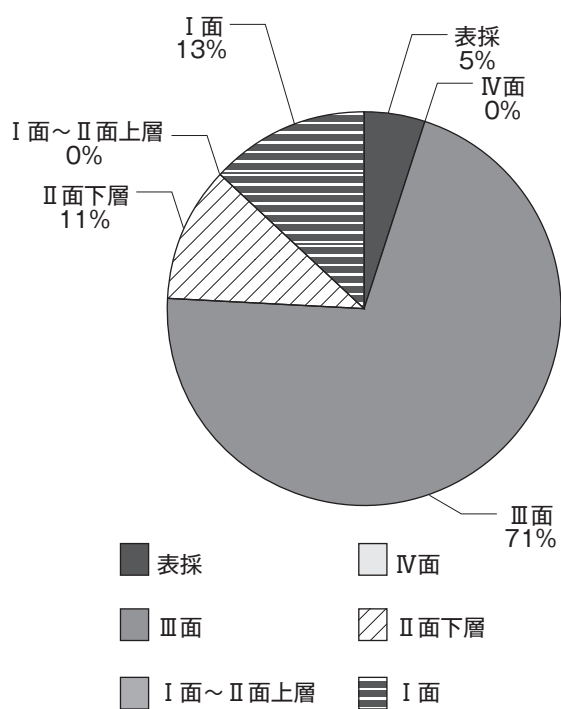


表7 鉄滓面毎出土比



第四章 まとめと考察

1. 遺構の変遷と年代

1期

Ⅳ面が相当する。幅2.40 m、深さ0.85の断面逆台形をした中型溝(溝2)が山裾に走行し、平行した3本の中型溝(溝1・4・5)がそれに流れ込むように南北に通じる。該期の遺構としては、溝以外に少数の穴があるが、連結して掘立柱建物を形成するには至らなかった。

溝出土遺物からみて本期の年代は、15世紀代のものを含みつつ、溝4から大窯第3段階の播鉢が出土していることから、16世紀後半まで存続していたものと思われる。下層遺構が存在しないため、正確な溝構築年代は不明だが、溝2の土層断面からも数度の掘り直しが認められ、一定の存続期間が考えられる。ほぼ後北条期全体に及ぶものと考えたい。

溝2と1・4・5は直交していないが、少なくとも溝1・4は溝2を超えて北には現われず、三者が同時存在であることを示している。溝2と同規模の溝は隣地の植木字植谷戸78-2ほか地点の調査(2000年度調査、未報告)でも検出されているが、両者は10 m強しか離れていないにもかかわらず、両溝の角度が大きく異なっているため、連続しているかどうかは不明である。山裾に沿ってつながっていた可能性も否定できない。

溝1・4・5に関しては、上述植谷戸78-2地点の溝とは直交する方位にあり、さらにその東の同地点2次調査(2001年度調査、未報告)検出の幅4 m近い大溝とは平行位置にある。後者と本地点とは30数mの距離があるが、玉縄城城下の区画のあり方を示している可能性がある。幅4 m近くの大溝から西の谷尻までは約130mの距離があり、この間に設けられた区画溝が本地点に現れたのかもしれない。ただ、先述したように本期の存続期間が長期に及ぶ可能性もあり、これらの溝が同時に存在したかどうかは不明である。

図19-14内耳土鍋は市内でもまだ数点の出土例にとどまっており、貴重な資料といえる。

2期

Ⅲ面が相当する。1区を中心に、建物1棟(建物1)・L字柱穴列1列を含む小穴81穴が検出された。2区ではこの面はⅡ面下層と結びつき、面そのものの検出がなかった。あるいはⅡ面下層の初期の一群と捉えることもできるが、破碎泥岩を敷いた面の下に存在するので、基本的には連続性よりも断絶を認めるべきであろう。柱穴列も建物の一部をなす可能性があるが、調査区内のみでは確認できなかった。また小穴の数からみてさらに1~2棟の建物の存在が予想されるものの、検討の限りでかなわなかった。建物1は主軸方位を下層の南北溝とほぼ同じくしているが、柱穴列は主軸方位を大きく異にしており、時代的な変遷を窺わせる。また、鞆羽口と鉄滓の出土が本期に集中することからも、当地点の土地利用が変わった可能性がある。

出土遺物から年代を考えてみると、15世紀末~16世紀初めの要素も含まれている点(図16-1・3・4)に、下層の16世紀後半までの存続という遺物年代と齟齬がある。しかし、層位的に考えて、16世紀末葉以降と考えたい。

3期

Ⅱ面下層が相当する。部分的に泥岩による生活面をとどめ、柱穴らしき小穴もかなり検出できるが、建物等の明瞭な遺構像を結ぶわけではない。出土遺物は15世紀後半から16世紀前葉(図13-3~5)のものを含まれ、中には15世紀初頭前後(図13-7)のものもあるが、これも層位的にみて16世紀末葉

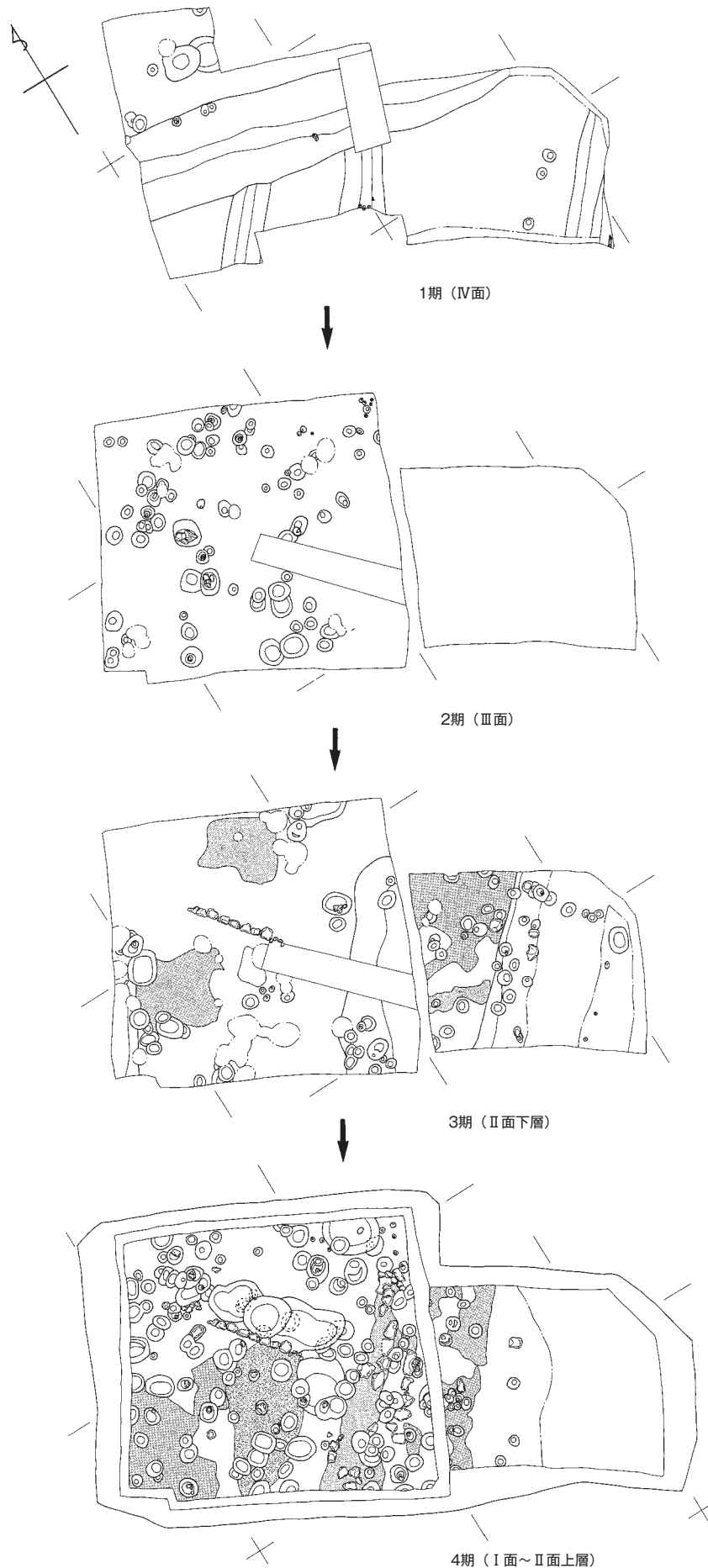


図23 遺構変遷図

以降と考えたい

4期

I面～II面上層が相当する。1区を中心に柱穴列9列を含む小穴154穴・土坑5基が検出された。柱穴列9列は相互に関連性を見出すことができなかつたが、ほぼ直交する関係にあり、建物の建て替えが複数回行われた可能性を指摘できる。この柱穴列の主軸方位は1期の溝群とは全く異なっており、1期とは性格が変わっていることが考えられる。

出土遺物には15世紀初頭前後のもの(図8-5)から15世紀後半のもの(図8-9)が含まれているが、17世紀前半代のもの(図8-10)が出土していることから、当期は17世紀前半以降とみることができよう。

2. まとめ

1期の溝について

1期の溝2は人為的に埋められ、その上層に地形層とも解釈できる盛土が行われている。また、出土遺物からみて、1期は後北条期全般に及ぶ可能性がある。

これらのことから、溝の埋没は城破りに伴う可能性も考えられる。玉縄城の開城は天正十八年(1590)、元和の一国一条令は元和元年(1615)に出されている。城破りが行われているとすれば、天正十八年(1590)から元和元年(1615)年前後にかけてのいずれかの時期に該当すると考えられるが、今回の調査では溝の埋没年代を明確に特定できるような良好な

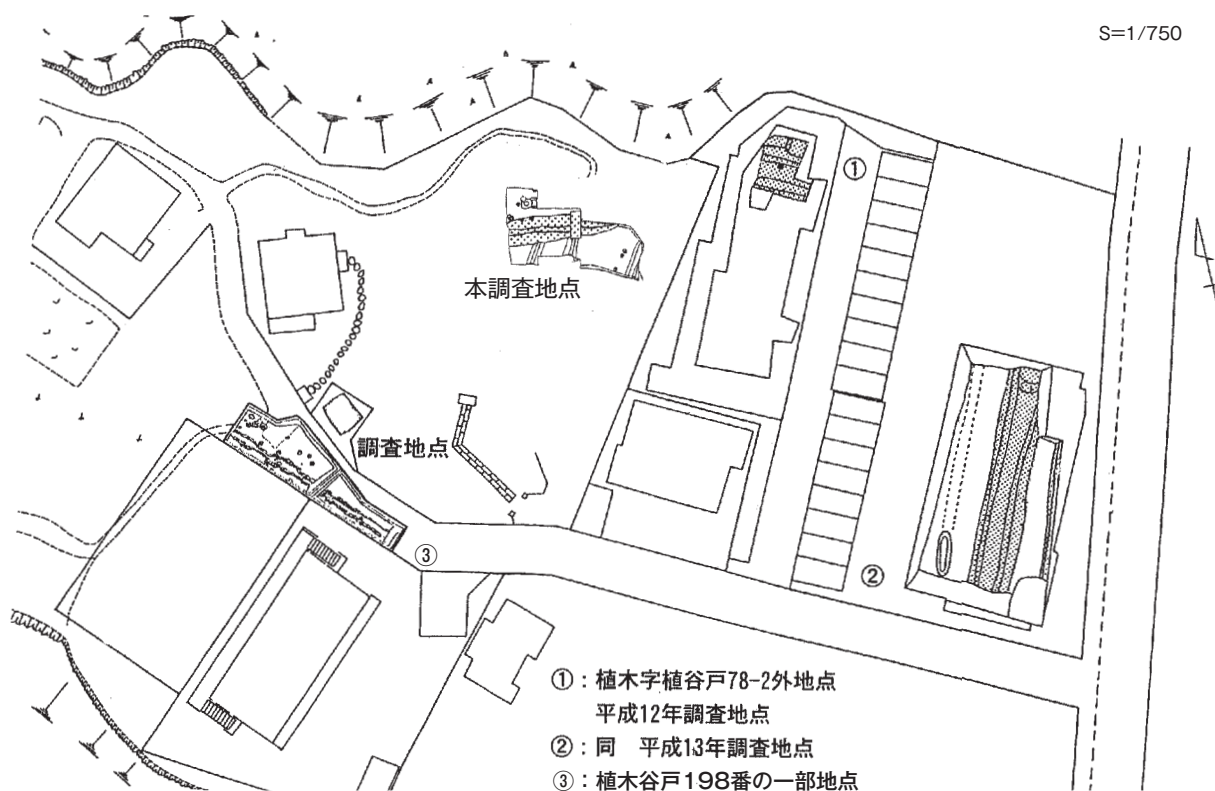


図24 調査地点及び周辺の遺構検出状況
(緊急調査報告20 2004年 継・伊丹 図13を加筆・改変)

資料を得ることができなかった。もっとも、溝を埋めること自体、平坦面を活用するための行為である可能性もあるため、人為的に溝が埋められているからといって城破りであると即断すること自体にも危険性がある。また、2期に鞆羽口と鉄滓の出土が集中することから、1期と2期で本地点の性格が変わったことにより、溝が埋められたことも考えられる。いずれにしろ出土遺物から求められる1期の最終時期が16世紀後半であり、後北条氏期全般に及ぶ可能性があることと、2期以降は徳川家康の関東入部以降である可能性が考えられることを挙げておく。

15世紀代の出土遺物が含まれることについて

一般に玉縄城の築城は永正九年(1512)のこととされている。しかし、「石川忠總留書」(『埼玉県史 資料編』8-6)に明応三年(1494)9月19日、「相州玉縄要害没落」と見え、玉縄城築城以前の15世紀末葉に既になんらかの拠点が存在したことが窺われる。また、中丸和伯氏は、玉縄周辺が「鎌倉時代のはじめからあらゆる点で要地であった」としており(中丸1958)、既に要地として認識されていたがゆえに玉縄の地に築城されたと考えることもできよう。玉縄の要地としての存在を考える上で15世紀代にも注視していく必要がある。

(沖元)

引用・参考文献

中丸和伯 1958「第二篇第三章 後北条時代」『横浜市史 第1巻』



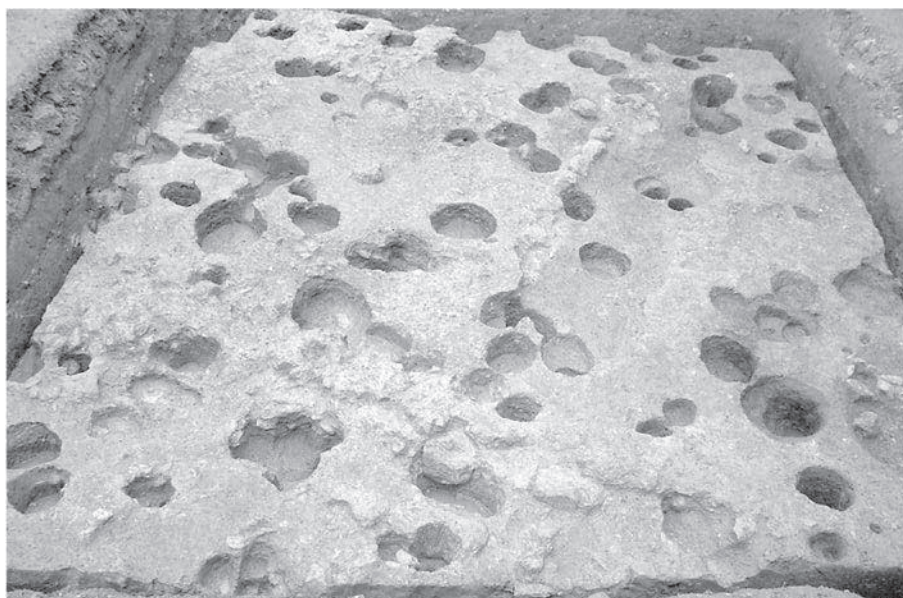
1-1
昭和30年頃の玉縄城（白丸印が本調査地点）

1-2

調査地点遠景（矢印の下、南から）



1-3
本支谷に入る道（調査地点は右手奥）



2-1

1区Ⅱ面上層全景(東から)

2-2

1区Ⅱ面上層全景(南から)



2-3

1区Ⅱ面上層全景(西から)





3-1

1区Ⅱ面上層西南隅 盛り上り部分(北東から)

3-2

2区Ⅱ面上層全景(東から)



3-3

2区Ⅱ面上層全景(南から)





4-1

1区Ⅱ面下層全景(東から)

4-2

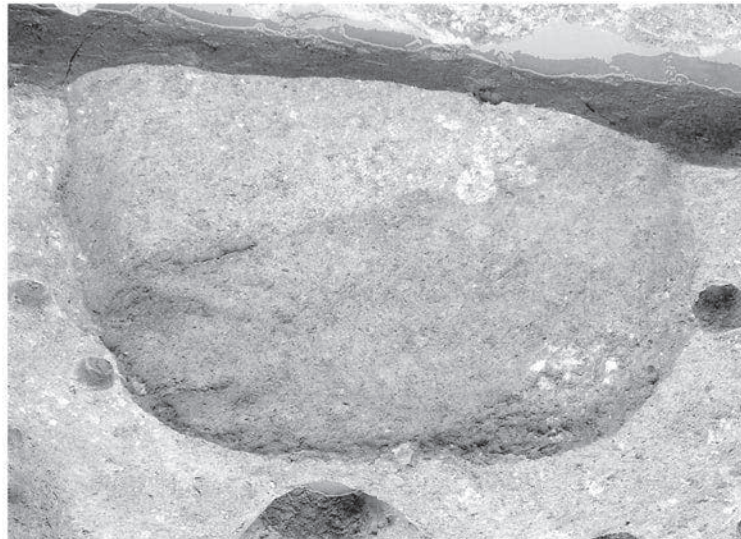
1区Ⅱ面下層全景(南から)



4-3

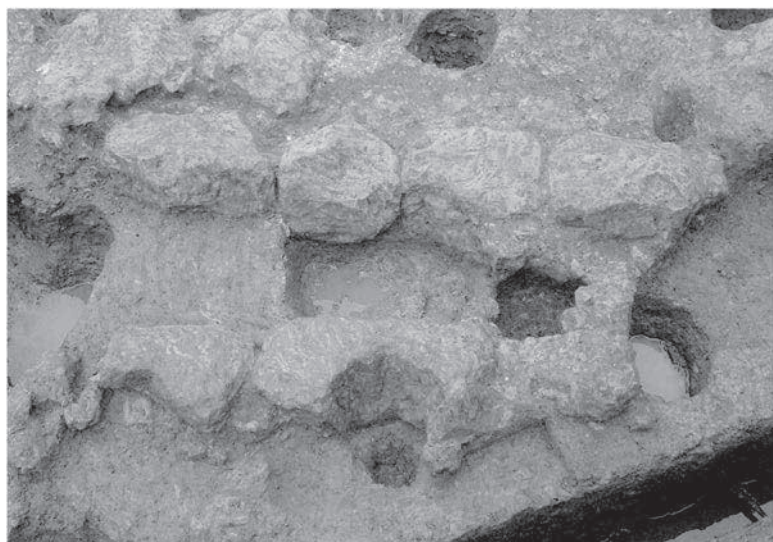
2区Ⅱ面下層全景(北から)





▲ 5-3 1区Ⅱ面上層土坑5 (北から)

◀ 5-1 1区Ⅱ面上層調査区東切石列 (東から)



5-2 1区Ⅱ面上層調査区東切石列
(南から)

5-4 1区Ⅱ面下層中央深掘り土層断面
(南から)





6-1

1区Ⅲ面全景(東から)

6-2

1区Ⅲ面全景(南から)

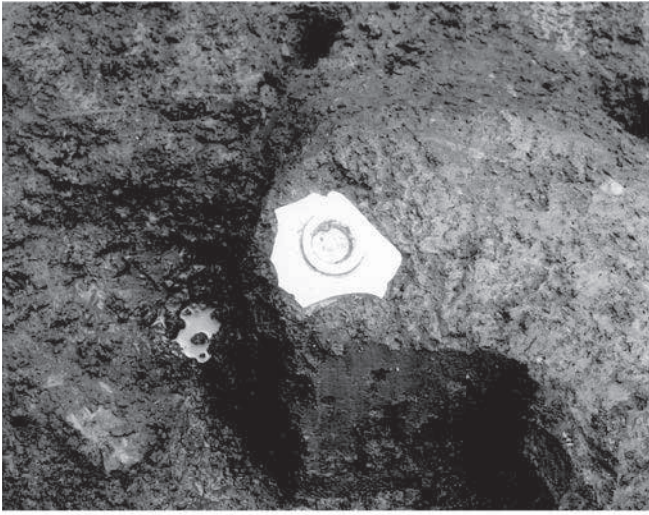


6-3

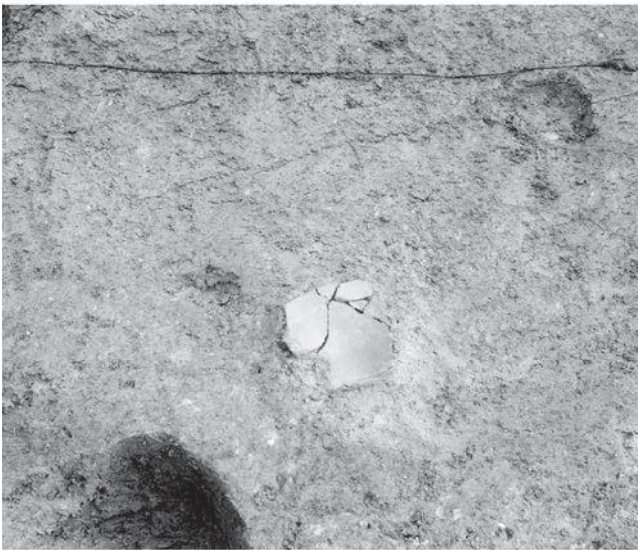
1区Ⅲ面
P.103
土層断面(南から)



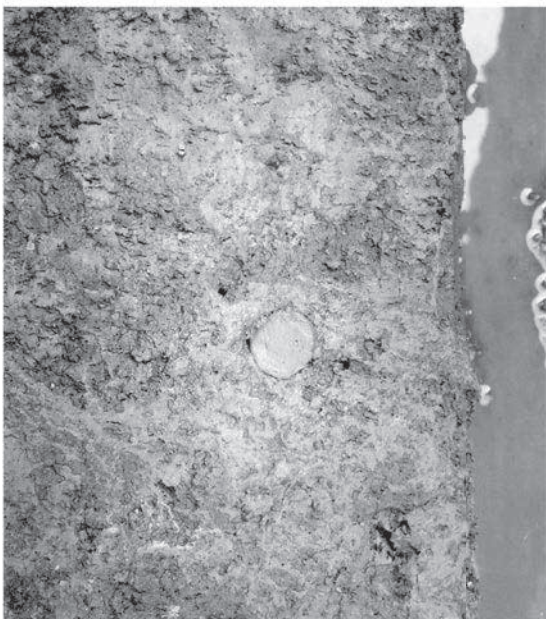
図版7



7-1 2区Ⅲ面下白磁皿(図15-12)出土状況(北から)



7-2 2区Ⅳ面溝2覆土内耳鍋(図19-14)出土状況(北から)



7-3 2区Ⅱ面下土師器皿(図15-4)出土状況(北から)



7-4 1区Ⅳ面全景(南から)



7-5 2区Ⅳ面全景(西から)



8-1

1区IV面溝2(西から)



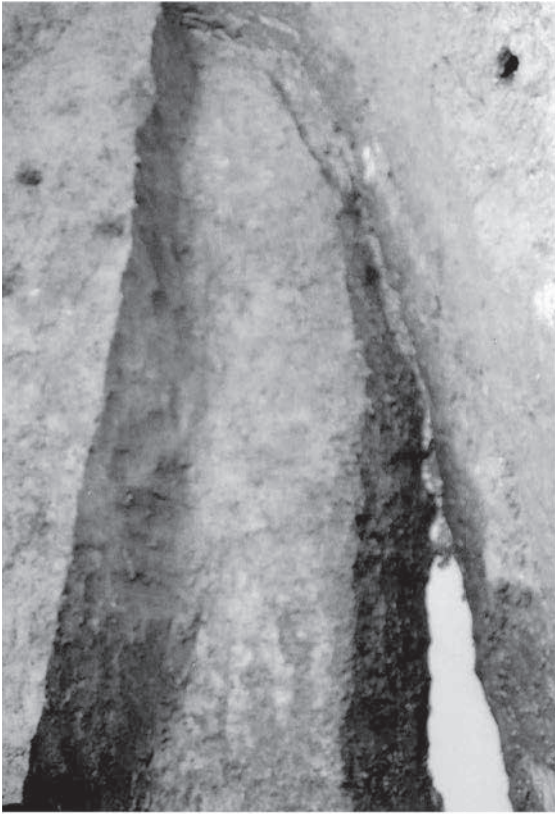
8-2 IV面溝2全景(東から)



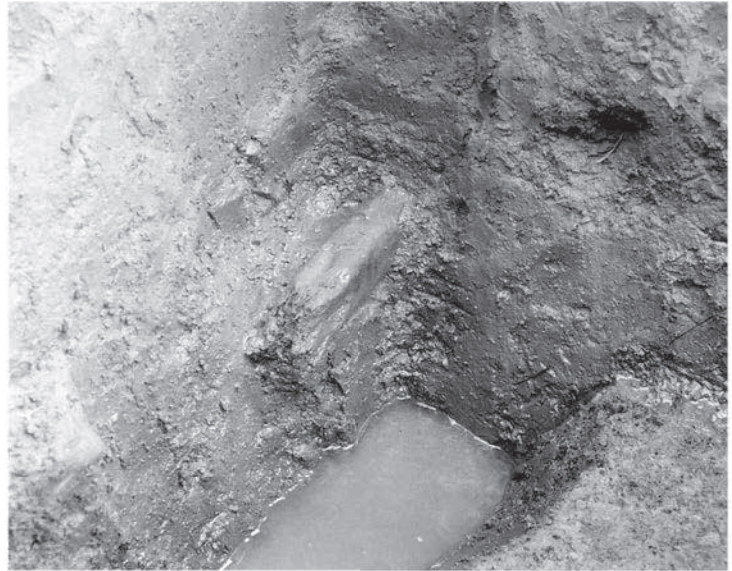
8-3 溝2中央部土層断面(西から)



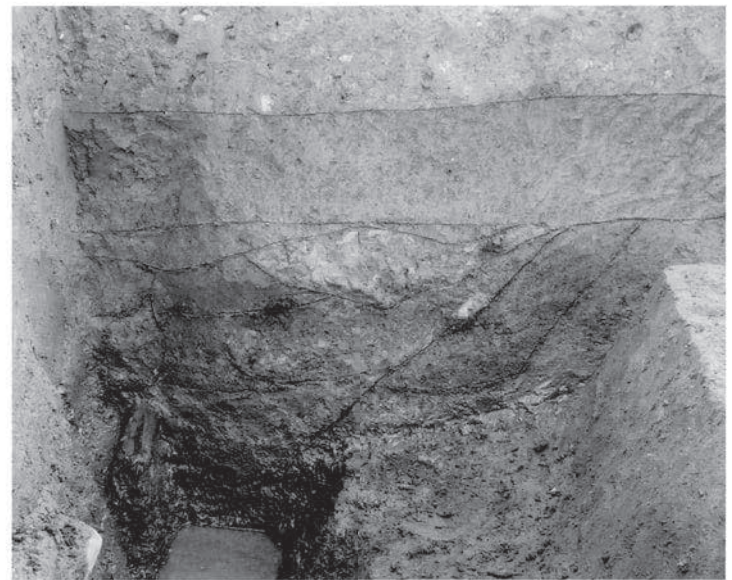
8-4 2区溝2内土師器皿出土状況(東から)



9-1 2区IV面溝4 (南から)



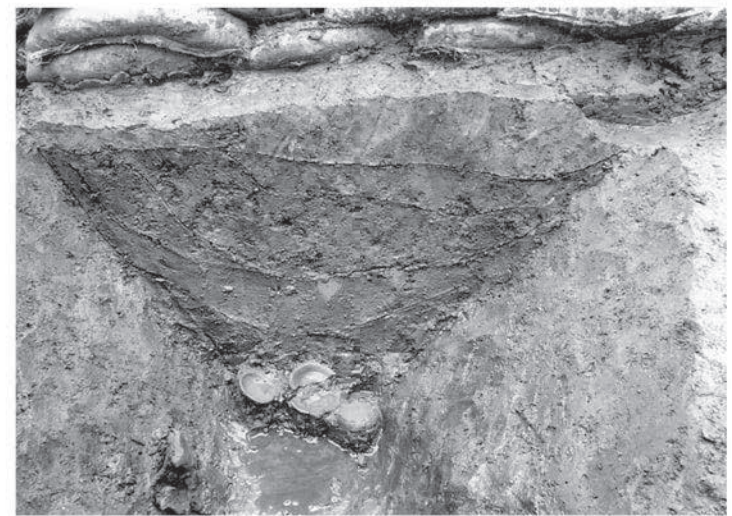
9-2 溝4内角材 (北から)



9-3 溝4南壁土層断面 (北から)



9-4 1区IV面溝5 (北から)



9-5 1区溝5南壁際土層断面 (北から)

10-1

1区IV面溝5内遺物出土状況(北東から)



10-2

1区調査区東壁土層断面(西から)

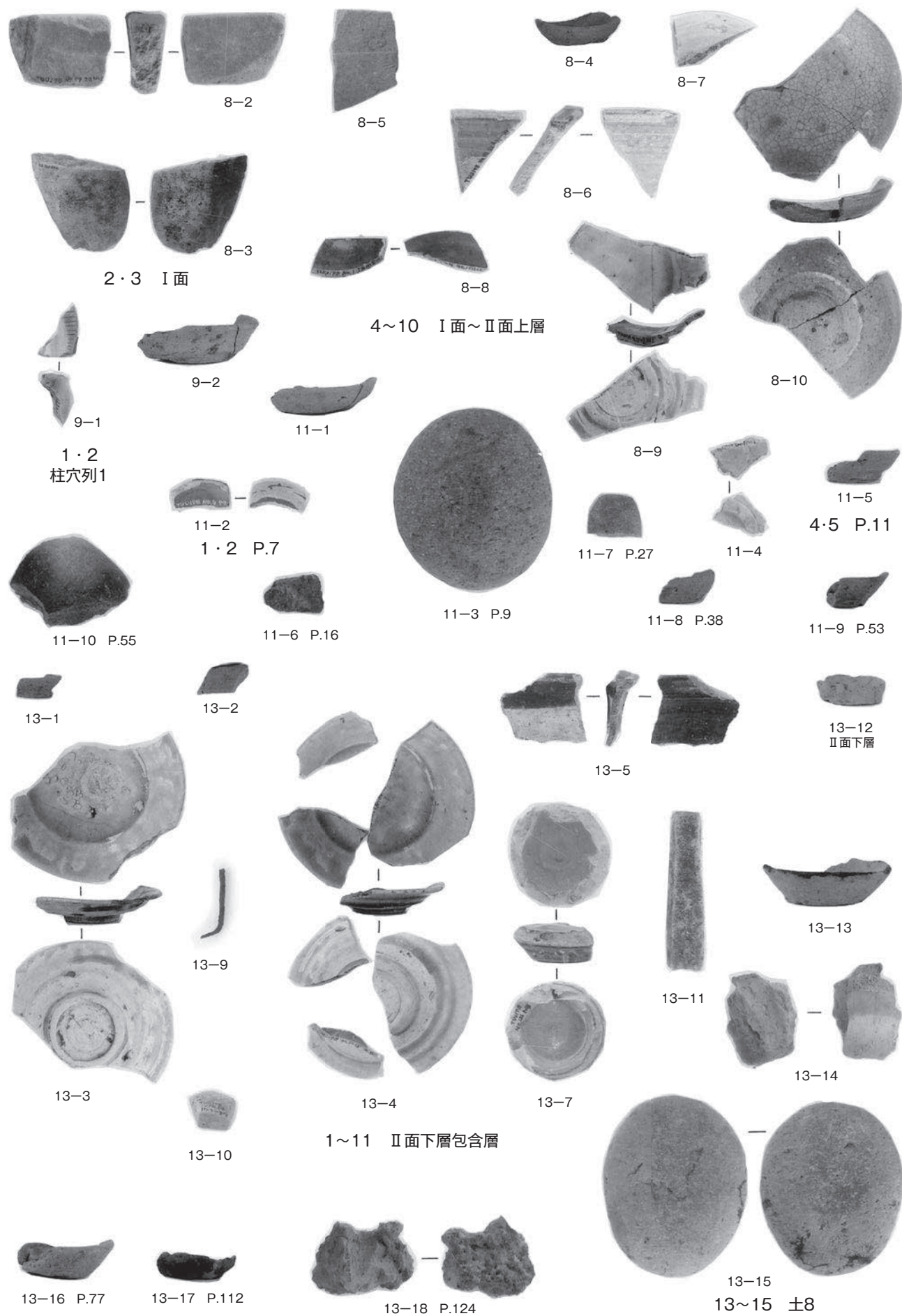


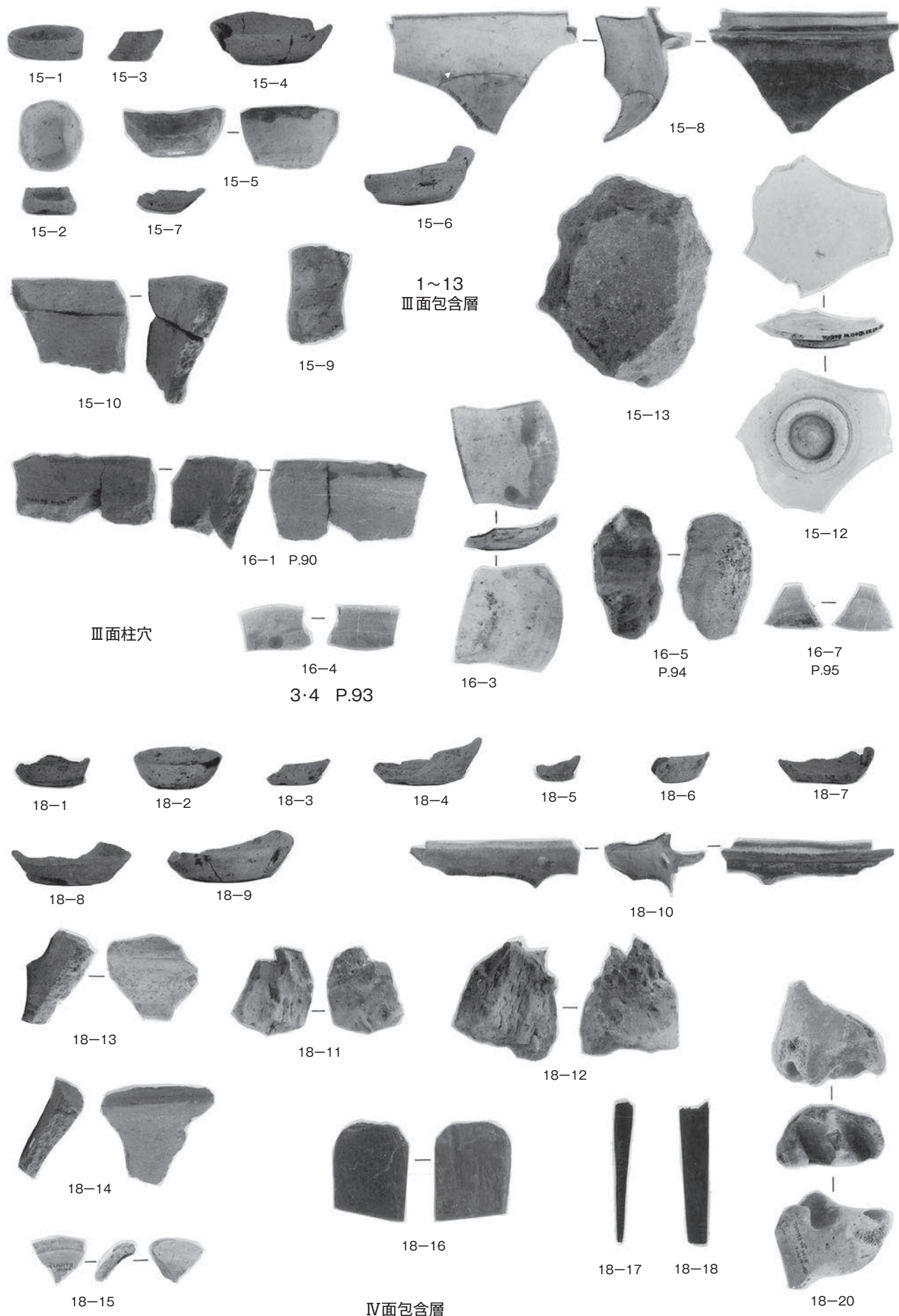
10-3

2区調査区南壁中央部土層断面(北から)



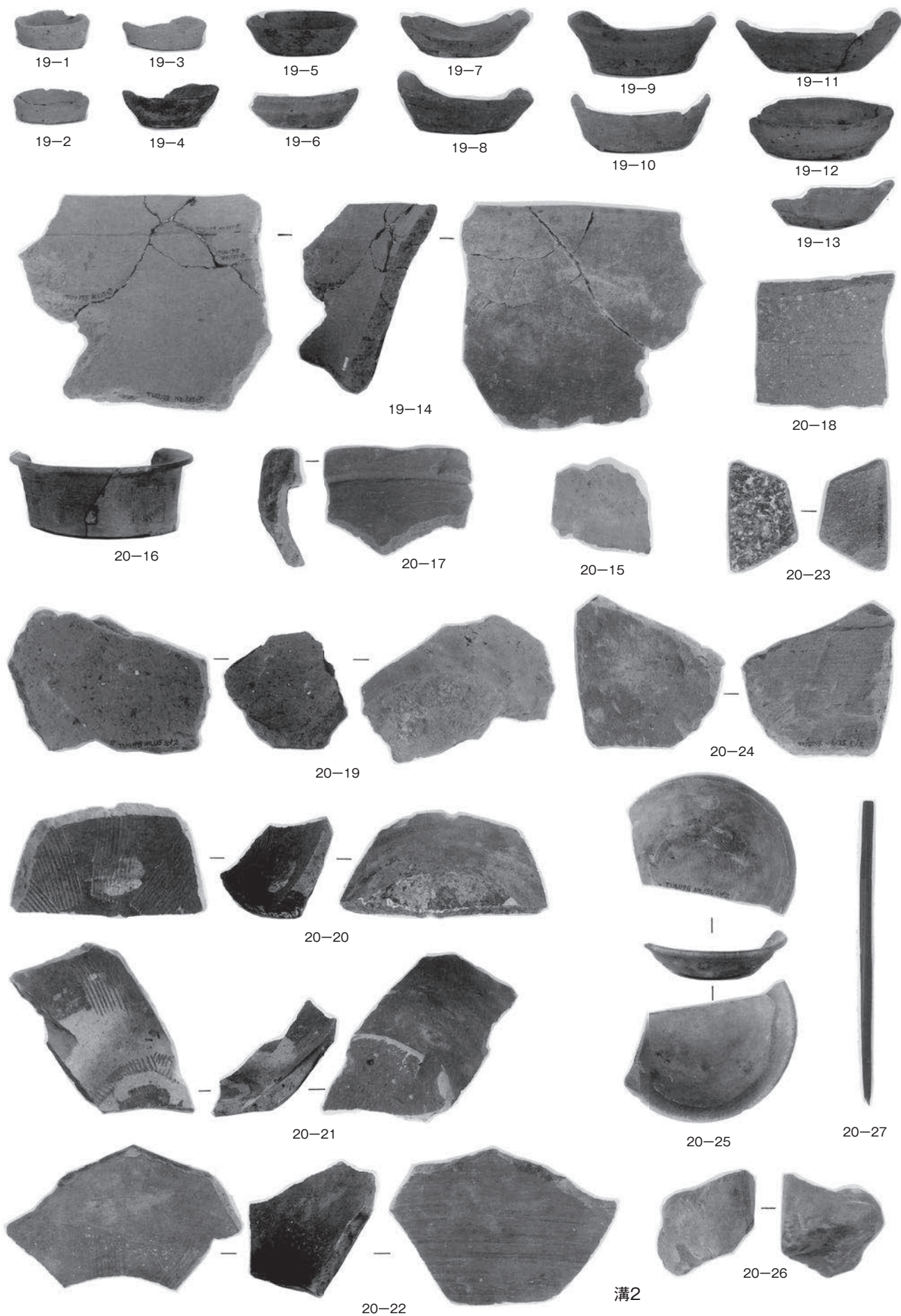
图版 11



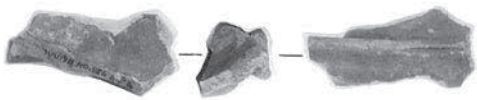


出土遺物 2

图版 13



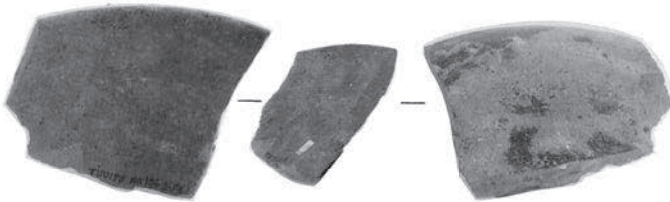
出土遺物 3



21-1



21-2



21-4



21-3

1~4 溝4



21-5



21-6



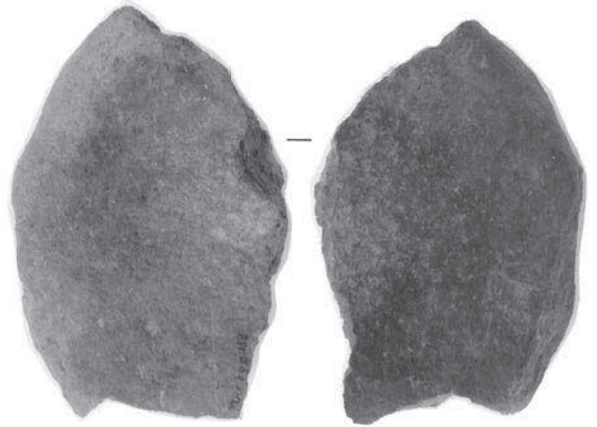
21-7



21-8



21-9



21-10

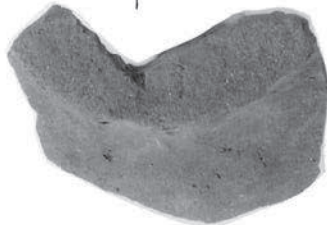
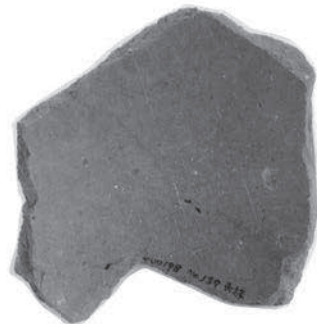
5~10 溝5



22-1



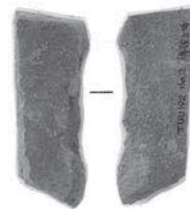
22-2



22-3



22-11



22-4



22-6



22-5



22-7

1~11
遺構外採集

出土遺物 4

笹目遺跡 (No.207)

笹目町 316 番 10 地点

例 言

1. 本報は、鎌倉市番における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は2006年6月15日から7月24日、調査対象面積は42.50㎡である。出土遺物、図面・写真等、調査に係る資料は鎌倉市教育委員会が保管している。
3. 調査団の編成は以下のとおりである。

調査の主体	鎌倉市教育委員会
調査担当	森孝子
現地調査参加者	渡辺美佐子・安達澄代・下江秀信・倉方尚子、 石井清司・佐野吉男・中州洋二（社団法人鎌倉市シルバー人材センター）
資料整理参加者	渡辺美佐子・梶岡ケイト・田畑衣理・赤堀祐子
4. 本報の遺構・遺物の縮尺は次の通りである。

遺構図	1/60・1/40
遺物実測図	1/3・1/1（銭）
5. 本報の作成は以下の分担で行なった。

遺構図版	森・赤堀
遺物図版	渡辺・梶岡・田畑・赤堀
観察表作成	渡辺・赤堀
写真撮影	遺構：森 遺物：赤堀
執筆・編集	赤堀
6. 現地調査・資料整理において以下の方々からご助言・ご協力を賜った。お名前を記して感謝致します。（敬称略・順不同）
菊川英政・汐見一夫・原廣志・馬淵和雄・伊丹まどか・山口正紀・押木弘巳・沖本道・宇都洋平

目次

本文目次

第一章 本調査地点の位置と歴史的環境 (図1・2、表1)	63
第1節 遺跡の位置と歴史	
第2節 周辺の調査	
第二章 調査の概要	67
第1節 調査の経過	
第2節 グリッド設定・国土座標との合成 (図3)	
第3節 調査地の堆積土層 (図4)	
第三章 発見された遺構と遺物	71
第1節 中世第1面 (図5～8)	
第2節 中世第2面 (図9～11)	
第3節 中世第3面 (図12～15)	
第4節 中世第4面 (図16～18)	
第5節 中世第5面 (図19～24)	
第6節 調査第6面 (図25～27)	
第7節 古代以前の遺物 (図28)	
第四章 まとめ	97
第1節 古代以前	
第2節 中世	

挿図目次

図1 本調査地点と周辺の遺跡	64	図15 3b面出土遺物	83
図2 遺跡位置図	66	図16 4面遺構配置図	84
図3 グリッド設定図	68	図17 4面出土遺物	86
図4 調査地の堆積土層	70	図18 4面遺構出土遺物	87
図5 1面遺構配置図	71	図19 5a面遺構配置図・土坑10	88
図6 1面検出遺構	72	図20 5a面出土遺物	89
図7 1面・表採出土遺物	74	図21 土坑10出土遺物	89
図8 1面遺構出土遺物	75	図22 5b面遺構配置図	90
図9 2面遺構配置図・検出遺構	76	図23 5b面検出遺構	91
図10 落ち込み1出土遺物	76	図24 5b面・5b面遺構出土遺物	93
図11 2面・3a面出土遺物	77	図25 6面遺構配置図	94
図12 3面(2面)遺構配置図	78	図26 6面検出遺構	95
図13 3面検出遺構	79	図27 6面出土遺物	96
図14 3面遺構出土遺物	82	図28 古代以前の遺物	96

表 目 次

表 1 周辺の遺跡……………65	表 6 5b面ピット表 ……92
表 2 1面ピット表……………72	表 7 6面ピット表……………95
表 3 3面ピット表……………81	表 8 遺物集計表……………98
表 4 4面ピット表……………85	表 9 遺物観察表……………99
表 5 5a面ピット表 ……89	

図 版 目 次

図版 1…………… 107	図版 5…………… 111
A. I区1面(東から)	A. I区5面(南から)
B. II区1面(北から)	B. II区5面(東から)
C. II区1面(東から)	C. II区5面(北から)
図版 2…………… 108	図版 6…………… 112
A. I区2面(東から)	A. I区6面(東から)
B. II区2～3面(北から)	B. I区6面(南から)
図版 3…………… 109	C. II区6面(北から)
A. I区3面(東から)	図版 7…………… 113
B. II区3面(北から)	A. I区西壁土層
図版 4…………… 110	B. II区北壁土層
A. I区4面(東から)	C. II区西壁土層
B. II区4面(北から)	図版 8 出土遺物(1) …… 114
C. II区5a面(北から)	図版 9 出土遺物(2) …… 115
	図版 10 出土遺物(3) …… 116

第一章 本調査地点の位置と歴史的環境（図1・2、表1）

第1節 遺跡の位置と歴史

本調査地点は鎌倉市笹目町316番10に位置し、笹目遺跡（県遺跡台帳No.207）として周知の遺跡の内に所在する。笹目遺跡は桔梗山から南に延びる細尾根が形成する谷戸・「笹目ヶ谷」およびその周辺を範囲とし、現在の行政上の名称「笹目町」とほぼ一致する辺りである。笹目ヶ谷の開口部から南は県道鎌倉・葉山線まで、西は吉屋信子記念館付近、東側は笹目ヶ谷を形成する支尾根を挟んで佐助ヶ谷の開口部・佐助川が東へ流れを変える所から県道鎌倉・葉山線を結ぶ道路までが含まれる。

「笹目」の地名は「佐々目」として『金沢文庫文書』『吾妻鏡』など中世期の文書にも見られ古来よりの名称であることがわかっている。中世期には遺身院・長楽寺という寺院があったとされ、『金沢文庫文書』には「佐々目遺身院」とみえるほか、「佐々目禅房」・「佐々目御坊」・「佐々目御房」・「佐々目禅洞」・「佐々目禅房」・「佐々目殿」・「佐々目房」などの名が見られる。また、遺身院については、建物の内外の様子が描かれた永仁六年（1298）と元享三年（1323）の法灌頂図3点が金沢文庫に所蔵されている。長楽寺は現在大町にある安養院長楽寺の前身とされ、『新編鎌倉志』・『鎌倉攬勝考』等の近世地誌に佐々目谷にあったと記されているが、現在「長楽寺ヶ谷」伝えられるのは笹目ヶ谷の西側に位置する鎌倉文学館が建つ谷で、この地に長楽寺が所在したとの意見が多い。

『吾妻鏡』には北条経時（鎌倉幕府第4代執権）に関するものと、火災に関する記事が見られる。北条経時は寛元四年（1246）閏4月に「佐々目山麓」に埋葬されたとあり、三年仏事と十三年仏事が「佐々目谷」で行われたとの記事がある。火災に関するものは建長三年（1251）2月10日条と文永三年（1266）1月25日条に佐々目谷が焼亡したとの記事が見える。その他、文献に残る火災は『見聞私記』に永仁五年（1297）佐々目谷口より発生したものが上げられる。

第2節 周辺の調査

笹目遺跡内では、戦前に行われた赤星直忠氏の踏査により、谷奥の2カ所（△A・B）で横穴墓が確認されている。地点Aで開口していた1穴は平面形撥形、羨道と玄室の境のない終末期の形態を採るもので、奥壁に接して高棺座を付帯する。地点Bでは4穴が開口、こちらも高棺座を付帯するものが含まれる。いずれも平面形は撥形だが、羨門付近の形状は後世の削平で失われており不明である。横穴には中世期に利用があったと思われる状況を示すものも含まれるようで、棺座上面に長方形の穴を穿ち、火葬骨を納めた上に五輪塔の地輪がのっていたとされている。（赤星直忠 1959「鎌倉市史考古編」・鎌倉文化研究会 1972「鎌倉史蹟めぐり会記録」）

本格的な発掘調査は12地点で行われている。地点6では14世紀前半～中頃にかけての雛壇地形が確認され、上段平場では掘立柱建物1棟が発見されている。地点2の調査では背後の山際岩盤を掘削して平場を確保する一方、前面を土丹を利用して埋め立て造成する様子が伺われる。中世は13世紀後葉～15世紀前葉までの遺構が発見され、基壇を伴う礎石建物や玉砂利敷きの庭、石垣など寺院跡を想定させる内容である。前掲・金沢文庫所蔵の遺身院法灌頂図との比較・照合を試みた上で、「同一建物とは確認出来ないものの、必ずしも遺身院と係わりがないとは断定出来ない」との所見が報告されている。地点10では13世紀後葉～14世紀中頃までの4時期の生活面が検出され、建物址を含む柱穴、土坑などが発見されている。地点12では14世紀代～15世紀前半代の2時期の強固な土丹地形面が検出され、土塁状遺構とされる土丹列による区画が確認されている。また、谷中央の道路を隔てて30m程に位置する地



図1 本調査地点と周辺の遺跡

表1 周辺の遺跡

No.	地点地番	担当者	文献／刊行年	
1	笹目町 316 番 10 地点	森 孝子	本報掲載	
2	笹目町 330 番 1 地点	大河内勉	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告 6 笹目遺跡発掘調査報告書	1990 年 3 月 1991 年 7 月
3	笹目町 324・311 番 3 地点	田代郁夫 原 廣志	昭和 63 年度鎌倉市内急傾斜崩落 対策事業に伴う発掘調査報告書	1994 年 3 月
4	笹目町 425 番 1 地点	田代郁夫 継 実	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告 10	1994 年 3 月
5	笹目町 302 番 5 地点	田代郁夫 継 実	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告 11	1995 年 3 月
6	笹目町 360 番 1 地点	宮田 眞	笹目遺跡発掘調査報告書	2000 年 12 月
7	笹目町 285 番 1 外地点	齋木秀雄 伊丹まどか	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告 17	2001 年 3 月
8	笹目町 286 番 1 外地点	齋木秀雄 伊丹まどか	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告 17	2001 年 3 月
9	笹目町 302 番 11 地点	継 実 土屋浩美	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告 18	2002 年 3 月
10	笹目町 330 番 11 外地点	原 廣志	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告 20	2004 年 3 月
11	笹目町 287 番 1 外地点	田代郁夫	鎌倉の埋蔵文化財 8 平成 14・15 年度発掘調査の概要	2005 年 3 月
12	笹目町 415 番 21 他地点	原 廣志 山口正紀	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告 24	2008 年 3 月
13	笹目町 423 番 2 他地点	齋木秀雄 降矢順子	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告 26	2010 年 3 月

点10との中世生活面の標高の比較から、地点10では14世紀中頃以降の遺構が削平されている可能性を明らかにした。以上4カ所が笹目ヶ谷内の調査である。

谷開口部では、西側山裾の地点3で2基のやぐらが調査されている。東尾根先脇の地点13では岩盤上に砂質土、市街地の中世地山に類似する粘質土の順に自然堆積層があり、その上に土丹などを利用した造成が行われる。13世紀中頃～14世紀中頃の4枚の生活面が調査され、社を想定させる基壇遺構やイヌの埋葬体の発見などから、何らかの宗教的な空間が想定されている。

谷外では、6カ所で調査が行われている。谷開口部南東の2カ所は、いずれも中世地山を砂質土とし、地点5では、六地蔵から延びる路地に近い軸方向を示す道路状遺構と、その南に展開する方形竪穴・土坑などが確認されている。地点9は方形竪穴と溝が濃密に存在する。地点4は、笹目ヶ谷から尾根を隔てた地域となり今回調査地とは関連が薄いと思われる。南北方向の道路と見られる版築面が確認されている。遺跡南方の県道寄り、地点7・8では13世紀後半～14世紀前半を中心とした時期の遺構が発見されている。この辺りは黄褐色砂が中世の基盤層となる地域で、方形竪穴や中世以前と考えられる仰臥屈伸葬が検出されるなど、南接する長谷小路周辺遺跡に連続する内容である。地点7では方形竪穴の床面標高を周辺調査の事例と比較して、この付近が砂丘の最高部に相当する可能性を上げている。地点11では方形竪穴や井戸などが確認されている。

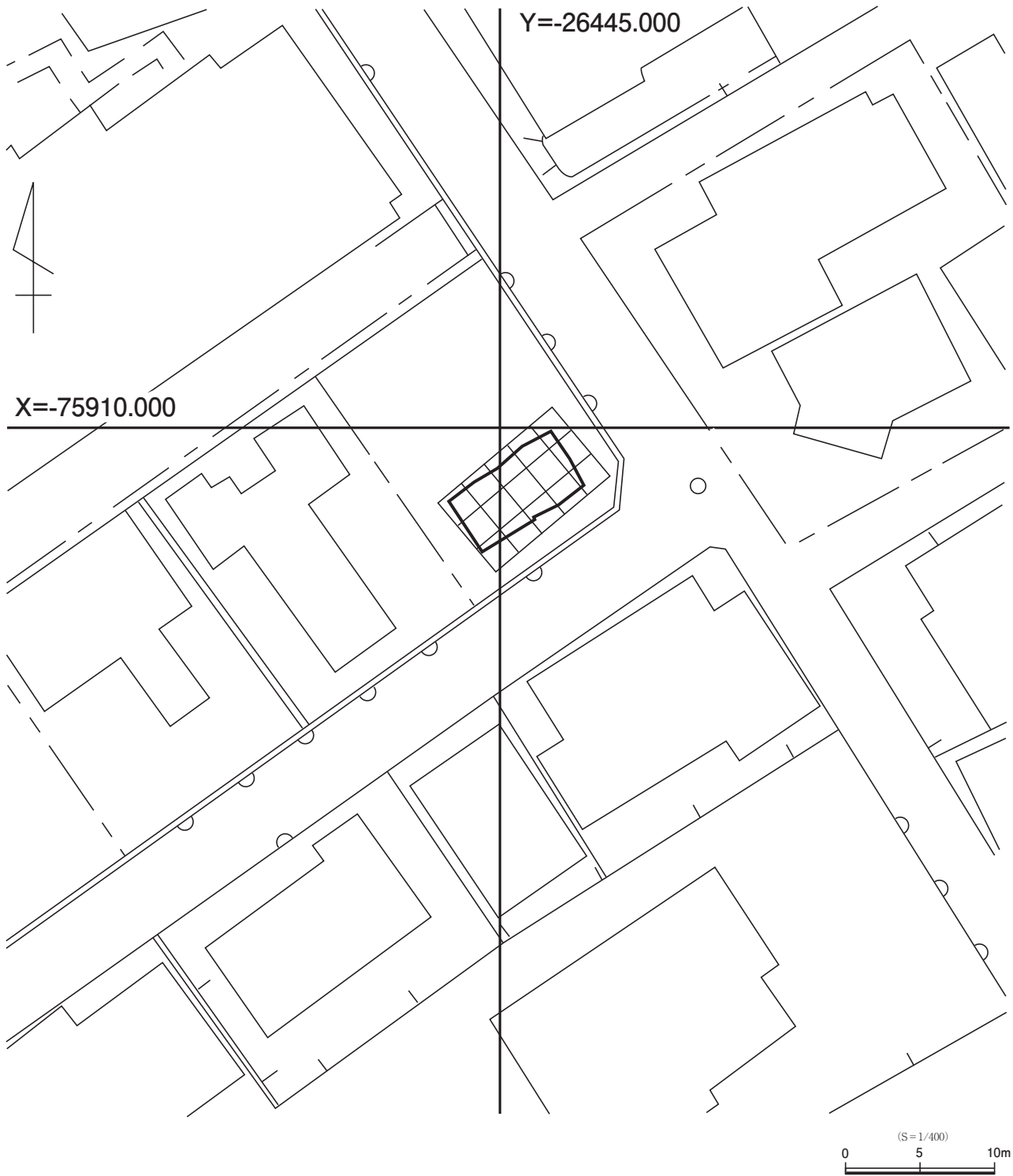


图2 遗迹位置图

第二章 調査の概要

第1節 調査の経過

調査は廃土置場を確保するため、調査区を西半（Ⅰ区）と東半（Ⅱ区）に分割し、2回に分けて実施した。確認調査の結果に基づき、現況の地表面（標高11.4～11.6m）下130～140cmの近現代の堆積土層を重機により掘削・除去し、その後人力による遺構調査を開始した。調査区内に遺存する最も新しい生活面は現地表下150～180cmで検出された。以下、大きく5枚の中世面の調査を行い、溝、土坑、ピット等の遺構を検出した。途中安全を確保できる深度を超えたため、中世4面からは犬走りを設けて、調査範囲を縮小した。中世の地形層下では周辺地域で古代の遺構確認面とされる黒色弱粘質土層（現地表下約320cm）で調査を行なった（調査6面）。調査6面では、溝、土坑、ピットが検出された。中世面で見逃された掘り込みと思われるものが多い中で、Ⅰ区で検出された溝2は古代以前の人為的な遺構である可能性が高い。出土遺物は整理箱にして約3箱で、中世期の土器・陶磁器、石製品、鉄製品、銅製品、獣骨の他、古代以前の土器・陶器が少量含まれている。

以下に作業経過を記した。

- 2006年 6月15日 Ⅰ区調査開始。重機による表土掘削作業。
6月16日 人力による調査開始。
6月19日 調査グリッドの設定作業。
7月 3日 Ⅰ区遺構調査終了。図面作成、全景写真撮影。
7月 4日 鎌倉市3級基準点（53123）より 調査区内に海拔高を移動。
Ⅰ区調査区壁土層の記録作業。
7月 6日 鎌倉市4級基準点より国土座標値の移動。
7月10日 重機によるⅠ区の埋め戻し作業、及びⅡ区の表土掘削。
7月11日 人力による遺構調査開始。
7月24日 調査終了。機材撤収。

第2節 グリッド設定・国土座標との合成 (図3)

測量は任意の調査グリッドを設定して行った。調査地内の北西隅に基準点 (X0,Y0) を設置、南側・東側に向かい数値を増すこととした。国土座標との関係は調査グリッドのX0,Y0が国土座標のX = -75915.0211, Y = -26449.1486 と、X0,Y4.964が国土座標のX = -75911.8487, Y = -26445.3466 と一致し、調査グリッドのX軸は国土座標のY軸より 39° 50' 30" 西へ振れている。

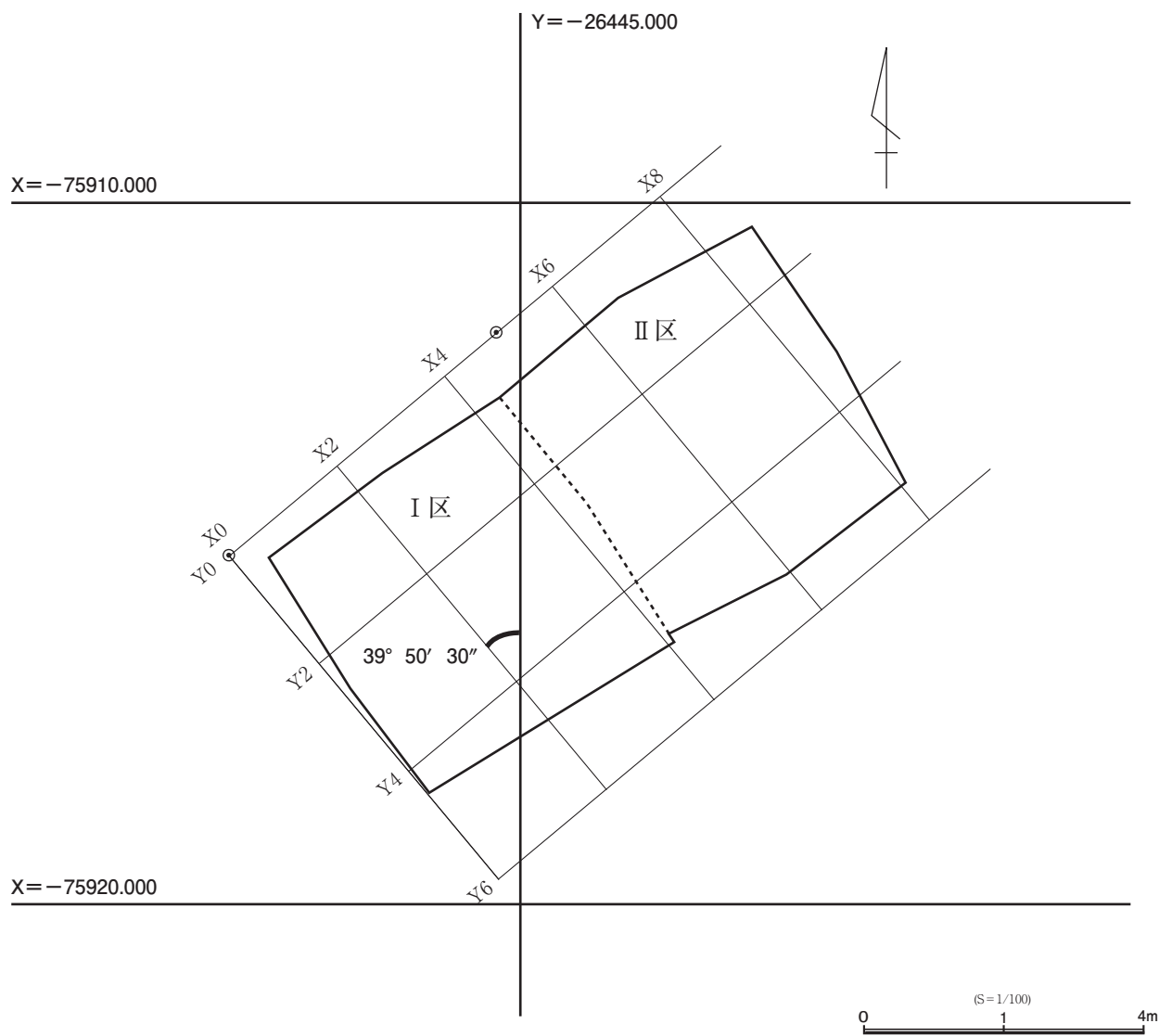


図3 グリッド設定図

第3節 調査地の堆積土層（図4）

遺跡の堆積土層はⅠ区北壁・西壁、Ⅱ区北壁・東壁・西壁で採取した。図中トーンで示した部分は土丹地形層である。1～4層は近現代の堆積土層である。5・6層は土丹粒子を混入する粘質土で遺物を包含している。8層（土丹地形）上が本遺跡に遺存する最も新しい生活面・中世第1面である。8層は土丹を密につき固めた整地層で、Ⅱ区南側を除き、調査区内に安定した広がりを見せている。第2面から第3面にかけては部分的な土丹地形（10・12・14・17・21層）が重なって検出されており、ほぼ同時期に小規模な造成が連続して行なわれたものと思われる。層序の上では、2枚の土丹地形（14・17層）が途切れる比較的軟弱な南側部分に10・12層が貼り増しされたものと理解される。10・12層上を第2面、14層上を第3a面、17層上を第3b面とした。平面的には各々の地形面と検出遺構の時間的な対応関係の把握が困難であったため、ある程度まとめて調査している。第4面は23・24層により構成される強固な土丹地形面である。本層下から土層採集地点が変更されたため、層厚が薄く記録されているが、径が数10cmを超える大型土丹塊による地形層である。第5面は土丹地形（27～30層）上を5a面、地形下を5b面として調査している。中世の最終生活面と考えられる5b面構成土の下は、Ⅱ区に堆積する33層にかわらけ片・炭化物等が含まれていることから、中世の堆積土層と思われる。33～35層下の第6面とした調査面は古代の遺構確認面である黒色弱粘質土層の上面である。

土層説明

1層	現代の盛り土。（表土層）
2層 茶褐色粘質土層	1～5 cm大の土丹が混入する。（表土層）
3層 灰色粘土層	水田耕作土（表土層）
4層 茶色シルト層	混入物をほとんど含まない。しまりなし。（表土層）
5層 茶褐色粘質土層	土丹粒子・かわらけ細片・炭化物を混入する。粘性ややあり。しまりなし。（包含層）
6層 茶褐色粘質土層	3～10 cm大の土丹をまばらに含む。しまりなし。
7層 茶褐色粘質土層	混入物を含まない。シルト気味。
8層 土丹地形層	
9層 茶褐色シルト層	
10層 土丹地形層	
11層 灰茶色シルト層	土丹粒子・炭化物を含む。しまりあり。
12層 土丹地形層	
13層 灰茶色シルト層	混入物を含まない。しまりあり。
14層 土丹地形層	
15層 灰茶色シルト層	土丹粒子・炭化物を含む。しまりあり。
16層 灰黄色粘質土層	土丹粒子・炭化物を含む。粘性あり。しまりなし。
17層 土丹地形層	
18層 灰黄色シルト層	混入物を含まない。しまりあり。
19層 茶黄色粘質土層	粉碎土丹・炭化物を混入する。粘性ややあり。しまりあり。
20層 茶色砂質土層	かわらけ細片・炭化物を含む。しまりなし。
21層 土丹地形層	
22層 茶黄色粘質土層	粉碎土丹・炭化物を混入する。粘性ややあり。しまりあり。
23層 土丹地形層	
24層 土丹地形層	
25層 茶色砂質土層	7～8 cm大の土丹、炭化物・貝粒子を含む。粘性なし。良くしまる。
26層 茶褐色粘質土層	土丹粒子・かわらけ片・炭化物を含む。粘性あり。しまりに欠ける。
27層 土丹地形層	比較的弱い地形層。土丹粒子・貝粒子・炭化物を含む。粘性なし。良くしまる。
28層 暗茶褐色シルト層	
29層 土丹地形層	比較的弱い地形層。土丹粒子・貝粒子・炭化物を含む。粘性なし。良くしまる。
30層 土丹地形層	比較的弱い地形層。土丹粒子・貝粒子・炭化物を含む。粘性なし。良くしまる。
31層 灰褐色粘質土層	土丹粒子・かわらけ細片を混入する。粘性あり。しまりややあり。
32層 茶色砂質土層	黄褐色砂を帯状に混入する。
33層 茶褐色砂質土層	土丹粒子・かわらけ片・炭化物を含む。粘性あり。しまりに欠ける。
34層 茶色砂質土層	黒色粘土を少量混入する。黒色砂・貝粒子を多く含む。粘性なし。しまり強い。
35層 茶色砂質土層	土丹粒子・貝粒子・炭化物を含む。粘性なし。しまりあり。

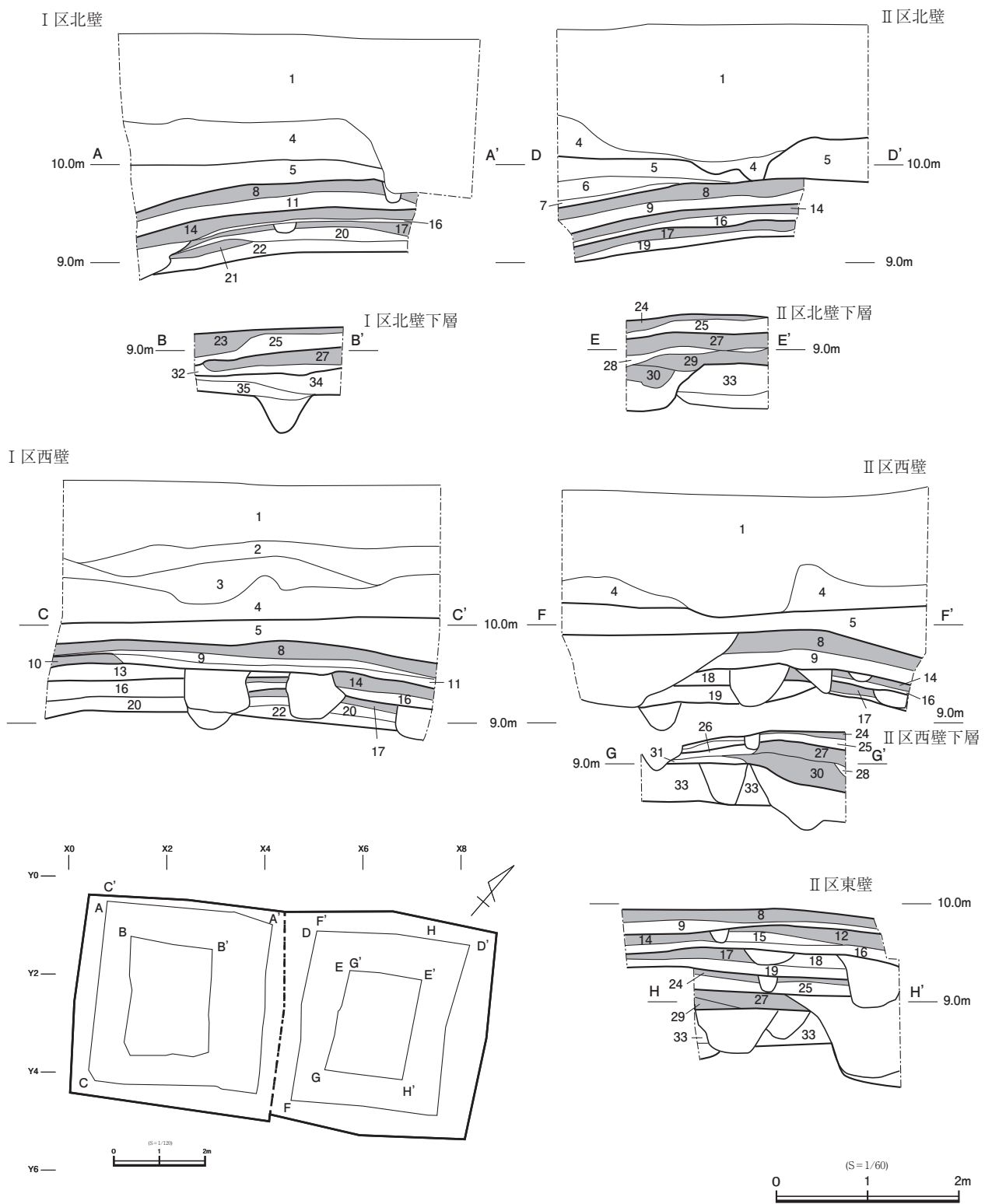


図4 調査地の堆積土層

第三章 発見された遺構と遺物

第1節 中世第1面 (図5～8)

第1面は土丹を密につき固めた地形層を構成土とする。海拔9.80～9.95m付近に比較的平坦で安定した地盤を広げるが、I区・II区とも調査区の北西角付近が緩く落ち込んでいる。I区9.60m、II区9.66mと周囲より20～30cmほど低くなっており、この傾向はさらに下層に位置する生活面から踏襲されている。この付近は4面以下では調査範囲から外れてしまったために確認はできなかったが、5面以下の砂質土が基盤となる層辺に何らの落ち込み(遺構)が存在し、その影響で地盤が沈下したものかもしれない。II区南側は構成土中の土丹の量が疎らでやや軟弱である。検出された遺構は土坑2基、ピット13口である。

土坑1 (図6)

X4,Y2付近に位置する。東側は調査区外に続く。検出された規模は70×34cmまで、深さは20cmで底面高は9.73mである。

土坑9 (図6)

X5,Y4付近に位置する。西側は調査区外に続く。検出された規模は167×89cmまで、深さは75cmで底面高は9.15mである。

ピット (図5)

13口検出されている。P106は形態的に不安があるが、複数柱穴の重複かもしれず、性格不明の小穴としてピットに含めた。P101・P1・P107・P109は、西から順に200cm・190cm・193cmの距離でほぼ直線上に位置するが、明確なセット関係とは言い切れない。個々の概要は1面ピット表を参照されたい。



図5 1面遺構配置図

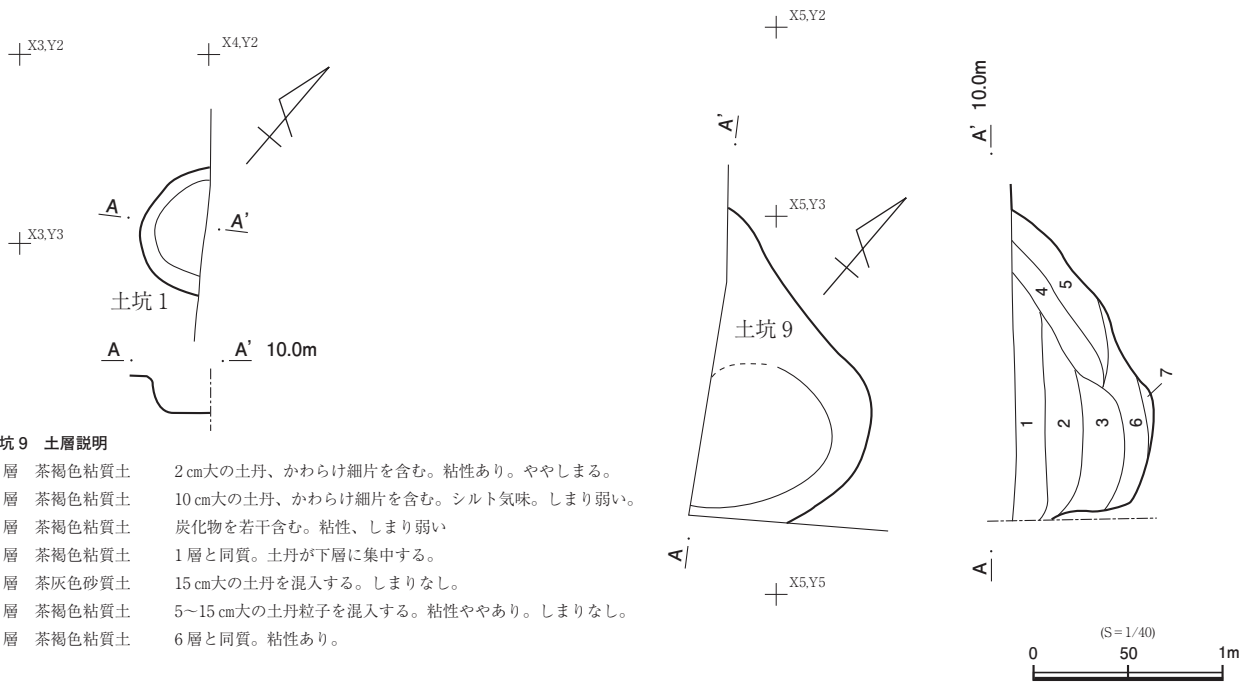


図6 1面検出遺構

表2 1面ピット表

遺構名	長径 × 短径 × 深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
P 1	40×25×29	9.56	
P 2	27×27×36	9.50	
P 3	43×35~×33	9.55	P4 との新旧不明
P 4	46×38~×29	9.54	P3 との新旧不明
P101	32×29×14	9.76	
P102	37×19×27	9.54	
P103	26×22×11	9.71	
P104	18×16~×21	9.69	
P105	13×8~× ?	?	
P106	66×18×36	9.46	2口以上の重複?
P107	48×35×12	9.74	
P108	26×25×7	9.88	
P109	44×36×33	9.60	

1面・表採出土遺物(図7)

1・2は調査区内で採集されたものである。1は龍泉窯系の青磁碗で線刻により幅広の蓮弁文が描かれている。施釉は薄く、乳白色の微粒子が残る。13世紀初頭以前の所産である。2は白磁の口元皿で、内底周縁の圈線は比較的深く明瞭である。

3～36は1面検出までに出土した遺物である。3～6はロクロ成形のかわらけである。混入物が多めの紛質胎土で、器壁が厚く直線的に開いている。5は体部中位に弱い稜を持ちやや丸みがある。内外口唇部にススの付着が見られる。6は焼成後に口縁部を鋭利な工具で削り加工している。内外体部から底面にかけてススが付着している。7はロクロ成形の白かわらけで、11図9と同一個体かもしれない。外面はロクロナデの痕跡が明瞭に残る。8は青磁双魚文鉢で龍泉窯系の製品。見込みの貼付け文は尾ひれ部分のみ遺存する。施釉は厚く、表面は摩耗し失透。高台畳付は露胎である。9は青磁筒型香炉の口縁部片で、龍泉系の製品と思われるが特定はできない。内面口縁部下から外面にかけて施釉されている。10は白磁の口元皿で、底面の釉は拭き取られている。11～14は瀬戸窯の製品で、11は卸皿、12～14は折縁深皿である。胎土はいずれも黄色味のある弱砂質土で比較的軟質。12は漬け掛けと思われる濃緑色を呈する灰釉が厚く施釉されている。外面体部下半は露胎である。口縁部内面の挟り込みは深く鋭い。13は底径18cmを超えそうである。施釉は薄く、ハケ塗りされたものと思われる。内底は回転を利用した櫛描文が巡っている。外面体部から底部にかけて回転ヘラケズリが施されている。14の施釉も薄くハケ塗りと思われる。外面体部から底部周縁にかけて回転ヘラケズリが施されている。15～20は常滑窯の製品で、15は片口鉢Ⅰ類、16・17は甕、18～20は片口鉢Ⅱ類である。17は甕の胴部片で菊花文が押印されている。18は口縁部横ナデ、体部は斜位のヘラナデが施されており、外面のヘラナデはケズリ気味で粗い。19は内外面とも丁寧にナデ調整され平滑に仕上がる。20は底径14cm程度になると思われる。調整は内面が強い横ナデ、外面体部は縦位のヘラナデのち指頭ナデで底部脇は指頭痕が残る。底面は離れ砂が付着。内面は使用により、よく摩滅している。21・22は備前窯のすり鉢である。21は丁寧な作りで器表面平滑、22はやや雑な作りで焼成も軟質気味である。23は土器質火鉢で、器表面は暗褐色を呈し、いぶし焼き風。口縁部内面から外面にかけて横ナデ、内面は斜位のナデ調整が施されている。24は輪花型の瓦器質火鉢で、内外面とも縦位のミガキが施されている。25は丸瓦である。胎土は白色粒子を混じえる砂質精良土で硬質に焼き上がる。凸面は細かい縄目叩きで、一部縦方向にナデ消されている。凹面には布目痕・布引痕が残る。凹面側縁・側端・側端凸側角は面取りされている。26・27は常滑窯の甕片を転用したもの。26は全面に擦痕が認められ、側縁部上半と上縁はよく使い込まれている。表裏面周縁は敲打ぎみの使用があったと思われ剥離している。27は欠損面以外の全面に擦痕が認められる。28・29は滑石加工品である。28の左側は中央に突起を残して表裏から削り落とされている。折り切ること意図したものか。右側は斜めに落とされた端部の1箇所を棒状工具で穿っている。上下端は平滑である。29は何らの形状を意図したものとは思われない。表裏面、及び下端に擦り窪めたような工具痕が認められる。30はチャートである。裏面は自然面で、他はほとんどが自然剥離した面と思われる。石材とすべきものかもしれないが表面右側縁に一部敲打したような痕跡が認められる。31～34は鉄製品・釘、35・36は銅銭である。35は楷書で熙寧〇寶と読める。熙寧元寶ならば初铸1068年。36は遺存状態が悪く判読できない。

その他、1面検出までに龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗、景德鎮窯製と思われる青白磁で何らの蓋の取手部分(写真図版10-⑤)、瓦器小片、軽石、獣骨、が出土している。

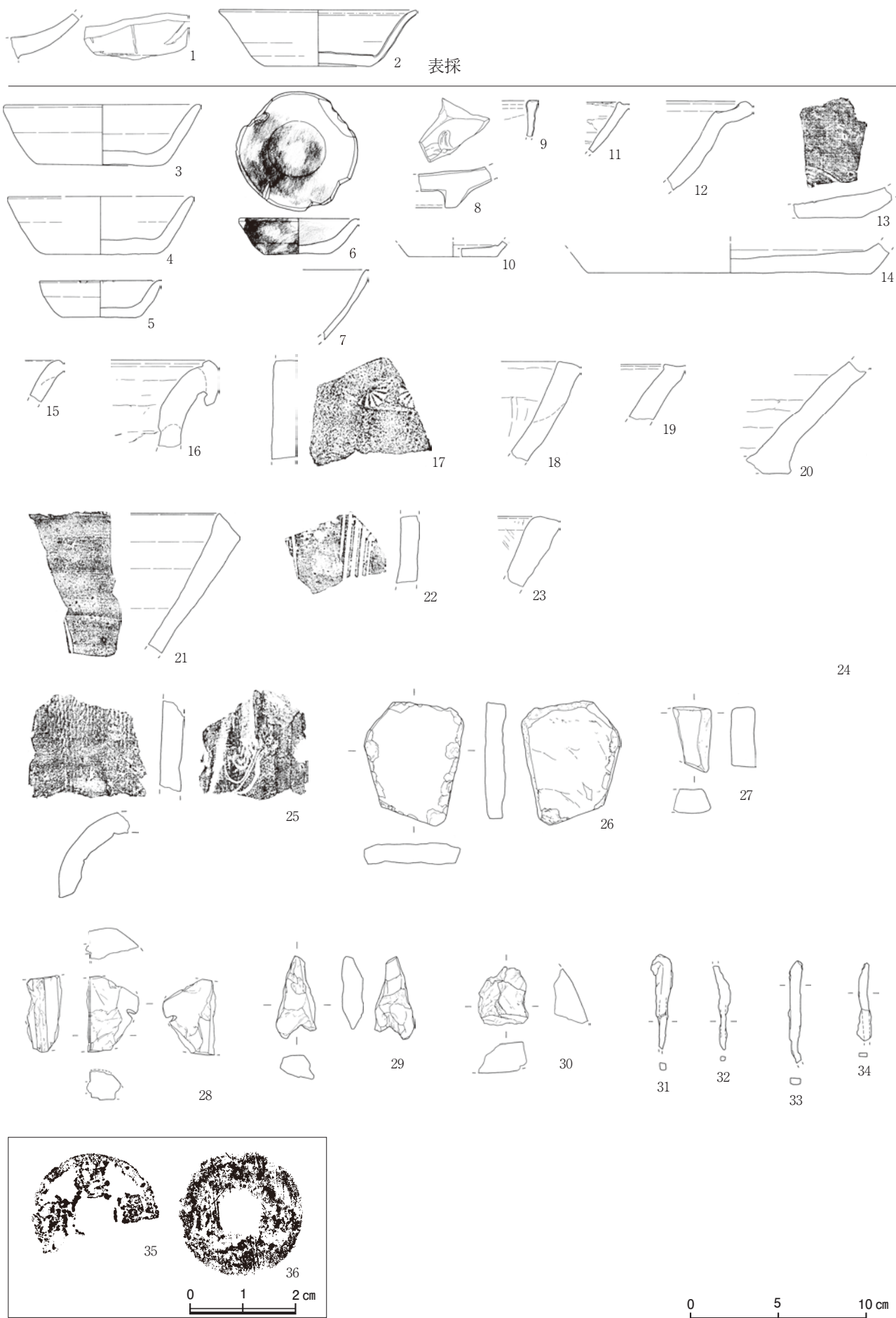


图7 1面·表採出土遺物

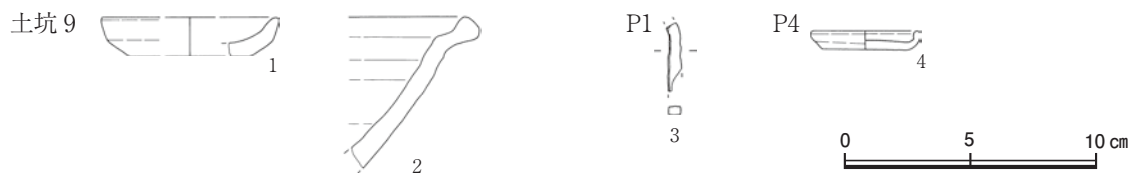


図8 1面遺構出土遺物

1面遺構出土遺物(図8)

1・2は土坑9から出土したもの。1はロクロ成形のかわらけで、器壁厚く背低。体部中位に稜を持っている。2は瀬戸窯の折縁深皿で、口径25cmを超えるものと思われる。胎土は緻密で焼き上がりは比較的硬質、体部下半は回転ヘラケズリが施されている。

3はP1から、4はP4から出土した。3は鉄製品・釘、4は内折れかわらけである。

第2節 中世第2面(図9～11)

調査区南側のみで検出された土丹地形面である。3面上の貼り増し部分と思われる。平面的な調査はI区でのみ行なわれている。II区では確実に本期に属する地形や遺構を把握できなかったため3面とともに報告する。

I区南側の1面直下、海拔9.7m付近で検出された。土丹の量は少なめで比較的弱い地形である。落ち込み1基、土坑1基、ピット1口が検出されている。

落ち込み1(図9・10)

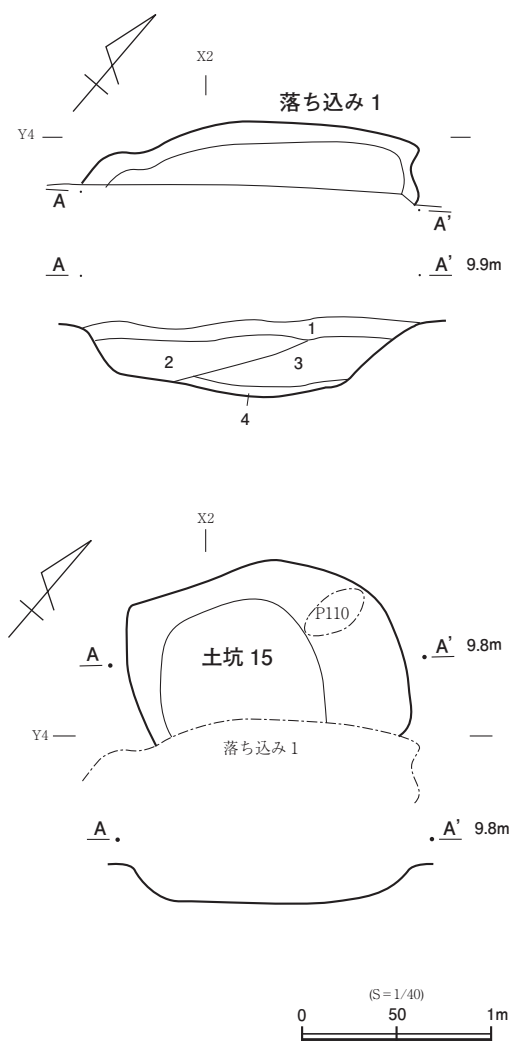
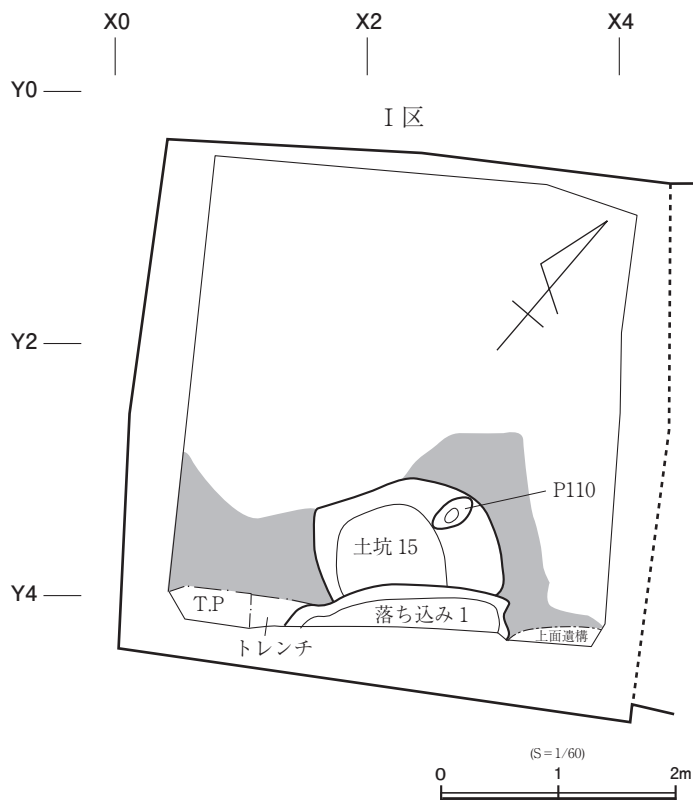
X2,Y4付近に位置する。南側の大半は調査区外へ続く。土坑15を切る。検出された規模は178×36cmまで、深さは40cmで、検出できた底面高は最深部で9.26mである。隣接するトレンチ・遺構と共に掘り上げてしまったため平面不整形となったが、本来は整った円形を呈するものであったと思われる。

土坑15(図9)

X2,Y4付近に位置する。南側を落ち込み1に切られる。P110との新旧関係は不明。検出された規模は146×94cm、深さは19cmで、底面高は9.48mである。後述する3面検出の土坑2とほぼ重なる位置にあることから、掘り直し、あるいは土坑2廃絶後の凹地を利用したゴミ穴の可能性はある。あるいは同一の遺構として扱うべきかもしれない。

ピット(図9)

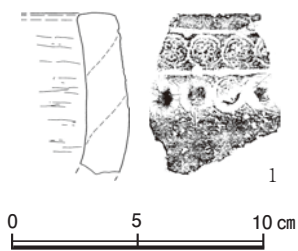
1口検出されている。P110は土坑15覆土中で確認された。土坑15との新旧関係は不明である。検出された規模は40×16cm、深さは19cmで、底面高は9.50mである。



落ち込み 1 土層説明

- 1層 茶褐色粘質土 土丹粒子・炭化物を含む。粘性あり。しまりなし。
- 2層 茶褐色粘質土 1~2cm大の土丹、炭化物含む。粘性あり。しまりなし。
- 3層 茶褐色粘質土 5~10cm大の土丹を含む。しまりなし。
- 4層 灰茶褐色シルト 小土丹を混入する。しまりなし。

図9 2面遺構配置図・検出遺構



落ち込み 1 出土遺物 (図10)

1は瓦質火鉢である。内外面とも横位のミガキ調整が施され、外面の様子は、へら描き沈線区画内に梅を象った重圈文のスタンプを押印、その下へ連珠文を型押し貼付している。その他、かわらけ小片、常滑窯産の甕胴部片が出土している。

図10 落ち込み 1 出土遺物

2面・3a面出土遺物(図11)

以下は1面構成土、及び2面・3a面上包含層から出土した遺物である。1～8はロクロ成形のかわらけである。1～6は底径が広く背低気味のものが多い。3は器壁が薄く内湾しながら立ち上がる。7・8は底径が狭い。7は丸みを持って開き、8は器壁薄く碗型の深い器形を採る。9はロクロ成形で底部回転糸切りの白かわらけである。内底周縁は強いロクロ目が残る。内底中央には菊花文のスタンプが押されている。図7-7に胎土、作りが良く似ており、同一個体である可能性が高い。10は白磁の底部片である。小壺など袋物の類と思われる。施釉薄めで内面体部及び高台から底面にかけては露胎である。削り出し高台で底面は回転ヘラケズリが施されている。11・12は瀬戸窯の製品である。11は卸皿で青灰色を呈する灰釉が口縁部内面から外面にかけてハケ塗りされている。外面下半に重ね焼きにより生じたと思われる釉着痕が見受けられる。12は折縁深皿である。外面は口縁部下の一部を除き釉が剥離している。13は常滑窯の甕である。口縁部上向側は灰を被っている。14は平瓦である。胎土は白色粒子を混じえる砂質土で焼き上りはやや軟質。凹面はナデ調整が施されるが側縁に離れ砂が若干残る。凸面はX字状斜格子叩きで表面の離れ砂はよく残る。側端及び側端の凹面側角は面取りされている。また凹面狭端側の端をわずかにナデ落としているよう見受けられる。15は伊予産の中砥である。両端の欠損部を除く5面全てに使用の痕跡が見られる。16～21は鉄製品・釘である。

その他、2面および3a面検出までに、龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗、白磁口兀皿、景德鎮窯青白磁梅瓶(写真図版10-③)、獣骨が出土している。

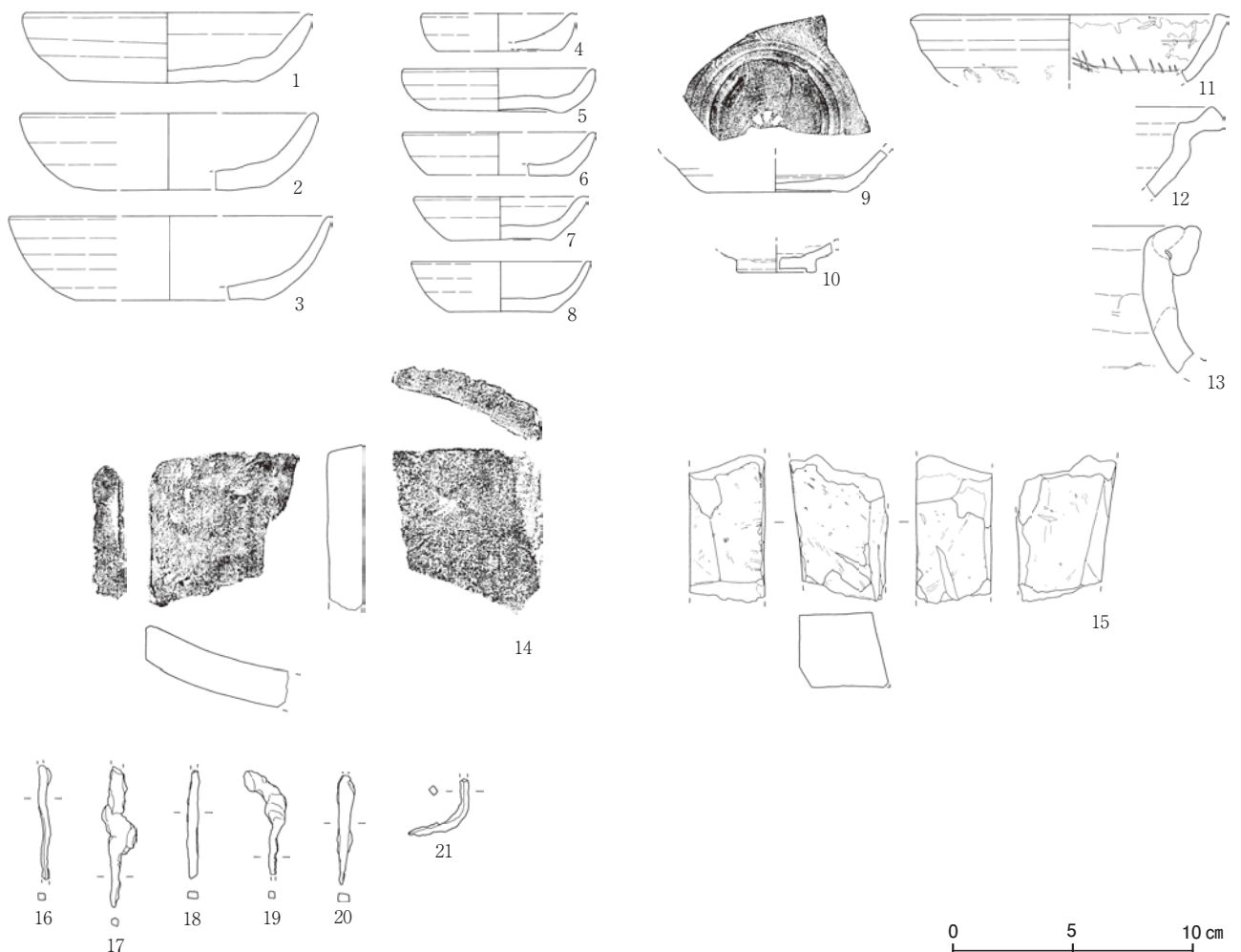


図11 2面・3a面出土遺物

第3節 中世第3面 (図12～15)

3面では2枚の土丹地形層を主体として構成される新旧2時期の面が確認されている。土丹地形が途切れる調査区南側は、砂質土層・シルト層が基盤になる。上層に位置する新しい面が3a面、下層に位置するより古い面が3b面である。掘り込み面を明確にできない遺構が含まれるため、a・b面をまとめて図示した。トーンで示した土丹地形面のうちⅡ区の点線より南側の範囲は、2面とするべき貼り増し部分と思われるが、3面と切り離すことが困難なため、この時期に含めた。2面と考えられる地形面上の海拔は9.7～9.8mである。3a面はⅠ区で海拔9.34～9.64m、Ⅱ区で9.40～9.70m付近に位置する。3b面はⅠ区で海拔9.14～9.34m、Ⅱ区で9.30～9.54m付近に位置し、a・b面とも1面同様Ⅰ区・Ⅱ区とも、それぞれの調査区の北西角付近が緩く落ち込んでいる。3面で検出された遺構は、溝1条、溝状遺構1基、土坑6基、ピット21口である。

Ⅰ区では北側で検出された溝1が3a面の遺構である。P7・P115は3b面から掘り込まれている。その他、Ⅰ区北東角から土坑3に接して土坑4まで達する段差があり、段差遺構として調査されているが、3a面相当の土丹地形が緩んだ部分を剥がして3b面に達してしまったものと判断した。この段差より南側で検出された遺構のうち、土坑4・5は調査区壁の土層で3a面からの掘り込みが確認出来る。土坑3は北側の段差の本址プランと同心を描く部分が、本来の上端と考え3a面の遺構とした。Ⅰ区で段差の南に位置するそれ以外の検出遺構の掘り込み面は不明である。

Ⅱ区では南側土丹地形上で開口しているP112は2面の遺構と思われる。土坑8、P27・111・132は3a面の遺構である。それ以外は3b面で検出されている。

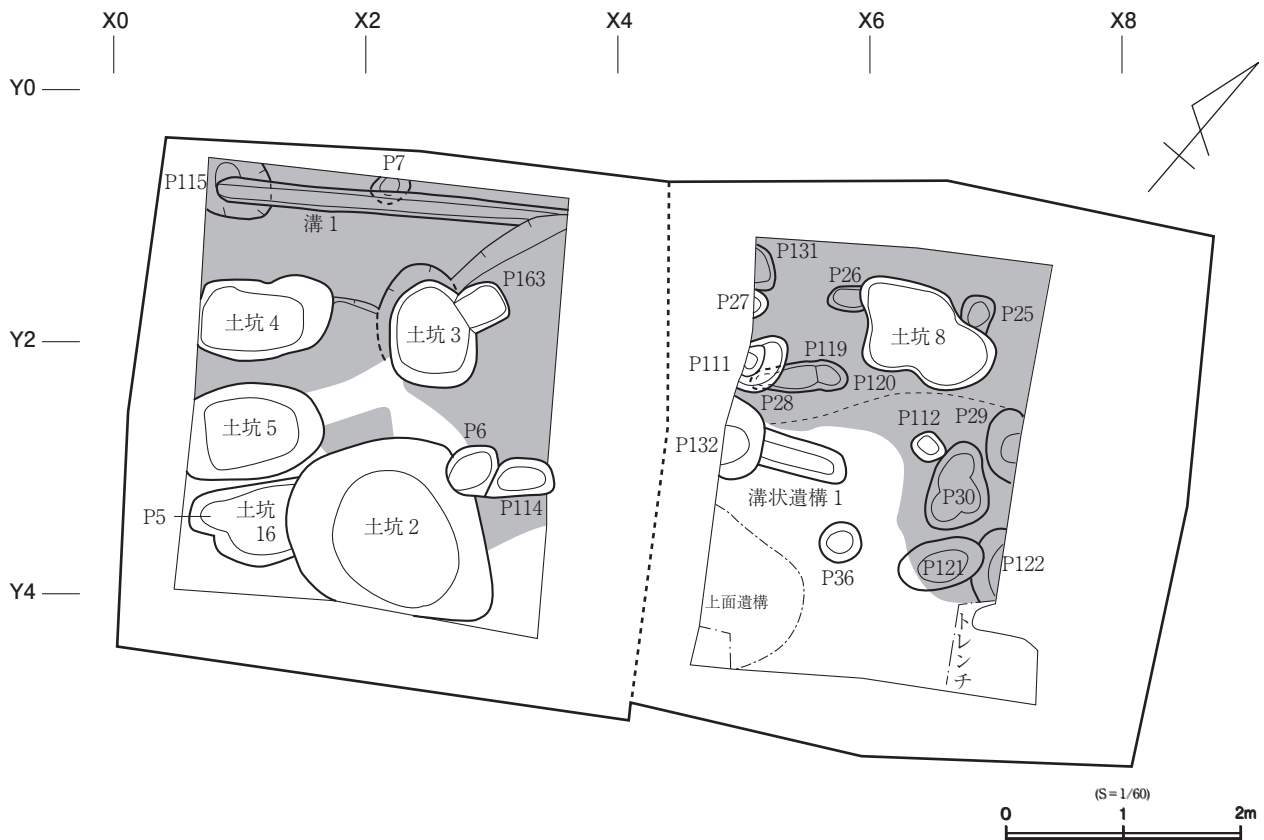
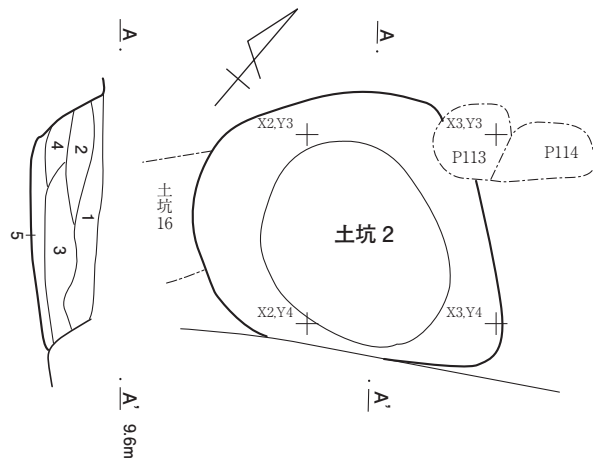
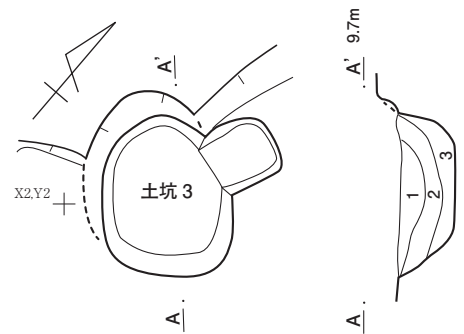


図12 3面(2面)遺構配置図



土坑 2 土層説明

- | | |
|------------|-----------------------------|
| 1層 黄褐色粘質土 | 10~15cm大の土丹多く混入。粘性あり。しまりなし。 |
| 2層 黄褐色砂質土 | かわらけ細片を若干含む。しまりなし。 |
| 3層 黄褐色砂質土 | 黄褐色粘土塊・かわらけ細片・炭化物を含む。しまりなし。 |
| 4層 黄褐色シルト | 5~7cm大の土丹・炭化物を混入。しまりなし。 |
| 5層 暗茶褐色シルト | 炭化物を混入する。しまりなし。 |



土坑 3 土層説明

- | | |
|------------|-------------------------|
| 1層 暗茶褐色粘質土 | 炭化物・土丹粒子を混入。粘性あり。しまりなし。 |
| 2層 暗茶褐色粘質土 | 1層と同質。褐鉄分が強い。 |
| 3層 暗茶褐色粘質土 | 1層と同質。ややしまる。 |

土坑 8 土層説明

- | | |
|------------|--------------------------------------|
| 1層 灰黄褐色粘質土 | 炭化物・2cm大の土丹粒子を混入。しまりなし。 |
| 2層 灰黄褐色粘質土 | かわらけ片・炭化物・1~2cm大の土丹粒子を非常に多く含む。しまりなし。 |
| 3層 灰黄褐色粘質土 | 混入物がほとんどなく、シルト気味。しまり弱い。 |

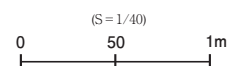
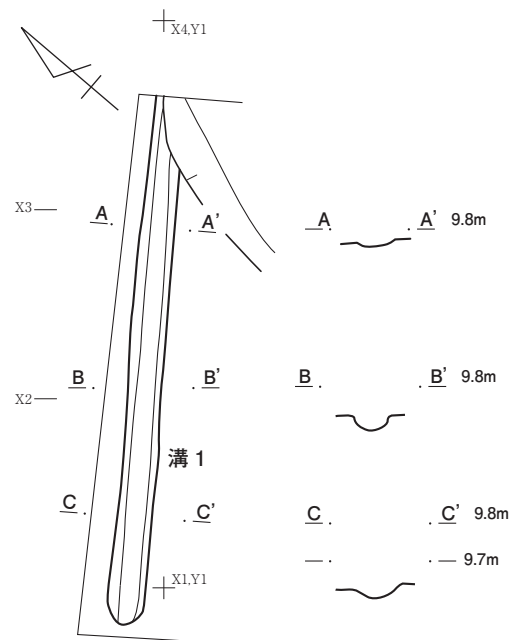
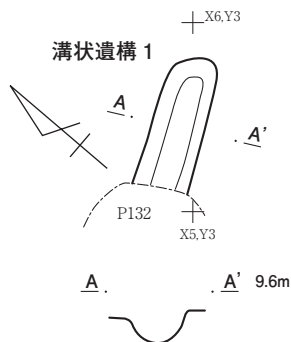
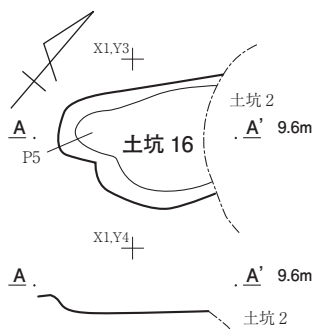
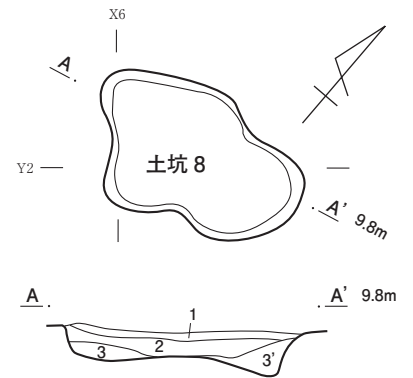
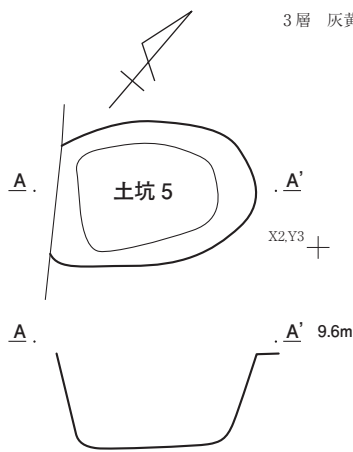
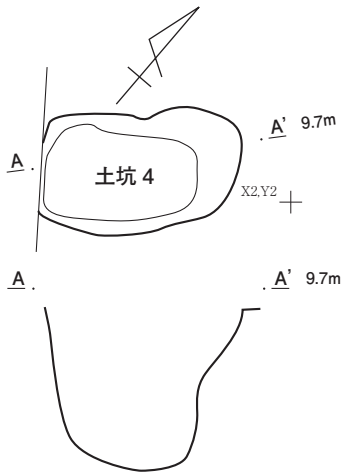


図13 3面検出遺構

溝1 (図13)

I区北側3a面で検出された。東側は段差により失われているが調査区外へ延びている。西側は調査区内で途切れており、西壁土層でも確認できない。軸方向はN-54°-Eで、検出された規模は長さ279cmまで。上端幅は17~20cm、下端幅は7~10cm、深さは3~7cmで、底面高は東側で9.63m、西側で9.41mと西側へ傾斜している。本址は土丹面上に穿たれたきわめて浅い掘り込みである。排水を目的とした窪み、あるいは何らの材を据えた跡かもしれない。

溝状遺構1 (図13)

X5,Y3付近で検出された。確認面は3b面である。P132に切られる。軸方向はN-62°-Eで、検出された規模は長さ74cm、上端幅は29cm、下端幅は12cmである。断面U字状を呈し、深さは15cm、底面高は9.34mでほぼ一定している。

土坑2 (図13)

X2,Y3付近に位置する。土坑16とP6との新旧関係は不明である。検出された規模は182×152cm、深さは40cmで、底面高は9.14mである。2面検出の土坑15とほぼ重なって位置しており、同一遺構の可能性がある。

土坑3 (図13)

X2,Y2付近に位置する。北側の段差部分上(3a面)が本来の掘り込み面と思われる。北東側で重複するP163との新旧関係は不明。検出された規模は86×68cm、深さは29cmだが、段差上の掘り込みを含めれば、101×68cmで、深さ42cm。底面高は9.23mである。

土坑4 (図13)

X1,Y2付近に位置する3a面からの掘り込みである。検出された規模は105×63cmまで、深さは86cmで、底面高は8.72mである。覆土は概ね3層に分けられ、上層はかわらけ細片・炭化物等を含むしまりのない粘質土で、中層は径20cmを超える土丹塊を投げ込んで埋めた層。下層はかわらけ片を含む茶褐色シルト層である。

土坑5 (図13)

X1,Y3付近に位置する3a面からの掘り込みである。検出された規模は115×75cmまで、深さは50cmで、底面高は9.05mである。覆土は暗茶褐色粘質土を基調とする。覆土中から、ほぼ完形と言えるかわらけが5枚出土しているが、検出状況は不明である。

土坑8 (図13)

X6,Y1付近に位置する3a面からの掘り込みである。P25・26切る。検出された規模は120×83cm、深さは25cmで、底面高は9.45mである。

土坑16 (図13)

X1,Y3付近に位置する。西側をP5に切られる。土坑2との新旧関係は不明である。検出された規模は74×65cmまで、深さは9cmで、底面高は9.46mである。

ピット (図12)

ピットは21口検出されているが、セット関係が明確な並びは見出せない。個々の概要は3面ピット表を参照されたい。

表3 3面ピット表

遺構名	長径 × 短径 × 深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
P 5	31～×33×10	9.44	掘り込み面：不明／土坑16との新旧不明
P 6	44～×39～×22	9.29	掘り込み面：不明／土坑2、P114との新旧不明
P 7	25～×23×11	9.39	掘り込み面：3b面／溝1より旧
P 25	40×27×15	9.37	掘り込み面：3b面／土坑8より旧
P 26	38×19×16	9.30	掘り込み面：3b面／土坑8より旧
P 27	22×11～×9	9.37	掘り込み面：3a面
P 28	14×(12)×9	9.41	掘り込み面：3a面／P111より旧、P119との新旧不明
P 29	57×22～×22	9.25	掘り込み面：3b面
P 30	73×50×11 ?	9.37	掘り込み面：3b面／3口のピットが重複・新旧不明
P 36	33×32×20	9.28	掘り込み面：3b面
P111	44×34～×14	9.46	掘り込み面：3a面／P28より新
P112	26×21×12	9.59	掘り込み面：2面
P114	46×30×16	9.35	掘り込み面：不明／P6との新旧不明
P115	48～×345～×23	8.82	掘り込み面：3b面／溝1より旧
P119	23×(37)×10	9.40	掘り込み面：3a面／P28・120との新旧不明
P120	23×(24)×11	9.39	掘り込み面：3a面／P119との新旧不明
P121	67×39×10	9.35	掘り込み面：3b面／P122と新旧不明
P122	60～×22～×53	8.95	掘り込み面：3b面／P121と新旧不明
P131	35×16～×15	9.15	掘り込み面：3b面
P132	61×31～×20	9.29	掘り込み面：3b面／溝状遺構1との新旧不明
P163	35～×36×29 (40)	9.25	掘り込み面：3a面？／土坑3と新旧不明 ※()内は3a面からの深さ

3面遺構出土遺物 (図14)

土坑8

1はロクロ成形のかわらけである。2は白磁の口元皿で、外底面は露胎である。器表面には細かいキズが多く見られる。3は常滑窯の片口鉢I類である。口縁部周辺の内外は厚く灰を被っている。4は鉄製品・釘である。その他、白磁口元皿の体部片、常滑窯の甕の胴部片が出土している。

土坑2

5～16はロクロ成形のかわらけである。底径が広く背低のものが多く、5・6の見込みは折れて立ち上がり、外面体部中位に強い稜を持つ。口縁部は肥厚して外反気味で、口唇部は丸く収まる。7・8は開いて立ち上がる。8は器壁が薄い。9・10は器壁薄く内湾して立ち上がる。11は器壁が厚く口縁部は外反し、外面のロクロ目は強い。12～14は背低で直立気味、15・16は丸みを持って開いている。17は龍泉窯系青磁鎚蓮弁文碗、18は龍泉窯系青磁無文碗で、18の高台畳付は釉を掻き取られている。19は常滑窯の甕である。20は土錐、21は鉄製品・釘である。その他、瓦の小片が1点出土している。

土坑3

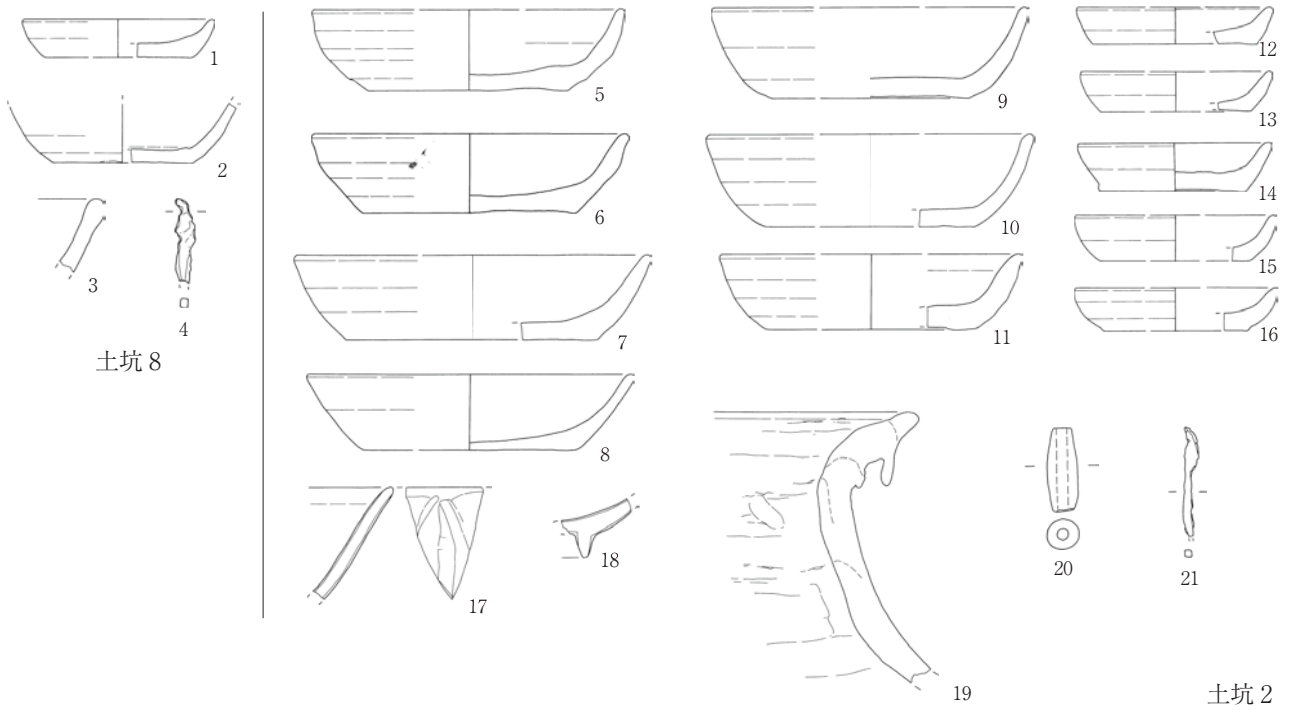
22は鉄製品・釘である。その他、かわらけ小片、常滑窯片口鉢I類の小片が1点ずつ出土している。

土坑4

23はロクロ成形のかわらけである。底径が広く背低で、体部は直線的で口唇部を尖らせながら外反する。24は瀬戸窯の卸皿である。胎土は灰色を呈し緻密で硬質に焼き上がる。外底面は回転糸切り後、ヘラないし指頭によるナデ調整が施されている。

土坑5

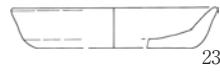
25～30はロクロ成形のかわらけである。いずれも底径が大きく背低で、25～27は体部に稜を持ち、



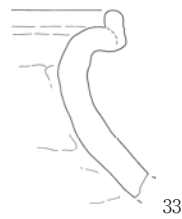
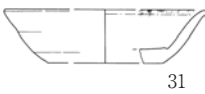
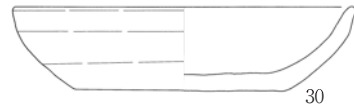
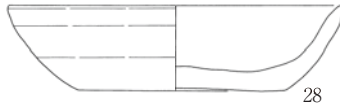
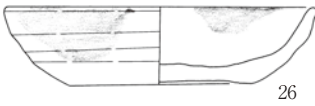
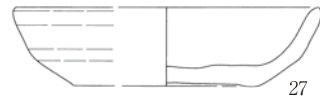
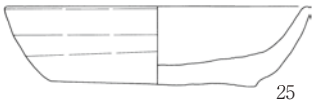
土坑 3



土坑 4



土坑 5



P6



P28

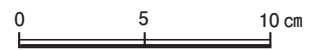
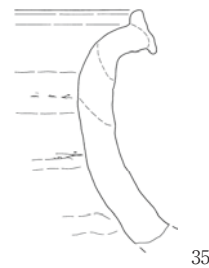


图 14 3面遺構出土遺物

外面のロクロ目が強い。26は口縁部から内外体部にかけて、ススが付着している。ススは外面側が濃く、内面側は薄く疎い。28～30は口縁部下に稜を持ち、28・29は開いて立ち上がる。30は器壁が薄めで内湾気味、口縁部は外反して尖る。31は白磁の口元皿で、底面は露胎である。口唇部内面にタールが付着している。32は磁器で何らの足である。器種は特定できない。胎土は白色を呈し比較的粗い。外面は足設置部まで全面施釉され、内面は露胎である。釉調は鈍い緑灰色で白濁気味、色調から青磁とも思えるが、青磁では類例を知らない形態のため、青白磁の焼成不良品の可能性を提示しておく。33は常滑窯の甕である。胎土は緻密で丁寧にナデ調整され器表面は平滑に仕上げられている。その他、龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗の小片、獣骨が出土している。

ピット

34はP6から出土した鉄製品・釘、35はP28から出土した常滑窯の甕である。

3b面出土遺物(図15)

以下は3a面構成土、及び3b面上包含層から出土した遺物である。1～16はロクロ成形のかわらけである。1・4・5は見込みが折れて立ち上がる。体部中位下に強い稜を持ち、4・5は外面のロクロ目が強い。6・7は口縁部下に稜を持って口唇部を尖らせながら外反する。7は器壁が薄く、背低で開いている。8は背低で直立気味、9～11は外反して立ち上がり体部中位に稜を持つ。12～15は体部に丸みを持って緩く開いている。16は底径が小さく背高で、器形は「薄手丸深」に似るが胎土が精製されていない。17・18は常滑窯の製品で17は甕、18は片口鉢Ⅱ類である。18は内面から外面口縁部下にかけて横ナデ、外面体部は縦方向にヘラでナデ上げているようだが不明瞭である。19は土器質火鉢である。内外面横ナデ、外面底部脇はヘラによるケズリ気味のナデ、底面は板状の工具が当たった痕跡が見受けられる。20は常滑窯の陶片を転用したもの。器裏面を図示した。全面に擦痕が認められる。21は鉄製品・釘である。

その他、龍泉窯系青磁酒会壺(写真図版10-①)、瀬戸窯の皿類、常滑窯片口鉢Ⅰ類、獣骨が出土している。青磁酒会壺は、灰色味のある白色を呈するやや粗い素地で、施釉は非常に厚く、釉調は緑青色透明で細かい貫が入っている。

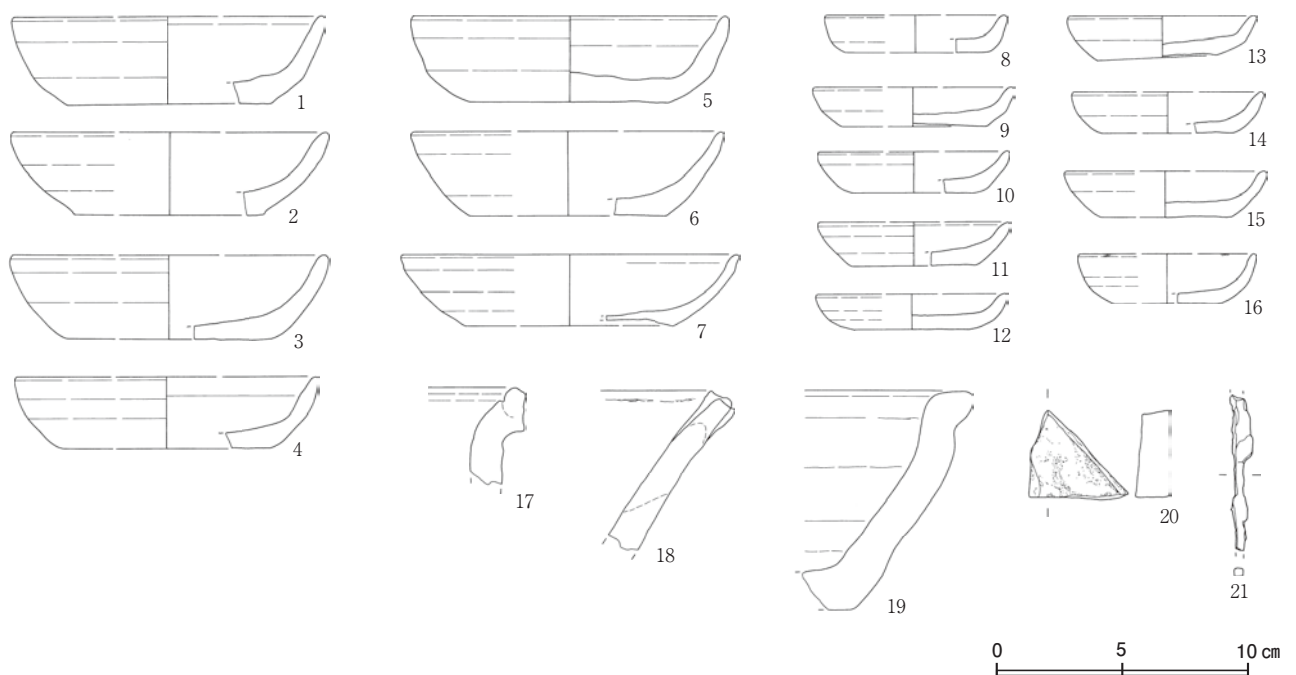


図15 3b面出土遺物

第4節 中世第4面 (図16～18)

第4面は径数10cmを超える大型土丹塊による地形層を主体として構成され、I区で海拔8.97～9.25m、II区で9.28～9.40m付近に位置する。I区南側は上面遺構による削平のため土丹地形面を失ったものと思われる。II区は北側が大型土丹塊、南側は土丹を混じえる砂質土が基盤となっている。検出された遺構はピット32口である。

ピット (図17)

検出されたピットからセット関係が明確な並びは見出せない。個々の概要は3面ピット表を参照されたい。

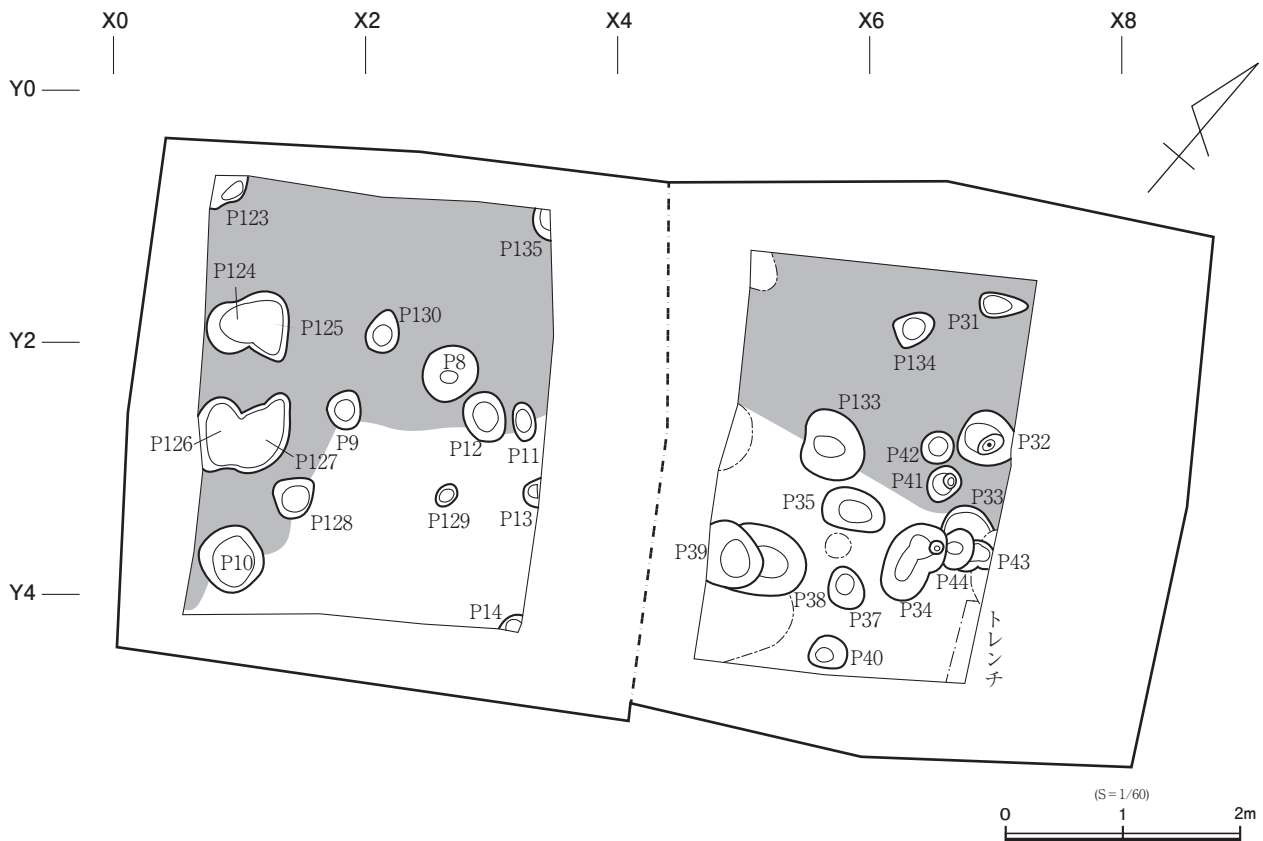


図16 4面遺構配置図

表4 4面ピット表

遺構名	長径 × 短径 × 深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
P 8	47×43×38	8.86	
P 9	29×26×18	9.01	
P 10	51×49×37	8.80	
P 11	30×16×12	9.08	
P 12	42×34×30	8.87	
P 13	22×11～×8	9.10	
P 14	15～×13～×12	8.97	
P123	25～×25～×17	8.83	
P124	40×36～×30	8.72	P125 との新旧不明
P125	48×30～×44	8.68	P124 との新旧不明
P126	60×28～×20	8.94	P127 との新旧不明
P127	70×42～×20	8.98	P126 との新旧不明、北側別ピットと重複か
P128	32×28×12	9.02	
P129	17×15×15	9.03	
P130	34×25×11	9.08	
P135	23×15～×23	8.94	
P 31	36×19×21	9.17	
P 32	46～×44×43	8.91	
P 33	44～×24～×16	9.24	P43・44・161 との新旧不明
P 34	36×38～×33	8.96	P161 との新旧不明
P 35	50×32×31	8.89	
P 37	30×29×16	9.15	
P 38	60～×54×31	8.89	P39 に切られる
P 39	53×43～×37	8.89	P38 を切る
P 40	29×25×14	9.17	
P 41	28×24×29	9.04	
P 42	25×24×15	9.13	
P 43	20×16～×11	9.20	P33・44 との新旧不明
P 44	33×23～×27	9.04	P33・44・161 との新旧不明
P133	54×51×27	9.00	
P134	32×25×21	9.13	
P161	43×30～×35	8.94	P34・44 との新旧不明

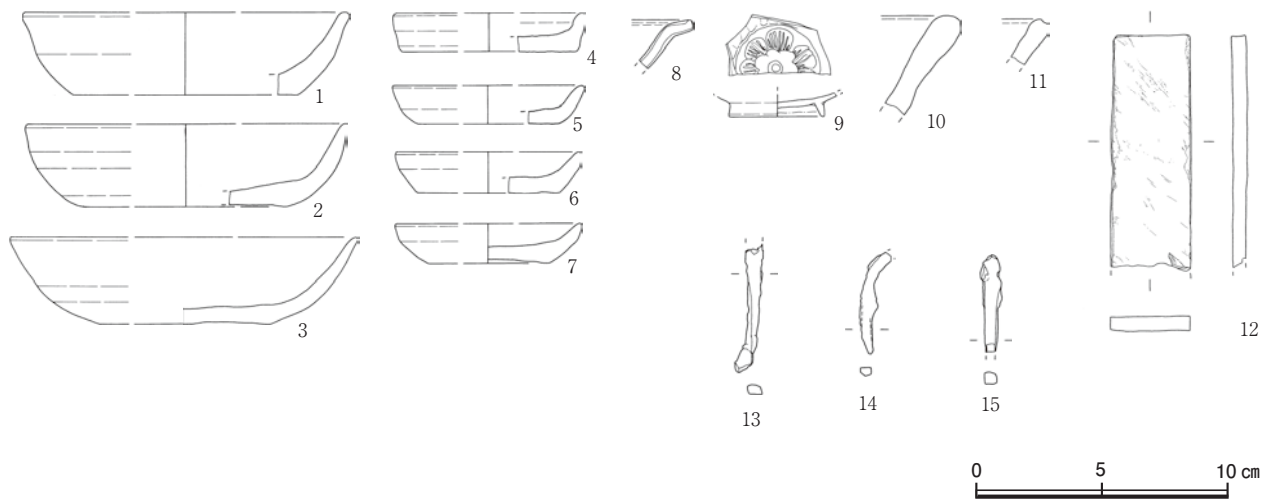


図17 4面出土遺物

4面出土遺物 (図17)

以下は3面構成土、及び4面上包含層から出土した遺物である。1～7はロクロ成形のかわらけである。1・2は底径が大きく背低で体部中位に稜を持ち、1は口縁部が外反する。3は器壁薄く、浅く開いた碗型を呈する。4は底径大きく背低で、直立して立ち上がる。5・6も底径大きく、5の見込みは折れて立ち上がる。6は外反して立ち上がり、体部上位に稜を持つ。7は体部上位に強い稜を持ち、口縁部はやや外反する。8は龍泉窯系青磁折縁鉢である。釉調は緑青色半透明で、厚く施釉されている。9は白磁印花文皿で、内底中央に陽刻された梅文を配し、円形の陽刻圏線から外へ放射線が延びている。施釉は薄く、高台置付と外底面中央の釉は拭き取られている。10・11は常滑窯の片口鉢I類である。10は丁寧なロクロナデが施され、口縁部は肥厚している。11は長石粒が多い粗胎で、器表面は濃緑色の自然釉を被っている。口唇端は浅い沈線が巡っている。12は鳴滝・中山産の仕上砥である。下端は欠損、上端・両側縁は制作時の成形痕が残る。表面が砥面として使用されている。裏面は剥離しているが、剥離後も設置面として継続使用されており摩滅している。13～15は鉄製品・釘である。

その他、4面までに龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗、渦卷文を陰刻された景德鎮窯青白磁梅瓶の胴部小片(写真図版10-②)、常滑窯甕、土器質火鉢、獣骨が出土している。

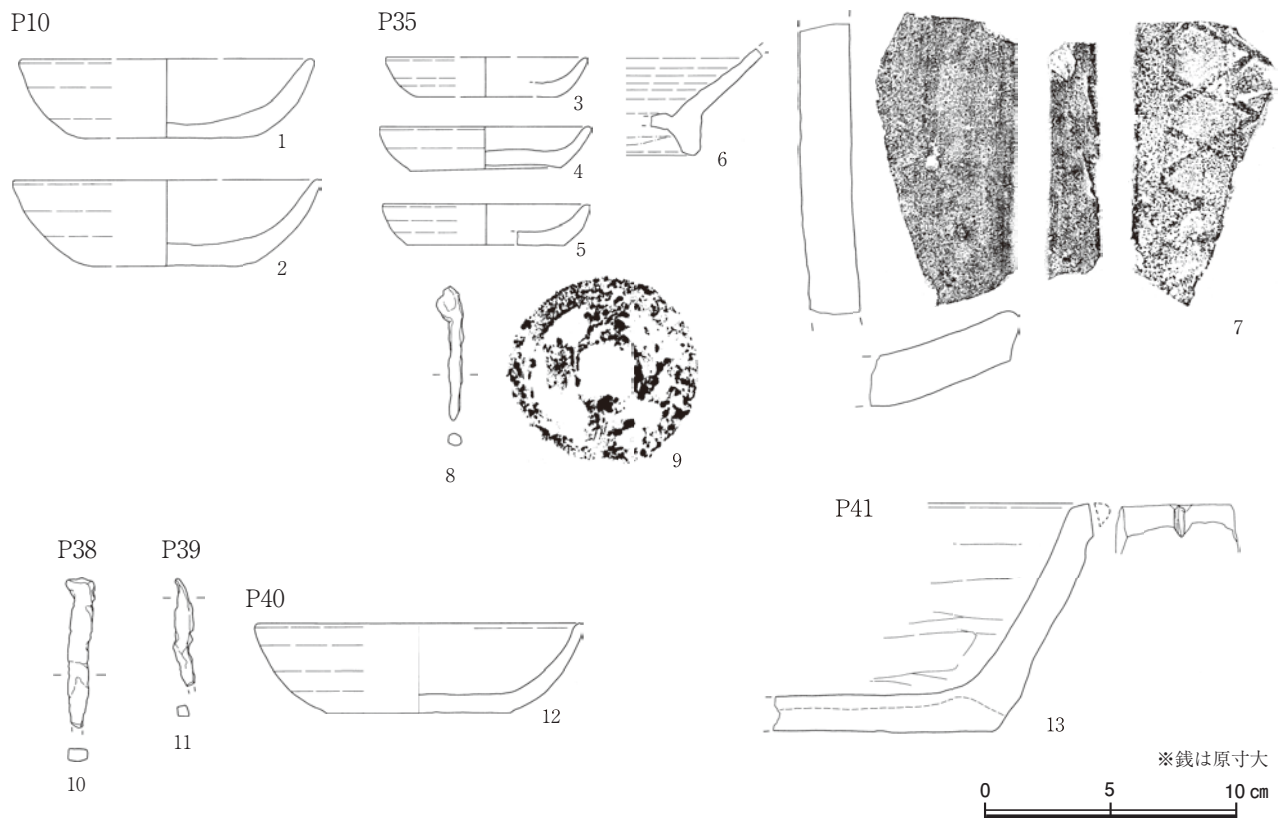


図18 4面遺構出土遺物

4面遺構出土遺物 (図18)

1・2はP10から出土したロクロ成形のかわらけである。いずれも浅い碗型を呈し口縁部は弱く外反、2は口縁部下が摘まれて外反している。3～9はP35から出土したもの。3～5はロクロ成形のかわらけで、底径が大きく背低で、3・4は直線的に開き、5は器壁厚手で体部中位に弱い稜を持っている。6は青白磁で水注の底部片と思われる。外面を薄く施釉している。器表面は失透気味で細かいブクが出ており、2次焼成を受けているかもしれない。高台畳付より内側は露胎である。高台畳付は内外から削り込まれて面取りされ、断面三角形を呈する。内面のロクロ目は強い。7は平瓦で、胎土は白色粒子を混じえる砂質土で焼き上りは硬質。凹面はナデ調整が施されている。凸面はX字状斜格子叩きで表面の離れ砂がよく残る。側端から凹面の端にかけては丁寧にナデ調整され、角は丸く収まる。8は鉄製品・釘。9の銭は篆書で元〇〇寶と読めるが、遺存状態が悪く詳細は不明である。10はP10から、11はP39から出土した鉄製品・釘である。12はP40から出土したロクロ成形のかわらけで、器壁薄めで浅い碗型を呈する。13はP41から出土した土器質火鉢で、口唇端を欠損するが、焼成後に穿たれた孔が遺存している。被熱により爆ぜたものか、内底面は剥離している。内外面横ナデ、外面体部底部脇は横位のヘラケズリ、底部は中心付近に回転糸切りと思われる痕跡が残る。

その他、P34から龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗が出土している。

第5節 中世第5面 (図19～24)

第5面では2時期の遺構検出面を確認している。土丹地形層を主体に構成される上位の面を5a面、土丹地形下の茶褐色砂質土を基盤とする面を5b面とする。

・5a面 (図19)

I区では海拔8.9～9.0m付近に位置するが、北壁際のわずかな範囲で検出されているにすぎず、平面的な調査は行なわれていない。II区では海拔9.05～9.19m付近に位置し北側は土丹地形面、南側は土丹粒子・かわらけ片等を混じえる粘質土が基盤となる。検出された遺構は土坑1基、ピット8口である。

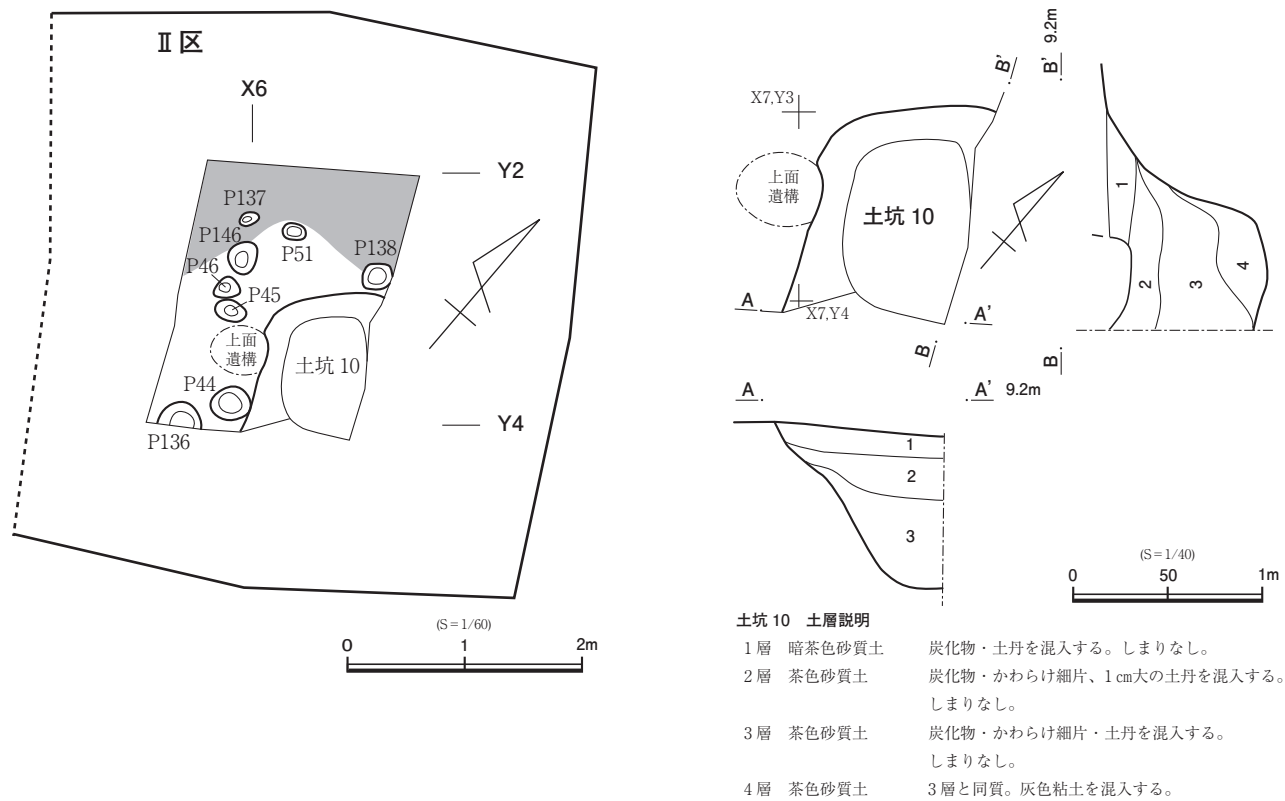


図19 5a面遺構配置図・土坑10

土坑10 (図19)

X7,Y3付近に位置する5a面からの掘り込みである。検出された規模は118×87cmまで、深さは90cmで、底面高は8.08mである。覆土は茶色砂質土を基調とする。

ピット (図19)

ピットは8口検出されているが、セット関係が明確な並びは見いだせない。個々の概要は5面ピット表を参照されたい。

表5 5a面ピット表

遺構名	長径 × 短径 × 深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
P 44	31×35×33	8.73	
P 45	25×15×15	8.78	
P 46	21×15×17	8.79	
P 51	17×13×19	8.98	
P136	35×19～×7	8.98	
P137	38×19×27	9.54	
P138	23×22×10	9.00	
P146	28×23×27	8.89	

5a面出土遺物 (図20)

以下は4面構成土、及び5a面上包含層から出土した遺物である。1はロクロ成形のかわらけで、見込みは折れて立ち上がり、外面体部中位に稜を持つ。2～4は常滑窯の製品である。2は片口鉢I類で、口唇部はわずかに灰を被る。3は甕で、胎土中に長石粒が非常に多く含まれる。4は壺類の底部片で、内底面は厚く降灰している。外底面は高台貼付け後周縁ナデ、中央は未調整で目跡が残る。外面高台脇には板状の工具が当たった痕跡が見受けられる。

その他、龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗の小片が1点出土している。

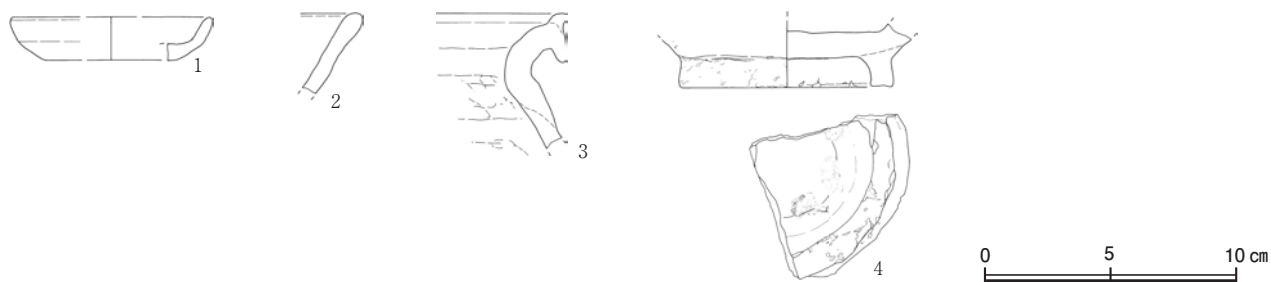


図20 5a面出土遺物

土坑10出土遺物 (図21)

1～3はロクロ成形のかわらけである。1は器壁が比較的薄く体部中位に弱い稜を持つ。2・3は底径が大きく背低で、2は丸みを持ち、3は外反気味に立ち上がる。4は常滑窯の甕胴部片で外面には格子文が押印されている。5は加工痕のある滑石鍋の口縁部残欠である。欠損面に一部擦痕が認められる。欠損前の加工痕は、外面口縁部下に削り痕、鏝の上下基部に先端の尖った工具による線状の痕跡、鏝端を刃物で穿った痕跡が認められる。その他、常滑窯の片口鉢I類の小片が出土している。

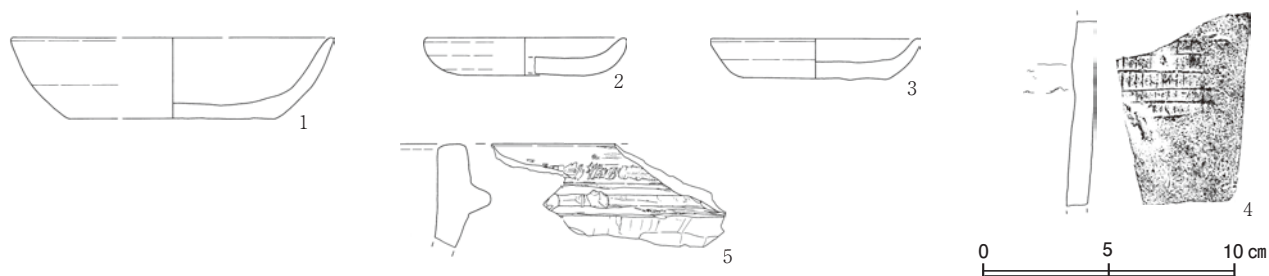


図21 土坑10出土遺物

・5b面 (図22)

I区で海拔8.74～8.82m、II区で8.76～8.81m付近に位置する。茶褐色砂質土を基盤層とする生活面である。検出された遺構は土坑5基、ピット20口である。

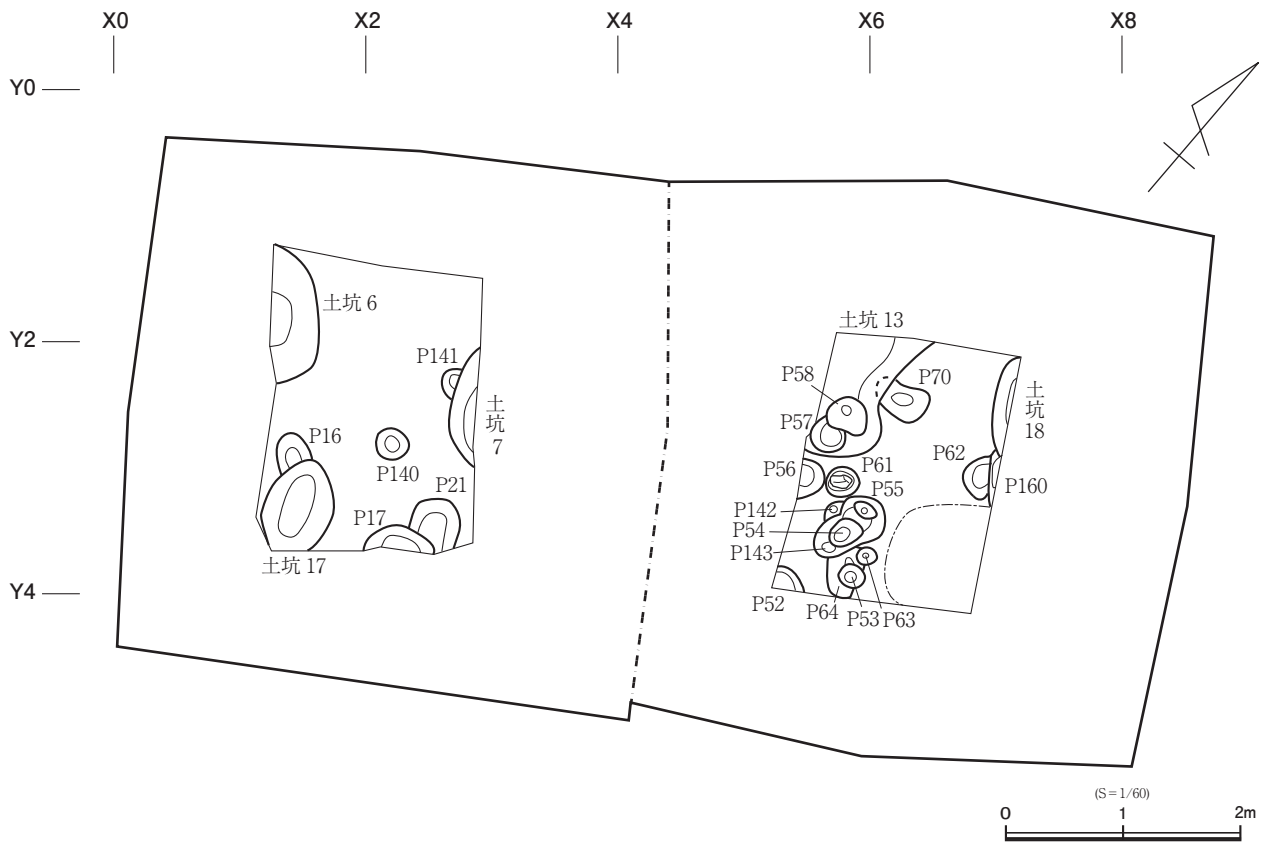


図22 5b面遺構配置図

土坑6 (図23)

X1,Y1付近に位置する。検出された規模は110×39cmまで、深さは69cmで、底面高は8.19mである。

土坑7 (図23)

X3,Y2付近に位置する。P141を切る。検出された規模は96×22cmまで、深さは60cmで、底面高は8.23mである。

土坑13 (図23)

X6,Y2付近に位置する。検出された規模は102×80cmまで、深さは80cmで、底面高は8.28mである。覆土上の窪地は5a面を構成する土丹層で埋められている。

土坑17 (図23)

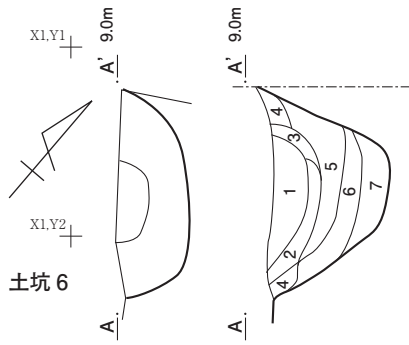
X1,Y3付近に位置する。検出された規模は80×56cmまで、深さは42cmで、底面高は8.46mである。

土坑18 (図23)

X7,Y2付近に位置する。検出された規模は83×15cmまで、深さは48cmで、底面高は8.45mである。

ピット (図22)

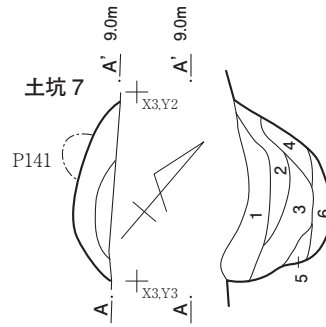
ピットは20口検出されているが、セット関係が明確な並びは見いだせない。個々の概要は5面ピット表を参照されたい。



土坑6

土坑6 土層説明

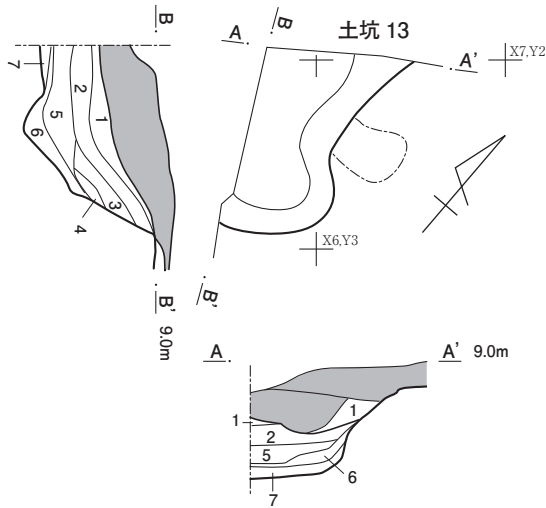
- | | |
|-----------|--------------------------------|
| 1層 灰黄色粘質土 | 3~5cm大の土丹、炭化物を混入する。粘性弱い。しまりなし。 |
| 2層 灰黄色砂質土 | 鉄分を含む。しまりなし。 |
| 3層 暗灰色砂質土 | 2~3cm大の土丹を混入する。しまりなし。 |
| 4層 黒茶色砂質土 | 混入物を含まない。しまり弱い。 |
| 5層 灰茶色砂質土 | 1cm大の土丹を混入する。しまりなし。 |
| 6層 灰色粘土 | 3cm大の土丹を混入する。粘性あり。しまりなし。 |
| 7層 黒灰色砂質土 | 貝殻片、炭化物を含む。粘性あり。しまりなし。 |



土坑7

土坑7 土層説明

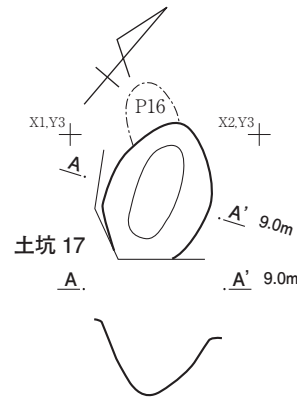
- | | |
|----------|---------------------------|
| 1層 茶色砂質土 | 貝粒子・土丹粒子を含む。粘性なし。ややしまる。 |
| 2層 茶色砂質土 | 黄砂が若干混入する。しまりなし。 |
| 3層 茶色砂質土 | 灰色粘土・炭化物を含む。粘性ややあり。しまりなし。 |
| 4層 茶色砂質土 | 3層と同質だが、粘性に欠ける。 |
| 5層 茶色砂質土 | 3層と同質だが、炭化物の量が多い。 |
| 6層 茶色砂質土 | 混入物を含まない。しまりなし。 |



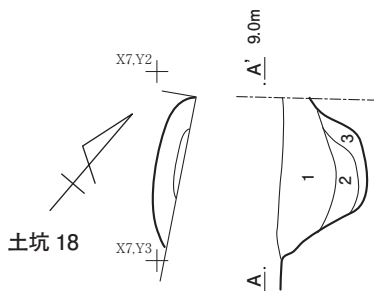
土坑13

土坑13 土層説明

- | | |
|------------|---------------------------|
| 1層 暗灰茶色砂質土 | 炭化物、かわらけ細片を含む。粘性なし。しまりなし。 |
| 2層 暗灰茶色砂質土 | 1層と同質。褐鉄分が多い。 |
| 3層 暗灰茶色砂質土 | 1層と同質。褐鉄分が多い。炭化物を多く含む。 |
| 4層 暗灰茶色砂質土 | 1層と同質。 |
| 5層 暗灰茶色砂質土 | 1層と同質。褐鉄分が多い。灰色粘土を混入する。 |
| 6層 暗灰茶色砂質土 | 5層より灰色粘土が多い。 |
| 7層 暗灰茶色砂質土 | 5層より灰色粘土が多く、灰茶色砂を含む。 |



土坑17



土坑18

土坑18 土層説明

- | | |
|-----------|---------------------------|
| 1層 茶色砂質土 | 15cm大の土丹を混入する。粘性なし。しまりなし。 |
| 2層 茶色砂質土 | 灰色粘土を混入する。しまりなし。 |
| 3層 暗茶色砂質土 | 2層と同質。灰色粘土の量が多い。 |

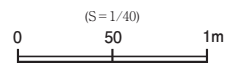


図23 5b面検出遺構

表6 5b面ピット表

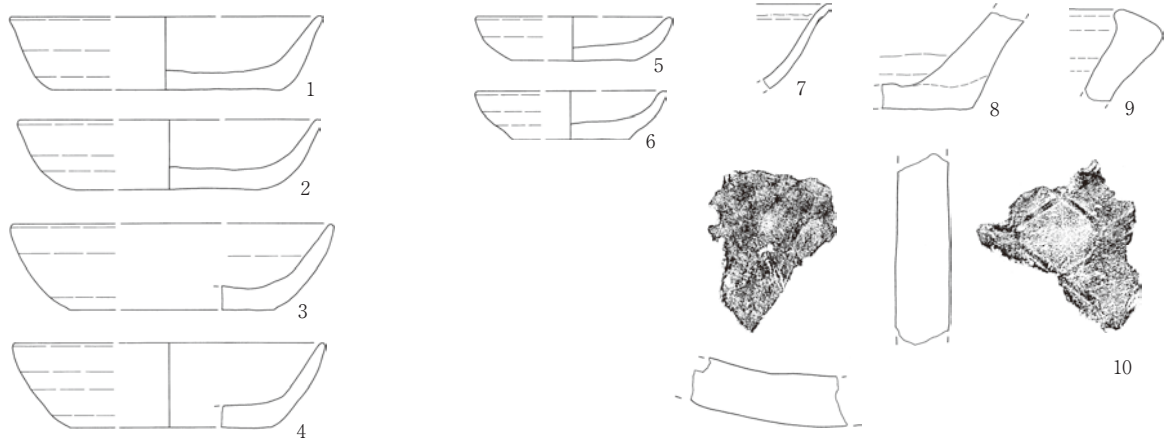
遺構名	長径 × 短径 × 深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
P 16	30~×28×15	8.58	土坑 17 との新旧不明
P 17	57×22~×12	8.63	P21 を切る
P 21	40~×38×30	8.44	P17 に切られる
P 52	22~×17~×21	8.59	
P 53	20×20×10	8.70	P64 を切る
P 54	27×19×38	8.42	P143 との新旧不明
P 55	38×30~×31	8.49	P64 を切る。P54・142・143 との新旧不明
P 56	30×19~×26	8.55	
P 57	25×24~×22	8.53	P58 との新旧不明
P 58	33×30×28	8.44	P57 との新旧不明
P 61	25×25×30	8.45	磔 (20×10× ?)
P 62	28×26~×13	8.57	P160 との新旧不明
P 63	16×14×8	8.72	P64 を切る
P 64	35~×31×48	8.33	P53・55・63・143 に切られる
P 70	42×39×54	8.19	土坑 13 との新旧不明
P140	25×24×13	8.70	
P141	24×14~×8	8.84	土坑 7 に切られる
P142	21~×13~× ?	?	P55・143 との新旧不明
P143	33~×31×25	8.54	P64 を切る。P54・55 との新旧不明
P160	43~×10~×14	8.57	土坑 18、P62 との新旧不明

5b面出土遺物 (図24-1~10)

1~10は5a面構成土から出土した遺物である。1から6はロクロ成形のかわらけで、1~4は底径広めで背低の器形を採る。1は直線的に立ち上がり口縁部は外反、2は体部に丸みがあり口縁部は弱く外反する。3・4は外反して立ち上がり体部上位の弱い稜を経て口唇部は尖る。5・6は丸みを持って浅く開く器形で、6は底径が比較的小さい。7は白磁の口元皿である体部下半に丸みを持ち、上位は外面口縁部下を沈線状に削り込んで屈曲し外反する。8は常滑窯の片口鉢Ⅱ類で、底径17cm程度になると思われる。内外面横ナデ、外面体部底部脇は縦位のヘラが当たっている。内面は使用により、よく摩滅している。9は土器質火鉢で口唇内側端は凸帯状を呈する。10は平瓦で、胎土は粘質気味できめ細かい。焼き上がりは気孔多く酸化気味でやや軟質。凹面は斜位のナデ調整で、糸切り痕が残る。凸面はX字状斜格子叩きが施され、表面の離れ砂は粒子が細かい。

その他、龍泉窯青磁鎬蓮弁文碗、青白磁の瓜型水注(写真図版10-④)の取手基部小片、常滑窯の片口鉢Ⅰ類・甕、獣骨が出土している。龍泉窯青磁鎬蓮弁文碗は細めの蓮弁を陽刻した体部片で、素地は白色から灰白色を呈し比較的粗め、釉調は明緑青色透明で細かい貫入が入る。青白磁の瓜型水注は遺存する取手部に沈線が3条刻まれており、素地は白色を呈し緻密で粘性がある。釉調は薄青色透明で施釉は比較的薄い。器表面には細かい傷が多く見られる。

5b 面上包含層

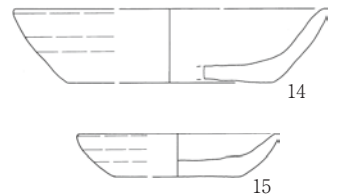


5b 面遺構

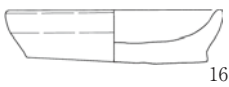
土坑 6



土坑 13



P16



P70

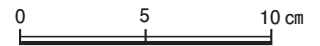


図24 5b面・5b面遺構出土遺物

5b面遺構出土遺物 (図24 - 11 ~ 17)

11 ~ 13は土坑6から出土したもの。11はロクロ成形のかわらけである。見込みは折れて立ち上がり、体部中位に強い稜を持つ。口唇部は外反しながら尖っている。12は滑石鍋片が転用されたもの。側縁は欠損部を除く全周に擦痕が認められ、よく摩滅している。器裏面は擦痕の他、鋭利な工具による線状の痕跡が重なっている。砥石として使用したものか。器表面側には疎い擦痕が認められる。13は鉄製品・釘である。その他、常滑窯の片口鉢I類、獣骨が出土している。

14・15は土坑13から出土したロクロ成形のかわらけである。14は体部下半が強いロクロナデのために凹み気味となる。15は丸みを持って浅く開いている。

16はP16から、17はP70から出土したロクロ成形のかわらけである。16は底部が厚く切り残されて高台状となる。底径が大きく、体部は丸みを持つが直立気味である。17も底部が切り残り厚い。体部は丸みを持って浅く開いている。

第6節 調査第6面 (図25～27)

第6面は古代の遺構確認面である。海拔8.5～8.6m付近に位置し、黒色弱粘質土層を基盤とする。検出された遺構は溝1条、土坑2基、ピット16口である。溝2は調査区壁土層で確認できる掘り込み面や覆土の状態から古代以前の遺構である可能性が高い。土坑20は古代以前の所産と思われるが、人為的な遺構かどうかは不明である。土坑14は上層に重なる遺構に攪乱されるため掘り込み面が曖昧である。ピットは、P19・20・22～24・67・69から中世の遺物が出土している。他ピットも古代以前の所産と見なしうる理由が見つからない。この面で検出されたピットのほとんどが上層の中世生活面で掘り込みを見逃した遺構と思われる。

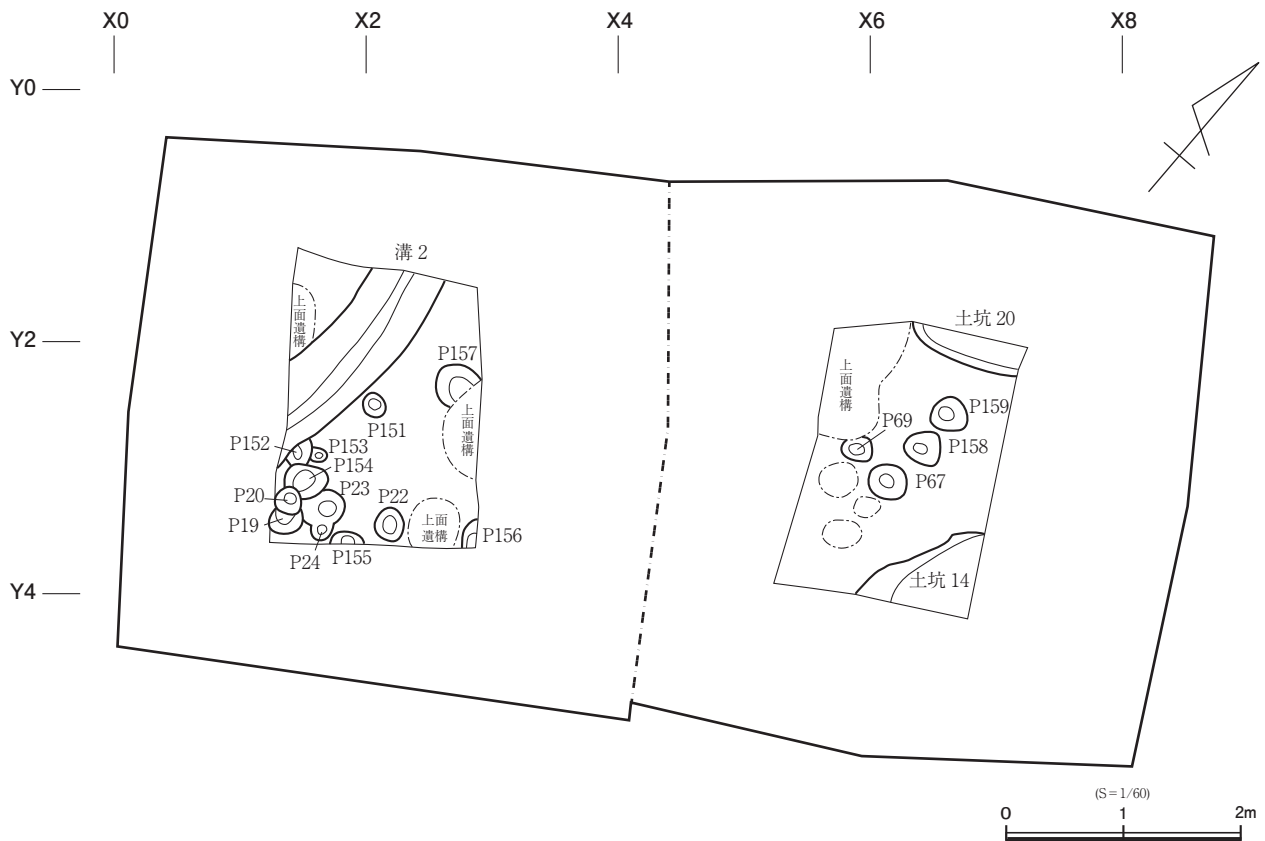


図25 6面遺構配置図

溝2 (図26)

X2,Y2付近に位置する。I区北西を緩い弧を描いて横切っている。検出された規模は、外周の直線距離で208cmまで。上端56～58cm、下端7～13cmで、深さは36cmである。底面高は8.17mで一定している。

土坑14 (図26)

X6,Y4付近に位置する。5a面の遺構・土坑10に覆土を削平されている。検出された規模は93×68cmまで、深さは45cmで、底面高は8.12mである。

土坑20 (図26)

X7,Y2付近に位置する。検出された規模は94×26cmまで、深さは16cmで、底面高は8.40mである。

ピット (図25)

個々のピットの概要は6面ピット表を参照されたい。

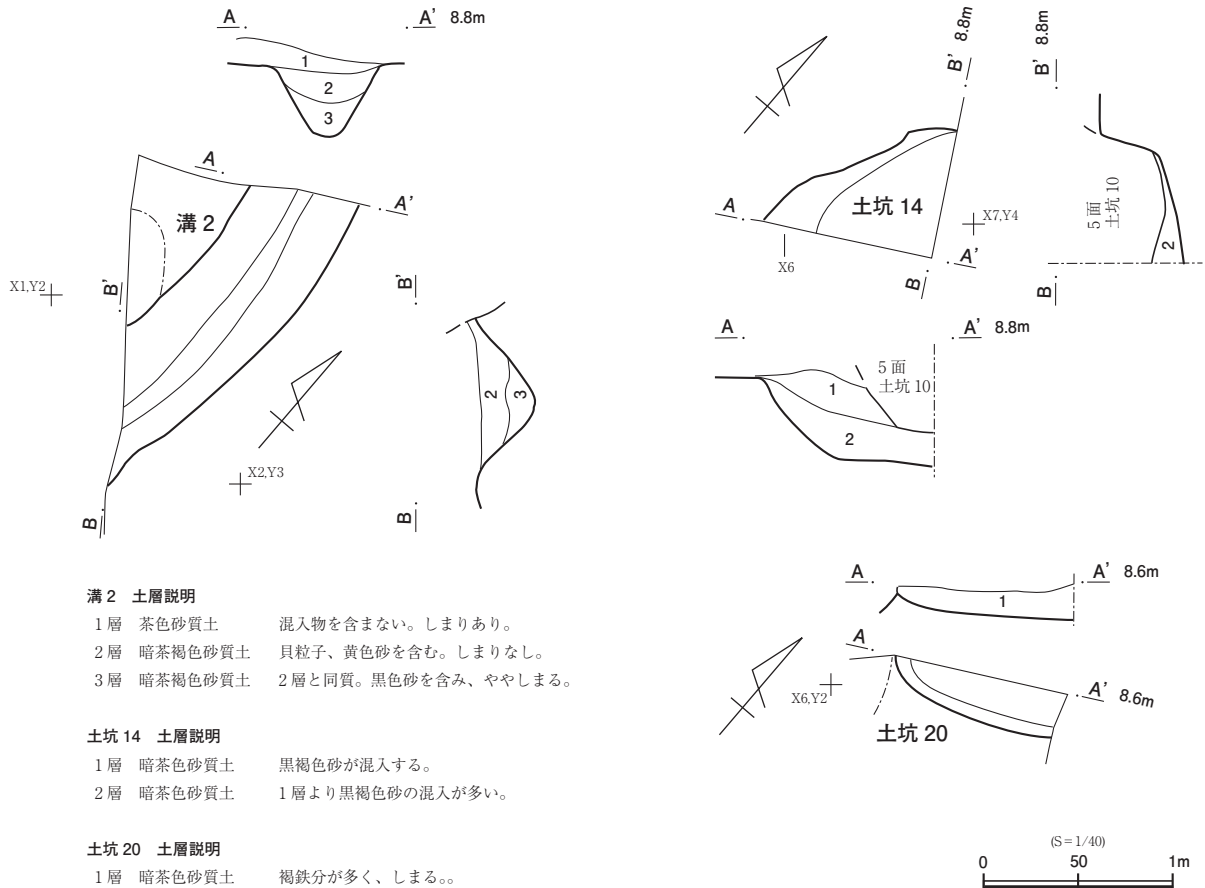


図26 6面検出遺構

表7 6面ピット表

遺構名	長径 × 短径 × 深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
P 19	25 × 25 × 35	8.16	P20・23 との新旧不明
P 20	23 × 21 × 35	8.16	P19・23・154 との新旧不明
P 22	26 × 23 × 10	8.40	
P 23	32 × (28) × 23	8.27	P24 との新旧不明
P 24	17 × 14 × 22	8.28	P23 との新旧不明
P 67	33 × 29 × 17	8.37	
P 69	25 × 19 × 20	8.35	
P151	19 × 17 × 6	8.43	
P152	23 × 22 × 8	8.46	P153・154 との新旧不明
P153	13 × 12 × 8	8.46	P152 との新旧不明
P154	35 × 25 × 8	8.46	P20・23・152 との新旧不明
P155	26 × 9 × 17	8.39	
P156	23 × 7 × 12	8.46	
P157	35 × 28 × 12	8.47	
P158	28 × 28 × 8	8.43	
P159	29 × 27 × 5	8.48	

6面出土遺物 (図27)

1・2は5b面下で6面検出までに出土した遺物である。1はロクロ成形のかわらけで、底径が大きく背低。体部は外反しながら直立気味に立ち上がる。2は鉄製品で上端から下端に向かい厚さを減じるもの。裏面・上端は平坦に仕上げられている。表面・側縁は遺存状態が悪く、本来の形状を明確にできない。用途は不明である。

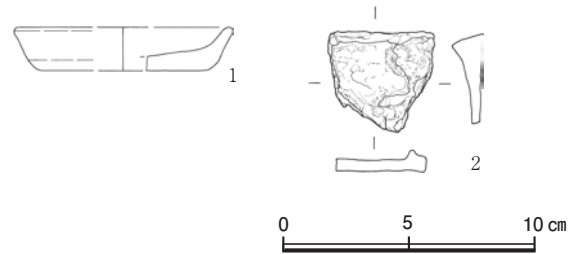


図27 6面出土遺物

第7節 古代以前の遺物 (図28)

中世期の土層、遺構覆土に混入していたものから実測可能なものを抽出した。1・2はロクロ土師器坏で、10世紀代の所産と思われる。3もロクロ土師器坏と思われるが、器表面の摩滅が著しく詳細は不明である。その他、古墳時代後期以降と思われるの土師器・須恵器が少量出土しているが、小片のため図示できない。

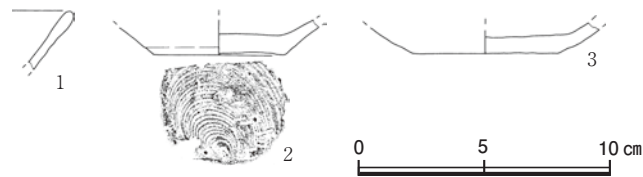


図28 古代以前の遺物

第四章 まとめ

第1節 古代以前

古代の遺構確認面である調査第6面で確認された遺構の大半が中世期の生活面で見逃された掘り込みと思われる中で、溝2は層位的に古代以前の所産である可能性が高い。平面プランは緩く円形の軌跡を描いて調査区外へ続くもので、規模の大きい遺構に付帯するもの、何らを囲う性格のものかもしれない。出土遺物がなく年代は不明であるが、調査区内では7世紀後半から10世紀代の遺物が採集されている。

第2節 中世

笹目遺跡はこれまでの発掘調査の成果により、「笹目ヶ谷」の谷内と谷外となる区域とでの、土地利用の違いが指摘されていた。「笹目ヶ谷」内の調査では、山際の岩盤、谷部に堆積した黒色土上に土丹を利用した地形が繰り返され、屋地・寺院域と考えられる遺構の発見が報告されている。遺跡南部の県道鎌倉・葉山線沿い辺りは砂丘上に営まれる生活圏で、方形竪穴の検出など県道南の長谷小路周辺遺跡と連続する様子が伺え、浜地と同様の「場」を想定されている。今回の調査地点は笹目ヶ谷の開口部の南方40m辺りに位置し、砂質土層上に開発された遺跡である。中世以前の地形を復元するの手がかりとして、古代の土層・遺構に注目すれば、地点7で検出されている古代の埋葬遺構が海拔9.9mであるのに対し、本調査地点では古代の遺構確認面とされる黒褐色弱粘質土の検出レベルが海拔8.5～8.6mとかなり低いことがわかる。現況の地図を読み取ると、県道鎌倉・葉山線から北西方向に延びて本調査地点の東脇を通り、笹目ヶ谷奥まで達する道路付近の標高は、県道上で10.8m、本調査地脇で10.6mを測る。その先は谷開口部で11.2m、谷奥へ向かい13.4m、17.2m...と標高を増しており、本調査地周辺が最も標高の低い地域となっている。この辺りは砂丘背後の低地となり、砂質土を基盤とする北限に近いものと思われる。

今回調査の大要は、土丹地形を繰り返し、生活面を嵩上げていく土地利用の様子をよく示すものであった。土丹の利用は5a面の造成時に始まり、3面まで土丹地形の検出範囲は山寄りとなる調査区北側に偏っている。その後、部分的な造成(2面)を経て、調査区のほぼ全面に土丹地形が施行される1面へ至る地形範囲の拡張は、海浜部へ造成開発が進出していく様子を表すものかもしれない。中世の造成以前の細かな地形は、5a面の造成や5b面から掘り込まれた遺構による削平ため、明らかではないが、検出された生活面が北下がり傾向を示すことなどから、砂丘背後の緩傾斜が今少し続く辺りではなかったかと仮定している。砂丘と山稜の間で最も標高の低い地点が、本調査地よりも北側であれば、調査区北側に偏る土丹地形を、低地に向かう部分をより強く固める目的でなされたものと説明できよう。5a面から3面にかけて土丹地形が途切れた南側は、シルト土による軟弱な整地層となり、同一生活面上で硬軟の地盤が利用される調査結果である。地盤の境界に変化を求めたいが、土丹地形の途切れる辺りに何らの施設を想定できる様子は見受けられない。検出された遺構群にも立地による明確な差異は見いだせず、南側の軟弱な地盤側に比較的規模の大きい土坑が存在することが、わずかな違いと言える。調査結果から、遺跡の立地を踏まえ、やや不自然と思える土丹地形のあり方について、種々の可能性を探ってみたが、明瞭な答えを導きだすことはできなかった。報告者の力不足により整理しきれなかった部分は反省したい。

出土した中世期の遺物から層位ごとに年代の指標となり得る遺物を拾っていく。表9には調査で出土した中世遺物の集計を示した。5面以前は年代を特定出来る移入品に乏しく、出土遺物のほとんどを占める在地系のかわらけには、手づくね成形のものが含まれていない。5a面(4面構成土・5a面上包含層)

表8 遺物集計表

		～1面	1面遺構	1～3a(2)面	3a(2)～3b面	3(2)面遺構	3b～4面	4面遺構	4～5面	5面遺構	5～6面	6面遺構
かわらけ		ロクロ 43	ロクロ 10	ロクロ 51	ロクロ 69	ロクロ 128	ロクロ 74	ロクロ 48	ロクロ 52	ロクロ 160	ロクロ 37	ロクロ 26
白かわらけ		ロクロ 1		ロクロ 1						手づくね 1		
常滑	甕・壺	53		25	12	16	12	4	12	9	7	
	片口鉢Ⅰ類	2			4	2	2		2	2	1	
	片口鉢Ⅱ類	9			4				1			
瀬戸		5	1	5	1	2						
備前		3		1								
亀山						1						
土製品	瓦	1		1		1		1	1			
	土器質火鉢	2			2		1	1	1			
	瓦質火鉢	1				2						
	瓦器	1										
	土錘					1						
貿易陶磁	青磁	5		1		3	5	2	3			
	青白磁	1			2	1		1	2			
	白磁	3		1		3	2		3			
石製品	砥石			1					1			
	滑石	加工品 2								鍋加工品 1		
	石材?	チャート 1 軽石 1										
金属製品	銅銭	2						1				
	釘	9 + 32.9g	1	12 + 25.8g	4 + 9.6g	14 + 17g	6	7	1	6	4	
	不明鉄製品										1	
自然遺物	獣骨	2		3		1	1	4	3	2		2

と4面(3b面構成土・4面上包含層)からは13世紀後半の常滑窯の製品(図20-2・3、図17-10・11)が出土している。また貿易陶磁器は4面構成土からの出土が初現となる。3面では、土坑2から14世紀前半の常滑窯の製品(図14-19)が出土している他、瀬戸窯の製品が組成に加わっている。土坑4出土の瀬戸窯・卸皿(図14-24)は胎土や底部の調整などに古い要素が見られるが、詳細な年代はわからない。2面・3a面(1面構成土・2・3a面上包含層)・1面土坑9では14世紀前半代の瀬戸窯・常滑窯(図11-11～13・図8-2)の製品が出土している。1面検出までに出土した遺物には14世紀代の移入品の他、15世紀まで下るかわらけ(図7-3～6)が含まれていた。以上に各面の地形の様子を加味して整理すると、本遺跡の開発年代は13世紀中頃以降と思われる、土丹による地形が始まる5a面から4面までを13世紀後半代と考えたい。4面は広範囲の土丹地形が始まる時期で、大型の土丹塊が使用されていることや、貿易陶磁器の出土などから、ある程度経済的な基盤を持った階層による施行と想定出来るかもしれない。貿易陶磁器には市内遺跡でさほど出土が多いとは言えない酒合壺・水注ほか袋物の類や、印花文の押された白磁皿など良品が含まれており、3面以降出現する瀬戸窯製品のほとんどが鉢・皿といった日常雑器で占められるのとは異なる器種構成である。3面から2面は小規模地形が連続する時期で、遺物の質の変化と連動しているようにも見受けられる。14世紀前半代までをあてられる。1面は前代から引き続き土丹地形面に土坑・ピットが掘り込まれる構成で、2・3面からさほど隔たる時期とも思われず、14世紀代と考えたい。より新しい遺物は1面上に堆積する包含層ないし、近現代に削平された生活面の時期を示すものと思われる。

表9 遺物観察表

図	No	出土位置	遺物名	残存値	法 量	色調・胎土・釉調・(重さ)・備考
7	1	表採	龍泉窯系 青磁蓮弁文碗	体部片		素地：灰色精良 釉調：青緑色・半透明・白濁気味
7	2	表採	白磁 口元皿	口1/5 底3/5	口(11.2) 底6.0 高3.2	素地：白色精良 釉調：乳白色半透明・光沢あり
7	3	1面	かわらけ	口1部欠損	口11.0 底7.0 高3.4	淡橙色・混入物多め粉質土
7	4	1面	かわらけ	口2/5 底全	口(10.4) 底6.2 高3.3	淡橙色・混入物多め粉質土
7	5	1面	かわらけ	略完形	口6.6 底4.4 高2.1	橙色・混入物含む粉質土 口唇部スス付着
7	6	1面	かわらけ	略完形	口6.6 底3.8 高2.0	淡橙色・混入物含む粉質土 口縁部2次加工・内外面スス付着
7	7	1面	白かわらけ	口縁部片		黄色味白色・弱粉質精良土
7	8	1面	龍泉窯系 青磁双魚文鉢	底部片		素地：灰白色・やや粗 釉調：青緑色失透・貫入あり
7	9	1面	龍泉窯系 青磁筒型香炉	口縁部片		素地：淡黄色 釉調：草緑色半透明・貫入あり
7	10	1面	白磁 口元皿	底1/6	底(5.0)	素地：灰白色精良 釉調：灰白色半透明・貫入あり
7	11	1面	瀬戸窯 卸皿	口縁部片		素地：淡黄色・弱砂質土 釉調：灰褐色灰釉・ハケ塗り
7	12	1面	瀬戸窯 折縁深皿	口縁部片		素地：黄色味灰白色・弱砂質土 釉調：濃緑色灰釉
7	13	1面	瀬戸窯 折縁深皿	底部片		素地：黄色味灰白色・弱砂質土 釉調：緑灰色灰釉
7	14	1面	瀬戸窯 折縁深皿	底1/5	底16.0	素地：黄色味灰白色・弱砂質土 釉調：淡灰褐色灰釉
7	15	1面	常滑窯 片口鉢Ⅰ類	口縁部片		灰色・長石粒多く硬質
7	16	1面	常滑窯 甕	口縁部片		暗灰色・長石粒含み堅緻 器表：茶色
7	17	1面	常滑窯 甕	胴部片		暗灰色・長石粒含み堅緻 器表：灰茶色
7	18	1面	常滑窯 片口鉢Ⅱ類	口縁部片		淡褐色・長石粒、小礫含む粗土・軟質
7	19	1面	常滑窯 片口鉢Ⅱ類	口縁部片		暗灰色・長石粒少なく緻密 器表：暗赤色
7	20	1面	常滑窯 片口鉢Ⅱ類	底部片		橙褐色・長石粒多め粗土
7	21	1面	備前窯 播鉢	口縁部片		赤色・白色粒子含む弱砂質良土 器表：暗茶色
7	22	1面	備前窯 播鉢	体部片		灰色・粘質土 器表：暗赤色
7	23	1面	土器質火鉢	口縁部片		黒色・透明粒多い砂質土 器表：暗褐色

図	No	出土位置	遺物名	残存値	法 量	色調・胎土・釉調・(重さ)・備考
7	24	1面	瓦質火鉢	口縁部片		灰白色・小礫含む砂質土・気孔多い 器表：暗灰色
7	25	1面	丸瓦	残欠	長6.5～ 幅5.5～ 厚1.2	灰色・白色粒含む砂質精良土・硬質
7	26	1面	研磨痕のある 陶片		高6.7 幅5.4 厚1.2	常滑甕転用/灰白色・長石微粒多く緻密 器表：褐色
7	27	1面	研磨痕のある 陶片		高3.6 幅2.1～ 厚1.4	常滑甕転用/橙褐色・弱粘質土・軟質
7	28	1面	滑石加工品		長4.3 幅2.9～ 厚1.7	
7	29	1面	滑石加工品		長4.5 幅2.0 厚1.2	
7	30	1面	チャート		長3.2 幅2.7 厚1.6	
7	31	1面	鉄製品 釘		長5.4～ 幅0.35 厚0.4	重さ7.8 g
7	32	1面	鉄製品 釘		長4.7～ 幅0.25 厚0.25	重さ2.9 g
7	33	1面	鉄製品 釘		長5.8～ 幅0.55 厚0.35	重さ4.5 g
7	34	1面	鉄製品 釘		長4.4～ 幅0.45 厚0.2	重さ3.0 g
7	35	1面	銅製品 銭		外径2.41 孔径0.67 厚0.1	重さ1.7 g /熙寧元寶? 楷書 初鑄 1068年
7	36	1面	銅製品 銭		外径2.35 孔径0.67 厚0.1	重さ2.9 g /○○○寶
8	1	1面 土坑9	かわらけ	口～底1/5	口(6.8) 底(4.8) 高1.5	橙色・混入物多い砂質土
8	2	1面 土坑9	瀬戸窯 折縁深皿	口縁部片		素地：黄色味白色・砂質土・緻密 釉調：淡緑灰色灰釉ハケ塗り
8	3	1面 P1	鉄製品 釘		長2.5～ 幅0.45 厚0.3	重さ1.9 g
8	4	1面 P4	内折れかわらけ	略完形	口4.0 底3.4 高0.7	淡橙色・混入物少なめ弱砂質土
10	1	2面 落ち込み1	瓦質火鉢	口縁部片		灰白色・混入物多い砂質土・気孔多い
11	1	2面・3a面	かわらけ	口1/5 欠損	口11.8 底7.8 高2.9	橙色・混入物含む砂質土
11	2	2面・3a面	かわらけ	口～底1/4	口(12.1) 底(8.1) 高3.2	淡褐色・混入物多い弱砂質土
11	3	2面・3a面	かわらけ	口1/4 底1部	口(13.3) 底(7.8) 高3.5	淡橙色・混入物少なめ弱粉質土
11	4	2面・3a面	かわらけ	口～底1/4	口(6.2) 底(5.0) 高1.5	淡橙色・混入物含む弱粉質土
11	5	2面・3a面	かわらけ	口1/6 底1/4	口(7.8) 底(6.0) 高1.8	淡褐色・混入物少ない粉質土

図	No	出土位置	遺物名	残存値	法 量	色調・胎土・釉調・(重さ)・備考
11	6	2面・3a面	かわらけ	口1/4 欠損	口7.8 底5.3 高1.8	淡橙色・混入物含む弱粉質土 体部スス付着
11	7	2面・3a面	かわらけ	口1/5 底1/2	口(7.0) 底4.2 高1.8	橙色・混入物含む弱砂質土
11	8	2面・3a面	かわらけ	口1/3 底全	口(7.3) 底4.2 高2.1	橙色・混入物少ない弱粉質良土
11	9	2面・3a面	白かわらけ	底1/2	底5.8	黄色味白色・弱粉質精良土 内底スタンプ押印
11	10	2面・3a面	白磁 袋物?	高台1/5	高台(3.3)	素地: 灰白色緻密 釉調: 灰白色透明
11	11	2面・3a面	瀬戸窯 卸皿	口1/4	口(12.3)	素地: 黄色味灰白色・弱砂質土 釉調: 緑灰色灰釉/外面釉着痕
11	12	2面・3a面	瀬戸窯 折縁深皿	口縁部片		素地: 黄色味灰白色・弱砂質土 釉調: 緑灰色灰釉
11	13	2面・3a面	常滑窯 甕	口縁部片		黒灰色・長石微粒含む砂質良土・気孔ある 器表: 暗赤色
11	14	2面・3a面	平瓦	残欠	長6.5～ 幅6.～0 厚1.5	明灰色・白色粒含む砂質土・やや軟質
11	15	2面・3a面	石製品 砥石	上下端欠損	長5.3～ 幅3.5～ 厚3.0	伊予産中砥 流紋岩質凝灰岩
11	16	2面・3a面	鉄製品 釘		長4.8～ 幅0.28 厚0.28	重さ2.1g
11	17	2面・3a面	鉄製品 釘		長5.7～ 幅0.25 厚0.3	重さ4.9g
11	18	2面・3a面	鉄製品釘		長4.5～ 幅0.4 厚0.25	重さ2.1g
11	19	2面・3a面	鉄製品釘		長4.7～ 幅0.25 厚0.28	重さ4.3g
11	20	2面・3a面	鉄製品釘		長4.5～ 幅0.45 厚0.35	重さ2.1g
11	21	2面・3a面	鉄製品釘		長4.0～ 幅0.3 厚0.28	重さ1.1g
14	1	3a面 土坑8	かわらけ	口～底1/4	口(7.4) 底(5.8) 高1.5	淡褐色・混入物含む砂質土
14	2	3a面 土坑8	白磁 口兀皿	底1/3	底(5.4)	素地: 白色・精良 釉調: 乳白色透明
14	3	3a面 土坑8	常滑窯 片口鉢 I類	口縁部片		灰色・長石粒多い粗土
14	4	3a面 土坑8	鉄製品釘		長3.2～ 幅0.3 厚0.35	重さ1.8g
14	5	3面 土坑2	かわらけ	口1/3 底3/4	口(12.2) 底8.0 高3.2	淡褐色・混入物含む弱粉質土
14	6	3面 土坑2	かわらけ	口1/7 底1/2	口(12.4) 底8.4 高3.1	淡褐色・混入物少ない弱粉質土
14	7	3面 土坑2	かわらけ	口1部 底1/4	口(13.9) 底(10.1) 高3.3	褐色・混入物少なめ弱砂質土

図	No	出土位置	遺物名	残存値	法 量	色調・胎土・釉調・(重さ)・備考
14	8	3面 土坑2	かわらけ	口～底1/4	口(12.8) 底(8.4) 高3.0	褐色・混入物少ない弱粉質土
14	9	3面 土坑2	かわらけ	口1/3 底1/4	口(12.3) 底(7.8) 高3.6	橙色・混入物少なめ弱砂質土
14	10	3面 土坑2	かわらけ	口～底1/5	口(12.8) 底(8.4) 高3.6	褐色・混入物少なめ弱砂質土
14	11	3面 土坑2	かわらけ	口～底1/6	口(11.8) 底(8.3) 高3.0	淡橙色・混入物少なめ弱粉質土
14	12	3面 土坑2	かわらけ	口～底1/5	口(7.8) 底(5.9) 高1.7	淡褐色・混入物含む弱粉質土
14	13	3面 土坑2	かわらけ	口～底1/4	口(7.9) 底(5.6) 高1.7	橙色・混入物含む弱砂質土
14	14	3面 土坑2	かわらけ	口～底1/4	口(7.6) 底(6.5) 高1.5	淡橙色・混入物少なめ弱粉質土
14	15	3面 土坑2	かわらけ	口1/5 底1/4	口(7.5) 底(6.0) 高1.6	淡橙色・混入物含む弱粉質土
14	16	3面 土坑2	かわらけ	完形	口7.6 底5.8 高1.8	淡褐色・混入物含む弱粉質土
14	17	3面 土坑2	龍泉窯系 青磁鎬蓮弁文碗	口縁部片		素地：灰色緻密 釉調：緑青色半透明・光沢あり
14	18	3面 土坑2	龍泉窯系 青磁無文鉢	底部片		素地：灰白色緻密 釉調：緑青色透明・光沢あり・貫入あり
14	19	3面 土坑2	常滑窯 甕	口縁部片		淡橙色(胎芯：黒灰色) 長石細粒含む砂質土 器表：明茶色
14	20	3面 土坑2	土錘	完形	長3.35 幅1.25 厚1.2 孔0.3	淡橙色・混入物殆ど含まない弱砂質土
14	21	3面 土坑2	鉄製品 釘		長4.4～ 幅0.25 厚0.25	重さ2.1g
14	22	3面 土坑3	鉄製品 釘		長5.3 幅0.35 厚0.3	重さ2.5g
14	23	3a面 土坑4	かわらけ	口～底1/4	口(8.0) 底(6.1) 高1.6	淡褐色・混入物少ない弱砂質土
14	24	3a面 土坑4	瀬戸窯 卸皿	底1/8	底(12.0)	素地：灰色緻密 釉調：薄緑色灰釉
14	25	3a面 土坑5	かわらけ	口1/4欠損	口12.0 底8.1 高3.1	淡褐色・混入物多い弱砂質土
14	26	3a面 土坑5	かわらけ	完形	口12.2 底7.3 高3.1	淡橙色・混入物少なめ弱粉質土 口縁部内外スス付着
14	27	3面 土坑5	かわらけ	口1/7 底6/7	口(12.0) 底7.5 高3.1	淡褐色・混入物少なめ弱粉質土
14	28	3a面 土坑5	かわらけ	略完形	口13.2 底8.3 高3.3	淡褐色・混入物少なめ弱粉質土
14	29	3面 土坑5	かわらけ	完形	口13.2 底8.1 高3.4	淡橙色・混入物少なめ弱粉質土
14	30	3a面 土坑5	かわらけ	口1/4欠損	口13.5 底8.4 高3.3	淡橙色・混入物少なめ弱粉質土

図	No	出土位置	遺物名	残存値	法 量	色調・胎土・釉調・(重さ)・備考
14	31	3a面 土坑5	白磁 口兀皿	口1/4 底1部	口(8.0) 底(4.5) 高2.1	素地:白色緻密 釉調:灰白色透明・ 光沢あり/口唇部タール付着
14	32	3a面 土坑5	青白磁? 器種不明	足部片		素地:白色やや粗 釉調:緑味灰白色透明・光沢あり
14	33	3a面 土坑5	常滑窯 甕	口縁部片		黒灰色・長石粒含む弱粘質土・緻密 器表:暗茶色
14	34	3面 P6	鉄製品 釘		長5.6 幅0.4 厚0.35	重さ4.8 g
14	35	3b面 P28	常滑窯 甕	口縁部片		黒灰色・長石粒非常に多い砂質土・堅緻 器表:青味暗灰色
15	1	3b面	かわらけ	口1/8 底1/3	口(12.4) 底(7.6) 高3.3	淡褐色・混入物含む弱粉質土
15	2	3b面	かわらけ	口~底1/6	口(12.2) 底(8.1) 高3.4	淡褐色・混入物含む弱粉質土
15	3	3b面	かわらけ	口1部 底2/5	口(12.3) 底(8.1) 高3.3	淡褐色・混入物含む弱粉質土
15	4	3b面	かわらけ	口1/5 底1/3	口(11.8) 底(8.2) 高2.8	橙色・混入物多い砂質土
15	5	3b面	かわらけ	略完形	口(12.3) 底(7.8) 高3.4	橙色・混入物含む弱粉質土
15	6	3b面	かわらけ	口1部 底1/3	口(12.2) 底(7.8) 高3.3	淡橙色・混入物含む弱粉質土
15	7	3b面	かわらけ	口1部 底2/5	口(13.2) 底(8.2) 高2.8	淡褐色・混入物少ない弱粉質土良土
15	8	3b面	かわらけ	口~底1/5	口(7.0) 底(5.1) 高1.5	淡褐色・混入物多い砂質土
15	9	3b面	かわらけ	口1/3 底全	口(7.8) 底(5.7) 高1.6	淡褐色・混入物含む弱粉質土
15	10	3b面	かわらけ	口~底1/4	口(7.4) 底(4.5) 高1.4	淡褐色・混入物含む弱粉質土
15	11	3b面	かわらけ	口3/4 底全	口7.3 底4.7 高1.6	淡褐色・混入物含む弱粉質土
15	12	3b面	かわらけ	口~底1/3	口(7.4) 底(4.9) 高1.7	淡褐色・混入物少なめ弱粉質土
15	13	3b面	かわらけ	口~底1/3	口(7.4) 底(4.8) 高1.6	淡褐色・混入物少なめ弱粉質土
15	14	3b面	かわらけ	口~底1/4	口(7.4) 底(5.0) 高1.6	淡橙色・混入物含む弱砂質土
15	15	3b面	かわらけ	口~底1/3	口(7.8) 底(5.2) 高1.8	橙色・混入物多い砂質土
15	16	3b面	かわらけ	口~底2/5	口(6.8) 底(4.2) 高2.0	橙色・混入物含む弱砂質土
15	17	3b面	常滑窯 甕	口縁部片		暗灰色・長石粒多い砂質土・硬質 器表:暗茶色
15	18	3b面	常滑窯 片口鉢Ⅱ類	口縁部片		橙色(胎芯:暗灰色)長石粒多い砂質粗土・ 気孔多い 器表:赤褐色

図	No	出土位置	遺物名	残存値	法 量	色調・胎土・釉調・(重さ)・備考
15	19	3b面	土器質火鉢	口縁部片		淡橙色(胎芯:灰色) 混入物含む弱砂質土
15	20	3b面	研磨痕のある 陶片		長3.4 幅3.5 厚1.3	常滑甕転用/灰色・長石細粒少なめ 弱粘質土 器表:降灰緑茶色
15	21	3b面	鉄製品 釘		長6.1～ 幅0.35 厚0.3	重さ4.3 g
17	1	4面	かわらけ	口～底1/4	口(12.8) 底(8.9) 高3.3	淡橙色・混入物多め弱砂質土
17	2	4面	かわらけ	口～底1/6	口(12.6) 底(7.9) 高3.3	淡橙色・混入物含む弱粉質土
17	3	4面	かわらけ	口1部 底1/6	口(13.7) 底(6.7) 高3.4	淡褐色・混入物少ない弱粉質土
17	4	4面	かわらけ	口～底1/3	口(7.3) 底(6.9) 高1.5	橙色・混入物多め砂質土
17	5	4面	かわらけ	口～底1/4	口(7.5) 底(5.5) 高1.5	橙色・混入物多め砂質土
17	6	4面	かわらけ	口～底2/5	口(7.2) 底(5.7) 高1.6	橙色・混入物多め砂質土
17	7	4面	かわらけ	口～底1/3	口(7.3) 底(4.8) 高1.6	橙色・混入物多め砂質土
17	8	4面	龍泉窯系 青磁折縁鉢	口縁部片		素地:白色緻密 釉調:緑青色半透明
17	9	4面	白磁 印花文皿	高台1/2	高台3.7	素地:白色緻密 釉調:青味白色透明・ 光沢あり
17	10	4面	常滑窯 片口鉢I類	口縁部片		灰色・長石細粒少い砂質良土・やや軟質
17	11	4面	常滑窯 片口鉢I類	口縁部片		灰白色・長石粒多い砂質粗土・硬質
17	12	4面	石製品 砥石	下端欠損	長9.2 幅3.1 厚0.6	鳴滝産(中山)仕上げ砥 頁岩
17	13	4面	鉄製品 釘		長5.0～ 幅0.5 厚0.35	重さ3.0 g
17	14	4面	鉄製品 釘		長4.1～ 幅0.4 厚0.3	重さ2.5 g
17	15	4面	鉄製品 釘		長3.8～ 幅0.5 厚0.45	重さ2.8 g
18	1	4面 P10	かわらけ	口～底2/5	口(11.5) 底(7.2) 高3.1	橙色・混入物含む弱砂質土
18	2	4面 P10	かわらけ	口1/4 底2/5	口(12.1) 底(7.0) 高3.4	橙色・混入物多め弱砂質土
18	3	4面 P35	かわらけ	口～底1/4	口(7.9) 底(5.5) 高1.5	淡褐色・混入物含む弱粉質土
18	4	4面 P35	かわらけ	口～底3/5	口8.2 底6.0 高1.7	橙色・混入物含む弱粉質土
18	5	4面 P35	かわらけ	口～底2/5	口(8.1) 底(6.2) 高1.6	淡橙色・混入物含む弱砂質土

図	No	出土位置	遺物名	残存値	法 量	色調・胎土・釉調・(重さ)・備考
18	6	4面 P35	青白磁 水注?	底部片		素地: 白色精良 釉調: 青白色失透
18	7	4面 P35	平瓦	残欠	長11.5 ~ 幅5.5 ~ 厚2.0	暗灰色・白色粒含む砂質土・硬質
18	8	4面 P35	鉄製品 釘		長5.3 幅0.5 厚0.45	重さ 3.6 g
18	9	4面 P35	銅製品 銭		外径2.55 孔径0.62 厚0.1	重さ 3.3 g /元〇〇寶 篆書
18	10	4面 P38	鉄製品 釘		長5.8 ~ 幅0.75 厚0.45	重さ 10.8 g
18	11	4面 P39	鉄製品 釘		長4.2 ~ 幅0.4 厚0.45	重さ 2.7 g
18	12	4面 P40	かわらけ	口1/6 底1/4	口(12.8) 底(7.4) 高3.5	淡褐色・混入物少なめ弱砂質土
18	13	4面 P41	土器質火鉢	口~底部片		淡橙色(胎芯: 暗灰色)・混入物含む弱砂質土
20	1	5a面	かわらけ	口1/4 底1部	口(7.9) 底(5.2) 高1.7	淡橙色・混入物含む弱粉質土
20	2	5a面	常滑窯 片口鉢 I類	口縁部片		灰色・長石粒含む砂質土
20	3	5a面	常滑窯 甕	口縁部片		暗灰色・長石粒多い弱粘質土・硬質 器表: 暗赤色
20	4	5a面	常滑窯 壺	底1/4	底(8.5)	淡茶色・長石粒含む砂質土・硬質 器表: 降灰・薄緑色
21	1	5a面 土坑10	かわらけ	口1/4 底1/3	口(12.7) 底(8.1) 高3.2	橙色・混入物含む弱砂質土
21	2	5a面 土坑10	かわらけ	口1/4	口(7.9) 底(5.2) 高1.5	淡褐色・混入物含む弱粉質土
21	3	5a面 土坑10	かわらけ	口~底2/3	口8.2 底5.6 高1.6	淡褐色・混入物含む弱粉質土
21	4	5a面 土坑10	常滑窯甕	胴部片		灰色・長石細粒多め砂質土 器表: 灰~茶色
21	5	5a面 土坑10	滑石鍋	口縁部片		加工痕あり・欠損後転用?
24	1	5b面	かわらけ	口1部底2/5	口(12.3) 底(9.0) 高2.9	橙色・混入物含む弱砂質土
24	2	5b面	かわらけ	口1/3底3/4	口(11.9) 底(7.4) 高2.8	橙色・混入物多め弱砂質土
24	3	5b面	かわらけ	口1/4底1/3	口(12.2) 底(8.0) 高3.4	淡橙色・混入物少なめ弱砂質土
24	4	5b面	かわらけ	口~底1/5	口(12.6) 底(8.1) 高3.4	淡橙色・混入物少なめ弱粉質土
24	5	5b面	かわらけ	口~底1/3	口(7.7) 底(4.9) 高1.7	暗褐色・混入物少なめ弱粉質土
24	6	5b面	かわらけ	口1/3底3/4	口(7.5) 底(4.6) 高1.9	淡褐色・混入物少なめ弱粉質土

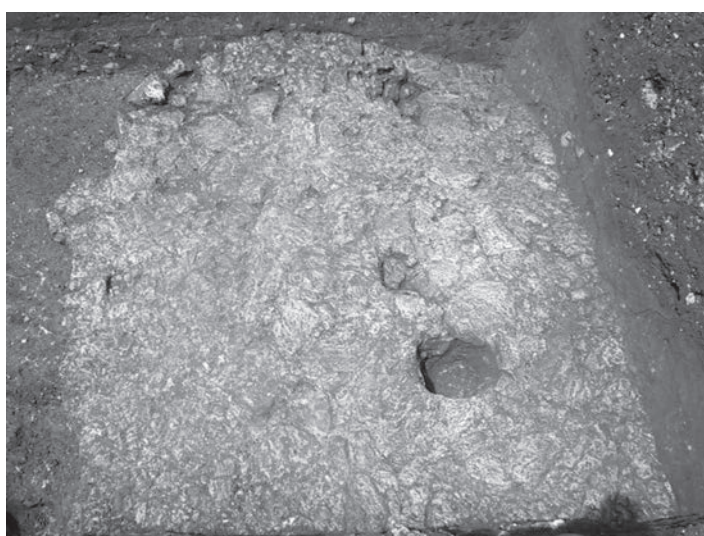
図	No	出土位置	遺物名	残存値	法 量	色調・胎土・釉調・(重さ)・備考
24	7	5b面	白磁 口兀皿	口縁部片		素地：白色緻密 釉調：乳白色透明
24	8	5b面	常滑窯 片口鉢Ⅱ類	底部片		橙色～灰色・長石粒含む砂質土
24	9	5b面	土器質火鉢	口縁部片		淡橙色・混入物多い弱粉質土
24	10	5b面	平瓦	残欠	長7.4～ 幅5.8～ 厚2.1	暗灰色・混入物含む粘質土・気孔あり 器表：灰褐色
24	11	5b面 土坑6	かわらけ	口3/4 底全	口7.4 底5.4 高1.7	淡褐色・混入物含む弱粉質土
24	12	5b面 土坑6	滑石加工品		長5.7 幅8.8 厚1.4	滑石鍋転用
24	13	5b面 土坑6	鉄製品 釘		長7.8～ 幅0.4 厚0.38	重さ7.4 g
24	14	5b面 土坑13	かわらけ	口1/6 底1/4	口(12.4) 底(8.2) 高2.9	淡橙色・混入物含む弱砂質土
24	15	5b面 土坑13	かわらけ	口～底1/3	口(7.9) 底(5.0) 高1.7	淡橙色・混入物少なめ弱粉質土
24	16	5b面 P16	かわらけ	略完形	口8.4 底7.2 高2.0	橙色・混入物含む弱砂質土
24	17	5b面 P70	かわらけ	口1/6 底1/4	口(12.8) 底(8.0) 高3.1	橙色・混入物含む弱砂質土
27	1	6面	かわらけ	口～底1/4	口(8.4) 底(6.6) 高1.7	橙色・混入物含む砂質土
27	2	6面	鉄製品 不明		長3.85～ 幅(4.0) 厚1.2	重さ45.5 g
28	1	5a面	土師器 坏	口縁部片		暗褐色・細砂、白針少量
28	2	1面	土師器 坏	底1/3	底(5.1)	暗赤色・白色微粒子含む
28	3	4面	土師器 坏	底2/5	底(5.6)	淡橙色・砂粒多め



◀ A. I区 1面 (東から)



◀ B. II区 1面 (北から)



◀ C. II区 1面 (東から)



◀ A. I区2面 (東から)



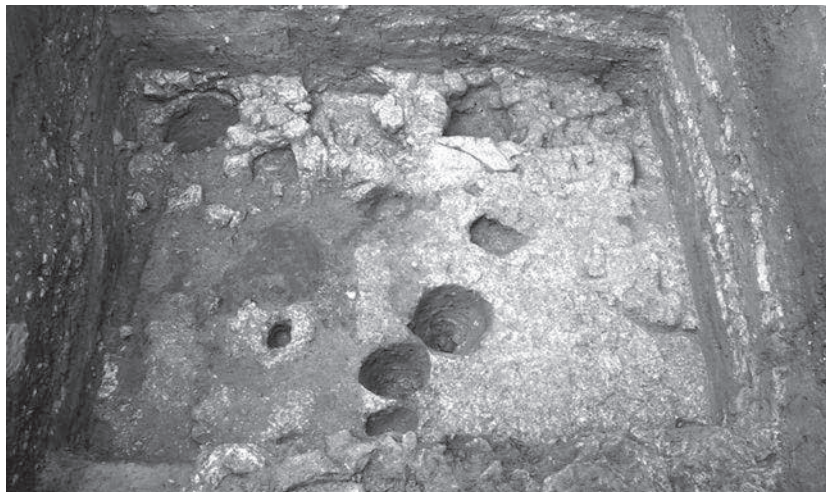
▼ B. II区2~3面 (北から)



▲ A.I区3面（東から）



▲ B.II区3面（北から）



◀ A. I区4面 (東から)



◀ B. II区4面 (北から)



▼ C. II区5a面 (北から)

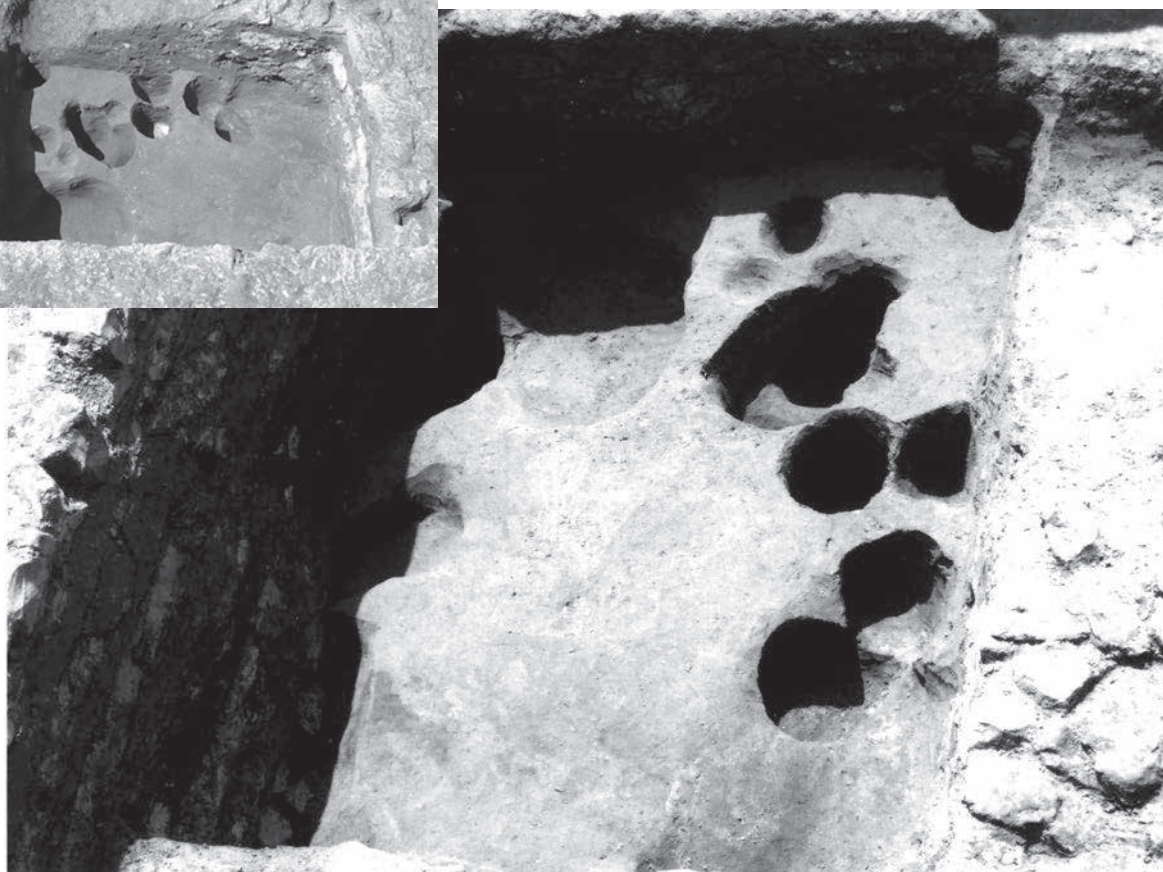


▲ A.I区5面(南から)

▼ B.II区5面(東から)

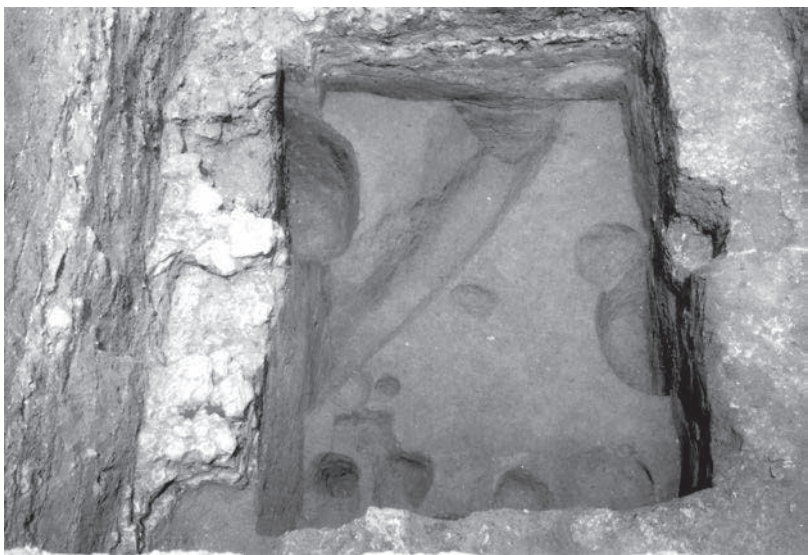


▼ C.II区5面(北から)





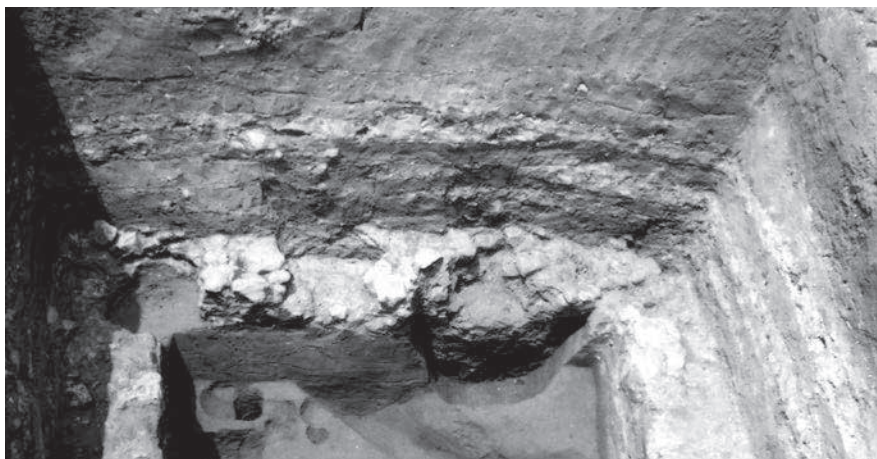
▲ A.I区6面（東から）



◀ B.I区6面（南から）

▼ C.II区6面（北から）





◀ A. I 区西壁土层



▲ B. II 区北壁土层



▲ C. II 区西壁土层

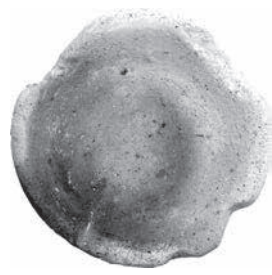
图版 8



7-3



7-5



7-6



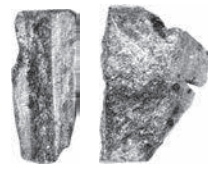
7-24



7-25



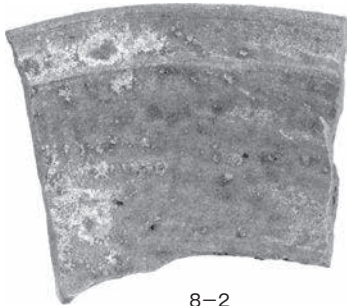
7-26



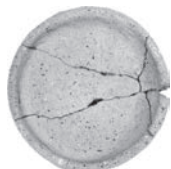
7-28



7-29



8-2



8-4



10-1



11-1



11-6



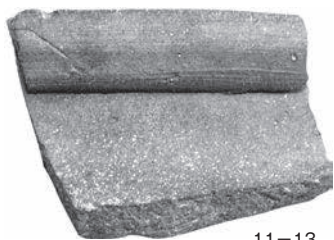
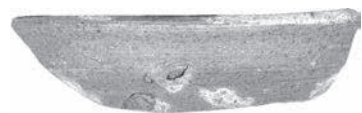
11-8



11-9



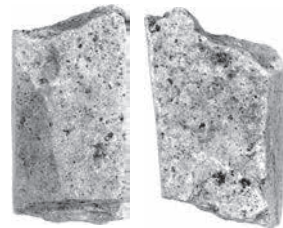
11-11



11-13



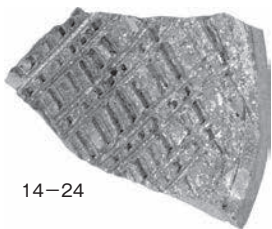
11-14



11-15



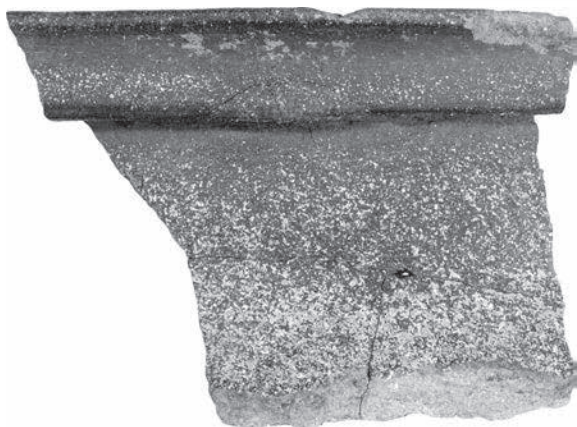
14-16



14-24



14-26



14-19



14-28



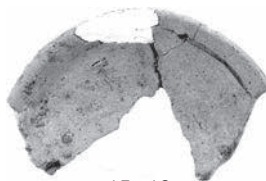
14-29



14-30



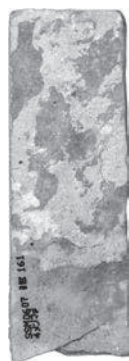
15-5



15-10



15-16



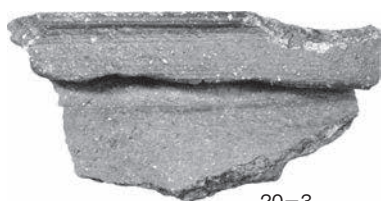
17-12
剥離面



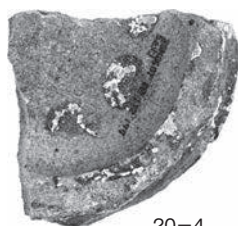
18-7



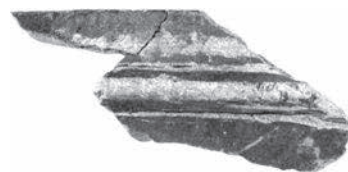
18-13



20-3

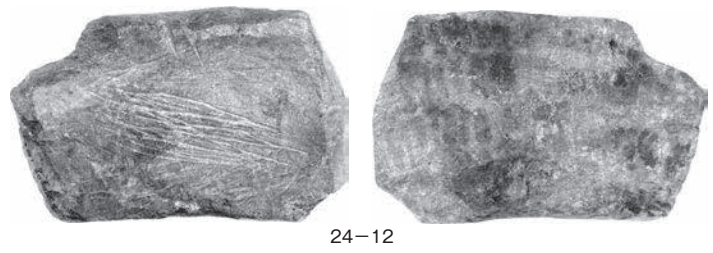


20-4

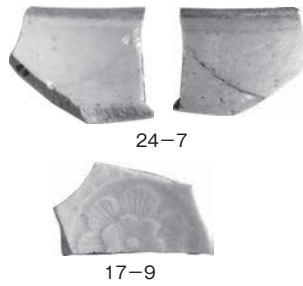
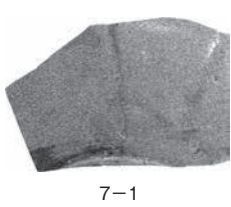
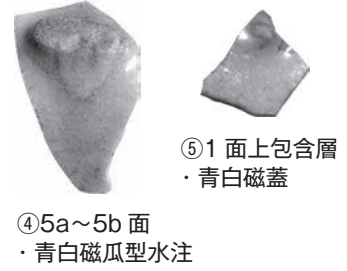
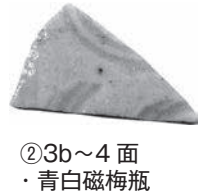
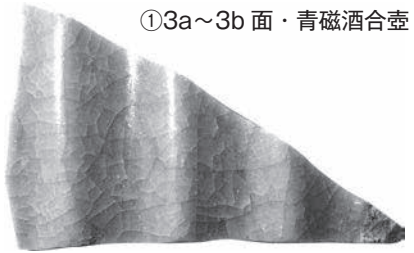


21-5

图版 10



貿易陶磁



1 面上包含層

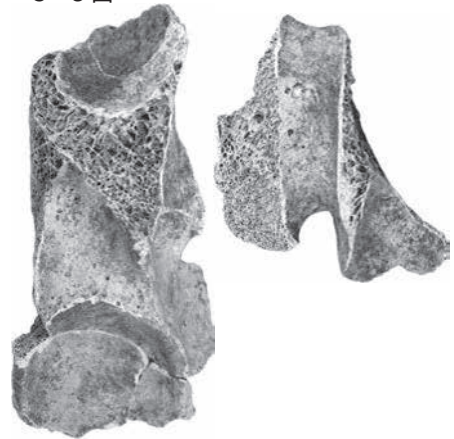
獸骨



3 面土坑 5



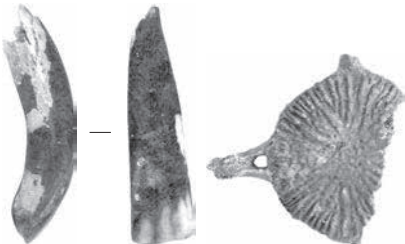
5~6 面



5 面土坑 6



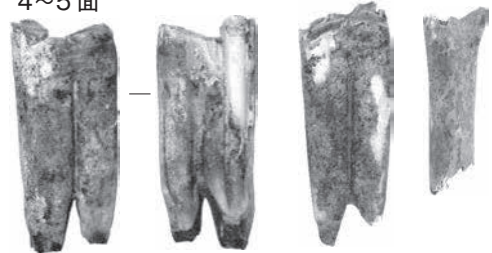
1~2 面



3~4 面



4~5 面



今小路西遺跡 (No.201)

御成町 176 番 7 地点

例 言

1. 本書は、鎌倉市御成町176番7地点における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財の緊急調査発掘調査報告である。資料整理の際の遺跡の略記号はI N Eである。
2. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は平成18年7月18日～9月25日である。
3. 調査団の編成は以下の通りである。

調査の主体	鎌倉市教育委員会
調査担当	滝澤晶子
調査補助員	安達澄代・安藤龍馬・下江秀信
調査協力者	秋田公佑・倉澤六郎・片山直文・佐藤美隆（社団法人鎌倉市シルバー人材センター）
4. 本書の執筆・編集は以下のものが行った。

第1章：宮田真	第2章～第4章・編集：滝澤晶子
---------	-----------------
5. 本書の図版および写真撮影は次のものが行った。

遺構図版	滝澤晶子	遺構写真	滝澤晶子
遺物図版	宇賀神雅子・渡辺美佐子	遺物写真	滝澤晶子
6. 本書の遺構・遺物の縮尺は次の通りである。(各々の図にスケールを載せている)

遺構図	1 / 40・1 / 80 (遺構図の水糸高は海拔高を示す)
遺物実測図	1 / 3
7. 遺構実測図には次の記号が使用されている。

釉の限界線	-----	調整の変化点	-----	使用痕の範囲	←-----→	加工痕の範囲	<----->
攪乱の範囲	-----	推定ライン	-----	調査限界ライン	-----		
8. 遺物寸法表は計測可のもののみ表にしている。遺物およびPit寸法表の記号は以下の通り。

遺物寸法表	：() = 復元値・[] = 遺存値・単位は cm
-------	-----------------------------

目次

本文目次

第一章 遺跡の位置と歴史的環境	121
1. 調査地の位置	
2. 歴史的環境	
3. 周辺地域の発掘調査	
第二章 調査の概要	125
1. 調査の経緯と経過	
2. 調査区の位置とグリッド配置	
3. 基本土層	
第三章 検出遺構と出土遺物	129
第1面	
第2面	
第3面	
第4面	
第4b面	
第5面	
第6面	
トレンチ1・出土遺物	
中世層出土の古代遺物	
第四章 まとめ	180

挿図目次

図1 遺跡周辺図	121	図17 2面出土遺物(3)	140
図2 敷地と調査区	125	図18 3面遺構配置図	141
図3 遺跡位置図	126	図19 3面板壁建物1・落込み1、 掘立柱建物1・土坑1・2・7	142
図4 グリッド配置図	127	図20 板壁建物1出土遺物(1)	143
図5 1面遺構配置図	129	図21 板壁建物1(2)、落込み1(1)出土遺物	145
図6 1面据甕1・土坑5	129	図22 落込み1(2)出土遺物	146
図7 据甕1出土遺物	130	図23 掘立柱建物1・土坑1・2・7出土遺物	149
図8 土坑5出土遺物	131	図24 3面出土遺物(1)	151
図9 1面出土遺物(1)	132	図25 3面出土遺物(2)	152
図10 1面出土遺物(2)	134	図26 3面出土遺物(3)	153
図11 2面遺構配置図	135	図27 4面遺構配置図	155
図12 2面溝1・柱穴列1・土坑6	136	図28 床状遺構・土坑9	156
図13 溝1出土遺物	136	図29 土坑9出土遺物(1)	157
図14 土坑6出土遺物	136	図30 土坑9出土遺物(2)	158
図15 2面出土遺物(1)	137	図31 4面出土遺物(1)	159
図16 2面出土遺物(2)	139		

図32 4面出土遺物(2)……………	160	図40 土坑3・10出土遺物……………	169
図33 4面出土遺物(3)……………	161	図41 5面出土遺物(1)……………	171
図34 4面出土遺物(4)……………	162	図42 5面出土遺物(2)……………	172
図35 4b面遺構配置図……………	165	図43 6面遺構配置図……………	174
図36 4b面板壁建物2……………	166	図44 6面柱穴列2・3……………	175
図37 4b面出土遺物……………	167	図45 6面出土遺物……………	176
図38 5面遺構配置図……………	168	図46 トレンチ1出土遺物……………	178
図39 5面土坑3、土坑10……………	168	図47 中世層出土の古代遺物……………	179

図 版 目 次

図版1……………	181	図版10……………	190
A. I区1面全景(東より)		A. I区5面全景(北より)	
B. II区1面全景(北より)		B. II区5面全景(北より)	
図版2……………	182	図版11……………	191
A. I区1面据甕1出土状況(北より)		A. II区5面舟形出土状況	
B. I区1面据甕1内土層断面		B. I区5面宝塔出土状況	
図版3……………	183	図版12……………	192
A. 据甕1三鱗叩き文		A. I区6面全景(北より)	
B. 据甕1完掘(北より)		B. II区6面全景(北より)	
図版4……………	184	図版13……………	193
A. I区2面全景(南より)		A. II区6面Pit19(東より)	
B. II区2面全景(北より)		B. トレンチ1(北壁)	
図版5……………	185	図版14……………	194
A. I区3面全景(南より)		A. I区東壁土層断面	
B. II区3面全景(北より)		B. II区東壁土層断面	
図版6……………	186	図版15……………	195
A. I区3面建物1東部(西より)		出土遺物(1)	
B. II区3面掘立柱建物1(北より)		図版16……………	196
図版7……………	187	出土遺物(2)	
A. II区3面土坑7人形出土状況		図版17……………	197
B. I区4面漆器出土状況		出土遺物(3)	
図版8……………	188	図版18……………	198
A. I区4面全景(北より)		出土遺物(4)	
B. II区4面全景(北より)		図版19……………	199
図版9……………	189	出土遺物(5)	
A. I区4面建物2(北より)			
B. II区4b面全景(北より)			

第一章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 調査地の位置

本調査地は鎌倉市御成町176番7（図1-1）に所在し、今小路西遺跡（No.201）の遺跡指定範囲内に位置する。調査地は現在のJR鎌倉駅を基点にすると北西約200mにあり、地勢的に見ると、旧鎌倉市街地を形成する沖積地の平野部の西端に当たる。また、旧市街地を取り囲む谷戸の一つ「無量寺ヶ谷」の開口部前面に位置する。調査地の北西に展開する谷戸は「無量寺谷」と呼称されており、無量寺があったとの伝承が今に残る。現在、調査地の北側には佐助ヶ谷に抜ける市道があり、「銭洗い弁天」「佐助稲荷」へつながっている。また、調査地東50mを南北に通る道路は遺跡の名称に含まれる通称「今小路」と呼ばれる道路で、鎌倉の基幹道路「若宮大路」とほぼ並行し、東の「小町大路」と対になっている。また、「今小路」は北は「武蔵大路」につながり、「亀ヶ谷」あるいは「化粧坂」の切通しを越え、武蔵方面へ抜け、南は鎌倉を東西に横切る「大町大路」の西部である「長谷小路」へと連結している。



図1 遺跡周辺図

1. 調査地点
2. 正宗井戸
3. 御成町171番1外
4. 御成町25番1外1筆
- 5～8. 扇ガ谷一丁目26番14地点他（無量寺跡第1次～第4次）
9. 御成町39番36

2. 歴史的環境

当調査地点を含めた周辺一帯は、近年、文献史学と考古学の成果から考察して、『吾妻鏡』に記述されている「甘縄」という地域であるということが認識されている。以前は、現在の長谷地域が、甘縄神明社があることから、「甘縄」であると云われてきたが、江戸期以降からの誤解であることが判明している。この「甘縄」には鎌倉の有力御家人一族の安達氏の邸宅があったとされており、北西部には安達義景十三回忌を行った安達氏縁の寺「無量寿院」があったとされる「無量寺ヶ谷」がある。

また、「無量寺ヶ谷」には江戸時代、相州伝正宗の血を引く刀工綱廣の屋敷があったと伝えられ、「綱廣谷」と称され、図1-2地点付近には「正宗井戸」1基があり、また本調査地点の北方山腹には「正宗相槌稻荷」が近代まで祭られていた。

さらに時代が下った明治～大正時代頃には、温暖な気候や風光明媚などの理由から、東京や横浜在住の政治家・実業家・文人・学者・華族といった著名人達が次々と鎌倉に別荘を構え、調査区南方にある御成小学校はその名からもわかるように皇室御用邸跡である。

3. 周辺地域の発掘調査

本調査地の周辺地域ではこれまでに大小様々な規模の発掘調査が実施されてきた。本項ではその内、ごく近隣に限って紹介する。

《今小路西遺跡（御成町171番1外地点）（図1-3）》

当調査区の西隣の調査である。調査面積が1,640㎡と鎌倉市内では規模が大きい発掘調査である。調査の結果、古代6期（7世紀前後～9世紀）、中世4期（13世紀第2四半紀～14世紀後半以降）の遺跡が検出された。古代遺跡は古代建物11棟、古代溝13条など、中世遺跡は中世建物43棟、井戸21基、道路2条などが検出された。発見された中世建物群は「権力を有する御家人クラスの屋敷地か庇護の厚い寺院などであったことが想定できる」と報告されている。また、出土遺物は日常生活具をはじめ、工具・武器・遊戯具・仏具・呪術具と多岐にわたり、どれも、種類、量ともかなりのものであったが、中でも、文永二年(1265)銘のある墨書木札が注目された。木札には3人一組9名の御家人と思われる人物名が記され、屋敷の警護を担当する順番が書かれていた。この遺跡が先述した「甘縄」にあった安達一族の屋敷の一部ではないかとの見方が、現在のところ有力になっている。

《今小路西遺跡（御成町25番1外1筆地点）（図1-4）》

調査の結果、13世紀末～15世紀前葉に至る合計4枚の良好な土丹地業面が検出された。中でも13世紀末～14世紀初頭頃に時期を置く3面からは、市内でこれまでに見つかった大路側溝と護岸構造を同じくする、断面方形の溝が調査区の北側で、北面する道路と並行して検出されるなど、当時の谷戸内の土木工事の実態を知る上で大きな成果を上げている。

《無量寺跡（扇ガ谷一丁目26番14地点等）（図1-5～8）》

財団法人センチュリー文化財団の博物館建設計画に伴うもので第1次～第4次にわたって調査が実施された。

第1次調査（図1-5地点）

調査の結果、谷戸を形成する山裾の岩盤（切岸）に沿って4基のやぐらが検出され、やぐら前面の岩盤面には排水のための溝や複数個並ぶ楕円状の土坑が穿たれていた。さらに調査区の北部からは、北方の上段平場（第2次調査区のある平場）へと通じるつづら折れの坂道が見つかった。

第2次調査(図1-6地点)

調査地点は第1次調査地の北方上段の谷戸最奥に位置しており、周囲は切岸に囲まれている。また北方の山腹には「正宗相槌稻荷」が近世以降祀られていたといい、切岸岩盤を直接穿った階段の痕跡が山腹に通じている。調査の結果、調査区の南端から中央部かけた範囲で、この石段に向かう近世の道遺構がまず検出された。さらに調査区の中央から北側では、13世紀末～14世紀前半にかけて並立した建物遺構と池遺構が発見された。この建物は安山岩の礎石建ちで南北6間×東西3間に西側が半間分張り出しをもっており、池側を望むように縁が設けられていたようだ。池は岩盤を彫り抜いたもので池底には玉砂利が敷かれ、中央西よりに「中ノ島」が彫り残されていた。池の北側には北方の山裾に源を有するであろう「遣水」が屈曲して流れ落ち、流路には池底同様玉砂利が敷き詰められていた。この建物は火災に遭っており遺存する礎石は激しく焼け表面が爆ぜている。また周囲の地面も焦土化し炭化物が堆積する。この炭化物層からは夥しい数のかわらけがかわらけ溜りの様相を呈して出土した。この焼土層は池遺構も埋め尽くしており、火災をもって建物と池が同時に廃絶したことを物語っている。仮にこの地が寺院跡の中にあると考えても、発見された建物はその形態から堂宇的な建築ではなく、「庫院」や高僧の隠居所的な色合いが強く、平場規模から察して14世紀初頭頃の「塔頭」のような空間ではなかろうか。と報告されている。

第3次調査(図1-7地点)

第3次地点は近代以降の大型土丹塊による埋め立層が厚く4mの深さに及んだ。オープンカットの調査のため一部に確認トレンチを設定し、4m以下の深度に中世包含層の存在を確認して調査を断念した。ただ調査区の西端部に、第2次調査で検出した近世道遺構につながると考えられる土丹で舗装した、南北方向に軸を持つ道遺構を検出した。

第4次調査(図1-8地点)

調査の結果、13世紀～14世紀前半の小規模な掘立柱建物や礎石建物、道路遺構が検出され、寺院などの宗教的な遺構は検出されず、谷戸全体からみると、最下部にあたり、谷戸の両端をつなぐ空間であった可能性が高いと報告されている。

《鎌倉城(図1-9)(御成町39番36地点)》

調査地点は無量寺ヶ谷の最奥部に位置する支谷の一つに立地し、2次にわたって調査が実施された。両調査はこの谷戸の平場のほぼ全域に及んだ。平場からは13世紀～14世紀前半頃の堂宇や庫裏と考えられる建物群が検出された。開山堂的な建物か。中でも基壇を有する礎石建物の床下には、火葬骨を充填した小型の曲げ物が埋納されていた。また北西側の山裾からは4基のやぐらが検出されており、小型寺院あるいは塔頭の構成要素を整えている。

上記、「无量寺跡」と「鎌倉城」の発掘調査からは、谷戸の北の支谷(図1-5・6)地点あたりに塔頭あるいは庫裏(私的空間)、谷戸の南支谷(図1-9)地点あたりに本堂ではないが、宗教施設(宗教的空間)、それらをつなぐ(図1-8)地点の道路や町屋(公共的空間)が展開していたようであることが分かる。とはいっても、谷戸全体の面積に対しての調査範囲はまだ少量といえよう。これらが、无量寺あるいは无量寿院であるとの証拠はどこにもないが、无量寺ヶ谷全体の様相がおぼろながらに見えてきたといえよう。蛇足であるが、谷戸の最深部にはまとまった平場があるが、未だ調査された地点はない。ここに本堂等の伽藍が展開されていたらとつい、想像を逞しくしてしまう。

以上、近隣の主だった調査事例を紹介したが、本遺跡の立地する周辺地域には多種にわたる中世遺跡が高密度で存在していることが理解されよう。

《参考文献》

- 『鎌倉廃寺事典』貫達人・川副武胤 1980年 有隣堂
- 『鎌倉の地名由来辞典』三浦勝男編 2005年9月 東京堂出版
- 『鎌倉55号「甘縄無量寿院考并北京律関東弘教序論」』大森順雄 1987年
- 『鎌倉市史 社寺編』1959年 鎌倉市・吉川弘文館
- 『都市鎌倉の中世史 吾妻鏡の舞台と主役たち』秋山哲雄 2010年8月 吉川弘文館
- 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書8「無量寺跡」』田畑佐和子 1991年 鎌倉市教育委員会
- 『鎌倉考古21号「無量寺跡出土の白かわらけについて」』田畑佐和子 1992年 鎌倉考古学研究所
- 『今小路西遺跡発掘調査報告書(御成町25番1外1筆地点)』2003年 有限会社博通
- 『無量寺跡発掘調査報告書(第2次調査・扇が谷一丁目26番74外)』2004年9月 株式会社博通
- 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21「無量寺跡」第2分冊(第1次調査・26番27外)』2005年3月 鎌倉市教育委員会
- 『鎌倉城(No.87)発掘調査報告書(御成町39番36地点)』2006年3月 株式会社齊藤建設
- 『鎌倉城(No.87)第2次調査報告書』2007年9月 株式会社齊藤建設
- 『無量寺跡発掘調査報告書(第3次調査・26番89地点)』2007年3月 株式会社博通
- 『無量寺跡(第4次)発掘調査報告書(鎌倉市扇が谷一丁目26番14地点)』2008年8月 株式会社博通
- 『今小路西遺跡(No.201)発掘調査報告書(御成町171番1外地点)』2008年3月 株式会社齊藤建設

第二章 調査の概要

1. 調査の経緯と経過

調査は鎌倉市御成町176番7地点における個人住宅に伴う調査として鎌倉市教育委員会が主体となって実施された。平成17年7月18日～平成17年9月25日にわたって本調査が実施された。調査対象面積は55㎡である。調査は排土の都合上、南北2区画に分割して実施された。資料整理の際の遺跡の略記号はI N Eである。遺物は遺物収納箱26箱出土した。

調査経過

南部（Ⅰ区）を先に調査し、その後北部（Ⅱ区）を調査した。

- 平成17年7月18日 I区重機による表土掘削後。
- 7月20日 手掘りによる調査開始。表土層除去。
- 7月25日 1面より据甕1検出。
- 7月28日 1面全景撮影・測量。3級基準点移動し、調査地点の海拔測量基準点設置。
- 7月31日 2面まで掘り下げ。
- 8月1日 2面全景撮影・測量。
- 8月4日 3面板壁建物1検出。
- 8月8・9日 台風のため作業中断。
- 8月10日 3面全景撮影・測量。
- 8月11日 4面全景撮影・測量。
- 8月16日 5面全景撮影・測量。
- 8月18日 6面全景撮影・測量。
- 8月21日 I区調査区東壁土層測量。
- 8月22日 I区調査終了。4級基準点移動し、国土座標値との合成測量。
- 8月24日 重機によりI区埋め戻し。
- 8月25日 II区重機による表土掘削。II区調査開始。
- 8月28日 手掘りにより表土層除去。
- 8月30日 1面全景撮影・測量。2面まで掘り下げ。
- 9月4日 2面全景撮影・測量。
- 9月7日 3面全景撮影・測量。
- 9月11日 4面全景撮影・測量。
- 9月12日 4b面検出。
- 9月15日 4b面全景撮影・測量。5面まで掘り下げ。
- 9月20日 5面全景撮影・測量。6面まで掘り下げ。
- 9月22日 6面全景撮影・測量。6面下トレンチ設定し調査。
- 9月25日 調査終了。現場撤収。

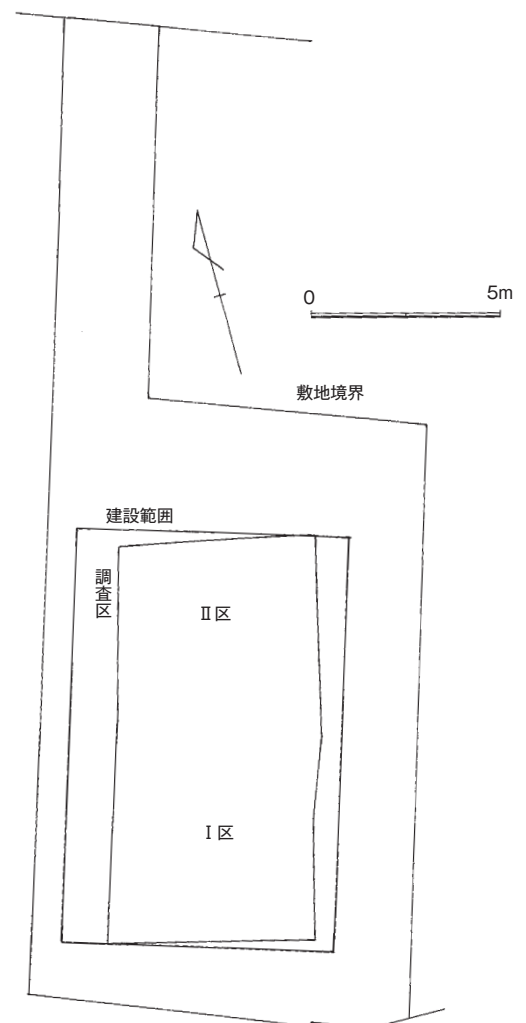


図2 敷地と調査区

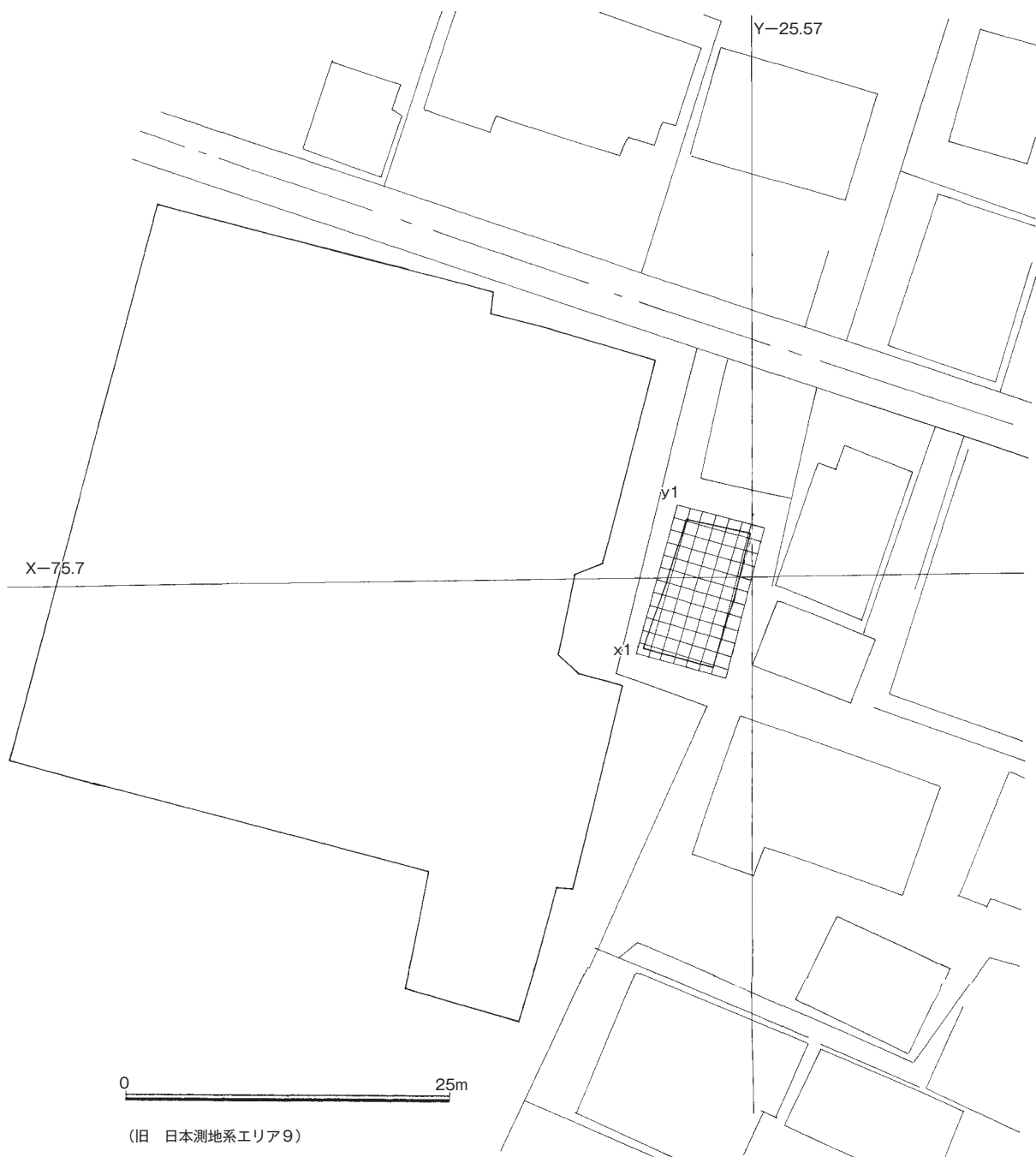


図3 遺跡位置図

2. 調査区の位置とグリッド配置 (図2・3・4)

敷地と建築範囲と調査区の関係は図2に示したように設定された。位置は北緯35度19分14秒、東経139度32分56秒である。

グリッドは調査区の形状に合わせて任意に設定した。(図3・4) グリッドと国土座標(エリア9)の関係は以下の通りである。世界測地系には国土地理院提供のソフトを使用して変換した。

A地点: グリッド(x 9.998、y 7.684) = 国土座標[旧日本測地系](X - 75698.2、Y - 25570.0) = 国土座標[世界測地系](X - 75041.514、Y - 25863.413)

B地点: グリッド(x 6.962、y 8.455) = 国土座標[旧日本測地系](X - 75701.3、Y - 25570.0) = 国土座標[世界測地系](X - 75344.609、Y - 25863.413)

C地点: グリッド(x 8.112、y 7.768) = 国土座標[旧日本測地系](X - 75700.0、Y - 25570.4) = 国土座標[世

界測地系] (X - 75343.309、Y - 25863.813)

D地点：グリッド (x 6.799、y 2.589) = 国土座標 [旧日本測地系] (X - 75700.0、Y - 25575.7) = 国土座標 [世界測地系] (X - 75343.309、Y - 25869.113)

グリッド x 軸は北から12度東に傾いている。なお、本文中では便宜上、グリッド x プラス方向を北として呼称し、正確な方位は各図に矢印で示している。

3. 基本土層 (図 43)

基本土層の測点は図 43 に記してある。現地表面は海拔 8.5 m 前後のほぼ平坦面。表土層は現地表面から 160cm であった。1 面は海拔 6.9 m 前後、2 面は 1 面下約 20 ~ 30cm、海拔 6.6 ~ 6.7 m 前後、3 面は 2 面下約 20cm、海拔 6.4 ~ 6.5 m 前後、4 面は 3 面下 20 ~ 30cm、海拔 6.2 m 前後、4 b 面は II 区のみを検出され、4 面下 10cm、海拔 6.1 m 前後、5 面は 4 面下約 20 ~ 30cm、海拔 5.9 ~ 6.0 m 前後、6 面は 5 面下 20cm、海拔 5.7 m 前後に検出された。

6 面以下は II 区にトレンチを設定し、掘り下げた。土層注記は以下の表の通りである。

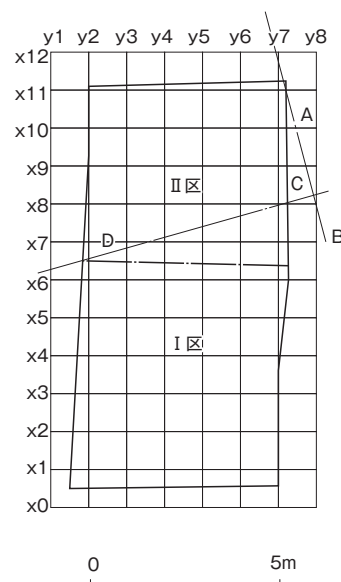


図 4 グリッド配置図

番号	色調	土質	内容	粘性	締り
1	暗灰褐色	粘質土層	1 ~ 5cm大の土丹(多)・炭化物・かわらけ片・木片(少)	ややあり	ややわるい
2	暗灰褐色	粘質土層	1 ~ 5cm大の土丹(やや多)・かわらけ・炭化物	ややあり	よい
3	暗灰褐色	粘質土層	1 ~ 3cm大の土丹(多)・かわらけ細片・炭化物	ややあり	よい
4	暗灰褐色	粘質土層	1 ~ 5cm大の土丹・炭化物・かわらけ片	あり	よい
5	暗褐色	粘質土層	全体に炭化物(多)・かわらけ片・1 ~ 5cm大の土丹・木片(ごく少)	あり	ややわるい
6	暗褐色	粘質土層	1 ~ 3cm大の土丹・かわらけ細片・炭化物(やや多)・木片(ごく少)	あり	よい
7	暗灰褐色	粘質土層	1 ~ 5cm大と10cm大の土丹(密・多)・炭化物・かわらけ細片・木片(ごく少)	なし	よい
8	-	有機物堆積層	かわらけ細片・炭化物・0.5cm大の土丹粒(少)	-	わるい
9	暗灰褐色	粘質土層	かわらけ片・炭化物・0.5cm大の土丹・木片(少)	あり	よい
10	暗灰褐色	粘質土層	かわらけ細片・炭化物・0.5cm大の土丹粒(少)	あり	ややわるい
11	-	有機物堆積層	かわらけ細片・炭化物・0.5cm大の土丹粒(少)・貝殻細片(ごく少)・木片	あり	ややわるい
12	暗褐色	粘質土層	炭化物(多)・木片(多)・かわらけ片・0.5cm大の土丹(少)	あり	よい
13	暗灰褐色	粘質土層	炭化物・0.5cm大の土丹・木片・かわらけ片	あり	よい
14	暗灰褐色	粘質土層	0.5cm大の土丹・木片・炭化物	あり	ややわるい
15	暗灰褐色	粘質土層	3cm大の土丹(多)・木片・炭化物	あり	よい
16	黒褐色	粘質土層	かわらけ片・常滑片・炭化物・0.5 ~ 3cm大の土丹・木片・貝殻細片(ごく少)	あり	よい
17	黒褐色	粘質土層	炭化物・0.5cm大の土丹・木片・有機物	あり	ややわるい
18	暗褐色	粘質土層	かわらけ細片・炭化物・0.5cm大の土丹・貝殻細片(ごく少)	ややあり	よい
19	暗褐色	粘質土層	1 ~ 10cm大の土丹・木片・貝殻細片・炭化物	あり	ややわるい
20	暗褐色	粘質土層	炭化物・0.5cm大の土丹(少)・貝殻細片・木片	あり	とてもよい
21	黒褐色	粘質土層	目立った混入物なし	あり	よい
22	黒褐色	粘質土層	炭化物・木片・貝殻細片(少)	ややあり	ややよい
23	茶褐色	粘質土層	かわらけ片・小土丹粒(とても多)・炭化物	なし	とてもよい

番号	色調	土質	内容	粘性	締り
24	暗茶褐色	粘質土層	小土丹粒・かわらけ細片・炭化物(いずれも少)	あり	よい
25	茶褐色	粘質土層	3～10cm大の土丹(とても多)・かわらけ・炭化物	－	とてもよい
26	土丹地業層		細かく砕いた土丹による版築	－	とてもよい
27	暗褐色	粘質土層	かわらけ・炭化物・小土丹	あり	よい
28	土丹地業層		大土丹による地業	－	とてもよい
29	黒褐色	粘質土層	貝殻片・砂・炭化物・小土丹粒・木片・石等、混入物とても多い。	－	よい
30	黒灰色	粘質土層	貝殻片・砂・炭化物・0.5～3cm大の小土丹(特に多)・木片・石等、混入物とても多い。	－	よい
31	－	有機物堆積層	黒褐色粘土と混じり合う	－	－
32	暗褐色	粘質土層	貝殻細片・かわらけ片・小土丹粒	あり	よい
33	暗褐色	粘質土層	木片・かわらけ片・貝殻細片・0.5～5cm大の土丹・炭化物	なし・ザラザラしている	よい
34	暗褐色	粘質土層	かわらけ片・小土丹粒(混入物やや少ない)	つよい	わるい
35	黒灰色	粘質土層	炭化物・灰(共にとても多)・貝殻片・小土丹	ザラザラしている	よい

第三章 検出遺構と出土遺物

今回の調査の結果、当遺跡からは合計6面の遺構面が確認された。6面より下層は調査の安全を確保するため、サブトレンチを設定し行ったが、地山までには達せずに調査を終えた。

第1面 (図5)

第1面は現地表下160cm、海拔6.9m前後に検出された。ほぼ平坦な地業面である。部分的にしっかりとした地業が施され、南部は鎌倉石粒によって、北東部は土丹粒によって地業されている。据甕1個・土坑1基・Pit2口が検出された。また、調査区北西縁に南北幅210cmを測る落ち込みが検出されたが、そのほとんどが調査区外のため、井戸等の可能性があるが、詳細は不明である。

据甕1・出土遺物 (図6・7)

据甕1はグリッド(x6、y4)付近、海拔6.9m前後に検出された。常滑の大甕である。口縁部はその大半が消失しており、小破片が出土したにとどまるが、全体的には9割程度が遺存していた。甕内部の埋土の土層注記は以下の通りである。

1層：暗褐色粘質土 かわらけ片・炭化物・0.5cm大の土丹粒・鎌倉石細粒を含む。粘性があり、締り良い。

2層：暗褐色粘質土 1層に似るが、炭化物がやや多く含まれ、締りやや悪い。

3層：暗褐色粘質土 かわらけ片・常滑片・炭化物・0.5～5cm大の土丹・茶褐色粘質土を含む。粘性あり、締りやや悪い。

4層：暗褐色粘質土 かわらけ片・炭化物・0.5～1cm大の土丹を含む。粘性あり、締り悪い。

常滑の甕は図7-1に実測図を載せている。年代は常滑編年第7形式(14世紀前半)にあたり、直径55cm、底径22.4cm、器高85cm、最大胴径87.2cmを測り、肩部分には三つ鱗の叩き目が施

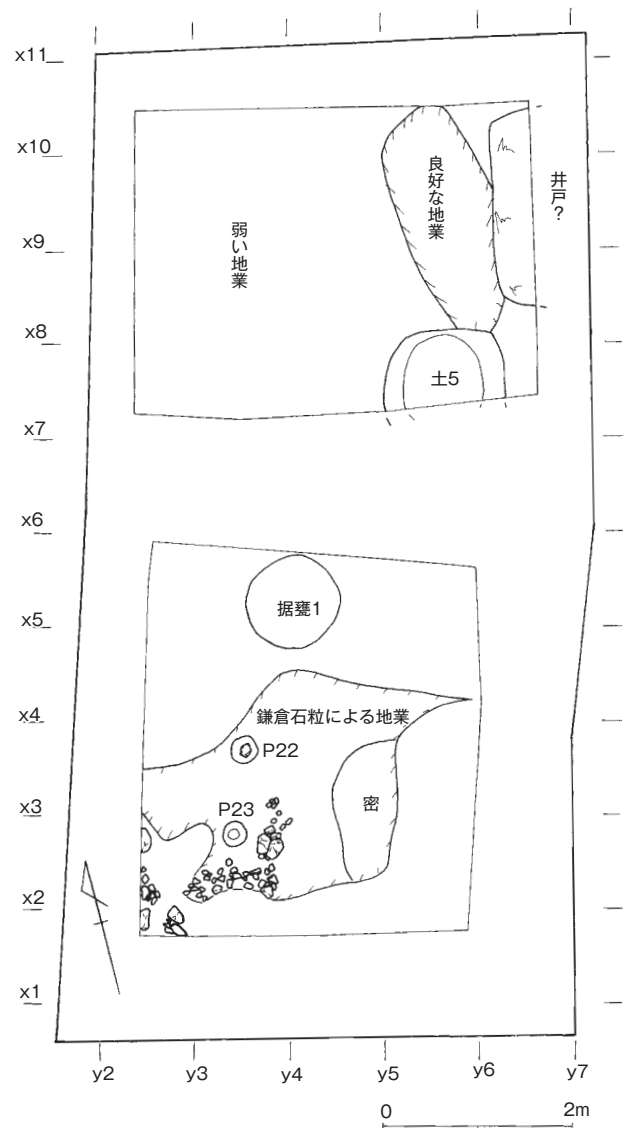


図5 1面遺構配置

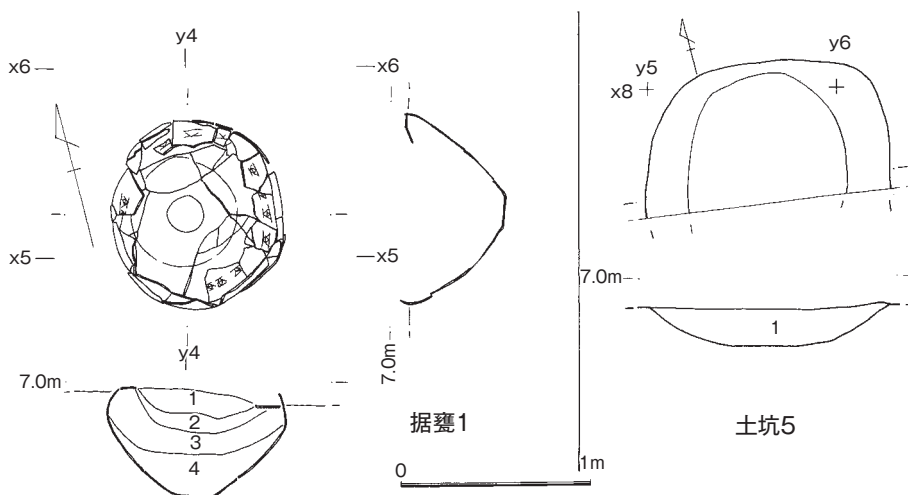


図6 1面据甕1・土坑5

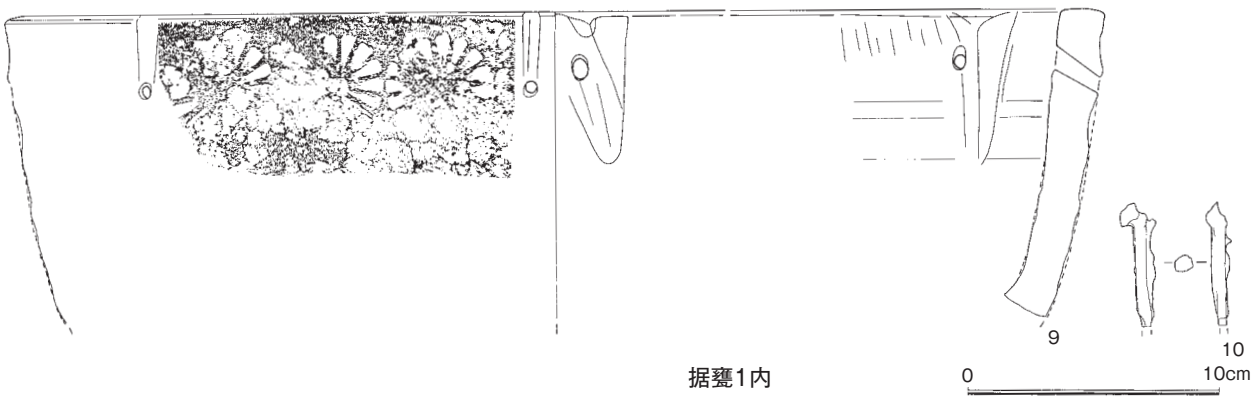
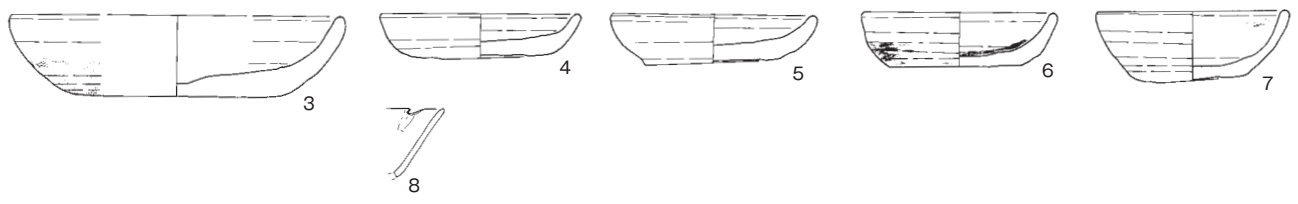
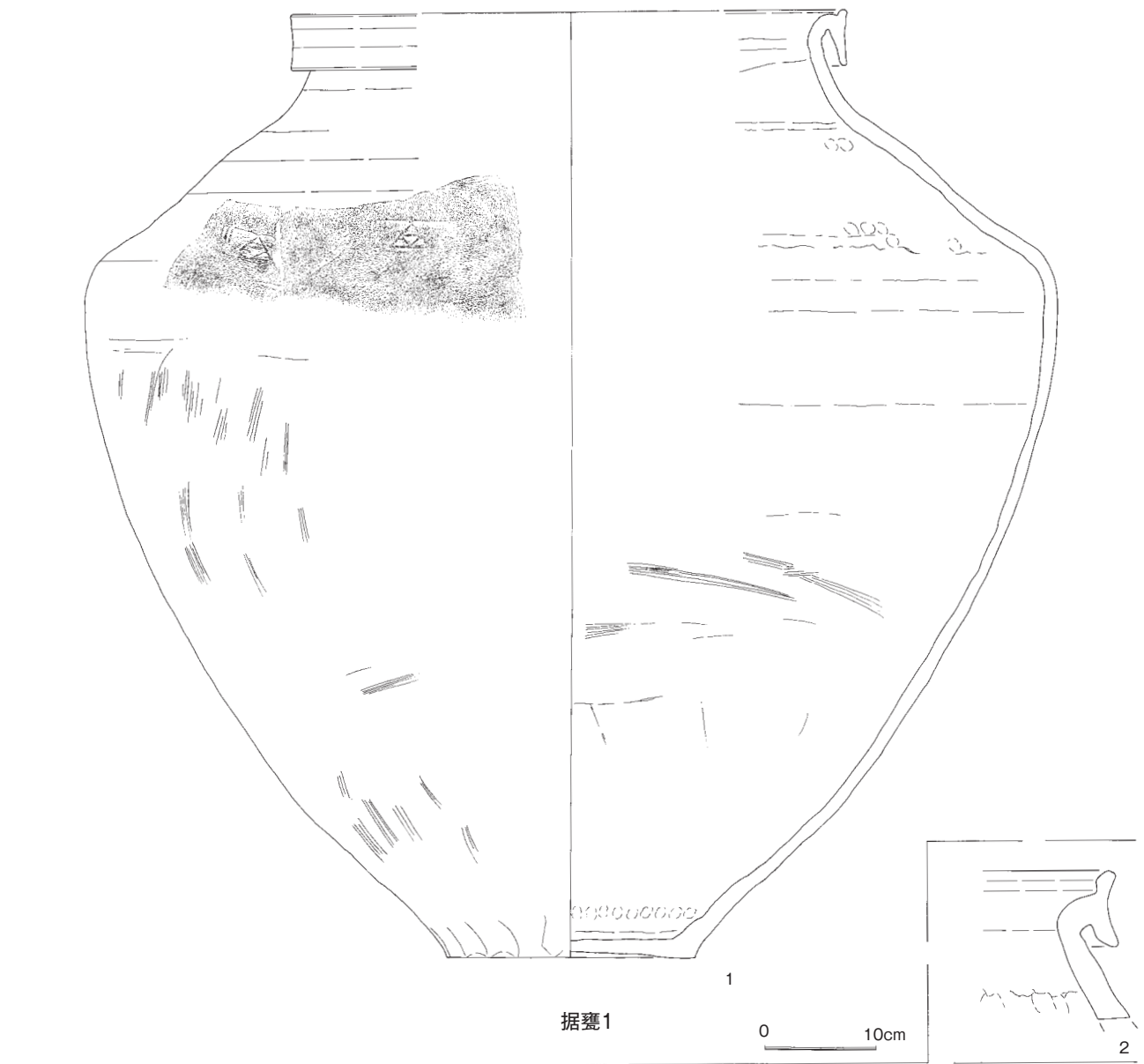


图7 据甕1 出土遺物

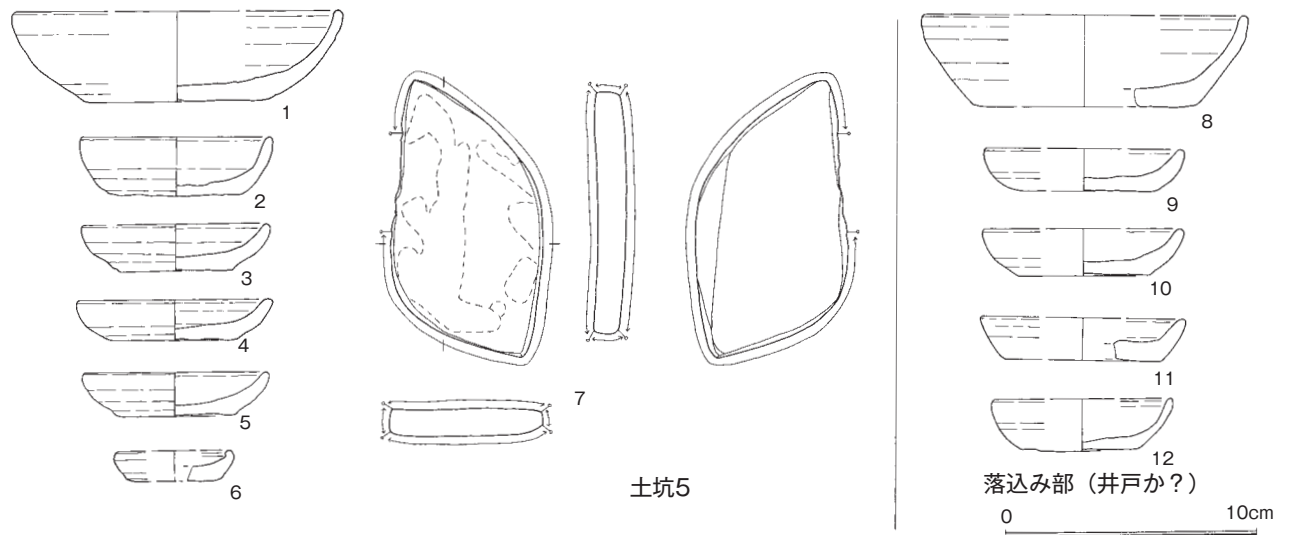


図8 土坑5出土遺物

されている。

図7-2は埋甕1の周囲、3～10は内部からの出土遺物である。2は常滑の甕の口縁部片。胎土は濃灰色を呈し、白色石粒を多く含み粗い。器表は茶褐色を呈し、外面は自然釉が掛り、一部剥離している。3～7は轆轤成形のかわらけ。底部は糸切り。3は大皿、4～7は小皿である。7は器高が高く、深さがある。胎土は概ね淡橙色～肌色を呈し、粉質。3・6・7は器表に煤が付着している。各々寸法は以下の通りである。口径は(13.4) cm・8.0cm・8.2cm・7.8cm・7.7cm、底径8.3cm・5.6cm・5.2cm・5.3cm・4.5cm、器高は3.2cm・2.3cm・2.1cm・2.2cm・2.8cmである。8は瀬戸の輪花型入れ子の口縁部片である。小破片のため傾きは不確かである。胎土は灰色を呈し、白色石粒を含み、硬質。焼成は良好。内面には自然釉が掛る。9は輪花型手焙り。器表は黒色処理され磨きが掛けられているが、著しく爆ぜている。菊花文スタンプが施されている。また、それぞれの輪花の頂点に孔が穿たれている。口径は(44.0) cmを測る。10は鉄製釘。

土坑5・出土遺物(図6・8)

土坑5はグリッド(x 8、y5)付近、海拔6.8 m前後に検出された。南部は調査区外であるが、平面形はおそらく円形あるいは楕円形を呈す。深さは検出面から20cm前後を測り、埋土は炭化物を非常に多く含む黒色粘質土で、粘土・かわらけ・小土丹・木片を含む。粘性があり、締り悪い。

図8-1～7は土坑5出土遺物である。1～6は轆轤成形のかわらけ。底部は糸切り。1は大皿、2～5は小皿、6は内折れかわらけである。大皿、小皿ともに底径は比較的小さく、器壁中位に強めの稜線を持ちそこから上方に角度を変えて立ち上がる。胎土は概ね淡橙色を呈し、微砂を含み粉質である。各々寸法は以下の通りである。口径は(13.2) cm・7.7cm・7.5cm・7.8cm・7.4cm (4.8) cm、底径は7.2cm・5.1cm・4.6cm・5.1cm・4.6cm・(3.2) cm、器高は3.6cm・2.4cm・1.9cm・1.7cm・1.8cm・1.2cmを測る。7は常滑の甕の胴部片で、周囲および両側面に研磨痕がある。

落込み部出土遺物(図8)

図8-8～12は調査区北西縁に検出された落込み(井戸か?)からの出土遺物である。轆轤成形のかわらけ。底部は糸切り。8は大皿、9～12は小皿である。胎土は8が橙色、9～12は肌色を呈し、微砂を含み粉質。10の器表には煤が付着している。各々寸法は以下の通りである。口径は(13.0) cm・(8.0) cm・(8.0) cm・(8.2) cm・(7.2) cm、底径は(9.0) cm・(5.5) cm・5.2cm・(6.2) cm・4.8cm、器高は3.6cm・

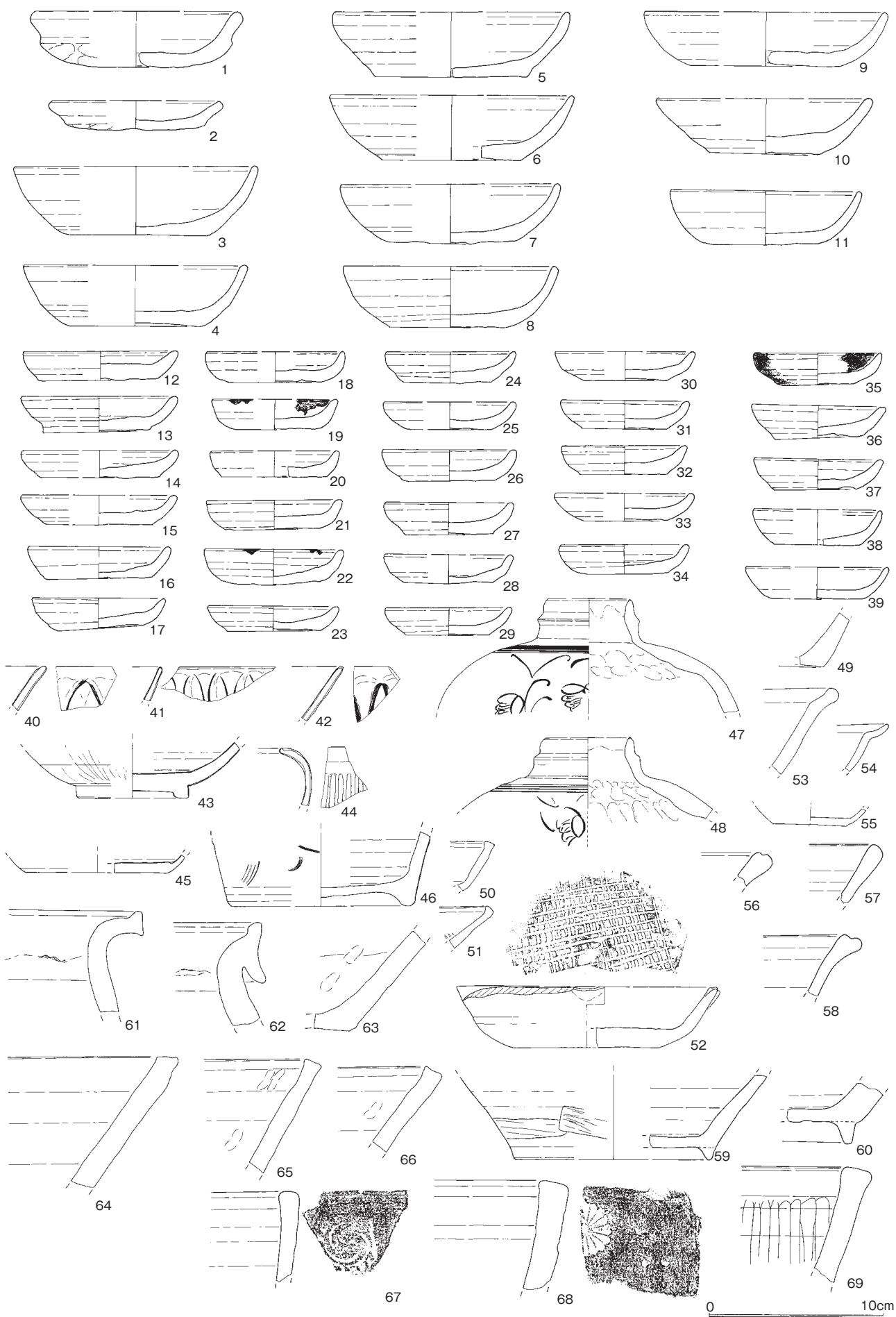


图9 1面出土遺物(1)

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
9	1	1面	-	かわらけ	手づくね	(12.2)	-	3.2	橙色系
9	2	1面	-	かわらけ	手づくね	(11.0)	-	1.7	橙色系
9	3	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(14.0)	7.5	3.9	淡橙色系
9	4	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(12.8)	7.6	3.5	淡橙色系
9	5	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.6)	8.8	3.7	淡橙色系
9	6	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(14.0)	(8.0)	3.7	淡橙色系
9	7	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(12.6)	7.6	3.4	淡橙色系
9	8	1面	-	かわらけ	轆轤成形	13.3	6.8	3.5	淡橙色系
9	9	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(14.0)	(8.3)	3.1	淡橙色系
9	10	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(12.2)	6.5	3.2	淡橙色系
9	11	1面	-	かわらけ	轆轤成形	11.0	6.5	3.1	肌色系
9	12	1面	-	かわらけ	轆轤成形	8.9	6.9	1.7	淡橙色系
9	13	1面	-	かわらけ	轆轤成形	9.0	6.2	2.1	橙色系
9	14	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(9.0)	(6.9)	1.6	淡橙色系
9	15	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(9.0)	(6.2)	1.7	淡橙色系
9	16	1面	-	かわらけ	轆轤成形	8.2	6.0	1.9	肌色系
9	17	1面	-	かわらけ	轆轤成形	7.6	5.1	1.9	肌色系
9	18	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	5.6	1.7	淡橙色系
9	19	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.2)	5.2	1.8	淡橙色系
9	20	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.4)	6.0	1.5	橙色系
9	21	1面	-	かわらけ	轆轤成形	7.8	5.4	1.7	淡橙色系
9	22	1面	-	かわらけ	轆轤成形	8.0	5.4	2.0	淡橙色系
9	23	1面	-	かわらけ	轆轤成形	7.5	5.4	1.5	淡橙色系
9	24	1面	-	かわらけ	轆轤成形	7.5	5.0	1.8	橙色系
9	25	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.6)	(5.0)	1.6	淡橙色系
9	26	1面	-	かわらけ	轆轤成形	7.7	5.3	1.8	淡橙色系
9	27	1面	-	かわらけ	轆轤成形	7.4	5.1	1.8	淡橙色系
9	28	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.4)	5.0	1.7	淡橙色系
9	29	1面	-	かわらけ	轆轤成形	7.3	4.8	1.6	淡橙色系
9	30	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	4.6	1.7	淡橙色系
9	31	1面	-	かわらけ	轆轤成形	7.4	5.0	1.6	淡橙色系
9	32	1面	-	かわらけ	轆轤成形	7.2	5.0	1.7	淡橙色系
9	33	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	4.6	1.6	淡橙色系
9	34	1面	-	かわらけ	轆轤成形	7.4	5.1	1.7	淡橙色系
9	35	1面	-	かわらけ	轆轤成形	7.4	4.3	1.9	橙色系
9	36	1面	-	かわらけ	轆轤成形	7.7	4.8	2.0	淡橙色系
9	37	1面	-	かわらけ	轆轤成形	7.2	4.7	1.8	淡橙色系
9	38	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.4)	5.0	2.0	橙色系
9	39	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.2)	(5.2)	1.8	肌色系

1.7cm・1.9cm・1.7cm・2.1cmを測る。

1面検出Pit (図5)

1面からは2口のPitが検出された。Pitはいずれも南部の良好な地業面に作られていた。平面形は直径30cm前後を測る円形を呈し、深さは検出面から10cm前後を測る。Pit22の底部には上面が平らな土丹が据えられていた。

1面出土遺物 (図9・10)

図9-1～39はかわらけである。1・2は手づくね。その他は轆轤成形、底部は糸切りである。1・2は天地返し混入品であろう。3～10は大皿、11は中皿、12～39は小皿。12～17は底径が広く、器壁は外向きにやや直線的に立ち上がる。3～11・18～39は概ね底径が小さく、器壁は丸味を持って立ち上がる。寸法は以下表のとおりである。胎土は微砂を含み粉質である。19・22・26・35は器表に煤が付着し、灯明皿である。

図9-40～46は舶載磁器である。40～43は青磁蓮弁文碗の口縁部片。いずれも釉調は緑青色を呈し、光沢は良い。微気泡やや多く、失透気味。素地は灰味白色を呈し、緻密。43の底径は(6.4)cmを測る。44は青磁の小壺である。外面には蓮弁文が施されている。釉調は緑青色を呈し、光沢は良い。微気泡

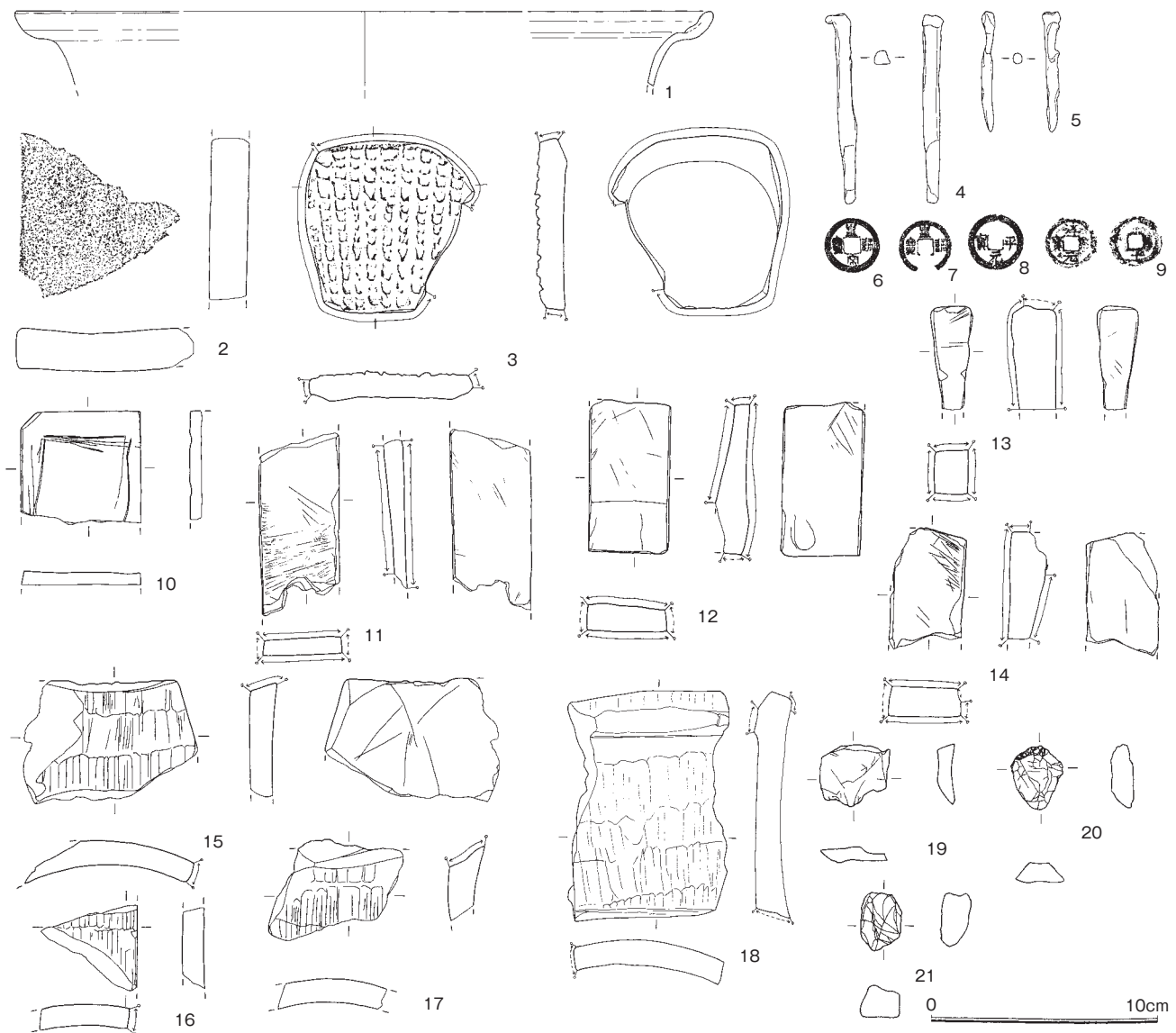


図10 1面出土遺物(2)

多く失透している。内側面は釉層薄い。素地は灰色を呈す。45は白磁口元皿の底部片。釉調は青味白色を呈し、光沢・透明度ともに良い。素地は白色を呈す。底径は(8.0)cmを測る。46は青白磁梅瓶の底部片。渦紋が描かれている。釉調は水青色を呈し、光沢・透明度ともに良い。素地は灰味白色を呈す。外底面は無釉。底径は(10.2)cmを測る。

図9-47~55は瀬戸である。いずれも灰釉。胎土は灰白色~白褐色を呈す。47・48は梅瓶。接合できない小破片が複数ある。49は壺の底部片。50~52はおろし皿。52は口縁の一部が研磨され磨り減っている。52の口径は(15.0)cm、底径は8.2cm、器高は3.5cmを測る。53・54は折縁鉢の口縁部片。55は入れ子の底部片。底径は4.2cmを測る。

図9-56~60は山茶碗窯系こね鉢である。56~58は口縁部片。56・58の口縁上端には深く沈線がめぐる。59・60は底部片。59の内面には厚く自然釉が掛る。底径は(11.4)cmを測る。

図9-61~66は常滑。61~63は甕、64~66はこね鉢である。概ね胎土は灰色を、器表は赤茶褐色を呈す。64の内面は磨滅している。

図9-67~69は瓦質手焙りである。胎土は灰色を呈し、石粒を多く含み粗い。67の器表は黒色処理及び磨かれ、巴文スタンプが施されている。68・69の器表は磨かれている。68は菊花文スタンプが施され、

おそらく輪花型を呈す。

図10-1は伊勢系土鍋。口径は(31.0) cmを測る。口縁は外に大きく引き出され端部は内側に折り返されている。内面には煤が付着している。胎土は肌色を呈し、胎芯は黒灰色に残る。微砂、金雲母を含み、硬く焼き締まる。

図10-2は平瓦。胎土は黒灰色を呈し、硬質。小破片のため叩き目は不明。

図10-3は研磨痕のある瀬戸おろし皿の破片。

図10-4・5は鉄製釘。図10-6～9は銭。6・7は皇宋通宝(初鑄1038年)、8は(治)平元寶(初鑄1064年)、9は淳熙元寶(背・十)(初鑄1174年)である。

図10-10～21は石製品。10は硯。一端割れた破片を再加工しようとしているが、完成していない。11～14は砥石。11は鳴滝産仕上げ砥。12～14は中砥。12・14は上野産、13は伊予産。15～18は滑石鍋転用品。いずれも外面には煤が付着している。用途は不明。19～21は火打石。19・20は透明な白色、21は不透明の白色。

図示したものの他に、スラグ1点(172.7 g)、骨の小破片8点が出土している。骨は小破片のため詳細は不明だが、人の歯が2点(大白歯1点・切歯1点)含まれている。

第2面(図11)

第2面は1面下20～30cm、海拔6.6～6.7m前後に検出された。土丹地業が部分的に施されている。溝1条・柱穴列1列・土坑1基・Pit1口が検出された。土坑6北側の一帯の土丹地業は大土丹が使用されていた。

溝1・出土遺物(図12・13)

溝1はグリッド(x5、y5)付近、海拔6.6m前後に検出された。検出し得た全長は3m35cmを測り、調査区南東隅で東に曲がり、調査区外へと延びている。上端幅50cm、下端幅40cm、深さは検出面から10cm前後を測り浅い。また、底面レベルは一定している。底部からは板材や杭が検出されているが、護岸施設の一部の可能性がある。南北軸線方向はN-8°-Eである。埋土は暗褐色粘質土で、かわらけ片・0.5～1.0cm大の土丹粒・鎌倉石粒・炭化物を含み、粘性があり、締りはやや悪い。

図13は溝1出土遺物である。1～4はかわらけである。轆轤成形、底部は糸切りである。3・4は深いタイプ。胎土は肌色を呈し、微砂を含み、粉質。5は瀬戸の輪花型入れ子。小破片のため傾きは不確か。胎土は灰色を呈し、堅緻。

柱穴列1(図12)

柱穴列1はグリッド(x11、y2)付近、海拔6.6

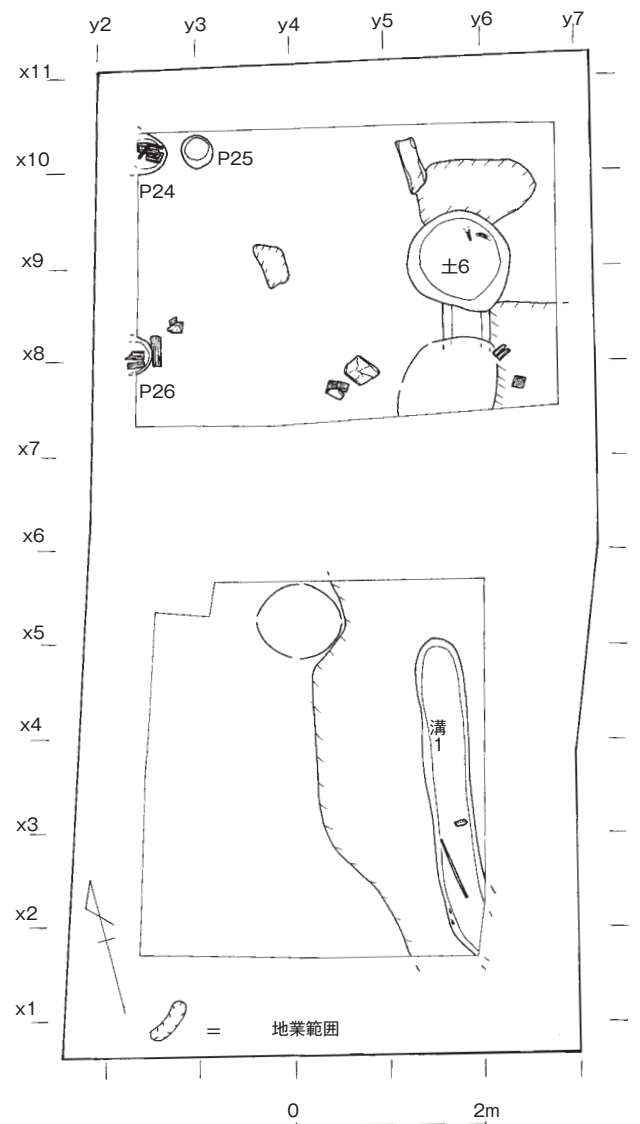


図11 2面遺構配置図

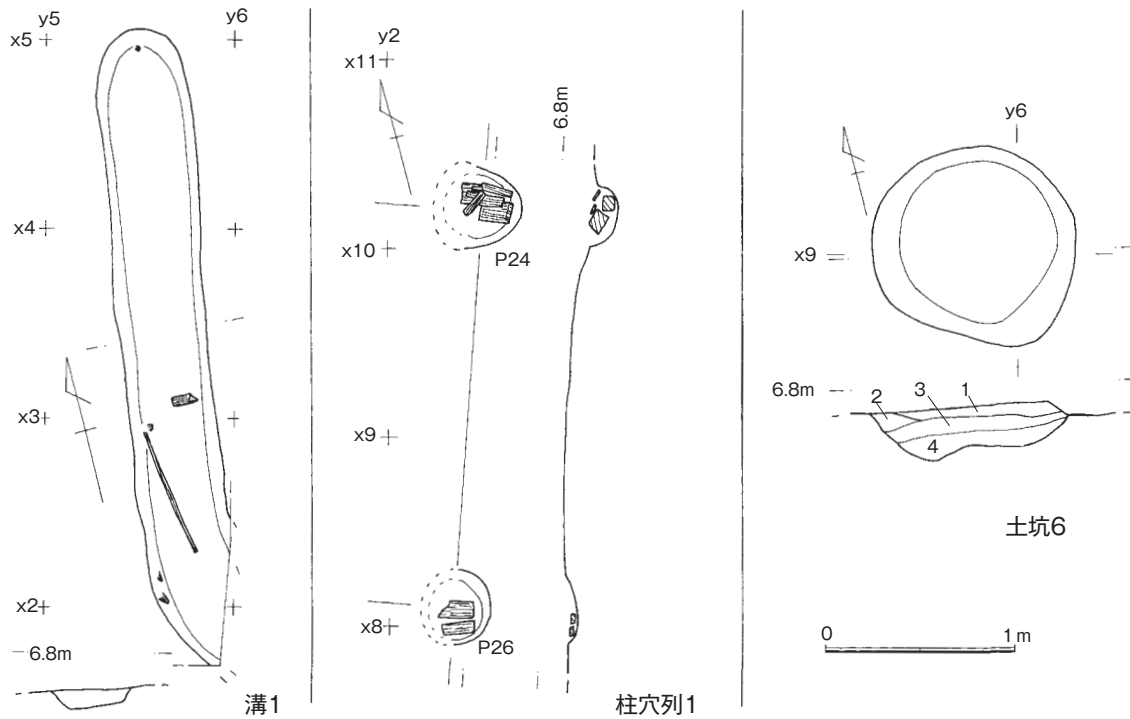


図12 2面溝1・柱穴列1・土坑6

m前後に検出された。2口の柱穴が南北方向に並んでいる。この柱穴列は掘立柱建物の一部であろう。さらに北・西・南に展開するが、調査区外のためその全様は不明である。柱穴間の距離は芯々で210cmを測る。柱穴は平面形が直径40cm前後の円形を呈し、深さは検出面から10cm前後を測り浅い。当該面より上層からの掘り込みである可能性が高い。柱穴内部には複数の礎板が遺存している。南北軸線方向はN-20°-Eである。

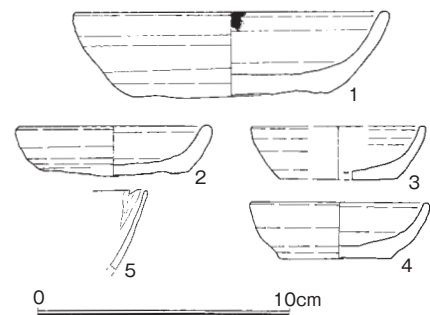


図13 溝1出土遺物

土坑6 (図12・14)

土坑6はグリッド(x9、y6)付近、海拔6.7m前後に検出された。平面形は直径110cm前後の不整円形を呈し、深さは検出面から26cmを測り、西部が深い。埋土の土層注記は以下の通り。

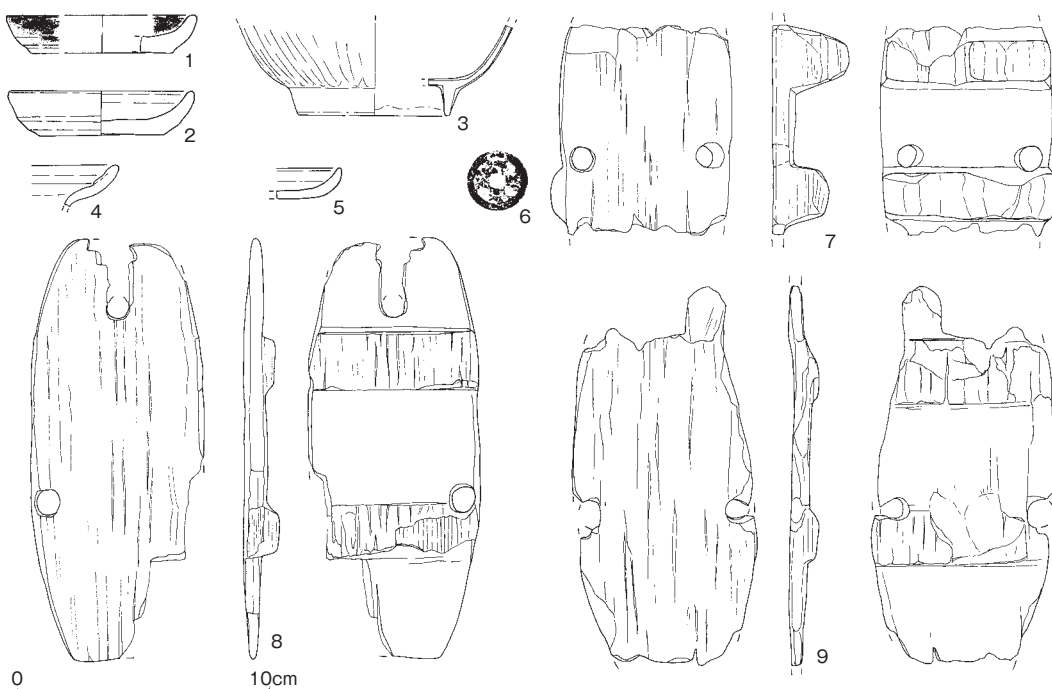


図14 土坑6出土遺物

1層：黒色粘質土 炭化物をととても多く含み、木片・1～3cm大の土丹粒を含む。粘性があり、締りは悪い。
 2層：暗茶褐色粘質土 3cm大の土丹・木片・かわらけ片を含む。粘性が強く、締り悪い。
 3層：黒灰色粘質土 炭化物・3cm大の土丹をいずれも少量含む。粘性があり、締り良い。
 4層：黒灰色粘質土 炭化物を多く、3cm大の土丹をやや多く含み、かわらけ片・木片を含む。粘性

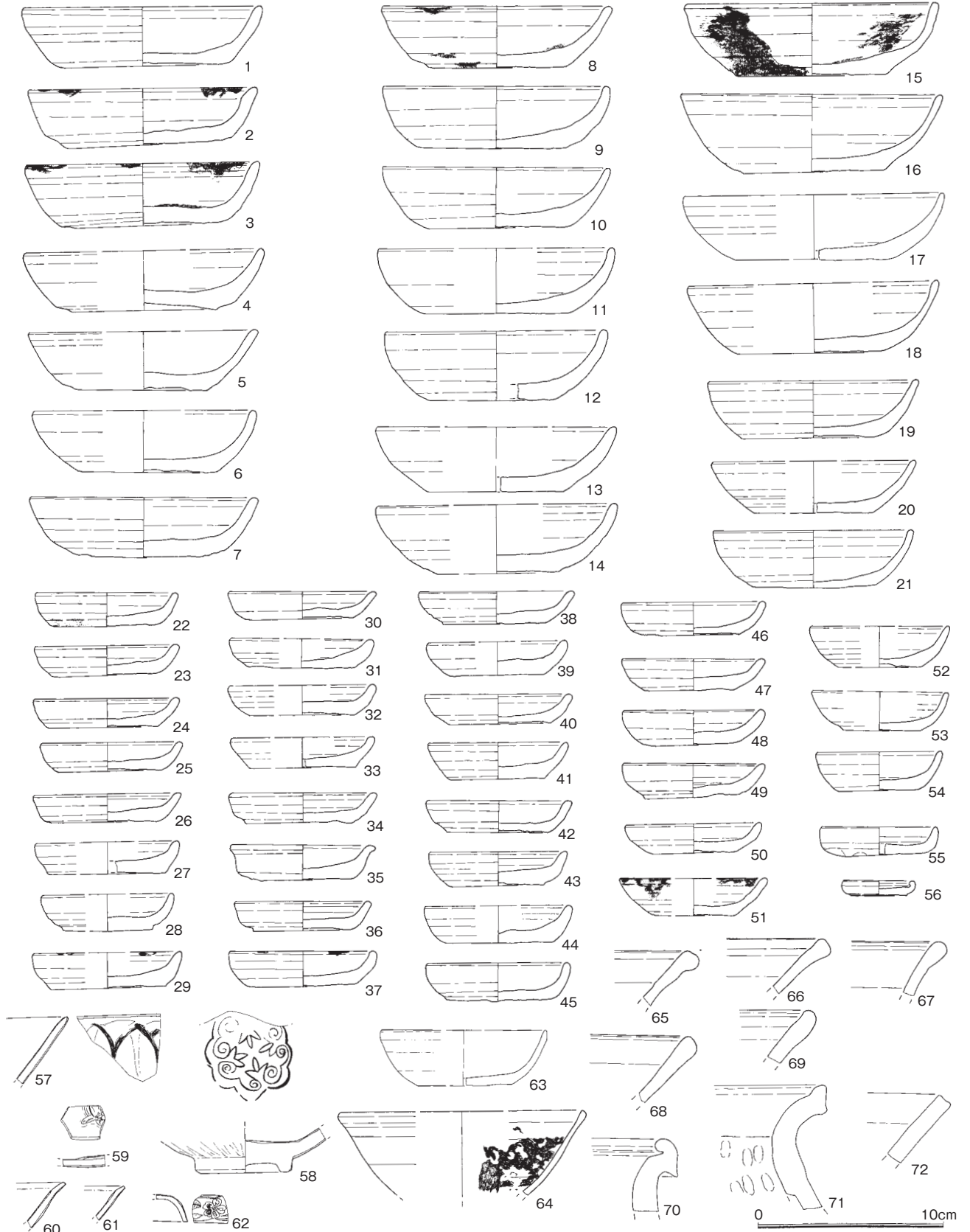


図15 2面出土遺物(1)

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
15	1	2面	-	かわらけ	轆轤成形	13.0	9.2	3.2	橙色系
15	2	2面	-	かわらけ	轆轤成形	12.4	8.2	3.2	橙色系
15	3	2面	-	かわらけ	轆轤成形	12.7	8.6	3.4	肌色系
15	4	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	7.8	3.3	肌色系
15	5	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(12.4)	7.2	3.2	肌色系
15	6	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(12.2)	7.4	3.4	淡橙色系
15	7	2面	-	かわらけ	轆轤成形	12.3	7.5	3.3	淡橙色系
15	8	2面	-	かわらけ	轆轤成形	12.4	7.5	3.3	肌色系
15	9	2面	-	かわらけ	轆轤成形	12.3	7.8	3.4	肌色系
15	10	2面	-	かわらけ	轆轤成形	12.3	7.7	3.3	肌色系
15	11	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(12.8)	8.0	3.5	肌色系
15	12	2面	-	かわらけ	轆轤成形	12.0	(6.8)	3.8	淡橙色系
15	13	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	(7.4)	3.5	橙色系
15	14	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	(6.8)	3.7	肌色系
15	15	2面	-	かわらけ	轆轤成形	13.8	8.4	3.9	淡橙色系
15	16	2面	-	かわらけ	轆轤成形	14.1	8.1	4.3	橙色系
15	17	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(14.0)			肌色系
15	18	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.6)	7.8	3.7	肌色系
15	19	2面	-	かわらけ	轆轤成形	11.4	7.1	3.1	肌色系
15	20	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(11.0)	(6.2)	3.2	肌色系
15	21	2面	-	かわらけ	轆轤成形	10.8	6.6	3.1	肌色系
15	22	2面	-	かわらけ	轆轤成形	7.7	5.7	1.8	肌色系
15	23	2面	-	かわらけ	轆轤成形	7.8	5.7	1.7	肌色系
15	24	2面	-	かわらけ	轆轤成形	7.8	5.8	1.6	肌色系
15	25	2面	-	かわらけ	轆轤成形	7.7	5.5	1.6	肌色系
15	26	2面	-	かわらけ	轆轤成形	8.0	5.8	1.5	肌色系
15	27	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.8)	(6.2)	1.7	肌色系
15	28	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.2)	(4.8)	2.0	淡橙色系
15	29	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.1)	6.2	2.0	肌色系
15	30	2面	-	かわらけ	轆轤成形	8.0	5.7	1.5	肌色系
15	31	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.8)	5.6	1.6	淡橙色系
15	32	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	5.6	1.6	肌色系
15	33	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.8)	5.8	1.7	肌色系
15	34	2面	-	かわらけ	轆轤成形	8.0	5.7	1.7	肌色系
15	35	2面	-	かわらけ	轆轤成形	7.8	5.5	2.0	肌色系
15	36	2面	-	かわらけ	轆轤成形	7.4	5.1	1.6	肌色系
15	37	2面	-	かわらけ	轆轤成形	8.0	5.7	2.0	肌色系
15	38	2面	-	かわらけ	轆轤成形	8.4	5.5	1.8	肌色系
15	39	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.6)	5.0	1.8	肌色系
15	40	2面	-	かわらけ	轆轤成形	8.0	5.4	1.6	淡橙色系
15	41	2面	-	かわらけ	轆轤成形	7.6	5.1	2.0	肌色系
15	42	2面	-	かわらけ	轆轤成形	7.9	5.4	1.7	肌色系
15	43	2面	-	かわらけ	轆轤成形	7.5	5.1	1.9	淡橙色系
15	44	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	6.0	2.0	肌色系
15	45	2面	-	かわらけ	轆轤成形	7.8	5.6	2.1	肌色系
15	46	2面	-	かわらけ	轆轤成形	7.8	5.3	1.8	肌色系
15	47	2面	-	かわらけ	轆轤成形	7.7	4.8	1.7	橙色系
15	48	2面	-	かわらけ	轆轤成形	7.7	5.0	2.0	肌色系
15	49	2面	-	かわらけ	轆轤成形	7.7	5.1	1.9	肌色系
15	50	2面	-	かわらけ	轆轤成形	7.4	4.4	1.6	淡橙色系
15	51	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	(4.4)	2.0	淡橙色系
15	52	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.6)	(4.8)	2.2	淡橙色系
15	53	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.4)	4.2	2.1	淡橙色系
15	54	2面	-	かわらけ	轆轤成形	6.8	4.5	2.1	肌色系

があり、締りやや良い。

図14は土坑6出土遺物である。1・2はかわらけの小皿。轆轤成形、底部は糸切り。器壁中位に稜を持ち、そこから上方に立ち上がる。胎土は肌色を呈し、微砂を含み粉質。器表には全体的に煤が付着している。3は青磁蓮弁文折縁鉢の底部片である。底径は(6.0)cmを測る。釉調はくすんだ緑青色を呈し、微気泡多く、

白濁し失透している。光沢は良い。素地は灰色を呈し、緻密。4は伊勢系土鍋の口縁部片。横に引き出された口縁は端部が内側に折り返されている。胎土は白褐色を呈し、胎芯は黒灰色に残る。金雲母・微砂を多く含む。5は白かわらけ。手づくねである。胎土は白色を呈し、水簸され緻密。6は祥符元寶(初鑄1009年)。7～9は木製の連歯下駄。8の寸法は長さ16.7cm、幅6.7cm、高さ[1.4]cmを測る。7・9は破片のため詳細は不明だが、おそらく、8と同様な寸法であろう。特に9は歯の減り具合から7と対であった可能性が高い。図示したもの他にシカの上腕骨の破片1点、ウメの果核1点が出土した。

2面検出Pit (図11)

2面からは、柱穴列1の他にPitが1口検出された。Pit25はグリッド(x10、y3)付近、海拔6.6m前後に検出された。平面形は直径35cmの円形を呈し、深さは検出面から20cm前後を測る。

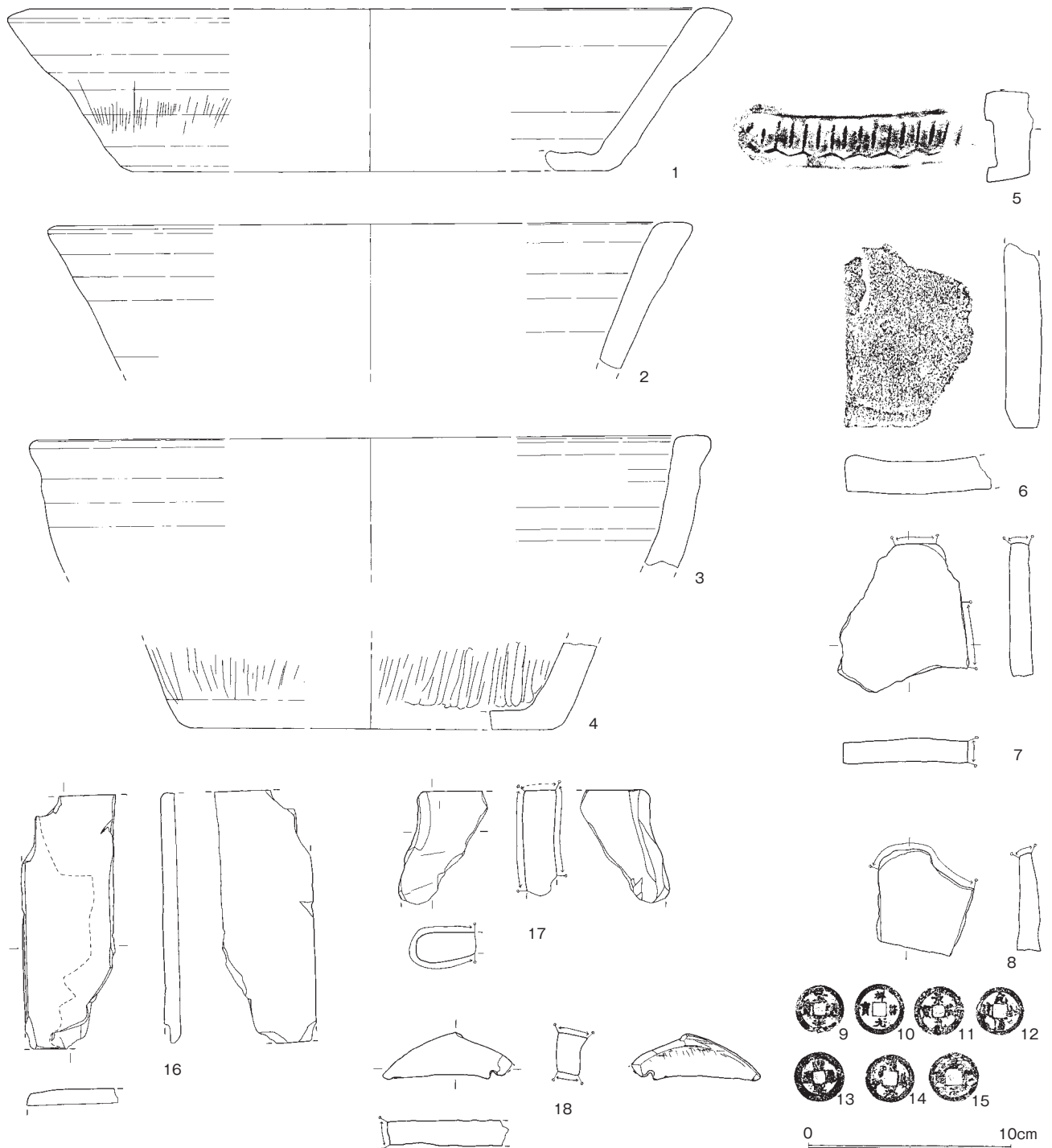


図16 2面出土遺物(2)

2面出土遺物 (図15～17)

図15～17は2面覆土出土遺物である。図15-1～54はかわらけである。轆轤成形、底部は糸切り。1～18は大皿、19～21は中皿、22～54は小皿である。15～18の大皿、19～21の中皿、52～54の小皿は薄手丸深型系。22～27の小皿は底径が広く、器高が低く浅いタイプである。その他は概ね側面観が丸味を帯びた逆台形を呈し、厚手である。また、35の小皿は口縁端部が外反し、特殊な形状である。胎土は概ね微砂を含み粉質。胎土の色調・寸法は表のとおりである。2・3・8・15・17・29・37・51は煤が付着しており、灯明皿である。

図15-55は特殊かわらけである。手づくね成形。器壁は垂直に立ち上がる。口径6.4cm、底径6.0cm、器高1.5cmを測る。胎土は肌色を呈し、微砂を含み、硬く焼き締まっている。図15-56は内折れかわらけ。轆轤成形、底部は糸切り。口径4.0cm、底径3.1cm、器高0.8cmを測る。胎土は肌色を呈し粉質。

図15-57～62は舶載磁器。57・58は青磁蓮弁文碗。釉調は、57は青緑色を呈し、光沢・透明度共に良い。58は緑青色を呈し、光沢は良いが、微気泡多く失透している。素地は共に灰色を呈す。59は青磁双魚文鉢の底部片。釉調は緑青色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は灰色を呈す。60・61は白磁口元皿の口縁部片。60の口縁部には漆が付着している。覆輪の痕跡であろう。釉調は灰味白色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は灰味白色を呈し、緻密。62は青白磁合子の印花文蓋。型作り。釉調は水青色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は白色を呈し、緻密。

図15-63は瀬戸の入れ子。胎土は灰色を呈し、白色石粒を含みやや粗い。口径(9.0)cm、底径(5.0)cm、器高3.0cmを測る。図15-64は美濃系山茶碗である。口径は(13.4)cmを測る。胎土は灰白色を呈し、

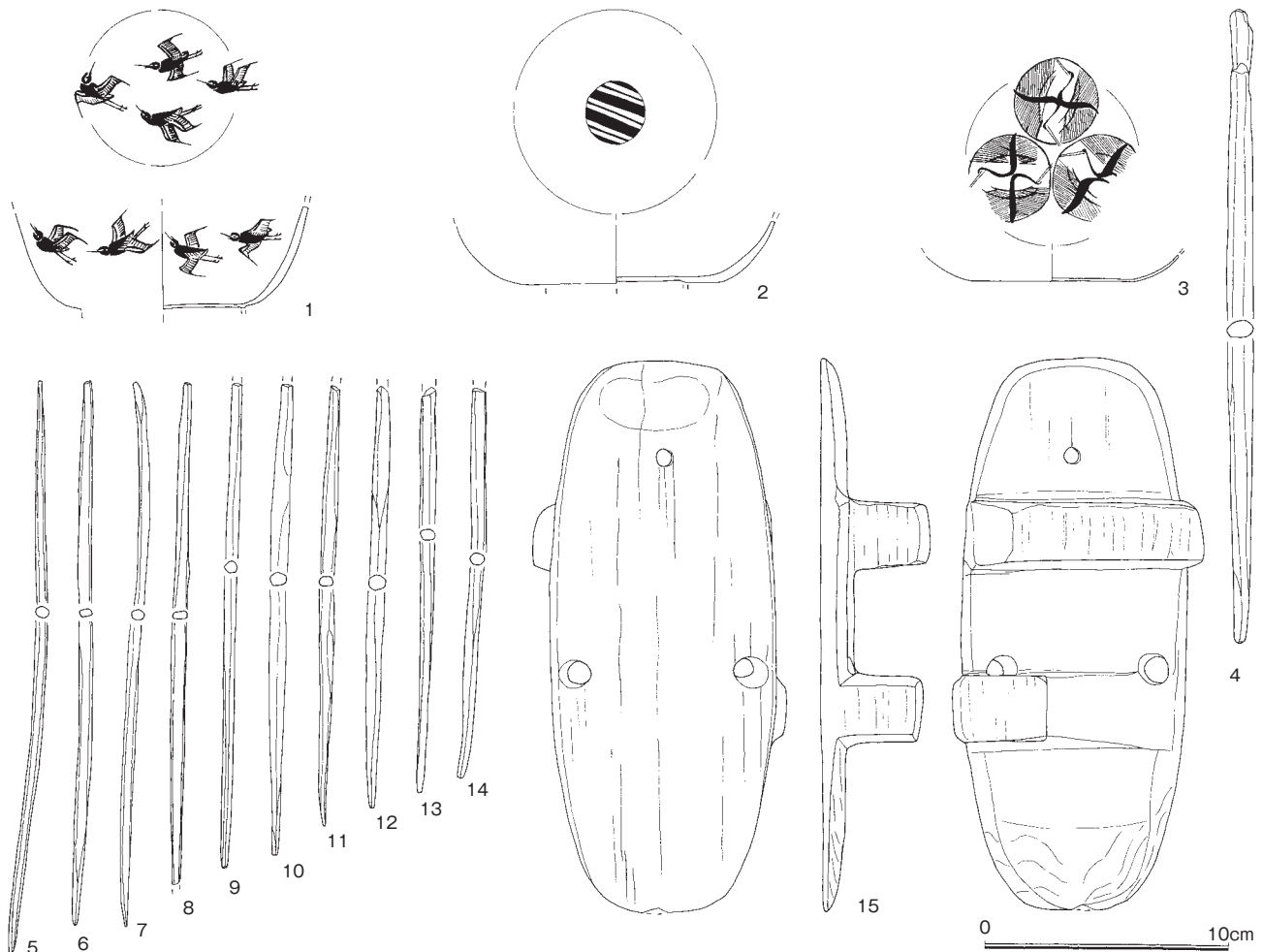


図17 2面出土遺物(3)

緻密。硬く焼き締まる。内面には漆が付着している。

図15-65～69は山茶碗窯系こね鉢の口縁部片である。胎土は灰色を呈し、石粒等多く含み粗い。65～68は口縁が肥厚している。内面を中心に自然釉が掛る。

図15-70～72は常滑である。70・71は甕の口縁部片、72は甕の口縁部片である。70は縁帯の幅の狭いn字口縁、71は上方に摘まみ出されるタイプの口縁である。72の口縁端部には浅い沈線状の窪みが廻る。胎土は濃灰色を呈し、石粒を含み粗く、硬質。70・72の内面には自然釉が厚く掛る。

図16-1～4は瓦質手焙り。胎土は微砂・石粒を多く含み粗く脆い。3は淡橙色、その他は黒灰色を呈す。2は器壁上位に孔が穿たれている。1～3の内面はナデ調整、外面は1は篋調整、4は縦位の磨き、2・3はナデ調整。底部は離れ砂痕がある。

図16-5・6は瓦。5は軒平瓦の瓦当部。上面に研磨痕がある。下向剣頭文。6は平瓦。

図16-7・8は研磨痕のある陶片。7は常滑の甕の破片、8は山茶碗窯系こね鉢の破片である。割れ口に研磨痕がある。

図16-9～15は銭。太平通宝(初鑄976年)・祥符元寶(初鑄1009年)・景祐元寶(初鑄1034年)・元祐通寶(初鑄1086年)・元祐通寶・判読不明2枚である。

図16-16～18は石製品。16は硯の破片。裏面に漆が付着している。17は砥石。伊予産中砥。18は滑石鍋転用品。用途は不明。外側面には煤が厚く付着している。

図17-1～3は漆器。1・2は椀、3は皿である。いずれも黒漆塗りに朱漆で手描きの文様が描かれている。1は千鳥が内外側面及び内底面に飛んでいる。2は内底面中央に縞模様の円。3は内底面に鶴の文様が描かれている。

図17-4～15は木製品。4はまな箸。5～14は箸。15は連歯下駄。長さ22.6cm、幅9.2cm、高さ4.5cmを測る。

また、図示したもの他に骨が出土している。内訳はウマ:中足骨1・指骨(基節骨)1、ウシ:肩甲骨[1]、イヌ:橈骨1・肩甲骨[1]・脛骨[1]・歯1、小動物:大腿骨1、不明:寛骨[1]・腓骨[1]、サメ:椎骨[1]、小破片12である。

第3面(図18)

第3面は2面下20cm、海拔6.4～6.5m前後に検出された。全体に強弱はあるものの、調査区南部は鎌倉石粒、調査区北部は土丹により地業されていた。また、調査区北西隅の一面は複数回の版築が確認された。落込み1ヶ所・板壁建物1棟・掘立柱建物1棟・土坑3基・Pit9口が検出された。

板壁建物1、落込み1・出土遺物(図19・20～22)

落込み1・板壁建物1はグリッド(x4、y4)付近、

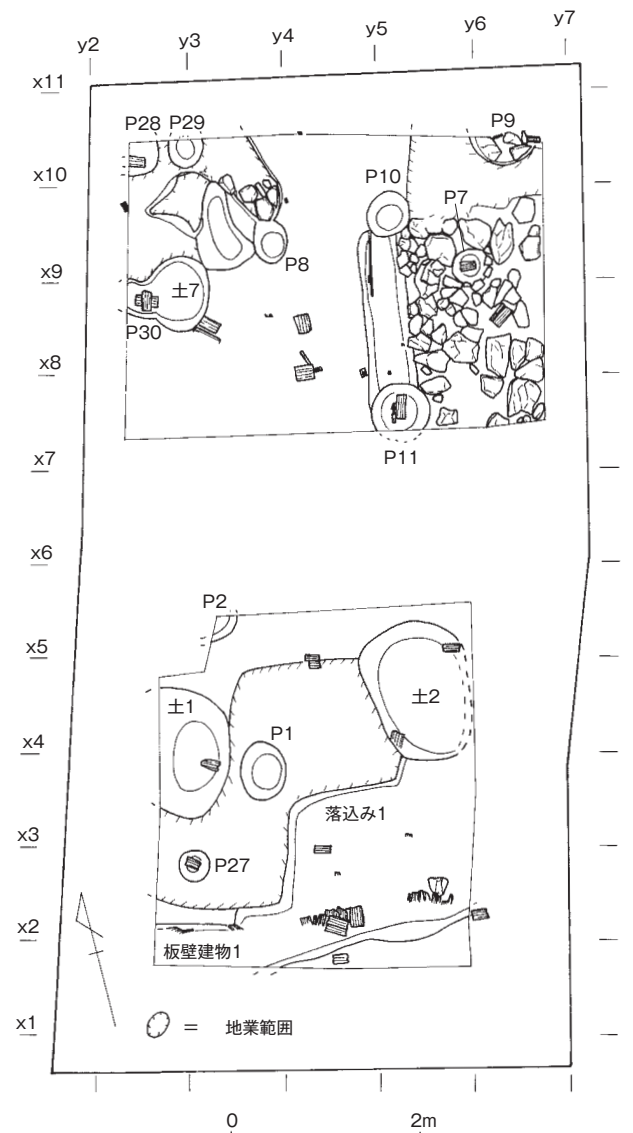
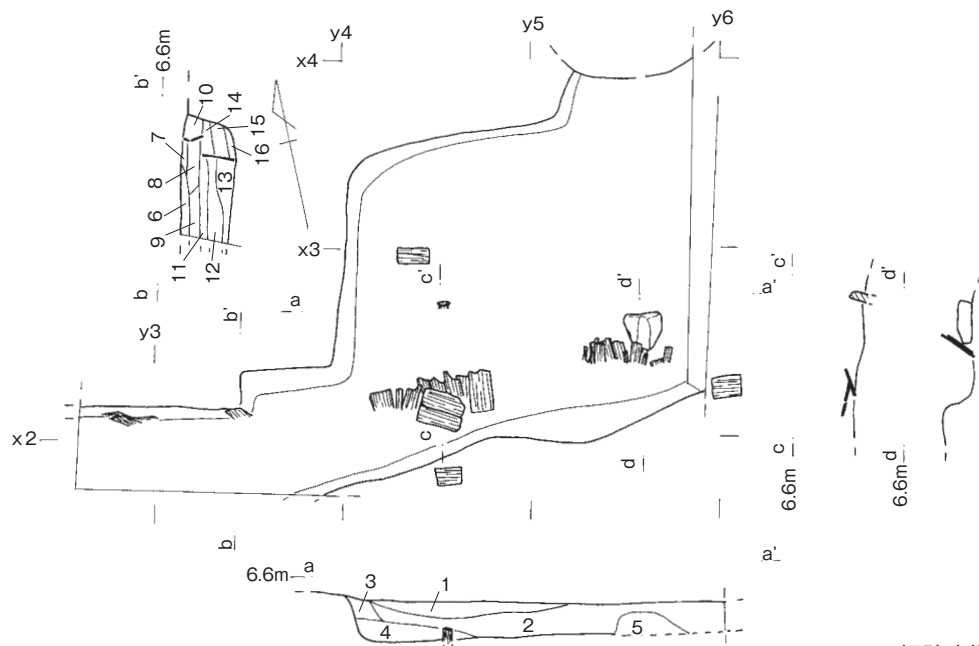
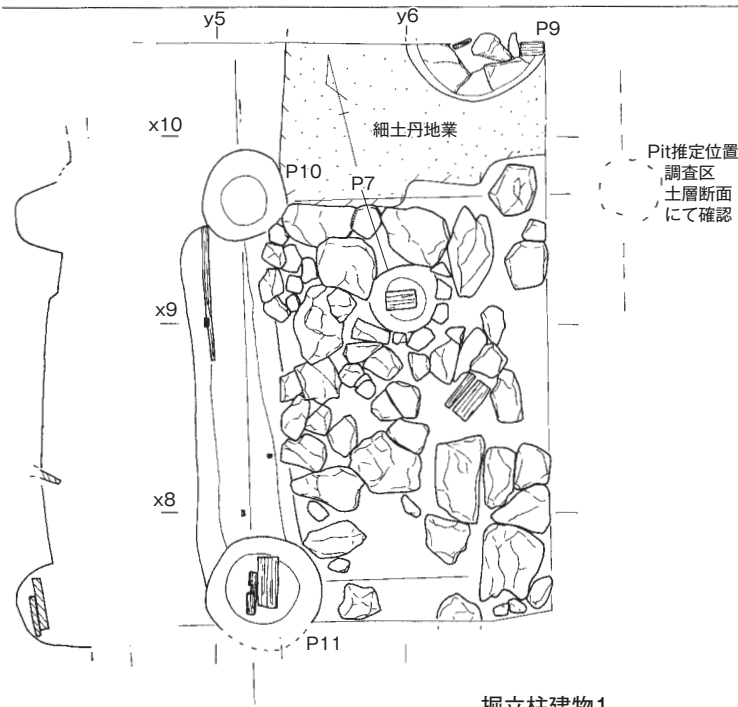


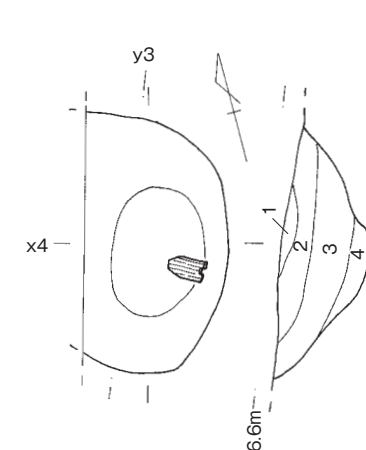
図18 3面遺構配置図



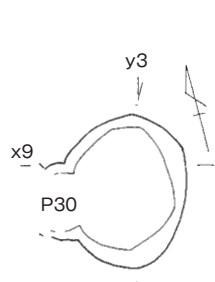
板壁建物1、落込み1



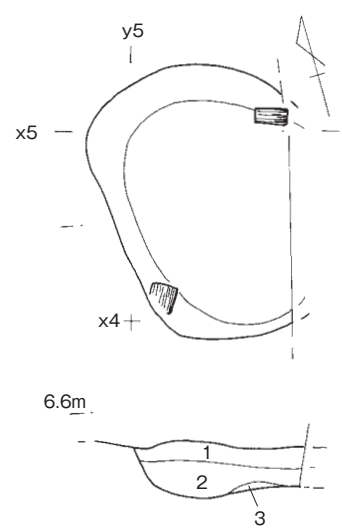
掘立柱建物1



土坑1



土坑7



土坑2

図19 3面板壁建物1・落込み1、掘立柱建物1・土坑1・2・7

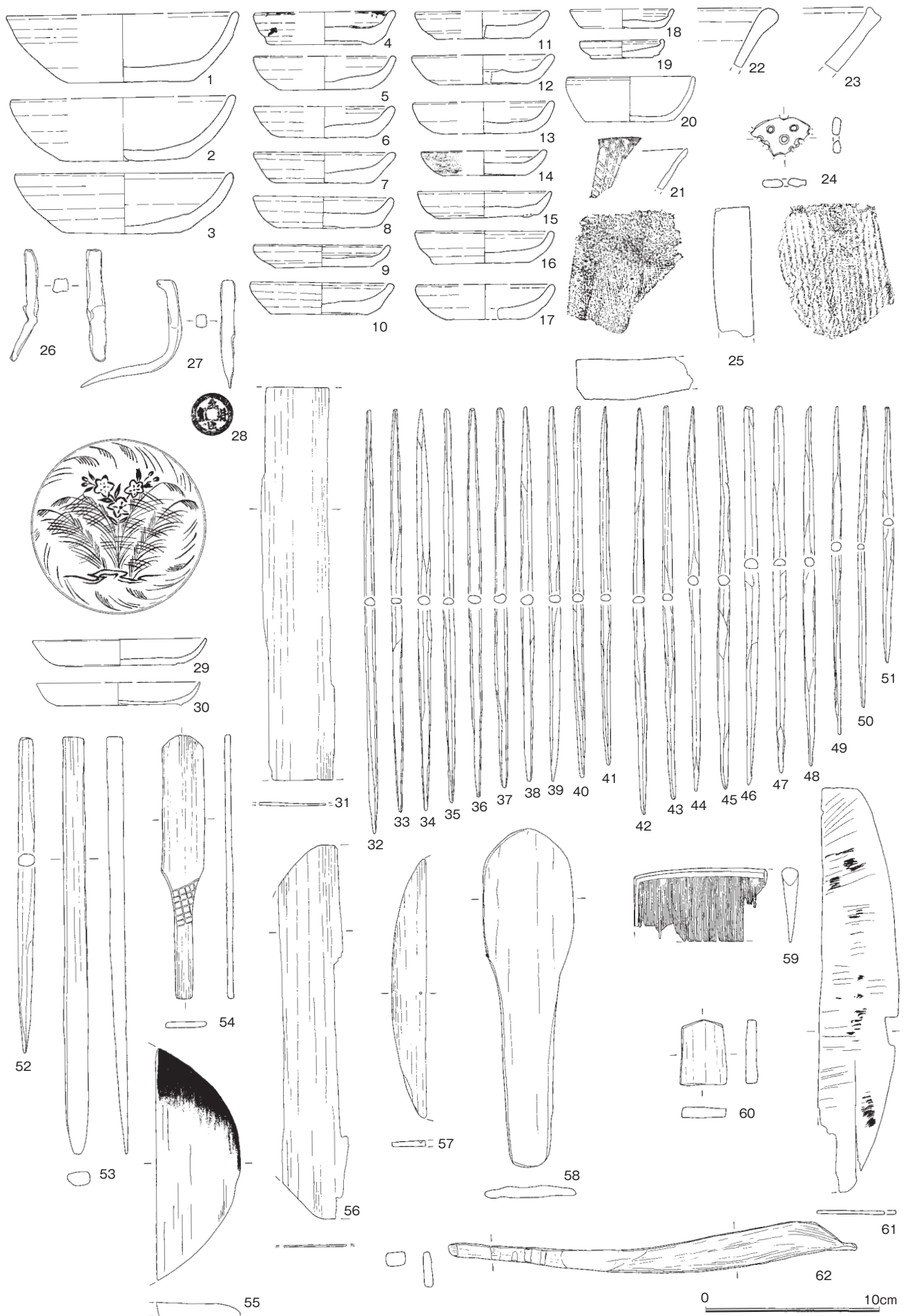


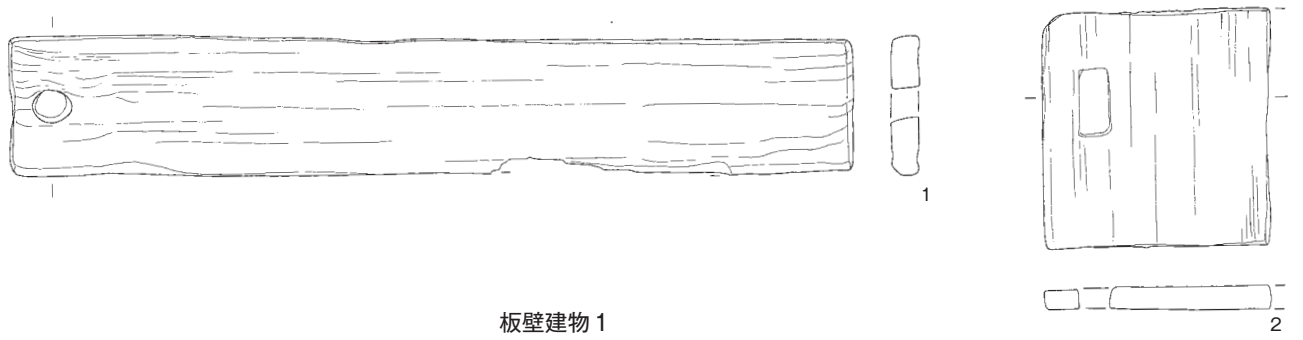
图20 板壁建物1出土遺物(1)

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
20	1	3面	板壁建物1	かわらけ	轆轤成形	(13.4)	7.4	3.9	肌色系
20	2	3面	板壁建物1	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	7.3	3.6	淡橙色系
20	3	3面	板壁建物1	かわらけ	轆轤成形	12.6	7.1	3.5	肌色系
20	4	3面	板壁建物1	かわらけ	轆轤成形	(8.2)	6.2	1.9	肌色系
20	5	3面	板壁建物1	かわらけ	轆轤成形	(8.2)	5.6	1.9	肌色系
20	6	3面	板壁建物1	かわらけ	轆轤成形	(8.2)	5.6	1.8	肌色系
20	7	3面	板壁建物1	かわらけ	轆轤成形	8.2	5.5	1.8	肌色系
20	8	3面	板壁建物1	かわらけ	轆轤成形	8.1	5.7	1.8	淡橙色系
20	9	3面	板壁建物1	かわらけ	轆轤成形	7.9	5.5	1.4	肌色系
20	10	3面	板壁建物1	かわらけ	轆轤成形	8.3	5.7	1.8	肌色系
20	11	3面	板壁建物1	かわらけ	轆轤成形	(7.8)	(5.2)	1.6	橙色系
20	12	3面	板壁建物1	かわらけ	轆轤成形	(8.2)	5.2	1.7	肌色系
20	13	3面	板壁建物1	かわらけ	轆轤成形	(8.2)	(5.8)	1.8	肌色系
20	14	3面	板壁建物1	かわらけ	轆轤成形	(7.2)	(4.6)	1.4	肌色系
20	15	3面	板壁建物1	かわらけ	轆轤成形	7.7	5.7	1.6	肌色系
20	16	3面	板壁建物1	かわらけ	轆轤成形	8.0	5.5	1.9	肌色系
20	17	3面	板壁建物1	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	(4.9)	2.0	肌色系
20	31	3面	板壁建物1	木製品	折敷	22.6	[3.8]	0.2	-
20	32	3面	板壁建物1	木製品	箸	24.3	0.6	0.5	-
20	33	3面	板壁建物1	木製品	箸	23.1	0.6	0.5	-
20	34	3面	板壁建物1	木製品	箸	23.0	0.7	0.5	-
20	35	3面	板壁建物1	木製品	箸	22.6	0.6	0.4	-
20	36	3面	板壁建物1	木製品	箸	22.3	0.7	0.5	-
20	37	3面	板壁建物1	木製品	箸	21.8	0.7	0.5	-
20	38	3面	板壁建物1	木製品	箸	21.5	0.7	0.6	-
20	39	3面	板壁建物1	木製品	箸	21.5	0.7	0.4	-
20	40	3面	板壁建物1	木製品	箸	21.3	0.6	0.5	-
20	41	3面	板壁建物1	木製品	箸	20.6	0.6	0.4	-
20	42	3面	板壁建物1	木製品	箸	23.4	0.6	0.4	-
20	43	3面	板壁建物1	木製品	箸	22.6	0.5	0.4	-
20	44	3面	板壁建物1	木製品	箸	22.1	0.6	0.5	-
20	45	3面	板壁建物1	木製品	箸	22.1	0.7	0.6	-
20	46	3面	板壁建物1	木製品	箸	21.7	0.8	0.6	-
20	47	3面	板壁建物1	木製品	箸	21.1	0.7	0.4	-
20	48	3面	板壁建物1	木製品	箸	20.7	0.6	0.5	-
20	49	3面	板壁建物1	木製品	箸	18.9	0.6	0.5	-
20	50	3面	板壁建物1	木製品	箸	17.3	0.4	0.3	-
20	51	3面	板壁建物1	木製品	箸	14.7	0.6	0.3	-
20	52	3面	板壁建物1	木製品	棒状製品	18.1	0.9	0.7	-
20	53	3面	板壁建物1	木製品	棒状製品	24.0	1.3	0.8	-
20	54	3面	板壁建物1	木製品	筥状製品	15.0	2.4	0.3	-
20	55	3面	板壁建物1	木製品	円板	[13.2]	[4.8]	0.8	-
20	56	3面	板壁建物1	木製品	円板	[21.5]	[3.6]	0.1	-
20	57	3面	板壁建物1	木製品	円板	[14.8]	[2.0]	0.4	-
20	58	3面	板壁建物1	木製品	杓文字	19.4	5.2	0.6	-
20	59	3面	板壁建物1	木製品	櫛	[7.5]	4.2	0.9	-
20	60	3面	板壁建物1	木製品	将棋の駒?	3.7	2.6	0.6	-
20	61	3面	板壁建物1	木製品	板草履の芯	23.2	[4.5]	0.3	-
20	62	3面	板壁建物1	木製品	鳥形?	23.5	2.0	1.1	-
21	1	3面	板壁建物1	木製品	部材	33.5	5.5	1.1	-
21	2	3面	板壁建物1	木製品	部材	9.3	[8.9]	9.0	-

海拔6.5 m前後に検出された。

落込み1は南部が板壁建物1と重複し、板壁建物1と共に、その大半が調査区外であるため、全様は不明である。あるいは板壁建物1の一部である可能性もある。

板壁建物1はx2ライン北側に検出された東西方向の壁際に板材が検出され、さらに、その東側延長ライン上に北方向に開き倒れた状態で板材が検出された。これは直接板材を壁材として掘り方に設置した板壁建物の最下層部分であろうと考えられる。板材の根本は特に埋められていた様子はない。d-d'間に見られるように土丹が裏込めに設置されているようにも見える検出状況であったが、意図して設



板壁建物 1

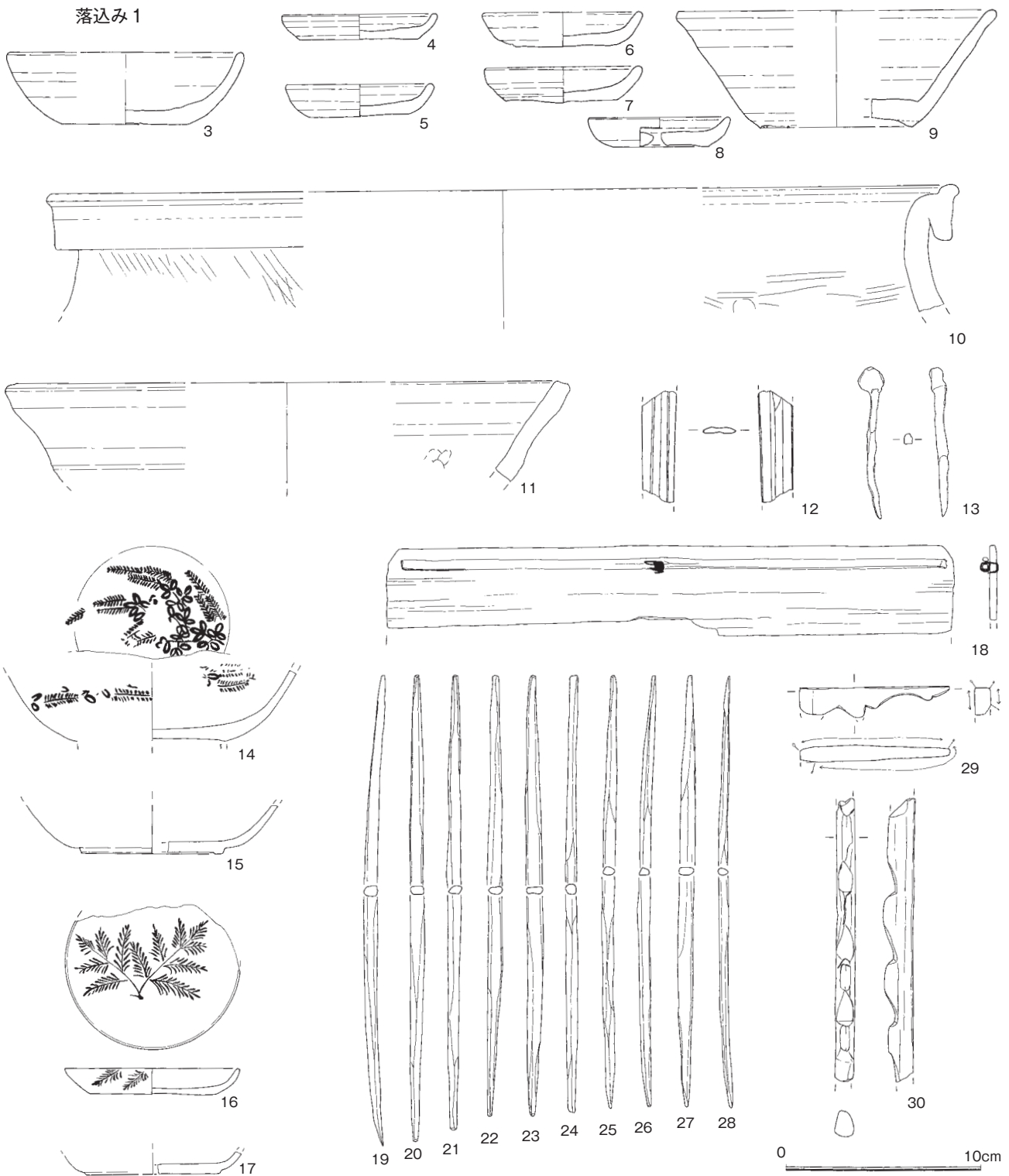


図21 板壁建物 1 (2)、落込み 1 (1) 出土遺物

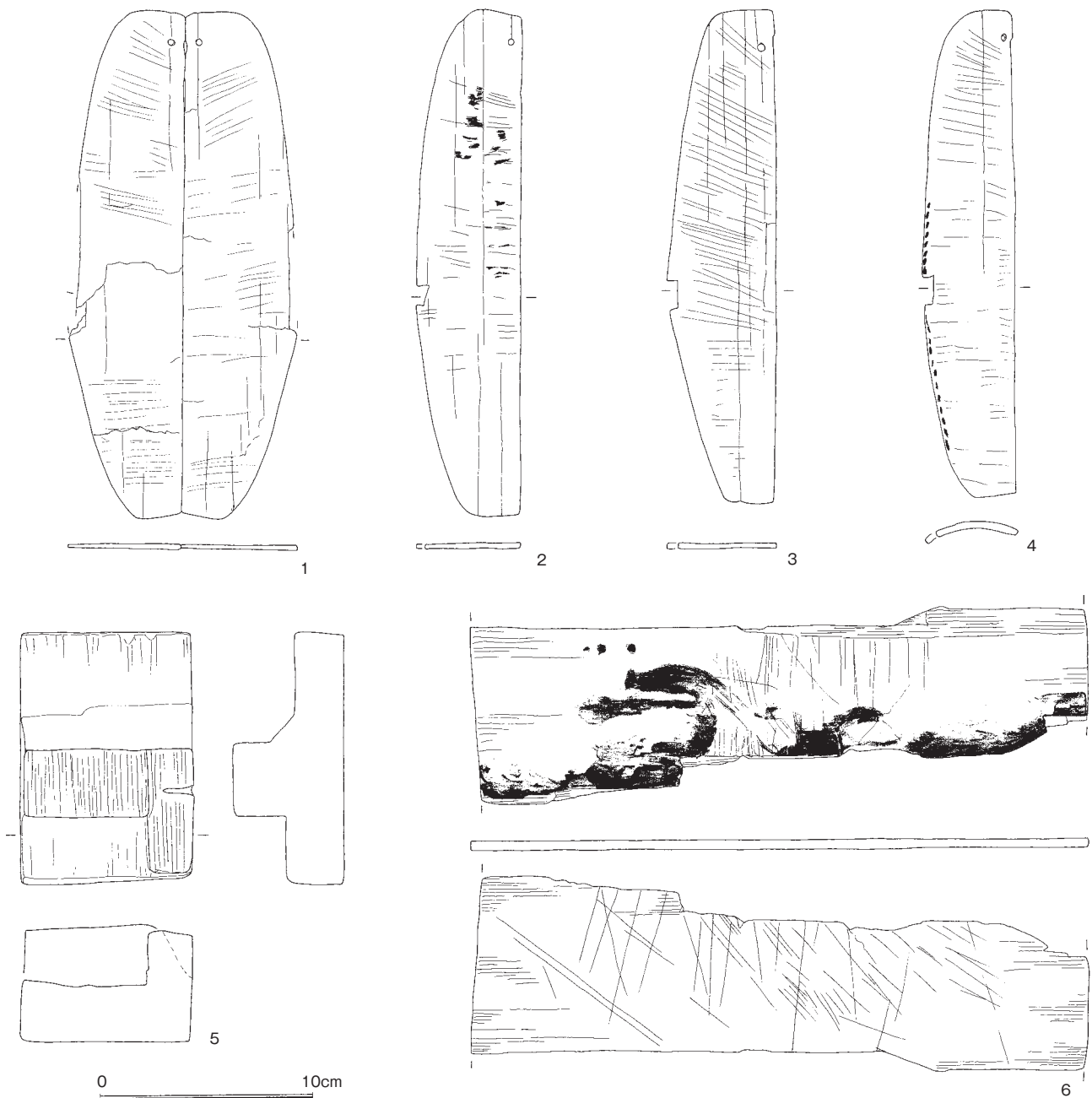


図22 落込み1(2)出土遺物

置されたとは言い切れない。

図20・図21-1・2は板壁建物1出土遺物である。図20-1~17はかわらけ。轆轤成形、底部は糸切りである。1~3は大皿、4~17は小皿である。器壁は丸味を持って立ち上がる。胎土は粉質。色調と寸法は表の通りである。14の器表には全体的に煤が付着している。

図20-18・19は内折れかわらけ。轆轤成形、底部は糸切り。口径(6.0)cm・4.9cm、底径(4.3)cm・3.6cm、器高1.2cm・1.0cmを測る。胎土は粉質で、18は淡橙色、19は肌色を呈す。18の器表には薄く煤が付着している。

図20-20は瀬戸の入れ子。無釉。口縁付近を中心にごく少量の自然釉が掛る。底部は篋削り。胎土は肌色を呈し、胎芯は黒灰色に残る。硬質で緻密。口径7.4cm、底径5.0cm、器高2.6cmを測る。

図20-21は山茶碗。内面におろし目が付けられている。無釉。胎土は肌色を呈し、緻密。硬く焼き締まっている。

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
21	3	3面	落込み1	かわらけ	轆轤成形	(12.2)	6.6	3.7	淡橙色系
21	4	3面	落込み1	かわらけ	轆轤成形	8.0	6.2	1.3	肌色系
21	5	3面	落込み1	かわらけ	轆轤成形	7.6	5.2	1.7	橙色系
21	6	3面	落込み1	かわらけ	轆轤成形	(8.2)	5.2	1.8	肌色系
21	7	3面	落込み1	かわらけ	轆轤成形	8.1	5.7	1.8	肌色系
21	8	3面	落込み1	穿孔かわらけ	轆轤成形	7.4	5.0	1.5	肌色系
21	9	3面	落込み1	山茶碗	碗	(16.6)	(8.9)	6.0	灰色
21	10	3面	落込み1	常滑	甕	(47.0)	-	-	黒灰色
21	11	3面	落込み1	常滑	こね鉢	(29.0)	-	-	黒灰色
21	12	3面	落込み1	骨製品	筭	[5.6]	1.7	0.3	-
21	13	3面	落込み1	鉄製品	釘	7.8	1.4	0.5	-
21	14	3面	落込み1	漆器	椀	-	(7.6)	-	-
21	15	3面	落込み1	漆器	椀	-	7.2	-	-
21	16	3面	落込み1	漆器	皿	9.0	6.6	1.3	-
21	17	3面	落込み1	漆器	皿	-	(6.8)	-	-
21	18	3面	落込み1	木製品	折敷	29.2	[4.6]	0.9	-
21	19	3面	落込み1	木製品	箸	24.1	0.7	0.6	-
21	20	3面	落込み1	木製品	箸	23.9	0.5	0.5	-
21	21	3面	落込み1	木製品	箸	23.3	0.6	0.4	-
21	22	3面	落込み1	木製品	箸	22.6	0.7	0.4	-
21	23	3面	落込み1	木製品	箸	22.6	0.8	0.4	-
21	24	3面	落込み1	木製品	箸	22.4	0.6	0.5	-
21	25	3面	落込み1	木製品	箸	22.2	0.6	0.4	-
21	26	3面	落込み1	木製品	箸	22.1	0.6	0.4	-
21	27	3面	落込み1	木製品	箸	22.1	0.8	0.4	-
21	28	3面	落込み1	木製品	箸	22.1	0.5	0.4	-
21	29	3面	落込み1	木製品	雲形	[1.5]	7.7	0.8	-
21	30	3面	落込み1	木製品	自在鉤	[14.2]	1.6	1.0	-
22	1	3面	落込み1	木製品	板草履の芯	23.3	10.7	0.3	-
22	2	3面	落込み1	木製品	板草履の芯	23.8	[4.9]	0.3	-
22	3	3面	落込み1	木製品	板草履の芯	23.2	[5.1]	0.3	-
22	4	3面	落込み1	木製品	板草履の芯	22.9	[4.4]	0.3	-
22	5	3面	落込み1	木製品	部材	11.8	8.1	5.5	-
22	6	3面	落込み1	木製品	部材	29.1	[8.2]	0.4	-

図20 - 22は山茶碗窯系こね鉢の口縁部片。口縁は肥厚し、ごく浅く沈線が廻る。胎土は灰色を呈し、白色石粒を多く含む。内面には厚く自然釉が掛る。

図20 - 23は常滑のこね鉢の口縁部片。口縁端部は沈線状になっている。器表は紫茶褐色を呈し、胎土は赤橙色を呈す。白色石粒を含み、比較的緻密。

図20 - 24はかわらけの底部の転用品。用途は不明。円板状に削り出され、遺存部で9カ所の穴が穿たれている。図20 - 25は平瓦。凸面には縄目。凹面には布目がある。

図20 - 26・27は鉄製釘。図20 - 28は元符通宝(初铸1098年)。

図20 - 29・30は漆器皿。黒漆塗り。29は内底面に朱漆で桔梗が描かれている。底部は高台が付く。寸法は口径10.0cm・(9.4)cm、底径6.4cm・7.2cm、器高1.5cm・1.3cmを測る。

図20 - 31～62・図21 - 1・2は木製品。木製品の寸法は表の通り。図20 - 31は折敷の破片。図20 - 32～51は箸。図示したもの他に53本出土した。図32 - 52・53は棒状の製品。図32 - 54は筥状製品。柄の根元に斜格子の刻みが施されている。図32 - 55～57は円板。55は一部炭化している。図20 - 58は杓文字。図20 - 59は櫛。漆は確認できなかった。図20 - 60は将棋の駒か。上が三角に切られている。墨書はない。図20 - 61は板草履の芯。藁が一部遺存している。図20 - 62は加工された板材。鳥形の可能性もあるが、詳細は不明。図21 - 1・2は部材。

図示したもの他に骨・貝殻・果核が出土した。内訳は以下の通り。

【骨】イヌ：脛骨1・大腿骨[1]、マダイ：主上顎骨1、スズキ：椎骨1、不明破片(1)

【貝殻】アカニシ2、ハマグリ3、カキ4、アワビ(1) ※2枚貝は片方で1とカウント。

【果核】クルミ3 ※半割で1とカウント。

図21-3～30・図22は落込み1出土遺物である。寸法は表の通りである。図21-3～8はかわらけ。轆轤成形底部は糸切り。3は大皿、4～8は小皿である。4は底径が大きく、浅い。胎土は3が淡橙色、5が橙色、その他は肌色を呈し、微砂を含み粉質。8は底部中央に1カ所穴が穿たれている。図21-9は山茶碗。底部には粗雑な高台が貼り付けられている。胎土は灰色を呈し、白色石粒を多く含み粗い。図21-10・11は常滑。10は甕、11はこね鉢。図21-12は骨製筭。図21-13は鉄製釘。図21-14～17は漆器。いずれも黒漆塗り。14・15は椀。14は内外面に朱漆で藤の文様がスタンプされている。16・17は皿。16は内外面に朱漆で草文が描かれている。図21-18～30・図22は木製品。図21-18は折敷。一辺に籤が遺存している。籤は樹皮で本体に留められている。図21-19～28は箸。総数48本が出土した。図21-29は雲形。黒漆が塗られている。図21-30は自在鉤。図22-1～4は板草履の芯。いずれも藁圧痕が残る。4は縁に縦方向に強く残っている。図22-5・6は用途不明の部材。6は部分的に炭化している。

図示したものの他に骨・貝殻・果核が出土した。

【骨】ノウサギ：橈骨1・尺骨1、テン：上腕骨1

【貝殻】アカニシ3(3)、キサゴ2、ハマグリ7、アワビ(1) ※2枚貝は片方で1とカウント

【果核】クルミ2 ※半割で1とカウント

掘立柱建物1・出土遺物(図19・23)

掘立柱建物1はグリッド(x 10、y 5)付近、海拔6.4m前後に検出された。柱穴2口が南北方向に並び、調査区東壁土層断面にさらに1口柱穴が確認された。その内側は大型土丹によって土台が作られている。Pit10・11間には布掘り状の浅い溝が検出された。溝には板や細い杭が検出された。深さは検出面から18cmを測る。柱穴間の距離は芯々で200cmを測る。柱穴の直径は各々、48cm・60cmを測り、深さはいずれも検出面から30cm前後を測る。Pit11には礎板が2枚据えられていた。建物の内側グリッド(x 9、y 6)付近にPit7と礎板が1枚、グリッド(x 10、y 6)付近にPit9が検出されている。これらも建物の構造の一部である可能性がある。大型土丹土台の北側に大土丹の上に黒色粘土さらに細土丹による地業がなされていることから、掘立柱建物1本体は調査区北および東に展開するものと考えられる。南北軸線方向はN-13°-Eである。

図23-1～7は掘立柱建物1、柱穴間に検出された布掘り状の溝からの出土遺物である。1はかわらけの大皿。轆轤成形、底部は糸切り。口縁端部が若干外反している。胎土は肌色を呈し、微砂を含み粉質。口径(13.0)cm、底径7.8cm、器高3.4cmを測る。2～7は木製品。2～6は箸。7は板草履の芯。藁圧痕が残る。図示したものの他に骨と貝殻が出土している。

【骨】イヌ：上腕骨1(布掘り)、肋骨1(Pit10)

【貝殻】アカニシ(1)・サザエ3・ハマグリ4・バイガイ1(以上、布掘り)、ハマグリ1(Pit10)ハマグリ3(Pit11)

土坑1・出土遺物(図19・23)

土坑1はグリッド(x 4、y 3)付近、海拔6.5m前後に検出された。西部は調査区外だが、平面形はおそらく楕円形を呈し南北幅134cm、深さは検出面から47cmを測る。埋土の土層は以下の通り。

1層：暗褐色粘質土層 かわらけ細片・炭化物・0.5cm大の土丹粒・0.5～1.0cm大の鎌倉石粒を含む。粘性なし。締り良い。

2層：有機物堆積層 炭化物(やや多)・木片・0.5cm大の土丹粒を含む。粘性強い。締り悪い。

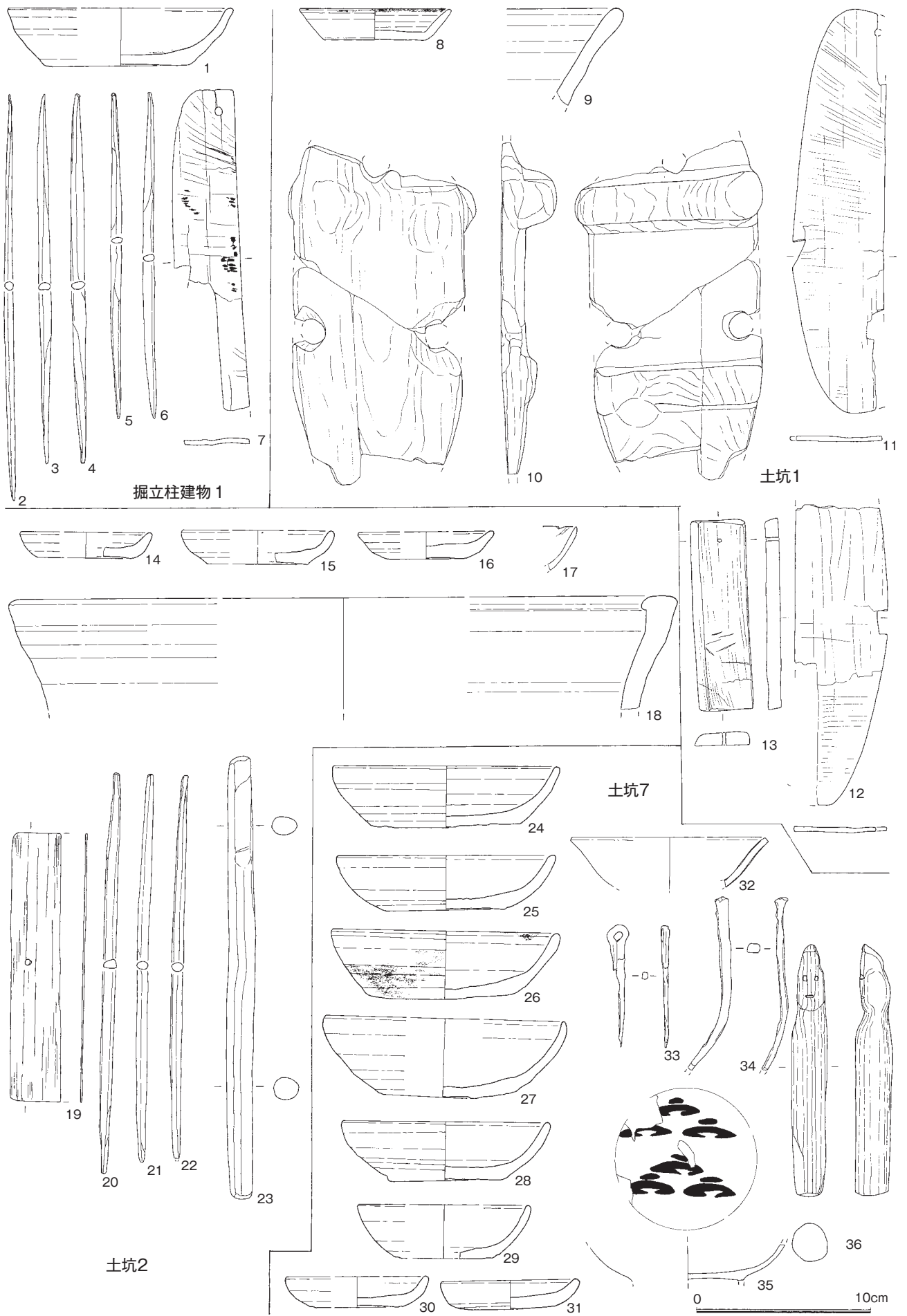


图23 掘立柱建物1·土坑1·2·7出土遺物

3層：有機物堆積層 木片・炭化物・0.5cm大の土丹粒・貝殻片（少）を含む。粘性強い。締り悪い。

4層：有機物堆積層 木片・貝殻片・0.5cm大の土丹粒（微量）を含む。粘性強い。締り良い。

図23-8～13は土坑1出土遺物である。8は白磁口元皿。ほぼ完形。口縁部には覆輪の痕跡が残る。口径8.9cm、底径6.0cm、器高1.8cmを測る。釉調は若干青味のある灰白色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は灰白色を呈し緻密。9は山茶碗窯系こね鉢の口縁部片。胎土は灰白色を呈し、石粒を多く含み粗い。焼成はやや悪い。10～13は木製品。10は連歯下駄。歯はかなり磨り減っている。11・12は板草履の芯。13は用途不明。この他にアカニシが1点出土している。

土坑2・出土遺物（図19・23）

土坑2はグリッド（x 5、y 5）付近、海拔6.45 m前後に検出された。東部は調査区外。平面形は不整形を呈す。南北幅は最大150cm、深さは検出面から30cmを測る。隅2カ所に板が検出されたが、この土坑に伴うものかは不明である。埋土の土層は以下の通り。

1層：暗褐色粘質土 炭化物・0.5cm大の土丹粒・5～15cm大の鎌倉石・鎌倉石粒・木片（少）を含む。粘性強い。締り良い。

2層：有機物堆積層 炭化物・0.5cm大の土丹粒・木片・貝殻片（少）を含む。粘性強い。締りやや悪い。

3層：暗褐色粘質土 0.5cm大の土丹粒・炭化物（少）・貝殻片（微量）を含む。粘性強い。締りやや悪い。

図23-14～23は土坑2出土遺物である。14～16はかわらけの小皿。轆轤成形、底部は糸切り。14・16は橙色、15は肌色を呈し、微砂を含み粉質。口径（7.6）cm・（8.8）cm・（7.8）cm、底径（5.6）cm・（5.8）cm・4.6cm、器高1.5cm・1.9cm・1.6cmを測る。17は瀬戸の輪花型入れ子。胎土は灰白色を呈し、白色微石粒を含む。口縁部に自然釉が掛る。18は瓦質手焙り。口径は（38.6）cmを測る。器壁上位には孔が穿たれている。器表は黒色処理される。胎土は橙褐色を呈す。比較的硬質。図23-19～23は木製品。19は折敷。20～22は箸。23は棒状製品。用途は不明。この他にアカニシ1・キサゴ2・ヒメクボガイ1・ハマグリ3、クルマミ1が出土している。

土坑7・出土遺物（図19・23）

土坑7はグリッド（x 9、y 3）付近、海拔6.5 m前後に検出された。西辺はPit30と切り合っているが、平面形は円形を呈す。南北幅は80cm、深さは検出面から16cm前後を測る。埋土は黒褐色粘質土層、木片・小土丹粒・炭化物をいずれも多く、かわらけ片・貝殻片・有機物を含む。締りやや悪い。

図23-24～36は土坑7出土遺物である。24～31はかわらけ。轆轤成形、底部は糸切り。大皿は器壁は丸味を持ち、底径はやや狭く、深さがある。胎土は25が淡橙色、28・31は橙色、その他は肌色を呈し、微砂を含み粉質。25は灯明皿で器表に煤が付着している。口径13.1cm・12.6cm・13.1cm・（14.0）cm・12.0cm・（10.0）cm・（8.2）cm・8.0cm、底径8.6cm・7.0cm・8.0cm・7.7cm・6.5cm（4.8）cm・（5.2）cm・5.3cm、器高3.5cm・3.2cm・3.9cm・4.5cm・3.5cm・3.1cm・1.8cm・1.7cmを測る。32は白磁口元皿。口径は（11.3）cmを測る。釉調は灰白色を呈し、光沢は良い。素地は暗灰色を呈し、そのため、全体的に発色が悪い。33・34は鉄製釘。35は漆器椀。黒漆塗りに朱漆で松か？文様が描かれている。36は木製人形。この他にノウサギの大腿骨1、サザエ1、サザエ蓋1、キサゴ3、ハマグリ10、クルマミ1（半割）が出土している。

3面Pit（図18）

3面からは11口のPitが検出した。内、Pit7・9～11は掘立柱建物1を構成する遺構である。その他のPitは今回の調査範囲内では並びをつかむことはできなかった。Pit27・28・30は礎板を伴っており、柱穴であることは確実である。

3面出土遺物（図24～26）

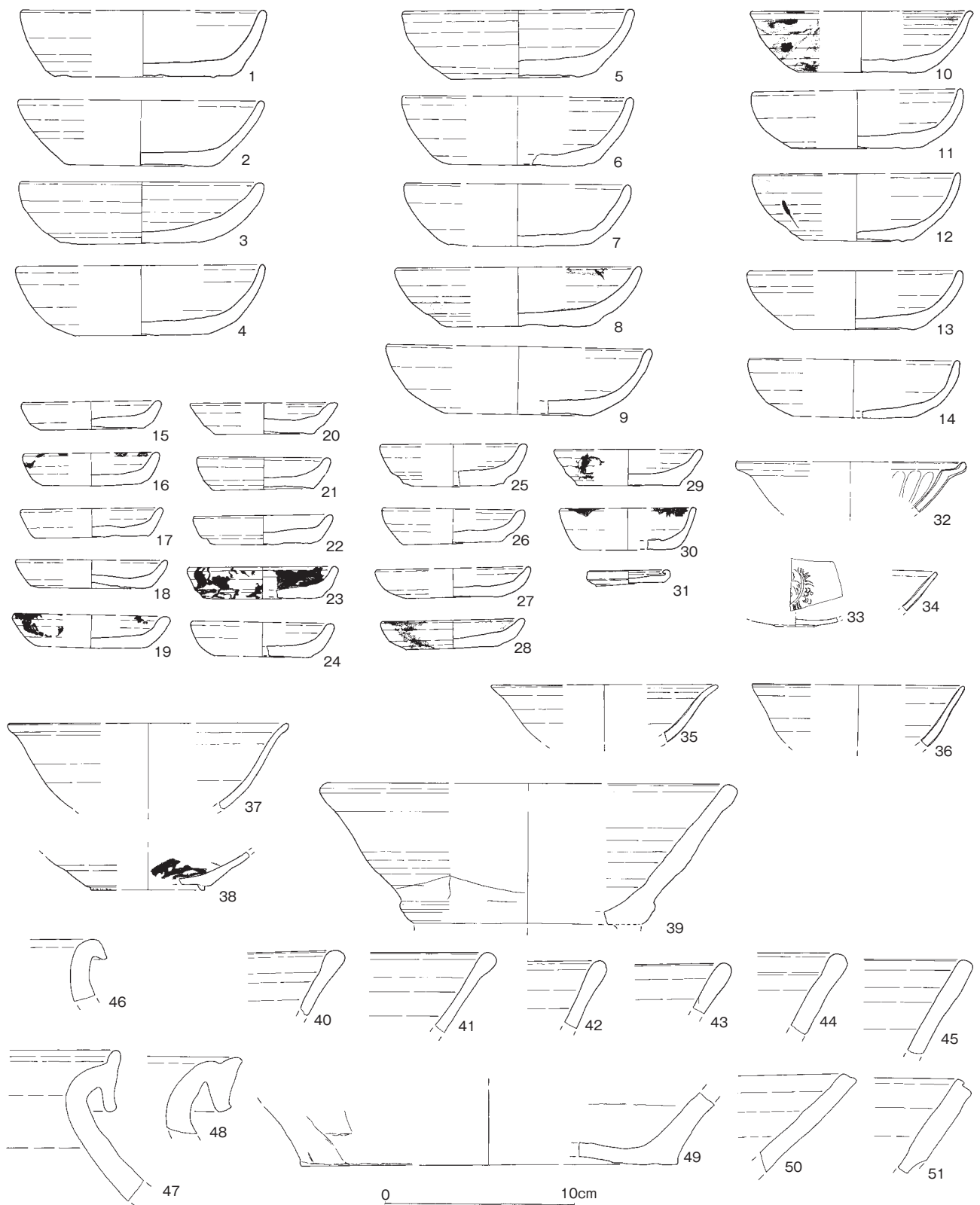


図24 3面出土遺物(1)

図24～26は3面出土遺物である。寸法は表の通り。図24-1～30はかわらけ。轆轤成形、底部は糸切り。1～9は大皿、10～14は中皿、15～30は小皿である。9～14・30は薄手丸深タイプ。15～24は底径が大きく浅いタイプ、その他は丸味があり、深さのあるタイプである。胎土は微砂を含み粉質。8・10・12・16・28・30は灯明皿で器表に煤が付着している。

図24-31は内折れかわらけ。底部は糸切り。

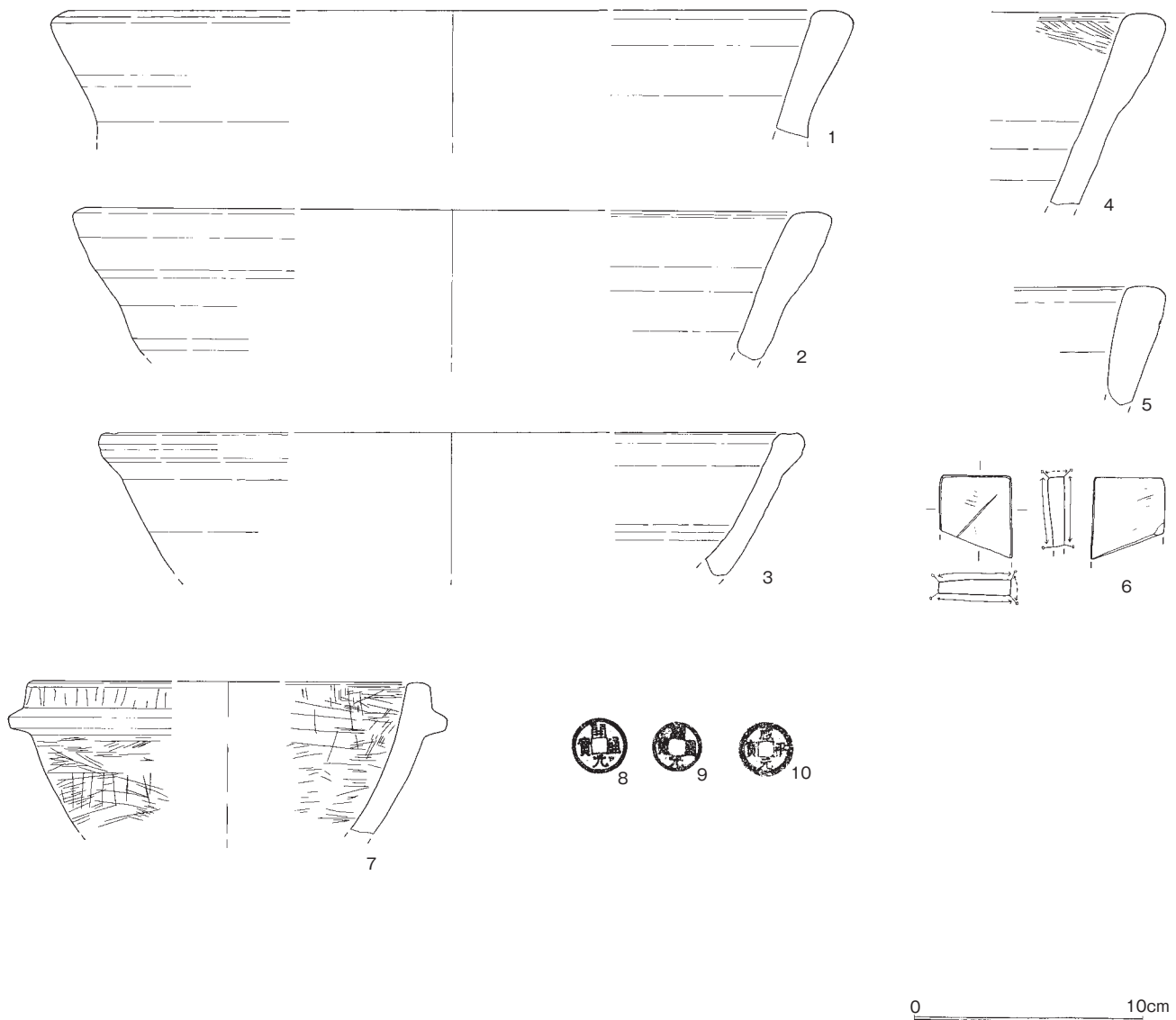


図25 3面出土遺物(2)

図24 - 32 ~ 36は舶載磁器。32は青磁折縁鉢。内側に蓮弁が陰刻される。釉調は青味緑色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は灰色を呈し、微砂を含むが、緻密。33 ~ 36は白磁。33は印花文皿。釉調は白色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は白褐色を呈す。34 ~ 36は口兀碗。いずれも釉調は若干青味のある灰白色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は灰白色を呈し、緻密。

図24 - 37・38は美濃系山茶碗。37は口縁部片、38は底部片である。38は貼付高台で、高台端部には糊痕が残る。胎土は灰白色を呈し、緻密。38の内面には漆が付着している。

図24 - 39 ~ 45は山茶碗窯系こね鉢。39は高台が欠損している。胎土はいずれも灰色を呈し、白色石粒を多く含み硬質で粗い。43は焼成がやや不良である。口縁部から内面にかけて自然釉が掛る。39の内面下位は磨滅している。

図24 - 46 ~ 51は常滑である。46は壺の口縁部片。口縁端部は外側に折り返されている。器表は再火を受け肌荒れしている。胎土は灰色を呈し、硬質で比較的緻密。47 ~ 49は甕。47・48は口縁部片。いずれも器表は暗紫褐色を呈し、自然釉が掛る。胎土は白色石粒を多く含み、硬質で黒灰色を呈す。49は底部片。胎土は橙色を呈し、胎芯は黒灰色に残る。50・51はこね鉢の口縁部片。50の器表は赤茶褐色を呈し、自然釉が掛る。胎土はいずれも黒灰色を呈し、白色石粒を多く含み粗い。

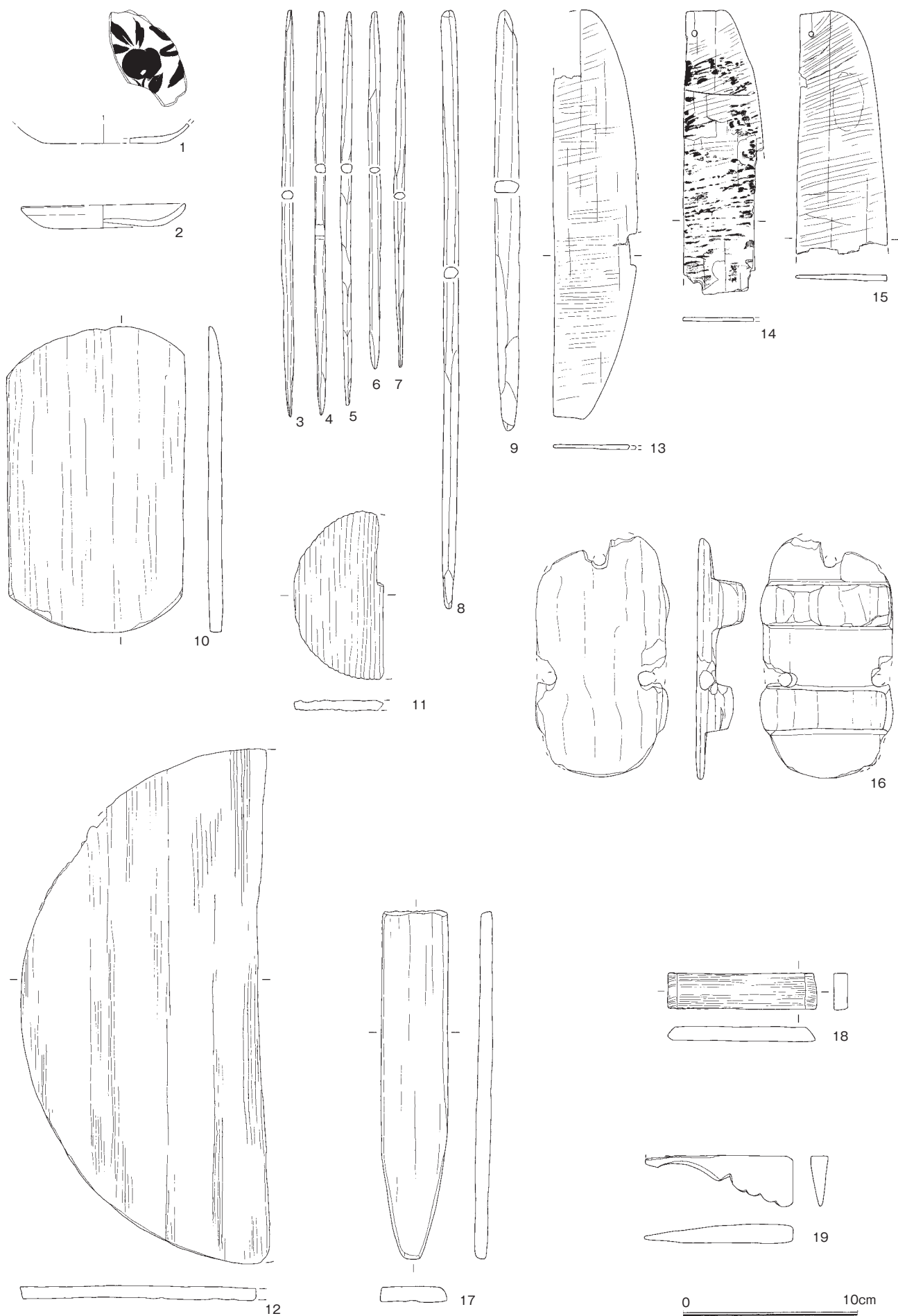


图26 3面出土遺物(3)

図25-1～5は瓦質手焙り。胎土は3が肌色、その他は黒灰色を呈し、微砂を多く含み、粗く脆い。

図25-6・7は石製品。6は鳴滝産仕上げ砥。7は滑石鍋。西彼杵産。

図25-8～10は銭。開元通宝(初鑄960年)・宋通元寶(初鑄960年)・咸平元寶(初鑄998年)。

図26-1・2は漆器皿。1は黒漆塗りに内面に朱漆で橘文が描かれている。2は無文。黒漆地に内側は朱漆が塗られている。

図26-3～19は木製品。3～7は箸。8は菜箸。9は棒状製品。用途は不明。10～12は円板。曲物の底板であろう。13～15は板草履の芯。藁或いは圧痕が残る。16は連歯下駄。かなり小さい。17・18は板材。用途は不明。19は雲形。黒漆塗り。

この他に骨・貝殻・果核が出土している。内訳は以下の通り。

【骨】ヒト(小人):下顎骨(1)前歯6本は欠損している。右第一乳臼歯の下に第一小臼歯が見えている。左の第一大臼歯が生えかかっている。ウマ:肩甲骨(1)、ニホンシカ:上腕骨(1)・尺骨(1)・角(1)加工痕あり。イヌ:上腕骨1・尺骨(1)・橈骨(1)、イノシシ:上顎骨(1)、哺乳類:肩甲骨(1)・肋骨1・中足骨か中手骨2・破片(4)、スズキ:主上顎骨(1)

【貝殻】キサゴ1、ハマグリ13、カキ1

【果核】クルミ5(半割)、スモモ3・半割2

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
24	1	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	(9.4)	3.5	淡橙色系
24	2	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	8.0	3.4	肌色系
24	3	3面	-	かわらけ	轆轤成形	12.9	7.3	3.3	橙色系
24	4	3面	-	かわらけ	轆轤成形	13.6	7.1	3.7	橙色系
24	5	3面	-	かわらけ	轆轤成形	12.3	7.3	3.6	淡橙色系
24	6	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(12.2)	8.0	3.6	橙色系
24	7	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(12.0)	(7.8)	3.3	淡橙色系
24	8	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	(8.0)	3.2	肌色系
24	9	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(14.0)	(8.0)	3.6	淡橙色系
24	10	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(11.8)	6.6	3.2	肌色系
24	11	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(11.2)	6.6	3.1	肌色系
24	12	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(11.0)	6.0	3.6	橙色系
24	13	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(11.4)	6.3	3.1	肌色系
24	14	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(11.2)	(6.8)	3.1	肌色系
24	15	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.4)	5.6	1.5	橙色系
24	16	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.2)	5.6	1.7	淡橙色系
24	17	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.6)	6.0	1.5	肌色系
24	18	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	5.8	1.5	肌色系
24	19	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.4)	6.0	1.7	肌色系
24	20	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.8)	5.3	1.7	肌色系
24	21	3面	-	かわらけ	轆轤成形	9.1	5.4	1.8	橙色系
24	22	3面	-	かわらけ	轆轤成形	7.4	5.3	1.6	淡橙色系
24	23	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	5.6	1.7	橙色系
24	24	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.6)	(5.0)	1.8	肌色系
24	25	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.8)	5.2	1.7	肌色系
24	26	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.6)	5.3	1.9	橙色系
24	27	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.2)	5.6	1.6	淡橙色系
24	28	3面	-	かわらけ	轆轤成形	7.6	4.9	1.5	肌色系
24	29	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.8)	5.8	1.9	肌色系
24	30	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.2)	(5.4)	2.2	淡橙色系
24	31	3面	-	内折れかわらけ	轆轤成形	4.4	3.7	0.7	淡橙色系
24	32	3面	-	青磁	折縁鉢	(12.0)	-	-	-
24	33	3面	-	白磁	印花文皿	-	(2.0)	-	-
24	35	3面	-	白磁	口兀碗	(12.0)	-	-	-
24	36	3面	-	白磁	口兀碗	(11.2)	-	-	-
24	37	3面	-	美濃系	山茶碗	(14.8)	-	-	-
24	38	3面	-	美濃系	山茶碗	-	(6.0)	-	-
24	39	3面	-	山茶碗窯系	こね鉢	(22.0)	(12.0)	-	-
24	49	3面	-	常滑	甕	-	(20.0)	-	-

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
25	1	3面	-	手焙り	-	(35.6)	-	-	-
25	2	3面	-	手焙り	-	(33.6)	-	-	-
25	3	3面	-	手焙り	-	(31.2)	-	-	-
25	6	3面	-	石製品鳴滝産	仕上げ砥	[3.6]	3.2	0.7	-
25	7	3面	-	石製品滑石	鍋	(17.8)	-	-	-
26	1	3面	-	漆器	皿	-	(7.0)	-	-
26	2	3面	-	漆器	皿	(9.4)	6.6	1.3	-
26	3	3面	-	木製品	箸	23.2	0.7	0.5	-
26	4	3面	-	木製品	箸	23.1	0.6	0.5	-
26	5	3面	-	木製品	箸	22.5	0.6	0.5	-
26	6	3面	-	木製品	箸	20.4	0.7	0.5	-
26	7	3面	-	木製品	箸	20.3	0.6	0.6	-
26	8	3面	-	木製品	菜箸	34.2	0.9	0.7	-
26	9	3面	-	木製品	棒状製品	24.0	1.4	0.7	-
26	10	3面	-	木製品	底板	17.5	[10.3]	0.8	-
26	11	3面	-	木製品	底板	9.6	[5.1]	0.6	-
26	12	3面	-	木製品	底板	29.5	[13.5]	0.7	-
26	13	3面	-	木製品	板草履の芯	23.4	[4.7]	0.3	-
26	14	3面	-	木製品	板草履の芯	[16.2]	[5.0]	0.3	-
26	15	3面	-	木製品	板草履の芯	[13.6]	[5.2]	0.4	-
26	16	3面	-	木製品	連歯下駄	[13.8]	7.4	2.8	-
26	17	3面	-	木製品	板材	19.9	3.8	0.9	-
26	18	3面	-	木製品	板材	8.5	2.1	0.8	-
25	19	3面	-	木製品	雲形	8.5	2.9	1.0	-

第4面 (図27)

第4面は3面下20～30cm、海拔6.2m前後に検出された。調査区北西隅は非常に細密な土丹地業が施されている。土丹地業の調査区北辺には炭化物がまとまって検出された。遺構は床状遺構1カ所、土坑1基、Pit9口が検出された。また、グリッド(x10、y6)付近に曲物の底部が出土した。

床状遺構 (図28)

床状遺構はグリッド(x5、y3)付近、海拔6.3m前後に検出された。幅7～10cm、厚さ2cm前後の板が、南北方向に敷き詰められ、所々に薄い板状の杭が打たれている。杭が貫通しているため断定はできないが、板張り床が陥没したものではないかと考えられる。調査区が狭いため全体像は不明だが、Pit3やPit33等柱穴が近くに配置され、大きな建物の一部と考えられる。南北軸線方向はN-6°-Eである。

土坑9・出土遺物 (図28・29～30)

土坑9はグリッド(x8、y3)付近、海拔6.2m前後に検出された。西部と南部は調査区外。平面形はおそらく円形を呈す。深さは検出面から10cmを測り、浅い。

図29・30は土坑9出土遺物である。寸法は表の通り。図29-1～4はかわらけの小皿。轆轤成形、底部は

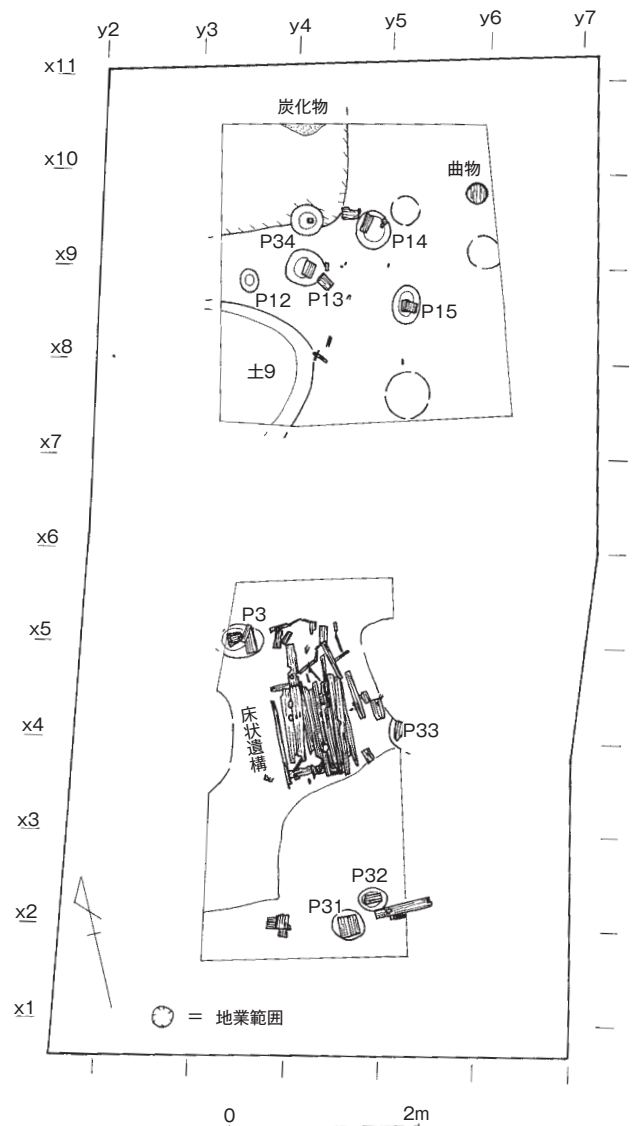


図27 4面遺構配置図

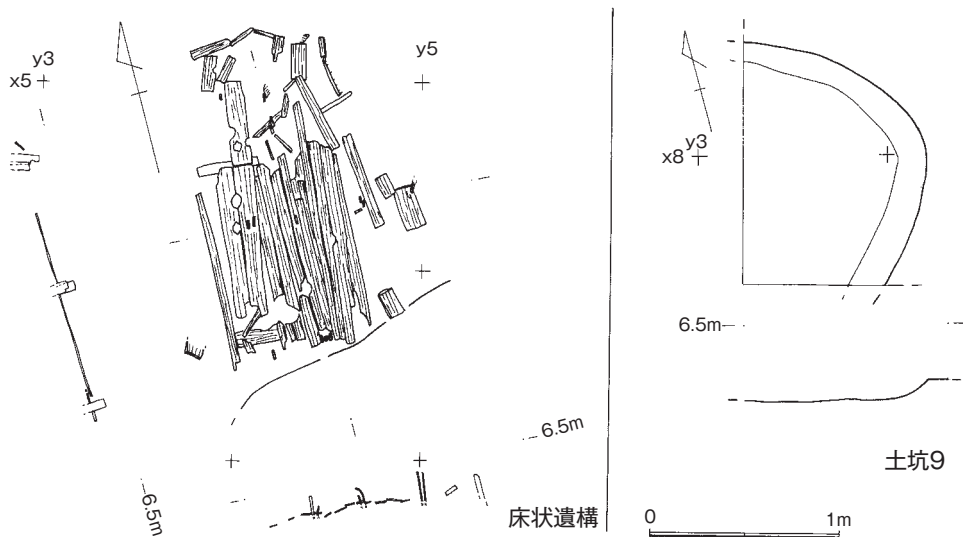


図28 床状遺構・土坑9

糸切り。深さは浅く、器壁は丸味がある。胎土は1・3が肌色、2・4が橙色を呈し、微砂を含み粉質。1～3の器表には煤が付着している。

図29-5は研磨痕のある常滑片。かすかに研磨痕がある。

図29-6・7は漆器。6は椀。黒漆塗りに朱漆で桜のスタンプが内

外面、内底面に施されている。7は皿。黒漆塗りに朱漆で内側全面と外側面上位に秋草文が描かれている。

図29-8～23・図30は木製品。図29-8は杓文字。図29-9～15は箸。図29-16～18は菜箸。図29-19は用途不明の棒状製品。図29-20は板材。先端が削り出されている。図29-21は容器の部材。図29-22・23は部材。用途は不明。23には1ヶ所樹皮が通されている。図30-1～5は円板。曲物の底板あるいは蓋。5には1カ所樹皮が通されている。図30-6は把手。図30-7は板草履の芯。藁圧痕が残る。

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
29	1	4面	土坑9	かわらけ	轆轤成形	8.0	5.5	1.9	肌色系
29	2	4面	土坑9	かわらけ	轆轤成形	7.5	4.9	1.7	橙色系
29	3	4面	土坑9	かわらけ	轆轤成形	(7.3)	5.2	1.6	肌色系
29	4	4面	土坑9	かわらけ	轆轤成形	(7.4)	5.2	1.7	橙色系
29	5	4面	土坑9	研磨痕のある陶片	常滑甕	7.0	5.5	1.1	-
29	6	4面	土坑9	漆器	椀	-	(8.0)	-	-
29	7	4面	土坑9	漆器	皿	9.8	7.4	1.1	-
29	8	4面	土坑9	木製品	杓文字	23.0	6.5	0.7	-
29	9	4面	土坑9	木製品	箸	22.8	0.8	0.4	-
29	10	4面	土坑9	木製品	箸	[22.8]	0.6	0.5	-
29	11	4面	土坑9	木製品	箸	22.7	0.6	0.3	-
29	12	4面	土坑9	木製品	箸	22.3	0.6	0.5	-
29	13	4面	土坑9	木製品	箸	21.5	0.6	0.4	-
29	14	4面	土坑9	木製品	箸	18.2	0.7	0.4	-
29	15	4面	土坑9	木製品	箸	18.0	0.6	0.5	-
29	16	4面	土坑9	木製品	菜箸	26.6	0.9	0.5	-
29	17	4面	土坑9	木製品	菜箸	[22.2]	0.8	0.6	-
29	18	4面	土坑9	木製品	菜箸	26.4	1.1	0.6	-
29	19	4面	土坑9	木製品	棒状製品	32.8	1.8	1.3	-
29	20	4面	土坑9	木製品	板材	16.3	3.2	0.4	-
29	21	4面	土坑9	木製品	容器	17.9	[8.3]	0.7	-
29	22	4面	土坑9	木製品	部材	5.9	8.3	3.7	-
29	23	4面	土坑9	木製品	部材	30.5	[2.5]	0.6	-
30	1	4面	土坑9	木製品	円板	[37.7]	[6.6]	1.0	-
30	2	4面	土坑9	木製品	円板	[30.0]	[6.7]	0.7	-
30	3	4面	土坑9	木製品	円板	14.7	[6.7]	0.8	-
30	4	4面	土坑9	木製品	円板	[14.3]	[6.0]	0.5	-
30	5	4面	土坑9	木製品	円板	15.0	[6.0]	0.6	-
30	6	4面	土坑9	木製品	把手	2.9	10.0	2.1	-
30	7	4面	土坑9	木製品	板草履の芯	23.3	[4.3]	0.3	-

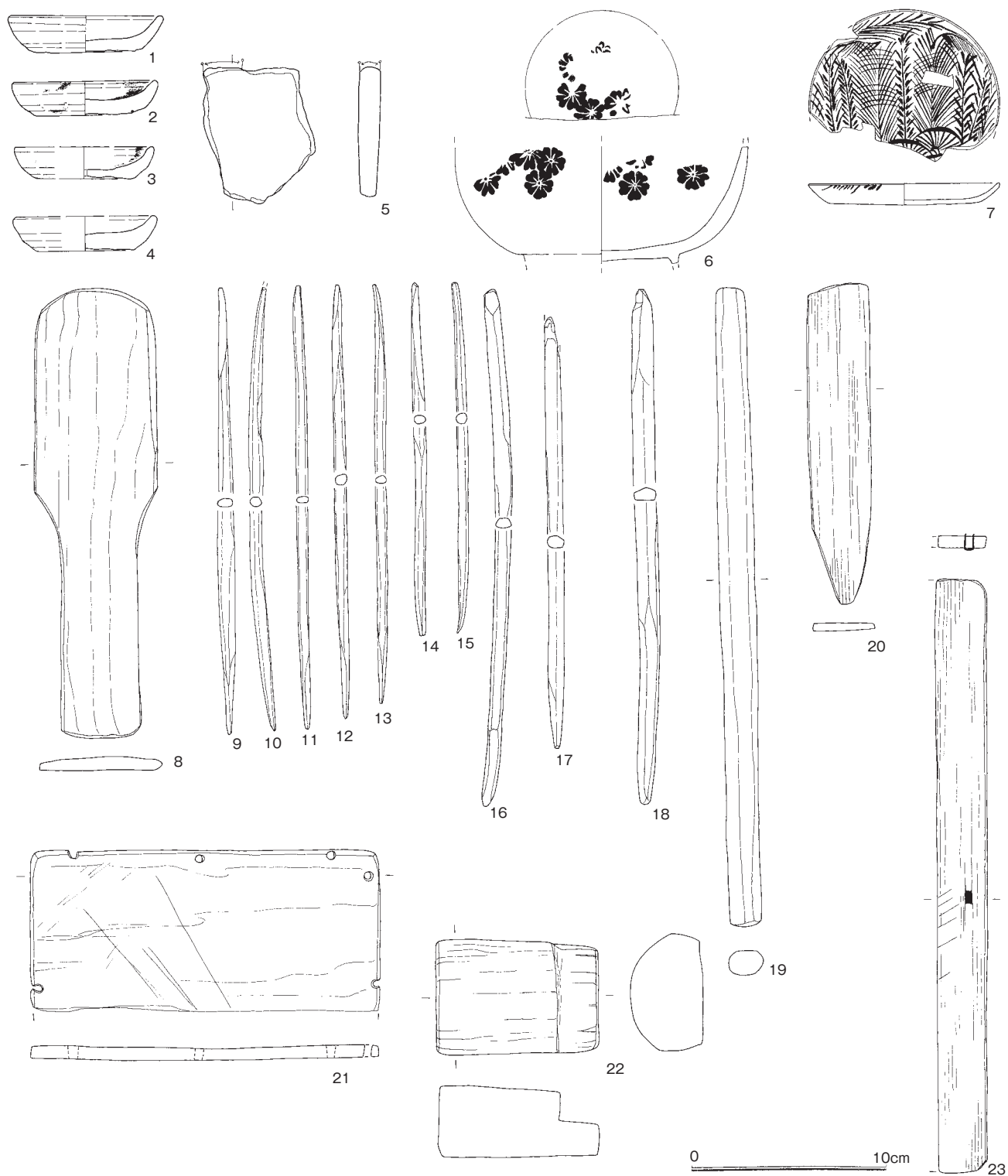


図29 土坑9出土遺物(1)

【貝殻】ハマグリ 33・カキ 1※2枚貝は片方で1とカウント

【果核】スモモ 1と半割 1

4面Pit (図27)

4面からは9口のPitが検出された。Pit12以外は礎板を伴っているが、いずれも掘立柱建物等の並びをつかむことはできなかった。深さは検出面から20～30cm前後を測る。

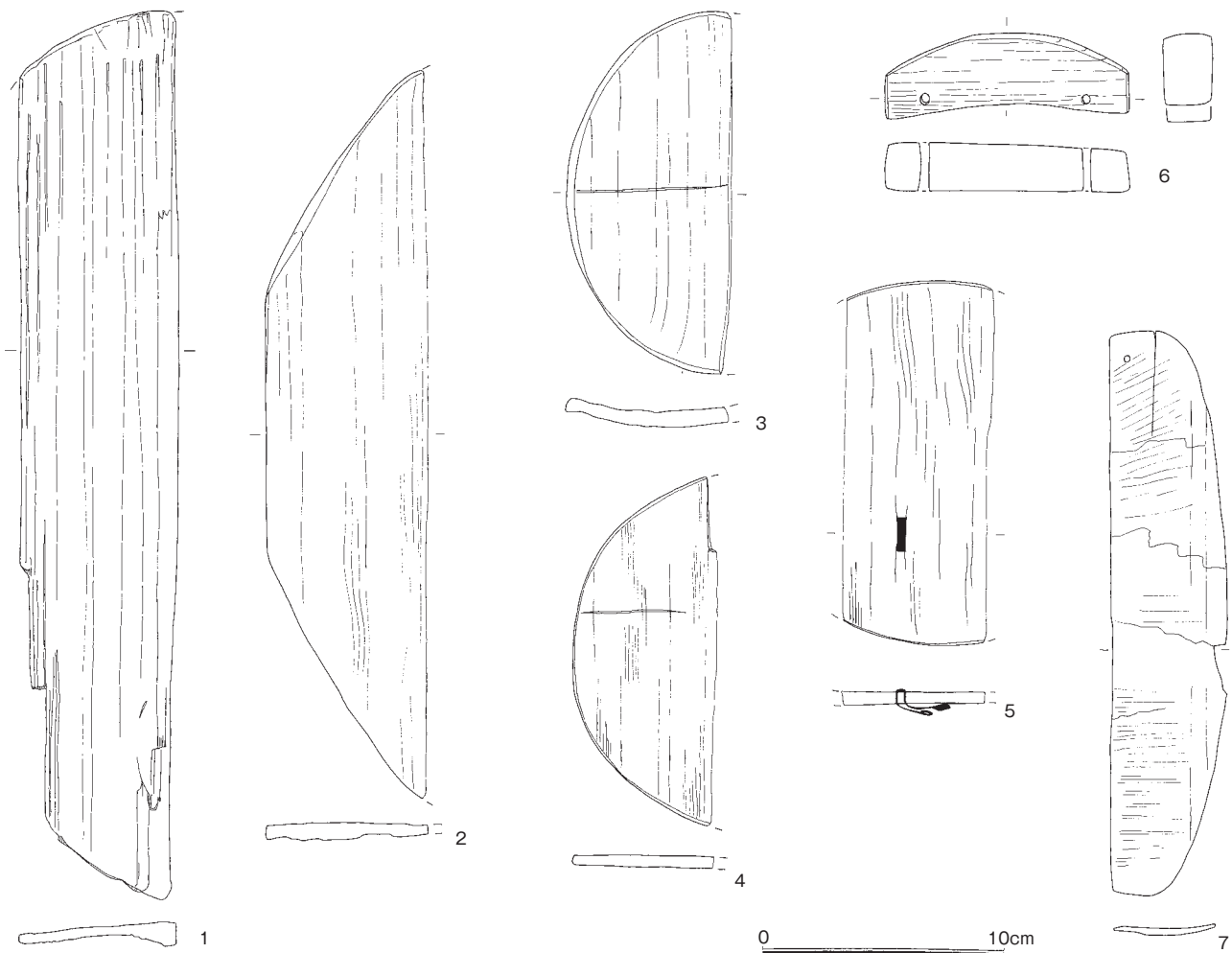


図30 土坑9出土遺物(2)

4面出土遺物(図31～34)

図31～34は4面出土遺物である。寸法は表の通り。図31-1～31はかわらけ。1～11は大皿、12～31は小皿である。大皿は底径が比較的小さく、丸味を持ち、深い。小皿は底径が大きく、浅い。ただし、30・31は器壁が薄手で深い薄手丸深タイプに類する。30の内底面には斜格子状に墨書されている。8・10・13・26・29・31は灯明皿で、器表に煤が付着している。図31-32は内折れかわらけ。轆轤成形、底部は糸切り。

図31-33～41は舶載陶磁器。33～35は青磁蓮弁文碗。釉調は33が灰色、34が緑青色、35が緑灰色を呈し、いずれも光沢は良いが、34・35は微気泡多く失透する。素地はいずれも灰色を呈す。36～38は白磁口元。36は碗、37・38は皿である。釉調は36が灰白色を呈し、微気泡多く、光沢・透明度共に悪い。37は青味のある白色、38は灰白色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地はいずれも灰白色を呈す。37・38の口縁には覆輪の痕跡が見られる。39・40は青白磁。39は梅瓶の口縁部片。釉調は水青色を呈し、微気泡多く白濁している。素地は灰味白色を呈す。40は小壺の口縁部片。放射状に条線が施される。釉調はくすんだ水青色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は灰白色を呈す。41は黄釉の盤の口縁部片。口縁端部は断面四角形を呈す。釉は内面は全面、口縁内側から外面にかけては横方向の縞状に掛けられている。釉調は黄褐色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は灰色を呈し粘性があり、石粒を多く含む。

図31-42は美濃系山茶碗。胎土は白褐色を呈し、緻密。底部は糸切りで、貼付高台で端部には粘痕が残る。内面にはごく少量自然釉が掛る。

図31-43～49は山茶碗窯系こね鉢。胎土は概ね灰色を呈し、白色石粒を多く含み粗い。43・44・

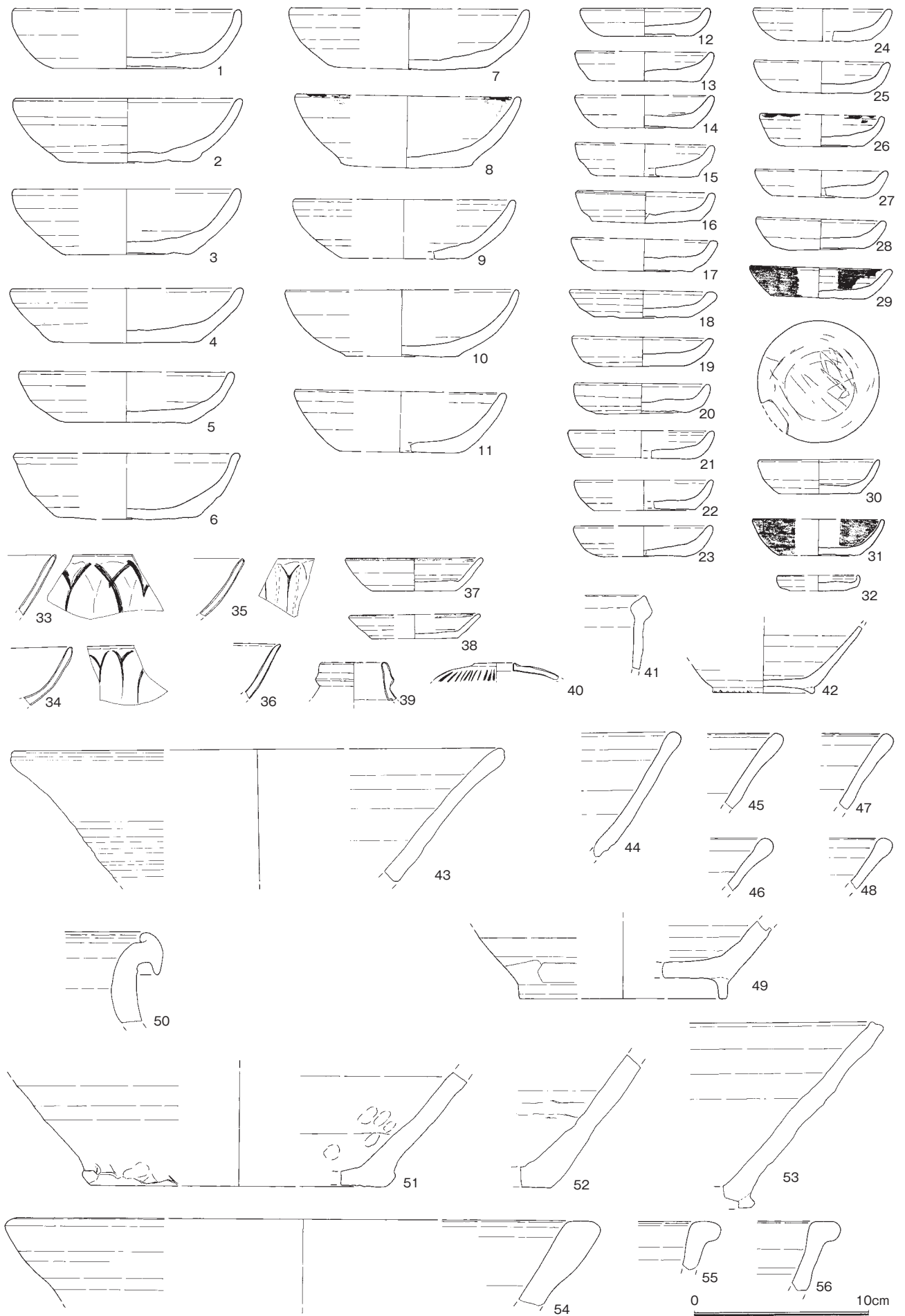


图31 4面出土遺物(1)

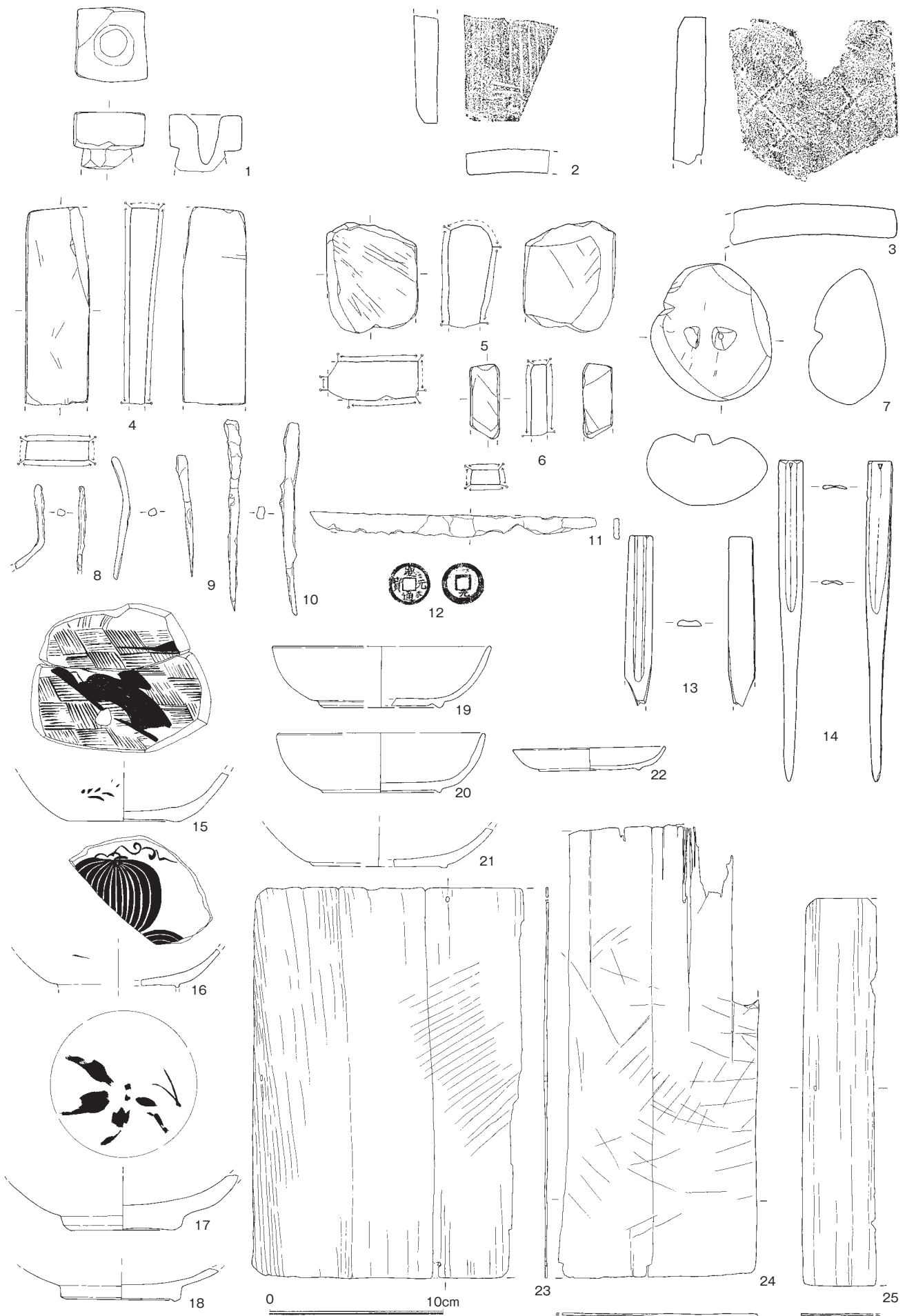


图32 4面出土遺物(2)

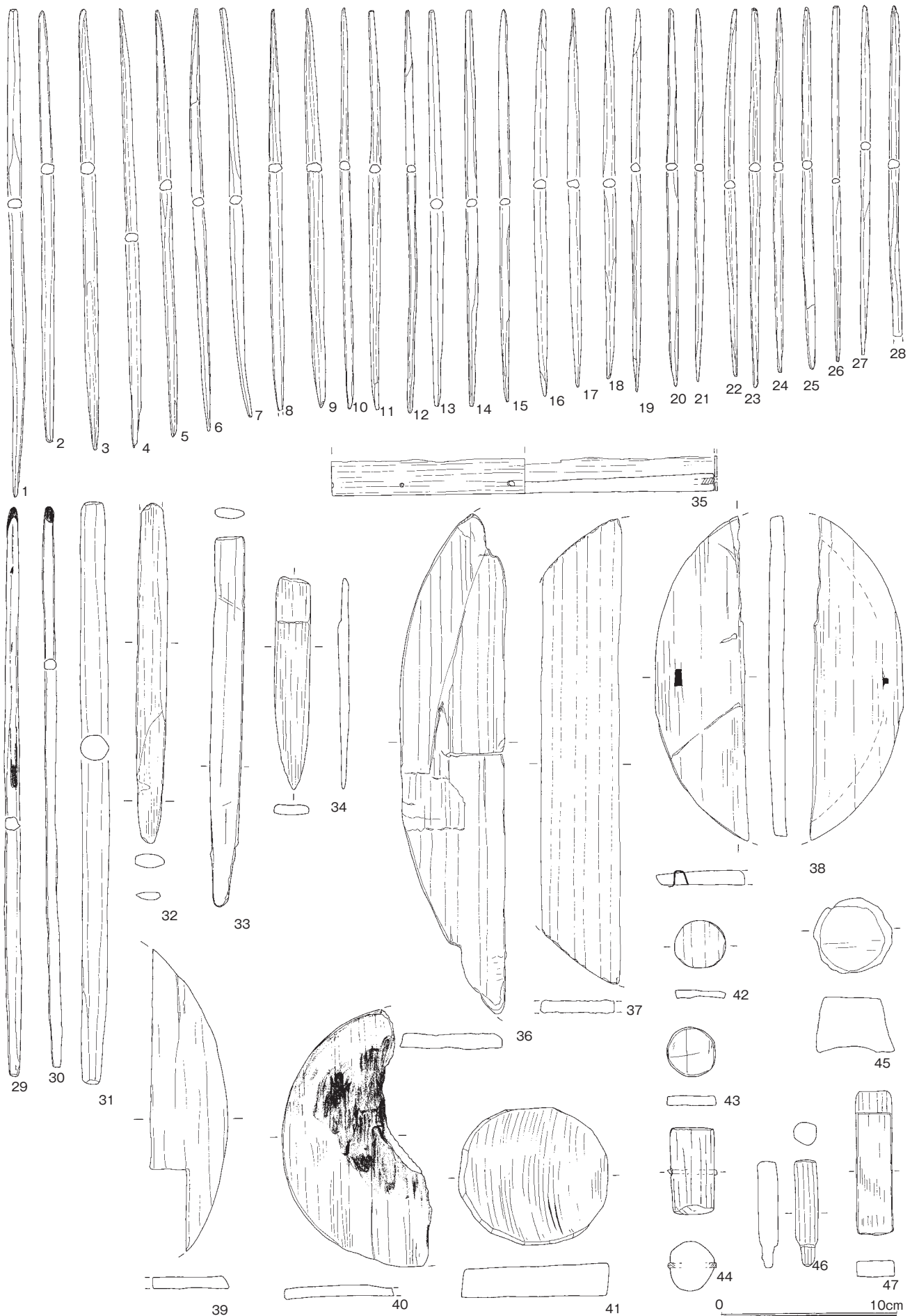


图33 4面出土遺物(3)

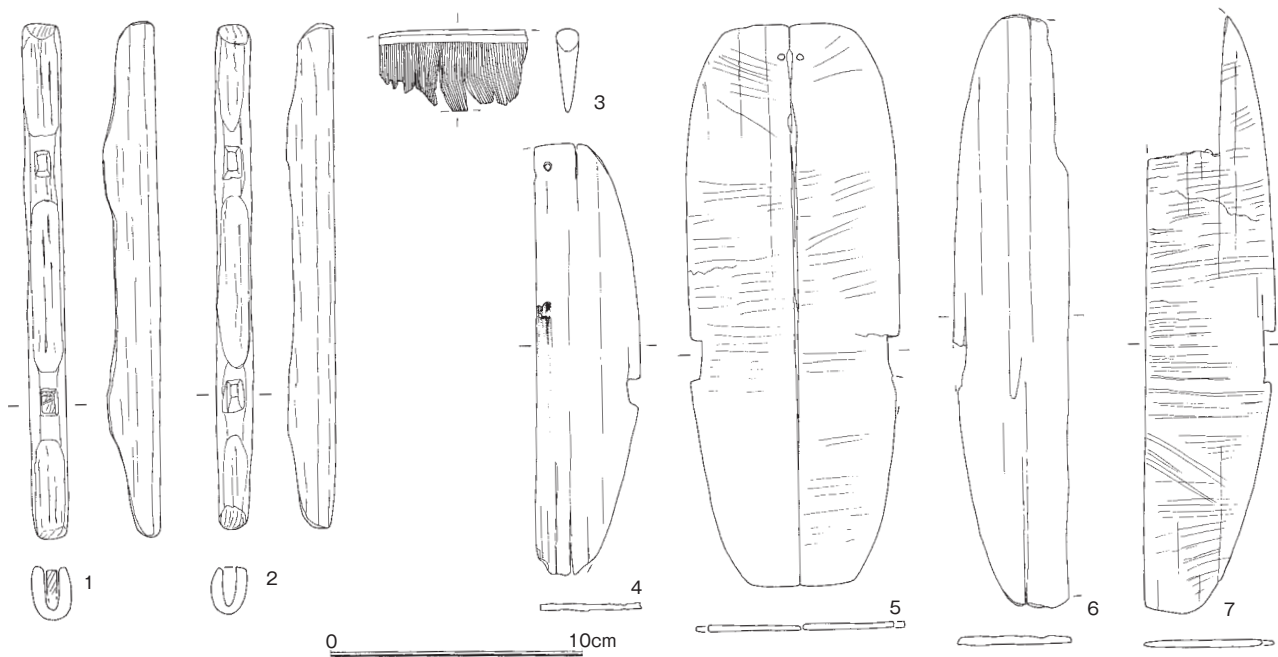


図34 4面出土遺物(4)

49の内面は磨滅している。49は貼付高台。

図31 - 50 ~ 53は常滑。50 ~ 52は甕、53はこね鉢である。器表は茶褐色~赤茶褐色を、胎土は灰色を呈す。

図31 - 54 ~ 56は手焙り。54は瓦質。胎土は暗灰色を呈し、微砂を多く含み粗い。55・56は同一個体の可能性が高い。土器質。胎土は肌色、胎芯は暗灰色を呈し、白色微粒を多く含む。口縁端部は外側に張り出している。

図32 - 1は土製品。土製五輪塔の地輪部分であろう。

図32 - 2・3は平瓦。3の凸面には格子叩き目。胎土は濃灰色を呈し、硬質。

図32 - 4 ~ 6は砥石。4は鳴滝産仕上げ砥。5は伊予産中砥。6は上野産中砥。

図32 - 7は土丹製品。土丹を加工しているが、用途は不明。

図32 - 8 ~ 11は鉄製品。8 ~ 10は釘。11は刀子。

図32 - 12は銭。慶元通宝・背元(初鑄1195年)。

図32 - 13・14は角製筭。

図32 - 15 ~ 22は漆器。15 ~ 21は黒漆塗り椀。22は黒漆塗り皿。15は波を意匠した情景文、16は瓜、17は花が描かれている。15は高台がない。

図32 - 23 ~ 25・図33・34は木製品である。図32 - 23 ~ 25は折敷。23・25の遺存する縁には籤を留めた穴が穿たれている。図33 - 1 ~ 28は箸。総数71本出土している。図33 - 29・30は菜箸。先端が炭化している。図33 - 31は棒状製品。菜箸の可能性もある。図33 - 32 ~ 34は篋状製品。図33 - 35は曲物の底部付近。図33 - 36 ~ 43は円板。36 ~ 40は曲物の底板か蓋。38には縁部に圧痕があり、樹皮が1カ所通されている。42・43は小型の曲物の底板の可能性もある。図33 - 44 ~ 46は栓。44の体部には棒が通されている。図33 - 47は用途不明の部材。図34 - 1・2は糸巻き。両側の部品。図34 - 3は櫛。黒漆が塗られている。図34 - 4 ~ 7は板草履の芯。藁圧痕が残る。

【骨】ニホンシカ：橈骨(1)、ノウサギ：大腿骨2・上腕骨1・下顎骨(2)・脛骨1・腓骨(1)、魚類：頭蓋骨(1)

【貝殻】アカニシ8、サザエ14、サザエ蓋7、キサゴ2835、ダンベイキサゴ26、バテイラ4、ホソウミニナ14、ゴマフニナ16、クボガイ1、タカラガイ1、ツメタガイ2、バイ1、アワビ4、ハマグリ447、サルボウ1、シオフキ1、イタヤガイ1、イガイ1、※2枚貝は片側で1とカウント

【果核】クルミ半割4、スモモ2

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
31	1	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.2)	7.5	3.4	肌色系
31	2	4面	-	かわらけ	轆轤成形	13.2	8.0	3.7	肌色系
31	3	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.2)	7.4	3.8	肌色系
31	4	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.4)	8.6	3.1	橙色系
31	5	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(12.4)	7.3	2.9	肌色系
31	6	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	8.2	3.8	肌色系
31	7	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.8)	(8.0)	3.5	淡橙色系
31	8	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	(7.6)	4.1	淡橙色系
31	9	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(12.8)	(7.0)	3.4	橙色系
31	10	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.4)	(6.5)	3.8	橙色系
31	11	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(12.2)	(7.3)	3.5	淡橙色系
31	12	4面	-	かわらけ	轆轤成形	7.6	5.6	1.6	肌色系
31	13	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	(6.4)	1.7	淡橙色系
31	14	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	5.6	1.9	肌色系
31	15	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	(6.2)	1.9	橙色系
31	16	4面	-	かわらけ	轆轤成形	8.0	6.3	1.8	橙色系
31	17	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.4)	5.8	1.9	肌色系
31	18	4面	-	かわらけ	轆轤成形	8.4	5.8	1.6	肌色系
31	19	4面	-	かわらけ	轆轤成形	8.1	5.3	1.7	橙色系
31	20	4面	-	かわらけ	轆轤成形	7.8	5.4	1.8	肌色系
31	21	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.4)	6.1	1.6	肌色系
31	22	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	(5.8)	1.8	肌色系
31	23	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	(5.3)	1.8	淡橙色系
31	24	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	(5.4)	1.9	肌色系
31	25	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.8)	5.6	1.8	橙色系
31	26	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.2)	5.0	1.8	橙色系
31	27	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.6)	(5.5)	1.5	橙色系
31	28	4面	-	かわらけ	轆轤成形	7.5	5.2	1.9	橙色系
31	29	4面	-	かわらけ	轆轤成形	8.2	5.4	1.7	肌色系
31	30	4面	-	かわらけ	轆轤成形	7.0	4.7	1.9	橙色系
31	31	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.6)	(4.6)	2.1	肌色系
31	32	4面	-	内折れかわらけ	轆轤成形	(4.8)	(3.3)	0.9	肌色系
31	37	4面	-	白磁	口兀皿	7.9	4.8	1.9	-
31	38	4面	-	白磁	口兀皿	(7.6)	(4.9)	1.4	-
31	39	4面	-	青白磁	梅瓶	(3.6)	-	-	-
31	40	4面	-	青白磁	小壺	(2.2)	-	-	-
31	42	4面	-	美濃系	山茶碗	-	5.9	-	-
31	43	4面	-	山茶碗窯系	こね鉢	(28.0)	-	-	-
31	49	4面	-	山茶碗窯系	こね鉢	-	(12.0)	-	-
31	51	4面	-	常滑	甕	-	(17.0)	-	-
31	54	4面	-	瓦質	手焙り	(34.4)	-	-	-
32	1	4面	-	土製品	五輪塔(地輪)	[3.4]	3.8	3.8	-
32	2	4面	-	平瓦	-	[6.0]	[5.5]	-	-
32	3	4面	-	平瓦	格子叩き目	[8.5]	[9.7]	-	-
32	4	4面	-	鳴滝産	仕上げ砥	[11.3]	3.6	1.6	-
32	5	4面	-	伊予産	中砥	[6.0]	5.2	2.5	-
32	6	4面	-	上野産	中砥	[4.3]	1.7	0.9	-
32	7	4面	-	土丹製品	不明	8.0	7.0	4.1	-
32	8	4面	-	鉄製品	釘	4.9	1.5	0.4	-
32	9	4面	-	鉄製品	釘	7.0	0.7	0.4	-
32	10	4面	-	鉄製品	釘	11.1	0.6	0.8	-

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
32	11	4面	-	鉄製品	刀子	[16.5]	[1.3]	0.3	-
32	12	4面	-	銭	慶元通宝	2.4	2.4	-	-
32	13	4面	-	角製品	筭	[9.8]	1.5	0.3	-
32	14	4面	-	角製品	筭	18.4	1.4	0.3	-
32	15	4面	-	漆器	椀	-	6.4	-	-
32	16	4面	-	漆器	椀	-	(7.0)	-	-
32	17	4面	-	漆器	椀	-	6.1	-	-
32	18	4面	-	漆器	椀	-	6.8	-	-
32	19	4面	-	漆器	椀	(12.6)	(7.2)	3.4	-
32	20	4面	-	漆器	椀	(12.0)	6.8	3.5	-
32	21	4面	-	漆器	椀	-	(7.8)	-	-
32	22	4面	-	漆器	皿	8.8	5.8	1.3	-
32	23	4面	-	木製品	折敷	22.5	[15.5]	0.2	-
32	24	4面	-	木製品	折敷	26.0	[11.3]	0.2	-
32	25	4面	-	木製品	折敷	22.3	[4.1]	0.1	-
33	1	4面	-	木製品	箸	27.8	0.8	0.5	-
33	2	4面	-	木製品	箸	24.6	0.8	0.6	-
33	3	4面	-	木製品	箸	25.2	0.8	0.7	-
33	4	4面	-	木製品	箸	25.0	0.7	0.5	-
33	5	4面	-	木製品	箸	24.3	0.7	0.6	-
33	6	4面	-	木製品	箸	24.1	0.6	0.5	-
33	7	4面	-	木製品	箸	23.4	0.7	0.5	-
33	8	4面	-	木製品	箸	23.5	0.7	0.5	-
33	9	4面	-	木製品	箸	22.8	0.8	0.5	-
33	10	4面	-	木製品	箸	22.9	0.6	0.5	-
33	11	4面	-	木製品	箸	22.7	0.6	0.5	-
33	12	4面	-	木製品	箸	22.9	0.5	0.4	-
33	13	4面	-	木製品	箸	22.6	0.7	0.6	-
33	14	4面	-	木製品	箸	22.6	0.6	0.4	-
33	15	4面	-	木製品	箸	22.4	0.6	0.3	-
33	16	4面	-	木製品	箸	22.1	0.7	0.5	-
33	17	4面	-	木製品	箸	21.6	0.7	0.5	-
33	18	4面	-	木製品	箸	21.1	0.7	0.5	-
33	19	4面	-	木製品	箸	21.8	0.5	0.5	-
33	20	4面	-	木製品	箸	21.5	0.7	0.4	-
33	21	4面	-	木製品	箸	21.2	0.5	0.4	-
33	22	4面	-	木製品	箸	20.9	0.6	0.5	-
33	23	4面	-	木製品	箸	21.7	0.6	0.5	-
33	24	4面	-	木製品	箸	20.8	0.6	0.5	-
33	25	4面	-	木製品	箸	20.6	0.6	0.5	-
33	26	4面	-	木製品	箸	20.3	0.4	0.3	-
33	27	4面	-	木製品	箸	19.9	0.6	0.5	-
33	28	4面	-	木製品	箸	[18.0]	0.6	0.5	-
33	29	4面	-	木製品	菜箸	32.5	0.8	0.7	-
33	30	4面	-	木製品	菜箸	32.0	0.7	0.6	-
33	31	4面	-	木製品	棒状製品	33.2	1.6	1.5	-
33	32	4面	-	木製品	筥状製品	[19.4]	1.7	0.8	-
33	33	4面	-	木製品	筥状製品	21.1	1.7	0.6	-
33	34	4面	-	木製品	筥状製品	12.0	2.0	0.6	-
33	35	4面	-	木製品	曲物	(22.0)	22.0	[2.0]	-
33	36	4面	-	木製品	円板	[28.5]	[5.8]	0.9	-
33	37	4面	-	木製品	円板	[26.5]	[4.5]	0.8	-
33	38	4面	-	木製品	円板	[18.3]	[5.1]	0.9	-
33	39	4面	-	木製品	円板	[17.5]	[4.5]	0.7	-
33	40	4面	-	木製品	円板	[14.6]	[8.0]	0.6	-
33	41	4面	-	木製品	円板	7.5	8.2	1.8	-
33	42	4面	-	木製品	円板	2.7	2.9	0.5	-
33	43	4面	-	木製品	円板	2.2	2.8	0.6	-

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
33	44	4面	-	木製品	栓	5.0	2.6	2.8	-
33	45	4面	-	木製品	栓	3.0	4.4	4.2	-
33	46	4面	-	木製品	栓	6.1	1.3	1.3	-
33	47	4面	-	木製品	用途不明	8.2	2.0	0.9	-
34	1	4面	-	木製品	糸巻き	20.4	2.1	1.5	-
34	2	4面	-	木製品	糸巻き	20.0	1.9	1.4	-
34	3	4面	-	木製品	櫛	3.3	[5.9]	0.9	-
34	4	4面	-	木製品	板草履の芯	17.1	[4.2]	0.3	-
34	5	4面	-	木製品	板草履の芯	22.2	8.4	0.3	-
34	6	4面	-	木製品	板草履の芯	23.6	[4.6]	0.4	-
34	7	4面	-	木製品	板草履の芯	[22.0]	[5.0]	0.3	-

第4b面 (図35)

第4b面はⅡ区のみにも4面下10cm、海拔6.1m前後に検出された。やや弱い地業面である。

板壁建物2 (図36)

板壁建物2はグリッド(x10、y2)付近、海拔6.1m前後に検出された。杭2本と板材が東西方向の同一軸線状に検出された。杭と板の先端は炭化している。東西軸線方向はE-7°-Sである。

4b面出土遺物 (図37)

図37は4b面出土遺物である。寸法は表の通り。

1～11はかわらけ。1は手づくねかわらけの小皿。
 2～11は糸切り底のかわらけ。1・5～8などの13世紀前半のかわらけが混入しているが、4b面は4面から5面への移行期13世紀後半～末葉であろう。
 12は青白磁合子の蓋である。菊花文の型押し成形。釉調は水青色を呈し、光沢・透明度共に良い。内側面は露胎。胎土は白色を呈す。
 13は山茶碗。胎土は淡橙色を呈し、白色小粒を含む。
 14は山茶碗窯系こね鉢の底部片。胎土は灰色を呈し、石粒を含み粗い。内面は磨滅している。
 15は平瓦。凸面は磨滅している。
 16～18は鉄釘。19は銭。景祐元寶(初鑄1034年)。
 20～40は木製品。20は折敷。遺存部分では穴が3カ所に穿たれている。
 21～30は箸。出土総数は16本。31は菜箸。32～34は棒状製品。35は篋状製品。36は用途不明の板。37は黒漆塗りの櫛。38は円板。曲物の底板。39・40は板草履の芯。

【骨】イヌ：大腿骨1、小型哺乳類：橈骨(1)・部位不明(1)、魚類：主鰓蓋骨(1)

【貝殻】アカニシ4、サザエ1、サザエの蓋1、ダンベイキサゴ6、バテイラ1、ハマグリ28、マガキ2、マダカアワビ1※2枚貝は片側を1とカウント。

【果核】クルミ半割2

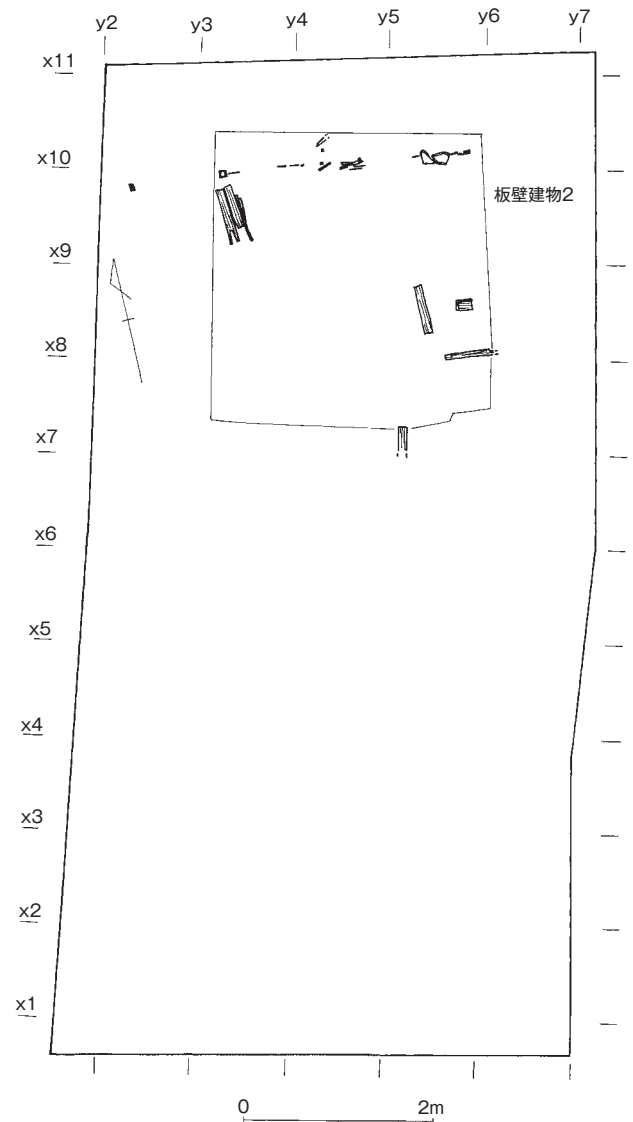


図35 4b面遺構配置図

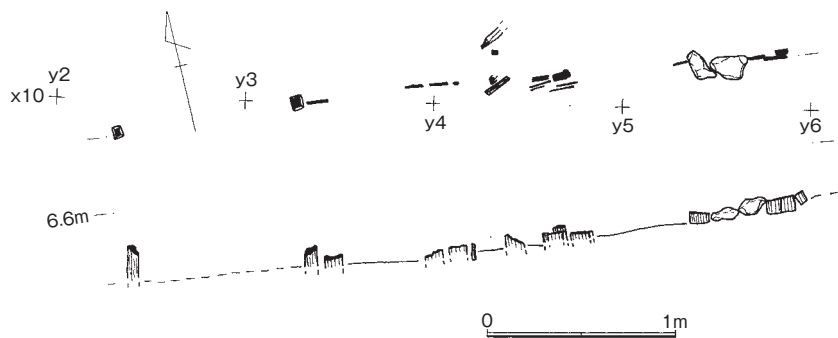


図36 4b面板壁建物2

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
37	1	4b面	-	かわらけ	手づくね	(8.2)	-	1.8	淡橙色系
37	2	4b面	-	かわらけ	轆轤成形	12.8	7.2	3.6	肌色系
37	3	4b面	-	かわらけ	轆轤成形	(12.6)	7.6	3.1	淡橙色系
37	4	4b面	-	かわらけ	轆轤成形	(12.0)	7.2	3.5	肌色系
37	5	4b面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.8)	6.3	1.6	肌色系
37	6	4b面	-	かわらけ	轆轤成形	8.0	5.9	1.6	肌色系
37	7	4b面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	(5.9)	1.6	肌色系
37	8	4b面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	(6.1)	1.8	橙色系
37	9	4b面	-	かわらけ	轆轤成形	8.0	4.6	2.1	橙色系
37	10	4b面	-	かわらけ	轆轤成形	7.6	5.0	2.3	橙色系
37	11	4b面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.2)	4.8	2.2	肌色系
37	12	4b面	-	青白磁	合子の蓋	6.5	6.0	2.3	-
37	13	4b面	-	-	山茶碗	-	(8.0)	-	-
37	15	4b面	-	平瓦	-	[8.1]	[9.0]	-	-
37	16	4b面	-	鉄製品	釘	6.5	0.5	0.5	-
37	17	4b面	-	鉄製品	釘	5.2	0.5	0.3	-
37	18	4b面	-	鉄製品	釘	5.6	0.5	0.4	-
37	19	4b面	-	銭	景祐元寶	2.4	2.4	-	-
37	20	4b面	-	木製品	折敷	21.6	[9.8]	0.2	-
37	21	4b面	-	木製品	箸	21.2	0.8	0.6	-
37	22	4b面	-	木製品	箸	22.0	0.8	0.8	-
37	23	4b面	-	木製品	箸	22.7	0.7	0.4	-
37	24	4b面	-	木製品	箸	22.0	0.8	0.6	-
37	25	4b面	-	木製品	箸	22.5	0.7	0.6	-
37	26	4b面	-	木製品	箸	22.5	0.7	0.6	-
37	27	4b面	-	木製品	箸	23.0	0.8	0.3	-
37	28	4b面	-	木製品	箸	23.5	0.8	0.6	-
37	29	4b面	-	木製品	箸	24.4	0.8	0.4	-
37	30	4b面	-	木製品	箸	23.9	0.5	0.5	-
37	31	4b面	-	木製品	菜箸	32.1	1.2	0.6	-
37	32	4b面	-	木製品	棒状製品	[21.5]	1.5	1.2	-
37	33	4b面	-	木製品	棒状製品	19.5	1.4	0.6	-
37	34	4b面	-	木製品	棒状製品	14.3	1.2	1.3	-
37	35	4b面	-	木製品	筥状製品	[10.3]	1.5	0.5	-
37	36	4b面	-	木製品	用途不明	[5.0]	2.4	0.3	-
37	37	4b面	-	木製品	櫛	4.2	[5.5]	0.9	-
37	38	4b面	-	木製品	円板	[38.0]	[7.1]	0.9	-
37	39	4b面	-	木製品	板草履の芯	23.8	[5.2]	0.5	-
37	40	4b面	-	木製品	板草履の芯	23.9	[5.4]	0.4	-

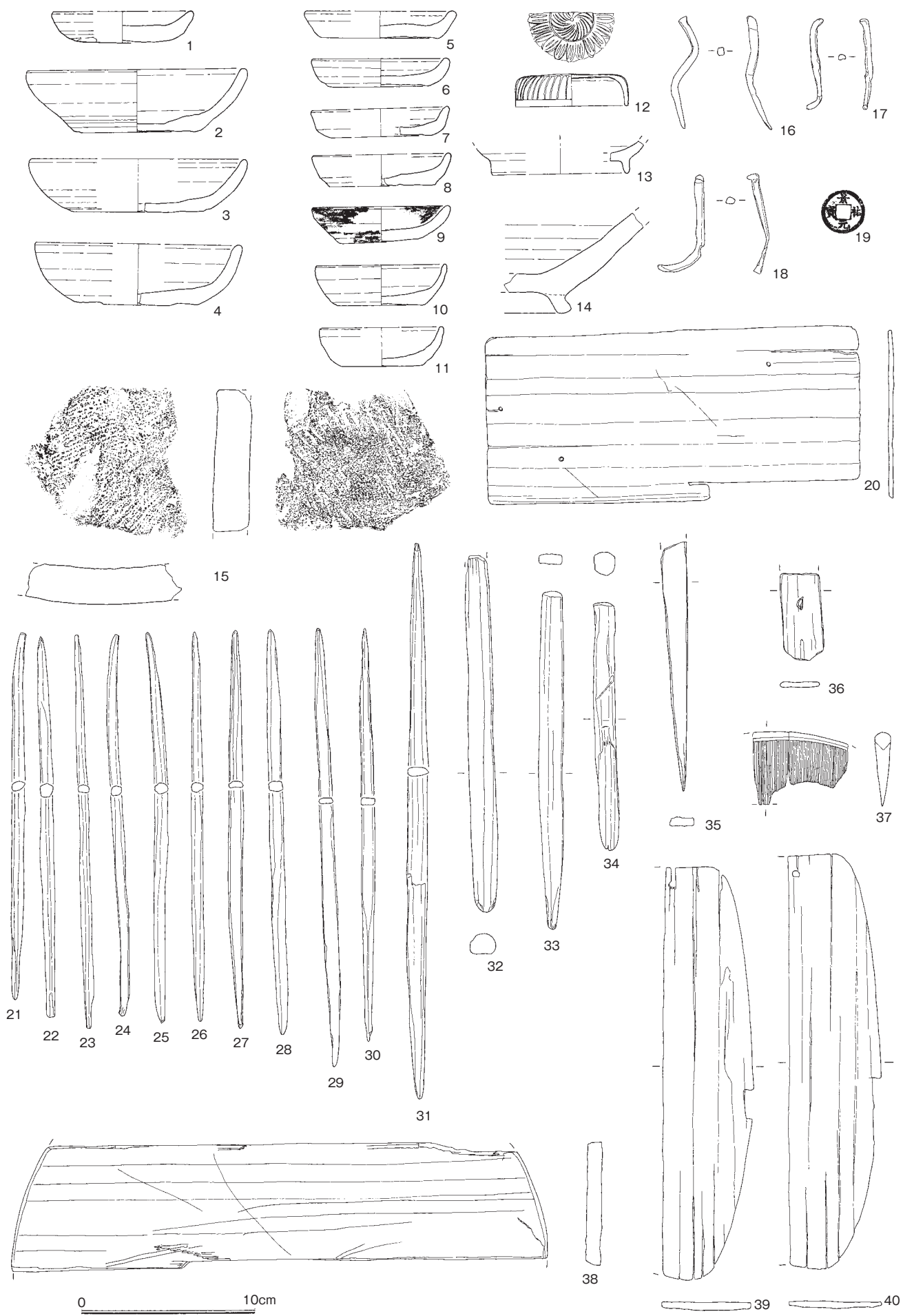


图37 4b面出土遺物

第5面 (図38)

第5面は4面下20～30cm、海拔5.9～6.0m前後に検出された。暗褐色粘質土の平坦な面である。土坑2基、Pit2口が検出された。

土坑3・出土遺物 (図39・40)

土坑3はグリッド(x4、y4)付近、海拔5.9m前後に検出された。平面形は若干南北に長い円形を呈す。南北幅83cm、東西幅70cm、深さは検出面から18cmを測る。

図40-1・2は土坑3出土遺物である。1・2はかわらけ。1は手づくね。胎土は橙色を呈し、微砂を含み粉質。寸法は口径(9.2)cm、器高1.9cmを測る。2は轆轤成形糸切り。寸法は口径(9.2)cm、底径(6.6)cm、器高1.7cmを測る。

土坑10・出土遺物 (図39・40)

土坑10はグリッド(x9、y4)付近、海拔6.0m前後に検出された。平面形は不整形円形を呈す。幅は長軸260cm、短軸190cm、深さは検出面から45cmを測る。埋土の土層は以下の通り。

1層：有機物堆積層 木片・貝殻片を含む。締り悪い。

2層：黒褐色粘質土層 貝殻細片(やや多)・砂粒・炭化物・木片を含む。粘性強い。締り良い。

3層：有機物堆積層 木片・貝殻片を含む。締り悪い。

図40-3～33は土坑10出土遺物である。3～9はかわらけ。3～5は手づくねの小皿。胎土は肌色を呈し、粉質。寸法は口径(10.0)cm・(8.8)cm・(8.6)cm、器高1.9cm・1.6cm・1.7cmを測る。6～9は

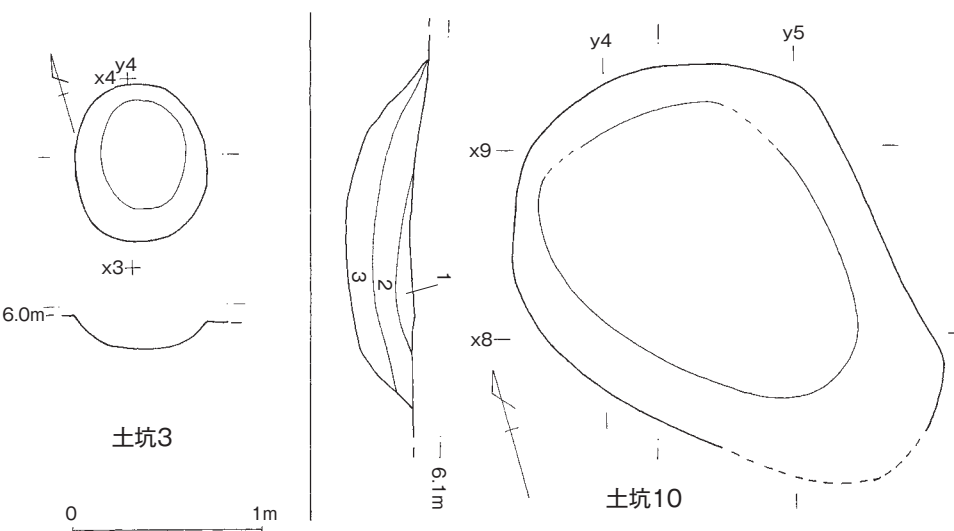


図39 5面土坑3、土坑10

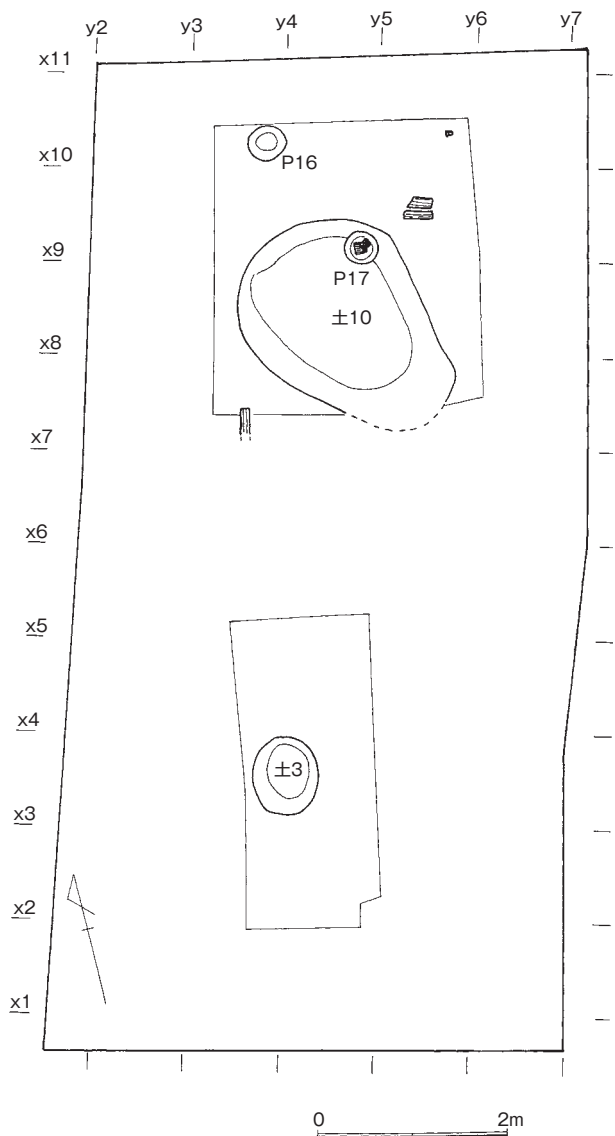


図38 5面遺構配置図

轆轤成形糸切り。胎土は6・7が橙色、8・9が肌色を呈す。7は小皿にしては大きく、器厚も厚い。寸法は口径(13.2)cm・(10.6)cm・(8.2)cm・(8.2)cm、底径は(8.7)cm・(8.0)cm・(6.0)cm・5.6cm、器高3.5cm・2.4cm・1.7cm・1.8cmを測る。7は器表に煤が付

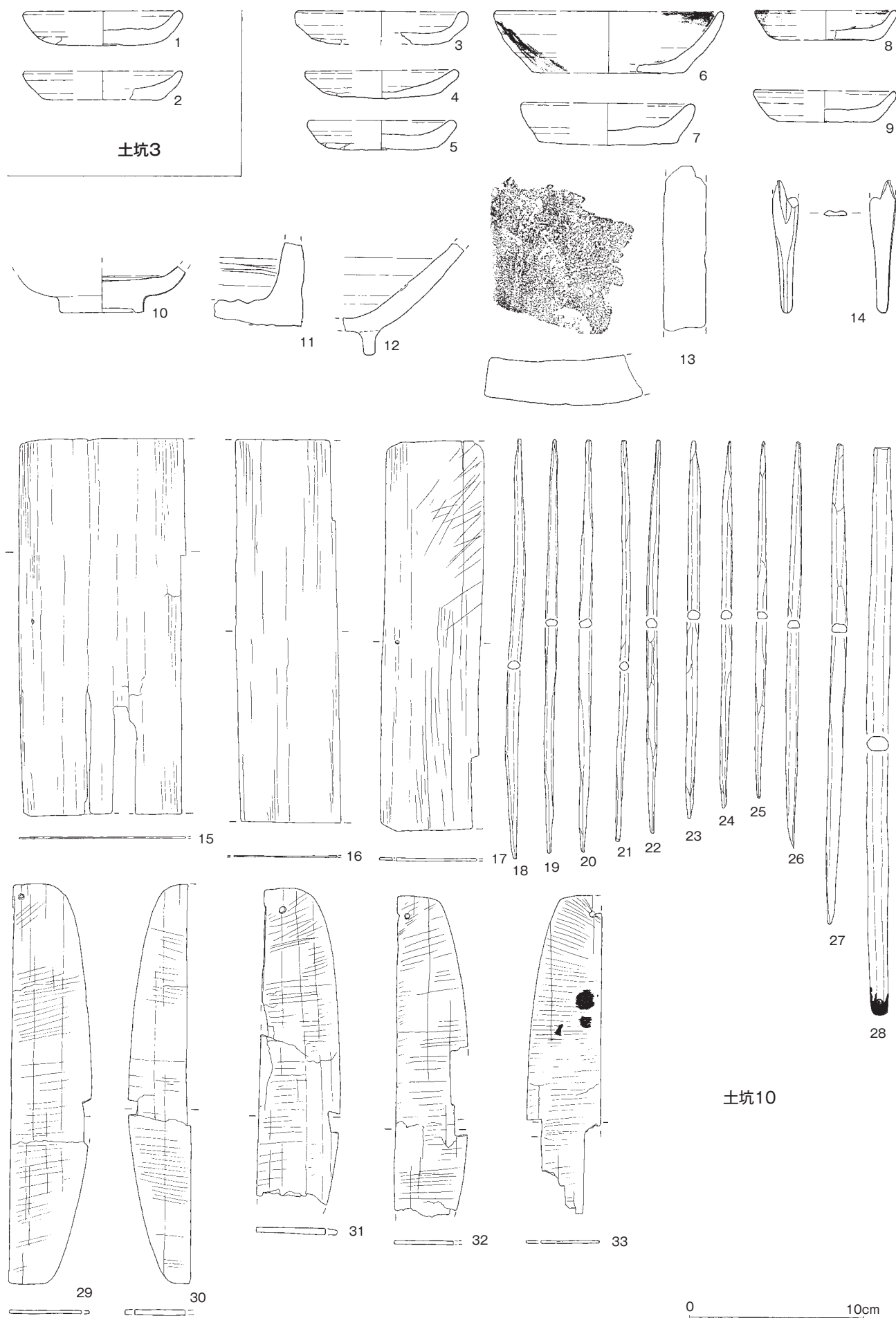


图40 土坑3·10出土遗物

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
40	13	5面	土坑10	平瓦	-	[6.2]	[9.0]	-	-
40	14	5面	土坑10	角製品	筭	[7.6]	1.5	0.3	-
40	15	5面	土坑10	木製品	折敷	21.6	[9.3]	0.1	-
40	16	5面	土坑10	木製品	折敷	22.0	[5.9]	0.1	-
40	17	5面	土坑10	木製品	折敷	22.3	[5.6]	0.2	-
40	18	5面	土坑10	木製品	箸	24.1	0.7	0.5	-
40	19	5面	土坑10	木製品	箸	23.8	0.7	0.4	-
40	20	5面	土坑10	木製品	箸	23.7	0.7	0.5	-
40	21	5面	土坑10	木製品	箸	23.1	0.5	0.5	-
40	22	5面	土坑10	木製品	箸	22.6	0.6	0.5	-
40	23	5面	土坑10	木製品	箸	21.7	0.7	0.5	-
40	24	5面	土坑10	木製品	箸	21.1	0.6	0.5	-
40	25	5面	土坑10	木製品	箸	20.5	0.6	0.4	-
40	26	5面	土坑10	木製品	箸	23.4	0.9	0.5	-
40	27	5面	土坑10	木製品	箸	27.6	0.9	0.5	-
40	28	5面	土坑10	木製品	棒状製品	32.6	1.3	0.8	-
40	29	5面	土坑10	木製品	板草履の芯	23.0	[4.6]	0.2	-
40	30	5面	土坑10	木製品	板草履の芯	22.9	[3.3]	0.3	-
40	31	5面	土坑10	木製品	板草履の芯	[18.1]	[4.7]	0.3	-
40	32	5面	土坑10	木製品	板草履の芯	[18.4]	[4.1]	0.2	-
40	33	5面	土坑10	木製品	板草履の芯	[18.3]	[4.2]	0.2	-

着し、灯明皿である。10は青磁劃花文碗の底部片。底径は4.9cmを測る。釉調は灰味緑色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は灰色を呈す。11は渥美の小壺の底部片。器表には自然釉が特に内面に厚く掛る。胎土は黒灰色を呈し、堅緻。12は山茶碗窯系こね鉢の底部片。胎土は灰白色を呈し、白色石粒を多く含み粗い。内面は磨滅している。13は平瓦。胎土は黒灰色を呈す。14は角製筭。15～33は木製品。寸法は表の通り。15～17は折敷。18～27は箸。出土総数は44本。28は棒状製品。先端は炭化している。29～33は板草履の芯。藁圧痕が残る。

【骨】ノウサギ：寛骨(1)、ネズミ：頭蓋骨(1)、肩甲骨(1)、クロダイ：主鰓蓋骨(1)

【貝殻】ダンベイキサゴ2、ツメタガイ1、サルボウガイ1、ハマグリ61、マガキ4、アワビ2

※2枚貝は片側を1とカウント

5面Pit (図38)

5面からは2口のPitが検出された。Pit17は礎板を伴っている。いずれも深さは検出面から30cm前後を測る。

5面出土遺物 (図41・42)

図41・42は5面出土遺物である。寸法は表の通り。図41-1～10はかわらけ。1・2は手づくねの大皿と小皿。3～10は轆轤成形底部は糸切り。3～7は大皿、8～10は小皿である。胎土は微砂を含み粉質。6は器表に煤が付着し、灯明皿である。

図41-11～13は舶載磁器。11は青磁蓮弁文碗。釉調は緑味灰色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は濃灰色を呈す。12は青磁折縁鉢。釉調は緑青色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は白色を呈す。13は青磁蓮弁文大皿。内面に印刻で蓮弁文が施される。釉調は緑青色を呈し、光沢は良いが、微気泡多く、貫入が細かく入る。素地は灰色を呈す。

図41-14は山茶碗窯系こね鉢の口縁部片。胎土は灰色を呈し、白色石粒を多く含み粗い。

図41-15・16は常滑の甕の口縁部片。胎土は黒灰色を呈し、石粒を多く含み粗い。器表は自然釉が掛り、光沢がある。15は厚く掛る。

図41-17は内折れ白かわらけ。胎土は白色を呈し、水簸されきめ細かい。



图41 5面出土遺物(1)

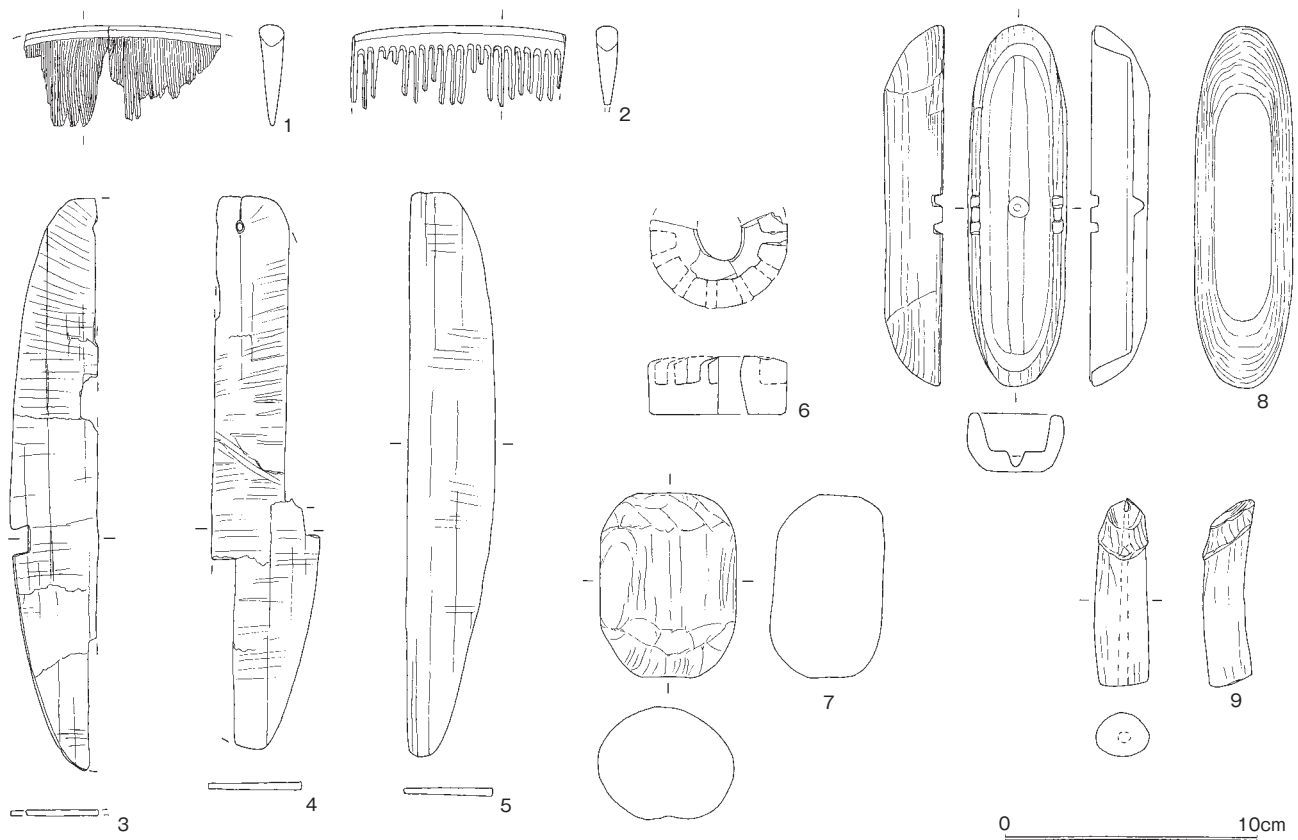


図42 5面出土遺物(2)

図41-18は平瓦。凸面には格子叩き目。胎土は灰色を呈す。

図41-19は石製品。産地は不明。若干青味のある濃灰色を呈し、細かく硬い。表面は滑らかで砥石の可能性はある。

図41-20～22は漆器。20は椀、21・22は皿。黒漆塗りで、朱漆で20は内外面に菊花をスタンプで、21・22は草花を手書きで描いている。

図41-23～42・図42は木製品。23は折敷。縁に籤を留める穴が開いている。24～36は箸。37・38は菜箸。39は棒状製品。40は杓文字。41は円板。図42-1・2は櫛。図42-3～5は板草履の芯。藁圧痕が残る。図42-6は傘轆轤。図42-7は球状製品。図42-8は舟形。舟艇中央に帆柱を立てる穴、舷側に帆柱を支える桁を装着する刻みが各々2ヶ所付けられている。図42-9は陽物の形代。

【骨】イヌ：下顎骨(1)

【貝殻】アカニシ7、サザエ1、サザエの蓋1、ダンベイキサゴ27、バテイラ1、ツメタガイ2、ハマグリ141、マガキ10、マダカアワビ4 ※2枚貝は片側を1とカウント

【果核】クルミ半割6、スモモ半割1

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
41	1	5面	-	かわらけ	手づくね	12.3	-	3.0	肌色系
41	2	5面	-	かわらけ	手づくね	(9.2)	-	2.0	橙色系
41	3	5面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	(9.4)	3.3	橙色系
41	4	5面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	(7.6)	3.3	肌色系
41	5	5面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	8.0	3.4	肌色系
41	6	5面	-	かわらけ	轆轤成形	12.6	7.5	3.7	淡橙色系
41	7	5面	-	かわらけ	轆轤成形	11.6	7.2	3.0	肌色系
41	8	5面	-	かわらけ	轆轤成形	(9.2)	(7.2)	2.0	肌色系
41	9	5面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.2)	(5.9)	1.8	肌色系

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
41	10	5面	-	かわらけ	轆轤成形	(9.0)	(5.6)	2.0	肌色系
41	12	5面	-	青磁	折縁鉢	(19.0)	-	-	-
41	18	5面	-	平瓦	格子叩き目	[10.4]	[9.9]	-	-
41	19	5面	-	石製品	用途不明	[6.8]	6.1	2.8	-
41	21	5面	-	漆器	皿	(9.6)	(5.8)	1.5	-
41	22	5面	-	漆器	皿	-	(7.4)	-	-
41	23	5面	-	木製品	折敷	21.4	[4.1]	0.1	-
41	24	5面	-	木製品	箸	24.5	0.6	0.5	-
41	25	5面	-	木製品	箸	22.4	0.7	0.5	-
41	26	5面	-	木製品	箸	[19.1]	0.6	0.4	-
41	27	5面	-	木製品	箸	24.6	0.7	0.5	-
41	28	5面	-	木製品	箸	24.3	0.7	0.5	-
41	29	5面	-	木製品	箸	23.5	0.6	0.5	-
41	30	5面	-	木製品	箸	22.0	0.6	0.5	-
41	31	5面	-	木製品	箸	22.0	0.7	0.4	-
41	32	5面	-	木製品	箸	22.2	0.8	0.4	-
41	33	5面	-	木製品	箸	21.5	0.6	0.4	-
41	34	5面	-	木製品	箸	22.0	0.7	0.3	-
41	35	5面	-	木製品	箸	21.7	0.6	0.5	-
41	36	5面	-	木製品	箸	21.0	0.6	0.5	-
41	37	5面	-	木製品	菜箸	29.7	1.0	0.6	-
41	38	5面	-	木製品	菜箸	27.6	1.0	0.7	-
41	39	5面	-	木製品	棒状製品	24.1	1.7	1.2	-
41	40	5面	-	木製品	杓文字	19.2	4.7	0.6	-
41	41	5面	-	木製品	円板	[26.5]	[6.8]	0.9	-
41	42	5面	-	木製品	円板	[7.8]	[3.3]	0.5	-
42	1	5面	-	木製品	櫛	4.0	[7.8]	0.9	-
42	2	5面	-	木製品	櫛	[3.2]	[8.5]	0.9	-
42	3	5面	-	木製品	板草履の芯	22.6	[3.5]	0.3	-
42	4	5面	-	木製品	板草履の芯	21.8	[4.3]	0.4	-
42	5	5面	-	木製品	板草履の芯	22.4	[3.5]	0.4	-
42	6	5面	-	木製品	傘轆轤	2.3	5.5	[3.0]	-
42	7	5面	-	木製品	球状製品	7.3	5.4	4.3	-
42	8	5面	-	木製品	舟形	14.4	3.9	2.3	-
42	9	5面	-	木製品	陽物形	7.5	2.1	1.7	-

第6面 (図43)

第6面は5面下20cm、海拔5.7m前後に検出された。混入物のほとんどない黒褐色粘質土の平坦な面である。Pit11口が検出された。Pitはその形態および配置から柱穴列2列を確認することができた。これらは掘立柱建物の可能性は十分あるが、2口のみを検出であるので、柱穴列として報告する。

柱穴列2 (図44)

柱穴列2はグリッド(x4、y4)付近、海拔5.7m前後に検出された。南北方向に並ぶ2口のPitである。芯々間の距離は210cmを測る。平面形は直径40cm前後の円形を呈し、深さは検出面から20cm前後を測る。南北軸線方向はN-8°-Eである。

柱穴列3 (図44)

柱穴列3はグリッド(x9、y3)付近、海拔5.7m前後に検出された。東西方向に並ぶ2口のPitである。芯々間の距離は210cmを測る。平面形は直径40~45cmを測る円形を呈し、深さは検出面から50cmを測る。いずれのPitにも最大径20cm前後を測る不整形の太い柱が検出された。Pit18は3枚の礎板が、Pit19は土丹が入れられていた。東西軸線方向はE-6°-Sである。

6面Pit (図43)

6面からは11口のPitが検出された。内、4口は柱穴列2・3を構成していた。その他のPitはPit36・37以外は礎板を伴っていた。しかし、いずれも掘り込みが10cm前後と浅く、上層面の掘り

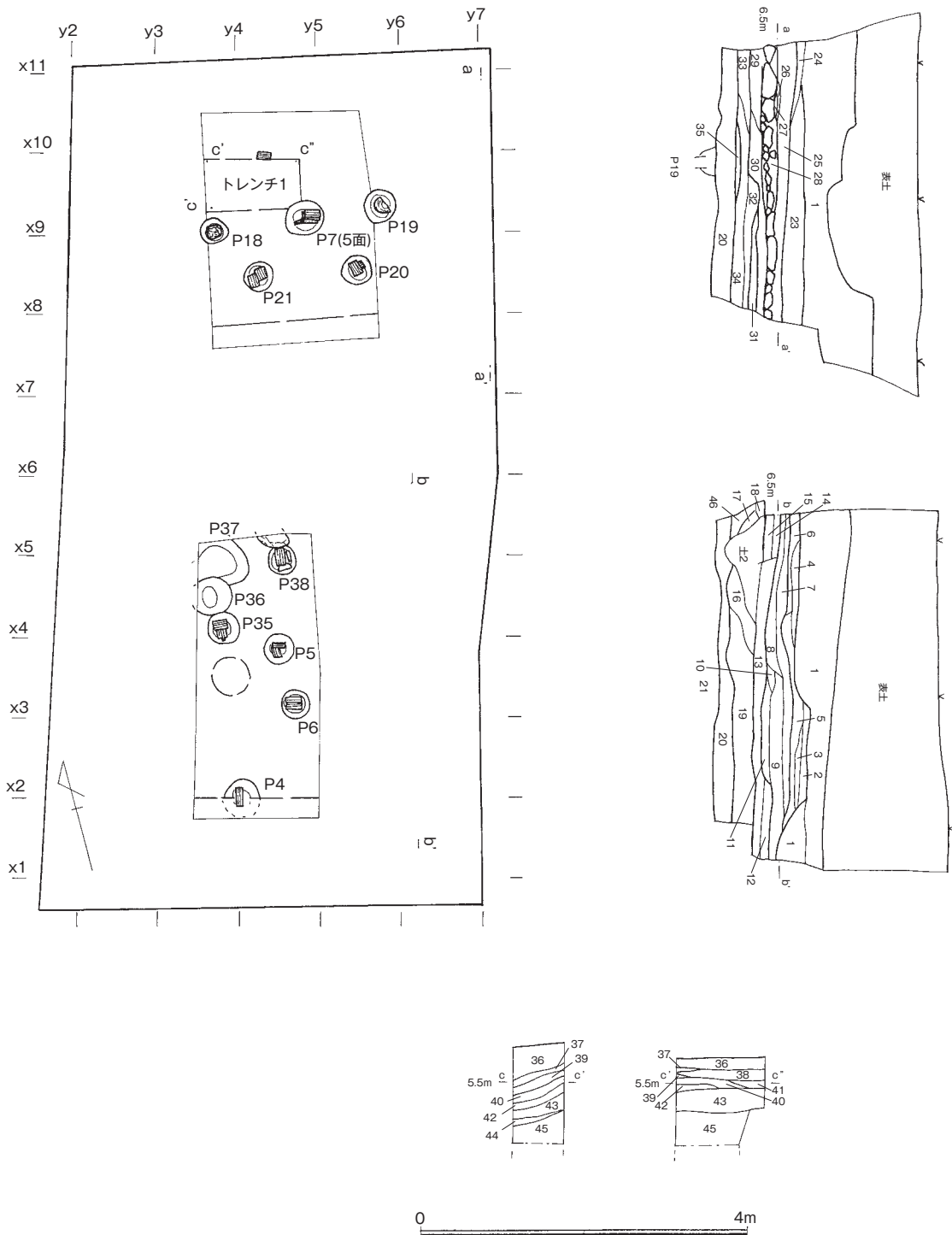


図43 6面遺構配置図

残しが第6面になって検出された可能性が高い。また、掘立柱建物等の並びをつかむことはできなかった。

6面出土遺物 (図45)

図45は6面出土遺物である。寸法は表の通り。1～21はかわらけ。1～10は手づくね。1～4は大皿、5～10は小皿である。口径が大きく、器壁中位に稜を持つ。胎土は微砂を含み粉質。11～20は轆轤成形糸切り底の小皿。11～19は口径・底径共に大きく、浅い。11～15は特に底径が大きく、器壁は直線的、やや外反して立ち上がる。胎土は微砂を含み粉質。16・17は橙色を呈し、微砂を多く含み、砂質で硬く焼き締まっている。21は内折れかわらけ。1・4・18は器表に煤が付着し、灯明皿である。

22～26は舶載陶磁器。22・23は青磁劃花文碗の口縁部片。釉調は緑灰色を呈し、光沢・透明度共に良い。

素地は灰色を呈す。24は白磁端反碗の口縁部片。釉調は白褐色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は灰味白色を呈す。25は青白磁合子の身。釉調は水青色を呈し、光沢・透明度共に良いが、微気泡多い。素地は白色を呈す。26は緑釉の盤の底部片。釉調は濃緑色を呈し、不透明。内面は銀化している。内面には暗文が施されている。素地は灰色を呈し、石粒等を多く含む。

27は瀬戸の入れ子。器表には自然釉が掛る。

28・29は渥美。28は壺の底部片、29はこね鉢の口縁部片である。胎土は暗灰色を呈し、堅緻。

30～33は平瓦。30・32の凸面には縄目、31は粗い、32は細かい格子叩き目がある。

34～36は鉄釘。

37～39は漆器。黒漆塗りの皿。37の内面には朱漆で菊花文がスタンプされる。

40～45は木製品。40は折敷。41～45は箸。45の先端は炭化している。

【骨】シカ：脛骨(1)、哺乳類：脛骨(1)、腓骨(1)、部位不明(3)

【貝殻】アカニシ3、ダンベイキサゴ1、サザエ2、サザエの蓋1、ツメタガイ2、ハマグリ37、マダカアワビ4 ※2枚貝は片側を1とカウント。

【果核】クルミ半割1、スモモ1

【スラグ】73.2 g、74.4 g

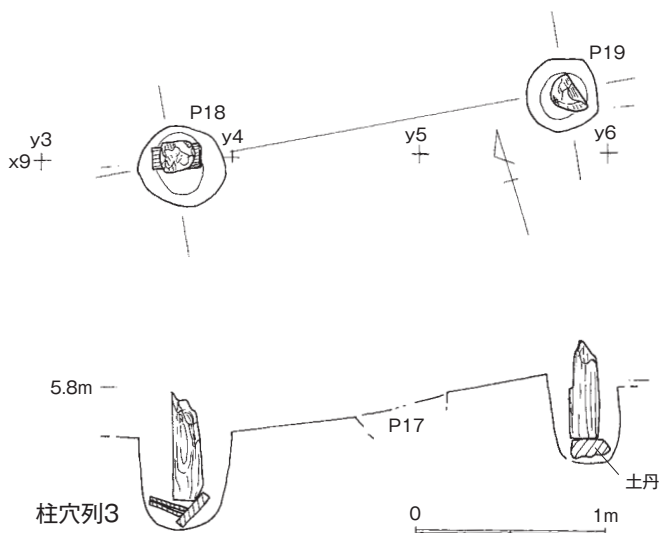
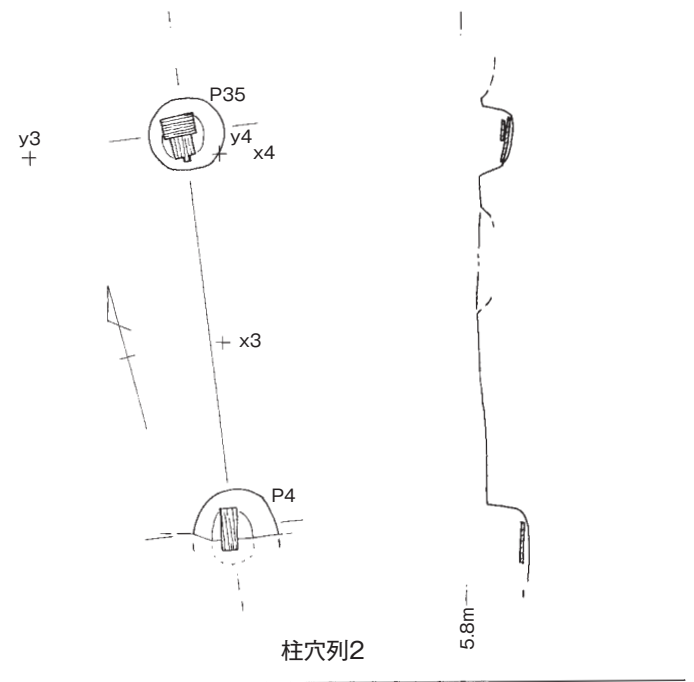


図44 6面柱穴列2・3

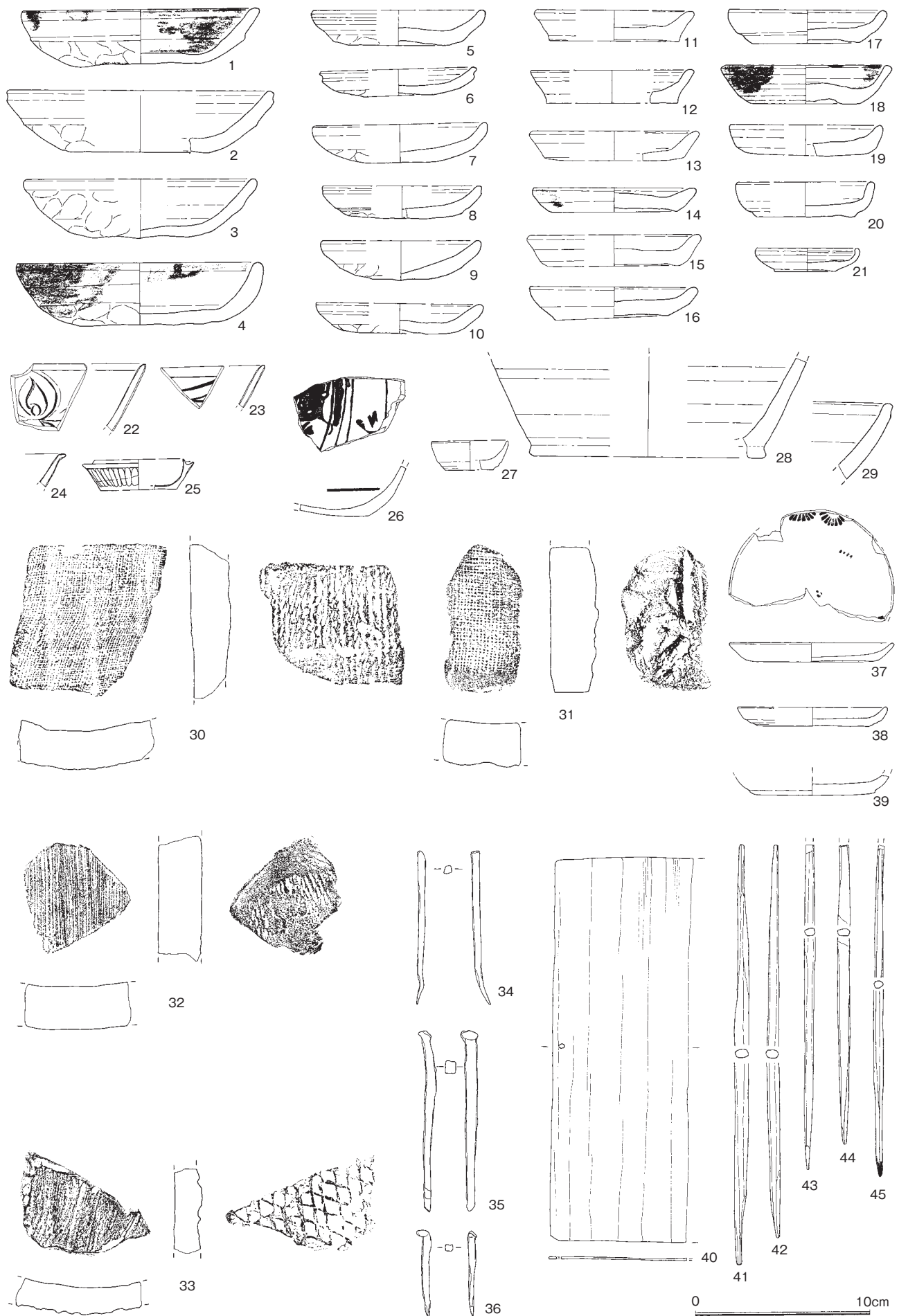


图45 6面出土遺物

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
45	1	6面	-	かわらけ	手づくね	13.7	-	2.3	淡橙色系
45	2	6面	-	かわらけ	手づくね	15.4	-	3.5	肌色系
45	3	6面	-	かわらけ	手づくね	(13.4)	-	3.4	淡橙色系
45	4	6面	-	かわらけ	手づくね	14.2	-	3.6	淡橙色系
45	5	6面	-	かわらけ	手づくね	(10.0)	-	2.0	肌色系
45	6	6面	-	かわらけ	手づくね	(9.0)	-	1.6	肌色系
45	7	6面	-	かわらけ	手づくね	(10.0)	-	2.2	肌色系
45	8	6面	-	かわらけ	手づくね	(9.2)	-	1.9	橙色系
45	9	6面	-	かわらけ	手づくね	(9.2)	-	2.3	橙色系
45	10	6面	-	かわらけ	手づくね	(9.6)	-	1.7	橙色系
45	11	6面	-	かわらけ	轆轤成形	(9.2)	(7.4)	1.8	淡橙色系
45	12	6面	-	かわらけ	轆轤成形	(9.4)	(7.6)	1.9	橙色系
45	13	6面	-	かわらけ	轆轤成形	(9.8)	(8.0)	1.7	橙色系
45	14	6面	-	かわらけ	轆轤成形	9.4	7.3	1.4	淡橙色系
45	15	6面	-	かわらけ	轆轤成形	(10.0)	(7.6)	1.8	肌色系
45	16	6面	-	かわらけ	轆轤成形	9.6	6.6	1.9	橙色系
45	17	6面	-	かわらけ	轆轤成形	9.1	6.3	2.0	橙色系
45	18	6面	-	かわらけ	轆轤成形	9.8	6.4	2.2	肌色系
45	19	6面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.8)	(7.2)	1.8	橙色系
45	20	6面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	5.6	2.0	肌色系
45	21	6面	-	内折れかわらけ	轆轤成形	6.0	3.5	1.4	淡橙色系
45	25	6面	-	青白磁	合子の身	(5.0)	(4.3)	1.8	-
45	27	6面	-	瀬戸	入れ子	(4.4)	(2.7)	1.7	-
45	28	6面	-	渥美	壺	-	(13.6)	-	-
45	30	6面	-	平瓦	縄目	[8.8]	[7.7]	-	-
45	31	6面	-	平瓦	格子叩き目	[8.4]	[4.4]	-	-
45	32	6面	-	平瓦	縄目	[7.1]	[6.0]	-	-
45	33	6面	-	平瓦	格子叩き目	[4.9]	[7.2]	-	-
45	34	6面	-	鉄製品	釘	8.9	0.5	0.5	-
45	35	6面	-	鉄製品	釘	10.4	0.6	0.7	-
45	36	6面	-	鉄製品	釘	5.0	0.4	0.4	-
45	37	6面	-	漆器	皿	9.4	6.8	1.1	-
45	38	6面	-	漆器	皿	(8.7)	(6.2)	1.1	-
45	39	6面	-	漆器	皿	-	7.2	-	-
45	40	6面	-	木製品	折敷	22.0	[7.9]	0.1	-
45	41	6面	-	木製品	箸	24.1	0.7	0.5	-
45	42	6面	-	木製品	箸	22.5	0.7	0.5	-
45	43	6面	-	木製品	箸	[18.6]	0.6	0.4	-
45	44	6面	-	木製品	箸	[17.2]	0.7	0.4	-
45	45	6面	-	木製品	箸	[19.0]	0.5	0.4	-

トレンチ1・出土遺物 (図44・46)

第6面は混入物のほとんどない黒褐色粘土であったが、地山ではなかったため、グリッド(x 10、y3)付近に東西60cm、南北30cmのトレンチを設定して下層を確認した。6面下1m、海拔4.7m前後まで掘り下げたが、明確な地山は検出されなかった。これ以上は安全確保のため掘り下げることはできなかった。以下、トレンチの土層は表の通りである。

番号	色調	土質	内容	粘性	締り
36	黒褐色	粘質土層	かわらけ片・0.5cm大の小土丹粒・炭化物(いずれも少)	つよい	よい
37	黒褐色	粘質土層	炭化物(とても多)・貝殻細片・木片	つよい	ややわるい
38	暗茶褐色	粘質土層	木片・貝殻片・炭化物(いずれも少)	つよい	よい
39	暗茶褐色	粘質土層	下層に木片(多)・土丹粒(少)	つよい	わるい
40	-	有機物堆積層	炭化物を帯状に含む	あり	わるい
41	黒褐色	粘質土層	灰色砂をブロック状に含む・木片・貝殻片	つよい	わるい
42	-	炭化物層	-	-	-
43	黒褐色	粘質土層	木片・かわらけ片	つよい	わるい
44	-	炭化物層	-	-	-
45	暗灰黒褐色	粘質土層	木片・土丹粒・土師片	つよい	わるい

図46はトレンチ1出土遺物である。寸法は表の通り。1・2は手づくねかわらけ。2の胎土は橙色を呈し精緻で、胎芯は黒灰色に残るが、硬く焼き締まっている。3～5は舶載磁器。3は白磁劃花文碗。釉調は灰白褐色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は灰白色を呈す。4は白磁端反碗。釉調は灰白褐色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は灰白色を呈す。5は青白磁小壺の印花文蓋。釉調は濃水青色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は白色を呈す。内面は露胎。6・7は平瓦。6の凸面には縄目が、6・7の凹面には布目が付く。8～21は木製品。8～19は箸。20は菜箸。先端が炭化している。21は板草履の芯。藁圧痕が残る。

【貝殻】ハマグリ1 ※2枚貝は片側を1とカウント。

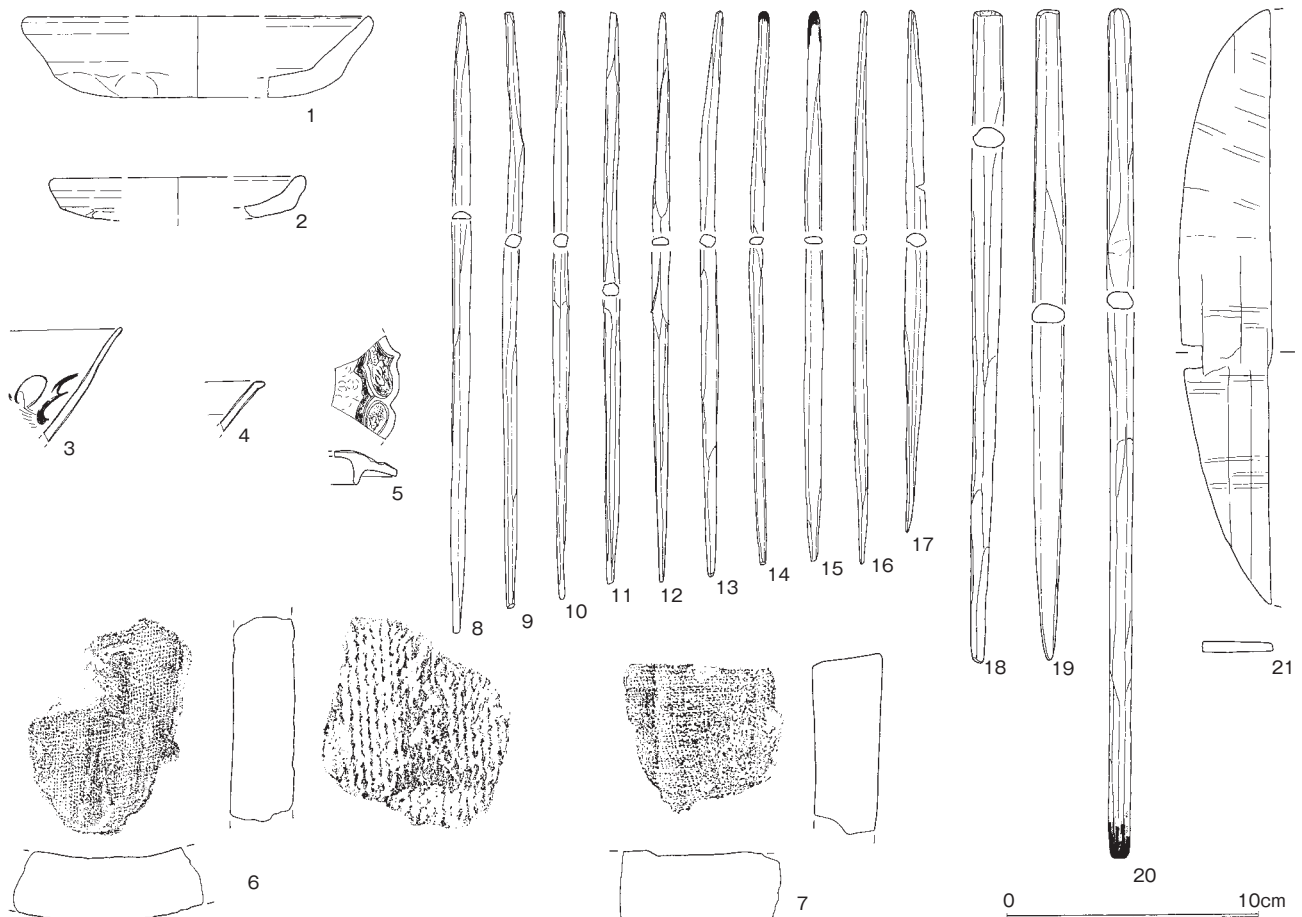


図46 トレンチ1出土遺物

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
46	1	-	トレンチ1	かわらけ	手づくね	(13.4)	-	3.4	橙色系
46	2	-	トレンチ1	かわらけ	手づくね	(10.2)	-	1.7	橙色系
46	6	-	トレンチ1	平瓦	縄目	[8.1]	[7.0]	-	-
46	7	-	トレンチ1	平瓦	-	[7.0]	[6.4]	-	-
46	8	-	トレンチ1	木製品	箸	24.6	0.8	0.3	-
46	9	-	トレンチ1	木製品	箸	23.3	0.6	0.5	-
46	10	-	トレンチ1	木製品	箸	23.3	0.6	0.5	-
46	11	-	トレンチ1	木製品	箸	22.7	0.7	0.5	-
46	12	-	トレンチ1	木製品	箸	22.6	0.7	0.3	-
46	13	-	トレンチ1	木製品	箸	22.4	0.6	0.5	-
46	14	-	トレンチ1	木製品	箸	21.9	0.5	0.3	-
46	15	-	トレンチ1	木製品	箸	21.8	0.7	0.3	-
46	16	-	トレンチ1	木製品	箸	21.9	0.5	0.4	-
46	17	-	トレンチ1	木製品	箸	20.9	0.8	0.6	-
46	18	-	トレンチ1	木製品	棒状製品	25.9	1.3	0.8	-
46	19	-	トレンチ1	木製品	棒状製品	25.8	1.3	0.8	-
46	20	-	トレンチ1	木製品	棒状製品	33.7	1.0	0.7	-
46	21	-	トレンチ1	木製品	板草履の芯	[23.6]	[2.8]	0.4	-

中世層出土の古代遺物 (図 47)

今回の調査からは中世層から須恵器の破片が数片出土している。1は坏身。2は坏蓋。3は広口壺の口縁部片。4～11は甕の胴部片。いずれも小破片のため詳細は不明である。

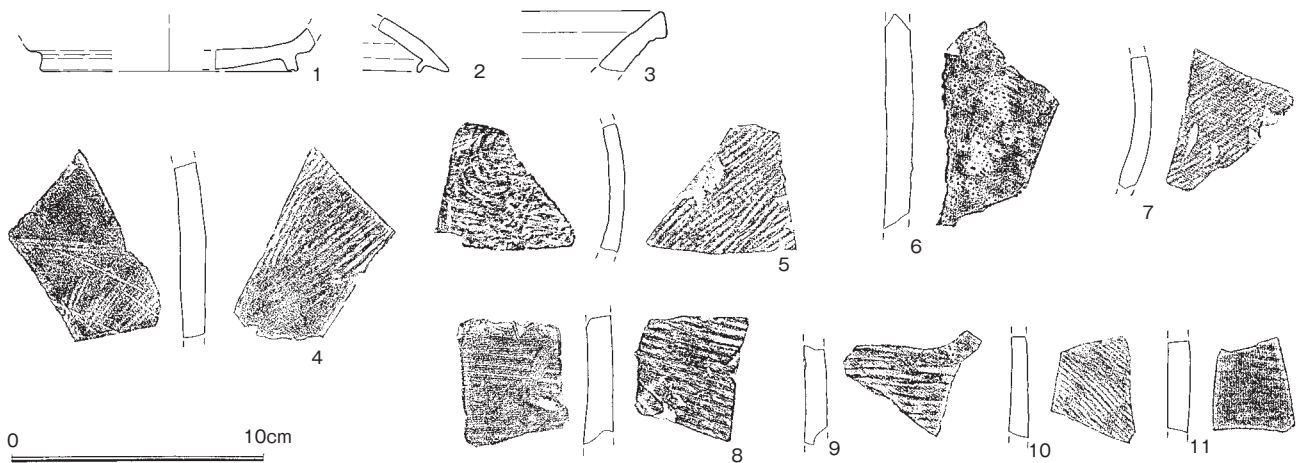


図 47 中世層出土の古代遺物

第四章 まとめ

今回の調査では第3章で詳細を報告したように、合計6面にわたる生活面が検出された。遺跡は重層的で、かなりの深さがあったため、下層に調査が進むに従って調査面積を狭めざるを得なかった。また、廃土の都合上、調査区を2分割して調査を行ったため、調査区中央部に空白ができてしまっている。しかし、検出された部分からはそれを補うほどの成果が得られたといえよう。

各面の時代区分は以下の通りである。

第6面（13世紀初頭～前半）

第5面（13世紀前半～中葉）

第4 b 面（13世紀後半～末葉）

第4面（14世紀初頭）

第3面（14世紀初頭～前半）

第2面・第1面（14世紀前半）

今回の現地発掘調査の直後に第1章に記述したように西隣りの敷地（御成町171番1外地点）で、規模の大きい発掘調査が実施されている。その調査結果を踏まえ、今回の調査を概観すると生活面の検出枚数に多少の差があるものの、中世期に関してはそれに沿った結果が得られたといえよう。ただ、比較すると、調査区がかなり狭かったため、柱穴群は確認されたものの、掘立柱建物等の1棟すべてを検出することはできなかった。

結論としては、当遺跡は西隣の遺跡で発見された「権力を有する御家人クラスの屋敷地か庇護の厚い寺院など」の敷地の一部に当ることは位置関係からみても確実である。検出遺構は板壁建物や掘立柱建物など、建物遺構が多く、土坑等のいわゆるゴミ穴は少ない。また、覆土から貝殻が多く出土しているが、これは地業材として使用している可能性がある。当遺跡地が屋敷内でのどのような性格を持った地区なのかははっきりとはしないが、母屋等の屋敷内の中心施設ではない付属施設的な性格の建物が建っていた場所のようである。

また、古代については西隣の調査地点で7世紀～9世紀の遺構群が検出されているが、当調査区においては中世層からの須恵器の破片の出土に留まっている。安全確保のため地山まで調査することは今回断念せざるを得なかったが、さらに下層に古代遺跡が当然ながら存在しているであろう。

今回の調査では本来ならば断片的な成果となるどころ、再三引き合いに出しているように、タイミング良く隣地で大規模な調査が実施され重要な遺跡が発見されたため、当地点の成果もそれに伴ってその性格についてある程度の限定ができた。

調査地点が含まれるこの谷戸は近年、やや大規模な調査が続いている。それらの成果から、谷戸全体として入り口付近に「有力御家人の屋敷」（安達一族の屋敷の可能性が高いと指摘されている。）、谷戸奥には「寺院施設」（本堂等は発見されていないが、安達氏庇護の寺院「無量寺」関連と推定される。）が配置されていた様相が徐々に解明されてきている。今回の調査も、その一端を担ったものとなった。

《参考文献》

『今小路西遺跡（No.201）発掘調査報告書（御成町171番1外地点）』2008年3月 株式会社齊藤建設



▲A. I区1面全景(東より)



▲B. II区1面全景(北より)



▲A. I区1面据甕1出土状況(北より)



▲B. I区1面据甕1内土層断面



▲A. 据甕1三鱗叩き文



▲B. 据甕1完掘(北より)



▲A. I区2面全景(南より)



▲B. II区2面全景(北より)



▲A. I区3面全景(南より)



▲B. II区3面全景(北より)



◀ A. I区3面建物1 東部 (西より)

B. II区3面掘立柱建物1 (北より) ▶

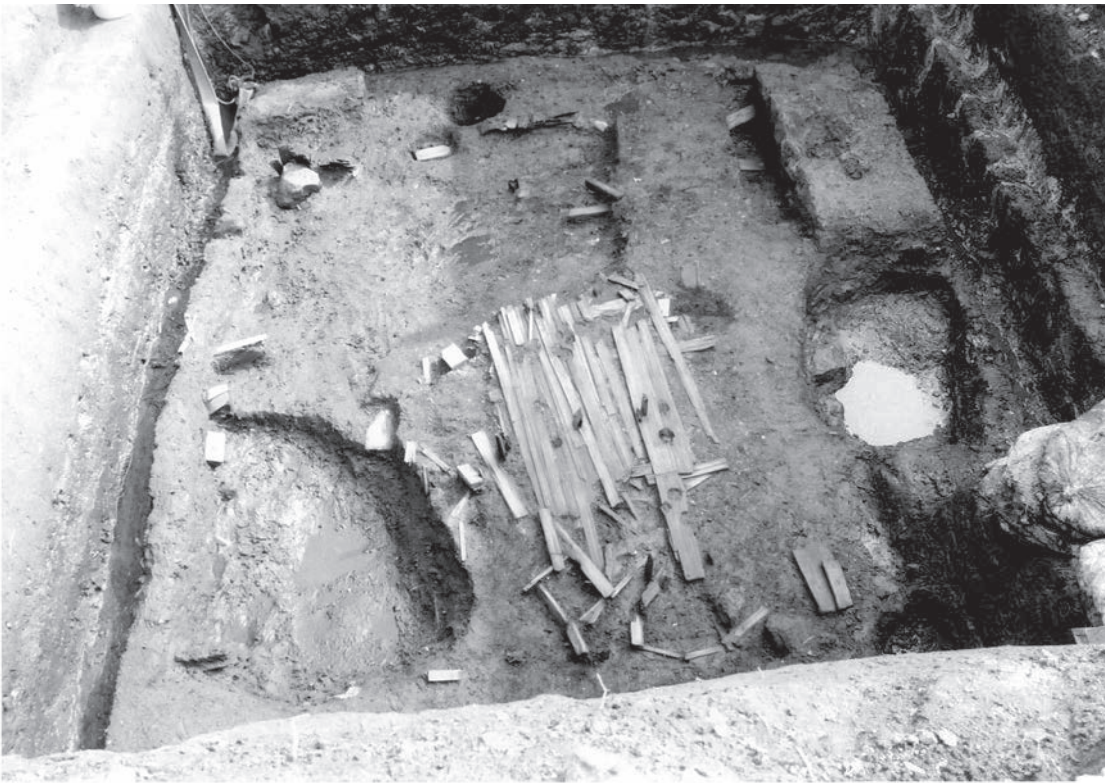




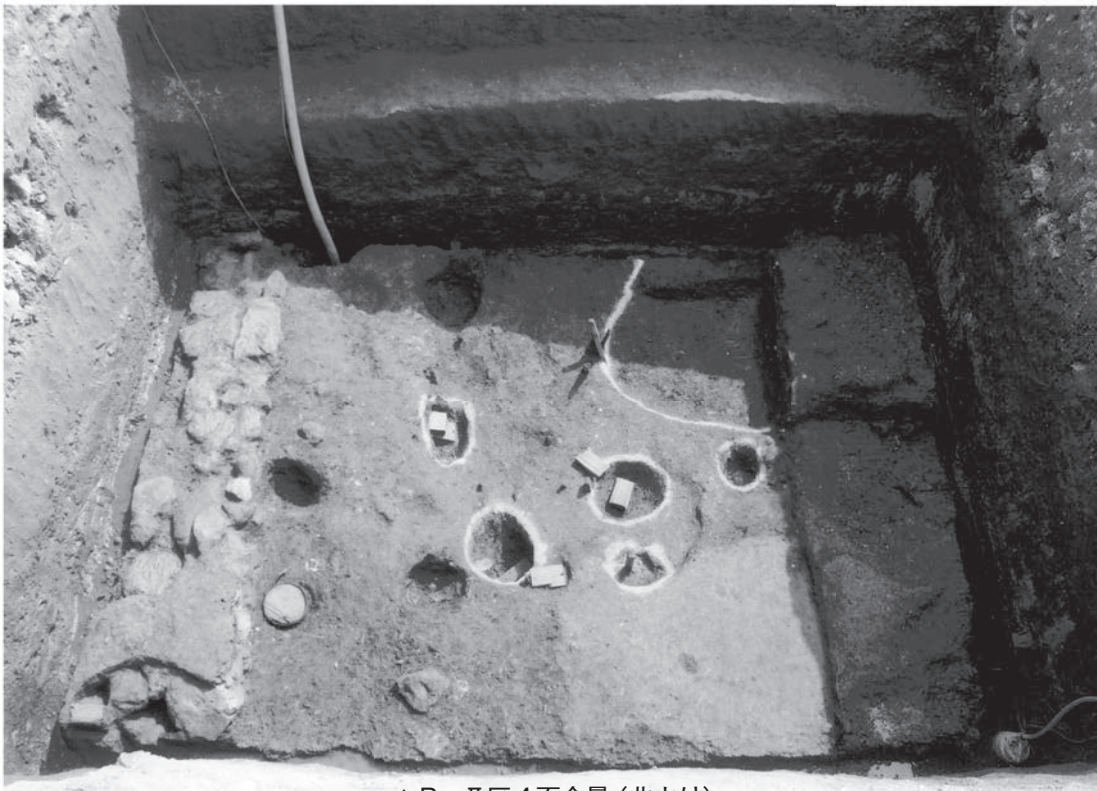
▲ A. II区3面土坑7人形出土状况



▲ B. I区4面漆器出土状况



▲A. I区4面全景(北より)



▲B. II区4面全景(北より)



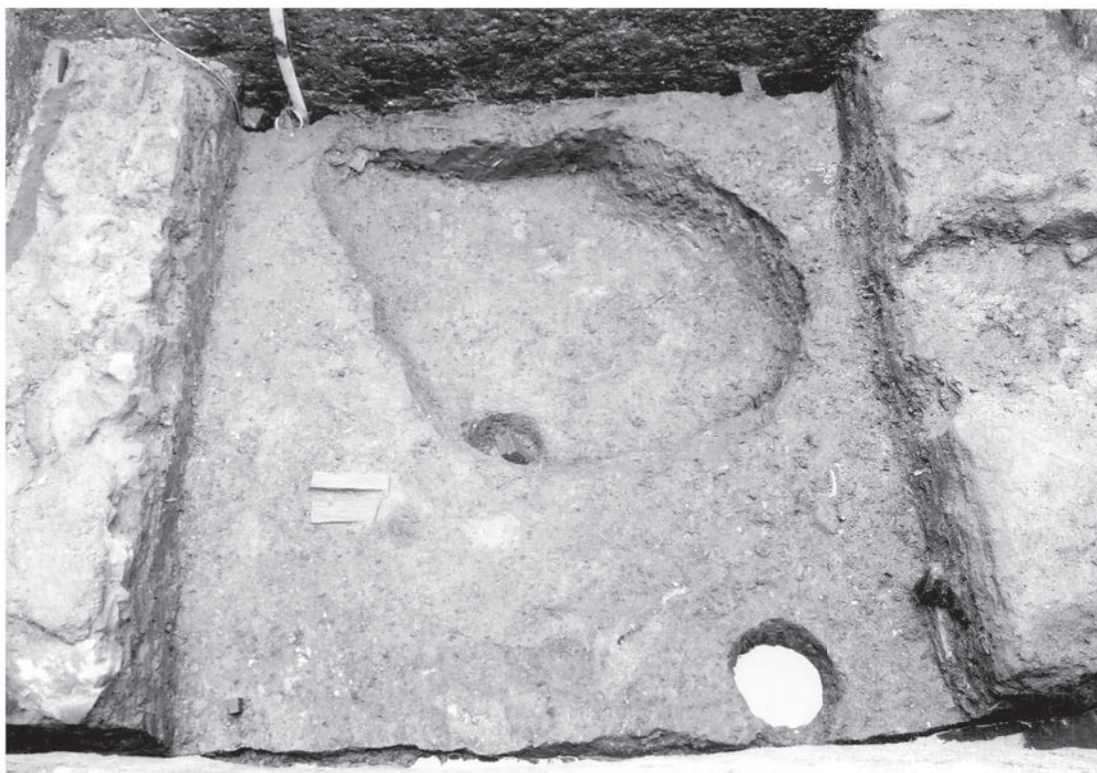
▲A. I区4面床状遺構(北より)



▲B. II区4b面全景(北より)



▲A. I区5面全景(北より)



▲B. II区5面全景(北より)



▲ A. II区5面舟形出土状况



▲ B. I区5面宝塔出土状况



▲A. I区6面全景(北より)



▲B. II区6面全景(北より)



▲A. II区6面Pit19 (東より)



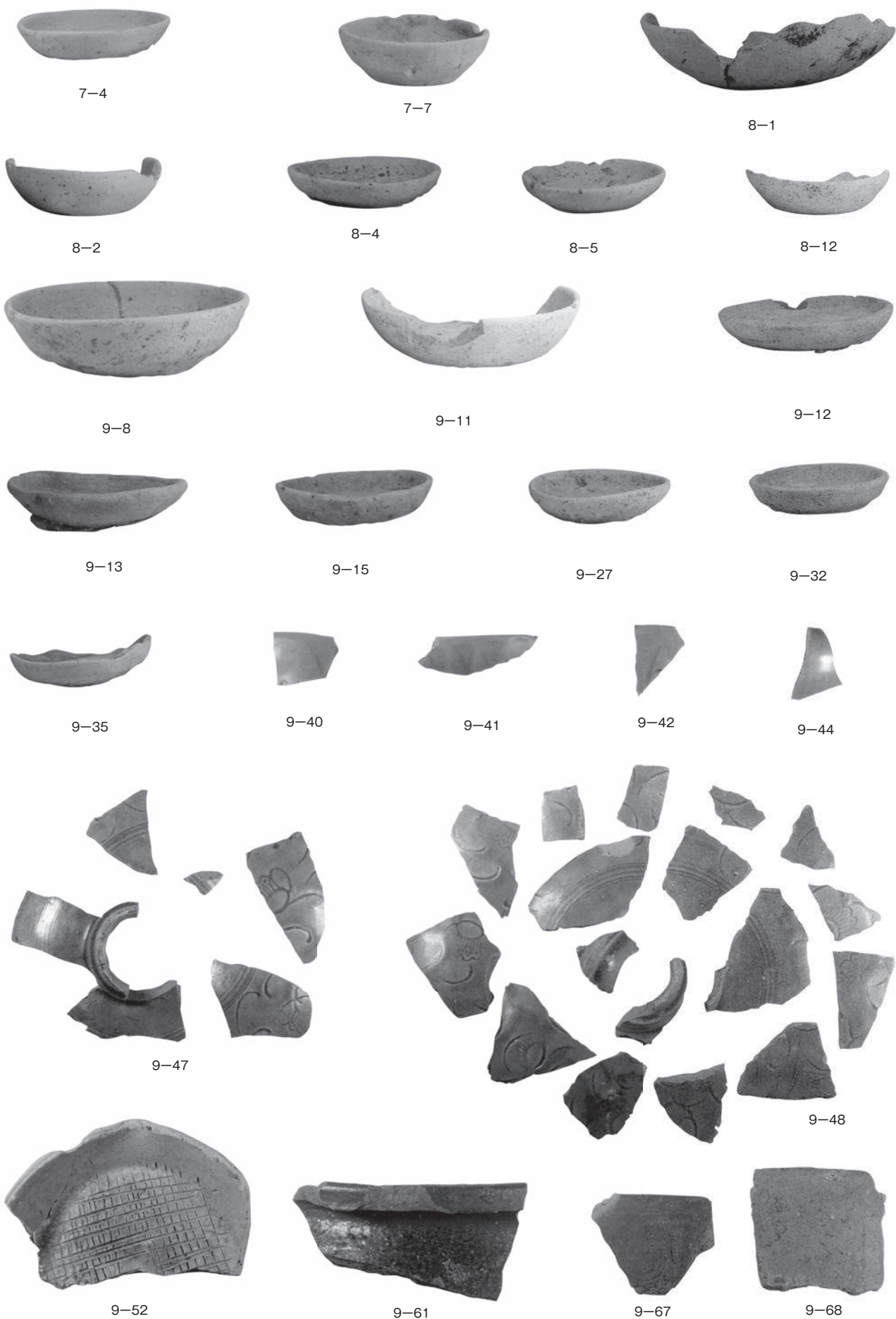
▲B. トレンチ1 (北壁)



▲A. I区東壁土層断面



▲B. II区東壁土層断面



出土遺物(1)

图版 16



10-1



10-3



10-18



13-1



13-2



13-4



15-3



15-9



15-15



15-21



15-23



15-24



15-25



15-26



15-36



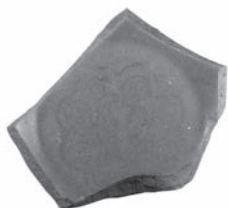
15-41



15-45



15-57



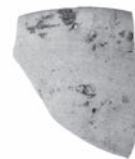
15-58



15-59



15-62



15-64



15-71

出土遺物(2)



17-15



20-7



20-8



20-16



20-19



20-20



20-21



20-24



20-60



21-4



21-8



21-7



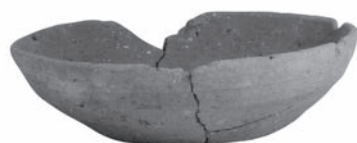
21-9



23-24



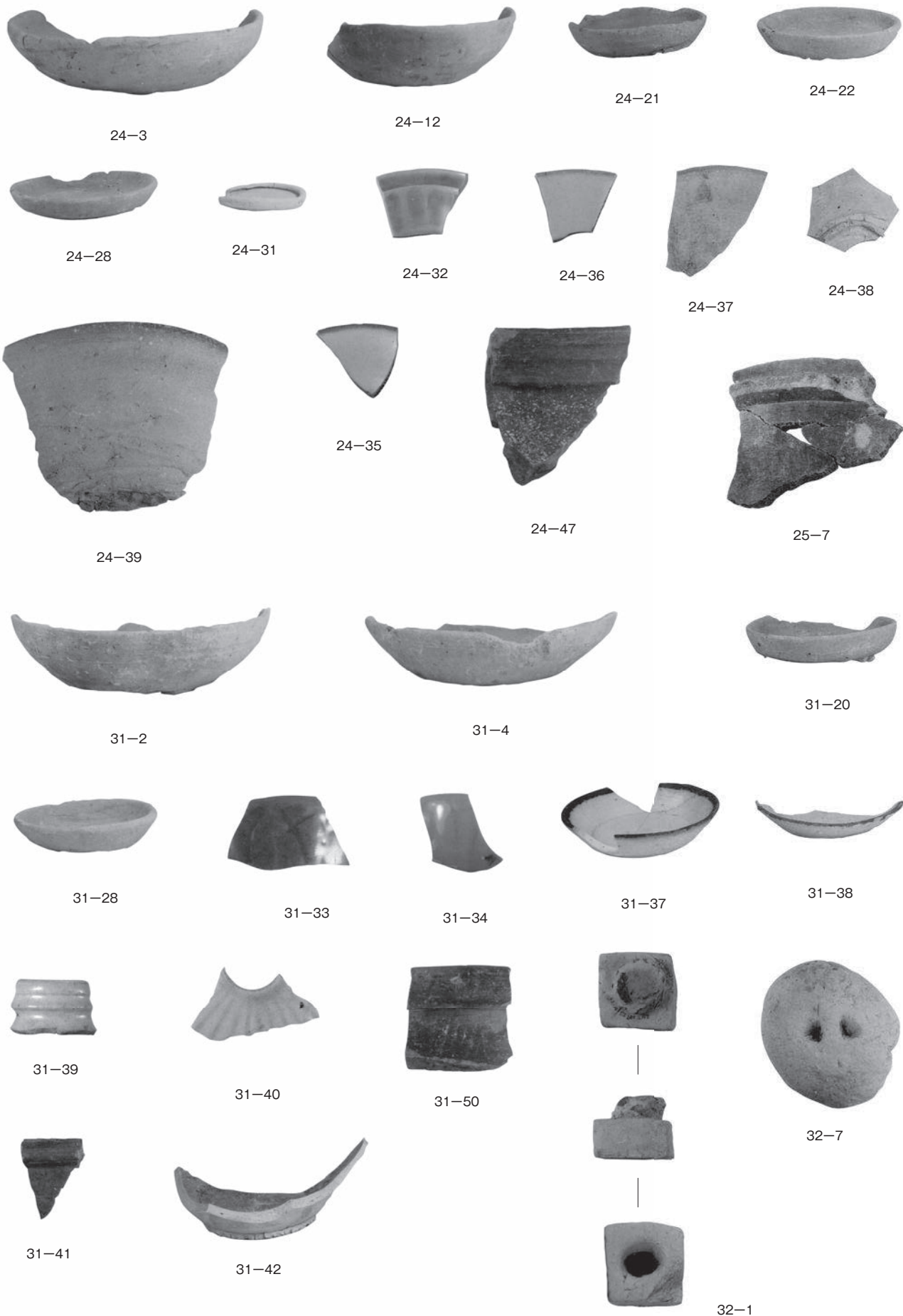
23-36



23-28

出土遺物(3)

图版 18



出土遺物(4)



37-2



37-6



37-10



37-12



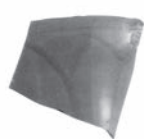
41-1



41-2



41-6



41-11



41-12



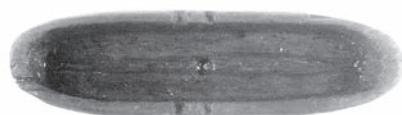
41-13



41-15



41-16



42-8



45-5



45-16



45-1



45-8



45-17



45-4



45-10



45-21



45-22



45-25



45-26



46-3



46-5

出土遺物 (5)

円覚寺旧境内遺跡 (No.434)

山之内字瑞鹿山 398 番地点

例 言

1. 本報は、鎌倉市山ノ内字瑞鹿山398番における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は2007年2月6日から3月30日、調査対象面積は40.25㎡である。出土遺物、図面・写真等、調査に係る資料は鎌倉市教育委員会が保管している。
3. 調査団の編成は以下のとおりである。
調査の主体 鎌倉市教育委員会
調査担当 森孝子
現地調査参加者 鍛冶谷勝二・松原康子・鈴木弘太・三浦宏予・佐藤あおい
資料整理参加者 梶岡ケイト・岡田慶子・本城裕・渡辺美佐子・赤堀祐鮫
4. 本報の遺構・遺物の縮尺は次の通りである。
遺構図 1/50・1/40・1/30
遺物実測図 1/3・1/1(銭)
5. 本報の作成は以下の分担で行なった。
遺構図版 森・赤堀
遺物図版 梶岡・岡田・渡辺・赤堀
観察表作成 渡辺・赤堀
写真撮影 遺構：森 遺物：赤堀
原稿執筆 第1章：森 第2章～第5章：赤堀
編集 赤堀
6. 本報の作成にあたって、原廣志氏・田畑衣理氏には格別のご指導・ご協力を賜りました。御礼申し上げます。ご指導を十分に活かしきれなかった部分は報告者の力不足である。お詫び申し上げます。また、現地調査・資料整理において以下の方々からご助言・ご協力を賜った。お名前を記して感謝致します。(順不同・敬称略)
菊川英政・汐見一夫・馬淵和雄・伊丹まどか・押木弘巳・沖本道・平井里永子

目次

本文目次

第一章 本調査地点の位置と歴史的環境	205
第1節 本調査地の立地	
第2節 歴史概観	
第3節 遺跡地の歴史的環境(図2)	
第4節 本調査地点周辺の遺跡(図1、表1)	
第二章 調査の概要	212
第1節 調査の経過	
第2節 グリッド設定・国土座標との合成(図3)	
第3節 調査地の堆積土層(図4)	
第三章 発見された遺構	217
第1節 中世第1面(図5)	
第2節 中世第2面(図9)	
第3節 中世第3面(図14)	
第4節 中世以前(図18)	
第四章 発見された遺物	240
第1節 表土・攪乱・表採出土遺物(図20)	
第2節 中世の出土遺物(図21～29)	
第3節 古代以前の遺物(図31)	
第五章 まとめ	266
第1節 古代	
第2節 中世	
第3節 II群かわらけについて	

挿図目次

図1 周辺の遺跡	206	図13 かわらけ溜まり	230
図2 円覚寺境内絵図	209	図14 3面遺構配置図	231
図3 グリッド設定図	213	図15 井戸1	232
図4 調査地の堆積土層	215	図16 溝1	233
図5 1面遺構配置図	217	図17 溝4	235
図6 土坑1、落ち込み3	218	図18 中世以前遺構配置図	237
図7 溝2・3、落ち込み4	219	図19 落ち込み1・2	239
図8 建物1～3	221	図20 表土・攪乱・表採出土遺物	241
図9 2面遺構配置図	223	図21 1面上包含層、1面遺構出土遺物	243
図10 落ち込み5	224	図22 2面遺構出土遺物	245
図11 建物4	226	図23 2面構成土出土遺物(1)	246
図12 柱穴列1・2	227	図24 2面構成土出土遺物(2)	247

図25 井戸1出土遺物	249	図30 3面構成出土遺物	255
図26 溝1出土遺物(1)	251	図31 古代以前の遺物	255
図27 溝1出土遺物(2)	252	図32 II群かわらけ出土地点	267
図28 溝1出土遺物(3)	253	図33 II群かわらけ	269
図29 溝1出土遺物(4)	254		

表 目 次

表1 周辺の遺跡	207	表7 3面小穴表	234
表2 1面柱穴表	222	表8 中世以前柱穴表	236
表3 1面礎板、礎石表	222	表9 中世以前小穴表	236
表4 2面柱穴表	228	表10 遺物観察表	256
表5 2小穴表	229	表11 中世遺物集計表	271
表6 3面柱穴表	234	表12 溝1上層・木器溜まり出土遺物	272

図 版 目 次

図版1	273	図版5	277
A II区1面(南から)		A I区落ち込み1・2(南から)	
B 落ち込み4、溝2(東から)		B II区落ち込み1(北から)	
C 落ち込み4、溝3(東から)		C II区最終トレンチ(南から)	
図版2	274	図版6	278
A II区2面(東から)		A I区東壁土層(西から)	
B 柱穴列2(北から)		B I区北壁土層(南から)	
C 柱穴列2・P31(北から)		C II区東壁土層(西から)	
図版3	275	D II区南壁土層(北から)	
A かわらけ溜まり(西から)		図版7 出土遺物(1)	279
B II区3面(北から)		図版8 出土遺物(2)	280
C 井戸1(東から)		図版9 出土遺物(3)	281
図版4	276	図版10 出土遺物(4)	282
A 木器溜まり(南から)		図版11 出土遺物(5)	283
B 木器溜まり・溝1(北から)		図版12 出土遺物(6)	284
C I区溝1(南から)			
D II区溝1(北から)			

第一章 本調査地点の位置と歴史的環境

第1節 本調査地の立地

本調査地点は鎌倉市山之内字瑞鹿山398番地に所在する。JR北鎌倉駅西側を通る主要地方道横浜・鎌倉線を鎌倉方面に200mほど進んだ道路沿いに位置し、JR横須賀線を挟んだ対面が鎌倉五山第2位の「瑞鹿山円覚興聖禅寺」となる。また、道路を挟んだ向かい側が東慶寺山門にあたる地点である。

本遺跡地が存在する鎌倉市の地形は大きく3つに分かれ、滑川、柏尾川沿いの沖積地、市内の大部分を占める山地、大船北部の関谷方面に広がる関東ロームなどの洪積層によって作られている洪積台地である。山稜基盤は新世代、第3紀、新第3紀に形成されたもので、建長寺あたりが三浦層群逗子シルト岩層、それ以西からは上総層群となり北鎌倉駅西側の素掘りトンネル付近までが深沢凝灰質粗粒砂岩層、その西側からは野島凝灰質砂岩シルト岩層となる。本遺跡地の地形は市内の大部分を占めるといわれる山地であり、地域内には瑞鹿山、巨福山、金宝山等の標高90～120mの小山が座する。その山々が複雑に入り込んでの大小の谷戸（明月谷、西瓜ヶ谷、東瓜ヶ谷等）を形成し、丘陵頂部から湧出した小河川（明月川、瓜谷川、山之内川）が地形に沿って低地に流れ込み山ノ内の中央部を貫通する小袋谷川に合流する。その流れは鎌倉市北西部を流れる柏尾川へと続く。

本調査地点が所在する山ノ内は現在の鎌倉市の中央部やや北東寄りに位置し、東側は雪ノ下、西御門、南側は扇ガ谷、西側は山崎、台、北側は大船、今泉と7地域と行政の境界を接する。奈良時代には相模国鎌倉郡尺度郷といわれた一角に所在する。尺度郷の初見は「正倉院文書」天平7年の相模国封戸租交易帳である。また、1985年、鎌倉市「今小路西遺跡（御成小学校内）」から天平5年銘の木簡が出土しており鎌倉に関する最古の文書であるといわれている。山内荘は首藤資清の曾孫俊道が開発者であるといわれ、頼朝時代は八条院の本所となるが、実際は頼朝が本所、首藤氏が下司とはり実権を握っていたといわれている。範囲は現在の山ノ内、大船付近から横浜市戸塚区、栄区の一部、及び藤沢市俣野の広範囲に亘った地域であったと想定されている。

第2節 歴史概観

源氏姓は皇族賜姓の1つである。嵯峨天皇が信以下の皇子女に源姓を与えて臣籍に下したのが初例であり、以後、皇室経済困窮の打開と皇族の藩屏構築をめざして仁明、文徳、清和、陽成、光孝、宇多、醍醐、村上、花山、三条の各天皇の皇子女に源氏姓が与えられ、夫々の始祖の天皇の名前を冠した源氏諸流が誕生する。一部大臣を輩出し権勢を誇った流派もあったが、大多数は下級官人、或いは途絶する。そのなかで武士化して発展していった、その最大勢力が清和源氏で平安中、後期に勢力範囲を全国に拡大していった。その流れを汲む源頼信が甲斐守在任中の長元4年（1031年）、子・頼義と共に平忠常の乱を鎮圧し、その名声により東国の源氏勢力拡大の契機をつくったといわれている。また、頼義は相模国司歴任時に東国武士の組織化を進め東国に地盤を築いてゆく。伊豆を根拠地としていた上総介平直方はこれを見込んで頼義を婿とし、頼義は直方の領地である鎌倉の地で義家を授かり以後、鎌倉が源家相伝の地となったと伝えられる。頼義が康平6年（1063）8月、由比郷に岩清水八幡宮を勧請したのもこのような背景があったからであろうと推測されている。頼義、子・義家は奥州前9年、後3年の役と2つの戦いを遂行し、「天下第1武勇の家」の名声を得て中央政界の武力権門の代表者とされるようになるが、保元、平治の乱後、一時中央舞台から姿を消す。義家から数えて4代後の源頼朝が鎌倉に武士政権である鎌倉幕府を開き、武士による政権都市を築いた。鎌倉幕府は鎌倉九代の将軍の居所で、大倉御所、宇



図 1 周辺の遺跡

表1 周辺の遺跡

	遺跡名	調査地点	報告書(調査報告収録文献)
1	円覚寺統燈庵	山ノ内字端鹿山 431 番	1990「円覚寺統燈庵」統燈庵境内遺跡発掘調査団
2	円覚寺如意庵	山ノ内字端鹿山 425 番	1990「如意庵 円覚寺境内如意庵遺跡発掘調査報告書」 円覚寺如意庵遺跡発掘調査団
3	円覚寺境内(明香池)	山ノ内字端鹿山 438 番	1983「円覚寺境内(明香池)」鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ 昭和 46年度～52年度 鎌倉市教育委員会
4	円覚寺旧境内遺跡(No.434)	山ノ内字端鹿山 509 番 1	1998『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 14 平成 9 年度発掘調査報告』 鎌倉市教育委員会
5		山ノ内字端鹿山 393 番 3	2007『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 23 平成 18 年度発掘調査報告』 鎌倉市教育委員会
6		山ノ内字端鹿山 393 番	2010『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 26 平成 21 年度発掘調査報告』 鎌倉市教育委員会
7		山ノ内字西管領屋敷 377 番 1	2010『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 26 平成 21 年度発掘調査報告』 鎌倉市教育委員会
8	円覚寺門前遺跡(No.287)	山ノ内字松岡 1344 番 2005	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 21 平成 16 年度発掘調査報告』 鎌倉市教育委員会
9		山ノ内字松岡 1337 番 1・6	2008『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 24 平成 19 年度発掘調査報告』 鎌倉市教育委員会
10		山ノ内字松岡 1377 番 6	2007『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 23 平成 18 年度発掘調査報告』 鎌倉市教育委員会
11		山ノ内藤源治 951 番 2	1998『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 14 平成 9 年度発掘調査報告』 鎌倉市教育委員会
12		山ノ内東瓜ヶ谷 1229 番 1・5	2000『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 16 平成 11 年度発掘調査報告』 鎌倉市教育委員会
13		山ノ内字藤源治 947 番 8	2010『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 26 平成 21 年度発掘調査報告』 鎌倉市教育委員会
14	円覚寺門前馬道土塁地点		2001～2002年調査・未報告
15	西瓜ヶ谷遺跡(No.213)	山ノ内東瓜ヶ谷 1294 番 4・5	2006『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 22 平成 17 年度発掘調査報告』 鎌倉市教育委員会
16		山ノ内藤源治 930 番 5 他	2002年調査・未報告
17		山ノ内藤源治 928 番 1 他	1991年調査・未報告
18	台山藤源治遺跡(No.29) (第1次調査)	台字藤源治 914 番	1985「台山藤源治遺跡」台山藤源治遺跡発掘調査団
19	台山藤源治遺跡 (第3次調査)		1993「台山藤源治遺跡」台山藤源治遺跡発掘調査団
20	台山藤源治遺跡 (第2次調査)		1996「台山藤源治遺跡」台山藤源治遺跡発掘調査団
21	台山遺跡		2002「台山遺跡発掘調査報告書」 有限会社(現株式) 博通
△	過去に調査が行われているやぐらが所在する地点		

津宮辻子御所、若宮大路御所と3箇所に移居しながら140年余り存続した。

鎌倉幕府が滅び南北朝、室町時代には関東を制御するため鎌倉府がおかれた。公方足利基氏は補佐として管領職をおいたが、その管領職の屋敷が本遺跡地内にあったといわれている。現在も本調査地点内に管領屋敷の地名が残る。また、他に扇ガ谷、犬懸ヶ谷、宅間ヶ谷の3箇所にも管領屋敷があったと推測されている。また、五山制度により大寺院は幕府から庇護され衰退の様相はない。また、戦国時代に突入し、鎌倉は小田原北条氏の支配になる。北条長氏は玉縄に永正9年(1512)、相模国東部一帯の押さえとして玉縄城を築城した。玉縄城は現在の山ノ内地域から北西方向3000mに位置する。北条氏支配下、氏綱は永正17年(1520)、氏康は天文16年(1547)と2回の検地を実施し、禄高制による年貢、さらに棟別銭を課している。また、氏政が天正2年(1574)の検地で棟別銭の外、段銭も課したとある。北条氏は天文元～9年(1532～40)、鶴岡八幡宮再建を実施し、各地域から多数の職人を呼び寄せてこれに

当たらせたといわれる。小田原衆所領役帳永禄2年(1559)によれば相当数の職人の所領が書かれており、職人が定着し、鎌倉の様相が一変した一因になると推測されている。また、戦国期には鎌倉郡に代わって小坂郡との名称となる。天正18年(1580)、小田原北条氏の旧領を与えられた徳川家康は翌年、北条氏を踏襲した検地を実施し、禄高制、棟別銭、段銭を課した。また、建長寺、円覚寺、浄智寺、東慶寺、光照寺の5寺に領地を寄付したが、寺社領も検地の対象となっていたため税を徴収されている。

江戸幕府は鶴岡八幡宮、光明寺、英勝寺には保護を与えたが、ほかの寺社は顧みられず衰退の一途を辿ってゆく。一方、江戸時代のはやりとして、古都の寺社参詣、名所遊覧が盛んになり鎌倉もその対象とはなっていたものの、その当時の鎌倉は辺鄙な農村という風情であったといわれている。戦国期に引き続き家康の時代も鎌倉は「小坂郡鎌倉の内」といわれ、鎌倉時代には四境の外であった極楽寺と山ノ内もその範囲内になっている。それ以外は東郡と呼ばれていた。家光の慶安の頃より鎌倉郡の名前が復活し、小坂郡の名前が消える。

幕末頃、外国船の接近が多くなり三浦半島沿岸の警備強化対策が行われ、この海防策のために鎌倉地域は文化7年～文政3年(1810～1820)は会津藩、文政3年～弘化4年(1820～1847)は川越藩、文政3年～嘉永6年(1847～1853)は川越藩・彦根藩、嘉永6年～安政5年(1853～1858)萩藩の預地となり外国船到来の際の人夫、人足等に徴発された。文久3年(1863)、佐倉候堀田鴻之丞、慶応3年(1867)、代官江川太郎左衛門、明治元年、韮山県に属し、「同年12月本年本県の所轄となる、建長寺、円覚寺、浄智寺、東慶寺、光照寺の領地は、「明治4年にいたりて上知し本県に属せり」とある。

第3節 遺跡地の歴史的環境 (図2)

本遺跡地が所在する山ノ内には古跡、旧跡、寺院等が多く存在する。奥州後3年の役の際の義家の従者に藤原資道という名前がある。資道は山内首藤7代目で、その孫の俊道が義朝の家人として山之内荘に家居したといわれている。現在の長寿寺南方の白黒小路あたりに比定される。白黒小路とは首藤家の徽号とされる白一文字、黒一文字から由来されたといわれている。義朝は現在の寿福寺に邸宅を構えていたといわれており首藤家とは至近距離にある。また、現在、明月院の南西方向の地域に管領屋敷という地名が残る。『相模国鎌倉郡村誌』には「管領屋敷は明月院の馬場先東隣の畠なり」とあり、正平18年(貞治2年、1363年)上杉憲顕が足利基氏の執事(関東管領)となり、家居した場所がこの地域であると想定される。また、管領屋敷向かいの谷戸は尾藤が谷といわれ、北条泰時の家令の尾藤影綱の屋敷があったといわれている。また、「亀ガ谷の傍らに足利尊氏の屋敷跡があった」とある。現在、亀が谷坂の入口に長寿寺という寺があり、長寿寺は現在建長寺の塔頭となっているが開創年暦は不明である。延文の頃、足利基氏が父尊氏追福のためにこれを修営したこと、長寿寺境内の岩窟祠内には尊氏の遺髪を祀った五輪塔があること、尊氏を「長寿寺殿妙義仁山大居士」というなど、長寿寺とは非常に関係が深いことから推定して屋敷址はおそらくこの近辺であったと想定されている。

本調査地点西側を走る主要地方道横浜・鎌倉線は鎌倉街道といわれ、また、山ノ内を通るあたりを特に山ノ内道と呼ぶ。山ノ内道は山ノ内から巨福呂坂を通過して鎌倉八幡宮前に至る道で、鎌倉への防御として北条氏関連のもので固められる。巨福呂坂の道は仁治元年(1240)、10月、北条泰時が被官の安東藤内左衛尉を奉行として山ノ内道をつくらせたとあり、それ以前の道は亀が谷坂を越えて武蔵大路に合流している。山ノ内荘は健保1年(1213)の和田義盛の乱の行賞として義時に与えられ、以後北条氏との関係が密接となり、泰時邸、時頼邸、時宗邸があり、また、北条氏関係の大寺院も建立される。

鎌倉八幡宮より巨福呂坂を越え、山ノ内道を300m北方向に進むと北側に臨濟宗建長寺派総本山巨福

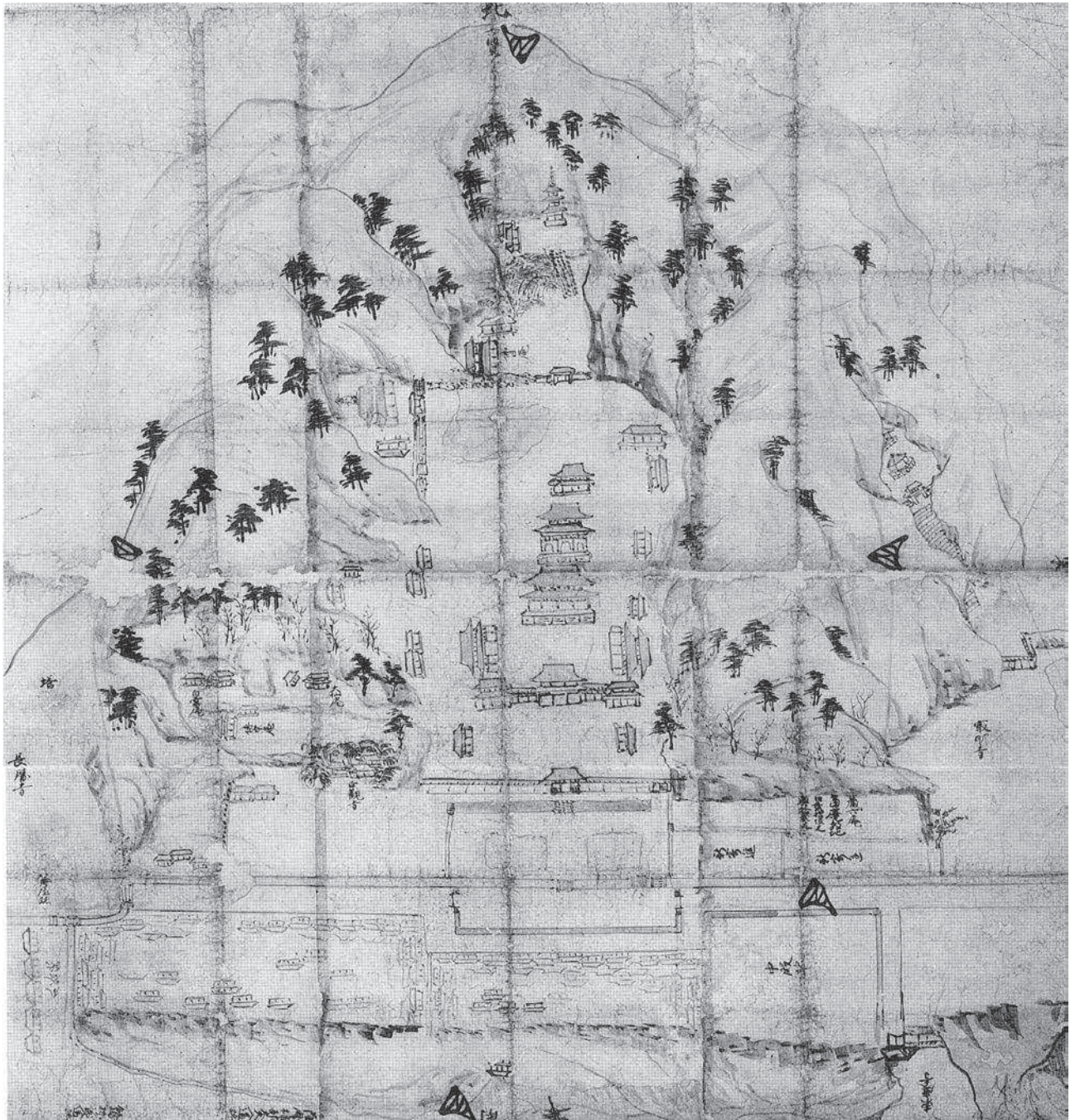


図2 円覚寺境内絵図

山建長興国禅寺がある。この地は地獄谷といわれ、当寺は建長5年(1253)北条時頼が蘭溪道隆を開山として創建したものである。創建以前は心平寺が在ったといわれている。延慶元年(1308)12月太政官符宣降し勅願寺とし、至徳3年(1386)関東五山の位次が定められ五山の第1位となる。往時は塔頭49個院あったといわれるが、数回に及ぶ大火を受け、現在は外門、山門(県指定文化財)、仏殿(国指定重要文化財)、法堂(県指定文化財)、唐門(国指定重要文化財)、方丈、宝蔵、鐘楼などからなる。

建長寺より北西700mの明月谷には明月院がある。臨済宗建長寺派である。この地は北条時頼が私邸の傍らに建立した最明寺の旧址であるともいわれている。また、文永5、6年(1268、69)頃、北条時宗が蘭溪道隆を開山とし創建した福源山禅興寺があったとされる。明月院はその塔頭であるといわれる。

明月院の北西方向300mに臨済宗円覚寺派総本山瑞鹿山円覚興聖禅寺がある。弘安5年(1282)、北

条時宗が仏光禪師（無学祖元）を開山として創建した。延慶元年（1308）12月太政官符宣降し勅願の道場とし、至徳3年（1386）関東五山の位次が定められ五山の第2位となる。応安7年（1374）11月23日火災を受け伽藍が全焼し、義堂周信、此山妙在、関東公方足利満氏、鎌倉府管轄下諸国の棟別銭等で永和4年（1378）仏殿が完成した。足利義満の書いた梁牌銘が伝わる。現在は総門、山門、仏殿、方丈、庫裏、書院、選仏場、鐘楼などからなる。

また、山ノ内道南側の金宝山内に臨済宗円覚寺派金峰山浄智寺がある。弘安4年（1281）、北条宗政没後、菩提を弔うために夫人、子師時が創建した。開山元庵普寧、請待開山大休正念、準開山南州宏海である。正安元年（1299）、北条貞時が五山に列し、至徳3年（1386）関東五山の位次が定められ、五山の第4位となる。明治以降、円覚寺境外塔頭の要素を持つ。往時の塔頭等は江戸末期にはすべて廃絶し、現在境内には総門、山門、仏殿、庫裏、鐘楼などが建ち、また、鎌倉十井の「甘露ノ井」がある。

浄智寺より北方300m松岡に「縁切り寺」で知られている円覚寺派東慶寺がある。円覚寺の対面に建つ。「松岡山東慶総持禅寺」と号し、創立年暦は不詳であるが、頼朝時代、その叔母が起居していたとの伝承がある。弘安8年（1283）、北条時宗の死去後、時宗夫人が潮音院覚山尼と称して開山、子の貞時が開基と伝える。その後、後醍醐天皇の皇女が尼となり用堂尼と称して当寺に住み以来、松岡御所と称せられたという。また、江戸時代、徳川家康が豊臣秀頼遺子を当寺に置き尼僧（20世 天秀法泰尼）として住持させ、以後、住持は黄連川家から迎えられたが22世玉淵法盤尼後、無住となり、塔頭の1つである蔭涼軒主が代行して住職している。寛永11年（1634）、天樹院（徳川秀忠娘、豊臣秀頼室）を檀那とし仏殿が建立された。現在は横浜市三溪園に移築されている。「縁切寺」「駆込寺」といわれるが、当寺に現存する最古の縁切状は元文3年（1738）である。

本調査地点は円覚寺旧境内遺跡といわれ、その範囲は貞治2年（1363）4月の「円覚寺文書目録」にある『円覚寺境内絵図』（一帖 寺山并門前新御寄進絵図）に当たると言われている（図2）。この絵図は円覚寺境内を朱線で表し、絵図の四方には足利直義の執事であった上杉重憲の花押が描かれたもので、元亨3年（1323）～建武2年（1335）に描かれたものであるといわれている。絵図には総門の南前面に白鷺池があり、その東側に新寄進と書かれた2区域、絵図左下に「薩摩掃部大夫入道跡」「飯嶋孫次郎入道跡」と書かれている。絵図に調査地点を合わせてみると本調査地は寄進地と書かれたその2区域の東方の一角に所在している。

また、山之内円覚寺門前町図（黄梅院蔵）がある。作成年は不詳であるが、貞享2年（1685）刊『鎌倉志』に「此比まで十王堂有が、今亡たり」と書かれている。また、絵図中の浄智寺境内に吉川惟足の屋敷が注記されているが、彼が浄智寺に隠居したのは慶安4年（1651）である。以上からこの絵図の作成年代は1651年～1685年の間と想定され、江戸時代前期の様相を理解できる良好な資料となっている。絵図は上を南として中央に山ノ内道を描き、「下馬之内五十二間」を真ん中に、その下に馬道を弓状に描き、道の両側に人名が隙間なく記載されている。そこに黒線でくっきりと円覚寺の寺域の範囲を示しており、この絵図から想定すると本調査地点は境内に位置する。その地点には久兵衛、与三右衛門、拾右衛門、長三郎等の名前がみられ、境内前面の土地を細分して使用していた様相が伺える。借地として貸していたのではないだろうか。また、絵図で東慶寺対面、「与三右衛門」と記載された場所があるが、その場所に現在も住んでいる子孫の方から江戸時代は飛脚を生業としていたと伺った。明治22年（1889）2月国鉄横須賀線が開通し、その際白鷺池の北西側に線路を通し境内を分断した。本遺跡地は現在この線路の南東側となっている。昭和2年に「北鎌倉駅」が建てられ以後、この近辺の宅地化が始まった。

第4節 本調査地点周辺の遺跡（図1、表1）

本調査地周辺では過去に発掘調査を実施した遺跡が点在する。周辺の各遺跡の位置と所在地は図1、及び表1の通りである。ここでは円覚寺旧境内遺跡内の調査について概略を述べる。

①、②地点ともに円覚寺の塔頭である。①地点では調査地点が円覚寺という大規模寺院の塔頭という利点から中世から現代まで各時期の遺構、遺物が確認され連綿と宗教活動を引き継いできた様相が確認できた。また、鎌倉では検出例の少ない「地下式坑」が検出された。貯蔵穴の用途等を想定しているが実際は不明な点が多いといったところが実態である。②地点では19世紀中頃と想定される堂址が検出された。③地点の調査は円覚寺境内妙香池の改修工事と平行して行った確認調査である。過去に5～6回の改修工事が実施され、少なくとも2回は江戸期のものであることが確認された。また、池の形状が改修して方形になったことは確認出来たが、造成時の様相は解明されないままである。④地点では円覚寺の総門外の建物と創建前後の遺構群が検出された。創建前は水田、その後は円覚寺に関わる雑舎が建てられていたのではないかと、遺構群の様相、または文献、絵図等より推察している。⑤地点では13世紀後葉～14世紀前半に想定される遺構群が確認され、調査地点が耕作地から門前の町屋域に変化して行く様相であると推定している。地点⑥では13世紀後半～14世紀前半とされる3期の生活面で、山ノ内道と軸方向を同じくする地割りがあったと推測されている。地点⑦では13世紀第4四半期～15世紀代とされる4時期の生活面で継続的に、現在の山ノ内道と近い軸方向を持つ遺構群が展開する。14世紀前半とされる第2面では規格性の高い木組み構造を残した箱溝や、道路と考えられる硬化面が検出されている。

また、周辺域のやぐらでは帰源院下やぐら群、円覚寺境内西やぐら群、西管領屋敷やぐら群、西管領屋敷南やぐら群などで調査が行なわれている。

参考文献

- | | |
|--------------------|------------------------------------------|
| 鎌倉市史編纂委員会 | 1959年「鎌倉市史総説編」 |
| 鎌倉市 鎌倉市史編纂委員会 | 1959年「鎌倉市史考古編」 鎌倉市 |
| 鎌倉市教育委員会 | 1998年「鎌倉の自然」 鎌倉市教育委員会 |
| 関幸彦 | 2006年 戦争の日本史5「東北の戦争と奥州合戦」吉川弘文館 |
| 下中邦彦 | 1984年「神奈川県の名」平凡社 |
| 神奈川県図書館協会郷土資料編集委員会 | 1999年「神奈川県皇国地誌相模国鎌倉郡村誌」神奈川県図書館協会 |
| 三浦勝男 | 1992年 鎌倉国宝館図録第15集「鎌倉の古絵図1」鎌倉市教育委員会 鎌倉国宝館 |
| 日本史広辞典編集委員会 | 1997年「日本史広辞典」山川出版社 |
| 今小路西遺跡発掘調査団 | 1990年「今小路西遺跡」鎌倉市教育委員会 |

第二章 調査の概要

第1節 調査の経過

調査は廃土置場を確保するため、調査区を北東半（Ⅰ区）と南西半（Ⅱ区）に分割し、2回に分けて実施した。調査実施日はⅠ区が2007年2月6日～2月23日、Ⅱ区が2007年2月26日～3月30日である。確認調査の結果に基づき近現代の堆積土（現地表下40～60cmまで）は重機による掘削を行ない除去、以下は人力による作業とした。その結果、中世の遺構面を3枚確認し、井戸、溝、板壁構造の竪穴（落ち込み4）、建物・列を構成する柱穴、土坑、ピット等を検出した。中世期の地形層下では、河川近くの堆積とみられる土層を確認し、性格不明の落ち込みが検出された他、最終の深堀トレンチでは小袋谷川の氾濫により運ばれたと思われる流木が発見されている。出土遺物は整理箱6箱である。以下に作業経過を記した。

- 2007年2月 6日 Ⅰ区調査開始。重機による表土掘削後、人力による遺構確認作業。
- 2月 6日 鎌倉市3級基準点（43404）より調査区内に海拔高を移動。
- 2月 7日 調査グリッドの設定及び測量基準杭の設置。遺構掘削開始。
- 2月13日 中世面の全景写真撮影と平面図の作成。
- 2月15日 中世地形面下の調査開始。
- 2月16日 鎌倉市4級基準点より国土座標の移動。
- 2月21日 最終確認面の全景写真撮影と平面図の作成。
- 2月22日 調査区堆積土層の記録作業。
- 2月23日 Ⅰ区調査終了。
- 2月26日 Ⅰ区の埋め戻し、及びⅡ区の表土掘削。
- 2月27日 Ⅱ区の遺構調査開始。
- 3月 1日 1面（土坑・ピット等完掘時）の全景写真撮影と平面図の作成。
- 3月 5日 1面（溝・落ち込み等完掘時）の全景写真撮影と平面図の作成。
- 3月 6日 2面調査開始。
- 3月 8日 2面の全景写真撮影と平面図の作成。2面構成土の掘下げ。
- 3月 9日 3面検出。遺構調査開始。
- 3月14日 3面の全景写真撮影と平面図の作成。
- 3月15日 3面下の調査。写真、図面等記録作業。
- 3月18日 中世地形面下の調査開始。
- 3月26日 最終確認面の写真、図面等記録作業。深堀トレンチの設定・掘削。
- 3月28日 調査区堆積土層の記録作業。
- 3月30日 調査終了。機材撤収。

第2節 グリッド設定・国土座標との合成 (図3)

測量は任意の調査グリッドを設定して行った。調査地内の北東隅に基準点 (A1グリッド) を置き、南側・西側に向かい4mごとに数値を増すこととした。グリッドの南北軸にはアルファベット、東西軸には算用数字をあてている。国土座標との関係は調査グリッドのB2 (合成①) が国土座標の $X = -73652.6947$, $Y = -26068.5795$ と、B軸上でB3より南に2.773mの地点 (合成②) が国土座標の $X = -73657.3732$, $Y = -26073.4736$ と一致し、調査グリッドの南北軸 (アルファベット) は国土座標のY軸より $43^{\circ} 41' 19''$ 東へ振れている。国土座標値は、鎌倉市4級基準点 (標識番号D 63 Q 055・D 63 Q 056) を使用して、調査グリッド上に移動した。

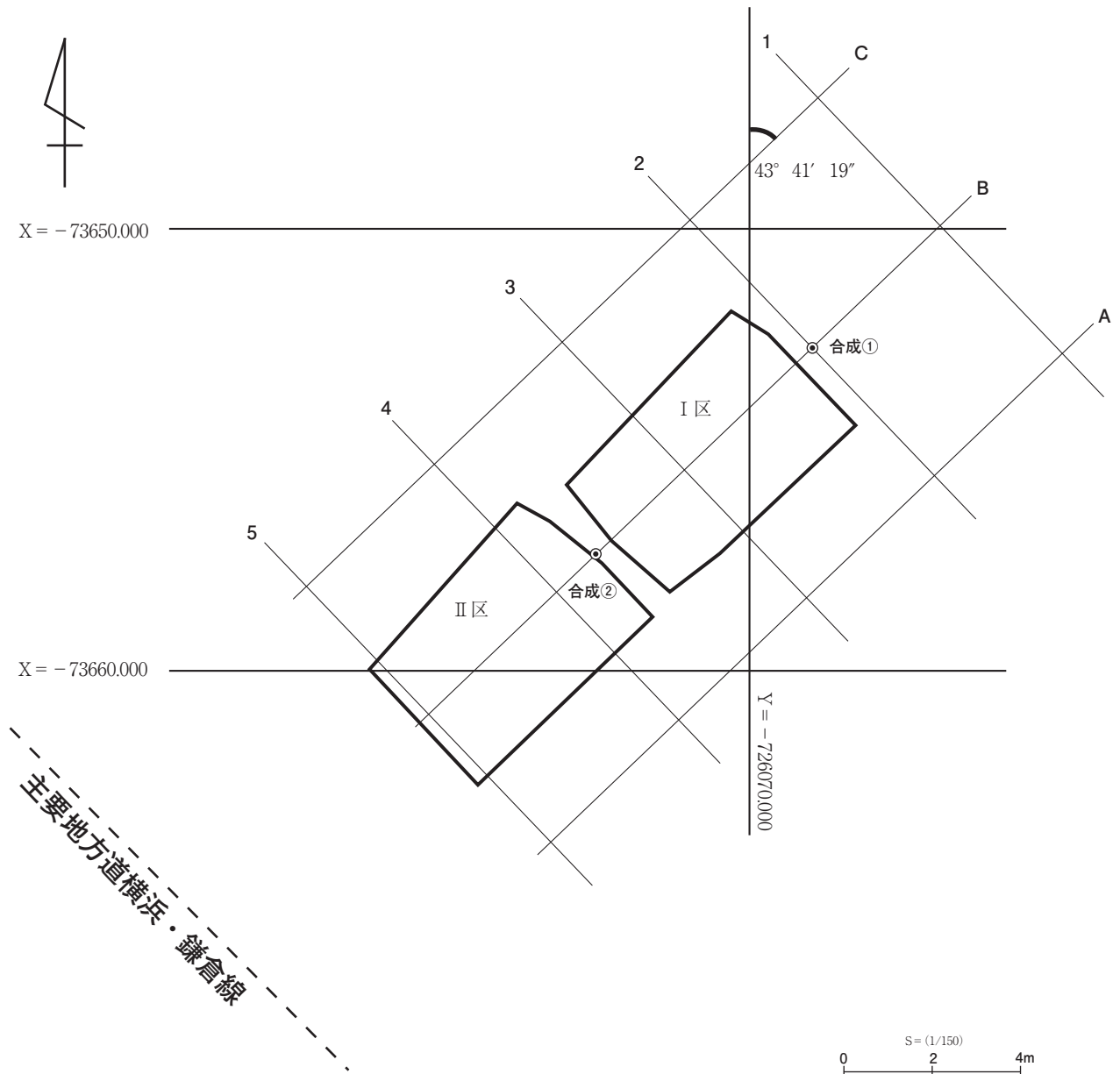


図3 グリッド設定図

第3節 調査地の堆積土層（図4）

堆積土層はⅠ区・Ⅱ区を分けて提示している。Ⅰ区土層はアルファベットを、Ⅱ区については算用数字を付した。遺構覆土はⅠ区①～②、Ⅱ区①～⑯としている。

A層・0層は現代の盛り土層である。1層は中世以降の遺物包含層としているが近世まで下る層かもしれない。B層が対応するものと思われる。2層は中世の遺物を混じえており、1面より新しい時期の生活面を構成する地形層と思われる。C層・3層は第1面の構成土である。第2面はE層、6～11層により構成される。Ⅱ区は3面井戸1(⑮)廃絶後の窪地に土丹塊、鎌倉石塊を投げ込んで根固めし(10・11層)、東側は井戸1根固めに連続して土丹を敷き詰めて(9層)生活面としている。北西側は攪乱の影響などで面の把握に混乱があり判然としないが、井戸1根固めに連続する土丹・鎌倉石塊が稀薄となった部分へ6～8層を盛り土し整地したものと思われる。第3面はG層、21・25層上が生活面と考えられる。それ以前の堆積土を見ると、Ⅰ区はG層以下落ち込み2覆土(I～M層)を含めて自然堆積層と考えて矛盾しない。Ⅱ区も3面を自然堆積層を基盤とする生活面と考えているが、1部土層に混乱が見られるため、説明を加える。3面は21・25層が基盤となる他、溝4覆土(13～24層・25'層・26層)上層の14・15層が3面を整地するために貼付けられた土と思われる。溝4については一応、3面下の遺構として扱っているが、覆土の堆積状況や掘り込み面に整合性が得られず、プランも曖昧で、3面検出の溝1と直交関係にあるという意外に人為的な遺構と考えられる材料が見つからない。また、西壁土層の溝4北側の堆積(27～31層)は複数のピットが重複するように分層され不自然な堆積状況を示しているが、層中にシミ状、ブロック状部分も見受けられ、その傾向は溝4覆土下層(16～20層)にまで及んでいる。これら16～24・26～31層の状況は、異なる土塊が乱雑に投げ込まれた人為的な造成ともとれるため断定はできないものの、自然的な要因による不整合と考えている。溝4については自然的な要因で生じたしまった軟弱な窪地部分であったかもしれず、その上を生活面とする為に粘土(14・15層)を貼付け補強したものと思われる。32層以下は落ち込み1の覆土(31～34層)を含めて自然堆積層と考えて矛盾しない。35～38層は黒茶～暗茶色の粘質土で安定した地盤と言える。39層以下は木片を含みしまりに欠けるシルト層が主体となり、小袋谷川の影響を強く受ける堆積土層と思われる。43層中には小袋谷川と平行して横たわる流木が存在している。

なお、本調査地の堆積土のうち、中世第2面から3面頃の何れかの土に変わった質のものが含まれている。写真図版でわかるように、その時期の層から出土したかわらけの多くに黒い斑状のシミが見られる。灯明皿などに付着している油煙に似た質のものに見えるのだが、使用時の痕跡ではなく、廃棄後に土中でなんらの成分が浸透したもののように思われる。考えられる理由としては(油煙に近い質の成分であるならば)、中世期の造成土中に、火事場などから排出されたカーボンが多く含まれていた。あるいは、近隣でカーボンを多く排出するような作業が行われていた。などあげられる。現地調査では別段特記するような土質は見受けられなかったため、細かく土層を特定することはできない。

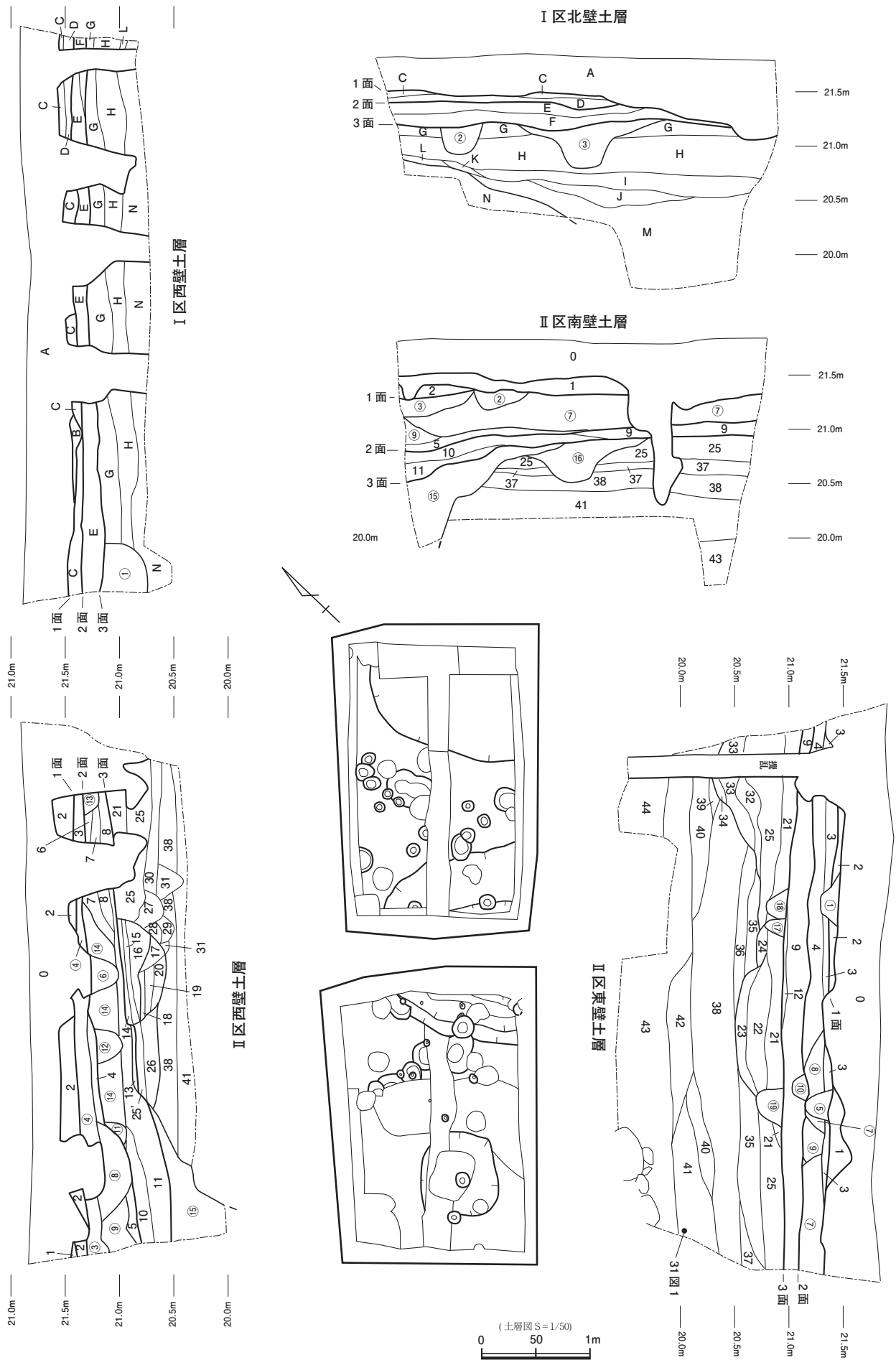


図4 調査地の堆積土層

I 区 土層説明

A層	表土・攪乱層	現代の盛り土。	G層	暗茶褐色粘質土層	粘性が非常に強く、良くしまる。(3面構成土)
B層	茶色砂質土層	かわらけ細片・木片を多く混入する。	H層	黒茶褐色粘質土層	層中に薄茶色部分が点在する腐食土層。粘性あり。軟質。
C層	灰黄色土層	灰黄色石粒と茶色土を混合する。かわらけ片を少量含む。ややしまる。(1面構成土)	I層	黒茶色粘質土層	緑青粗砂を混入する。炭化物・少量の木片を含む。しまりなし。
D層	炭層+かわらけ細片・木片を多く含む。(2面上包含層)		J層	黒茶色粘質土層	8層より木片を多く含み、炭化物の粒子が大きい。しまりなし。
	茶褐色粘質土層		K層	黒茶色粘質土層	緑青粗砂を多く混入する。炭化物を少量含む。ややしまる。
E層	茶色粘質土層	5~10cm大の鎌倉石片を混入する。粘性あり。良くしまる。(2面構成土)	L層	黒茶色粘質土層	緑青粗砂を混入する。
F層	暗茶褐色粘質土層	鎌倉石粒子・かわらけ細片・炭化物を多く混入する。粘性弱い。しまりなし。(3面上包含層)	M層	茶褐色粘質土層	木片を多く含む腐植土層。軟質でしまりに欠ける。
			N層	緑灰色シルト層	混入物を含まない。しまりややあり。

① 3面ピット (P103)

② 3面ピット (P102)

II 区 土層説明

0層	表土・攪乱層	現代の盛り土。	①	1面ピット (P53)
1層	茶色粘質土層	鎌倉石塊・土丹粒子・かわらけ片・炭化物を混入する。(中世以降遺物包含層)	②	1面ピット (P61)
2層	暗灰褐色粘土層	鎌倉石粉砕片を多く混入する。しまりあり。(中世遺物包含層)	③	1面 (土坑1)
3層	暗灰褐色粘土層	鎌倉石粉砕片を多く混入する。しまり強い。(1面構成土)	④	1面 (落ち込み3)
4層	茶灰色粘質土層	土丹粒子・炭化物を混入する。粘性あり。しまりなし。(2面上包含層)	⑤	1面ピット (P54)
5層	暗茶色粘質土層	黄色砂を混入する。しまりなし。(2面上包含層)	⑥	1面ピット (P57)
6層	黒茶色粘質土層	木片・炭化物を含む。(2面構成土)	⑦	1面 (板間建物1)
7層	黒茶色粘質土層	かわらけを多く含む。木片少量混入。しまりなし。(2面構成土)	⑧	1面 (溝2)
8層	黒茶色粘質土層	かわらけ・炭化物を多く含む。(2面構成土)	⑨	1面 (溝3)
9層	土丹地形層	南側は茶色シルトを混入し、しまりがやや弱い。(2面構成土)	⑩	2面ピット (P84)
10層	鎌倉石塊層	井戸1廃絶後の窪地埋め土。(2面構成土)	⑪	2面ピット (P80)
11層	黒褐色粘質土層	大型土丹・鎌倉石塊を主体とする井戸1廃絶後の窪地埋め土。(2面構成土)	⑫	2面ピット (P79)
12層		かわらけを多く含む。(3面上包含層)	⑬	2面ピット (P未定)
13層	茶褐色粘土層	木片を含む。粘性あり。(溝4)	⑭	2面 (落ち込み5)
14層	灰茶色粘土層	混入物を含まない。粘性強い。(溝4)	⑮	3面 (井戸1)
15層	黒茶色粘質土層	粘性強い。良くしまる。(溝4)	⑯	3面 (溝1)
16層	黒茶色粘質土層	炭化物を少量含む。しまりなし。(溝4)	⑰	3面ピット (P100)
17層	茶黒色粘質土層	炭化物・白色粒子を含む。(溝4)	⑱	3面ピット (P101)
18層	黒茶色粘質土層	白色粒子を含む。しまりなし。(溝4)	⑲	3面ピット (P99)
19層	黒茶色粘質土層	混入物を含まない。しまりややあり。(溝4)		
20層	黒茶色粘質土層	19層よりしまりがある。(溝4)		
21層	茶色粘質土層	炭化物を少量含む。粘性非常に強く、良くしまる。		
22層	暗茶色粘質土層	灰褐色粘土塊を少量、炭化物を多く含む。粘性強い。しまりややあり。(溝4)		
23層	暗茶色粘質土層	22層と同質。下位に灰白色シルトを混入する。22層より粘性に欠ける。(溝4)		
24層	暗茶色粘質土層	灰褐色粘土塊を含む。粘性ややあり。しまり弱い。(溝4)		
25層	暗茶色粘質土層	灰白色シルトを混入する。炭化物を少量含む。粘性弱い。 ※25層は25層と同質。(溝4)		
26層	暗黄茶色粘質土層	粘性強い。良くしまる。(溝4)		
27層	灰褐色粘土層	炭化物を含む。しまりなし。		
28層	灰褐色粘土層	炭化物を含む。		
29層	灰褐色粘土層	鎌倉石片を含む。しまりなし。		
30層	茶黒色粘質土層	白色粒子・炭化物を含む。		
31層	茶黒色粘質土層	混入物を含まない。しまりややあり。		
32層	茶灰色粘質土層	青色粗砂・木片を混入する。しまりなし。(落ち込み1)		
33層		木片を多く含む腐植土層。(落ち込み1)		
34層	青色粗砂層	(落ち込み1)		
35層	黒茶色粘質土層	粘性強い。しまりあり。		
36層	黒茶色粘質土層	35層と同質。下位に灰白色シルトを混入し、粘性やや弱い。		
37層	暗茶褐色粘質土層	炭化物を少量含む。粘性弱い。		
38層	暗茶褐色粘質土層	灰褐色シルトを多く混入する。粘性強い。しまりあり。		
39層	緑灰色シルト層	炭化物・木片を少量含む。		
40層	緑灰色シルト層	炭化物・木片を少量含む。やや粗く、しまりに欠ける。		
41層	茶色粘質土層	炭化物・木片を少量含む。粘性強い。		
42層	緑灰色シルト層	炭化物・木片を少量含む。やや粗く、しまりに欠ける。		
43層	緑灰色シルト層	炭化物・木片を少量含む。ややしまる。		
44層	緑灰色粘質土層	炭化物・木片を少量含む。ややしまる。		

第三章 発見された遺構

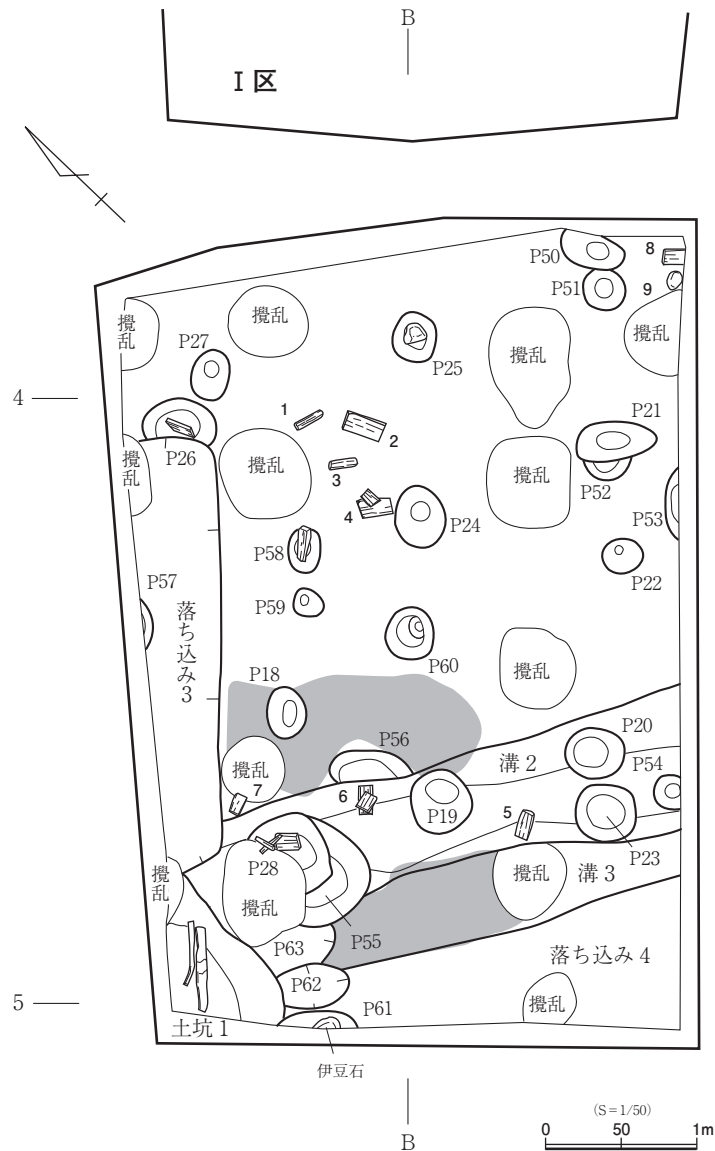
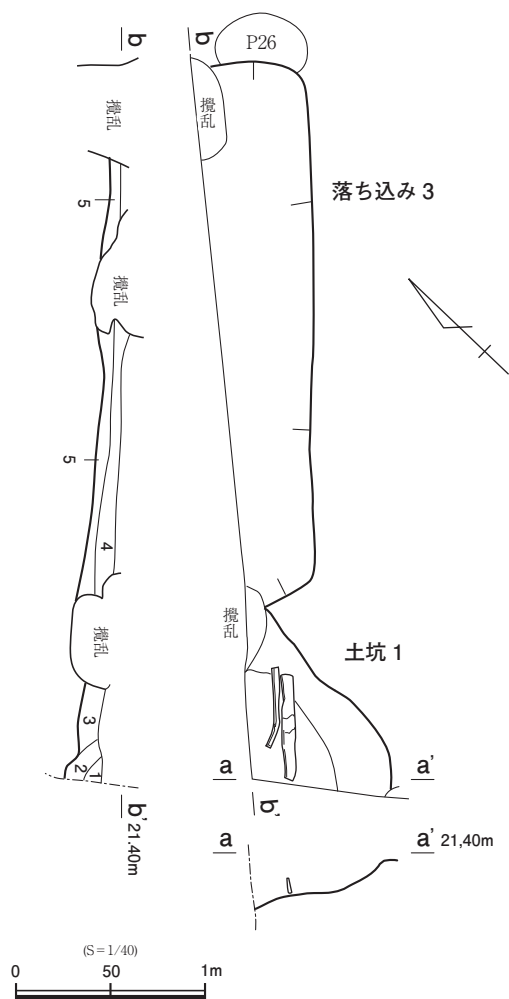


図5 1面遺構配置図

第1節 中世第1面 (図5)

1面は鎌倉石粉砕片ないし石粒を混じえる粘質土（調査区壁土層C層・3層）により構成される生活面である。I区では調査区北壁・西壁土層の土層断面（海拔21.4m～21.6m付近）で確認できるものの、現代の削平により調査区内の大部分で失われており、平面的には検出されていない。II区では海拔21.3m～21.4m付近に位置し、検出された遺構は土坑1基、不明遺構（落ち込み3）1基、板囲建物か（落ち込み4）1基、溝2条、柱穴25口である。その他、後世の削平により掘り方を失った柱跡と思われる礎板・礎石が9箇所に残存している。トーンは人頭大の土丹が敷き詰められている範囲である。溝2の構築に伴い貼り増しされたものと思われる。



土坑1 土層説明

- | | |
|-----------|--------------------|
| 1層 灰黒色粘質土 | 木片・炭化物を含む。しまりなし。 |
| 2層 灰黒色粘質土 | 炭化物・土丹粒子を含む。しまりなし。 |
| 3層 灰黒色粘質土 | 炭化物・土丹粒子を含む。ややしまる。 |

落ち込み3 土層説明

- | | |
|-----------|--------------------------|
| 4層 黒茶色粘質土 | 木片・炭化物・かわらけ片を多く含む。しまりなし。 |
| 5層 黒茶色粘質土 | 青灰色砂を混じえる。 |
| | 木片・土丹粒子を多く含む。しまりなし。 |

図6 土坑1、落ち込み3

土坑1 (図6)

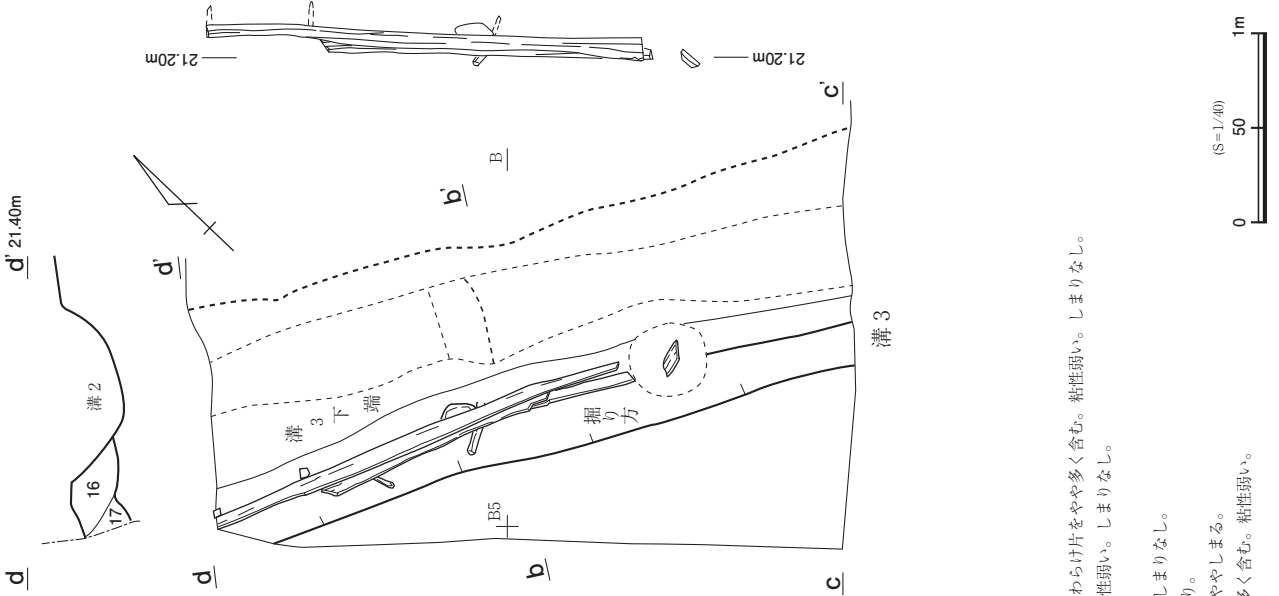
II区南西角に位置する。北側で重複する落ち込み3との新旧関係は、切り合い部分を攪乱されるため不明である。P61に切られる。P62・63は本址よりも新しい可能性が高い。落ち込み4、溝2・3を切っている。検出された規模は90×75cmまで。深さは23cm、最深部の標高は21.14mである。底面に接する状態で板材が2本並んで検出されている。材の寸法は長い方が幅7cm程で長さは54cm、短い方が幅3cm程で長さは45cm程である。設置されたと見える痕跡は確認されておらず、本址に付帯するものか覆土とともに流入したものかは判断できない。

落ち込み3 (図6)

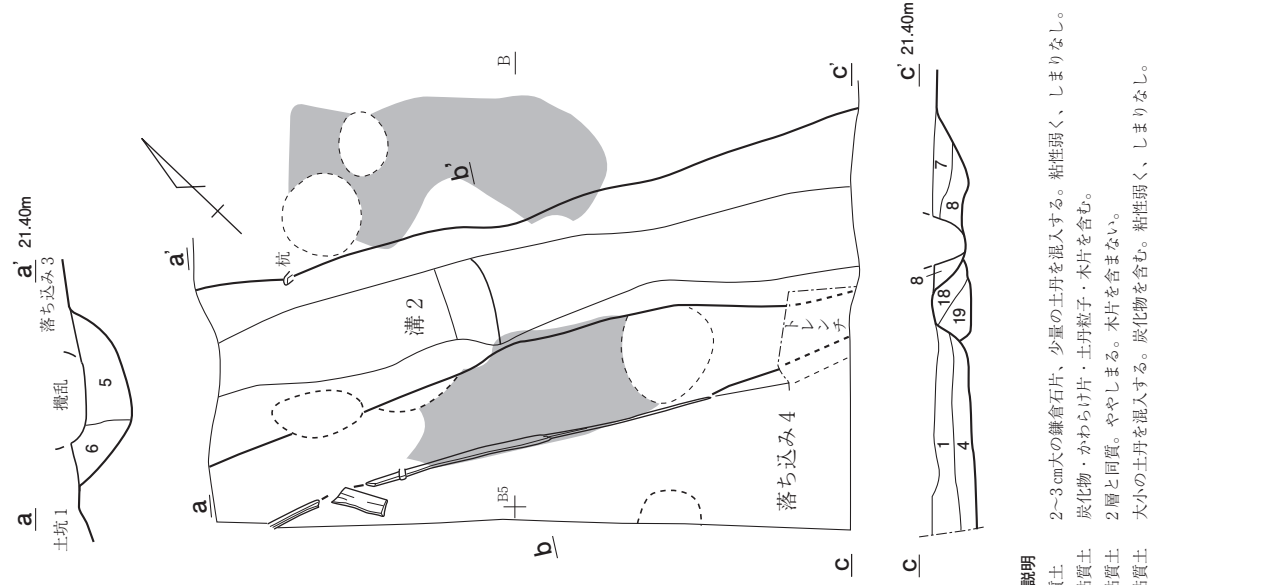
II区西壁際に位置する。溝2を切る。土坑1、P26・57との新旧関係は不明である。本址より下層に存在する別遺構まで掘り抜いてしまったため、当初プランの上端のみを図示した。東上端での軸方向はN-45°-Eである。検出された規模は長軸が287cm、短軸が57cmまで。調査区壁に残る土層断面で確認出来る深さは18cm、底面高は北側で21.35m、南側で21.17mと北から南へ緩く傾斜している。調査時の名称は落ち込みとしているが、遺構の全容が掴めないため性格は不明と言える。建物1～3、および上端南側に隣接する土坑1内で検出された板材と軸方向がほぼ一致する点に注意しておく。

落ち込み4 (図7)

II区南壁際に位置する。壁板を付帯する竪穴である。土坑1、P61・62に切られる。溝3を切る。軸方向はN-60°-Wである。検出された規模は北壁が320cmまで、北壁直交方向で95cmまで。本址は掘り方を有する構造と思われる、土丹を含む埋め土(4層)上が使用面レベルと考えられる。壁板は掘り方埋め土上に設置されており、途中28cmの破損部分を経て長さ247cmまでを検出、西側は調査区外に延びている。板材の寸法は遺存状態の良い部分で幅8～10cm、厚さは0.5～0.7cmである。壁板を支える杭材は1箇所検出、杭頭2.5×1.5cm、長さは43cmで壁板外側に使用面レベル下33cm(20.80m)まで打ち込まれている。掘り方底の深さは22～33cmで、標高21.00～21.07mを測る。



- 溝2 土層説明**
- 5層 暗茶褐色粘質土 土丹塊・玉石を多く混入する。粘性あり。しまりなし。
 - 6層 暗茶褐色粘質土 黄色粘土を混入する。炭化物・かわらけ細片・木片を含む。しまりなし。
 - 7層 灰黒茶色粘質土 鎌倉石の細粒子を少量混入する。粘性ややあり。
 - 8層 灰黒茶色粘質土 かわらけ細片・炭化物を多く含む。粘性あり。しまりややあり。
 - 9層 暗茶褐色粘質土 土丹粒子・かわらけ片・炭化物・木片を含む。粘性弱い。
 - 10層 暗茶褐色粘質土 9層と同質。ややしまる。



- 溝3 土層説明**
- 11層 土丹塊を主体とする。
 - 12層 溝3覆土。
 - 13層 暗茶褐色粘質土 1~3cm大の土丹を多く混入する。かわらけ片をやや多く含む。粘性弱い。しまりなし。
 - 14層 暗茶褐色粘質土 1~3cm大の土丹を多く混入する。粘性弱い。しまりなし。
 - 15層 暗茶褐色粘質土 少量のかわらけ・木片を含む。
 - 16層 黒褐色粘土 鎌倉石を混入する。炭化物を含む。しまりなし。
 - 17層 黒褐色粘土 混入物を含まない。粘性・しまりあり。
 - 18層 暗茶褐色粘質土 かわらけ片・炭化物・木片を含む。ややしまる。
 - 19層 暗茶褐色粘質土 5cm大の土丹を混入する。炭化物を多く含む。粘性弱い。

- 落ち込み4 土層説明**
- 1層 茶褐色粘質土 2~3cm大の鎌倉石片、少量の土丹を混入する。粘性弱く、しまりなし。
 - 2層 暗茶褐色粘質土 炭化物・かわらけ片・土丹粒子・木片を含む。
 - 3層 暗茶褐色粘質土 2層と同質。ややしまる。木片を含まない。
 - 4層 暗茶褐色粘質土 大小の土丹を混入する。炭化物を含む。粘性弱く、しまりなし。

図7 溝2・3、落ち込み4

溝2・溝3(図7)

II 南側に並んで位置する2条の溝である。覆土の状態から(土層断面b-b')溝3→溝2へ作り替えられた様子が伺われる。トーンで示した人頭大土丹の範囲は11層に対応しており、溝3を埋め立て後に土丹を盛って溝2の護岸としたものと思われる。他遺構との新旧関係は、土坑1、落ち込み3・4、P19・20・23・28・54・55・62・63、材5・6に切られ、P56も人頭大土丹を切っていると思われる。

溝2は軸方向がN-58°-W、規模は長さ363cmまで、上端幅は63~93cm、下端幅は28~47cmである。深さは19~35cmで、底面高は東側が21.14m、西側が20.89m、途中16cmの段差を経て東から西へ傾斜している。覆土は西側調査区壁土層(a-a')6層が掘り方部分であったかもしれない。断面形はほぼ逆台形を呈するが、不整に広がる部分を見受けられる。側板を抜き取った痕跡かもしれない。北上端沿いで検出されている杭と本址の関連は不明である。

溝3は軸方向がN-61°-W、規模は長さ354cmまでを確認した。北側の大半が溝2に壊され失われている。南側は溝2護岸下で側板が検出されている。残存する部分での溝底の深さは20~26cmで、底面高は東側21.14m、西側21.00m。掘り方部分の深さは22~28cmで、底面高は東側21.10、西側20.88mで東から西へ傾斜している。

ピット・材(図5・8、表2・3)

25口のピットと9箇所の材(礎板・礎石)が検出されている。ピットの多くは確認し得た掘り込みが浅く、または掘り方を失っており(材1~9)、1面より新しい時期の所産と考えられる。建物を構成すると思われる組み合わせは3組を摘出した。掘り方の柱間に多少のばらつきが見られるが、概ね1間200cmを規格として掘削されたものと思われる。建物1・2の柱穴底面の標高が南にいく程、低い傾向にあるのは、生活面が緩く傾斜していたためと思われる。

組み合わせを明確にできないものも含めて個々のピット・材の詳細は1面柱穴表、礎板・礎石表を参照されたい。

建物1(図8)

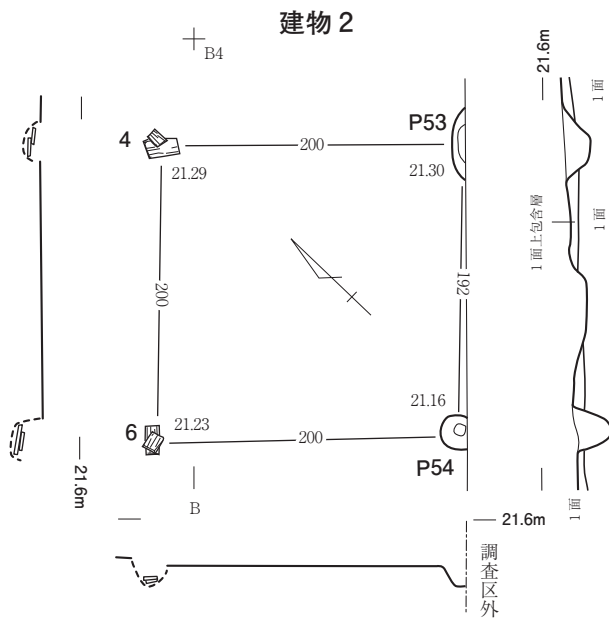
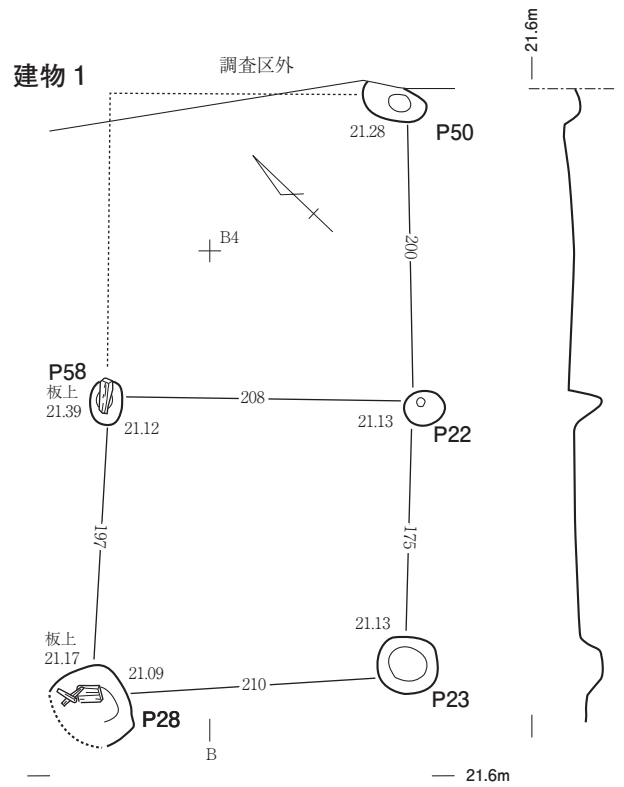
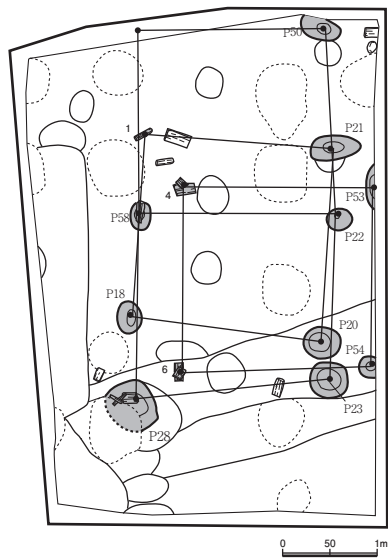
南北2間・東西1間の組み合わせ。P23・28が溝2を切っている。軸方向はN-45°-Eで、柱間は掘り方で175~210cmである。配置に不安がある穴は、上屋組の部分で合わせたものと判断した。P58・28の礎板の向きが建物2の構成と異なる点に注目しておく。

建物2(図8)

南北1間・東西1間の組み合わせ。P53・54は調査区東壁の土層断面で1面上包含層以前の掘り込みであることを確認できる。P54・材6が溝2を切っている。軸方向はN-46°-Eで、柱間は掘り方で192~200cmである。西列の材4・6の上に重ねられた板の方向を見ると、高さ合わせの目的で建物外側から柱下へ押し込まれたように思われる。現在でも簡易な小屋掛けをする場合、咄嗟に行われる方法である。

建物3(図8)

南北1間・東西1間の組み合わせ。P20・18が溝2を切っている。軸方向はN-49°-Eで、柱間は掘り方で195~205cmである。北西の材1の標高が高く、建物1のP58に似ている。P58の例をとれば、掘り方に据えられていた柱下部が腐食したため、その部分を切り取って再度使用したものかもしれない。高さ合わせのため、掘り方を埋め戻し根固めした上に礎板を据えた想定される。本址・材1については、板下の掘り方を見逃している可能性がある。



建物2 土層説明

- P53 茶褐色土 鎌倉石細片・玉砂利・かわらけ片を含む。しまりなし。
- P54 暗茶褐色粘質土 かわらけ片・木片・炭化物を含む。しまりなし。

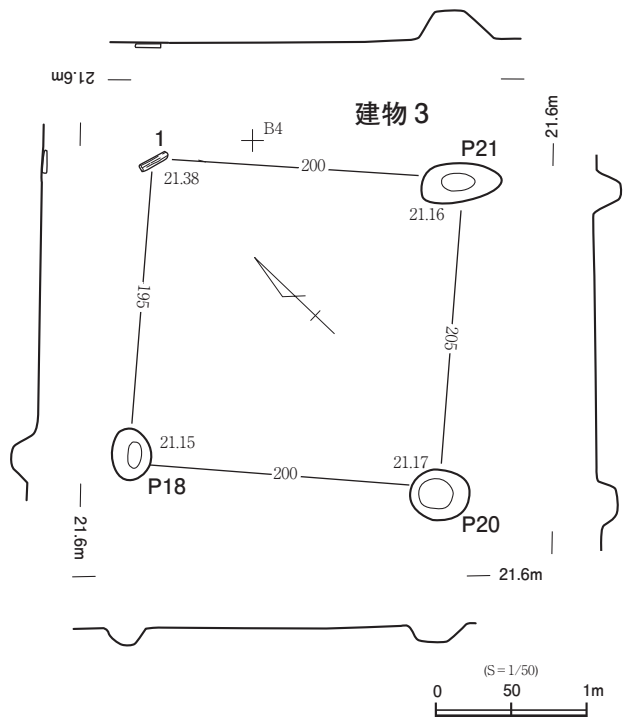


図8 建物1～3

表2 1面柱穴表

遺構名	長径 × 短径 × 深さ (cm)	底面標高 (m)	備考 礎板等規模：長さ × 幅 × 厚さ (cm)
P22 (建物1)	27×22×22	21.13	
P23 (建物1)	40×37×13	21.17	溝2を切る。
P28 (建物1)	54×40～×18	21.09 (礎板上 21.17)	礎板：15×9×3.5 他棒状板材2本。 溝2を切る。P55との新旧不明。
P58 (建物1)	30×20×26	21.13 (礎板上 21.39)	礎板：22×10×？
P50 (建物1)	45×32×13	21.28	P51との新旧不明。
P53 (建物2)	49×？×17	21.30	土層より復元。
P54 (建物2)	28×？×22	21.16	土層より復元。
P18 (建物3)	35×25×21	21.15	
P20 (建物3)	38×34×13	21.17	溝2を切る。
P21 (建物3)	53×31×18	21.16	P52との新旧不明。
P19	43×38×16	21.15	溝2を切る。
P24	41×34×27	21.10	
P25	32×27×25	21.13 (礎上 21.16)	礎：16×13×3
P26	47×30～×28	21.16 (礎板上 21.39)	落ち込み3との新旧不明。
P27	34×23×26	21.09	
P51	30×27×9	21.29	P50との新旧不明。
P52	32～×13～×17	21.17	P21との新旧不明。
P55	60～×60～×14	21.18	P28との新旧不明。
P56	52×22～×20	21.13	溝2との新旧不明。
P57	36×？×24	21.00	土層より復元。落ち込み3との新旧不明。
P59	20×18×12	21.23	
P60	33×31×29	21.04	
P61	52×？×17	21.10 (礎石上 21.36)	掘り方は土層より復元。
P62	46～×30×5	21.22	土坑1との新旧不明。1面確認の浅い窪み。柱穴？
P63	60～×25～×3	21.25	1面確認の浅い窪み。柱穴？

表3 1面礎板・礎石表

遺構名	長さ × 幅 × 厚さ (cm)	材上標高 (m)	備考
材1	18.5×3.5×0.7	21.38	礎板 (建物1)
材2	26×12×7	21.38	礎板
材3	17×7×0.5	21.30	礎板
材4	11×7×1・21×11×4	21.29	礎板 (建物2)
材5	17×8×3	21.24	礎板 溝2より新
材6	12×11×1.5・18×9×3	21.23	礎板 (建物2) 溝2より新
材7	12×7×？	21.27	礎板
材8	13×10×1.5	21.42	礎板
材9	12×8×？	21.42	礎 (礎石？)

第2節 中世第2面 (図9)

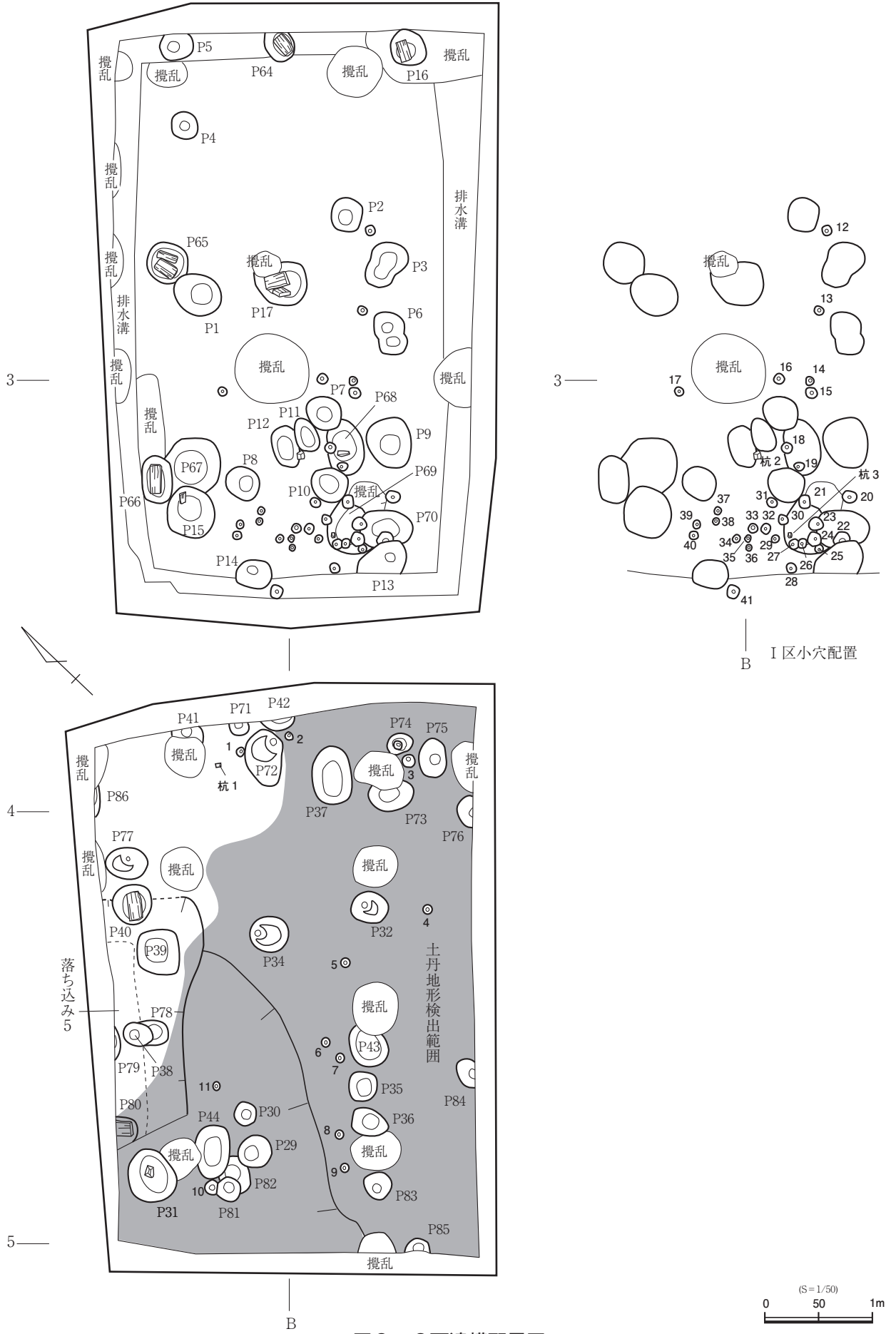


図9 2面遺構配置図

2面は土丹塊および黒茶色粘質土（調査区壁土層6～11層）、鎌倉石片を混じえる茶褐色粘質土（調査区壁土層D層）により構成される生活面である。I区では調査区北壁・西壁土層の土層断面（海拔21.4m付近）で確認できるものの、現代の削平により調査区内の大部分で生活面が失われている。I区の3面相当のレベルで検出された遺構のうち、他遺構との切り合いなどから、2面の所産と考えられるものを摘出し提示した。II区では海拔21.1m～21.3m付近に位置する。構成土中の土丹地形の範囲をトーンで示した。東半は土丹地形上を生活面とし、西側では土丹地形の上に更に盛り土・整地し生活面としている。調査ではII区の全面を土丹地形まで掘り下げてしまったため、西側は面の把握に多少の混乱が生じている点をおことわりしとく。検出された遺構は落ち込み（不明遺構）1基、建物1棟、柱穴列2列、ピット52口、杭3箇所及び杭穴と思われる小穴41口である。その他、2面構成土中の土丹地形直上でかわらけ溜りが1箇所検出されている。

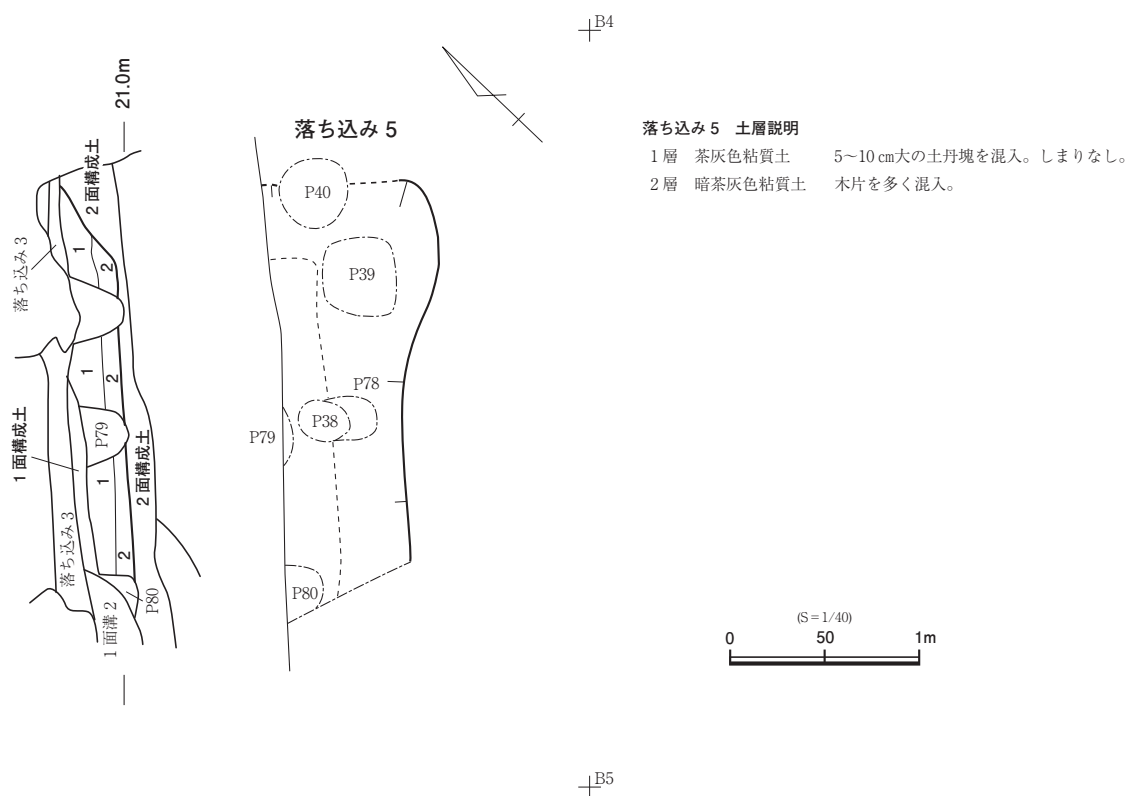


図10 落ち込み5

落ち込み5 (図10)

II区西壁際に位置する。南側は1面遺構・溝2に削平され失われている。建物4（P80・38・40）、P79に切られる他、P39（柱穴列2）も本址に先行する可能性が高い。P78との新旧関係は不明である。本址は1面遺構・落ち込み3の調査時に西壁際の覆土を掘り上げてしまい、また2面検出時に誤って掘り込み面を除去してしまったため、平面プランを明確にできなかった。図示した平面形は2面構成土中の土丹地形直上で確認された浅い落ち込みを東側の上端とし、その他の点線部分は西壁の土層断面に合わせ復元した。推定される規模は長軸が230cm以上、短軸が91cmまで。西壁土層で確認できる深さは28cmで、底面標高は20.94～21.00mである。軸方向はN-40°-Eあたりを指すと思われる。調査時の名称は落ち込みとしているが、性格は不明である。

ピット・小穴 (図9・11・12、表4・5)

52口のピットが検出され、建物を構成する組み合わせを1組、建物の一部と考えられる並び2列を抽出した。掘り方の柱間に多少のばらつきが見られるが、概ね1間200cmを規格として掘削されたものと思われる。他遺構との重複関係を明らかにできなかったピットも多いが、抽出した建物・柱穴列の組み合わせ通りであれば、古い順に、落ち込み5→建物4→柱穴列2の関係が成り立つ。その他、杭3箇所及び、杭穴と思われる小穴が41口検出されている。小穴は径10cm内外の円形を呈し、深さは10cm以下の浅いものが多いが、底面に向かい先細るために掘りきれていない可能性が高い。杭を含めた配置に規則性は見出せず、性格は不明である。

組み合わせを明確にできないものを含めた個々のピット、杭・小穴の詳細は2面柱穴表・小穴表を参照されたい。

建物4 (図11)

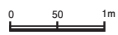
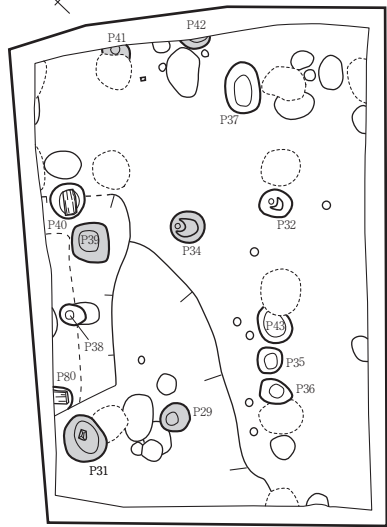
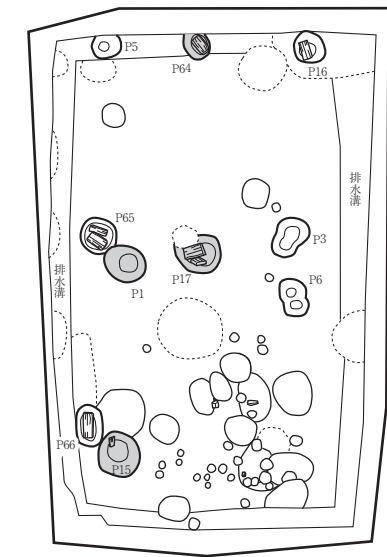
南北5間・東西1間の組み合わせ。P80・38・40が落ち込み5を切る。P65・66がそれぞれ柱穴列2のP1・15に切られる。軸方向はN-49°-Eで、柱間は掘り方で197～220cmである。北から順に1間・2間…として説明する。3間めの柱は調査区外のため検出されていない。東側の2間めは現代の削平により失われたものと思われる。1間め東側のP3は2口のピットが重複、西側のP65は礎板が2枚並んで検出されており、この位置での傷んだ柱の建て替え、ないし間取りの変更を意図した建て替えが行なわれている可能性、あるいは束柱を従える強固な基礎構造を備えていた可能性を想定できる。また、礎板の向きに注目するとP16・40・66が南北方向を向いているのに対し、P65、南西端P80の礎板は東西方向を向いて設置されている。5間めP36・80の掘り方柱間は220cmと他より広く、80～90cm奥に補助的な役割を担うと思われるP43・38配している。これらピットの配置や、形態・付帯物のわずかな違いが本址建物の構造・性格を推測する手がかりになるかもしれない。

柱穴列1 (図12)

南北方向に5間の並びである。軸方向はN-47°-Eで、柱間は掘り方で198～210cmである。北から2間めの検出されない柱穴は掘り方を見逃し、より古い時期の遺構と共に掘ってしまったものと思われる。北端のP64、1間めP17の礎板の数や向きなどが建物4の東列北端P16、西列1間めP65と似通う点に注目しておく。

柱穴列2 (図12)

南北方向に4間の並びである。P1・15が建物4のP65・66を切る。P39と落ち込み5の新旧関係は未確認であるが、本址が先行する可能性が高い。軸方向はN-48°-Eで、柱間は掘り方で200～203cmである。北から1間めP15から板が検出されているが、1枚で礎板となり得る寸法を持たない。南側の2口(P39・31)は北側の柱穴より規模が大きく、軸もずれ加減ではあるが、建物4でも南側ピットの構成に変化が見られること、この辺が寺社域の南端となることを考慮して柱穴列に含めた。



柱穴列 1

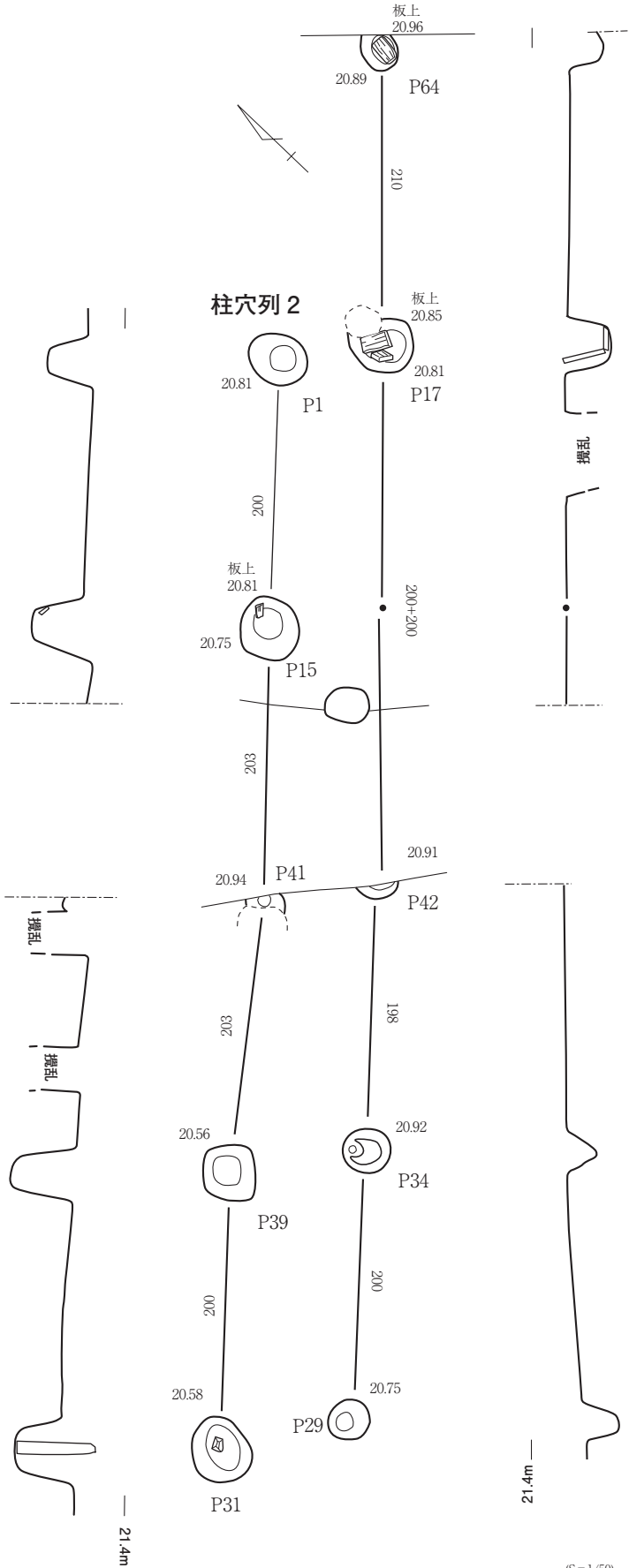


图12 柱穴列1·2

表4 2面柱穴表

遺構名	長径 × 短径 × 深さ (cm)	底面標高 (m)	備考 礎板等規模：長さ × 幅 × 厚さ (cm)
P 5 (建物 4)	33×24×44	20.87	
P65 (建物 4)	38×37×22	20.94 (礎板上 21.04)	P1 に切られる。礎板：18×7×3.5 (北)・17.5×8×6 (南)
P66 (建物 4)	43×28×38	20.82 (礎板上 21.00)	P67 を切る。礎板：26×9× ?
P40 (建物 4)	37×35×23	20.83 (礎板上 20.88)	落ち込み 5 を切る。礎板：24×13× ?
P80 (建物 4)	30～×20 ? ×20	20.93 (礎板上 20.98)	落ち込み 5 を切る。掘り方は土層より復元。礎板：15～×11× ?
P36 (建物 4)	34×25×25	20.83	
P32 (建物 4)	35×29×22	20.92	
P 3 (建物 4)	35×(25)×22 (北) 26×(20)×22 (南)	21.00	2 口。南北の新旧は不明。
P16 (建物 4)	34×31×35	20.86 (礎板上 20.95)	礎板：19×9.5× ?
P38 (建物 4)	27×21×35	20.72	落ち込み 5 を切る。P78 との新旧不明。
P43 (建物 4)	43×35×16	21.04	
P64 (柱穴列 1)	30～×25×30	20.89 (礎板上 20.96)	礎板：21.5×13.5×4.5
P17 (柱穴列 1)	50×40×33	20.81 (礎板上 20.85 北) (礎板上 21.18 南)	礎板：19×11×4 (北)・ ? ×9×3 (南)
P42 (柱穴列 1)	32×11～×14	20.92	
P34 (柱穴列 1)	36×32×27	20.92	
P29 (柱穴列 1)	33×31×24	20.75	P82 を切る。
P 1 (柱穴列 2)	45×36×32	20.81	P65 を切る。
P15 (柱穴列 2)	49×45×32	20.75 (板上 20.81)	P67 を切る。板：9×6× ?
P39 (柱穴列 2)	41×40×48	20.56	落ち込み 5 と重複。
P31 (柱穴列 2)	51×45×42	20.58 (柱上 21.18)	柱：60×10×7
P 2	30×28×29	20.94	
P 4	25×25×23	20.97	
P 6	28×(24)×24 (北) 28×(18)×22 (南)	20.95 (北) 20.97 (南)	2 口。南北の新旧は不明。
P 7	35×30×25	20.90	P68 を切る。
P 8	34×29×12	21.04	
P 9	47×38×30	20.89	
P10	35×30×29	20.86	P68 を切る。
P11	33×21×12	21.04	P12 との新旧不明。
P12	38×23～×17	20.98	P11 との新旧不明。
P13	49～×32×34	20.77	P70 との新旧不明。
P14	33×27×46	20.65	
P30	21×20×14	20.80	
P35	29×27×18	20.93	
P37	53×37×14	21.03	
P44	49×32×24	20.70	P82 を切る。
P70	47～×30～×18	20.98	P69 を切る。P13 との新旧不明。
P71	18×12～×14	20.94	
P72	51×35×23	20.88	
P73	41×(30)×22	20.97	
P74	25×18×11	21.05	
P75	36×25×15	21.05	
P76	30×16～×8	21.12	
P77	38×30×12	20.77	
P78	29～×25×11	20.97	P38 との新旧不明。
P79	31× ? ×23	20.98	土層より復元。落ち込み 5 を切る。
P81	20×20×26	20.74	P82 を切る。小穴 10 との新旧不明。
P82	36×30×37	20.63	P44・29・82 に切られる。
P83	26×23×15	20.90	

遺構名	長径 × 短径 × 深さ (cm)	底面標高 (m)	備考 礎板等規模：長さ × 幅 × 厚さ (cm)
P84	25×18～×10	21.04	
P85	22×13～×10	20.96	
P86	28～× ? ×13	21.10	土層より復元。

表5 2面小穴表

遺構名	深さ (cm)	底面標高 (m)	遺構名	深さ (cm)	底面標高 (m)	遺構名	深さ (cm)	底面標高 (m)
小穴 1	8	20.98	小穴 16	9	21.06	小穴 31	?	?
小穴 2	8	21.06	小穴 17	7	21.06	小穴 32	10	21.02
小穴 3	27	20.92	小穴 18	15	21.01	小穴 33	?	?
小穴 4	8	21.06	小穴 19	14	21.01	小穴 34	7	21.05
小穴 5	9	21.01	小穴 20	12	21.02	小穴 35	3	21.09
小穴 6	6	21.04	小穴 21	6	21.08	小穴 36	4	21.07
小穴 7	3	21.05	小穴 22	?	?	小穴 37	6	21.06
小穴 8	4	21.00	小穴 23	19	20.94	小穴 38	9	21.02
小穴 9	11	20.96	小穴 24	19	20.93	小穴 39	3	21.09
小穴 10	23	20.77	小穴 25	6	21.04	小穴 40	3	21.08
小穴 11	3	20.95	小穴 26	?	?	小穴 41	3	21.42
小穴 12	13	21.07	小穴 27	6	21.06	杭 1	長さ6～	20.88 (杭上)
小穴 13	4	21.14	小穴 28	6	21.06	杭 2	長さ4～	21.20 (杭上)
小穴 14	4	21.13	小穴 29	7	21.05	杭 3	長さ2～	21.17 (杭上)
小穴 15	8	21.09	小穴 30	?	?			



図13 かわらけ溜まり

かわらけ溜まり(図13・24)

Ⅱ区北西側、2面構成土下層の土丹地形直上で検出されている。このレベルである程度のもまりが確認されたため、「かわらけ溜まり」として扱っているが、付近の2面構成土上層にも相当量のかわらけが含まれており、周辺の2面遺構の覆土中にも多くのかわらけが混入している。ここでは「かわらけ溜まり」として出土遺物もいちおう独立させて報告するが、周辺出土のかわらけと時間的・空間的に連続性を持っている可能性が高い。かわらけは2面構成土下層・土丹地形施行後に土丹地形上の盛り土(調査区壁土層7・8層)と共に流入・廃棄されたものと思われる。図中23-4・20の遺物は本址「かわらけ溜まり」とした範囲から外れるが、流入・廃棄の広がりを示すものとして図に加えた。

第3節 中世第3面 (図14)

3面は概ね自然堆積層と考えられる暗茶色～暗茶褐色を呈する粘質土(調査区壁土層G層・25層)を基盤とする生活面である。目立った地形は行なわれておらず、II区の一部のみ、しまりの強い粘質土を貼って整地している。生活面の標高は海拔20.9m～21.2m付近である。検出された遺構は井戸1基、溝1条、柱穴18口、杭2箇所及び杭穴と思われる小穴17口である。I区は1面・2面を現代の削平で失っていたため、この面から平面的な調査が始まっている。

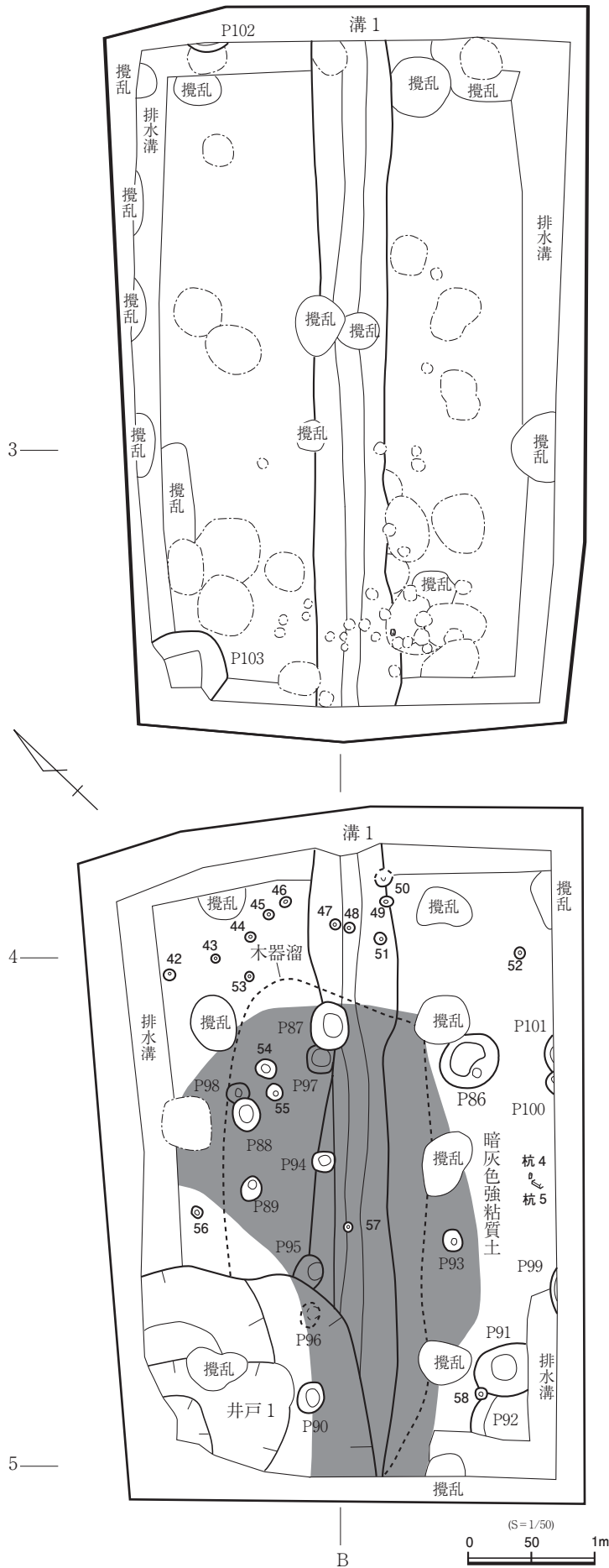


図14 3面遺構配置図

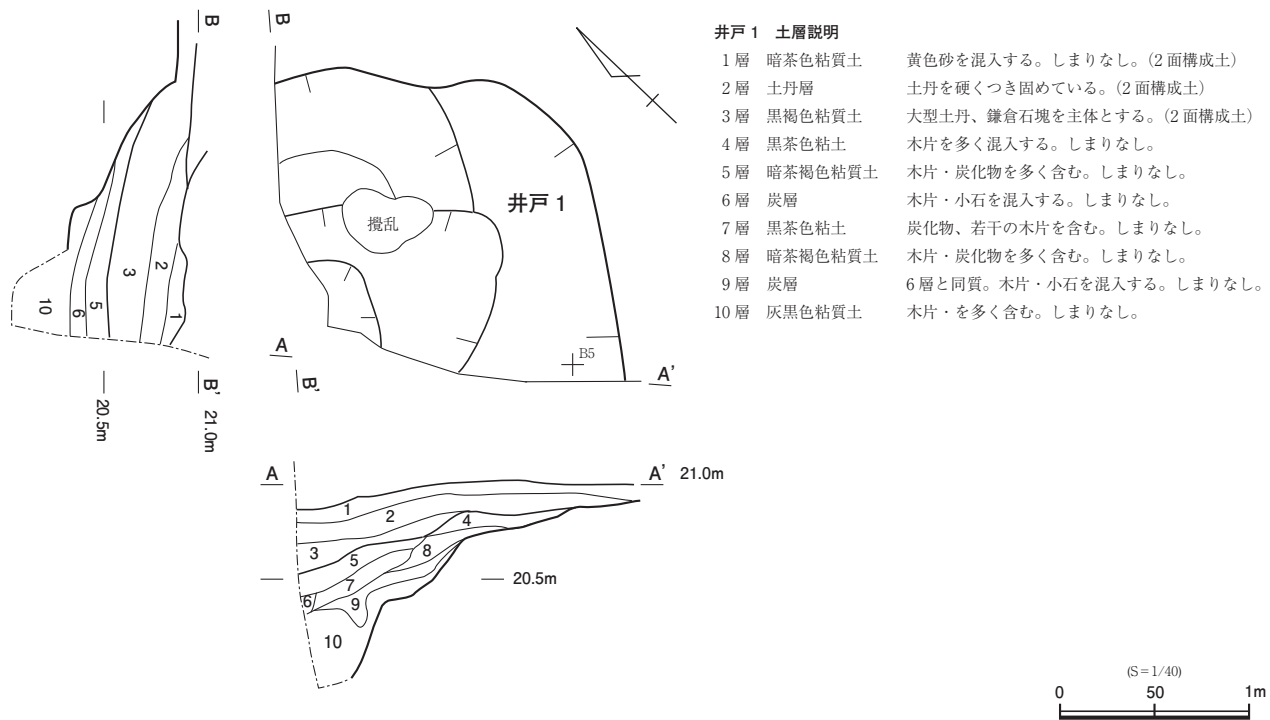


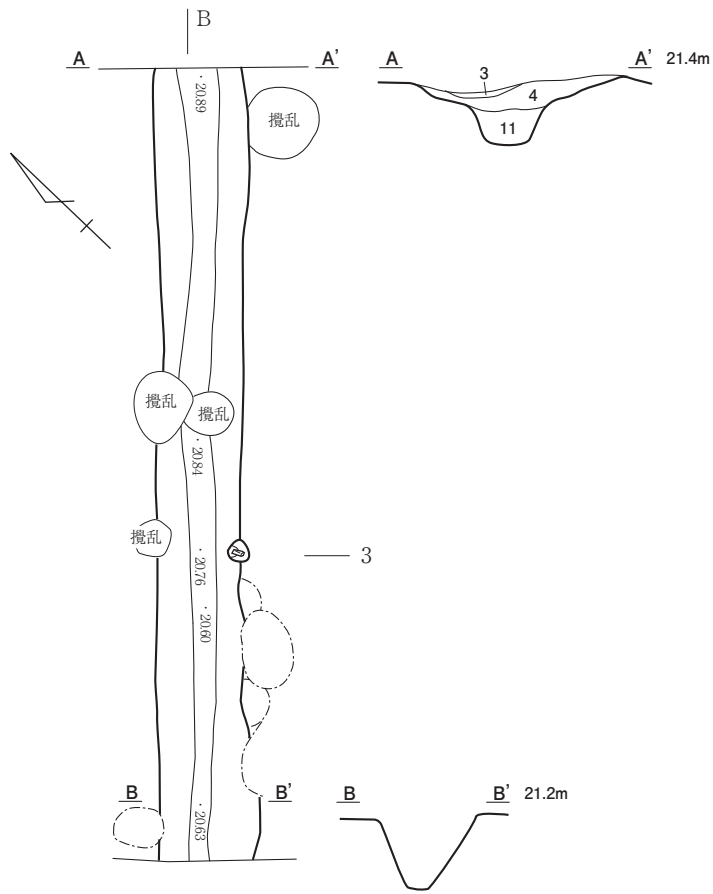
図15 井戸1

井戸1 (図15)

Ⅱ区南西角に位置する。安全確保のため完掘はしていない。東側で重複する溝1よりも新しい。P90・96に切られる。P95との新旧関係は不明である。検出された上端の規模は南北方向が157cmまで、東西方向が176cmまで。深さは確認面から88cm・標高20.00mまでを掘削し、以下の調査は断念した。土層断面の1～3層は本址廃絶後に根固めを目的として充填された2面構成土である。4層以下の覆土は木片を混入するしまりのない粘質土を主体としている。覆土中に炭が帯状に溜まる部分(6・9層)が見受けられることから、ある程度湧水する状態で埋没していると思われる。また、掘り方埋め土となり得る土層が見られないことから、井戸廃絶時に断面20.3～20.4m付近の段差まで掘り込んで井戸枠等の施設を抜き取ったものと思われる。

溝1 (図16)

Ⅰ区・Ⅱ区にわたり検出された。調査区を南北に縦断し、北側・南側とも調査区外へ延びている。井戸1、P87に切られる。P94～97との新旧関係は不明である。断面形は溝本体と思われる一段低い掘り込み部分は逆台形を呈し、両岸に浅い窪地状の緩傾斜を従えている。両岸の緩傾斜は増水などの理由により自然に削り取られたもの。あるいは溝本体に水を集めることを目的として人為的に掘削されたものと推測される。この緩傾斜はⅠ区北壁・Ⅱ区南壁の土層から本址に含まれると判断されたもので、後述する木器が集中して出土した箇所を除き平面的には調査されていない。図示した上端プランは溝本体にあたる一段低い部分である。検出された溝本体の規模は、長さが11.30m以上、上端幅が29～70cm、下端幅が10～28cmである。確認面からの深さは24～44cmで、底面の高さは北側で20.89m、南側で20.52mと南へ傾斜している。Ⅱ区では、溝本体が埋まりきった段階の窪地に大量の木器を廃棄したものが検出されている(土層C～E 5・6層)。溝1上層・「木器溜り」として点線で範囲を示した。検出された範囲は南北に391cmまで、東西に163cmである。深さは最深で15cmを測る。



溝1 土層説明

- | | |
|------------|------------------------------------|
| 1層 暗黄茶色粘質土 | 炭化物・粗砂を混入する。
ややしまる。 |
| 2層 暗茶色粘質土 | かわらけ細片・炭化物・黄色粘土を混入する。
粘性・しまりあり。 |
| 3層 暗茶褐色粘質土 | かわらけ細片を混入する。粘性・しまりなし。 |
| 4層 暗茶褐色粘質土 | 灰色砂・炭化物を混入する。しまりなし。 |
| 5層 黒灰色粘質土 | 木製品・かわらけ片・炭を多く含む。
しまりなし。 |
| 6層 黒灰色腐食土 | 多量の木製品・かわらけ片・炭を含む。 |
| 7層 暗黄灰色粘質土 | 炭を混入する。粘性強い。しまりなく軟質。 |
| 8層 茶灰色粘質土 | 炭・黒灰色粘土を混入する。粘性強い。
しまりなく軟質。 |
| 9層 黒灰色弱粘質土 | 微量の炭・木片・かわらけ片を含む。
しまりなく軟質。 |
| 10層 黒茶色粘質土 | 炭化物を少量含む。しまりなし。 |
| 11層 黒茶色粘質土 | 褐色粘土塊を混入する。しまりややあり。 |

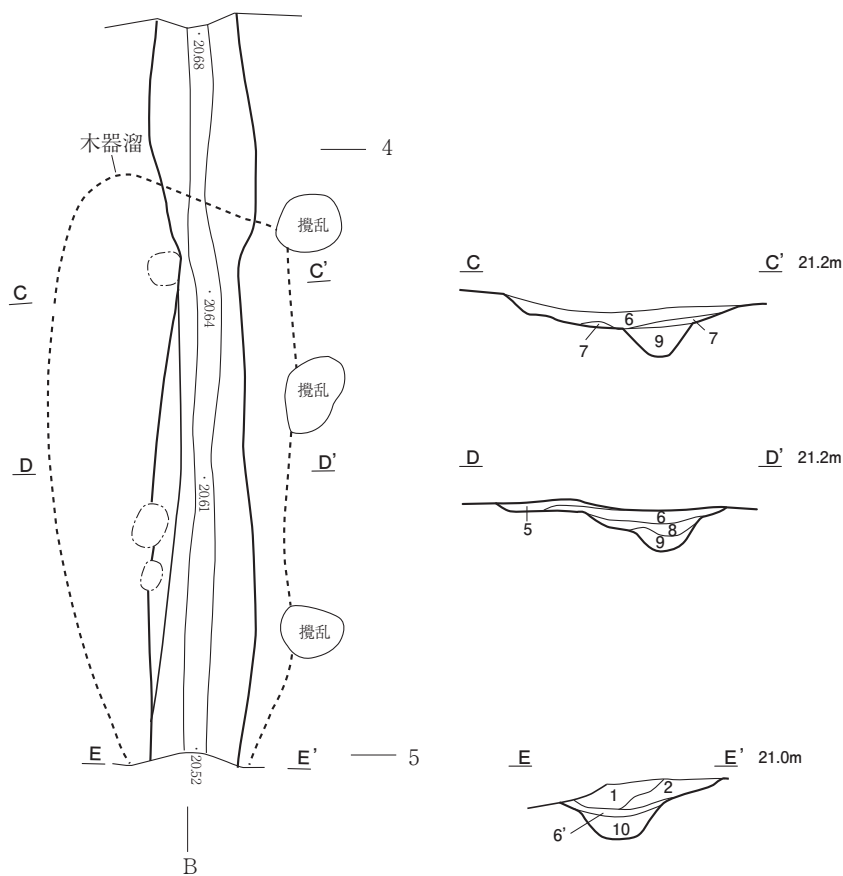


図16 溝1

ピット・小穴(図14、表6・7)

18口のピットと、杭2箇所及び杭穴と思われる小穴17口が検出されている。明確なセット関係が成り立つものは見当たらない。小穴は2面で見逃されたものかもしれない。個々のピット・小穴の詳細は3面柱穴表・小穴表を参照されたい。

表6 3面柱穴表

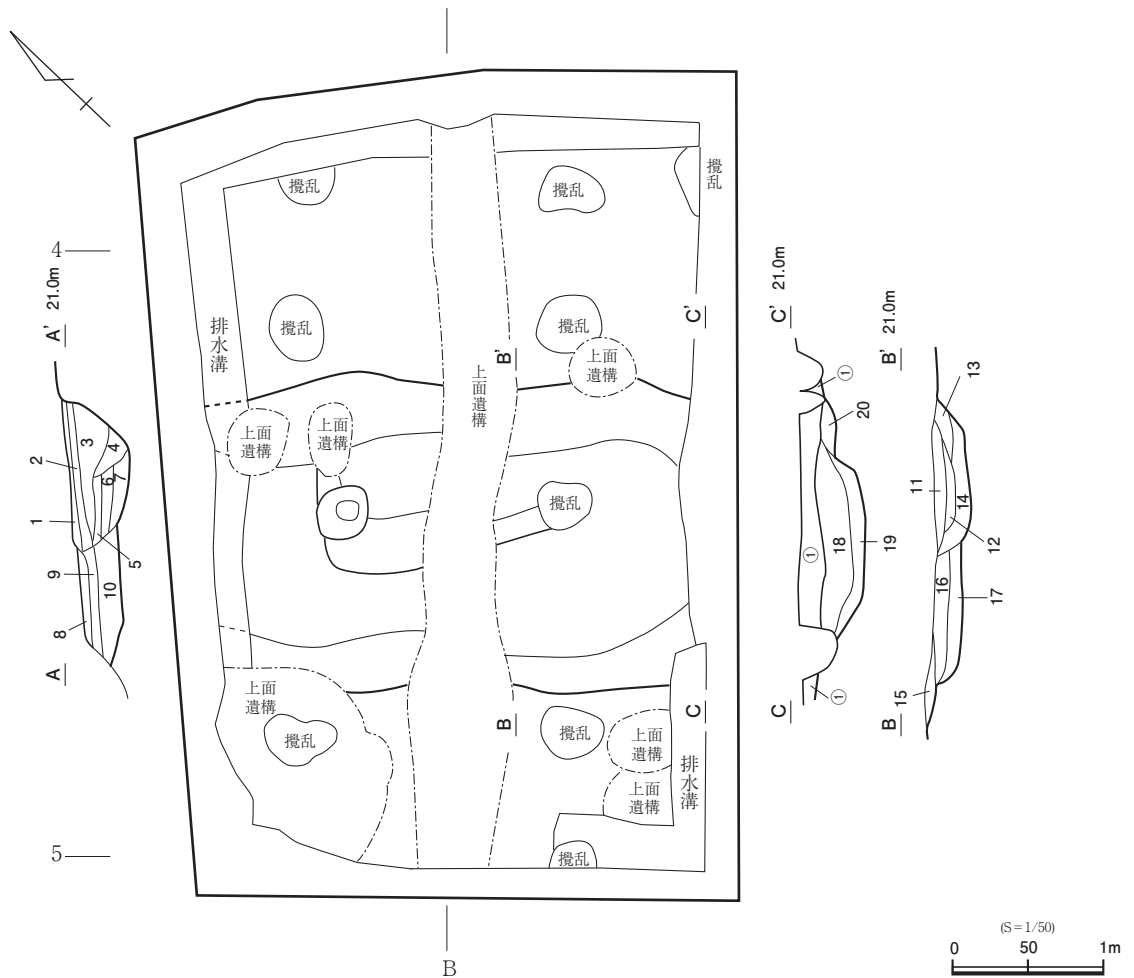
遺構名	長径 × 短径 × 深さ (cm)	底面標高 (m)	備考	礎板等規模：長さ × 幅 × 厚さ (cm)
P 86	50×39×41	20.58		
P 87	36×29×7	20.90	溝1、P97を切る。	
P 88	25×20×3	20.91	P98を切る。	
P 89	19×15×6	20.87		
P 90	25×21×16	20.75	井戸1を切る。	
P 91	44～×40×16	20.76	P92、小穴58との新旧不明。	
P 92	48～×37～×11	20.81	P91、小穴58との新旧不明。	
P 93	22×14×4	20.90		
P 94	19×15×7	20.81	溝1を切る。	
P 95	30×24×(34)	20.57	溝1掘削中に検出。溝1との新旧不明。	
P 96	20×13×(31)	20.60	溝1掘削中に検出。井戸1に切られる。溝1との新旧不明。	
P 97	25×23×(31)	20.64	溝1掘削中に検出。P87に切られる。溝1との新旧不明。	
P 98	22×15×(25)	20.70	溝1掘削中に検出。P88に切られる。溝1との新旧不明。	
P 99	23×?×22	20.70	土層より復元。	
P100	18×?×20	20.78	土層より復元。	
P101	28×?×18	20.80	土層より復元。	
P102	37×?×28	20.93	土層より復元。	
P103	61～×54～×58	20.52		

表7 3面小穴表

遺構名	深さ (cm)	底面標高 (m)	遺構名	深さ (cm)	底面標高 (m)	遺構名	深さ (cm)	底面標高 (m)
小穴42	4	21.00	小穴49	12	20.90	小穴56	5	20.86
小穴43	3	21.00	小穴50	13	20.89	小穴57	3	21.02
小穴44	4	21.02	小穴51	12	20.90	小穴58	15	20.77
小穴45	2	21.02	小穴52	4	20.98	杭 4	長さ7.5～	20.68(杭上)
小穴46	9	20.95	小穴53	4	20.99	杭 5	長さ7.5～	20.85(杭上)
小穴47	2	20.98	小穴54	6	20.90	※杭4は溝4底面で確認。		
小穴48	2	20.98	小穴55	11	20.85			

3面下・溝4(図17)

Ⅱ区で検出された溝状の窪地である。切り合いを持つ複数の遺構が存在するように分層してしまったが、土のわずかな差を遺構風に分層してしまったにすぎない。平面プランは地盤が緩んで、基盤層と色調や土質、混入される粒子に変化の感じられる範囲を掘り上げたものである。堆積土層の項でも触れているが、本址周辺の堆積にはシミ状・ブロック状部分が見受けられるなど、自然的な要因によると思われる不整合が生じている。本址は人為的な掘り込みではなく、何らの理由により地盤が緩んでできた窪地の可能性が高いものと思われる。本址については、あえて整合しない状況を現地調査で記録された事実として報告しておく。掘り込み面が場所により異なる他、覆土の状況も平面プランと整合していない。東壁際(C-C')の①層は図4の21層で、3面の基盤となる自然堆積土である。1・2層については3面を



溝4 土層説明

- | | | | |
|-------------|-----------------------|---------------|------------------------------|
| 1層 灰褐色粘質土 | 混入物を含まない。粘性強い。 | 13層 黒茶色粘質土 | 色調黒味強く、シルト気味。青灰色粘土を含む。 |
| 2層 黒褐色粘質土 | 混入物を含まない。粘性・しまりとも強い。 | 14層 黒茶色粘質土 | シルト気味。木片を含む。しまりなし。 |
| 3層 黒褐色粘質土 | 炭化物を少量含む。しまりなし。 | 15層 黒灰色粘質土 | 木片を含む。粘性あり。しまりなし。 |
| 4層 茶褐色粘質土 | 炭化物・白色粒子を含む。 | 16層 黒灰色粘質土 | 白色粒子を含む。粘性あり。しまり強い。 |
| 5層 黒褐色粘質土 | 白色粒子を含む。しまりなし。 | 17層 黒褐色粘質土 | 白色粘土をブロック状に含む。粘性・しまり弱い。 |
| 6層 黒褐色粘質土 | 混入物を含まない。ややしまる。 | 18層 黒茶色粘質土 | 炭化物を多く、灰褐色粘土塊を少量含む。 |
| 7層 黒褐色粘質土 | 6層よりしまりがある。 | 粘性強い。しまりややあり。 | |
| 8層 茶褐色粘質土 | 木片を含む。粘性あり。 | 19層 黒茶色粘質土 | 16層と同質だが、下に灰白色シルトが含まれ、 |
| 9層 暗茶色粘質土 | 炭化物を少量含む。灰白色シルトを混入する。 | 粘性弱い。 | 16層より粘性に欠ける。 |
| 10層 暗茶褐色粘質土 | 粘性・しまりあり。 | 20層 暗黒茶色粘質土 | 灰褐色粘土塊が16層より多い。粘性ややあり。しまり弱い。 |
| 11層 黒茶色粘質土 | 粘性あり。しまりなし。 | ①層 茶色粘質土 | 炭化物を少量含む。粘性非常に強く、よくしまる。 |
| 12層 黒茶色粘質土 | 白色粘土塊を斑状に混入する。ややしまる。 | | |

図17 溝4

生活面にするにあたり緩んだ地盤を補強するために貼付けられた整地層と思われる。堀上がりの規模は東西に323cmまで、上端幅は最大で221cm。確認面からの深さは16～44cmで、底面高は20.50～20.64cmで安定しない。本址は3面下の遺構として扱ったが、確実に伴う遺物が出土しておらず時期は不明である。

第4節 中世以前 (図 18)

中世の生活面より下層で検出されたものをまとめた。落ち込み2基、ピット21口、杭1箇所及び、杭穴と思われる小穴8口が検出されている。ピットには中世の生活面で見逃された掘り込みも含まれているかもしれない。大方はわずかな土質の違いで曖昧なプランを掘り上げたもので、遺物も出土しておらず、積極的に遺構とし得る理由が見つからない。杭・小穴は2面(3面)で見逃されたものと思われる。ピット・小穴の詳細は中世以前柱穴表・小穴表を参照されたい。

Ⅱ区は調査区壁土層38層相当(20.45m)を最終確認面とし、更に南東壁際に深堀トレンチを設定した。最終確認面では倒木痕が、深堀トレンチでは海拔19.8mで小袋谷川に運ばれたと思われる流木が検出されている。検出された倒木痕の規模は150×144cm、確認面からの深さは20cmで、底面高は20.35mである。

表8 中世以前柱穴表

遺構名	長径 × 短径 × 深さ (cm)	底面標高 (m)	備考 礎板等規模：長さ × 幅 × 厚さ (cm)
P104	18×18×12	20.77	P107との新旧不明。
P105	19×18×12	20.77	
P106	20×17×11	20.78	P107との新旧不明。
P107	61×40～×20 (西) 63×42～×18 (東)	20.80 (西) 20.82 (東)	2口。東西の新旧、P104・106との新旧は不明。
P108	42×36～×9	20.85	
P109	22×19×25	20.76	
P110	24×22×18	20.83	
P111	24×24×20	20.66	
P112	27～×22×13	20.79	P113との新旧不明。
P113	33×31×17	20.75	P112との新旧不明。
P114	25×17～×13	20.77	
P115	27×23～×14	20.76	
P116	38×34～×10	20.62	P121、小穴64・65との新旧不明。
P117	45～×21～×12	20.62	P116・118、小穴64との新旧不明。
P118	27×22～×11	20.63	P117との新旧不明。
P119	22×21×23	20.47	
P120	27×24×10	20.55	
P121	53×28～×10	20.63	P116、小穴63との新旧不明。
P122	42×39×9	20.66	落ち込み1を切る。P123との新旧不明。
P123	73～×46～×14	20.62	落ち込み1を切る。P122との新旧不明。
P124	53～×32～×8	20.64	落ち込み1、小穴59との新旧不明。

表9 中世以前小穴表

遺構名	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
小穴59	11	20.40	調査区壁土層35～36層相当で確認。
小穴60	11	20.21	落ち込み1底面で確認。
小穴61	1	20.31	落ち込み1底面で確認。
小穴62	26	20.44	調査区壁土層35～36層相当で確認。
小穴63	12	20.52	調査区壁土層35～36層相当で確認。
小穴64	12	20.59	調査区壁土層25層～35層上面相当で確認。
小穴65	24	20.67	調査区壁土層25層～35層上面相当で確認。
小穴66	5	20.36	調査区壁土層38層相当で確認。杭と思われる木質遺存。
杭 6	0	20.34 (杭上)	落ち込み1底面で確認。

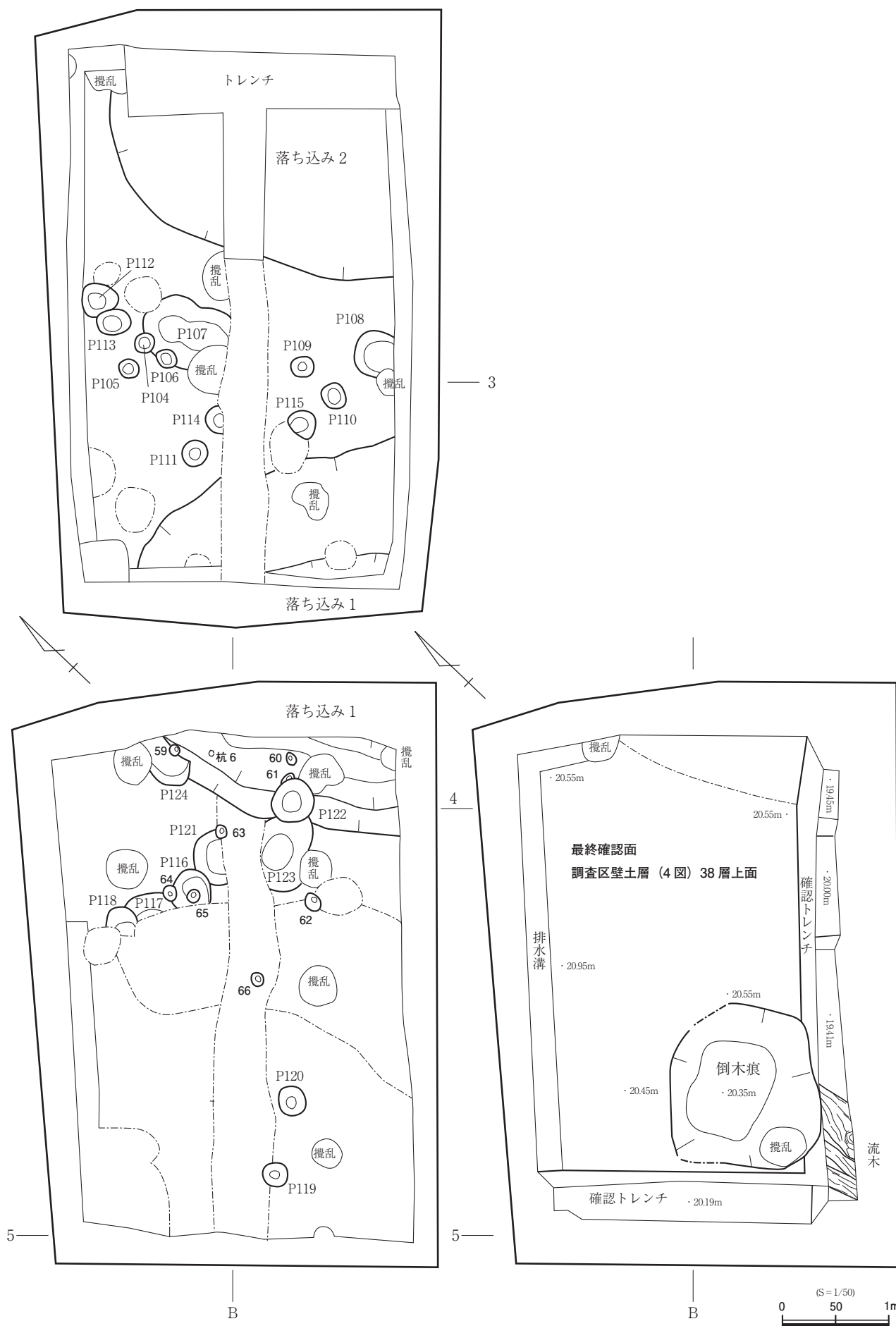


図 18 中世以前遺構配置図

落ち込み1・2 (図19)

調査区東壁際で150cmの距離をおいて南北に並んで検出されている。検出された規模は、落ち込み1が東西方向に240cmまで、南北方向に376cmまで。落ち込み2が東西方向に273cmまで、南北方向に210cmまで。深さは、落ち込み1が48cmで、底面高が20.19m。落ち込み2は安全確保のため完掘せず、115cm (19.80m) の深さで調査を断念した。覆土の堆積状況を見ると、本址は自然に埋没しているものと思われる。また、木片を含む腐食土層を主体としており、落ち込み1の底面に粗砂が溜まる様子が確認できることから、開口時から埋没過程のある時期までは、浸水していたものと推測される。2基の性格については類例を知らず判断できない。

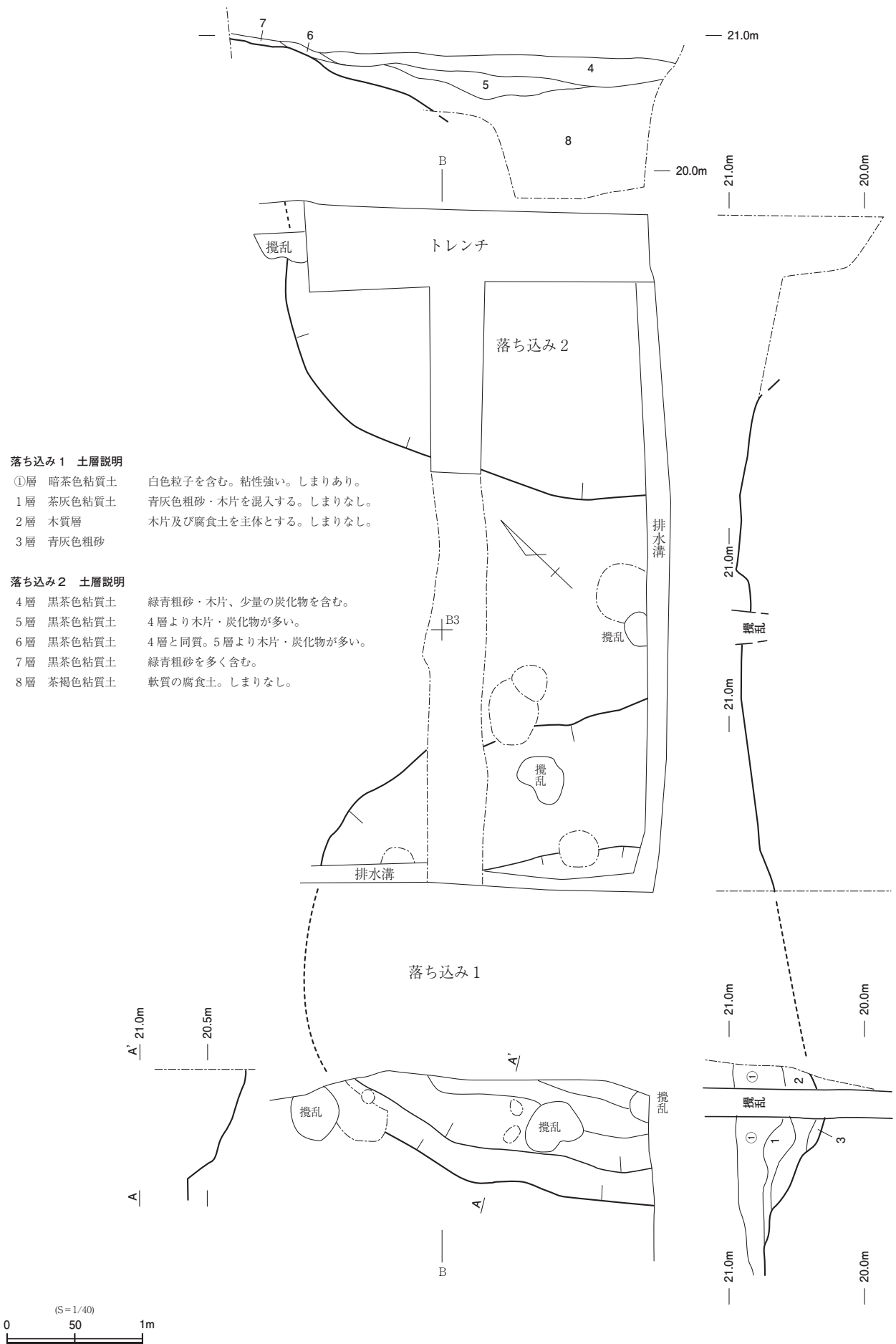


図19 落ち込み1・2

第四章 発見された遺物

今回の調査で発見された遺物には、鎌倉遺跡群で通常出土するものとは異なる特徴を持ったかわらけが含まれている。そのかわらけはロクロ成形で器壁が薄く、胎土は混入物を含まず精良で比較的硬質。内底面のナデ調整がないか、あっても1～2回軽くナデる程度、外底面に糸切り後の板状圧痕が見られない、などの特徴を持ち、また糸切りの糸幅が通常よりも広いものが見受けられる。これまでの鎌倉市内の調査では今小路西遺跡の御成町200番2地点・御成町171番1地点の2ヶ所で近しい特徴を持つかわらけが、まとめて検出されており、御成町200番2地点では出土したかわらけのうち、本遺跡出土のものに近い特徴を持つものを「A類」として報告している。御成町200番2地点でA類とされるものには、御成町171番1地点や本遺跡で出土したものと相違する部分も見られるため、便宜上、本報告書では「A類」を含む、通常のロクロ成形かわらけと胎土や内外底面の調整技法などが異なるものの総称として「II群」の名称を与え、他と区別して扱うこととする。なお、「II群」の名称は通常のロクロ成形のかわらけを「I群」とした分類に対するもので、その上位に更に手づくね成形のものと、ロクロ成形のものとの種別が定義されるものである。本文中では煩雑さを避けるため「II群」の名称のみを用いることとし、観察表の記載も、「II群」のみを表記、調整等も特記すべき事のみにとどめた。

第1節 表土・攪乱・表採出土遺物（図20）

1～5はロクロ成形のかわらけで、1・2は大皿、3～5は小皿である。1は緩く内湾する器形、2は体部中位に弱い稜を持ち、口縁部は外反する。3は背低で見込みの立ち上がりが深く直立気味。4は背高で体部中位に弱い稜を持っている。口唇部にタールの付着が見られる。5はII群で、内底が広く、見込みは折れて立ち上がる。外底周縁の一部に細い簾状の圧痕が見られる。6は龍泉窯系青磁の蓋で、酒会壺に合わせられるものと思われる。素地は緻密、釉調は薄緑色を呈し光沢があり、施釉は薄めで体部外面の回転削り痕が透かし見える。口縁部から縁の下面にかけては露胎で赤茶色を呈する。7・8は肥前伊万里の染付け碗で、18世紀後葉以降の所産である。7は筒型、8は広東型。8の内底中央部は欠損するが、染付け文の端をわずかに確認できる。高台畳付は露胎である。9は瀬戸窯の折縁深皿の口縁部片で、薄緑色を呈する灰釉が漬け掛けされている。10・11は瀬戸・美濃系の陶器で、10は灯明皿、11は小壺である。10は外面に回転ヘラ削り痕が明瞭に残る。11の口唇部から内面肩部にかけては露胎である。12は常滑窯の甕口縁部片で縁帯部のみ遺存する。縁帯幅が5.8cmと広く14世紀後半代の所産である。13は備前窯の甕で16世紀後葉から17世紀前葉頃の所産と思われる。14は堺系の播鉢で、9本組の櫛歯状工具による沈線が内面体部と内底の一部に引かれている。底部はわずかに反って上げ底気味で、周縁の設置部分は摩滅している。15・16は丸瓦、17は平瓦でいずれも18世紀代か、それより新しい時期の所産と思われる。15は凸面ナデ、凹面もナデ調整されるが粗い縄編み痕が残る。側端側の縁辺・側端・側端凸面側角は面取りされている。また、凹面には留め具痕と思われる針金状の鉄分が付着している。16は凸面ナデ。凹面は粗い縄編み痕が残り、先端はナデ落とされて下端へ、凹面側端側の縁辺もナデ落とされて側端に至る。側端はわずかに角度を違える2段の面取りが施されている。17の凹面から側端にかけては丁寧なナデ調整が施され、平滑でやや光沢を持っている。凸面は縄か何らのものを編んだと思われるブツブツとした粒子の痕跡が残る。側端・側端凹面側角は面取りされている。18～23は木製品である。18は箸、19は円盤状の品の残欠と思われる。20・21は草履芯で藁状の繊維と、繊維の圧痕が残っている。22は板目採り、23は柾目採りされた板材。

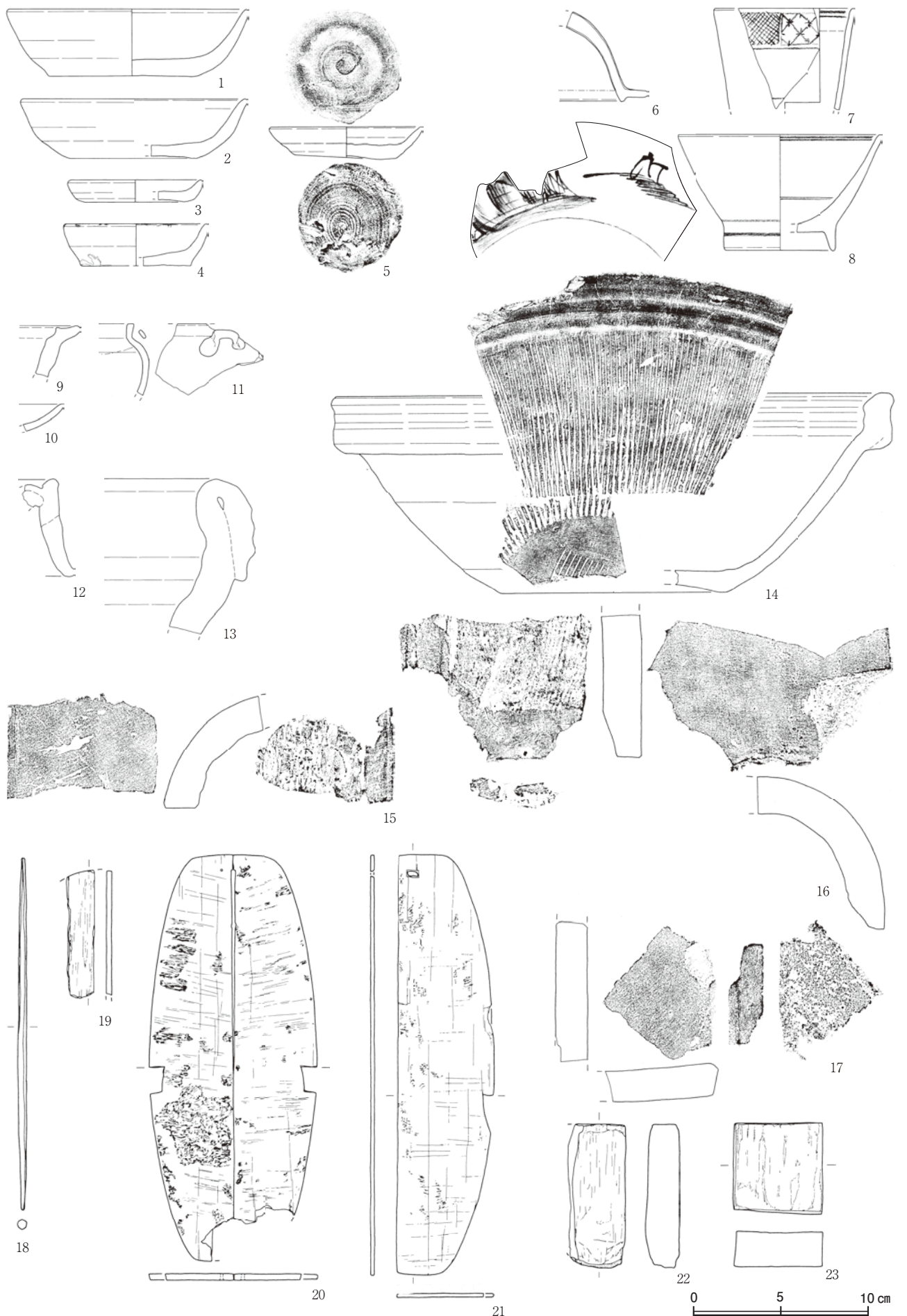


图20 表土·攪乱·表採出土遺物

第2節 中世の出土遺物（図21～29）

1 面上包含層出土遺物（図21）

1はロクロ成形のかわらけの大皿。外反して立ち上がり、体部中位上の弱い稜を経て口縁部は内湾気味に収まる。2は龍泉窯系青磁の双魚文鉢である。

1 面遺構出土遺物（図21）

3・4は土坑1から出土した。3は平瓦で永福寺Ⅲ期瓦である。凹面・凸面ともナデ調整が施されるが、粒子の細かい離れ砂がよく残る。凸面には糸切り痕が見受けられる。4は寛永通宝で混入品。

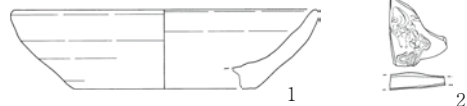
5～7は溝2から出土した。5・6はロクロ成形のかわらけで、器壁薄く、深い器形をとるが、胎土中に混入物をわずかに含んでいる。5は中皿と思われる。底径広めで、深く内湾して立ち上がる。6は直線的に立ち上がって口縁部はわずかに内湾する。7は断面の丸い棒状の木製品で、遺存する一端は斜めに加工されているが、先端は尖らずに丸みを持って収まっている。

8～12は溝3から出土したロクロ成形のかわらけである。8・9は大皿で底径広く背低気味、器壁が薄く内湾する器形をとる。10は極小かわらけ。11・12はⅡ群の小皿で、共に内底が広い。11は器壁厚めで、外面中位に稜を持って開いている。12は緻密胎土で焼き上がり硬質。器壁が薄く、見込みの立ち上がりは深い。外面下位のナデが強く底部は突出気味である。底部は糸切り後に細い簾状の圧痕を残している。

13～16は落ち込み4から出土した。13・14はロクロ成形のかわらけでⅡ群の小皿である。13は緻密胎土で焼き上がり硬質。器壁が薄く、見込みの立ち上がりは深い。外面下位のナデが強く底部が突出して見える。外面中位で屈曲して口縁部は肥厚、内湾している。内底は幅の狭いロクロ目が強く残る。何らの工具が使用されているかも知れない。14は器壁が非常に薄い。底径が狭く、外面下半は底部とほとんど角度を変えずに開くため、連動する内底は広い。外面中位で折れて口縁部は外反しながら開いている。15は丸瓦で永福寺Ⅲ期瓦と思われる。凸面は縦位のヘラナデ調整、凹面は布目痕が残る。16は木製の籠と思われる。角の丸い長方形断面を呈する棒の一端を斜めに切り落として尖らせている。

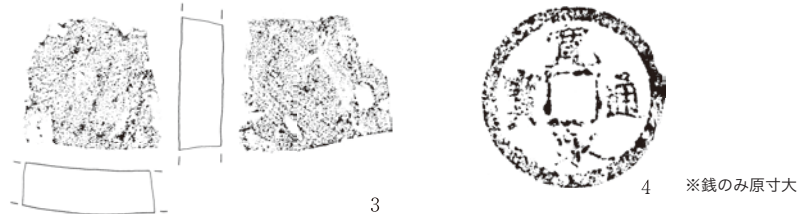
17～20は建物を構成するピットから、21・22は単独のピットから出土している。17はロクロ成形のかわらけ小皿で、薄手で深い形態をとるが、胎土中に混入物がわずかに含まれている。見込みの立ち上がりは深く、口縁部はわずかに外反している。18は鳴滝・向田産の仕上げ砥で、表裏の面を砥面とする。表面には褐色を呈する鉄分が付着している。鉄分は欠損面にも及んでおり、比較的新しい時期に付着したと思われる。19は瀬戸窯の入子で、内底中央を1回ナデ、底部は回転糸切り無調整である。20は尾張型の山茶碗で常滑窯の製品。外面のロクロ目が強く、口唇部は内面側が摘み上がるような形態をとる。13世紀中葉頃の所産。21・22はロクロ成形のかわらけ小皿である。21は混入物を含む弱砂質胎土で、器壁は厚め、外形は椀型に近い。22はⅡ群で、内底が広く、見込みは折れて、わずかに外反しながら直線的に立ち上がる。外面は底部の範囲が判然としない。広い底部を持つと見えるが、狭い底部から角度をほとんど変えずに極端に開く体部下半にまで、糸が切り上がってしまったものかも知れない。その場合の底径は4.4cmである。

1 面上包含層

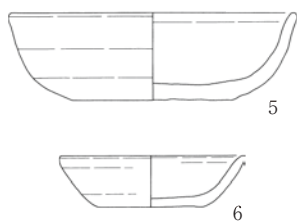


1 面遺構

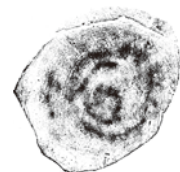
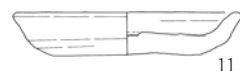
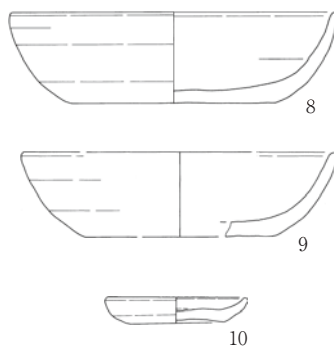
土坑 1



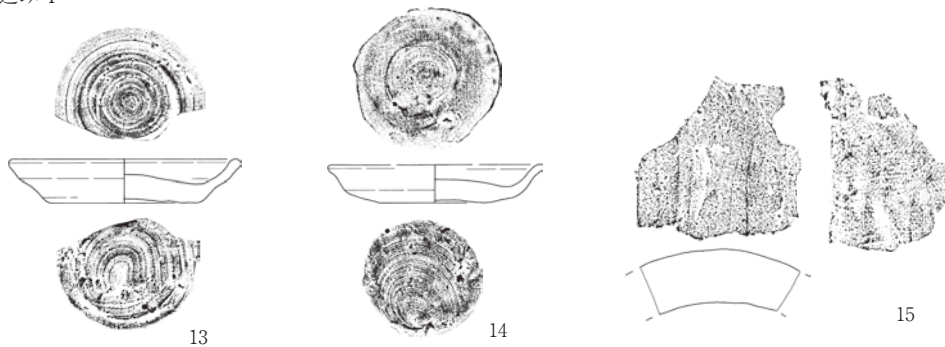
溝 2



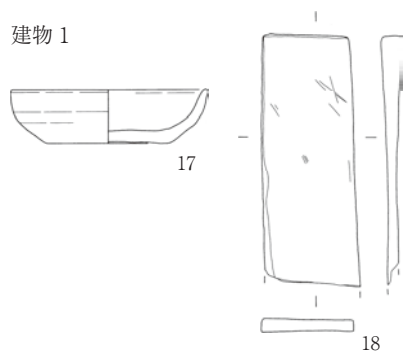
溝 3



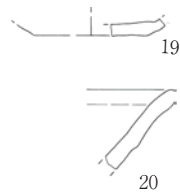
落ち込み 4



建物 1



建物 3



P27

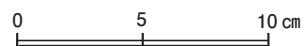
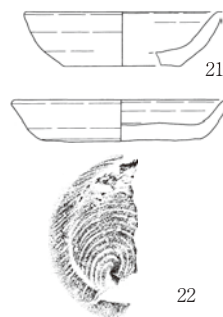


図21 1 面上包含層、1 面遺構出土遺物

2面遺構出土遺物 (図22)

1～8は1面・落ち込み3の調査時に取り上げてしまったものだが、落ち込み5の覆土に含まれていた可能性がきわめて高い。1～3はロクロ成形のかわらけで、2・3はⅡ群である。1は大皿で、見込みの立ち上がりが深く内湾気味。2は底径が狭く背高で、見込みの立ち上がりは深い。体部は内湾して、口縁部下に括れを持って外反している。底部には糸切り後に指頭でナデられた跡が見られるが、調整を目的とした技法上のものとは思われない。3は底径が狭く、体部中位で折れて外反している。4・5は鉄製品で、4は鍋の取手部分と思われる。5.5mmの孔が穿たれている。5は形態ドーナツ状で、断面は円形を呈するものと思われる。遺存状態が悪く詳細不明、用途を特定できない。6～8は木製品で、6は円盤、7・8は箸である。6の上下の刻みと見える部分は欠損部である。

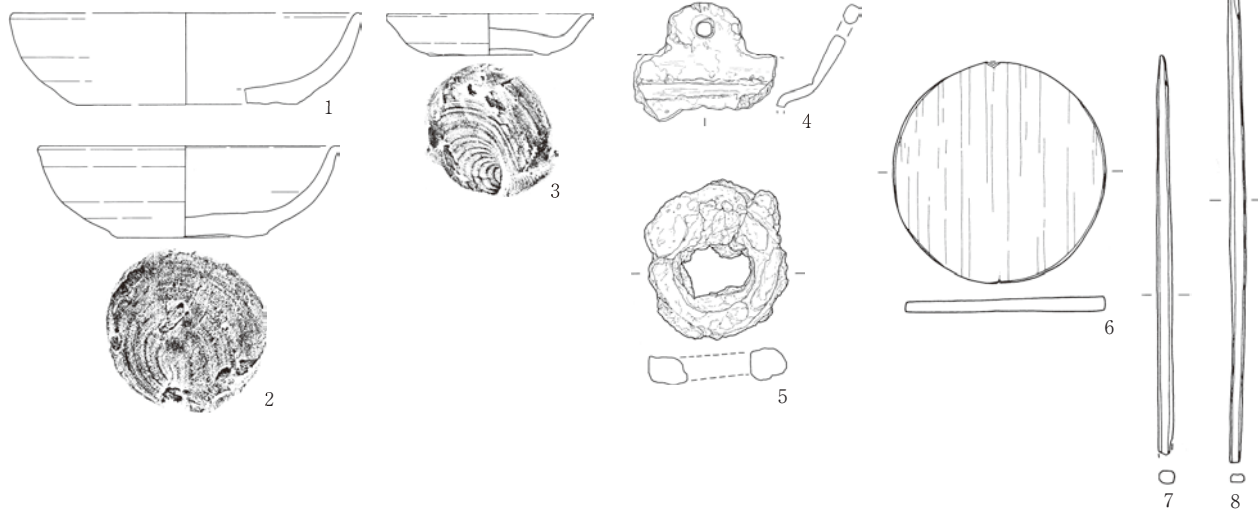
9～13は建物・柱穴列を構成するピットから、14～20は単独のピットから出土している。9は平瓦で凹面は粒子の細かい離れ砂がよく残る。乾燥時の重ね置きにより、斜格子叩きが転写されている。側端・側端凹面側角は面取りされ、側端にはミガキ気味の丁寧なナデ調整が施されている。永福寺Ⅰ期・Ⅱ期に比定される水殿瓦窯の製品と思われる。10・11・13は木製品で、10は角柱状のものの端部を削り尖らせたもの。11は板の端部を丸鑿のような工具で5～6度彫り込み、斜めに落としてしている。側縁は先端寄りの一箇所が丸く穿たれている。12は漆器碗で、黒色の総漆塗りが施された製品である。13は板目に採った材を加工したもので径1.5～2mmの穴が貫通している。裏面は剥離面である。用途は不明。14はロクロ成形のかわらけ大皿で、見込みは深く立ち上がり、口縁部は摘まれて尖り気味に収まる。15は常滑窯の片口鉢Ⅰ類である。丁寧なナデ整形が施され、口縁部は肥厚している。16～20は木製品で、17は箸、それ以外は柁目採りされた薄い板状を呈するもので、いずれも用途を明確にできない。16は板折敷の残欠かもしれない。斜位の刃物痕が1箇所、木目に直交する横方向の細い圧痕が無数に見られる。18は経木折敷の残欠か。19・20は右側縁に刻みが入っている。表面には斜位の刃物痕がわずかに見られる。

2面構成土出土遺物 (図22・23)

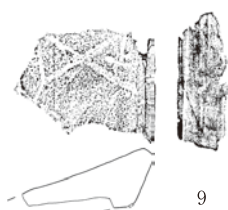
現地調査での検出順に従い、層位・出土位置ごとに、構成土上層・下層(土丹地形)直上・かわらけ溜まりに分けて提示している。23図1～10は上層から出土したロクロ成形のかわらけである。1は背低で内湾気味に開いて立ち上がる。2は底径が大きく背低、直立気味に立ち上がる。3～10はⅡ群に分類されるもの。3は粉質精良土で焼き上がり硬質、器壁が薄く、見込みは深く内湾して立ち上がる。4は底径が小さく背高で、体部中位下で折れて直線的に開いている。3・4ともに大皿に分類される法量を持っている。5～9は小皿。5は軟質気味胎土で内底中央が突出して厚い。体部に丸みがあり口縁部は外面直下を摘んで外反している。6～8は器壁が薄く、浅く開いて立ち上がるもので、6・7は緻密胎土で焼き上がり硬質。6は体部中位に弱い稜を持っている。8の底面は細い簾状の圧痕がわずかに見える。9は軟質気味で体部に丸みがある。10は胎土、調整にⅡ群かわらけと分類し得る特徴を持つが、全体の器形がつかめない。

23図11～29は構成土下層・土丹地形直上から出土したもの。11はてづくね成形で、口縁部と底部の境の稜が弱い。底部の指頭はナデ気味にはいる。12～14はロクロ成形の大皿で、いずれも底径が広く背低の器形をとる。12・13は体部に丸みがあり、14は直線的に開いている。14の内外面にはタール・ススが付着している。内底はべったり広く付着、外面は底部に2箇所熱の当たったと見える部分があり、周囲にススが拡散している。15・16はロクロ成形の小皿で、底径が大きく背低で体部中位に稜を持って外反している。17～20はⅡ群の大皿で、概ね浅い碗型を呈する。19は器壁が薄く、外面下位のロク

落ち込み5



建物4 P3



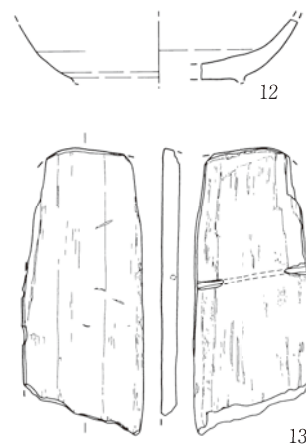
柱穴列1 P17



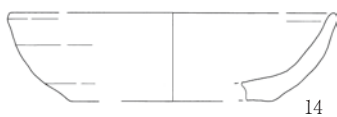
柱穴列2



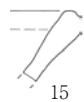
P31



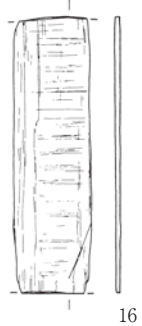
P10



P35



P11



P12



P14

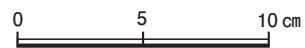
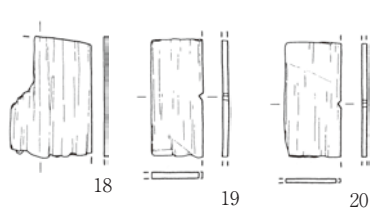
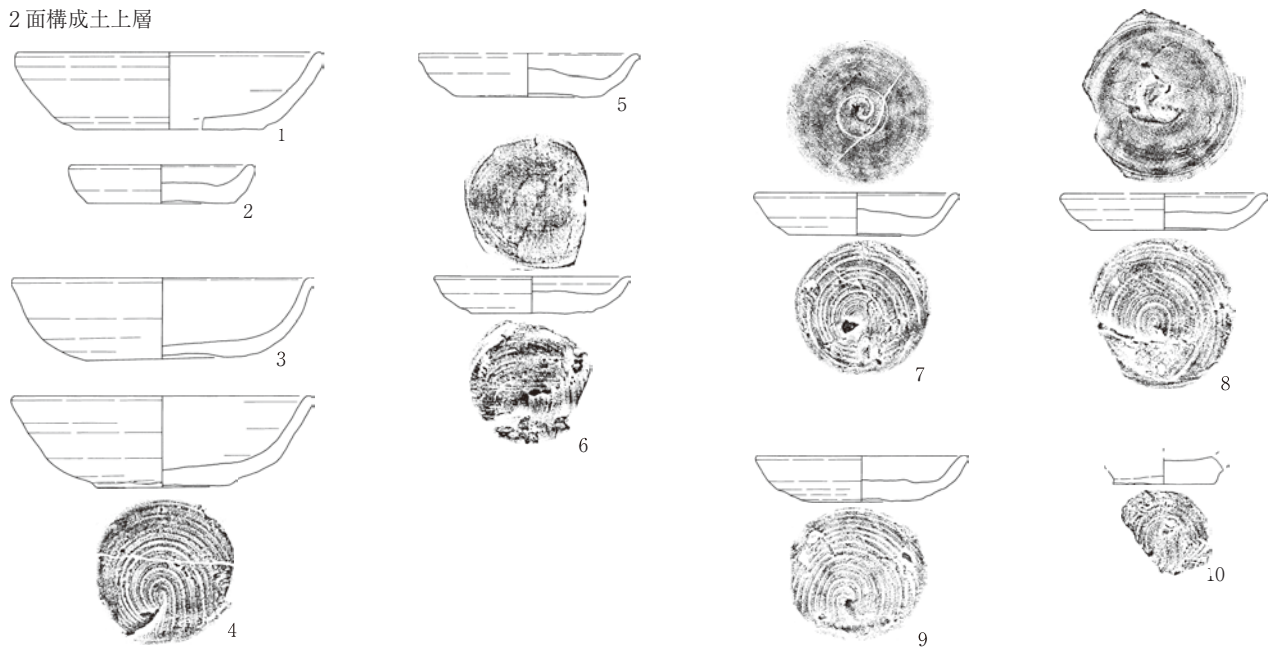


図22 2面遺構出土遺物

2面構成土上層



2面構成土下層・土地形直上

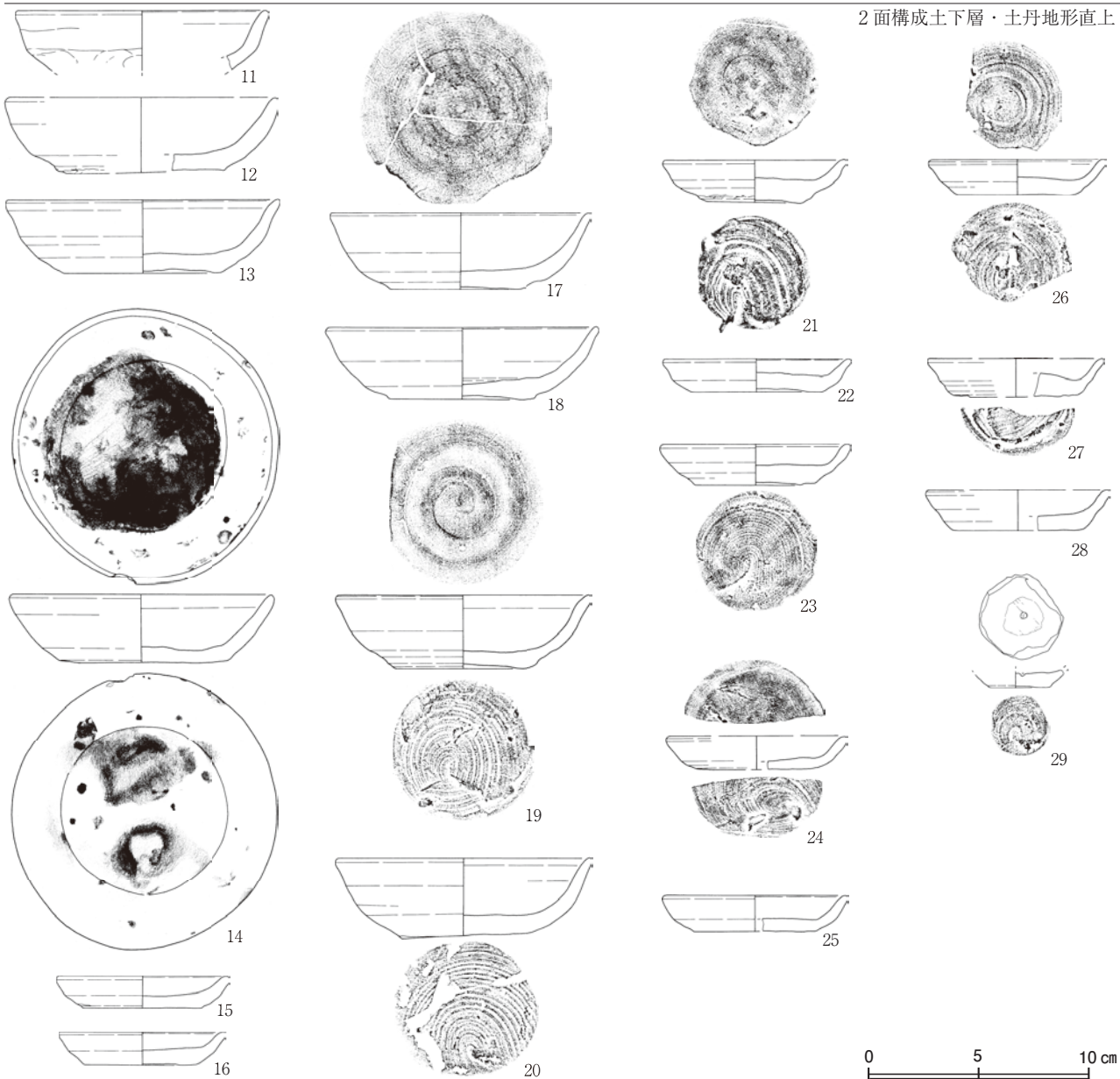
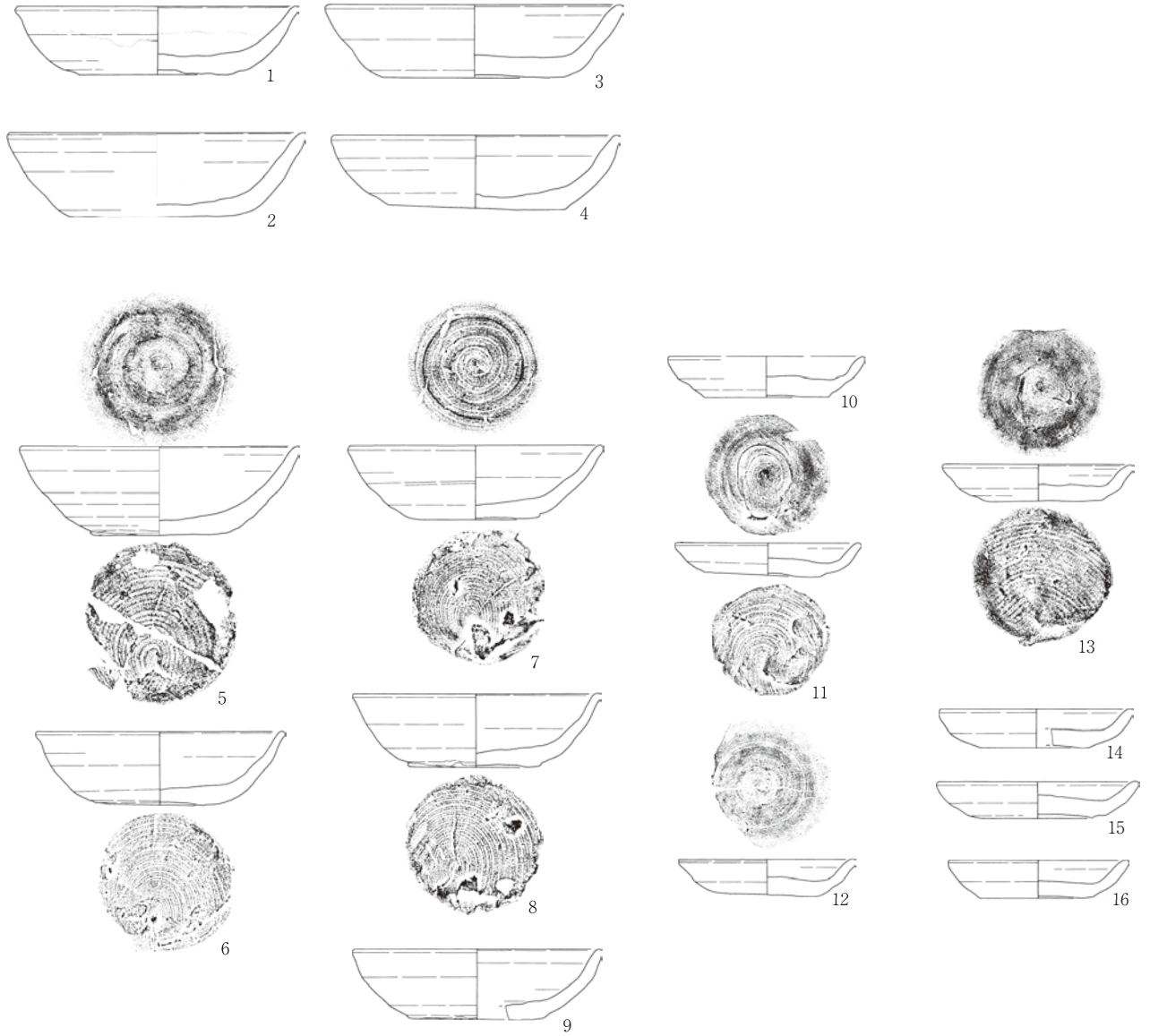
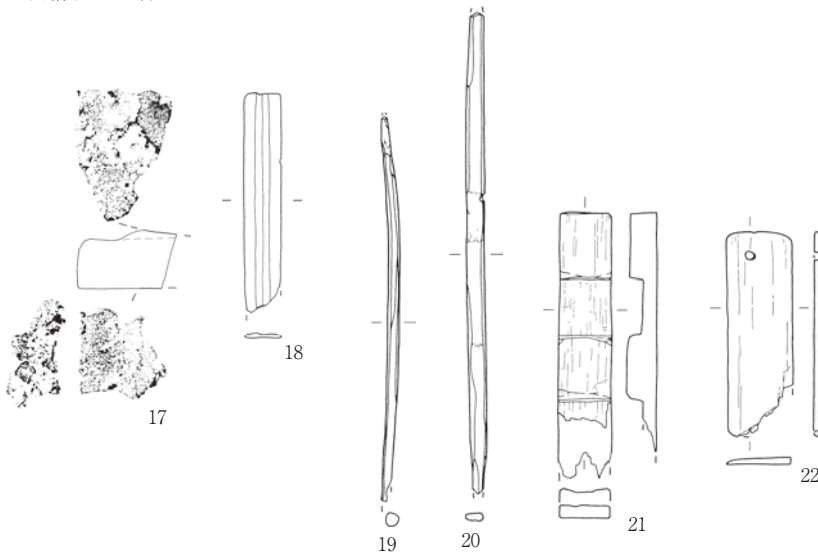


図23 2面構成土出土遺物(1)

2面構成土下層・かわらけ溜まり



2面構成土上層



2面構成土下層・土丹地形直上

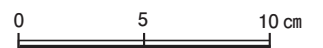
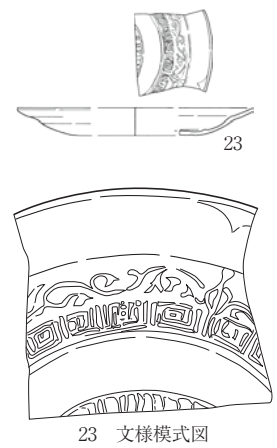


図24 2面構成土出土遺物(2)

ロナデが強いため、底部は突出気味。見込みは深く内湾して立ち上がり、口縁部は外反している。20は器壁厚めで側面はきれいな碗型を呈する。21～28はⅡ群の小皿。21は外面下位のロクロロナデが強いため、底部が突出気味である。外面中位は強く張って、口縁部は直下を摘んで外反している。22～25は丸みがあって浅く開くもの。23は見込みの立ち上がりが深く口縁部が肥厚している。24は器壁が非常に薄い。25は欠損のため内外底部の調整が明らかでなく、器形も鎌倉で一般的な小皿に似ているが、残存底部に板状圧痕が見られないこと、胎土中の含有物の類似から一応Ⅱ群に含めた。26～28は直線的に開くもので、27は内底中央が突出して厚い。29は胎土の特徴からⅡ群と考えているが、全体の器形がつかめない。焼成後に内底中央に小穴を穿ち、周囲を削る加工がなされている。

24図1～16は構成土下層・土丹地形直上のかわらけ溜まりから出土したもの。1～4はロクロ整形のかわらけ大皿である。底径が大きく背低で、1・4は丸みがあり、2・3は直線的に開く。1は口縁部の内外表面が黒変しているが焼成時の焼きムラと思われる。5はⅡ群の大皿である。口径・底径比が大きく、深い碗型を呈する。外面はロクロ目がよく残る。6～9はⅡ群の中皿で、碗型を呈するもの。法量・器形に共通する点が多く、同じ規格で作られたものと思われる。10～16はⅡ群の小皿である。10・11は内底が広く、外面中位で屈曲して立ち上がる。12～16は体部に丸みがあって浅く開くもの。体部中位に弱い稜を持ち、12・13は口縁部が外反気味になる。

24図17～22は構成土上層から出土したもの。17は軒丸瓦で永福寺Ⅲ期瓦と思われる。瓦当部分は剥がれて欠損。凸面ナデ調整、凹面は剥離部分に細かい布目痕が残っている。18は骨製の筭である。19～22は木製品で、19・20は箸、21は格子子で、凸部・凹部は2.5cm間隔で作られ、凸部の高さは0.5～0.6cmである。22は板目採りされた薄い板材で、径2mmの孔が1箇所穿たれている。

23は構成土下層・土丹地形直上で出土した白磁の印花文皿である。内底中央の円形区画凸線内は条線で放射状に埋められるように見える。内底縁周の凸線から折り縁部までの区画は唐草の中心文が円周を分割、区画内は連続する雷文と唐草文が巡っている。口縁部内面は文様帯の分割線と同心円状の位置に花卉をあしらった小飾りが配されている。口唇部は露胎、底部外周には沈線が巡っている。

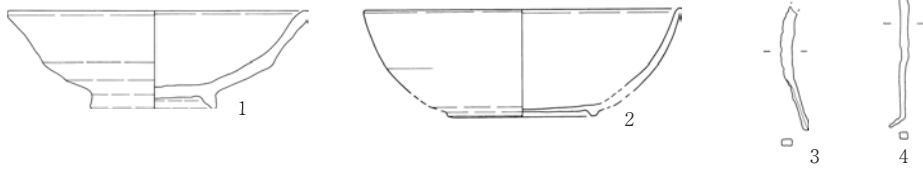
3面上包含層出土遺物(図25)

2面構成土下層の土丹地形層中、及び3面検出までに出土した遺物である。1は吉備系土師器碗で、外面口縁部から体部を横ナデ、底部は高台貼付け後ナデ調整が施されている。2は漆器碗で、黒色の総漆塗りが施された製品である。器壁が非常に薄く、体部下位は木部が腐食し変形している。3・4は鉄製品・釘である。

3面・井戸1出土遺物(図25)

5はロクロ成形のかわらけ大皿で、内底の一部にタールのような物質が付着している(写真図版10)が、灯明皿の使用痕としては、付着位置に不安がある。器壁が厚く、背低で外面中位に張りを持つ。口縁部は弱く外反している。6は漆器皿で、黒色の総漆塗りが施された製品である。体部にはロクロを使用しない面取り部分が4箇所確認される。底部中央に2次加工と見られる四角い孔が穿たれている。7～21は木製品で、7は経木折敷の残欠、8～20は箸、21は草履芯である。箸は断面が正方形に近いものと、扁平で長方形に近いものとに分けられそうである。20は断面長方形を呈する材の側縁角を丁寧に落として加工している。21は表面に藁状繊維の圧痕が残る。

3 面上包含層・土丹地形下



3 面井戸 1

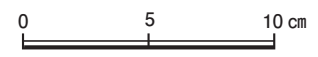
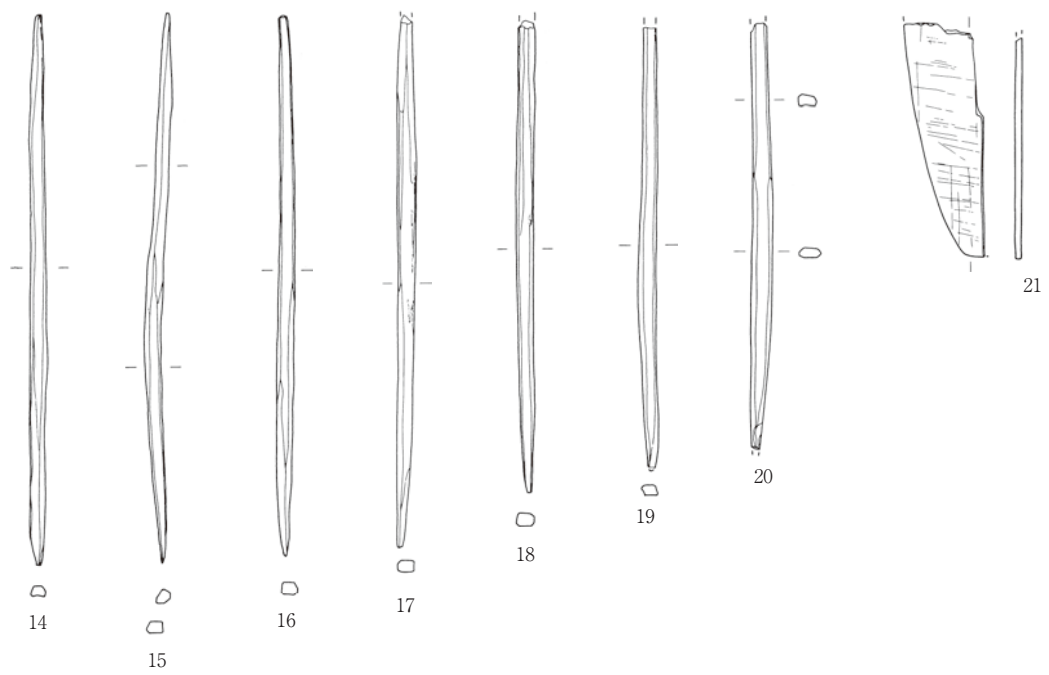
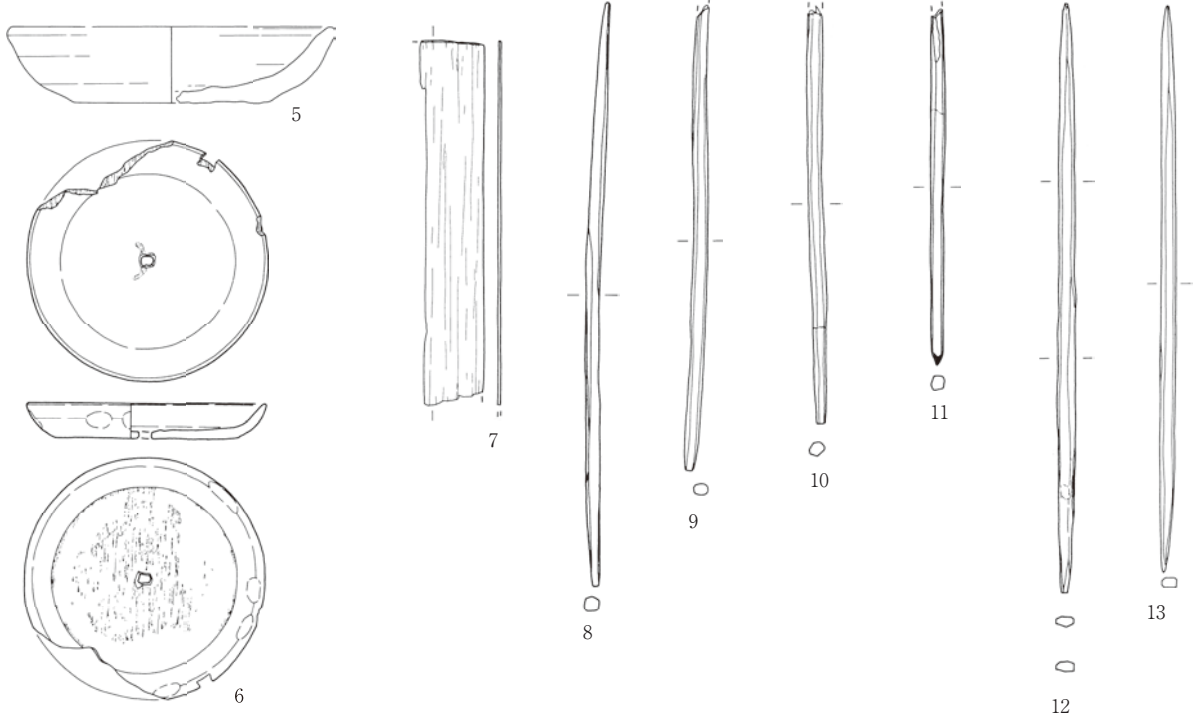


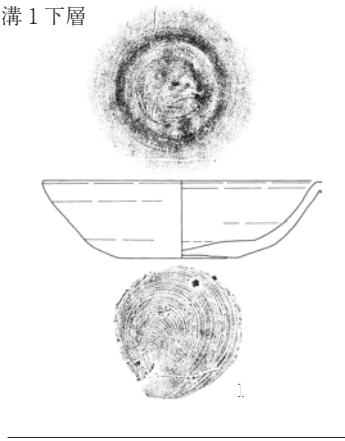
図25 井戸 1 出土遺物

溝1出土遺物(図26～29)

1は溝1下層の溝本体から出土したもの。Ⅱ群かわらけの中皿である。胎土は本遺跡出土の他のⅡ群と異なり、色調橙色を呈し、焼き上がりは硬質だが粉質は強めに感じられる。器壁が非常に薄く、底径の小さい深い形状である。内底中央は凹んでナデ調整が1回施されている。底部の糸切りは糸幅が細い。

図26-2から図29-89までは溝1上層の木器溜まりでまとめて出土したもの。2・3はロクロ成形のかわらけ大皿で、背低の形態をとる。2は直線的に開いて外面中位上の弱い稜を経て口縁部は外反気味。3は器壁厚めで丸みを持って開いている。4は骨製の筭である。以下は全て木製品である。5・6は板杓子で板目に採った材を整形している。7～13は経木折敷、14は板折敷か。俎板に転用されたものと思われる、刃物痕の残るものが多い。7の先端角と14の右側の一部は炭化している。12は長さが6.8cmと短いが、小型品として折敷に含めた。15～43は箸で、27までは両端の残るもの、28～36は先端がわずかに欠けるものの、さほど長さが変わらないものを図示した。27は身に所々炭化する部分が見受けられる。37～43は欠損部が炭化するもの。44～46は菜箸と思われる。太さが0.8～0.9cm程度のものをまとめた。46は上端が丸く整形されて終わっており、片口箸と思われる。47～56は用途不明の棒状のもの。47～49は断面の丸いもの。48・49は下端が炭化して終わる。50・51は断面がかまぼこ状になるもの。51は円柱状のものを縦に裂いたものと見え、その後の仕上げが行なわれずに裂け口を残している。52は上側断面かまぼこ状、下側にいくに従い方形断面に整形され細く削られている。53は上側方形、下側円形断面を呈するもので、下端は上半を斜めに切り落とされている。54は傾いた方形断面を呈するもので、下端は炭化して終わる。55・26は一辺0.4cmの細い角柱状のもの。57～73には先端を尖らせた何らの工具と思われるものをまとめた。57～63は篋。58は上端欠損部、62は下端の篋先が炭化している。64は折れた篋を2時加工したものか。形代などの可能性も考えられる。65～68は小型の篋と考えられるもの。65は上端の左右角を落として三角形に加工、下端は細く尖らせている。66・67は幅0.6～0.65cm、厚さ0.25～0.3cmの薄い棒状のもので、66は上端を表裏から斜めに落として尖らせている。下端は細く削られている。67は先端を欠損するも上端は表から斜めに落とし、下端は細く削り尖らせるものと思われる。68は端から下端に向かい厚さを減じるもので、下端を斜めに落としている。69は上下端を表裏から斜めに落として尖らせるもの。70は下端を三角形に加工し、表裏から斜めに落として尖らせるもの。71は経木折敷の残欠にも見えるが、下端を表裏から斜めに落として両刃にしている。72は上側かまぼこ状断面、下側は扁平に薄く削られ下端を斜めに落として尖らせている。73は角柱の下端を削り尖らせるもの。左側面に1箇所、刃物痕が残る。74は板折敷を転用したものか。板状の材の下端を表裏から斜めに落として尖らせている。裏面には刃物痕が残る。右側から下端角にかけては炭化している。75は下駄、76～80は草履芯である。75は連歯下駄で、左緒穴に木製の楔が打たれている。台部後方には径0.9cmの「●」状の焼印が7箇所押されている。81は櫛。棟と歯の間に切り込みの入らない作りである。82・83は刀子の柄であろう。83は径2mmの目釘穴が穿たれる。割り込み面から欠損面にかけては炭化している。84は機織り具・杼と思われる。85～87は何らの道具になるものかもしれない。85は角柱状の材の表面に斜めに刻みを入れるもの。刻み谷間の平坦部幅は下端で0.5cm、刻み上端は0.8cm程度か。表面に2箇所斜め方向の刃物痕が残っている。86は表裏に窓を持つ穴が、下端から穿たれた穴に貫通している。紐などを通して使ったものか。上下端は表裏から切り込みを入れて折り切っている。87は側面の丸い扁平な材の下端を表裏から抉ってV字状にしたもの。表面に斜め方向の刃物痕を1箇所確認。88は柾目に採った薄い材(経木?)を加工したもの。欠損部に沿って斜め方向の刃物痕が2条見られる。89は板目に採った材を加工したもの。88・89とも用途不明である。

溝1下層



溝1上層・木器溜り

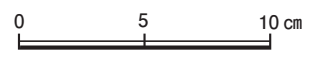
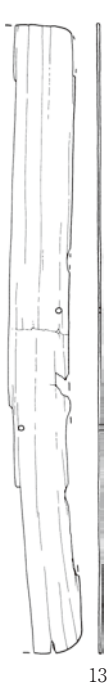
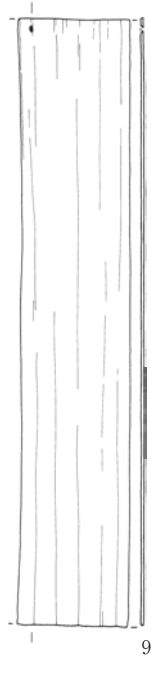
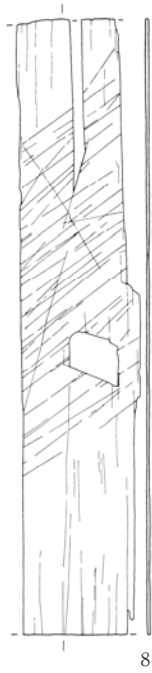
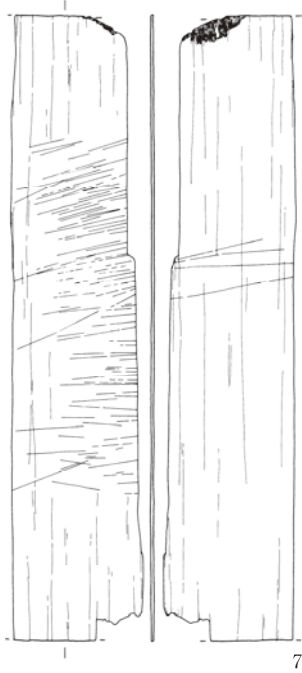
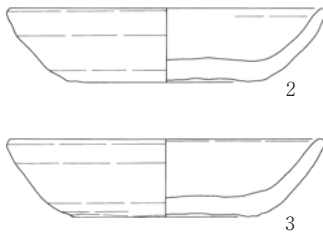


図26 溝1出土遺物(1)



图27 溝1出土遺物(2)

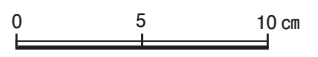
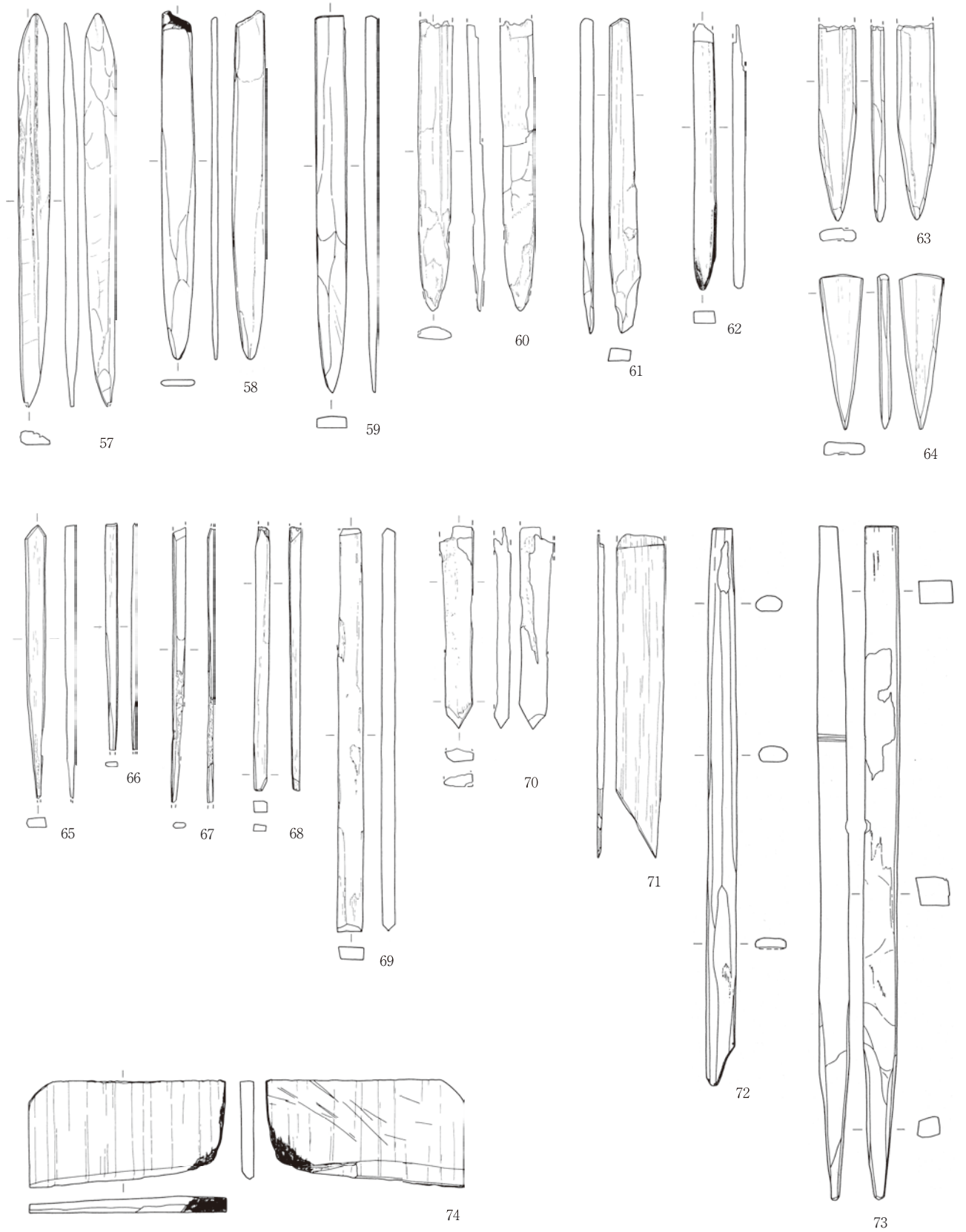


图28 溝1出土遺物(3)

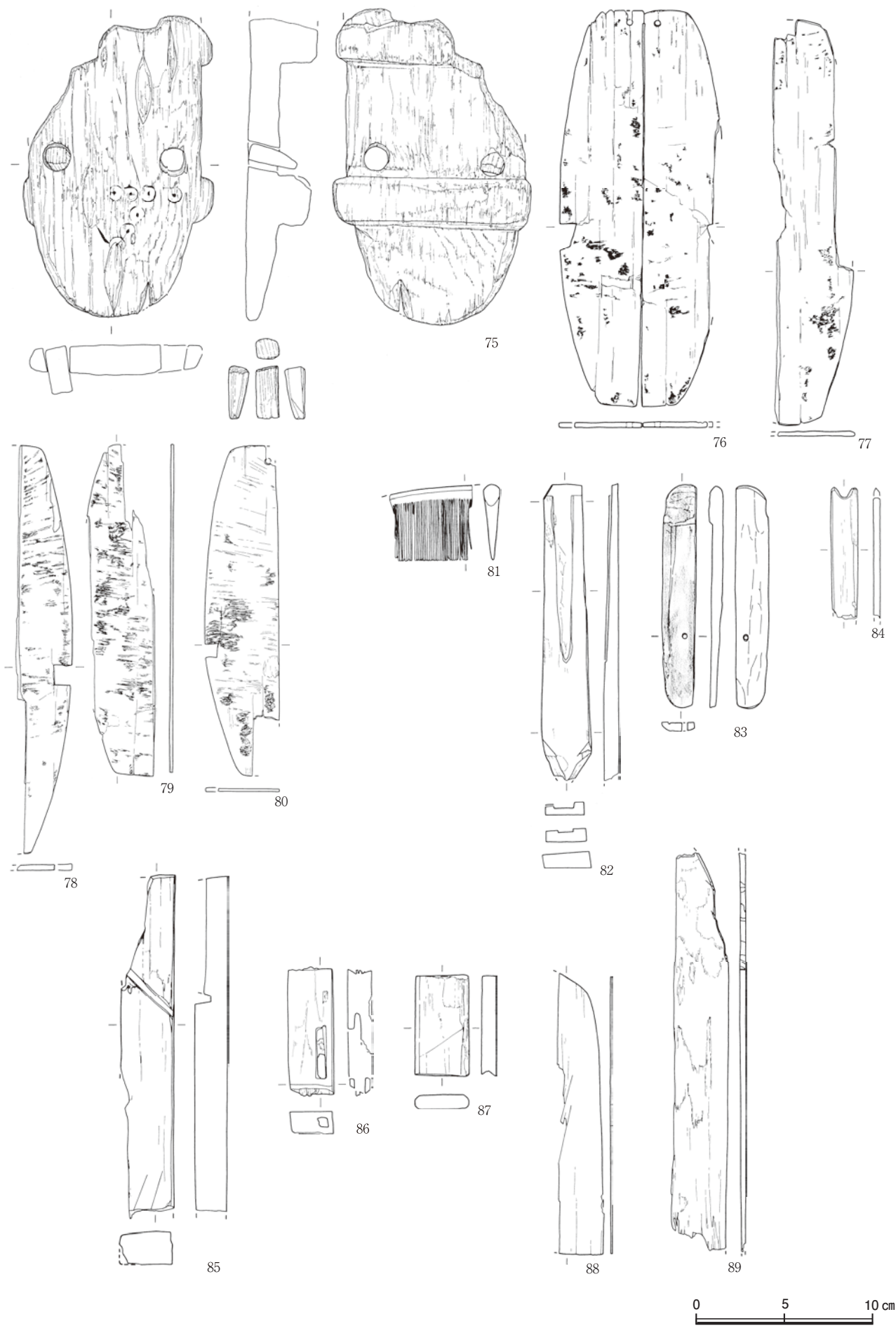


图29 溝1出土遺物(4)

3面構成土出土遺物 (図30)

1はロクロ成形のかわらけ小皿である。底径大きく背低で、器壁薄く見込みは折れて直立気味に立ち上がる。口唇部から内面にススが付着している。2～4は木製品である。2は草履芯で繊維痕がかすかに残る。3は表面の側縁角を面取りしている。上下端は角を斜めに面取りし、端から2cmほどの所に溝を穿っている。作りは丁寧で整っている。調度品の類であろうか。

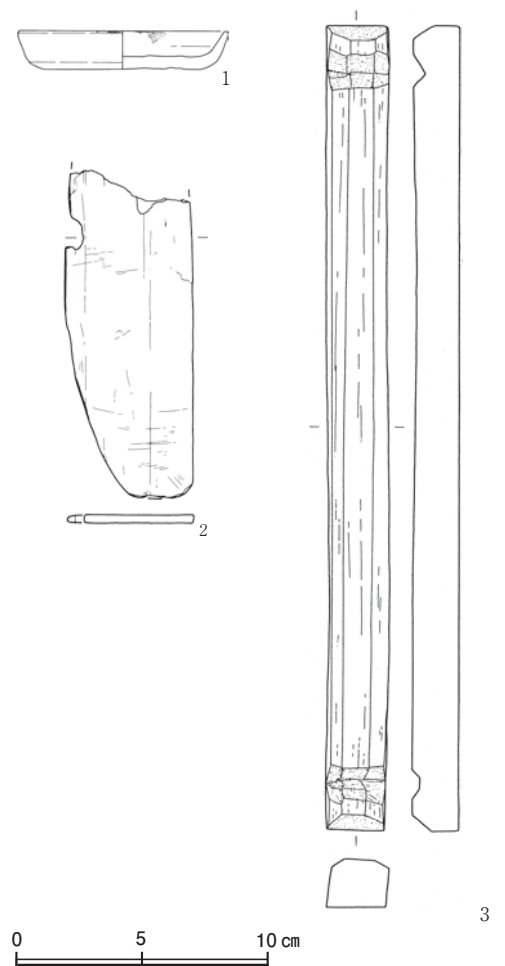


図30 3面構成出土遺物

第3節 古代以前の遺物 (図31)

1は調査区壁土層 (図4) 41層から出土した。弥生時代後期の壺型土器の口縁部片である。内外面ヘラナデ調整、口唇部は単節LR縄文が施文され、口唇部下端の押捺は縄文原体を使用しているように見える。内面及び外面頸部は赤彩されている。2は土師器・甕である。古墳時代後期で6世紀代の所産と思われる。溝4の覆土中で検出されたものだが、溝4の時期を示しているとは思われない。内面頸部から外面は横位ヘラナデ、内面肩部は指頭痕を残して横位のハケ調整が施されている。3は土師器・甕の口縁部片で、内外面ナデ調整。7世紀後半の所産と思われる。4は古墳時代中期の高杯で脚裾片。外面及び内面脚裾付近まで赤彩、ミガキ調整が施されている。5は須恵器・甕の口縁部片で古墳時代後期以降の所産である。

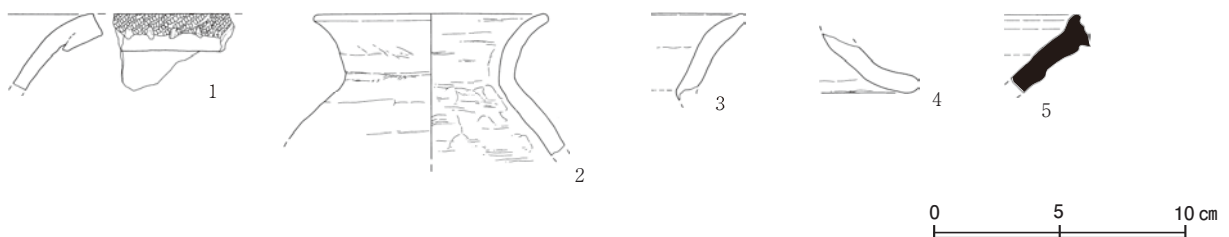


図31 古代以前の遺物

表10 遺物観察表(1)

図	No.	出土位置	種別	残存率	(口径・底径・器高) (長さ・幅・厚さ)			色調・胎土・釉薬・(重さ)外・備考
20	1	表土	かわらけ	口1/3 底1/2	(13.5)	7.5	3.8	淡橙色・混入物少なめ弱粉質土
20	2	表土	かわらけ	口1/4 底2/5	(12.6)	(7.4)	3.4	にぶい淡橙色・混入物含む弱粉質土
20	3	表土	かわらけ	口～底 1/3	(7.4)	(5.6)	1.3	にぶい淡橙色・混入多い弱砂質土
20	4	攪乱	かわらけ	口～底 1/5	(8.0)	(6.2)	2.3	橙色・混入物含む弱砂質土 灯明皿
20	5	表採	かわらけ	口3/5 底全	8.6	5.8	1.8	Ⅱ群 淡褐色・弱砂質良土 内底：弱ナゲ2回 糸切り→細い簾 状圧痕
20	6	表土	龍泉窯系 青磁蓋	口縁部片				素地：白色微粒子含む明灰白色緻密土 釉調：薄緑色透明・光沢あり
20	7	表土	肥前伊万里 染付碗	口1/6	(7.8)			素地：白色砂質土 釉調：白色透明・細かい貫入/筒型
20	8	表土	肥前伊万里 染付碗	口1/6 底1/2	(11.5)	(6.1)	6.6	素地：微細透明粒子含む灰色砂質土 釉調：青味灰白色透明/広東型
20	9	表採	瀬戸窯 折縁深皿	口縁部片				素地：黄味灰白色砂質土(硬質) 釉調：薄緑色灰釉・細かい貫入
20	10	表土	瀬戸・美濃系陶器 灯明皿	口縁部片				素地：淡黄色弱砂質土 釉調：濃茶色鉄釉
20	11	表土	瀬戸・美濃系陶器 壺	口～体部 片				素地：気孔ある淡黄白色砂質土 釉調：淡黄白色透明釉・細かい貫入
20	12	表土	常滑窯 甕	口縁部片				黒灰色・弱砂質土 器表：暗茶色
20	13	表土	備前窯 甕	口縁部片				赤色・弱砂質土 器表：濃茶～暗赤色
20	14	攪乱	堺系陶器 挿鉢	口1/5 底1/8	(30.8)			灰色・白濁粒多い弱粘質粗土(硬質) 器表：黒～黒赤色
20	15	表土	丸瓦	残欠	5.8～	5.6～	2.0	明灰色・砂質土(硬質) 器表：黒灰色 凹面鉄分付着
20	16	攪乱	丸瓦	残欠	8.2～	7.3～	2.2	明灰色・砂質土(硬質) 器表：黒灰色
20	17	表土	平瓦	残欠	7.8～	6.4～	1.9	白灰色・砂質土(軟質気味) 器表：黒灰色
20	18	表土	木製品 箸		19.9	0.5	0.55	
20	19	攪乱	木製品 円板?		7.1～	1.6～	0.3	
20	20	表採	木製品 草履芯		23.0	9.6	0.3	
20	21	表土	木製品 草履芯		23.9	5.5～	0.2	
20	22	攪乱	木製品 端材		8.2	3.3～	1.9	
20	23	攪乱	木製品 端材		5.2	5.1	2.0	
21	1	1面	かわらけ	口～底 1/4	(12.0)	(7.2)	3.1	褐色・混入物少なめ弱砂質土
21	2	1面	龍泉窯系青磁 双魚文鉢	底部片				素地：明白色精良 釉調：緑青色透明・貫入

遺物観察表 (2)

図	No.	出土位置	種別	残存率	(口径・底径・器高) (長さ・幅・厚さ)			色調・胎土・釉薬・(重さ)外・備考
21	3	1面 土坑1	平瓦	残欠	5.2～	5.2～	1.7	灰白色・白色粒子含む砂質土(硬質)
21	4	1面 土坑1	銅製品 銭	完形	径2.4厚 0.05孔 径0.6			重さ1.9g 寛永通宝
21	5	1面 溝2	かわらけ	口1/8 底全	(11.2)	6.4	3.5	淡橙色・混入物少なめ粉質良土
21	6	1面 溝2裏込	かわらけ	口1/5 底6/7	(7.2)	4.2	2.0	淡橙色・混入物少ない粉質良土
21	7	1面 溝2裏込	木製品 用途不明		18.7～	1.0～1.2	0.9～1.3	
21	8	1面 溝3	かわらけ	口1/6 底1/3	(12.8)	(8.0)	3.6	淡橙色・混入物少ない粉質良土
21	9	1面 溝3	かわらけ	口1/8 底1/3	(12.3)	(7.5)	3.3	橙色・混入物少ない粉質良土
21	10	1面 溝3裏込	かわらけ	口～底 3/4	5.4	3.8	1.0	淡褐色・混入物少ない粉質土
21	11	1面 溝3裏込	かわらけ	口～底 4/7	8.7	5.9	1.7	Ⅱ群 淡褐色弱粉質良土 内底：弱ナデ1回
21	12	1面 溝3裏込	かわらけ	口1/4 底2/3	(8.7)	6.1	1.7	Ⅱ群 淡褐色粉質精良土(堅緻) 内底弱ナデ2回 糸切り→細い簾状 圧痕
21	13	1面 落ち込み4	かわらけ	口2/5 底1/2	(8.8)	5.8	1.7	Ⅱ群 褐色粉質精良土(堅緻) 内底無調整 糸切り糸幅：広い
21	14	1面 落ち込み4	かわらけ	口1/ 底全	(8.3)	4.5	1.5	Ⅱ群 灰白色粉質精良土(堅緻) 内底無調整
21	15	1面 落ち込み4	丸瓦	残欠	6.4～	6.3～	2.0	橙褐色・白色粒子含む砂質土(硬質) 器表：灰色
21	16	1面 落ち込み4上層	木製品 篋		23.1	1.1	0.65	
21	17	1面 建物1 P22	かわらけ	口2/5 底1/2	(7.6)	4.9	2.1	淡褐色・混入物少ない粉質良土
21	18	1面 建物1 P23	石製品 砥石	下端欠損	(9.85)	3.7	0.75	鳴滝向田産 仕上げ砥
21	19	1面 建物3 P18	瀬戸窯 入れ子	底部片		(4.6)		灰色・砂質土
21	20	1面 建物3 P20	尾張型 山茶碗	口縁部片				灰白～灰色・長石粒・黒色粒含む砂 質土
21	21	1面 P27	かわらけ	口～底 2/7	(7.7)	(4.5)	2.1	淡褐色・混入物少なめ弱砂質土
21	22	1面 P27	かわらけ	口～底 2/3	(8.4)	(6.3)	1.6	Ⅱ群 淡褐色・弱粉質良土 内底無調整 糸切り糸幅：広い
22	1	2面 落ち込み5	かわらけ	口1/8 底1/4	(13.7)	(9.0)	3.6	橙色・混入物含む弱砂質土
22	2	2面 落ち込み5	かわらけ	口1/8 底全	(11.7)	6.3	3.6	Ⅱ群 淡褐色・弱粉質良土 内底無調整 糸切り糸幅：広い→指 頭ナデ
22	3	2面 落ち込み5	かわらけ	口1部 底全	(7.9)	4.7	1.6	Ⅱ群 淡褐色・弱粉質良土 内底無調整 糸切り糸幅：広い
22	4	2面 落ち込み5	鉄製品 鍋?					重さ57.7g 取手孔径0.55

遺物観察表(3)

図	No.	出土位置	種別	残存率	(口径・底径・器高) (長さ・幅・厚さ)			色調・胎土・釉薬・(重さ)外・備考
22	5	2面 落ち込み5	鉄製品 用途不明		6.2	5.4	1.3	重さ92.9g
22	6	2面 落ち込み5	木製品 円板		8.7	8.3	0.6~0.4	
22	7	2面 落ち込み5	木製品 箸		15.6~	0.6	0.5	
22	8	2面 落ち込み5	木製品 箸		18.8	0.6	0.35	
22	9	2面 建物4 P3	平瓦	残欠	3.8~	4.6~	1.9	灰白色・白色粒子含む弱粘質土(軟質) 器表:黒色
22	10	2面 柱列1 P17	木製品 用途不明		10.1~	1.2~	1.4~	
22	11	2面 柱列2 P15	木製品 用途不明		6.9~	3.0	1.0	
22	12	2面 柱列2 P31	漆製品 椀	底1/3		(6.7)		
22	13	2面 柱列2 P31	木製品 用途不明		11.2~	4.8~	0.55~ 0.7	
22	14	2面 P10	かわらけ	口1部 底1/4	(12.9)	(8.0)	3.5	にぶい橙褐色・混入物含む弱粉質土
22	15	2面 P35	常滑窯 片口鉢I類	口縁部片				明灰色・長石粒含む砂質粗土
22	16	2面 P11	木製品 板折敷?		10.9~	3.0~	0.15~ 0.2	
22	17	2面 P12	木製品 箸		12.2~	0.6	0.5	
22	18	2面 P14	木製品 経木折敷?		4.8~	3.2~	0.1	
22	19	2面 P14	木製品 用途不明		4.5~	2.25~	0.18	薄板状加工品
22	20	2面 P14	木製品 用途不明		4.7~	2.0~	0.22	薄板状加工品
23	1	2面構成土 上層	かわらけ	口1/3 底1/2	(11.9)	7.5	3.0	橙色・混入物少ない弱粉質良土(硬質)
23	2	2面構成土 上層	かわらけ	口1/3 底3/5	(7.1)	5.9	1.5	橙色・混入物多い砂質土
23	3	2面構成土 上層	かわらけ	口3/4 底全	11.7	6.5	3.3	II群 淡褐色・粉質精良土(硬質) 内底無調整 糸切り糸幅:広い
23	4	2面構成土 上層	かわらけ	口3/4 底全	11.6	5.5	3.6	II群 淡褐色・粉質精良土(硬質) 内底無調整 糸切り糸幅:広い
23	5	2面構成土 上層	かわらけ	口1部 底2/7	(8.6)	(5.7)	1.7	II群 淡橙色・粉質良土 内底無調整 糸切り糸幅:広い
23	6	2面構成土 上層	かわらけ	口1部 底3/4	(7.6)	4.8	1.4	II群 淡褐~黒褐色・粉質精良土(堅緻) 内底弱ナデ2回 糸切り糸幅:広い →細い簾状圧痕
23	7	2面構成土 上層	かわらけ	口1/4 底全	(7.8)	5.1	1.7	II群 淡橙~暗赤色・粉質精良土(堅緻) 内底無調整 糸切り糸幅:広い
23	8	2面構成土 上層	かわらけ	口2/7 底全	(7.9)	5.7	1.5	II群 淡褐色・粉質精良土(堅緻) 内底弱ナデ1回 糸切り糸幅:広い →細い簾状圧痕

遺物観察表(4)

図	No.	出土位置	種別	残存率	(口径・底径・器高) (長さ・幅・厚さ)			色調・胎土・釉薬・(重さ)外・備考
23	9	2面構成土 上層	かわらけ	口1/3 底全	(8.2)	4.8	1.8	Ⅱ群 暗褐色・弱粉質良土 内底無調整 糸切り糸幅：広い
23	10	2面構成土 上層	かわらけ	底全		4.0		Ⅱ群 淡褐色・弱粉質良土 内底無調整 糸切り糸幅：広い
23	11	2面構成土 下層	かわらけ	口1/3	(11.2)			手づくね成形／淡褐色・混入物含む 弱粉質土
23	12	2面構成土 下層	かわらけ	口～底 1/3	(12.0)	(7.6)	3.4	橙色・混入物含む弱砂質土
23	13	2面構成土 下層	かわらけ	口1/4 底2/3	(12.2)	7.0	3.3	橙色・混入物含む弱砂質土
23	14	2面構成土 下層	かわらけ	略完形	11.7	7.7	3.1	淡褐色・混入物含む弱砂質土 灯明皿
23	15	2面構成土 下層	かわらけ	口1/6 底1/4	(7.5)	(5.5)	1.4	淡褐色・混入物含む粉質土(軟質)
23	16	2面構成土 下層	かわらけ	口2/5 底全	(7.4)	5.1	1.4	暗褐色・混入物含む弱粉質土
23	17	2面構成土 下層	かわらけ	口1/4 底全	(11.6)	6.0	3.4	Ⅱ群 にぶい褐～橙色・弱粉質土 内底無調整
23	18	2面構成土 下層	かわらけ	口1/3 底3/4	(12.1)	6.5	3.2	Ⅱ群 暗褐色・弱粉質良土 内底無調整
23	19	2面構成土 下層	かわらけ	口1/4 底全	(11.2)	6.0	3.3	Ⅱ群 淡褐色・粉質精良土(硬質) 内底無調整 糸切り糸幅：広い
23	20	2面構成土 下層	かわらけ	完形	11.3	5.8	3.6	Ⅱ群 淡褐～暗褐色・粉質良土 内底無調整 糸切り糸幅：広い
23	21	2面構成土 下層	かわらけ	口1/4 底全	(8.1)	5.0	1.9	Ⅱ群 淡褐色・弱粉質良土 内底無調整 糸切り糸幅：広い
23	22	2面構成土 下層	かわらけ	口1/5 底1/4	(8.2)	(5.8)	1.5	Ⅱ群 淡褐色・弱粉質良土 内底弱ナデ1回
23	23	2面構成土 下層	かわらけ	口1部 底全	(8.3)	5.4	1.8	Ⅱ群 褐～暗褐色・弱粉質精良土(硬質) 内底無調整
23	24	2面構成土 下層	かわらけ	口1/6 底2/5	(7.9)	(5.5?)	1.9	Ⅱ群 淡橙色・粉質精良土(硬質) 内底弱ナデ2回まで
23	25	2面構成土 下層	かわらけ	口2/5 底1/4	(8.1)	(5.5)	1.6	Ⅱ群? 暗褐色・弱粉質良土 内底調整・糸切り幅：不明
23	26	2面構成土 下層	かわらけ	口1部 底1/3	(7.8)	5.7	1.6	Ⅱ群 淡褐色・粉質精良土(硬質) 内底弱ナデ1回 糸切り糸幅：広い
23	27	2面構成土 下層	かわらけ	口1部 底1/3	(7.9)	(5.6)	1.7	Ⅱ群 淡褐色・粉質精良土(硬質) 内底無調整 糸切り糸幅：広い
23	28	2面構成土 下層	かわらけ	口1部 底2/5	(8.1)	(6.0)	1.8	Ⅱ群 にぶい淡橙色・弱砂質良土 内底弱ナデ1回
23	29	2面構成土 下層	かわらけ	底全		3.8		Ⅱ群 淡橙色・粉質良土 内底ケズリ痕・小穴(2次加工)
24	1	2面構成土 かわらけ溜	かわらけ	口～底 1/3	(12.3)	(7.0)	3.0	淡褐色・混入物多め弱粉質土
24	2	2面構成土 かわらけ溜	かわらけ	口3/4 底全	12.9	7.9	3.7	淡褐色・混入物少なめ弱粉質土
24	3	2面構成土 かわらけ溜	かわらけ	口～底 1/3	(12.9)	(8.2)	3.2	淡褐色・混入物含む弱粉質土

遺物観察表(5)

図	No.	出土位置	種別	残存率	(口径・底径・器高) (長さ・幅・厚さ)			色調・胎土・釉薬・(重さ)外・備考
24	4	2面構成土 かわらけ溜	かわらけ	口1/3 底全	(12.5)	7.9	3.3	橙色・混入物多め弱砂質土
24	5	2面構成土 かわらけ溜	かわらけ	口2/5 底全	(12.2)	6.1	4.0	Ⅱ群 淡褐色・弱粉質良土 内底無調整
24	6	2面構成土 かわらけ溜	かわらけ	口1/2 底全	10.8	6.0	3.3	Ⅱ群 淡褐色・弱粉質良土 内底無調整
24	7	2面構成土 かわらけ溜	かわらけ	略完形	11.1	6.0	3.3	Ⅱ群 淡褐色・弱粉質良土 内底無調整
24	8	2面構成土 かわらけ溜	かわらけ	略完形	10.7	6.0	3.3	Ⅱ群 淡褐色・弱粉質良土 内底無調整
24	9	2面構成土 かわらけ溜	かわらけ	口～底 2/7	(10.8)	(6.0)	3.2	Ⅱ群 淡褐色・弱粉質良土 内底無調整
24	10	2面構成土 かわらけ溜	かわらけ	口1部 底3/4	(8.4)	5.0	1.8	Ⅱ群 淡褐色・粉質精良土(硬質) 内底無調整
24	11	2面構成土 かわらけ溜	かわらけ	口1部 底全	(7.9)	5.0	1.5	Ⅱ群 淡褐色・粉質精良土(硬質) 内底弱ナデ1回
24	12	2面構成土 かわらけ溜	かわらけ	口1/3 底3/5	7.7	4.7	1.7	Ⅱ群 暗褐色・粉質精良土(硬質) 内底無調整
24	13	2面構成土 かわらけ溜	かわらけ	口3/4 底全	8.4	5.2??	1.6	Ⅱ群 淡褐色・弱粉質良土 内底無調整
24	14	2面構成土 かわらけ溜	かわらけ	口～底 1/3	(8.3)	(5.0)	1.7	Ⅱ群 にぶい淡褐色・弱粉質良土 内底無調整
24	15	2面構成土 かわらけ溜	かわらけ	口1/3 底1/2	(8.7)	5.0 or 6.0	1.6	Ⅱ群 淡褐色・弱粉質良土 内底弱ナデ1回
24	16	2面構成土 かわらけ溜	かわらけ	口1/3 底3/5	(7.7)	5.0	1.7	Ⅱ群 淡褐色・弱粉質良土 内底無調整 糸切り糸幅:広い
24	17	2面構成土 上層	軒丸瓦	残欠	4.5～	5.2～	2.3	淡橙色・白色粒多い砂質土(気孔多 く軟質) 器表:暗灰色
24	18	2面構成土 上層	骨製品 筭	先端欠損	8.6～	1.45	0.25	
24	19	2面構成土 上層	木製品 箸		15.2～	0.5	0.5	
24	20	2面構成土 上層	木製品 箸		18.9～	0.7	0.35	
24	21	2面構成土 上層	木製品 格子子		13.5～	2.0	1.15	
24	22	2面構成土 上層	木製品 用途不明		8.1	2.5	0.15～ 0.3	
24	23	2面構成土 下層	白磁印花文皿		(9.4)	(4.5)	1.1	素地:白色緻密土 釉調:白色透明
25	1	3面	吉備系 土師器碗	口1/2 底1/4	11.7	(4.8)	3.9	黄白色～暗灰色・弱砂質土 胎芯:暗灰色
25	2	3面	漆製品 椀	口1/4 底2/5	(12.5)	(5.9)	(4.2)	
25	3	3面	鉄製品 釘		(4.9)	0.4	0.25	1.8 g
25	4	3面	鉄製品 釘		(5.7)	0.3	0.25	1.7 g
25	5	3面 井戸1	かわらけ	口～底 2/5	(12.6)	(7.8)	3.0	にぶい淡橙色・混入物含む弱砂質粗土

遺物観察表 (6)

図	No.	出土位置	種別	残存率	(口径・底径・器高) (長さ・幅・厚さ)			色調・胎土・釉薬・(重さ)外・備考
25	6	3面 井戸1	漆製品 皿	口1/4欠	9.4	7.3	1.4	底部穿孔 0.5×0.3
25	7	3面 井戸1	木製品 経木折敷		14.3～	2.5～	0.08	
25	8	3面 井戸1	木製品 箸		23.0	0.6	0.6	
25	9	3面 井戸1	木製品 箸		18.4～	0.55	0.45	
25	10	3面 井戸1	木製品 箸		16.5～	0.6	0.6	
25	11	3面 井戸1	木製品 箸		14.0～	0.5	0.55	下端：炭化
25	12	3面 井戸1	木製品 箸		23.3	0.7	0.4	
25	13	3面 井戸1	木製品 箸		22.4	0.6	0.4	
25	14	3面 井戸1	木製品 箸		21.8	0.65	0.45	
25	15	3面 井戸1	木製品 箸		21.8	0.7	0.5	
25	16	3面 井戸1	木製品 箸		21.3	0.65	0.5	
25	17	3面 井戸1	木製品 箸		21.0～	0.7	0.45	
25	18	3面 井戸1	木製品 箸		18.7～	0.65	0.5	
25	19	3面 井戸1	木製品 箸		17.4～	0.7	0.45	
25	20	3面 井戸1	木製品 箸		16.9～	0.85～ 0.6	0.4	
25	21	3面 井戸1	木製品 草履芯		9.2～	3.1～	0.25	
26	1	3面 溝1下層	かわらけ	略完形	10.8	4.6	3.1	Ⅱ群 橙色・粉質精良土(堅緻) 内底1回ナデ
26	2	3面 溝1上層 木器溜	かわらけ	口1/3 底全	(12.3)	7.8	2.9	淡橙色・混入物含む弱砂質土
26	3	3面 溝1上層 木器溜	かわらけ	口2/5 底全	(12.4)	7.5	3.1	暗褐色・混入物含む弱粉質土
26	4	3面 溝1上層 木器溜	骨製品 筭	上半欠損	10.9～	1.35	0.2	
26	5	3面 溝1上層 木器溜	木製品 板杓子		25.65	2.7～	0.25	
26	6	3面 溝1上層 木器溜	木製品 板杓子		26.1	2.9～	0.45	
26	7	3面 溝1上層 木器溜	木製品 経木折敷		24.7	5.1～	0.08	表裏面：斜位の刃物痕・上端：炭化
26	8	3面 溝1上層 木器溜	木製品 経木折敷		24.3	4.8～	0.08	表裏面：斜位の刃物痕

遺物観察表(7)

図	No.	出土位置	種別	残存率	(口径・底径・器高) (長さ・幅・厚さ)			色調・胎土・釉薬・(重さ)外・備考
26	9	3面 溝1上層 木器溜	木製品 経木折敷		23.0	4.5 ~	0.1	
26	10	3面 溝1上層 木器溜	木製品 経木折敷		22.6 ~	3.4 ~	0.1	
26	11	3面 溝1上層 木器溜	木製品 経木折敷		5.5 ~	2.0 ~	0.05	小孔あり・表裏面：斜位の刃物痕
26	12	3面 溝1上層 木器溜	木製品 経木折敷		6.8	2.5 ~	0.1	
26	13	3面 溝1上層 木器溜	木製品 経木折敷		24.9	2.3	0.08	
26	14	3面 溝1上層 木器溜	木製品 板折敷?		20.5 ~	4.1	0.45	右測：炭化
26	15	3面 溝1上層 木器溜	木製品 箸		23.3	0.65	0.45	
26	16	3面 溝1上層 木器溜	木製品 箸		23.7	0.7	0.45	
26	17	3面 溝1上層 木器溜	木製品 箸		22.6	0.6	0.5	
26	18	3面 溝1上層 木器溜	木製品 箸		24.3	0.65	0.45	
26	19	3面 溝1上層 木器溜	木製品 箸		24.2	0.75	0.55	
26	20	3面 溝1上層 木器溜	木製品 箸		23.0	0.55	0.5	
26	21	3面 溝1上層 木器溜	木製品 箸		23.5	0.7	0.5	
26	22	3面 溝1上層 木器溜	木製品 箸		22.0	0.5	0.5	
26	23	3面 溝1上層 木器溜	木製品 箸		20.0	0.6	0.55	
26	24	3面 溝1上層 木器溜	木製品 箸		21.2	0.6	0.5	
27	25	3面 溝1上層 木器溜	木製品 箸		22.0	0.7	0.6	
27	26	3面 溝1上層 木器溜	木製品 箸		23.2	0.65	0.6	
27	27	3面 溝1上層 木器溜	木製品 箸		23.5	0.65	0.45	身：炭化
27	28	3面 溝1上層 木器溜	木製品 箸		(22.8)	0.5	0.5	
27	29	3面 溝1上層 木器溜	木製品 箸		(23.7)	0.7	0.5	
27	30	3面 溝1上層 木器溜	木製品 箸		(21.2)	0.6	0.35	
27	31	3面 溝1上層 木器溜	木製品 箸		(22.6)	0.65	0.4	
27	32	3面 溝1上層 木器溜	木製品 箸		(21.4)	0.6	0.6	身：炭化

遺物観察表 (8)

図	No.	出土位置	種別	残存率	(口径・底径・器高) (長さ・幅・厚さ)			色調・胎土・釉薬・(重さ)外・備考
27	33	3面溝1上層 木器溜	木製品 箸		(23.9)	0.75	0.4	
27	34	3面溝1上層 木器溜	木製品 箸		(21.5)	0.65	0.5	
27	35	3面溝1上層 木器溜	木製品 箸		(20.5)	0.6	0.4	
27	36	3面溝1上層 木器溜	木製品 箸		(20.8)	0.55	0.4	
27	37	3面溝1上層 木器溜	木製品 箸		18.7 ~	0.65	0.4	欠損端：炭化
27	38	3面溝1上層 木器溜	木製品 箸		16.2 ~	0.7	0.35	欠損端：炭化
27	39	3面溝1上層 木器溜	木製品 箸		12.1 ~	0.6	0.45	欠損端：炭化
27	40	3面溝1上層 木器溜	木製品 箸		21.1 ~	0.65	0.4	欠損端：炭化
27	41	3面溝1上層 木器溜	木製品 箸		16.0 ~	0.6	0.3	欠損端：炭化
27	42	3面溝1上層 木器溜	木製品 箸		16.8 ~	0.55	0.55	欠損端：炭化
27	43	3面溝1上層 木器溜	木製品 箸		9.5 ~	0.55	0.5	欠損端：炭化
27	44	3面溝1上層 木器溜	木製品 菜箸?		20.2 ~	0.85	0.85	
27	45	3面溝1上層 木器溜	木製品 箸?		16.1 ~	0.9	0.65	
27	46	3面溝1上層 木器溜	木製品 菜箸?		14.8 ~	0.8	0.65	
27	47	3面溝1上層 木器溜	木製品 円柱状 用途不明		5.7 ~	1.1	0.9	
27	48	3面溝1上層 木器溜	木製品 円柱状 用途不明		13.8 ~	1.3	0.8	先端：炭化
27	49	3面溝1上層 木器溜	木製品 円柱状 用途不明		10.2	2.2	1.9	先端：炭化
27	50	3面溝1上層 木器溜	木製品 円柱状 用途不明		31.8 ~	0.9	0.65	
27	51	3面溝1上層 木器溜	木製品 円柱状 用途不明		13.7 ~	0.9	0.5	先端：炭化
27	52	3面溝1上層 木器溜	木製品 棒状 用途不明		22.4 ~	1.45	1.0	
27	53	3面溝1上層 木器溜	木製品 角柱状 用途不明		22.2 ~	1.3	1.15	
27	54	3面溝1上層 木器溜	木製品 角柱状 用途不明		13.3	1.05	1.0	先端：炭化
27	55	3面溝1上層 木器溜	木製品 角柱状 用途不明		15.0 ~	0.4	0.4	
27	56	3面溝1上層 木器溜	木製品 篋状工具		31.4 ~	0.45	0.35	

遺物観察表(9)

図	No.	出土位置	種別	残存率	(口径・底径・器高) (長さ・幅・厚さ)			色調・胎土・釉薬・(重さ)外・備考
28	57	3面 溝1上層 木器溜	木製品 籠状工具		21.0	1.6	0.7	
28	58	3面 溝1上層 木器溜	木製品 籠状工具		18.6	1.8	0.3	上端：炭化
28	59	3面 溝1上層 木器溜	木製品 籠状工具		20.1	1.6	0.65	
28	60	3面 溝1上層 木器溜	木製品 籠状工具		15.5～	1.8	0.65	
28	61	3面 溝1上層 木器溜	木製品 籠状工具		16.7～	1.5	0.65	
28	62	3面 溝1上層 木器溜	木製品 籠状工具		14.3～	1.1	0.65	先端：炭化
28	63	3面 溝1上層 木器溜	木製品 籠状工具		10.4～	2.0	0.7	
28	64	3面 溝1上層 木器溜	木製品 用途不明		8.3	2.3	0.65	
28	65	3面 溝1上層 木器溜	木製品 籠状工具？		14.5～	1.0	0.5	
28	66	3面 溝1上層 木器溜	木製品 籠状工具？		12.05～	0.6	0.25	
28	67	3面 溝1上層 木器溜	木製品 籠状工具？		14.7～	0.65	0.25	
28	68	3面 溝1上層 木器溜	木製品 籠状工具？		14.1～	0.7	0.6～0.3	
28	69	3面 溝1上層 木器溜	木製品 籠状工具？		21.5	1.35	0.7	
28	70	3面 溝1上層 木器溜	木製品 籠状工具？		10.9～	1.75	(0.75)	
28	71	3面 溝1上層 木器溜	木製品 籠状工具？		17.2～	2.5	0.3～ 0.35	
28	72	3面 溝1上層 木器溜	木製品 籠状工具？		29.5	1.0～1.5	0.8	先端：炭化
28	73	3面 溝1上層 木器溜	木製品 籠状工具？		35.7	1.7	1.6	
28	74	3面 溝1上層 木器溜	木製品 用途不明		5.7	10.5	0.8～ 0.45	裏面：刃物痕 測縁：炭化
29	75	3面 溝1上層 木器溜	木製品 下駄		17.1～	12.3	3.5	緒穴：楔遺存
29	76	3面 溝1上層 木器溜	木製品 草履芯		22.3	8.8～	0.3	
29	77	3面 溝1上層 木器溜	木製品 草履芯		22.9	4.3～	0.3	
29	78	3面 溝1上層 木器溜	木製品 草履芯		23.1～	3.1～	0.3	
29	79	3面 溝1上層 木器溜	木製品 草履芯		18.7～	3.7	0.15	
29	80	3面 溝1上層 木器溜	木製品 草履芯		17.6	4.1～	0.2	

遺物観察表 (10)

図	No.	出土位置	種別	残存率	(口径・底径・器高) (長さ・幅・厚さ)			色調・胎土・釉薬・(重さ)外・備考
29	81	3面溝1上層 木器溜	木製品 櫛		(4.2)	4.6～	0.9	
29	82	3面溝1上層 木器溜	木製品 刀子・柄		16.7～	2.7～ 2.15	0.65～ 0.8	径2mm目釘穴あり
29	83	3面溝1上層 木器溜	木製品 刀子・柄		12.5	1.85	0.7	削り込み面：炭化
29	84	3面溝1上層 木器溜	木製品 杼		7.4～	1.5	0.35	
29	85	3面溝1上層 木器溜	木製品 用途不明		19.3～	3.0	1.8	
29	86	3面溝1上層 木器溜	木製品 用途不明		7.3	2.4	1.3	
29	87	3面溝1上層 木器溜	木製品 用途不明		5.7	3.0	0.8	
29	88	3面溝1上層 木器溜	木製品 用途不明		15.8	2.9～	0.1	表面：刃物痕
29	89	3面溝1上層 木器溜	木製品 用途不明		22.3～	3.2～	0.3	
30	1	3面構成土	かわらけ	口1/5 底3/7	(8.1)	(6.1)	1.5	淡褐色・混入物含む弱砂質土 口縁部内外スス付着
30	2	3面構成土	木製品 草履芯		11.8～	5.0～	0.3	
30	3	3面構成土	木製品 用途不明		31.5	2.2～2.4	1.6～1.8	
31	1	調査壁土層 4 1層	壺型土器	口縁部片				淡褐色・砂粒(白色粒多い)含む/ 内外面：赤彩
31	2	溝4	土師器甕	口3/4	9.0			橙色・砂粒(白色粒・白針多い)含む
31	3	表土	土師器甕	口縁部片				黄橙味白色・細砂多い
31	4	3面	土師器高坏	脚部片				淡橙色・細砂少量/内外面：赤彩
31	5	表土	須恵器甕	口縁部片				暗灰色・白色小礫含む 器表：灰茶色

第五章 まとめ

第1節 古代

落ち込み1・2は、層位的に中世の開発以前の所産と思われるが、本文中でも述べた通り、人為的な遺構と言えるものかどうか分からない。覆土中からは古墳時代後期以降の土師器・甕の小片が出土しており、それ以降の年代を与えられるが、詳細な時期は不明である。

調査で発見された遺物は弥生時代後期から8世紀代のもので、中世期の遺構覆土や表土層に混入されたものが多い。調査区壁土層の41層から出土している弥生時代後期の壺(図31-1)は、小袋谷川の氾濫等理由により流入された可能性もあり、その層の堆積年代を示すかどうかは分からない。

第2節 中世

出土した遺物はかわらけと木製品が大半を占め、詳細な年代を伺える資料に乏しい。数少ない移入品をみると、3面上包含層出土の吉備系土師器碗(図25-1)、1面遺構出土の尾張型の山茶碗(図21-20)が13世紀中葉、2面遺構出土の常滑窯片口鉢Ⅰ類(図22-15)は13世紀第3四半期の所産である。瓦は水殿瓦窯の製品の他、永福寺Ⅲ期に比定されるもの(図21-15・図24-17)が1面遺構と2面構成土中から出土している。かわらけは「Ⅱ群」とした通常出土するものと異なるものが半数以上を占めるなど、相対的な年代を計れるものはわずかだが、手づくね成形のものは2面構成土中から出土した1点に限られ、ロクロ成形のものは胎土に混入物を含む背低気味のものが多い。その中で1面遺構からは「薄手丸深」に近い形態のもの(図21-5・6・17)などが出土しており、新しい要素が現れている。本調査地における中世期の開発年代は、最も古い遺物を指標とすれば13世紀中頃となるが、それほど時期をさかのぼれるかわからない。3面・2面は13世紀後半代を中心に考えたい。2面は造成土中で1点出土している瓦を採れば13世紀後葉以降の可能性がある。1面は13世紀末から14世紀前半代と思われる。1面検出遺構の中で、土坑1、落ち込み3、単独ピット及び建物群については、第1生活面で開口している、より新しい時期の遺構と考えられ、表土層中で採集された常滑窯の甕口縁部片(図20-12)などの示す14世紀後半以降の年代を与えられるかもしれない。第1生活面に伴う溝2・3、落ち込み4は、それ以前(2面・3面)、以後(1面建物1～3など)の遺構と軸方向を違えており、この時期に周辺で地割りの変更等、変化があったことを示すものと思われる。その他、遺構の検出はなかったものの、表土層他より中世期終末頃から近世に至る時期の遺物が10点出土している。

遺物は中世期のものに限り集計表(表11)を作成した。また、3面溝1上層の木器溜まり出土のものについては、きわめて一括性の高いものと思われるため、組成割合を別表(表12)に示した。以下、今回の調査で得られた特記すべき成果として、本文中で「Ⅱ群」としたかわらけについて、これまでの検出例と比較しながらまとめておく。

第3節 Ⅱ群かわらけについて

今回の調査では発見されたかわらけの52.3%が本文中で「Ⅱ群」とした内外底面の調整が通常のものとは異なるロクロ成形のかわらけであった。本調査地で出土したものに近い特徴を持ったかわらけは、これまで今小路西遺跡内の(図32)の御成町200番2地点(以下地点1)・御成町171番1地点(以下地点2)で、まとまった量が出土している他、千葉地遺跡(地点3)の3面と4面、御成町625-3地点(地点4、御成小学校内)で少量報告されている。本調査地点を除く出土地はJR鎌倉駅の西方で、300m程の範囲



図32 II群かわらけ出土地点

にかたまって位置している。本調査地周辺では本地から20m程しか離れていない山ノ内字瑞鹿山393番地点(図1-⑥)、山ノ内字瑞鹿山393番3地点(図1-⑤)の2カ所で発掘調査が行われているが「II群」と考えられるかわらけは出土していない。

本文中でも述べたが、「II群」の名称について再度説明しておく、地点1では本遺跡ので出土したII群かわらけに近い特徴をもったものをA類とし分類しているが、地点2や今回の調査(地点5)で見えられたかわらけには、細かい部分でA類と異なる特徴が見受けられるため、まとまった出土量を持つ3つの地点で包括される内容を設定し、一群のかわらけを特定する名称としたものである。分類は以下の方法で行っている。かわらけを手づくね成形とロクロ成形のものとして種別した上で、ロクロ成形のものうち、通常見受けられるものを「I群」、内外底面の調整が通常と異なるもの=1. 内底面のナデ調整がないか、あっても軽く1~2回程度のもの。2. 外底面に糸切り後のスノコ痕と呼ばれる板状圧痕が見られない。ものを「II群」とした。その中には外底面の糸切り痕の糸幅の広狭など、細部の相違による集合が存在している。その他、II群の属性として、胎土が精良であること、器壁が薄いことが本調査地と地点1・2で共通している。なお、「〇群」の名称は地点1の「〇類」との混乱を避けるために与えた便宜上のものに過ぎず、かわらけの分類を目的としたものではないことをお断りしておく。

図33は各地点で出土したⅡ群かわらけを摘出したものである。

・地点1(御成町200番2地点 図33-1~24)

13世紀中葉頃に廃絶されたとする3面の池3から、Ⅱ群かわらけがまとまって出土している。出土位置は池3の覆土中に限られ、他の生活面や遺構では検出されていない。ここでは、それらをA類と分類した上で以下の特徴をあげている。

A類：轆轤成形で、器壁は薄く仕上げられている。外底面には糸切り痕を残すがスノコ痕を残さず内底面にはナデを施さず未調整で中央部が凹状に窪むものが多い。胎土は非常に精良で、焼成も良く、叩くと高音を発する。としている。(観察表によれば、内底中央に弱いナデ調整が施されるものも少数含まれている。)

・地点2(御成町171番1地点 図33-25~54)

1面から4面にかけての中世面でⅡ群かわらけが出土しており、3面遺構面では糸切りかわらけの半数近くがこのタイプのかかわらけであったと報告されている。ここで出土したⅡ群かわらけは、粉質精良土で、外底面に残る糸切りの糸幅が広く、スノコ状圧痕と呼ばれる圧痕が見られず、内底面の指頭によるナデ調整がないか、あってもごく簡単なナデが1回なされるだけのもの。とされ、糸切りの糸幅が広いことが地点1のA類と異なる他、内底中央が窪むものもほとんど見受けられない。また、内折れの器形を呈する極小品が数多く出土しているのがこの地点の特徴と言える。出土したⅡ群かわらけの大多数がこのタイプのもので占められるが、4面上包含層で少数出土している、糸切り幅は広くないが粉質精良土で薄い器壁が開きながら立ち上がるとされるもの(図33-45~49)もⅡ群に含まれそうである。その他にⅡ群以外で、4面の土坑199から内外底面に通常の調整(ナデ調整・板状圧痕)が施されるものの、胎土・器形が、糸切りの糸幅が広いタイプと同様のもの(図33-50~54)が出土しており、「工房の違いなどがあるのかもしれない」と報告されている。各面の年代は、第4面:13世紀第2四半期から中葉、第3面:13世紀中葉から14世紀前半、第2面:14世紀前葉から中葉、第1面:14世紀後半以降である。

・地点3(御成町15-5地点 図33-55~58)

3面から1点(56)、4面から3点(55・57・58)、Ⅱ群あるいはそれに近いものが出土している。胎土は粒子がやや粗く、砂を含むが焼成は良好とされ、いずれも内底面無調整と記載されるもので、内底中央に窪みがある。外底面については57・58は外周を5mmほどの幅で削り取っているとされており、拓本を見る限りでは板状圧痕が見られずⅡ群に含まれるものと思われる。その他、55は外周に削り調整が施されず、拓本に通常の板状圧痕が残るもので、56が同タイプのものとされている。

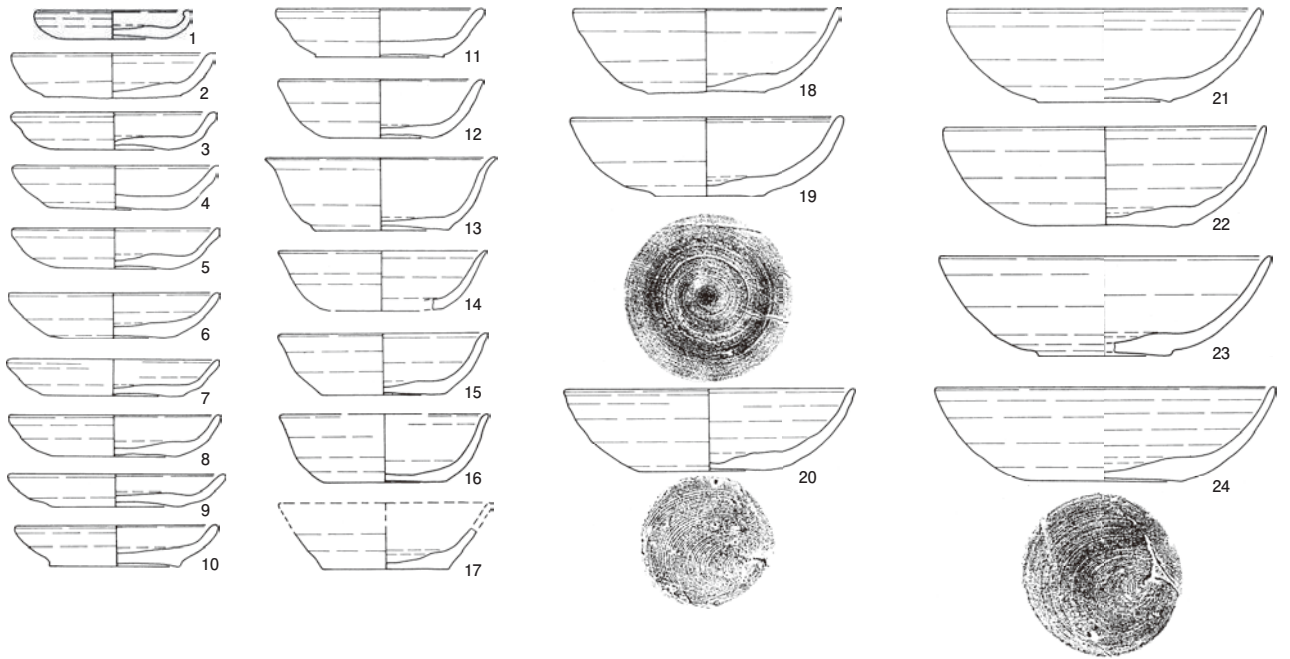
・地点4(御成町625-3 御成小学校内 図33-59~61)

北谷3面から3点出土している。「ロクロ作りで糸切り底、内底のナデ調整は無い。胎土は微砂質で肌色に近く、軽くて割合硬い焼きである。」とされ、他地域(なんとなく鎌倉より北の方)から移入されたものではないかとの感想が述べられている。

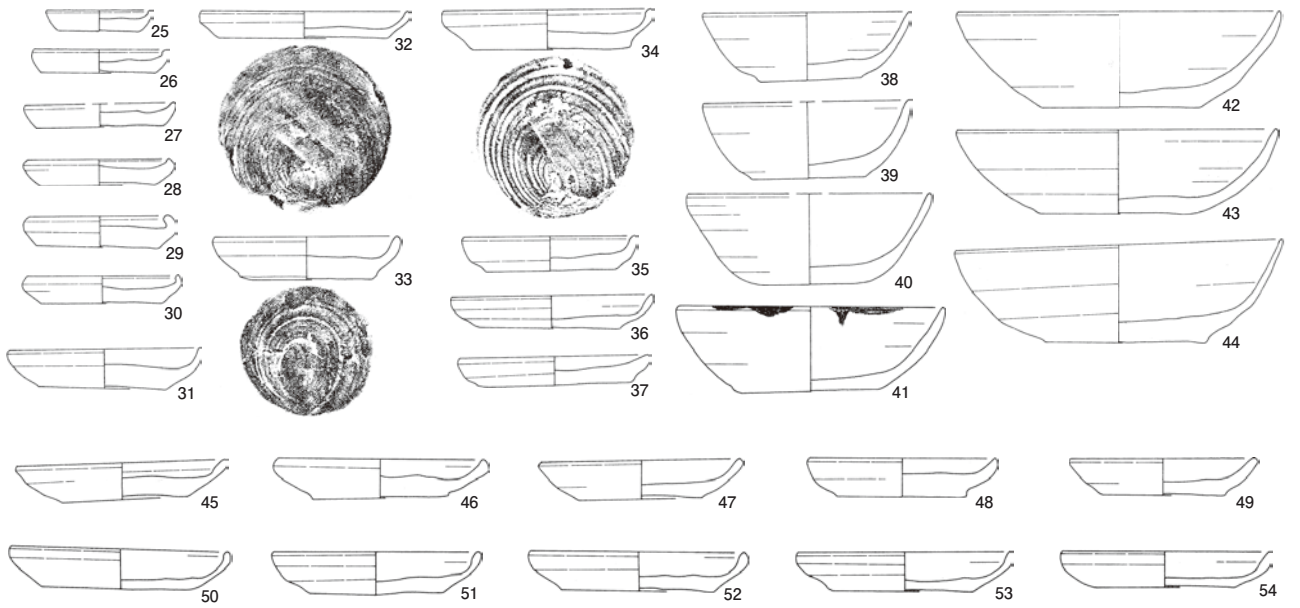
・地点5(本調査地点 山ノ内字瑞鹿山398地点)

本調査地点では、Ⅱ群かわらけのうち地点2と同タイプと見られるものも多く出土しているが、糸切りの糸幅はさほど広くないものも相当数含まれている。全般に広めのものが多いよう見受けられるが、明らかに広いものは1/3程度にとどまる。また、他の地点で見られない技法として、外底の糸切り後に細い簾状の圧痕を残すもの(図21-12)が含まれており、その他に3点(図21-5、図23-6・8)わずかではあるが同様の細い痕跡が認められた。また、2次使用の例として内底面に加工痕を残す(図23-29)の他、焼成後に外底の全面を擦ったものが1点出土している。(写真図版11)

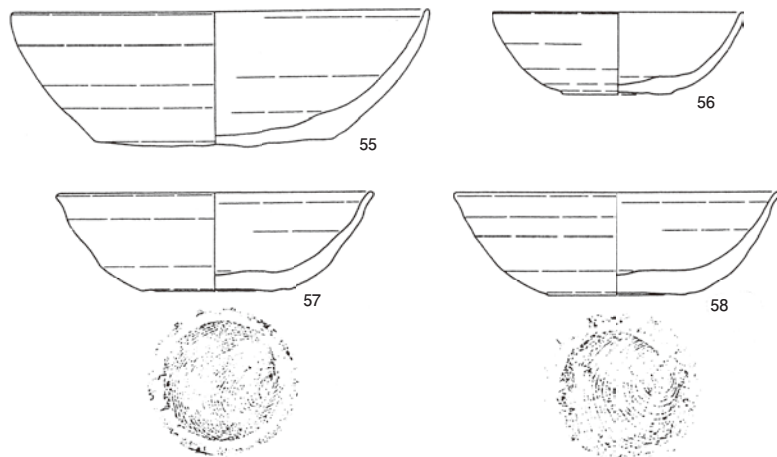
地点1 (御成町 200 番 2)



地点2 (御成町 171 番 1)



地点3 (御成町 15-5)



地点4 (御成町 625-3)

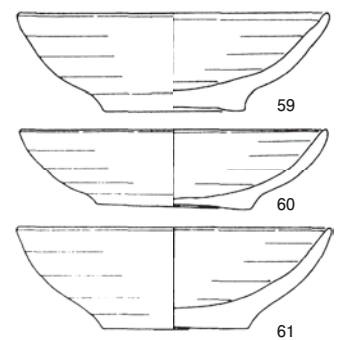


図33 II群かわらけ

この一群のかわらけは近隣の調査で全く検出されておらず、調査区の北半（Ⅰ区）ではほとんど出土していないことから、遺跡周辺で通有的に使用されていたものとは思われない。Ⅱ群かわらけのほとんどは2面造成中に1回で廃棄された可能性が高いものと考えられ、1面や2面遺構の覆土中で発見された個体も、2面構成土を掘削したために混入されたと思われる出土状況を示している。Ⅱ群かわらけのうち、これらと層位を隔てて検出された個体は、3面・溝1から出土した6点（内1点は上層木器溜まり出土）にすぎないが、その内の3点（図26-1を含む）に、糸切りの糸幅が狭く、内底面の中央が窪んでいるなど、地点1のA類と見なし得る特徴が認められた。

5つの地点で出土しているⅡ群かわらけを見ると、大型品・中型品はきれいな碗型器形を採るもののみで構成され、小型品は皿形のを主体に碗型が少数含まれている。本調査地で出土した小型品は皿形のものに限られるが、全体の形状がわからないとした径の小さい底部片（図23-10・29）が、碗型を呈するものになるかもしれない。小皿については、地点2において極小品の器形をひくことが示唆されている。地点1では、小皿の底部と体部の厚さにさほど変化が見られず、丸みをもった器形が多く感じられるが、地点2や本調査地では厚手の底部から薄い体部が屈曲して立ち上がるものが多く見受けられ、ロクロ上での手法に極小品との共通点が見い出せそうである。

地点1では池3北東隅で出土したかわらけを一括性の高いものとして、タイプ別に出土点数を提示している。それによると総かわらけ数605点のうち、A類（Ⅱ群）は124点（大型80点・中型14点・小型30点）、通常のロクロ成形のものが444点（大型219点・小型225点）、手づくね成形のものが37点（大型4点・小型30点、他不明）とあり、A類のみに中型が含まれている。報告書を見る限りでは、北東隅に限らず池3全体の出土遺物を見ても、A類以外に中型が見当たらない上に、碗型の器形も出現していない。A類の大型・中型は全て碗型器形で、小型は浅い皿型が多いものの、碗型を呈するものも少量見受けられ、「薄手丸深」型の登場を待たずして、この時期に碗型器形を呈するかわらけの大・中・小が揃っている。

地点2では中世の数時期にわたりⅡ類かわらけが出土しているが、共伴するかわらけに手づくね成形ものが含まれる時期に出現し、「薄手丸深」型が盛行する時期まで残っている。

本遺跡で出土したⅡ群かわらけを観察したところ、胎土は砂粒等の混入物を含まず精良で、白色針状物質（海面骨針）と雲母が少量含まれており、通常のかわらけに比べると硬く焼き締まっている。その中を更に細く見ると、粒子の粗密により砂質気味で比較的軟質に仕上がるものから粉質で硬質に仕上がるものまで個体差がある。観察表に（堅緻）と記載したものは特に緻密で堅く、やや質の異なる土のように見受けられるもので、溝1から出土した3点のA類は全てこの土である。また、色調についても全般に淡い褐色系のものが多い中で、溝1出土の3点は淡い橙色を呈しており、特に実測された1点（図26-1）は橙色味が強く感じられた。いずれも水籤された精良土だが、粒子の粗密、焼き上がりの硬軟の他に、鉄分の多寡（一般に土器の色調は素地の組成割合で鉄分の多いもの程赤味が強くなるとされている。）による色調の違いなどで細分できそうである。地点1のA類については、実測されている80点の大半が橙色ないし黄橙色とされているが、淡い褐色系の可能性がある浅黄色・灰黄色とされるものも8点含まれていた。

検出例の少ない中での予察となるが、今回調査の成果を見る限りでの所見をまとめておくと、Ⅱ群かわらけは大きく地点1タイプ（A類）と、地点2タイプに分けられるものと思われ、両者の相違点は胎土や器形の細部に求められるかもしれない。更に、地点2タイプは糸切りの糸幅により細分ができ、通常の色幅のものは本調査地2面構成土中と、地点2の4面包含層でのみ検出されている。これまで発見されているⅡ群かわらけは、出土地により同群内での組成に偏りが見られるが、その理由として、空間的

な差（使用目的を含めた場の違い）と、時間的な差の2つの可能性が考えられる。今回調査では、地点1タイプが層位的に地点2タイプに先行する状況で発見されているが、それが両者の存在時期を反映しているとは言い切れない。今後、新たな検出例を期待したい。

参考文献

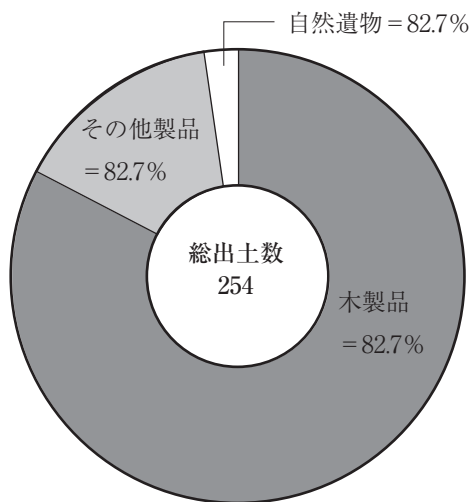
- 原廣志・宇都洋平 2006『今小路西遺跡(N0.201) 御成町200番2地点』『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書22』
鎌倉市教育委員会
- 菊川英政・宗墓富貴子ほか 2008『今小路西遺跡発掘調査報告書－御成町171番1他地点－』株式会社 斉藤建設
- 手塚直樹ほか 1982『千葉地遺跡』千葉地遺跡発掘調査団
- 河野真知郎ほか 1990『今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書』今小路西遺跡発掘調査団

表11 中世遺物集計表

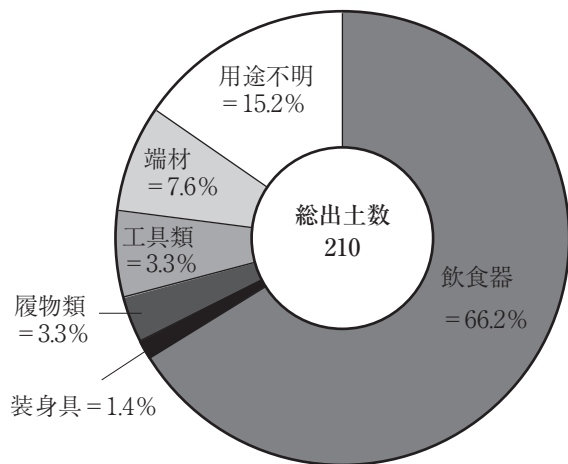
		表土・攪乱・他	1面まで	1面遺構	2面遺構	2面～3面	3面遺構	3面構成土	計
かわらけ (ロクロ成形)	I群	89	30	69	103	368	59	5	723
	II群	21	7	156	68	537	6		795
かわらけ(手づくね成形)						1			1
白かわらけ					手づくね1				1
常滑	甕・壺	9		2	5	6		1	23
	片口鉢I類				1				1
	片口鉢II類	2			1				3
瀬戸		折縁深皿1		入れ子1					2
山茶碗				尾張型1		尾張型1			2
土製品	土師器碗					吉備系1			1
	瓦	1		1	2	2			6
	瓦質火鉢					1			1
貿易陶磁	青磁	酒合壺1		双魚文鉢1			折縁鉢1		3
	白磁	口元皿1		口元皿1		印花文皿1			3
石製品	砥石			1					1
	滑石					鍋1			1
金属製品	鉄製品				鍋1・不明1	釘2			4
骨製品						筭1	筭1		2
漆器					1		1		2
木製品		7		2	13	6	228	2	259
自然遺物	獣骨			1		1	1		3
	種子						3		3
		132	38	235	196	930	301	8	1840

表12 溝1上層・木器溜まり出土遺物

木製品以外の遺物		木製品					
自然遺物	製品	飲食器	装身具	履物	工具類	端材	用途不明
獣骨：1 種子：3 玉石：2	かわらけ：37 骨製品：1	板杓字：2 経木折敷：12 板折敷：2 箸：123	櫛：1 刀子柄：2	下駄：1 草履：6	ヘラ：12 織物具：1	板材：16	
6	38	139	3	7	13	16	32



木器溜まりの出土遺物の構成



木器溜まり出土木製品の構成

用途不明品 32 点の内容

棒状のもの

断面形		先端を尖らせるもの
丸形	27 図 47 (菜箸?) 27 図 48 (菜箸?) 27 図 49	
カマボコ形	27 図 50 27 図 51	
方形	27 図 54 27 図 55 (細いもの) 27 図 56 (細いもの) 実測外：3	28 図 73
長方形 (扁平)	実測外：6	28 図 69 (ヘラ?) 28 図 70 28 図 72 実測外：1
方形から変化するもの	27 図 52 27 図 53	
	19 点	5 点

先端を尖らせた薄板状のもの

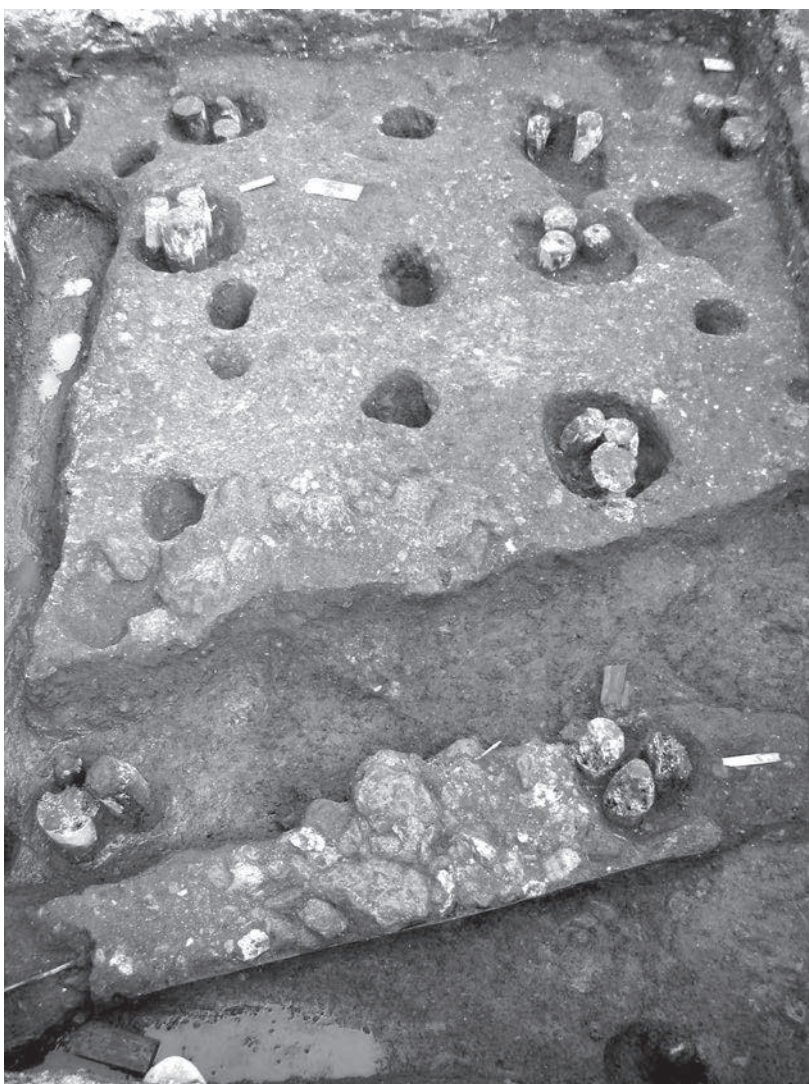
28 図 71 (経木折敷残欠?)
28 図 74 (板折敷残欠転用?)
2 点

何らの形態を意図したもの (形代?)

28 図 63
29 図 88 (経木)
29 図 89 (薄板)
3 点

何らの道具と思われるもの

28 図 85
29 図 86
29 図 87
3 点



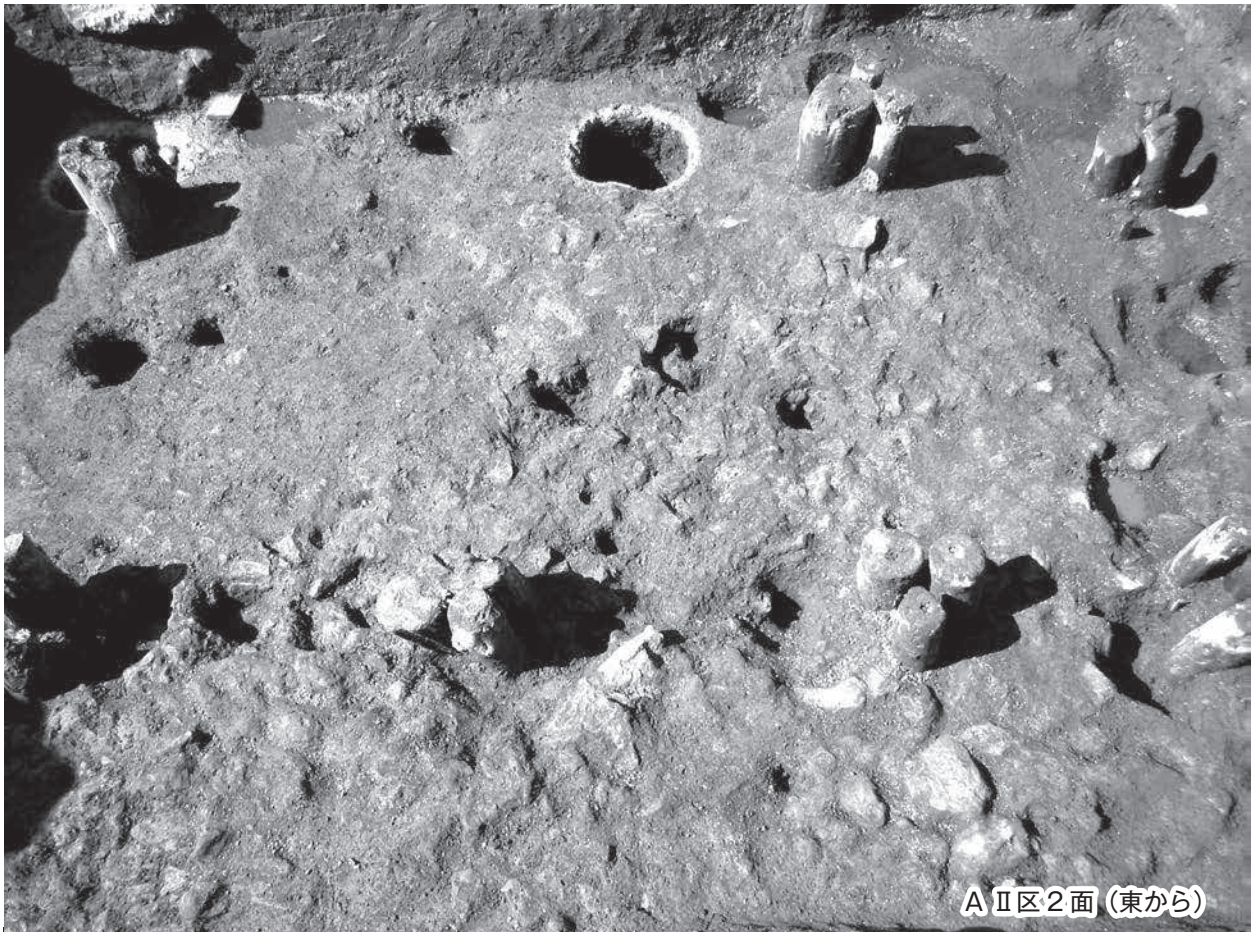
◀A II区1面（南から）

▼B 落ち込み 4、溝 2（東から）



▼C 落ち込み 4、溝 3（東から）





A II区2面 (東から)



▲C 柱穴列 2・P31 (北から)

◀B 柱穴列 2 (北から)



◀A かわらけ溜まり (西から)

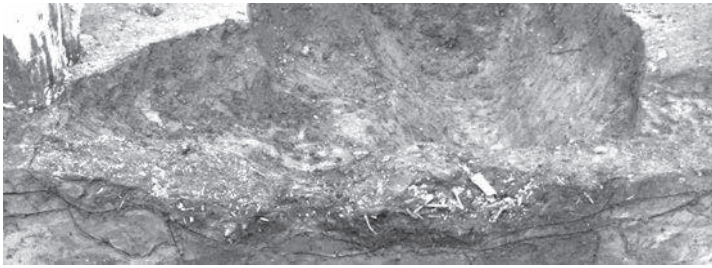


◀B II区3面 (北から)



▼C 井戸1 (東から)

図版 4



◀A 木器溜まり (南から)



▲B 木器溜まり・溝 1 (北から)



▼C I区溝 1 (南から)



II区溝 1 (北から) D▶



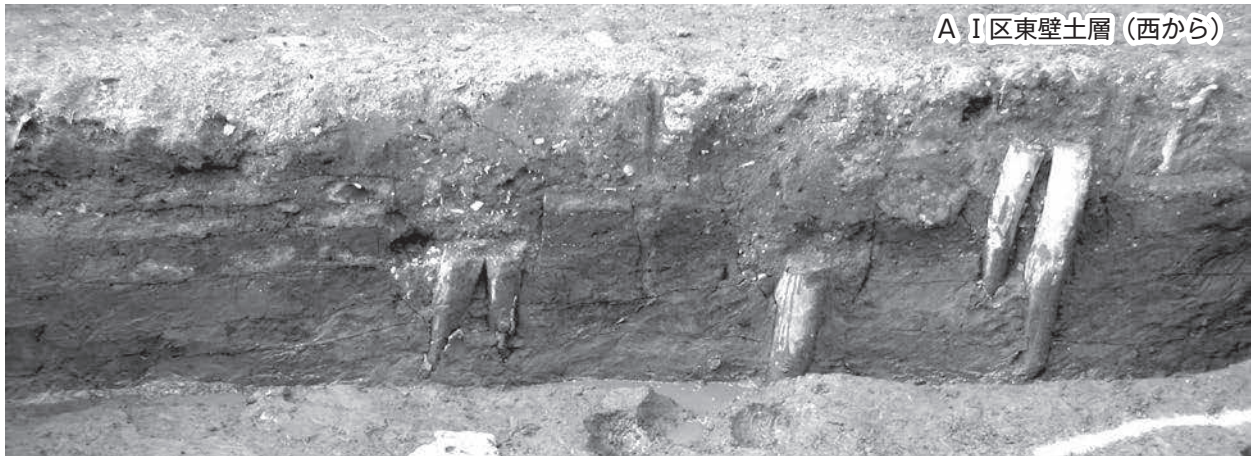
◀A I区落ち込み1・2 (南から)



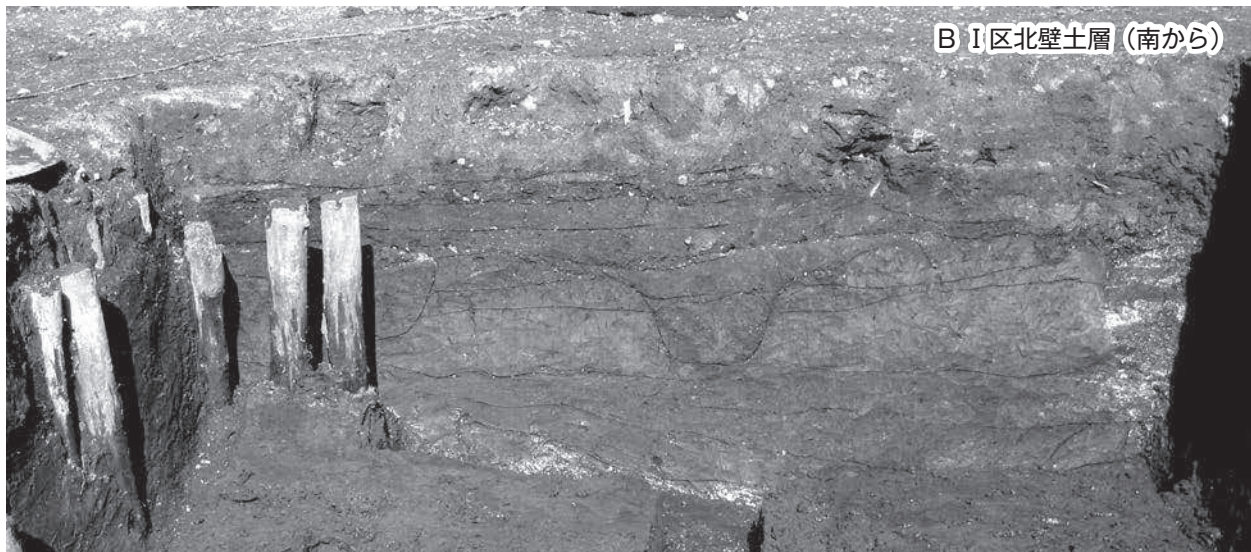
◀B II区落ち込み1 (北から)

▼C II区最終トレンチ (南から)





A I区東壁土層 (西から)



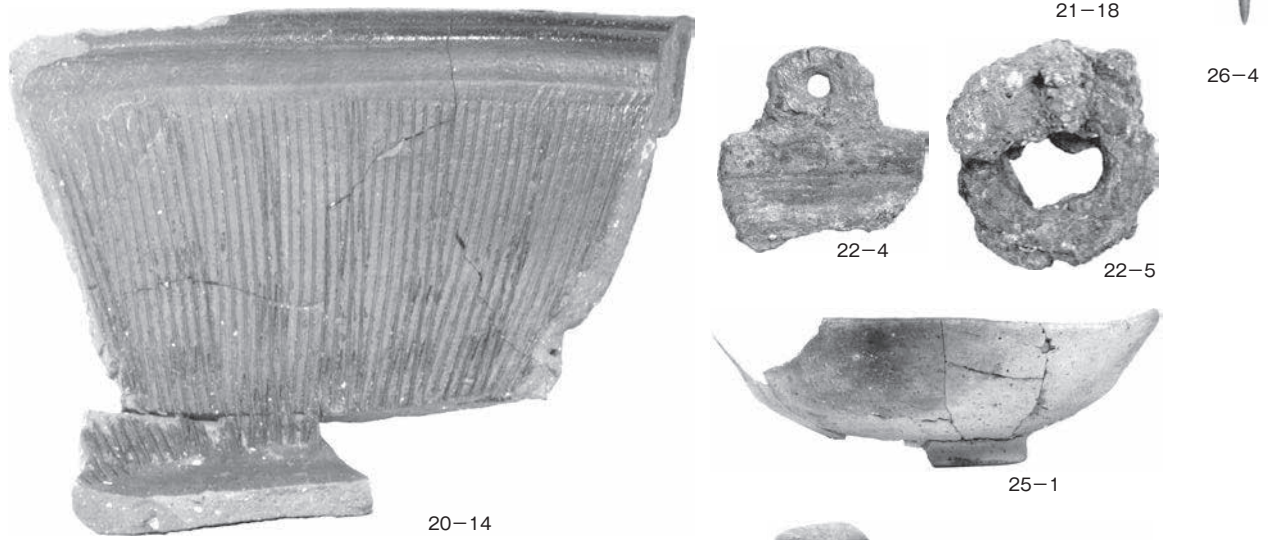
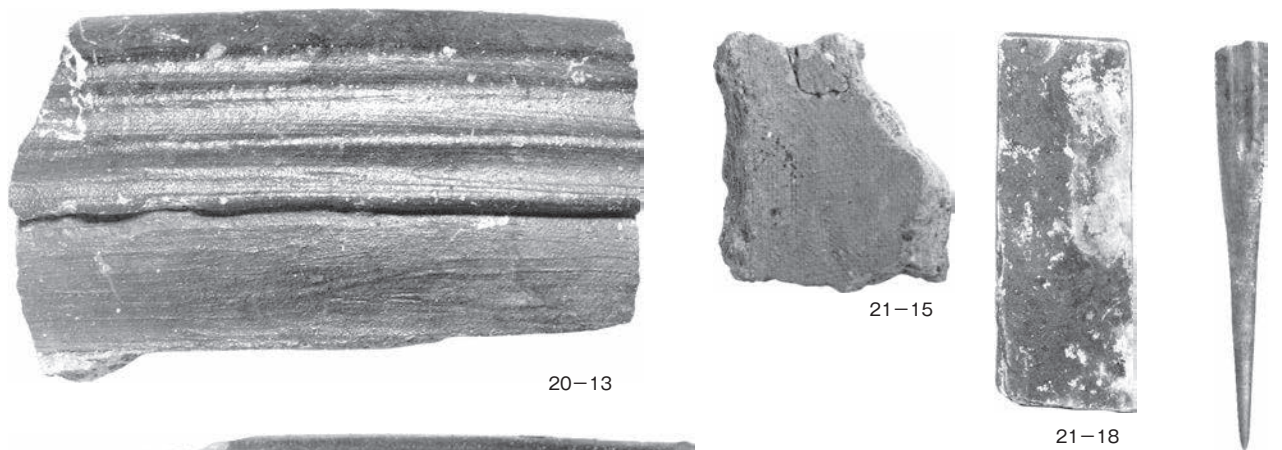
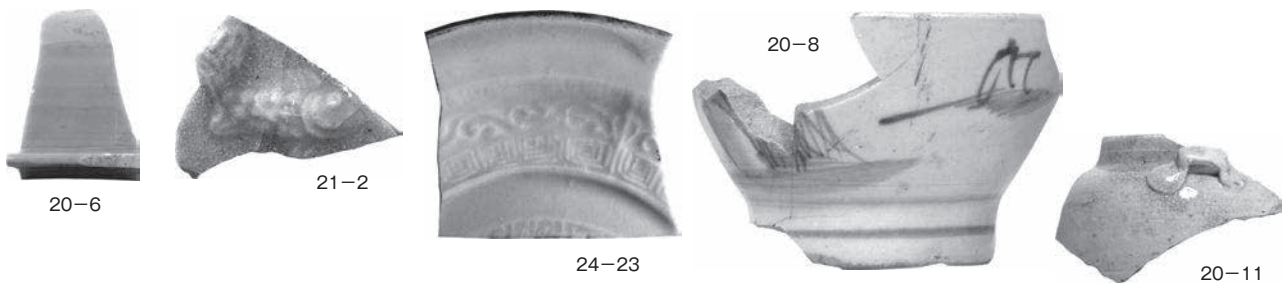
B I区北壁土層 (南から)



◀C II区東壁土層 (西から)

II区南壁土層 (北から) D▶





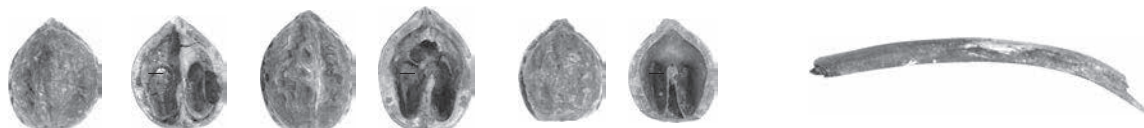
溝3



2面構成土

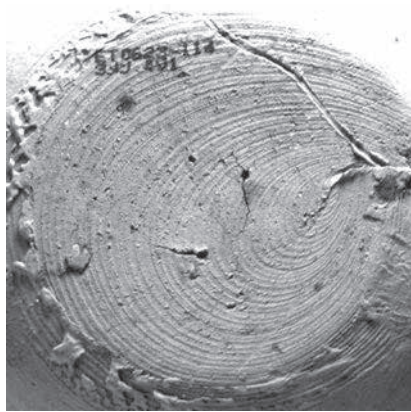


木器溜まり



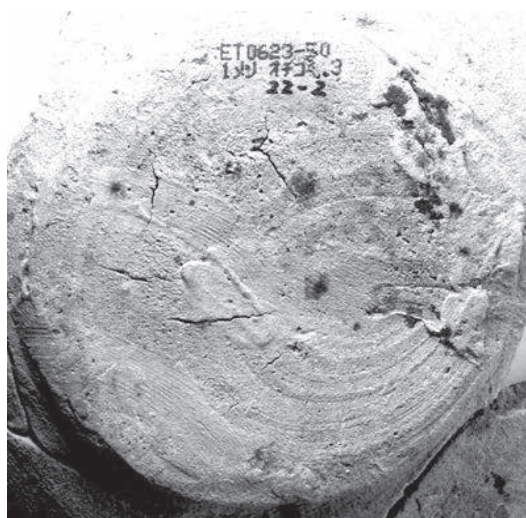
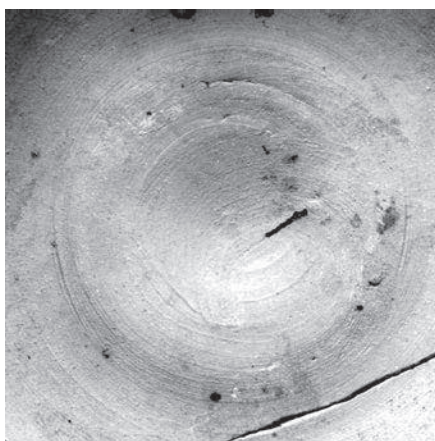


26-1



◀26-1 内底面

▲26-1 外底面

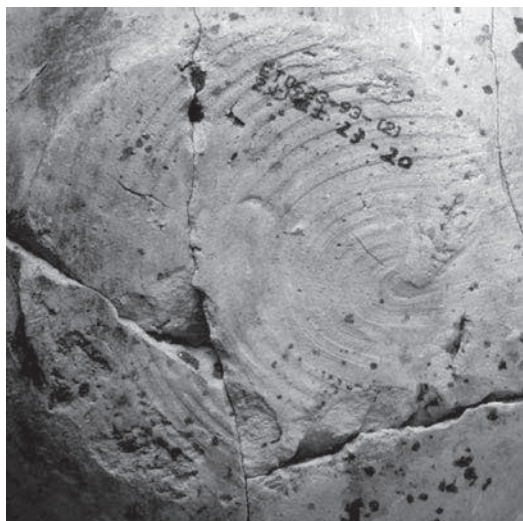


21-12 外底面

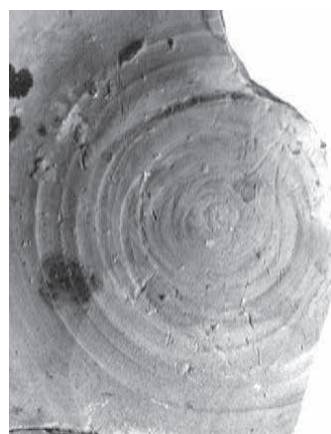
22-2 外底面



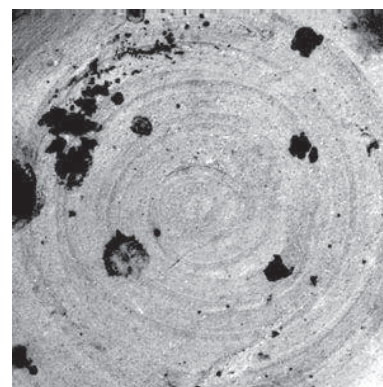
23-20



▲23-20 外底面

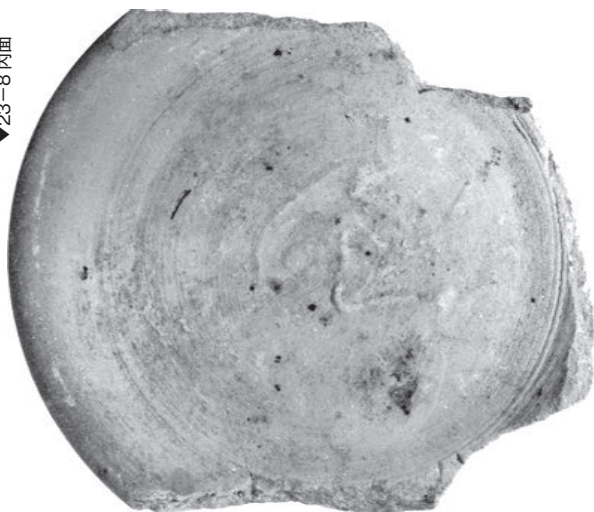


21-13 内底面

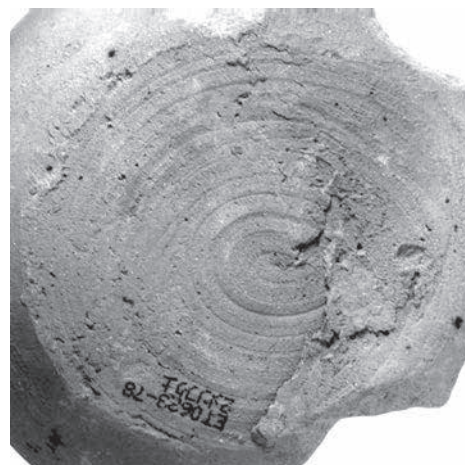


24-7 内底面

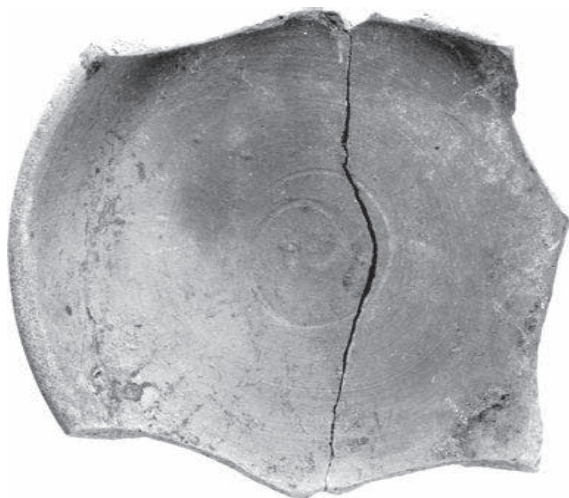
▼23-8 内面



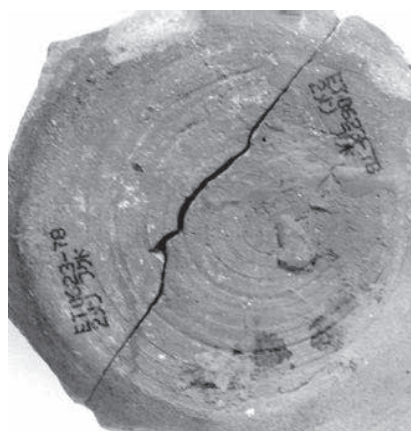
▼23-8 外底目面



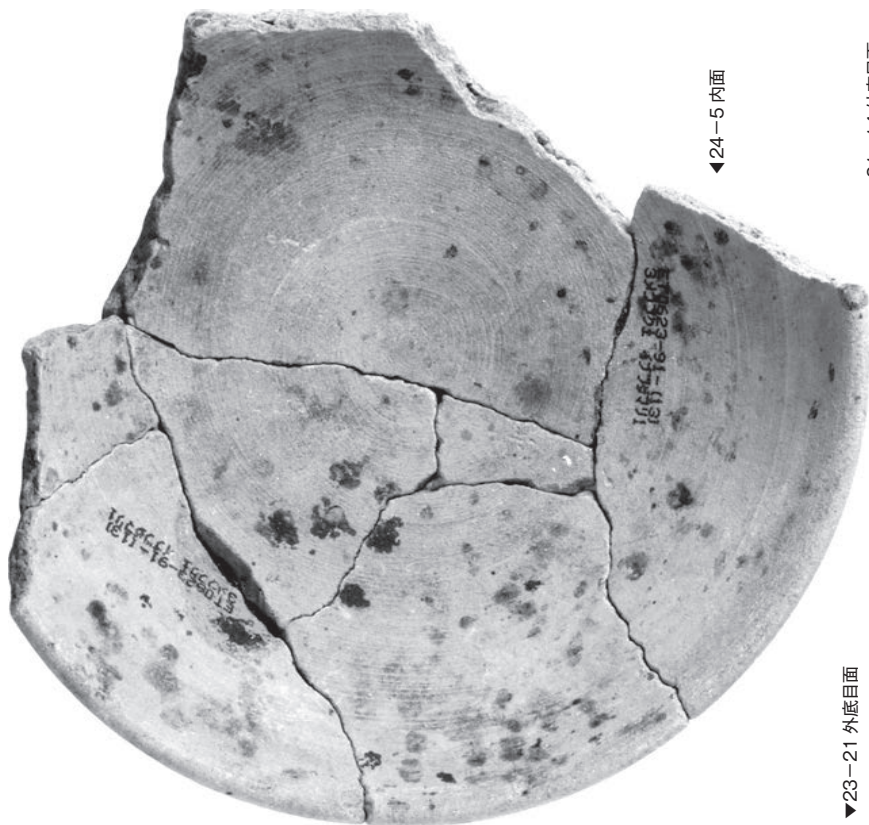
▼23-7 内面



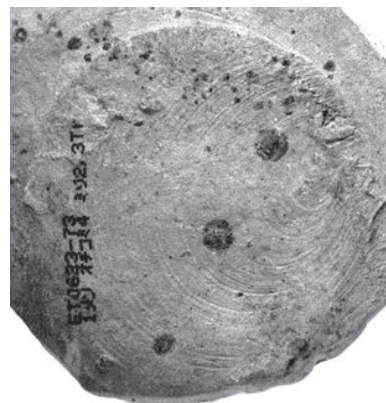
▼23-7 外底目面



◀24-5 内面

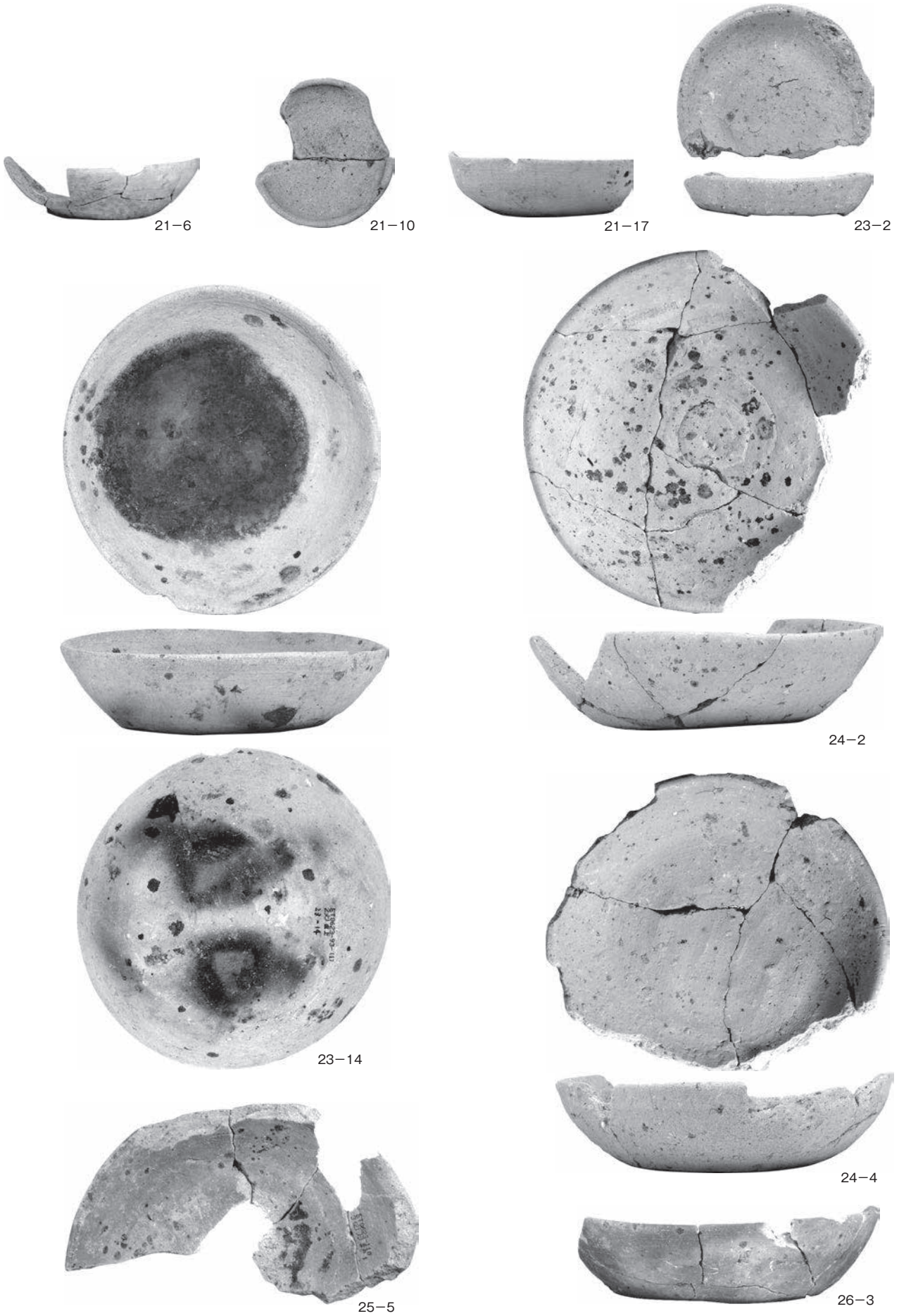


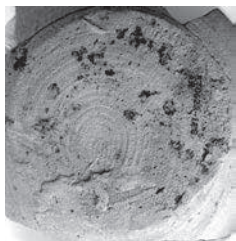
▼21-14 外底目面



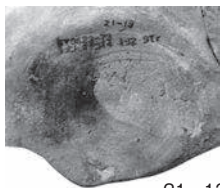
▼23-21 外底目面







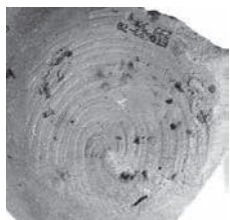
20-5



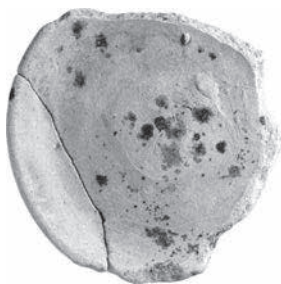
21-13



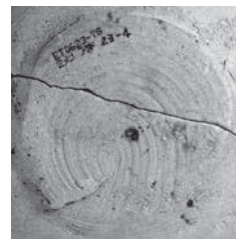
23-3



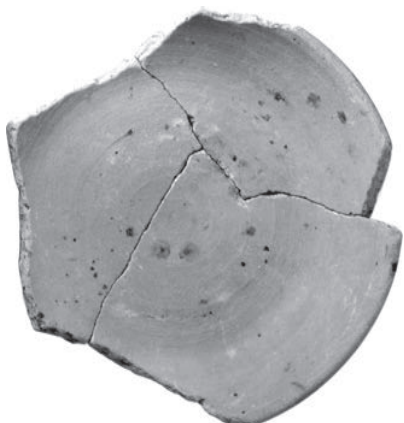
23-9



23-21



23-4



24-5



24-12



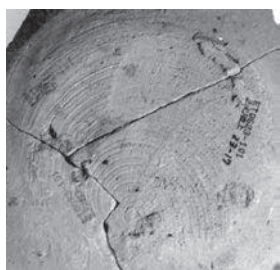
24-13



24-7



▲底部 2 次加工 (擦痕)



23-17



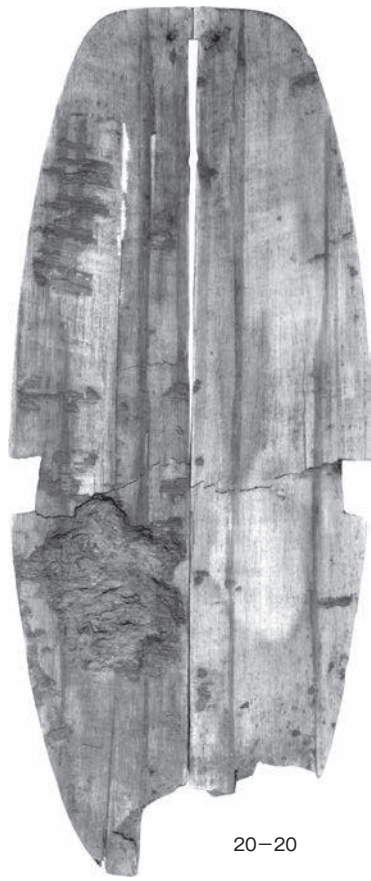
23-19



▲23-29 内面



25-6



20-20



26-6



28-59



28-64



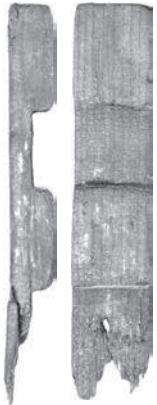
28-70



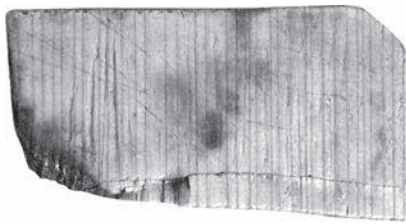
22-11



22-13



24-21



28-74



29-81



29-84



29-75



29-82



29-83



29-86



29-85



30-3

玉縄城跡 (No.63)

植木字植谷戸 48 番 6 地点

例 言

1. 本書は、鎌倉市植木字植谷戸48番6地点における個人住宅建設に伴う地盤の柱状改良に対する事前の埋蔵文化財の緊急調査発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は平成19年9月12日～9月26日である。
3. 調査団の編成は以下の通りである。

調査の主体	鎌倉市教育委員会
調査担当	滝澤晶子
調査補助員	安達澄代・菅野篤博
調査協力者	田口康雄・金丸義一・佐野吉男（社団法人鎌倉市シルバー人材センター）
4. 本書の執筆・編集は滝澤晶子が行った。
5. 本書の図版および写真撮影は次のものを行った。

遺構図版	滝澤晶子	遺構写真	滝澤晶子	遺物写真	滝澤晶子
------	------	------	------	------	------
6. 本書の遺構・遺物の縮尺は次の通りである。(各々の図にスケールを載せている)
遺構図 1 / 60 (遺構図の水糸高は海拔高を示す)
7. 遺構実測図には次の記号が使用されている。

釉の限界線	-----	調整の変化点	-----	使用痕の範囲	←————→	加工痕の範囲	<----->
攪乱の範囲	-----	推定ライン	-----	調査限界ライン	-----		
8. 発掘調査に際して御理解・御協力を賜った、建築主及び関係者の方に深く感謝の意を表す。

目次

本文目次

第一章 遺跡の位置と歴史的環境	288
1. 調査地の位置	
2. 歴史的環境	
3. 周辺地域の発掘調査	
第二章 調査の概要	291
1. 調査の経緯と経過	
2. 調査区の位置とグリッド配置	
3. 基本土層	
第三章 検出遺構と出土遺物	293
第1面	
第四章 まとめ	295

挿図目次

図1 遺跡周辺図	288	図4 グリッド配置図	292
図2 調査区位置図	291	図5 遺構配置図	293
図3 調査区の位置	292	図6 溝1・落込み1出土遺物	294

図版目次

図版1	296	図版3	298
A. 遺跡全景(北より)		A. 溝1土層断面(A-A')	
B. 同上(南より)		出土遺物	
図版2	297		
A. 遺跡全景(北西より)			
B. 調査区東壁土層断面(C-C')			

第一章 遺跡の位置と歴史的環境



図1 遺跡周辺図

1. 調査地の位置 (図1)

本調査地は鎌倉市植木字植谷戸48番6地点(図1-1)に所在し、玉縄城跡(No.63)の遺跡指定範囲内に位置する。調査地はJR大船駅から西方約1.3kmにあり、地勢的に見ると、標高最高80m、平均50mの低丘陵地で、相模の台地の先端に当たる。この丘陵地の東には南に向かって柏尾川、北から西へ柄沢川が廻る。その丘陵地の中心部に玉縄城の主郭があり、(現在は鎌倉女学院)その南際に調査地は位置している。

玉縄城は主郭を土塁と空堀で防御し、その周辺に曲輪と支城を配置している。主郭を中心に西に「くいちがいの曲輪」、北に「お花畑曲輪」、北西に「出丸(花見堂)」、南西に「円光寺※曲輪」、南に「御厩曲輪」

がある。また、主郭を囲む土塁は自然の稜線を利用し加工したもので、南北に1ヶ所ずつ切れ目があり、南が「大手」、北が「裏口」となっている。調査地点は主郭の南側、「御厩曲輪」の地区に当り、南の土塁の切れ目「大手」の南東に位置している。

支城は北側に「長尾砦」、西側に「二伝寺砦」・「高谷砦」・「おんべやま砦」があった。

その他周辺地域には玉縄城に関連すると考えられる字名が「城廻り」「植谷戸」「城宿」「清水小路」等、残っている。

※円光寺そのものは現在南方、字相模陣付近に移動している。

2. 歴史的環境

玉縄城は戦国時代の典型的な山城で、永正9年(1512)北条早雲により三浦半島に勢力を持っていた三浦道寸攻略のために築かれた城である。初代城主北条氏時から為昌・綱成、氏繁、氏舜の5代にわたって小田原北条氏の傘下に配された城である。その間、永正15年(1518)上杉朝興、大永6年(1526)里見義豊、永禄4年(1561)上杉謙信との計3回の合戦に落城することなく、天正18年(1590)豊臣秀吉による小田原征伐に際して開城された。小田原北条氏滅亡後、元和5年(1619)頃に廃城となるまで存続していた。

玉縄城廃城後は寛永2年(1625)頃には城の南に陣屋が設けられ、元禄16年(1703)頃まであったらしく、調査地南の坂は「陣屋坂」、坂の下には「相模陣」との字名が現在も残っている。

3. 周辺地域の発掘調査(図1)

調査地付近はこれまでの発掘調査から、縄文時代～近世にわたる遺跡が確認されている。当然ながら玉縄城関連の遺跡が多く調査されている。本項ではその内ごく近隣に限って紹介したい。

図1-2 地点の調査(未報告)

1978年7月～8月に清泉女学院図書館用地の発掘調査が実施されている。溝、井戸、土坑、柵列、柱穴が検出され、16世紀の国産陶磁器類、中国産陶磁器類、かわらけ、鉄製品、漆器、つぶて石等が出土した。

図1-3 地点の調査(鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21)

植木字相模陣425番3外地点で平成14年7月15日～8月14日にかけて実施された。15世紀～16世紀前半にかけての3時期にわたる溝状遺構、平場、土塁、Pit、通路状遺構が検出され、16世紀前半の遺物が出土した。

図1-4 地点の調査(玉縄城跡発掘調査報告)

城廻字城宿357番2、15地点で平成11年7月24日～8月13日にかけて実施された。3段の平場が検出され、「くいちがいの曲輪」の南西端付近に位置していることが報告されている。

図1-5 地点の調査(相模玉縄城)

城廻字打越165地点で1980年3月1日～5月20日、1981年3月7日～5月30日にかけて実施された。縦堀、平坦面、堀切等の城郭遺構が検出されている。

図1-6 地点の調査(未報告)

植木字植谷戸66番1外地点で実施された。15世紀後半～16世紀後半の石垣状遺構、掘立柱建物柱建物、やぐら、柱穴、溝、井戸、土坑等が検出された。

図1-7 地点(鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20)

植木字植谷戸70番1外地点で平成13年5月25～6月14日にかけて実施された。15世紀後葉～16世紀頃の3段の平場等が検出された。

図1-8地点(鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20)

植木字植谷戸198番の一部地点で平成13年9月25日～10月31日にかけて実施された。戦国期～江戸前期、計5期にわたる遺構群が検出された。

図1-9地点(玉縄城跡発掘調査報告書)

植木字相模陣374番他地点で1987年7月27日～1988年4月9日にかけて実施された。主郭外南東側に当り、戦国期を中心に縄文～近世にわたる遺構群が検出された。戦国期の遺構としては、土坑、テラス状遺構、畝、溝状遺構、平坦面、掘立柱建物、礎石建物、柱穴列、井戸、方形竪穴遺構等が検出された。

図1-10地点(未報告)

植木字相模陣370番地点で1989年8月～1990年3月にかけて実施された。弥生時代、戦国期～江戸時代(16世紀～18世紀)にかけての遺構が検出された。

図1-11(未報告)

鎌倉グリーンマンション用地地点で1978年10月に実施された。段築状の平場や切岸が検出され、天目茶碗が出土している。

図1-12(未報告)

城廻字城宿340-1地点で実施された。井戸、Pitが検出された。

図1-13(鎌倉考古第4号に概報)

玉縄城南西外郭部発掘調査として1980年6月～7月に実施された。段築状の平場、土塁状遺構が検出された。

図1-14(鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15)

城廻字清水小路673番10地点で平成9年8月18日～8月28日にかけて実施された。平坦面、溝が検出され、溝は屋敷の周囲を巡る溝であろうと報告されている。

図1-15(鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書4)

城廻字中村654番1他地点で昭和62年4月27日～5月19日にかけて実施された。中世～戦国期にかけての遺構群が検出された。戦国期(16世紀初頭～17世紀初頭)の遺構としては曲輪状遺構、切岸、段状遺構、通路状遺構、階段取り付け遺構、溝等が検出された。

上記の他に確認し得た範囲で3カ所の調査が実施され、戦国期～近世の遺構が確認されている。

各々の調査地点についてほんの概略について羅列したが、未報告のものも多く含まれ、ややまとまりに欠けるが、これらの調査の「玉縄城跡」からは切岸、堀切、平場、土塁といった城郭施設、あるいは掘立柱建物、礎石建物、溝等、城に付随する施設が多く発見されている。

<参考文献>

「鎌倉事典」白井永二編 東京堂出版 平成4年

「鎌倉の地名由来辞典」三浦勝男編 東京堂出版2005年9月

「玉縄城跡発掘調査報告書-植木字相模陣374番他地点-」玉縄城跡発掘調査団 1994年3月

「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 4」鎌倉市教育委員会 昭和63年3月

「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 15」鎌倉市教育委員会 平成11年3月

「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 17」鎌倉市教育委員会 平成13年3月

「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 20第1分冊」鎌倉市教育委員会 平成16年3月

「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 21第2分冊」鎌倉市教育委員会 平成17年3月

「相模玉縄城 城廻字打越165地点の発掘調査」鎌倉考古学研究所 1986年5月

「玉縄城跡発掘調査報告書 鎌倉市城廻字城宿357番2、15」玉縄城跡発掘調査団 2000年8月

「鎌倉考古第4号」鎌倉考古学研究所 1980年11月25日

第二章 調査の概要

1. 調査の経緯と経過

調査は鎌倉市植木字植谷戸48番6地点における個人住宅に伴う調査として実施された。平成19年6月12日～13日に鎌倉市教育委員会により確認調査が実施され、その結果、現地地表下100cm前後から第1面が確認され、現地地表下2mまでに中世後期の溝または堀と思われる土層が確認された。それを受け、平成19年9月12日～平成19年9月26日にわたって本調査が実施された。調査対象面積は22.4㎡である。遺物は3点出土した。

確認調査(図3)

確認調査は敷地内、図3に示した位置に設定し、現地地表下2mまで掘削して行われた。現地地表下150cm以下は湧水があった。現地地表下100cmに「人為的な加工痕を確認した。土層断面の確認のみであるが、おそらくは溝または堀と思われる。出土した遺物は少量であるが、調査地域と土層から勘案して中世後期と考えられる。」と報告された。

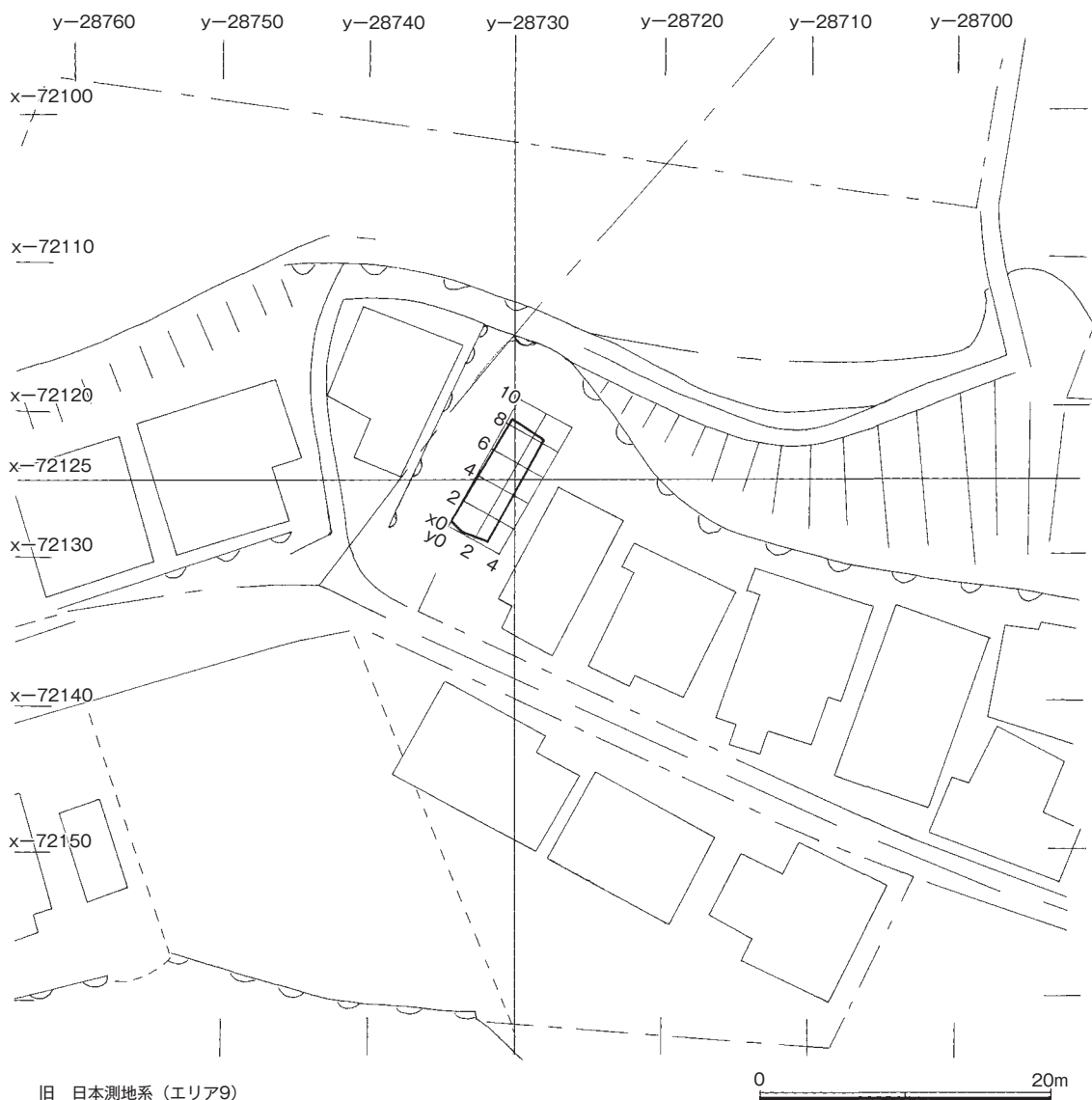


図2 調査区位置図

調査経過

調査経過は以下のとおりである。

- 平成19年 9月12日 重機による表土掘削後、人力による調査開始。
- 9月13日 試掘坑再掘。
- 9月14日 表土・攪乱除去作業。
- 9月18日 溝土層断面撮影・測量。
- 9月21日 溝検出作業
- 9月25日 測量基準点移動。全景撮影。測量。
- 9月26日 現地調査終了、撤収。

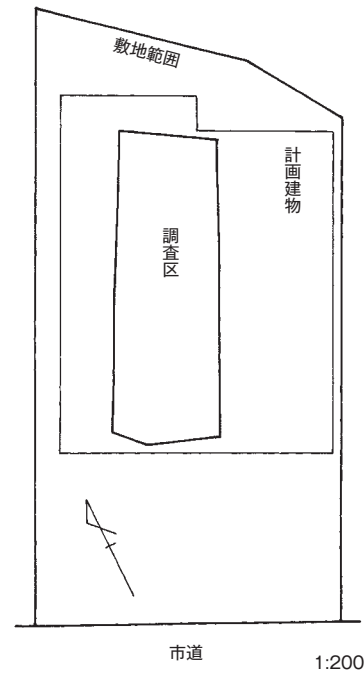


図3 調査区の位置

2. 調査区の位置とグリッド配置 (図2・3・4)

敷地と建築範囲と調査区の関係は隣地との関係及び安全性を考慮し、図3に示したように設定された。位置は北緯35度21分9秒、東経139度30分50秒である。

グリッドは調査区の形状に合わせて任意に設定した。(図2・4) グリッドと国土座標(エリア9)の関係は以下の通りである。世界測地系には国土地理院提供のソフトを使用して変換した。

A地点：グリッド(x 8.534、y 0.361) = 国土座標[旧日本測地系](X - 72120.833、Y - 28730.000) = 国土座標[世界測地系](X - 71764.027、Y - 29023.297)

B地点：グリッド(x 0.124、y 5.081) = 国土座標[旧日本測地系](X - 72130.477、Y - 28730.000) = 国土座標[世界測地系](X - 71773.671、Y - 29023.297)

C地点：グリッド(x 3.382、y - 0.315) = 国土座標[旧日本測地系](X - 72125.000、Y - 28733.116) = 国土座標[世界測地系](X - 71768.194、Y - 29026.413)

D地点：グリッド(x 5.347、y 3.189) = 国土座標[旧日本測地系](X - 72125.000、Y - 28729.091) = 国土座標[世界測地系](X - 71768.194、Y - 29022.387)

グリッドx軸は北から30度東に傾いている。なお、本文中では便宜上、グリッドxプラス方向を北として呼称し、正確な方位は各図に矢印で示している。

3. 基本土層 (図5)

基本土層C - C'は図5に記してある。現地表は海拔51.6 m前後のほぼ平坦面。表土層は現地表から80cm前後であった。海拔50.8 m付近に地山が検出された。土層注記は第3章で詳細を記す。

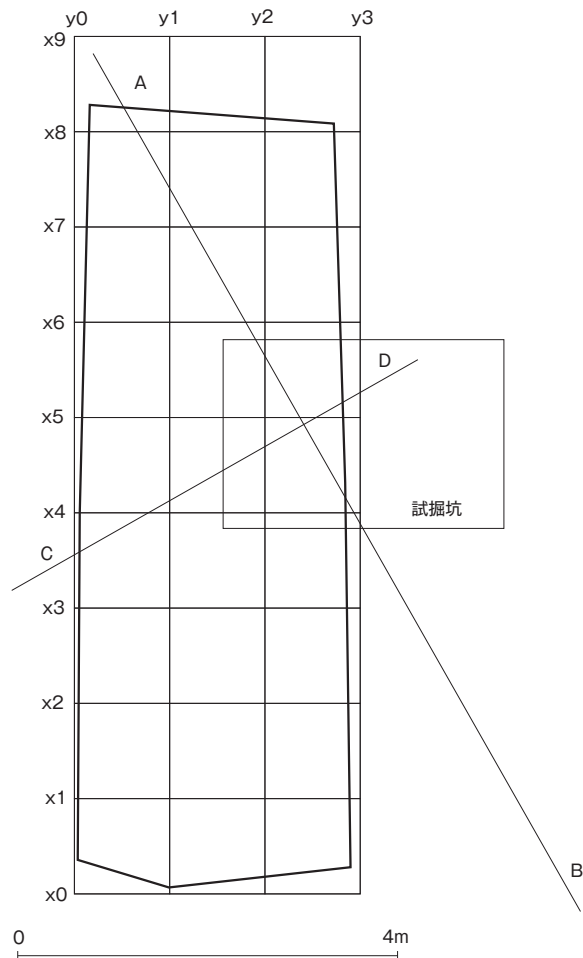


図4 グリッド配置図

第三章 検出遺構と出土遺物

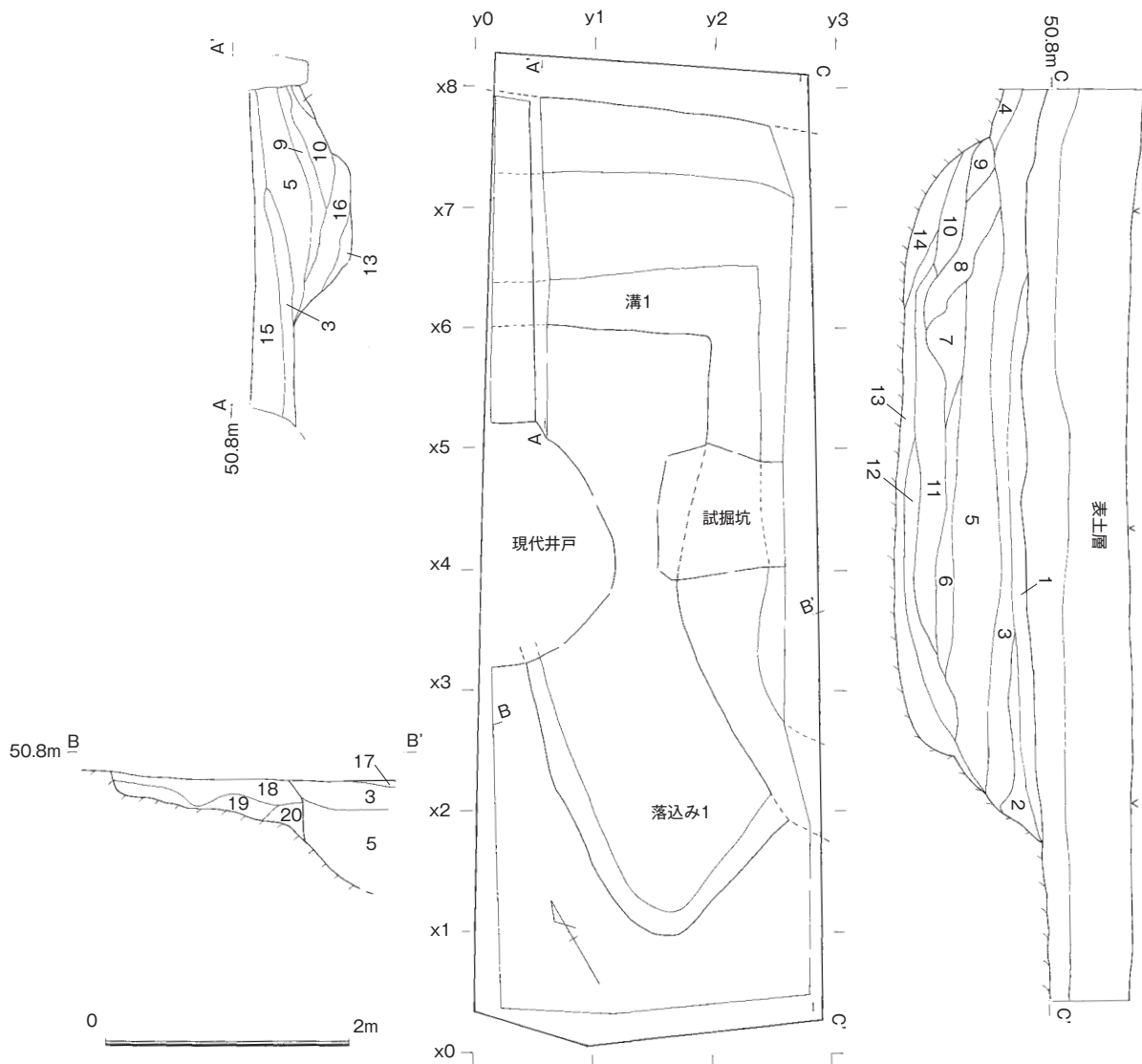


図5 遺構配置図

第1面 (図5)

当調査区は約90cmの表土を取り除いた海拔50.6m前後に南部に関東ローム層の平坦面が検出された。ただし、この平坦面は上層が削平されてしまっている可能性が高い。遺構はL字型の溝、落込み1ヶ所が検出された。

溝1 (図5)

溝1は海拔50.3m～50.6m付近で確認された。調査区北部を東西方向に走り、調査区東端で南にL字型に曲がっている。検出された範囲で溝の南端は立ち上がっており、そこからさらに東に折れ鉤型を呈する可能性が高い。溝の断面形は逆台形を呈し、幅は東西方向部分で上端幅190cm、下端幅80cm、深さは検出面から60cm前後を測る。南北方向部分は東部は調査区外で、西岸しか検出されなかったため、幅は不明だが、深さは検出面から78cm前後を測る。検出し得た範囲で、底レベルは東西方向部分で西

から東へ16.6cm下り、コーナーで南北方向部分へ17.5cm下がる。南北方向部分については調査区外のため最底部まで検出されなかったため、高低差は不明である。土層注記は以下表のとおりである。

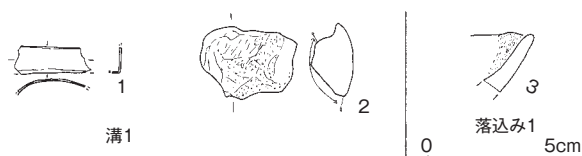


図6 溝1・落込み1出土遺物

溝1出土遺物(図6-1・2)

図6-1・2は溝1の東西部分下層出土遺物である。1は鉄製品である。小破片のため用途は不明。ごく薄い板が緩い弧を描き、一辺が直角に折り曲げられている製品である。2は土製品。片面の表面が溶融している。轡の羽口の可能性があるが、小破片のため詳細は不明。

落込み1(図5)

落込み1は調査区南部を抉るように深さ10cm前後の落ち込みが検出された。溝1(南北方向部分)に切られている。(B-B'層参照)土層注記は以下表のとおりである。(18層・19層・20層)

落込み1出土遺物(図6-3)

図6-3は落込み1から出土したかわらけである。口縁から内面が部分的に溶融しており、とりべとして使用している。口縁端が外反し、胎土は肌色を呈し、微石粒を多く含みやや粗い。小破片のため詳細は不明だが、16世紀代のかかわらけであろう。

番号	色調	土質	内容	粘性	締り
1	暗茶褐色	粘土層	1～3cm大の土丹	あり	よい
2	橙茶褐色	粘質土層	小土丹粒(微量)・炭化物(微量)	あり	わるい
3	黄褐色～灰褐色	粘質土層	0.5～5cm大の土丹(多量)	つよい	よい
4	茶褐色	粘質土層	土が0.5cm以下の小ブロック状の土層	あり	わるい
5	黒灰褐色	粘質土層	0.5～5cm大の土丹(多量)	つよい	わるい
6	黒灰褐色	粘質土層	0.5～1cm大の土丹(多量)・木の枝	つよい	よい
7	黒灰褐色	粘質土層	10cm大の土丹(やや多)・木の枝	つよい	よい
8	黒灰褐色	粘質土層	3～5cm大の土丹・右下部には10～20cm大の大土丹が集中	つよい	よい
9	黒褐色	粘土層	-	つよい	よい
10	黒褐色	粘質土層	小土丹(少)	つよい	よい
11	黒褐色	粘質土層	3cm大の土丹・木の枝・粒子粗くざらついている。	つよい	よい
12	黒褐色	粘質土層	5～10cm大の土丹(多量)・木の枝(多量)	-	よい
13	青味黒灰色	粘土層	小土丹(少)・木の枝(少)	つよい	よい
14	黒灰色	粘質土層	0.5cm以下の土丹(少)・木の枝(少)・粒子粗くざらついている。	-	わるい
15	黄褐色～灰褐色	粘質土層	0.5～5cm大の土丹(多量)	つよい	よい
16	黒灰色	粘質土層	0.5cm大の土丹・粒子粗くざらついている。	つよい	よい
17	暗褐色	粘土層	焼土粒(ごく少)	-	よい
18	赤味茶褐色	粘土層	小土丹粒(やや多)・炭化物(少)・土がブロック状の土層	-	わるい
19	赤味茶褐色	粘土層	小土丹粒・焼土粒(やや多)	つよい	とてもよい
20	青味黒灰色	粘土層	小土丹粒(少)	つよい	とてもよい

第四章 まとめ

玉縄城付近は極めて大まかな時期区分として玉縄城築城（永正9年（1512））以前・玉縄城期・玉縄城廃城（元和5年頃（1619））後と3時期に分けられよう。今回の調査では玉縄城期と考えられる遺構が検出された。

調査地点が位置する「御厩曲輪」は東西80～100 m、南北30～40 mの平場で、四方を土塁に囲まれ、その土塁には4カ所の切れ目があり、北は主郭、東は「七曲坂」、東南は「えんしょうぐら」、西は「城宿」に通じている。また、北側の土塁の南（主郭南辺土塁）下には堀があったらしい。※

さて、今回検出されたL字型溝は調査地点が「御厩曲輪」のなかでも玉縄城主郭の大手口に近いことから東から回ってきた溝が大手口に向かって鉤型に折れた可能性は高い。となると、土塁外側にめぐる堀が想定できるが、検出された溝は堀と呼ぶにはあまりにも規模が小さかった。しかし、表土を取り除いた直下が地山であったことから、上部が削平されてしまった可能性は高く、位置的には堀の下部であると考えたいが、断定はできない。

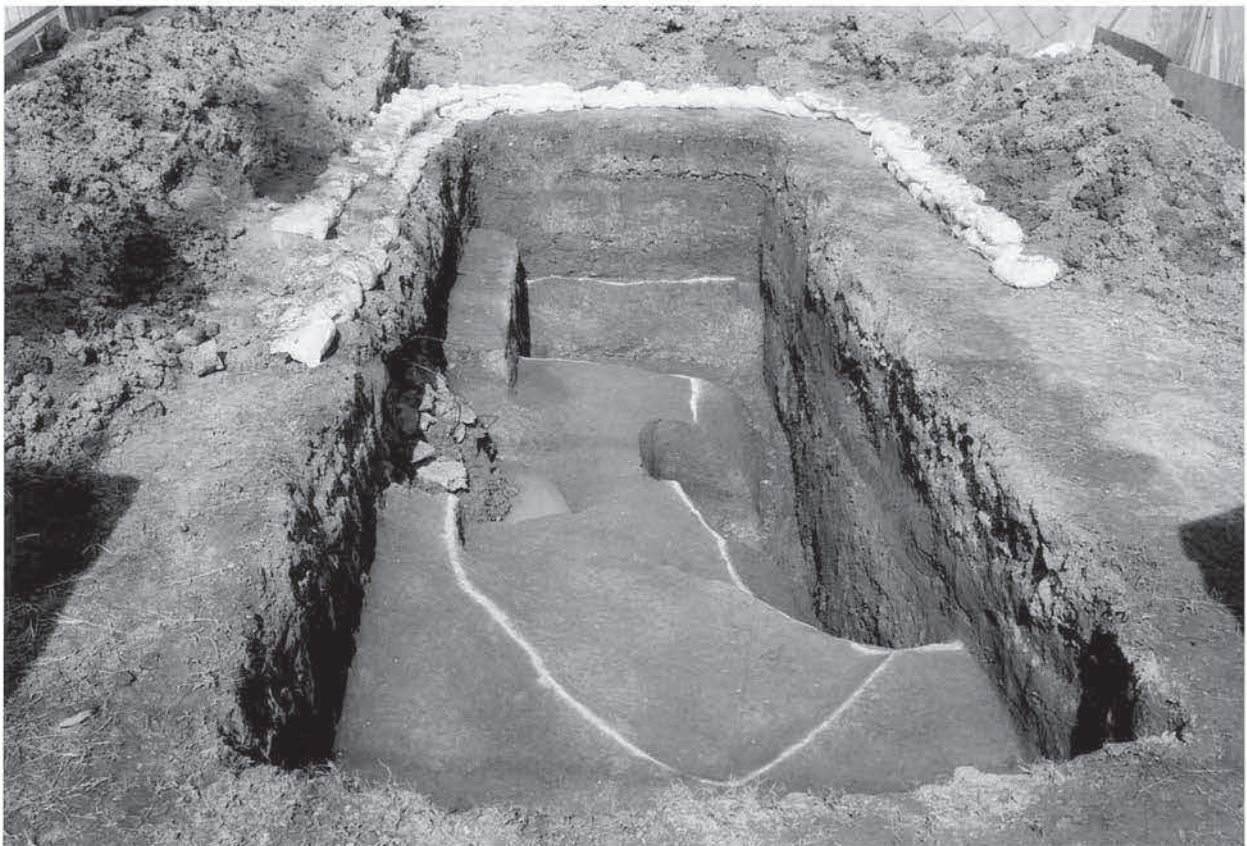
今回の調査区は狭小であり、また、周辺地域の調査での傾向に漏れず、出土遺物が小破片3片とごくわずかではあったため、確定的なことは述べられないものの、今回の調査で、この地の玉縄城期の様相の一端が解明されたといえよう。詳細については今後、新たな調査による発見を期待している。

《参考文献》

※「玉縄城跡発掘調査報告書－植木字相模陣374番他地点－」1994年3月 玉縄城跡発掘調査団 「I 玉縄城について・中心部の縄張り」大河内勉著による。



▲A. 遺跡全景 (北より)



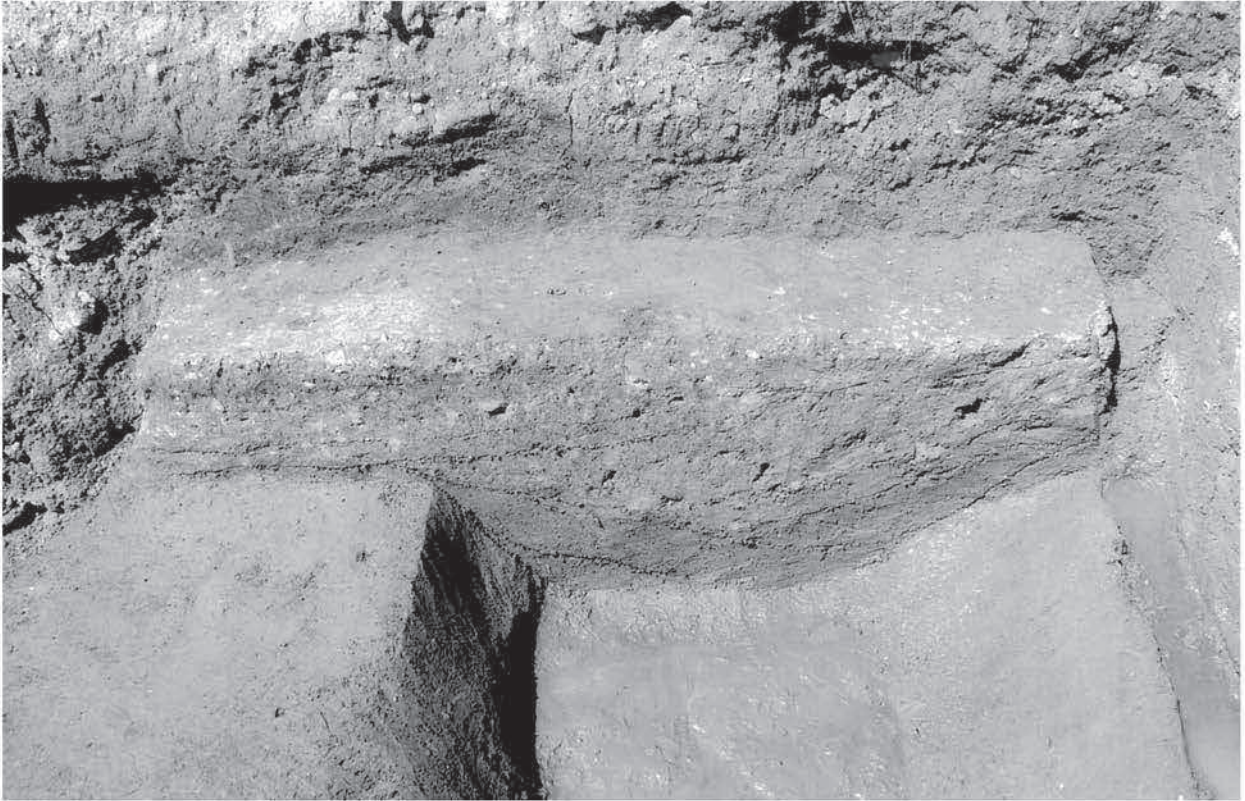
▲B. 同上 (南より)



▲A. 遺跡全景 (北西より)



▲B. 調査区東壁土層断面 (C-C')



▲A. 溝1土層断面(A-A')



图6-1



图6-2



图6-3

出土遺物

天神山城 (No.384)

山崎字宮廻 656 番 19 地点

例 言

1. 本書は、鎌倉市山崎字宮廻656番19地点における個人住宅地下室建設に伴う事前の埋蔵文化財の緊急調査発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は平成20年5月26日～6月17日である。
3. 調査団の編成は以下の通りである。
調査の主体 鎌倉市教育委員会
調査担当 滝澤晶子・宮田眞
調査補助員 安藤龍馬・根本志保
調査協力者 沼上三代治・渡辺輝彦・天野隆男・伴一明（社団法人鎌倉市シルバー人材センター）
4. 本書の執筆・編集は以下のものが行った。
第一章・第三章・第四章 宮田眞
第二章・編集 滝澤晶子
5. 本書の図版および写真撮影は次のものが行った。
遺構図版 滝澤晶子 遺構写真 滝澤晶子 遺物写真 滝澤晶子
6. 本書の遺構・遺物の縮尺は次の通りである。(各々の図にスケールを載せている)
遺構図 1／40（遺構図の水糸高は海拔高を示す）
7. 遺構実測図には次の記号が使用されている。
釉の限界線 ····· 調整の変化点 - - - - 使用痕の範囲 ←————→ 加工痕の範囲 <----->
攪乱の範囲 - - - - 推定ライン ----- 調査限界ライン ·····
8. 発掘調査に際して御理解・御協力を賜った、建築主及び関係者の方に深く感謝の意を表す。

目次

本文目次

第一章 遺跡の位置と歴史的環境	302
1. 調査地の位置	
2. 歴史的環境	
第二章 調査の概要	304
1. 調査の経緯と経過	
2. 調査区の位置とグリッド配置	
3. 基本土層	
第三章 検出遺構と出土遺物	308
第四章 まとめ	314

挿図目次

図1 遺跡周辺図	302	図7 1号住居址竈	309
図2 調査区の配置	304	図8 1号住居址・2号住居址出土遺物	310
図3 調査区位置図	305	図9 下層遺構配置図	311
図4 グリッド配置図	306	図10 3号住居址・4号住居址出土遺物	312
図5 調査区壁土層断面図	307	図11 包含層出土遺物	313
図6 上層遺構配置図	308		

図版目次

図版1	315	図版7	321
A. 調査地点付近 遠景(北から)		A. 調査区北壁土層断面 c-c'	
B. 遺跡全景(東より)		B. 調査区東壁土層断面 d-d'	
図版2	316	C. 調査区南壁土層断面 e-e'	
A. 1号住居址竈(東より)		図版8	322
B. 同上(近景)		出土遺物(1)	
図版3	317	図版9	323
A. 1号住居址竈下層(東より)		出土遺物(2)	
B. 同上 断割り a-a'(南より)		図版10	324
図版4	318	出土遺物(3)	
A. 1号住居址竈 断割り b-b'(東より)		図版11	325
B. 同上 完掘(東より)		出土遺物(4)	
図版5	319	図版12	326
A. 遺跡全景(南より)		出土遺物(5)	
B. 同上(北より)			
図版6	320		
A. 1号住居址竈 完掘(北より)			
B. 3号住居址 完掘(南より)			

第一章 遺跡の位置と歴史的環境

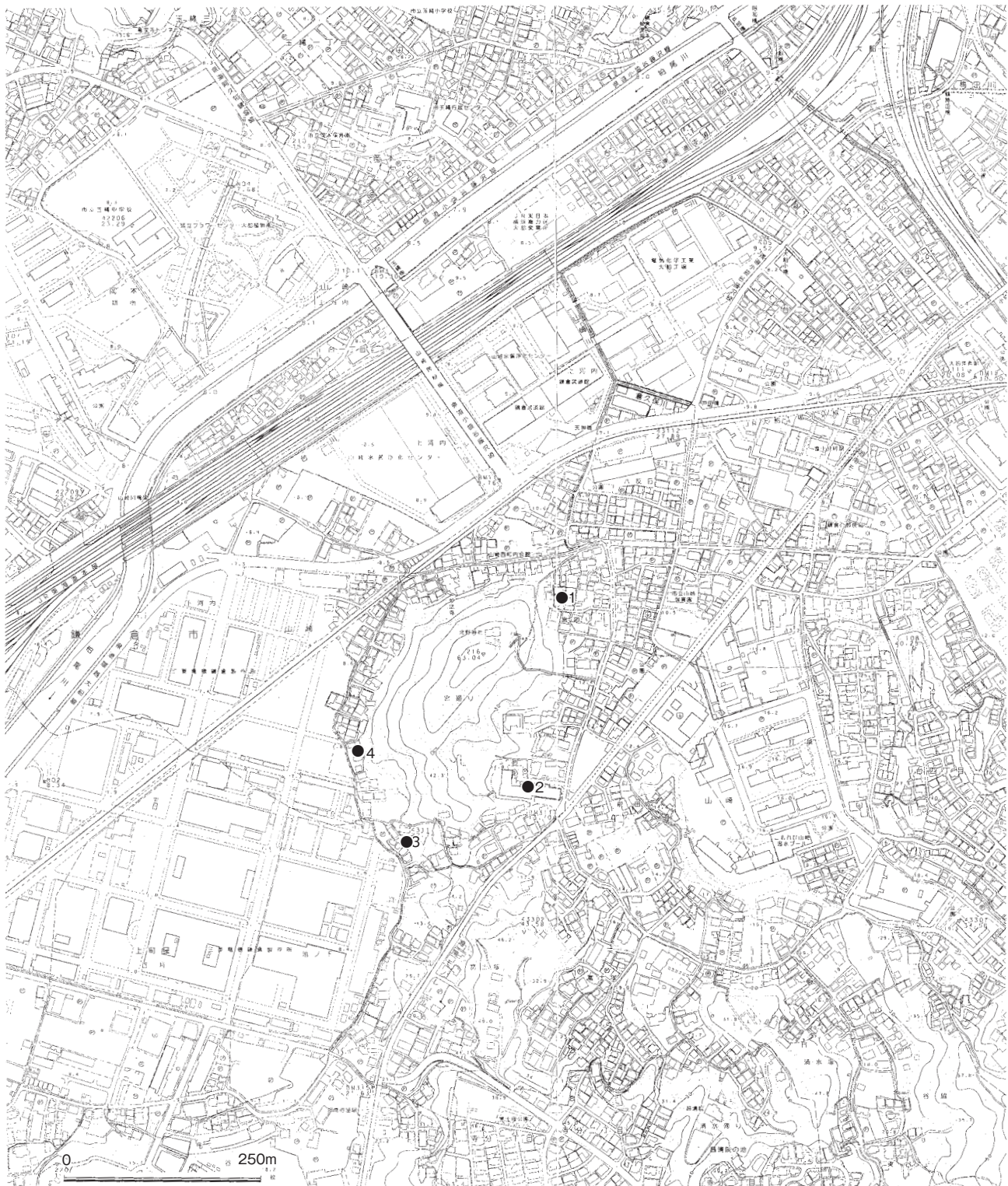


図1 遺跡周辺図

1. 調査地の位置 (図1)

本調査地は鎌倉市山崎字宮廻656番19に所在する。JR大船駅を基点にすると南西方向に直線で約1.2kmの距離にある。調査地の北方およそ1kmの距離には、横浜市に源流をもつ「柏尾川」が北東から南西方向に流れており、やがて江ノ島付近で相模湾に注ぎ込む。調査地はこの柏尾川を中心に形成する沖積平野の南端部に位置する天神山(標高63m)の北東山麓付近に立地する。沖積平野の対岸(北側)の丘陵には有名な玉縄城址がある。調査地からの距離は直線で約1800mを測る。天神山は独立丘であるが、南側は鎌倉中央公園付近に頂上をもつ大規模な丘陵から、北西方に延びる長大な尾根の末端部分のピークに当たると見ることができる。天神山の南側の麓には現在市道(旧京急有料道路)が通っており、その敷設の際に南東に延びる尾根線は切通し状に掘り下げられたようだ。その痕跡は道路を往来すると現在も顕著に見ることができる。

天神山の頂上には「北の神社」が建立されている。祭神は菅原道真。勧請年月は未詳だが社伝では暦応年中に夢窓疎石が北野社を勧請したという。しかしこの時期、夢窓疎石は鎌倉を離れておりこの事実はありません。

天神山では太平洋戦争の終戦直後に山頂付近で、縄文早期の撚糸文系土器が採集されたと聞くが現在は所在不明である。また北東側の山裾民家から古墳時代後期(鬼高期)の土師器の坏を主体とする祭祀関係遺物が大量に出土したとされるが、現在は一部を残して散逸してしまったようだ。尚、菊川英政氏が『鎌倉考古33号』1995年2月・鎌倉考古学研究所刊の中で「天神山採集の古墳時代後期土器」として報告している物がそれに該当すると考えられる。

2. 歴史的環境

その他に天神山の山麓地域ではこれまでに3地点で発掘調査が実施されてきた。

本調査地から南方へ250mの図1-2地点では、集合住宅の新築に伴う事前調査として、平成7年(1995)1月～平成8年2月にかけて2180㎡が実施された。この地域での調査ではこれまでの最大規模となる。調査の結果古墳前期から人の活動が始まり、奈良、平安、中世前期・後期、近世・近代に至る複合遺跡であることが判明した。特に古墳～奈良～平安期にかけては集落として住居址や土器集中出土地点などが複数検出された。

本調査地から南南西へ400mの図1-3地点では平成5年(1993)に調査が実施されたが、少量の土師器出土があったようだが詳細については不明である。

本調査地から南西へ350m図1-4地点では、個人住宅新築の事前調査として、平成17年(2005)6月1日～17日にかけて34.4㎡が実施された。調査の結果当該地点では弥生終末期から古代にかけての遺物の出土は見られるが、集落の存在を決定付けるような遺構の検出はなかったと報告されている。

以上、天神山及び周辺地域ではこれまでの調査から幅広い時代区分の遺跡の存在が確認されているが、特に古墳時代を中心とした古代の遺構群・遺物が高密度な状態で包蔵されているようで、今回の調査に当たってもそれらの発見が大いに期待される。

<参考文献>

- 「天神山採集の古墳時代後期土器 鎌倉考古No.33」 菊川英政 1995年2月 鎌倉考古学研究所
「天神山城の調査 第6回鎌倉市発掘調査・研究発表会」 松山敬一郎 1996年8月鎌倉市教育委員会・鎌倉考古学研究所
「天神山城(No.384)山崎字宮廻760番地点 鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13」 松山敬一郎他 平成9年鎌倉市教育委員会

第二章 調査の概要

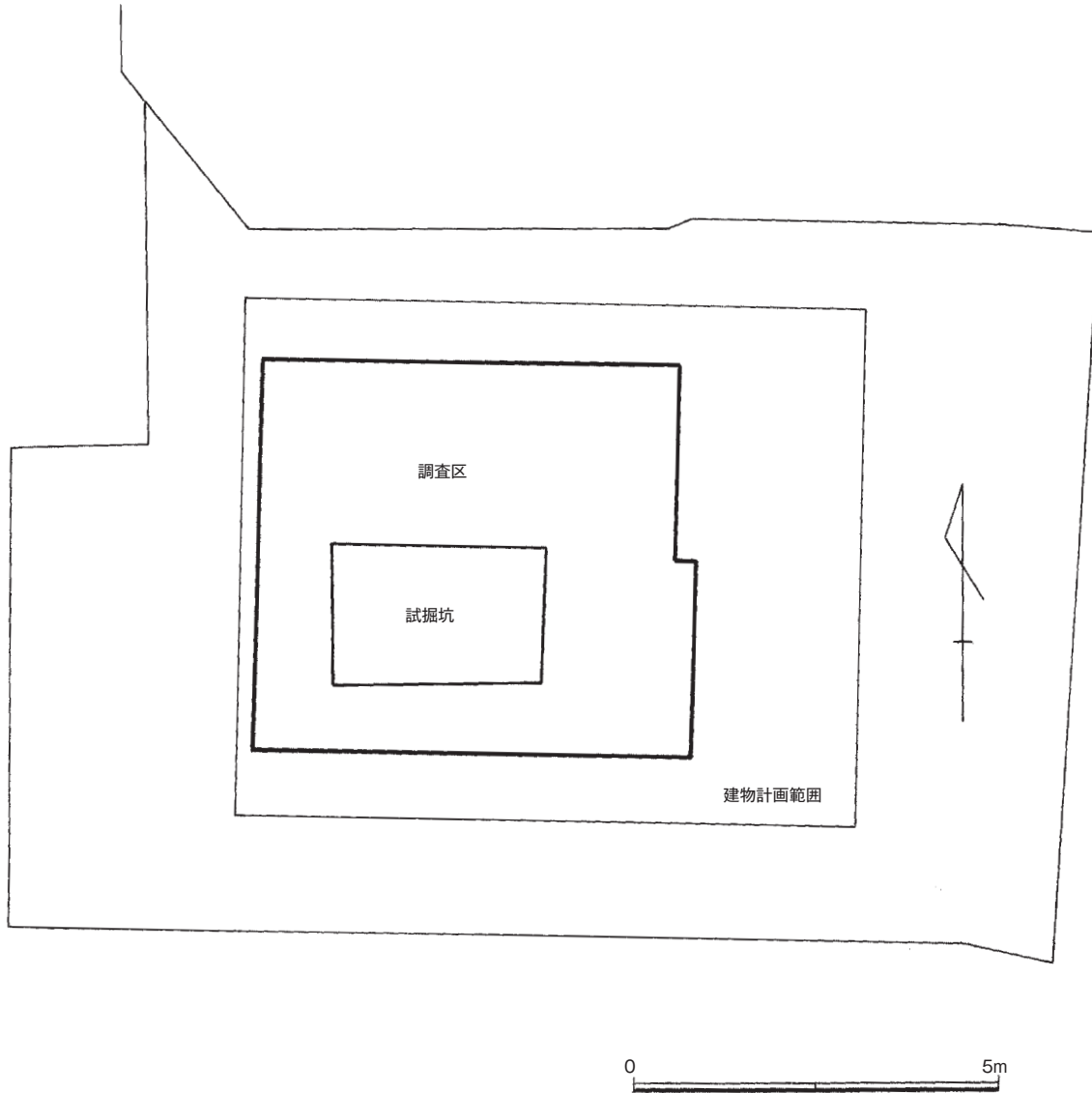


図2 調査区の配置

1. 調査の経緯と経過

調査は鎌倉市山崎宮廻656番19地点における個人住宅(地下室)建設に伴う調査として鎌倉市教育委員会が主体となって実施された。平成19年12月11日～12月12日に鎌倉市教育委員会により確認調査が実施され、その結果、現地表下0～45cm前後から第1面が確認され、それを受け、平成20年(2008)5月26日～平成20年6月17日にわたって本調査が実施された。調査対象面積は49.07㎡である。遺物は遺物収納箱3箱出土した。

確認調査(図2)

確認調査は敷地内、図2に示した位置に設定し、現地表下120mまで掘削して行われた。「遺物包含層までの深さは0～45cm、試掘坑内では遺構の検出はなかったが、土層中から遺物が多く出土し、白色粘土塊が同土層中に遺存していることから、近くに住居址・竈のある可能性が認められる。」と報告された。

調査経過

調査経過は以下のとおりである。

平成20年(2008)5月

- 26日(月) 人力による表土掘削。西側0cm、東側50cm。試掘坑の掘り返し。
- 27日(火) 表土掘削終了。(調査面積49.07㎡)。鎌倉市教委 松尾来現。
- 28日(水) 測量基準点(2・4級)の現場内への移設。表土掘削後の現状写真撮影。
- 29・30日(木・金) 雨天のため作業中止。
- 6月
- 2日(月) 人力による掘り下げ。出土遺物の撮影、実測。試掘坑内の焦土の更なる拡がりを確認。
- 3日(火) 雨天のため作業中止。

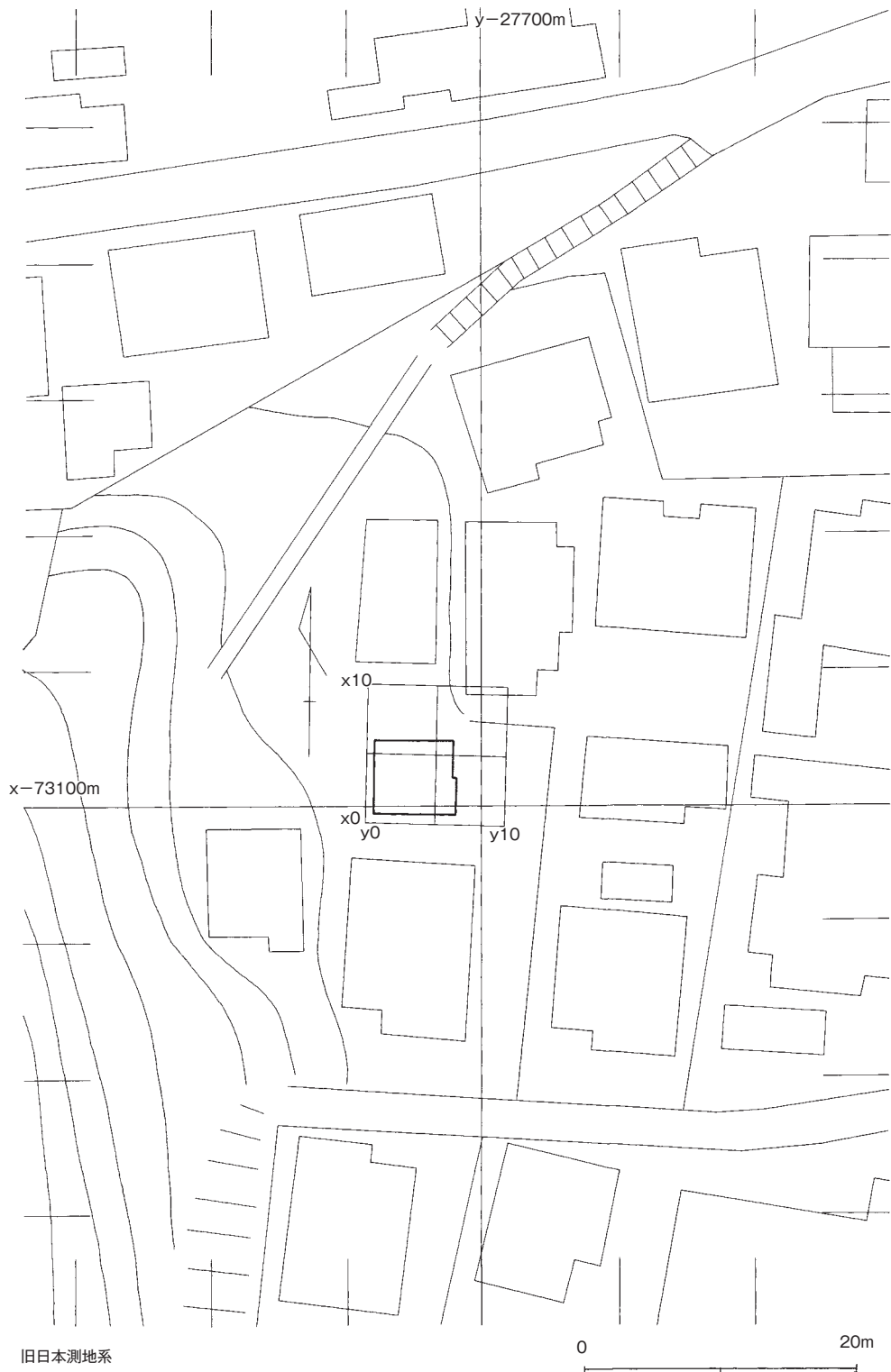


図3 調査区位置図

- 4日(水) 1号住居址の平面プラン確認。掘方西側に竈がつくようだ。
- 5日(木) 雨天のため作業中止。
- 6日(金) 1・2号住居址掘上げ作業。1号住居址写真撮影。
- 9日(月) 雨天作業中止。
- 10日(火) 1号住居址竈断割り。竈セクション実測。2号住居址平面測量。
- 11日(水) 1号住居址完掘。3・4号住居址掘上げ。
- 12日(木) 雨天のため作業中止。
- 13日(金) 3・4号住居址覆土セクション実測。1号住居址床はがし。
- 16日(月) 1・3・4号住居址完掘。3号住居址完掘状況撮影。撮影・測量終了。撤収。

2. 調査区の位置とグリッド配置 (図2・3・4)

敷地と建築範囲と調査区の関係は隣地との関係及び安全性を考慮し、図2に示したように設定された。位置は北緯35度20分38秒、東経139度31分31秒である。

グリッドは調査区の形状に合わせて任意に設定した。(図2・4) グリッドと国土座標(エリア9)の関係は以下の通りである。世界測地系には国土地理院提供のソフトを使用して変換した。

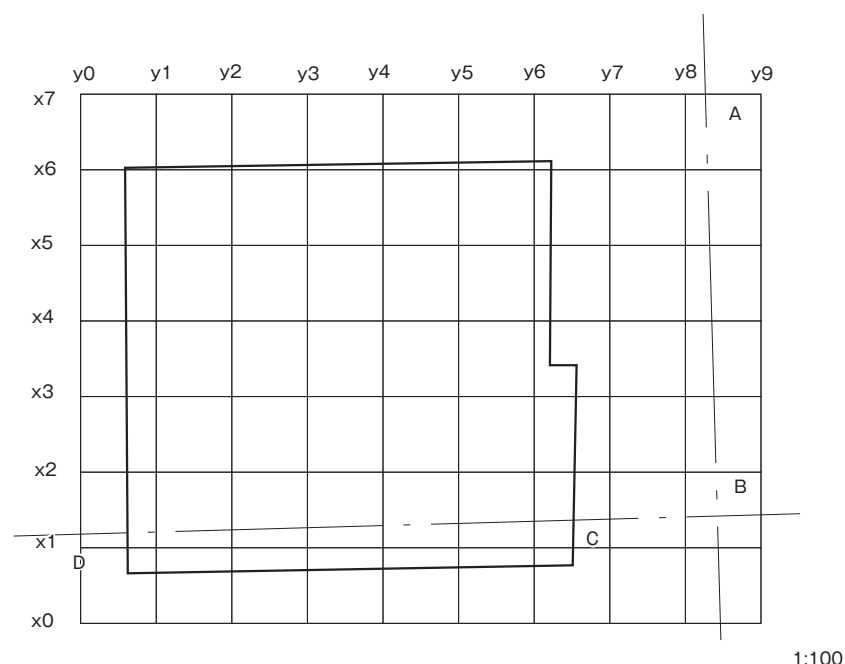
A地点:グリッド(x 6.920、y 8.200) = 国土座標[旧日本測地系](X-73094.511、Y-27700.000) = 国土座標[世界測地系](X-72737.703、Y-27993.314)

B地点:グリッド(x 2.130、y 8.340) = 国土座標[旧日本測地系](X-73099.313、Y-27700.000) = 国土座標[世界測地系](X-72742.505、Y-27993.314)

C地点:グリッド(x 1.380、y 6.610) = 国土座標[旧日本測地系](X-73100.000、Y-27701.754) = 国土座標[世界測地系](X-72743.192、Y-27995.068)

D地点:グリッド(x 1.210、y -0.030) = 国土座標[旧日本測地系](X-73100.000、Y-27708.399) = 国土座標[世界測地系](X-72743.192、Y-28001.713)

グリッドx軸は北から2度東に傾いている。なお、本文中では便宜上、グリッドxプラス方向を北として呼称し、正確な方位は各図に矢印で示している。



3. 基本土層 (図5)

基本土層は調査区の北・東・南壁の土層断面図を図5に示している。それぞれの測点は図9に記してある。現地表面は海拔20.3m前後のほぼ平坦面。表土層は現地表面から5cm～70cm前後であった。海拔19.9m付近に地山が検出された。土層注記は以下、表のとおりである。

図4 グリッド配置図

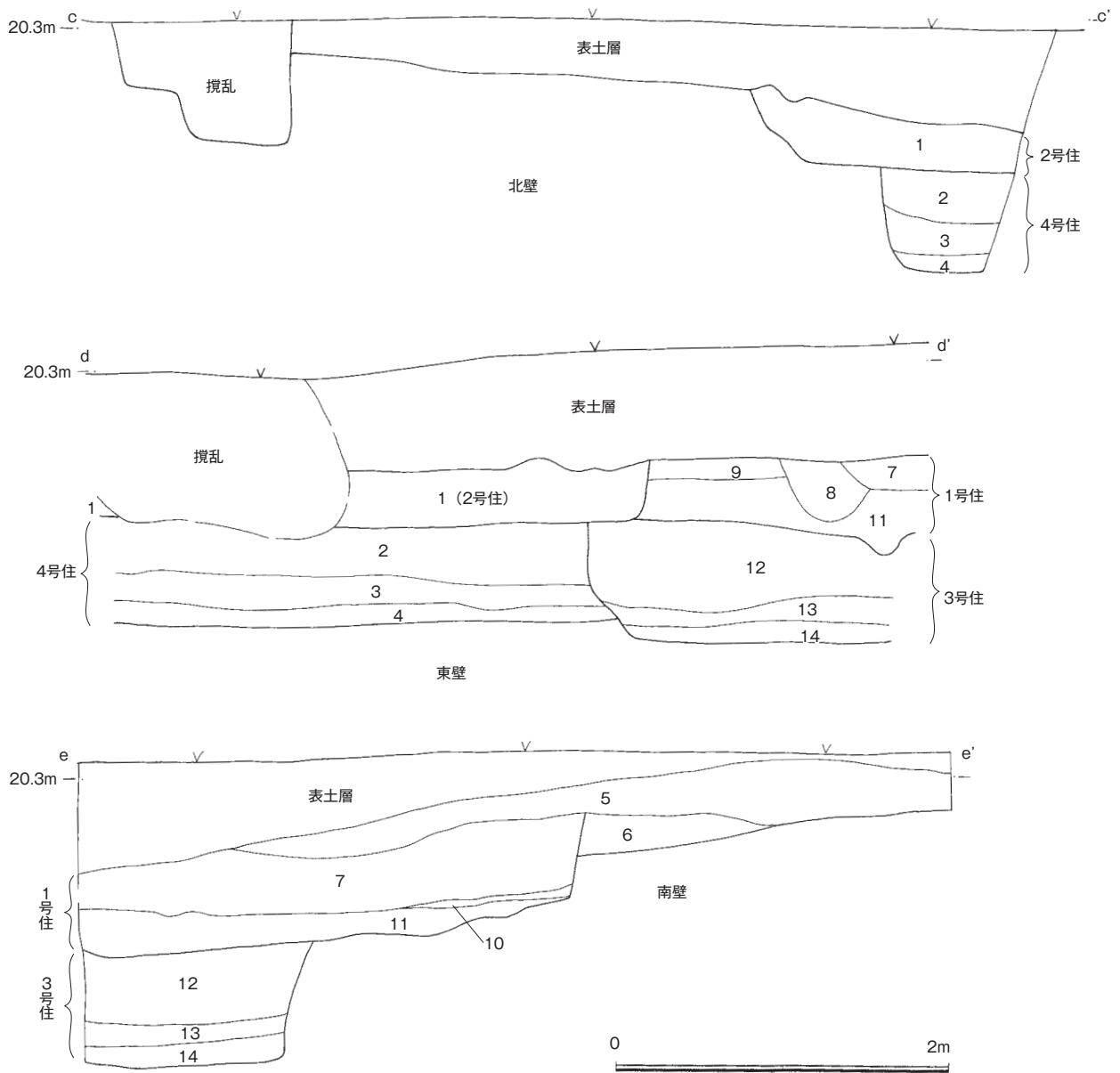


図5 調査区壁土層断面図

番号	色調	土質	内容	締り	備考
1	暗茶灰色	粘質土	炭化物・橙色スコリア・ローム粒・2～3cm大の土丹・土器片	よい	2号住居址
2	暗茶灰色	粘質土	炭化物・橙色スコリア・ローム粒・1cm大の土丹・土器片	よい	4号住居址
3	暗茶灰色	粘質土	炭化物・橙色スコリア・ローム粒・3cm大の土丹(少)・土器片	よい	4号住居址
4	暗茶灰色	粘質土	炭化物・橙色スコリア・ローム粒(少)	よい	4号住居址
5	暗茶灰色	粘質土	炭化物・橙色スコリア・5mm大のローム粒・土器片	よい	
6	暗茶褐色	粘質土	炭化物・橙色スコリア・土器片(少)	よい	
7	暗茶褐色	粘質土	炭化物・橙色スコリア・5mm大のローム粒・土器片	よい	1号住居址
8	暗褐色	粘質土	炭化物・橙色スコリア(少)・土器片	よい	1号住居址
9	暗褐色	粘質土	炭化物・橙色スコリア(少)	よい	1号住居址
10	暗褐色	粘質土	炭化物・橙色スコリア・全体に黄白色系の粘土・焼土(少)	よい	1号住居址
11	暗褐色	粘質土	炭化物・橙色スコリア・5mm大のローム粒・土器片	よい	1号住居址
12	暗褐色	粘質土	炭化物・橙色スコリア・0.5～1cm大のローム粒・10～20cm大の土丹(少)・土器片	よい	3号住居址
13	暗茶褐色	粘質土	炭化物・橙色スコリア(少)・土器片土器片	よい	3号住居址
14	暗茶褐色	粘質土	13層より混入物少なく、粘性強い。	よい	3号住居址

第三章 検出遺構と出土遺物

調査の結果4棟の住居址が検出された。1号～4号住居址と呼称する。

1号住居址(図5・6・7・9)

x 0～4、y 2～5グリッドで検出された住居址で3号住居址の上方に位置する。北側は2号住居址に切られ、東側と南側は調査区外へ拡がりをもつ。検出規模は東西が300cm、南北が335cm、最大壁高は西壁で50cmを測る。尚西壁には竈が付く。竈は焚口から煙道方向が100cm、袖方向は80cm以上を測る。1号住居址の南北の軸線方向はN - 7° - Eを示す。

1号住居址出土遺物(図8-1～34)

図8-1は相模型の坏の破片で復元した法量は、口径15cm、器高4.7cmを測る。胎土は粉質で微砂を含み淡い色調の褐色を呈する。口辺部は横なで、体部は篋削り。2～13は土師器坏の口縁部小片で法量は不明。3・5・6は相模型。8・9は比企型で赤彩が施される。9～13は口辺部と体部の境に稜が付き、

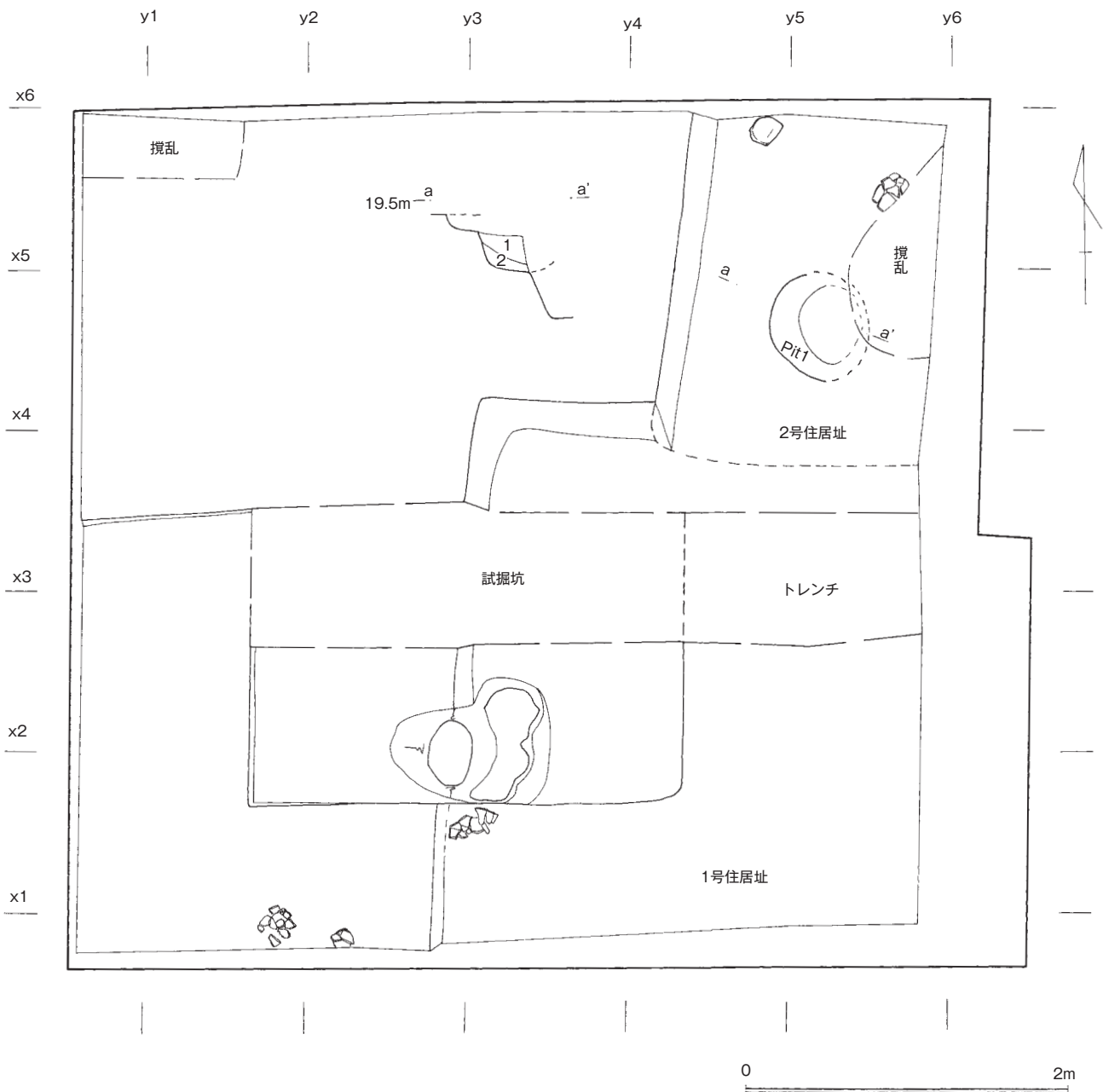


図6 上層遺構配置図

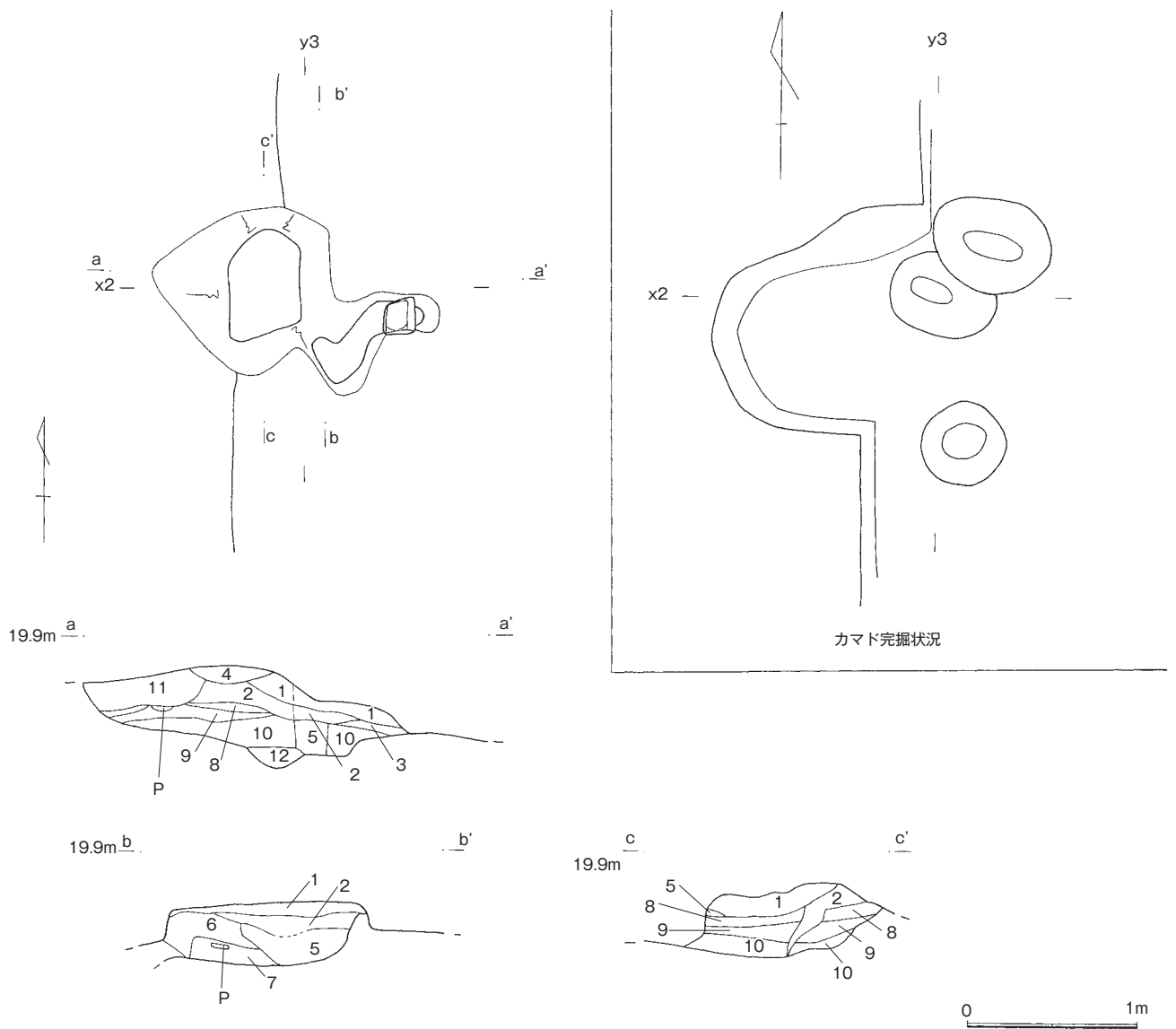


図7 1号住居址竈

番号	色調	土質	内容	締り	粘性
1	灰褐色	粘質土	黄色粘土ブロック・焼土(少)	よい	あり
2	暗褐色	粘質土	焼土ブロック	ややよい	あり
3	暗褐色	粘質土	焼土粒子	よい	あり
4	橙色	粘質土	焼土ブロック	よい	あり
5	黒褐色	粘質土	焼土ブロック	ややよい	あり
6	黄灰色	粘質土	粘土ブロック・焼土ブロックが密に詰まる。	よい	あり
7	暗褐色	粘質土	焼土ブロック・炭化物(少)・土器片	よい	あり
8	暗灰色	粘質土	灰・炭化物・焼土ブロック	やや弱い	あり
9	茶褐色	粘質土	焼土ブロック(南部に特に多)・粘土粒子(北部に多)	やや弱い	あり
10	黒色	粘質土	1cm大の焼土ブロック・炭化物	よい	つよい
11	橙色	粘質土	焼土ブロック(密)	よい	あり
12	黒褐色	粘質土	焼土ブロック・灰	やや弱い	あり

口辺部は稜より内側に立ち上がる。口辺部は横なで、体部篋削り。14・15は土師器鉢の口縁部小片で法量不明。16～22は土師器甕の破片。17～19は口縁部付近の小片、口径不明。16・20～22は底部小片。16は復元した底径8.5cmを測る。内外面共に篋削り。23は縄文土器の胴部小片。混入品。図8-24～34は1号住居址掘方(張り床下層)からの出土品である。24～28は土師器坏の破片で、24は復元した

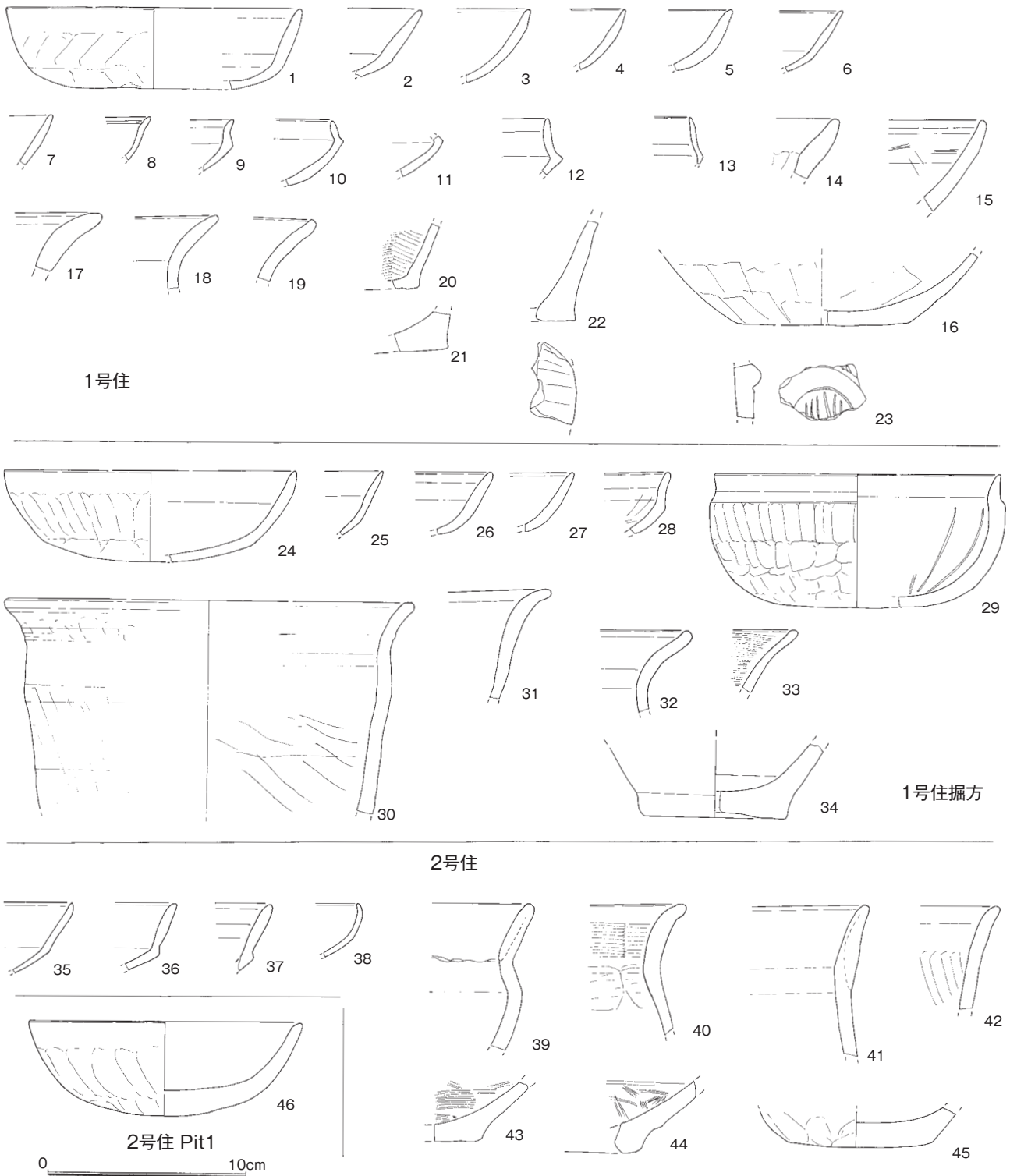


図8 1号住居址・2号住居址出土遺物

口径が15.1cm、底径が8.5cm、器高は4.2cmを測る。胎土は粉質で微砂・雲母を含み、淡い色調の橙色を呈する。口辺部は横なで、下位は篋削り。25～28は小片で法量は不明。24・25は相模型。28は口辺部との境界に緩い稜が付気、外反して立ち上がる。29は土師器壺の破片で、胎土は微砂を多く含み焼成良好。口辺部内外面は横撫で、下位は篋削り、内外面に赤彩が施される。内面には放射状の縦線が篋描きされる。30～34は土師器甕の破片である。30は長胴の甕で復元した口径は21cmを測る。胎土は微砂を含み焼成良好。淡い色調の橙色を呈する。口辺部は横なで、胴部は篋削り。相模型。31～33は法量不明。31・32は赤彩の痕跡あり。34は底部片で底径は7.2cmを測る。胎土は砂・雲母を多く含み、焼

成良好。やや暗い色調の橙色を呈する。外面は篋削り、煤が残る。赤彩。

2号住居址(図5・6)

x3～5、y4・5グリッドで検出された住居址で4号住居址の上方に位置する。南側で1号住居址を切り、北側と東側は調査区外へ拡がりをもつ。検出規模は東西が160cm、南北が210cm、最大壁高は西壁で40cmを測る。南北の軸線方向はN-8°-Eを示す。2号住居址床面からは柱穴と思われるpitが1口検出される。遺存する最大径は65cm、深さは床面から25cmを測る。

2号住居址出土遺物(図8-35～46)

図8-35～38は土師器坏の口縁部小片で何れも法量は不明。35～37は稜が付くタイプ。37は器厚が薄く内湾する。胎土は細砂を多く含み焼成良好。橙色を呈する。39～45は土師器甕の破片で45の底部を除いて何れも法量は不明。41は口縁が折り返される。45は底径7.5cmを測る。胎土は細砂を多く含み焼成良好淡橙色を呈する。内外面篋削り。46は2号住居内pit1出土遺物で、半球状をした土師器碗の破片で、口径14.1cm、器高4.9cmを測る。胎土は砂を多く含み焼成良好。淡橙色を呈する。口辺部横な

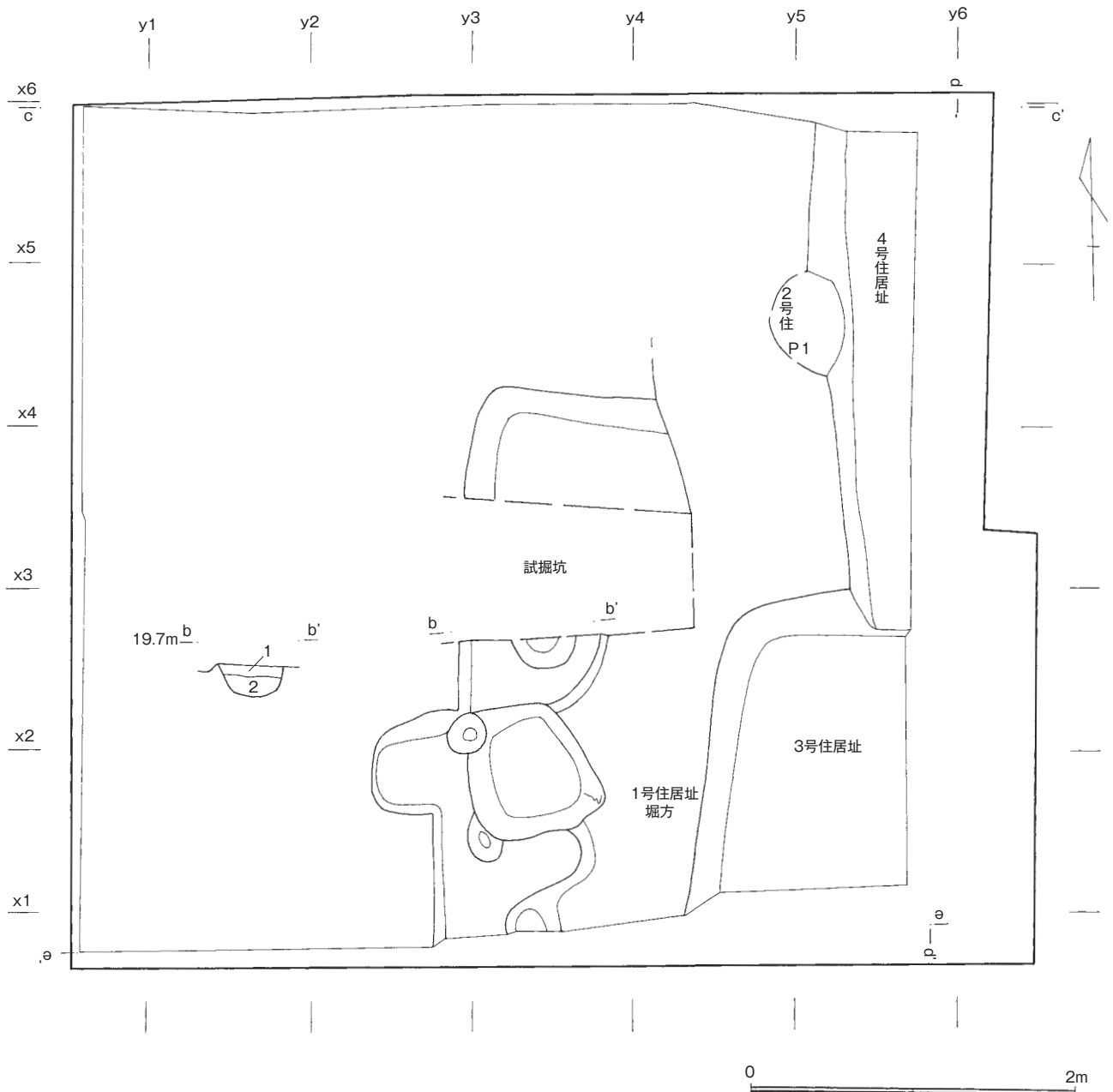


図9 下層遺構配置図

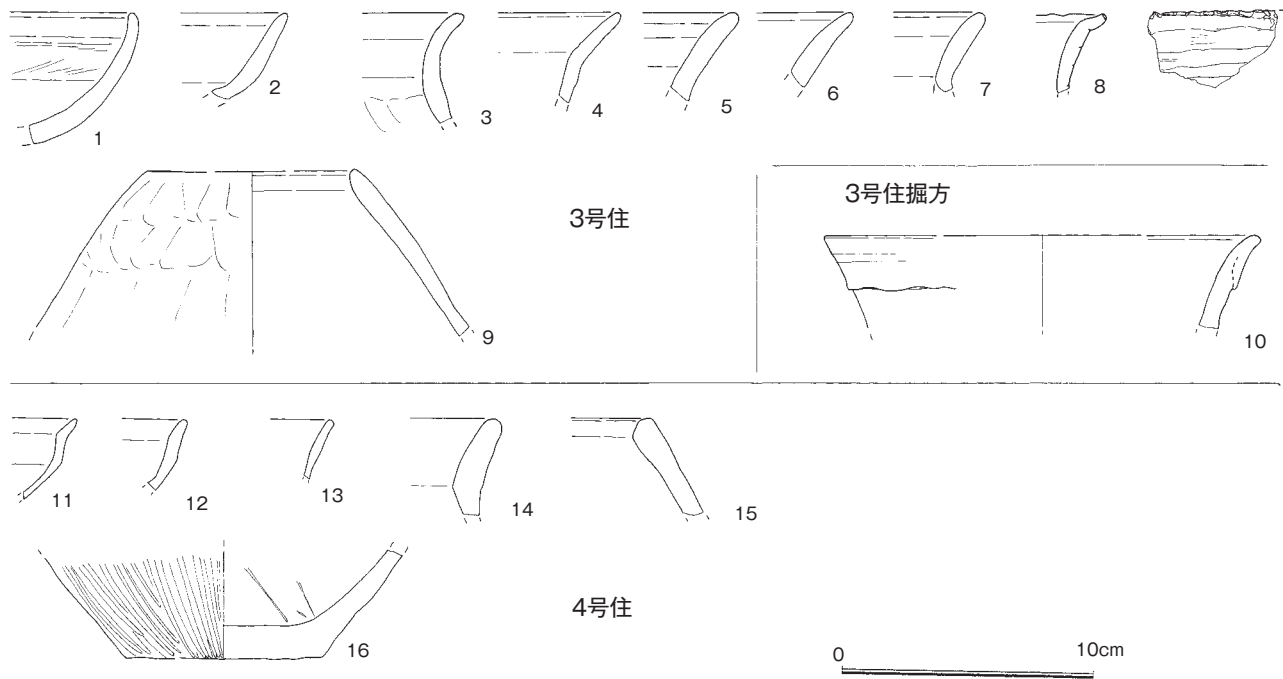


図10 3号住居址・4号住居址出土遺物

で、他は篋削り。

3号住居址(図5・9)

x 1・2、y 4・5グリッドで検出された住居址で1号住居址の下方に位置し、4号住居址を切る。3号住居址は東と南側が調査区外へ拡がりをもつ。検出規模は東西が130cm、南北が180cm、壁高は西壁で70cmを測る。

3号住居址出土遺物(図10-1～10)

図10-1・2は土師器杯の口縁部小片で法量は不明。3～8は甕の口縁部付近の小片で法量は不明。口辺部内外は横なで、下位は篋削り。8は古墳前期に属し、口縁端部に刻みが入る折り返し口縁。混入品。9は土師器無頸壺の破片で胴部に最大径があり、復元した口径は8.4cmを測る。胎土は細砂を含み焼成良好。淡い色調の橙褐色を呈し、外表面に廃黒色の部分がある。全体に篋削りが施される。10は3号住居址掘方出土の土師器甕の破片で、復元した口径は17.5cmを測る。胎土は細砂を含み焼成良好。橙色あるいは暗褐色を呈する。口縁は折り返し口縁で図10-9と同様古墳前期に属し、混入品。

4号住居址(図5・9)

x 2～6、y 5グリッドで検出された住居址で2号住居址の下方に位置し、3号住居址に切られる。4号住居址は東と北側が調査区外へ拡がりをもつ。検出規模は東西が65cm、南北が310cm、壁高は西壁で60cmを測る。南北の軸線はほぼ磁北方向を示す。

4号住居址出土遺物(図10-11～16)

図10-11～13は土師器杯の口縁部付近の破片でいずれも法量は不明。11は赤彩が施される。13は口縁端部が平に削られる。14は土師器甕の口縁部小片で法量不明、胎土は砂を多く含み焼成良好。くすんだ橙褐色を呈する。15は土師器無頸壺の口縁部小片で口径は不明。胎土は砂を多く含み焼成良好。橙褐色を呈する。全体に篋削り。16は土師器甕の底部片。復元した底径は7.8cmを測る。胎土は砂を多く含み、焼成良好。くすんだ色調の淡橙色を呈する。内外面共に篋削り。

包含層出土遺物(図11)

図11-1～6は土師器杯の口縁部片で何れも法量は不明。胎土は4・6を除いて粉質で微砂を含み焼

成良好。橙色を呈する。4は口辺部中位にふくらみをもつ。7は土師器高坏の坏部の小片で法量は不明。胎土は微砂を含み焼成良好。淡橙色を呈する。口辺部横なで、稜から下位篔削り。内外面に赤彩が施される。8～12は土師器甕の口縁部小片で法量は不明。8・11・12は口縁内側に沈線が入る。13は土師器無頸壺の破片で法量は不明。胎土は砂を多く含み焼成良好。淡橙褐色を呈する。内面は全体に煤が付着。内外面篔削り。14は土師器甕・壺の底部片で法量不明。胎土は微砂を含み焼成良好。淡橙色を呈する。内外面共に篔削り。15・16は須恵器である。高坏の脚部片である。胎土は微砂・長石粒を含み良く焼き締まる。若干青色味のある暗灰色を呈する。縦位の方形をした窓が開く。16は長頸壺の口縁部小片で法量は不明。胎土は微砂を含み、灰褐色を呈する。器表面は灰黒色をした艶のある自然釉が掛かる。

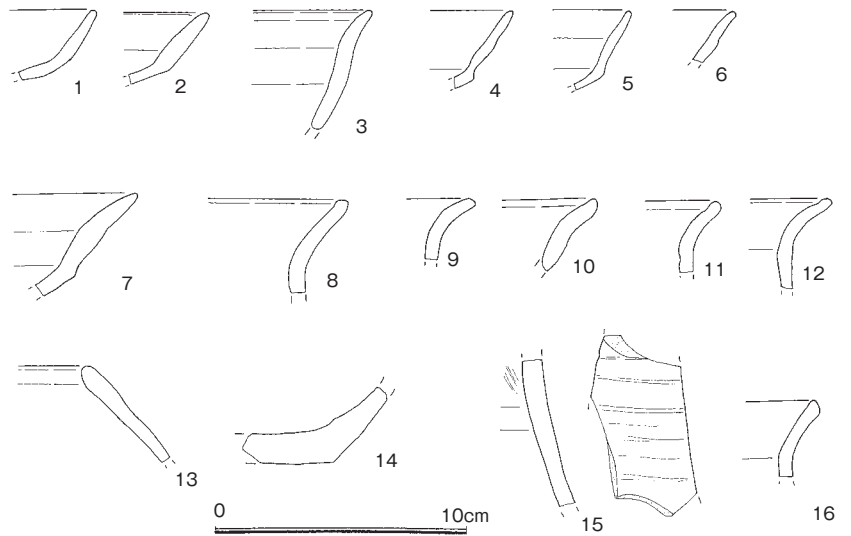


図11 包含層出土遺物

第四章 まとめ

第三章で報告した調査成果を整理してまとめにかえたい。

天神山城遺跡では第一章で既述したように、山頂部から裾野の谷戸にかけて広く、縄文期や古墳期から中・近世にかけて重層した遺跡が包蔵されていることが知られる。その中で今回の調査成果を当てはめてもう一度見直してみたい。

本調査は調査面積が30㎡以下と極狭小であるにもかかわらず、重層した竪穴住居址を4棟検出するなど大きな成果を得ることができた。これら建物は連続的に建て替えられており、4棟の内複数が同時に立地することがなかったことも確認された。ちなみに重複・切合い関係から見た順序は、古いほうから4号→3号→1号→2号の順である。(図5参照)

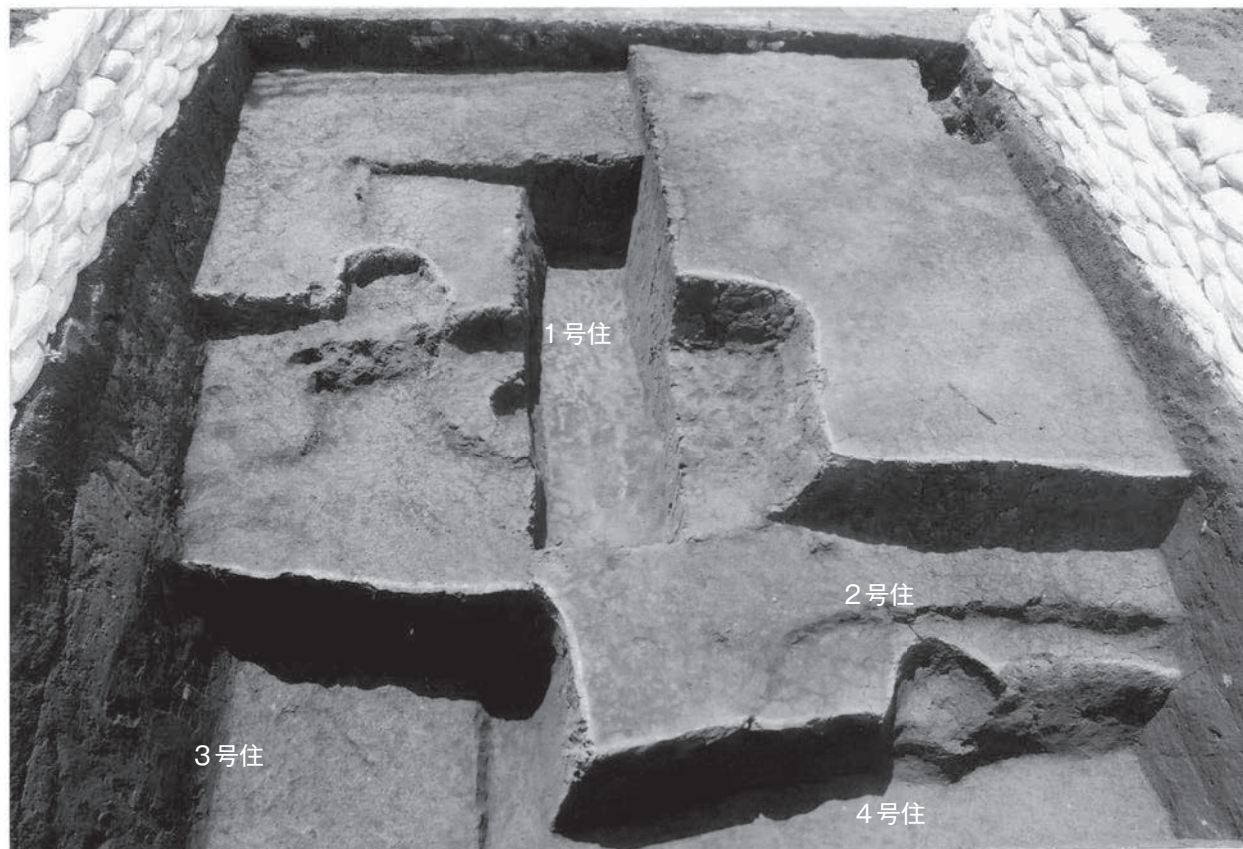
さらに出土遺物の年代観から、住居址個々の年代の推測を試みることにする。層序的に最古の4号住居址出土土器は古墳後期のタイプで組成される。この中には7世紀代を確認できるが、検出範囲の中では確実に6世紀代までさかのぼるものを見出すことはできない。次に後出の3号住居址には、古墳前期に属する土師器甕の口縁部の破片が2点見られる。しかし4号との時間的逆転は物理的にありえず、これら土器は混入品と見て間違いあるまい。出土土器のタイプの主流は4号とあまり変化せず7世紀代に置くことができよう。それに対して後出グループの1号・2号住居址においては、出土土器のタイプに大きな特徴の変化がある。それは8世紀初頭頃から出現する「相模型」の土師器である。1・2号の覆土からは相模型の坏が一定のパーセンテージで出土しており、住居址の継続年代の下限に決定的な示唆を与えている。こうした事実から今回の調査地内の人々の生活は7世紀代に始まり、8世紀前半の律令期頃までのおよそ百年間前後は継続していたようである。

しかし今回の調査では4世紀代の土師器の出土や、さらに古い縄文土器の出土も複数あり、それらに該当する時期の遺跡が本調査地周辺に存在する可能性は少ないとはいえない。

尚、出土土器の時期同定については菊川英政氏に多くのご教示を得た。記してここに謝意を表したい。



▲A. 調査地点付近 遠景 (北から)



▲B. 遺跡全景 (東より)



▲A. 1号住居址竈(東より)



▲B. 同上(近景)



▲A. 1号住居址竈下層(東より)



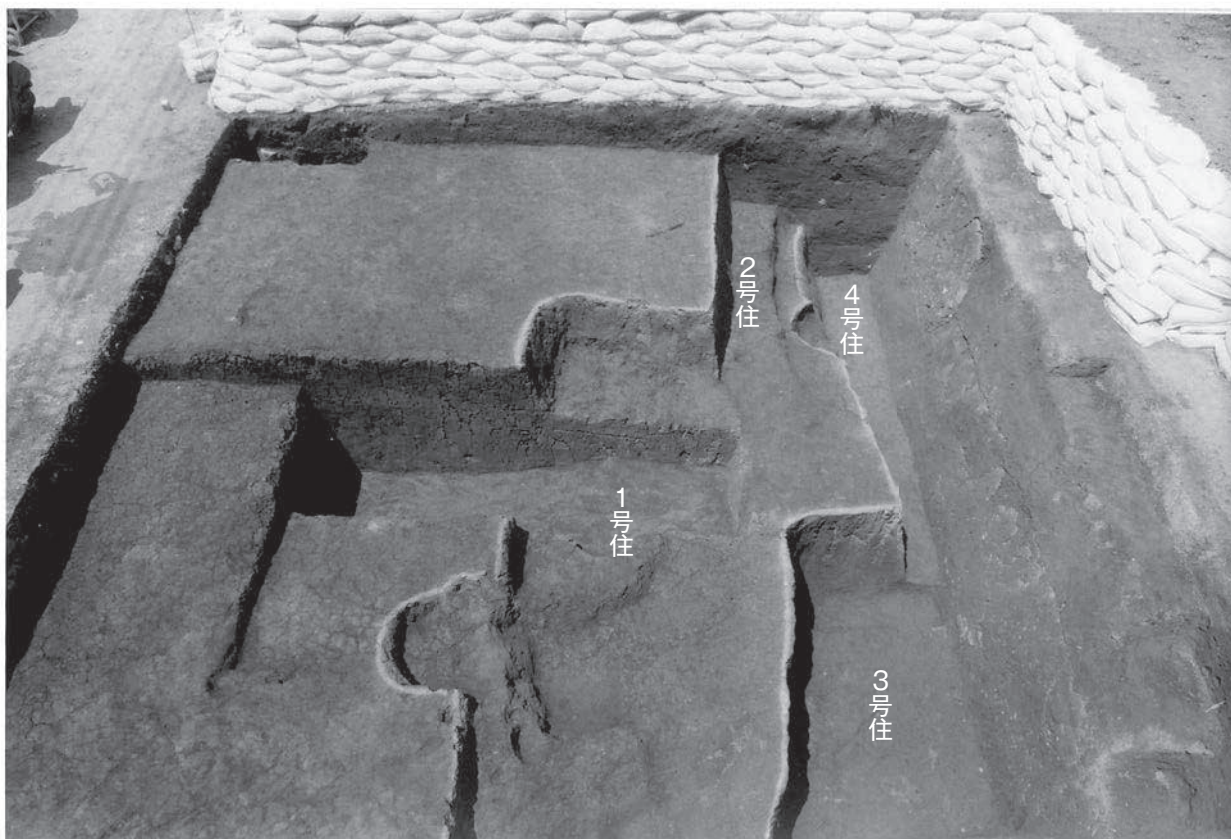
▲B. 同上 断割り a-a'(南より)



▲A. 1号住居址竈 断割り b-b' (東より)



▲B. 同上 完掘 (東より)



▲A. 遺跡全景(南より)



▲B. 同上(北より)



▲A. 1号住居址竈 完掘(北より)



▲B. 3号住居址 完掘(南より)



▲A. 調査区北壁土層断面 c-c'

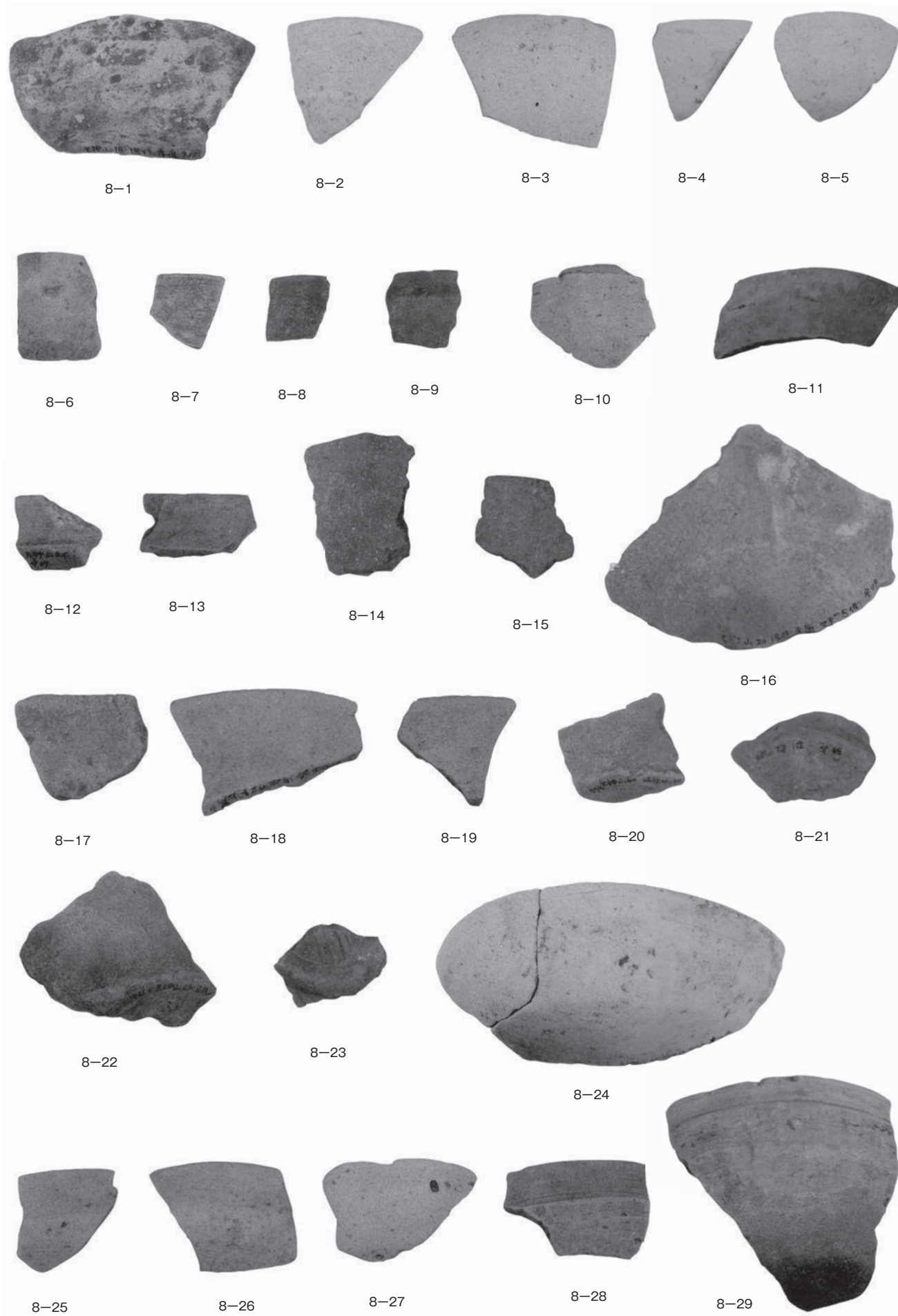


▲B. 調査区東壁土層断面 d-d'



▲C. 調査区南壁土層断面 e-e'

图版 8



出土遺物(1)



8-30



8-31



8-32



8-33



8-34



8-35



8-36



8-37



8-38



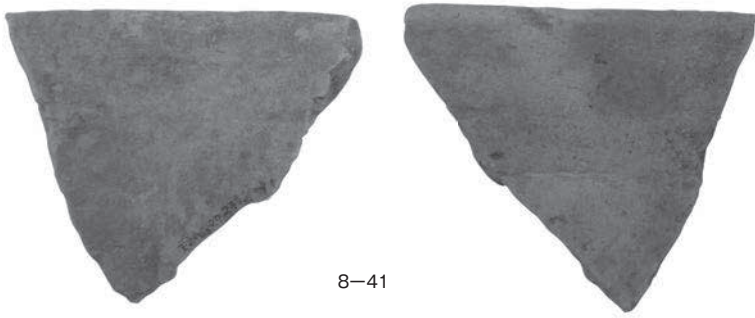
8-39



8-40

出土遺物(2)

图版 10



8-41



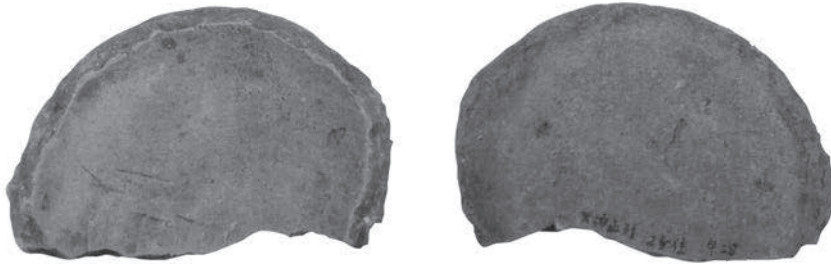
8-42



8-43



8-44



8-45



8-46



10-1



10-2

出土遺物(3)



10-3

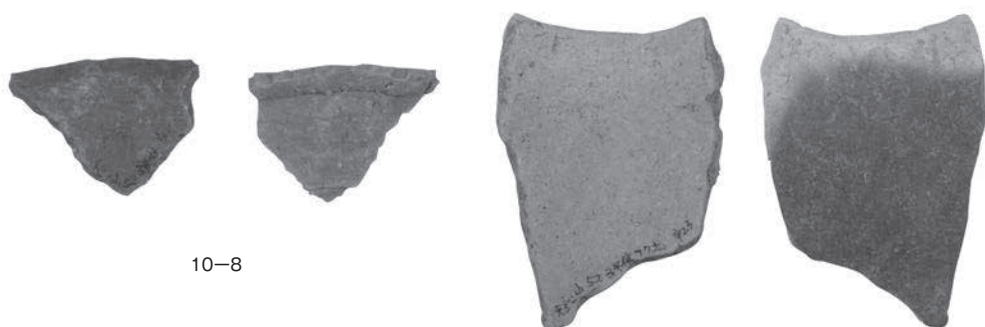
10-4



10-5

10-6

10-7



10-8

10-9



10-10

10-11



10-12

10-13

10-14

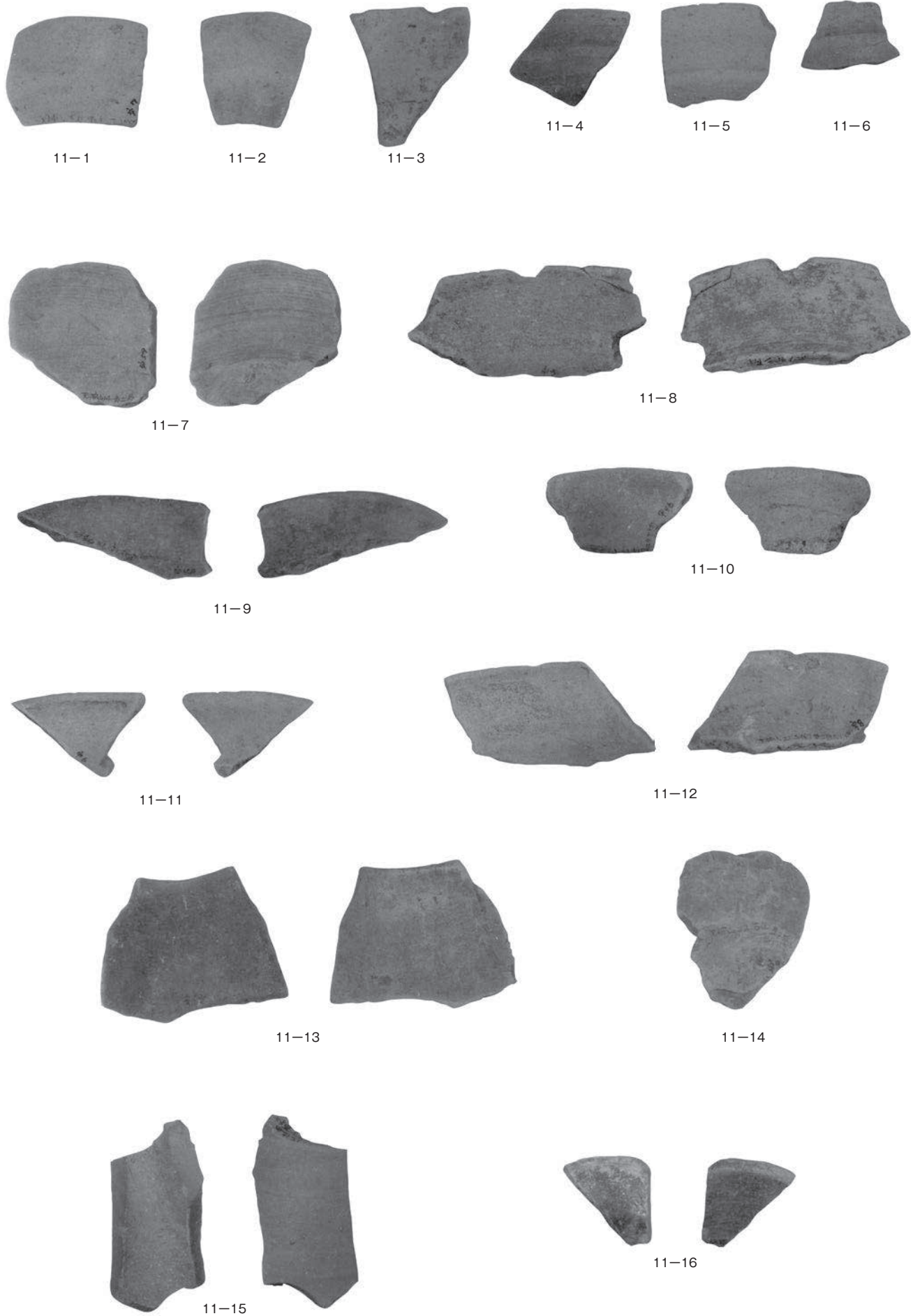


10-15

10-16

出土遺物(4)

图版 12



出土遺物(5)

新善光寺跡 (No. 279)

材木座四丁目 579 番 8 地点

例 言

1. 本報は、「新善光寺跡(No.279)」内、材木座四丁目579番8における、埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は平成20(2008)年8月21日～同年9月12日にかけて行い、調査面積は24㎡である。
3. 発掘調査体制は以下のとおりである。
調査担当者：山口 正紀(鎌倉市文化財課臨時的任用職員)
調 査 員：小野夏菜・須佐仁和(鎌倉市文化財課臨時的任用職員)
作 業 員：小口照男・清水政利・杉浦永章・田島道夫(社団法人鎌倉市シルバー人材センター)
4. 現地での写真撮影は須佐が行った。
5. 本報作成にあたっての資料整理参加者及び分担は以下のとおりである。
整理参加者：山口・岡田慶子・平井里永子・吉田桂子(鎌倉市文化財課臨時的任用職員)
遺物洗浄・注記：鎌倉市シルバー人材センター
遺物接合・分類：山口・平井 遺物実測：山口・平井
遺物・遺構トレース：岡田・吉田・山口 遺構・遺物図版作成：岡田・山口
観察表・写真図版作成・遺物写真撮影：山口 原稿執筆：第1章－平井、第2～4章－山口
6. 本報告に係わる出土品及び記録図面・写真等の資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。
7. 本調査にかかる出土遺物の注記は「SZT0812」と略して記した。
8. 本報の凡例は以下のとおりである。
各図における基本縮尺は、以下のとおりである。同時に、各図に縮尺を表記している。
挿図縮尺 全測図：1/60 遺構図：1/40 遺物図：1/3
遺構図版 水糸高は標高値を示す。
遺物図版 釉薬の範囲は・ - ・ - ・、加工・使用痕は←・→で範囲を示す。また、遺物にみられる煤痕は黒く塗りつぶし表現している。
遺物観察表 ()は復元数値、[]は遺存数値を示す。
9. 本報記載の「泥岩」は凝灰質泥岩を示す。
10. 整理段階において、遺物の分類及び編年は以下の論文を参考にした。
瀬戸：藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院
常滑：愛知県 2012『愛知県史別編窯業3 中世・近世常滑系』
火鉢：河野眞知郎 1993「中世鎌倉火鉢考―東国との関連において―」『考古論叢 神奈河 第2集』
神奈川考古学会
11. 現地調査から本報作成に至るまで、以下の諸氏、諸機関に御教示・御協力を賜った。記して感謝の意を表したい。(順不同、敬称略)
伊丹まどか、汐見一夫、垣内光次郎、原 廣志、松尾宣方、古田土俊一、太田美知子、岡田優子、小泉彩子、社団法人鎌倉市シルバー人材センター

目次

本文目次

第一章 遺跡の位置と環境	331
1. 遺跡の位置	
2. 地理的・歴史的環境	
3. 周辺遺跡の調査成果	
第二章 調査の概要	337
1. 調査の経緯と経過	
2. 調査における測量	
3. 堆積土層の観察	
第三章 検出遺構と出土遺物	342
1. 1面の遺構と遺物	
2. 2a面の遺構と遺物	
3. 2b面の遺構と遺物	
4. 2c面の遺構と遺物	
5. 2面下トレンチ	
第四章 まとめ	353

挿図目次

図1 調査地点周辺遺跡	331	図10 2b面遺構外出土遺物.....	346
図2 調査区と建築範囲	337	図11 2c面全測図.....	346
図3 国土座標位置図	338	図12 2c面池状遺構1	347
図4 国土座標とグリッド配置図	339	図13 2c面池状遺構1 覆土中出土遺物(1) ..	348
図5 調査区土層堆積図	341	図14 2c面池状遺構1 覆土中出土遺物(2) ..	349
図6 1面全測図	342	図15 2c面池状遺構1 覆土中出土かわらけ...	350
図7 2a面全測図.....	343	図16 2c面池状遺構1 最下層出土遺物.....	351
図8 2a面遺構外出土遺物.....	344	図17 2c面下トレンチ.....	352
図9 2b面全測図.....	345		

表目次

表1 遺物観察表(1).....	355	表3 遺物観察表(3).....	357
表2 遺物観察表(2).....	356	表4 層位別出土遺物一覧表	358

図版目次

図版 1	359	図版 6	364
1. 調査地点遠景 (南西から)		出土遺物 (1)	
2. 調査地点近景 (東から)		図版 7	365
図版 2	360	出土遺物 (2)	
1. 1 面全景 (南から)		図版 8	366
2. 2 a 面全景 (南から)		出土遺物 (3)	
3. 2 a 面泥岩版築範囲 (東から)		図版 9	367
図版 3	361	出土遺物 (4)	
1. 2 a 面遺構外出土硯 (西から)		図版 10	368
2. 2 a 面遺構外出土銅製品 (南から)		出土遺物 (5)	
3. 2 b 面全景 (北から)		図版 11	369
図版 4	362	出土遺物 (6)	
1. 2 c 面全景 (北から)		図版 12	370
2. 2 c 面全景 (南から)		出土遺物 (7)	
3. 2 c 面池状遺構 (西から)			
4. 池状遺構 1 覆土中出土瀬戸碗 (西から)			
図版 5	363		
1. 2 面下トレンチ (北から)			
2. 調査区北壁土層堆積 (南から)			
3. 調査区北壁土層堆積最下部 (南から)			
4. 調査区東壁土層堆積 (西から)			

第一章 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置

本調査地点は、鎌倉市材木座四丁目579番8地点。鎌倉青年団が建てた弁谷の石碑が建っているところから少し北西に入った辺りに位置する。遺跡名である新善光寺跡については歴史的環境で後述するが、現在の弁ヶ谷は、材木座光明寺北側の周辺一帯の東西に延びる谷戸の範囲を指し、小さな谷戸が三つに分かれている。新善光寺と同じく、当谷戸にあった崇寿寺について『鹿山略志』には「在鎌倉南境弁谷」と記されていることから、この地が鎌倉の境界に近い場所であったことが推察されるが、詳細については未詳である。また、「京極持清書下」の享徳元年(1452)11月9日条には「鎌倉弁谷高御蔵最宝寺寺領等事」とあり、高御蔵が当谷に含まれていたことが記されている。当地の近くには和賀江島もあることから、倉庫や倉のようなものがあつたのだろうか、詳細については不明な点が多い。



図1 調査地点周辺遺跡

2. 地理的・歴史的環境

本調査地点は、現在の弁谷の石碑が建っているところから少し北西に入ったところに位置し、鎌倉市材木座四丁目579番8地点に所在する。周辺一帯の東西に延びる谷戸は、「弁ヶ谷」と呼ばれ、三つの小さな谷戸に分かれている地形である。嘉暦2年(1327)の崇寿寺鐘銘には「弁谷靈区」と記されているように、多くの寺院がこの谷戸内に存在していたようである。当遺跡名の新善光寺もその一つであり、当調査区周辺に存在していたのではないかと考えられている。

新善光寺

光明寺の北方、長勝寺背後の弁ヶ谷にあった寺で、浄土教を中心とした四宗兼学を標榜した寺院であったと云われている。創建年次・開山は未詳で、開基は北条泰時と伝える。『北条九代記』仁治3年(1242)6月15日では、北条泰時が死んだとき、「新善光寺智導上人為知識奉観念仏」とあり、新善光寺智導上人が念仏を勤めている。鎌倉時代は、信濃善光寺の信仰が盛んであった。とくに鎌倉では源頼朝をはじめ、北条泰時・時頼ら北条氏の信仰が篤く、『吾妻鏡』寛元4年(1246)3月14日条には、善光寺供養に際して大御堂の良信が導師を勤め、名越故遠江入道生西(北条朝時)の子息らが檀越となっていることが記載されていること、同正嘉2年(1258)5月5日条は新善光寺の辺りに北条時章の名越山荘があったことから、北条氏一門の影響のもとに当寺が開創されたと考えられている。新善光寺の創建については、建治3年(1277)11月20日の「日蓮書状」にも「なこへの一門の善覚(光)寺・長楽寺・大仏殿立させ給」とみえる。

『新編相模国風土記稿』には「新善光寺蹟、名越にあり、新善光寺屋敷と唱う」とあり、寺の名残が土地の呼び名に反映されている。葉山町上山口の不捨山攝取院新善光寺は、この新善光寺が移転してきたと伝えられており、元は弁ヶ谷の奥で松ヶ谷の長勝寺の裏にあたる場所に新善光寺があったとする(『鎌倉廃寺事典』新善光寺項)。『関東往還記』弘長2年(1262)7月19日条には「新善光寺別当道教、念仏者主領云々、為対面寄宿近辺」とあって、当寺別当道教が当時の念仏者の主領であったことと、彼が叡尊に対面するために、近辺に寄宿したことを述べている。『鎌倉八幡宮寺供僧次第』には延慶2年(1309)正月14日乗蓮坊(如意院)の弁恵が「日来長病之間、自去年名越於于善光寺、称名念仏、臨終正念シテ被遂大往生」とあることから、新善光寺と念仏との関わりを見出すことができるか。延慶3年(1310)6月4日の「金沢実時後室代沙弥成覚相博状」によると、醍醐僧正親玄の西御門小笠原ヶ谷の土地と、新善光寺周辺にあった金沢実時の土地6戸主が交換されていることから、金沢北条氏との関連も想像させる。また元徳元年(1329)12月3日の「宗顕(金沢貞顕)書状」に「関東大仏造営料唐船事、明春可渡宋候之間、大勧進名越善光寺長老御使道妙房、年内可上洛候」とあり、当寺の住持が鎌倉大仏造営の大勧進となっていることが知られる。このほか、『金沢文庫古文書』には念空(道教)の僧名や「鎌倉新善光寺」「相州鎌倉郡新善光寺」などの寺名が認められるが未詳。

現在、三浦郡葉山町上山口にある不捨山攝取院善光寺は、鎌倉から移転してきたと先述したが、上山口に移転した時代について『新編相模国風土記稿』には「中興の僧密道、天正18年7月朔日に寂すとなれば其の世代なるべし」とあり、中興の僧密道が天正18年(1590)7月1日に没しているため、この頃に上山口に移転したのではないかと考えられている。『三浦郡誌』には、「上山口唐木作にあり。浄土宗、鎌倉光明寺の末寺にして、不捨山攝取院と号す。古くは鎌倉名越にあり。東鑑正嘉2年5月29日の條に將軍宗尊親王方違として、北號時章の名越の山荘に渡御の事見ゆ。其の山庄新善光寺の邊にありと言へり」とあり、当地に移転した年代は詳しくはわからないとしているが、「源頼朝信州新善光寺如来四八仏の中

一体を招請して名越に一字を起立して之を納む。即ち新善光寺此れなり」と記している。ただし、『皇国地誌』は建仁年中(1201～1204)に名越から移ってきたと伝えるが未詳。

弁ヶ谷

材木座の光明寺北方の谷戸一帯をさし、現在材木座四丁目から六丁目の逗子市との境近くにある谷戸の名称である。当地名は、かつて崇寿寺や新善光寺などがあった付近の谷で、『玉舟和尚鎌倉記』によると紅ヶ谷・雪ノ下ヶ谷・亀ヶ谷・花ヶ谷とともに鎌倉七谷の一つと伝えられている。文明18年(1486)10月に鎌倉を来訪した道興の『廻国雑記』からは、「べにが谷をとをりて、化はひ坂を越とて」として「顔にぬるへにがやつよりうつりきてはやくも越るけはい坂哉」と詠じており、弁ヶ谷を紅ヶ谷と称していたことがうかがえる。『田代略系図』の香春庵玉の注記に「鎌倉別谷、別ノ谷ハ千葉殿ノ敷地ナリ、介ノ唐名別駕ト云間、別ノ谷ト云」と記すとある。『鎌倉志』でも、この地に千葉介の館があり、「介」の唐名「別駕」に由来する説があげられているが、『攬勝考』は、常陸介や上総介を称することが多かった佐竹氏の屋敷が近くにあったことに地名の由来を求めている。先述した嘉暦2年(1327)崇寿寺鐘銘の「弁谷靈区」と記されるのが当地名の初見である。崇寿寺は現在廃寺となっており、梵鐘も失われているが、北条高時が開祖の臨濟宗の寺院であった。享徳元年(1452)11月9日の「京極持清書下」には「鎌倉弁谷高御蔵最宝寺寺領等事」とあり、高御蔵が当谷に含まれ、谷間には、現横須賀市野比に移転した浄土真宗の五明山高御蔵最宝寺があった。この他、三浦市白石町の浄土真宗本願寺派の泰平山最福寺は、享禄一天文(1528-55)頃に、鎌倉弁ヶ谷より移転したと伝えられている。

3. 周辺遺跡の調査成果

本調査に係る以前の新善光寺跡(No.279)内における平面的な発掘調査は1地点のみである。1地点は谷戸奥の最上段に位置する。詳細な報告はされていないが、中世3面中に玉砂利面や瓦溜りが検出され、海拔23.15～22.90mで岩盤面を含む中世基盤層が確認されている。また、谷戸最奥部の新善光寺跡内やぐら(No.335)の調査では、山裾の崖斜面をコの字状に掘り窪め、上・中・下段の3時期の遺構が検出されている。これらからは、宝篋印塔を中心とした石塔群や写経石・白磁四耳壺を伴う格式のある火葬礼式とされる14世紀中葉頃の火葬墓が発見されており、それ相応の寺院があったことが窺える。

弁ヶ谷の谷戸入口周辺での調査も実施され、弁ヶ谷遺跡(No.249)内では7地点が調査されている。1地点では13世紀末～15世紀代の中世6時期の遺構面が確認され、寺院的な性格をもつ遺構群と推測されている。2・3地点では8mほど離れた近隣調査であるが、前者は5面、後者は3面を確認し、4期(13世紀前半～14世紀前半)の遺構群が検出されている。4地点では5時期(13世紀中頃～15世紀頃)の遺構群が検出され、町屋空間の一面から寺院の一面に変化したのではないかと示唆される。5地点では13世紀後半～15世紀代に亘り、5枚の生活面が確認されている。井戸・石列・溝・土坑が検出され、寺院址の縁辺部であった可能性が報告されている。現在の豆腐川北側に位置する7地点では、鎌倉時代初期の溝・暗渠や泥岩による豆腐川護岸、池などが検出され、寺院もしくは武家屋敷に伴う庭園の一角と考えられている遺構群が検出された。以降、13世紀半ば～14世紀後半の3期に亘り、建物が確認されている。このように弁ヶ谷内の発掘調査成果から、13世紀前半～15世紀代に亘る遺構群が確認されている。弁ヶ谷内は宗教空間であり、鎌倉時代からあったとされる寺院は15世紀代にはすべて廃寺となっているが、その間の痕跡が残っている状況であることは各調査成果から窺えよう。

[引用・参考文献]

- 貫達人・川副武胤 1980『鎌倉廃寺事典』有隣堂
1984「神奈川県の名地名」『日本歴史地名大系』第14巻 平凡社
鎌倉市中央図書館近代史資料室CPCの会(湘南鎌倉生涯現役の会分科会) 2008『鎌倉 谷戸の記録(下)』鎌倉市中央図書館
1980『校訂 三浦郷村旧跡寺社略録』葉山文庫
1918『三浦郡誌』神奈川県三浦郡教育會
1967『校訂 三浦古尋録』横須賀市図書館
2012『材木座(光明寺・小坪周辺を除く)を学ぶ 資料集』特定非営利活動法人 鎌倉考古学研究所
高橋慎一郎 2005『武家の古都、鎌倉』山川出版社
大橋俊雄 1955「鎌倉新善光寺考」『日本歴史』第86号 吉川弘文館

[発掘調査報告書]

- 福田誠 2004「新善光寺跡(No.279)材木座四丁目573番1外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20 平成15年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会
原廣志、他 1988『新善光寺跡内やぐら発掘調査報告書』新善光寺跡内やぐら発掘調査報告
1991『佐助ヶ谷遺跡内やぐら・弁ヶ谷遺跡内やぐら群・公方屋敷跡内やぐら・瑞泉寺周辺遺跡内やぐら』佐助ヶ谷遺跡内やぐら・弁ヶ谷遺跡内やぐら群・公方屋敷跡内やぐら・瑞泉寺周辺遺跡内やぐら発掘調査団

<調査地点一覧>

図1には神奈川県遺跡台帳に登録されている遺跡名称を番号のみ表記した。対応する名称は末尾に表記する。調査地点番号は、その遺跡内における調査年月の古い順から番号を付してある。そのため図の範囲外にある地点番号が欠如している場合や同一番号が重複している。また、発掘調査を対象としているため、確認(試掘)調査を含めていないことを前提とした。

弁ヶ谷やぐら群(No.35)

- 1:1986年8月調査。坂口滋皓ほか 1986『鎌倉市材木座4丁目弁ヶ谷やぐら群』相武考古学研究所
- 2:1989年9月調査。継 実 1991「弁ヶ谷遺跡やぐら群 鎌倉市材木座4丁目594番」『平成元年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』弁ヶ谷遺跡やぐら発掘調査団
- 3:2000年2月調査。上田薫・依田亮一 2000「平成11年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策工事に伴う発掘調査」『かながわ考古学財団調査報告98 弁ヶ谷やぐら群』財団法人 かながわ考古学財団

鎌倉城(No.87)

- 1:1998年11月調査。長谷川厚・大塚健一 1999「平成10年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策工事にともなう調査」『かながわ考古学財団調査報告74 鎌倉城(No.87)所在やぐら群』財団法人 かながわ考古学財団

感応寺跡(No.225)

- 1:2002年11月調査。汐見一夫・小泉衣理 2005「感応寺跡(No.225)材木座六丁目722番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21 平成16年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会

弁ヶ谷遺跡(No.249)

- 1:1999年6月調査。宮田眞・諸星真澄・滝沢晶子 2001「弁ヶ谷遺跡(No.249)材木座四丁目336番7地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17 平成12年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会
- 2:2003年10月調査。馬淵和雄・鍛冶屋勝二・松原康子「弁ヶ谷遺跡(No.249)材木座六丁目643番5」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書25 平成20年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会

- 3：2003年10月調査。馬淵和雄・鍛冶屋勝二・松原康子「弁ヶ谷遺跡 (No.249) 材木座六丁目 643 番 4」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 25 平成 20 年度発掘調査報告 (第 1 分冊)』鎌倉市教育委員会
- 4：2004年9月調査。降矢順子・齋木秀雄 2004「弁ヶ谷遺跡 (No.249) 材木座六丁目 643 番 4」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 25 平成 20 年度発掘調査報告 (第 2 分冊)』鎌倉市教育委員会
- 5：2006年8月調査。宮田眞・森孝子 2007『弁ヶ谷遺跡発掘調査報告書』株式会社 博通 一材木座四丁目 332 番 1 の一部外地点
- 6：2009年2月調査。未報告一材木座二丁目 599 番 8
- 7：2009年6月調査。未報告一材木座六丁目 640 番 2
根本志保 2010「弁ヶ谷遺跡 (No.249) の調査」『第 20 回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会 発表要旨』特定非営利活動法人 鎌倉考古学研究所

新善光寺跡 (No.279)

- 1：2002年1月調査。福田誠 2004「新善光寺跡 (No.279) 材木座四丁目 573 番 1 外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 20 平成 15 年度発掘調査報告 (第 2 分冊)』鎌倉市教育委員会
- 2：本調査地点
- 3：2009年4月調査。未報告一材木座四丁目 579 番 4

材木座町屋遺跡 (No.261)

- 1：1988年9月調査。田代郁夫 1990「5. 材木座町屋遺跡 (No.261) 材木座四曲 260 番 1 外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 6 平成元年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会
- 4：1995年6月調査。馬淵和雄 1997「材木座町屋遺跡 (No.261) 材木座三丁目 364 番 1 外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 13 平成 8 年度発掘調査報告 (第 1 分冊)』鎌倉市教育委員会
- 6：2000年1月調査。大河内勉・伊丹まどか・押木弘巳 2001「材木座町屋遺跡 (No.261) 材木座六丁目 760 番 1 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 17 平成 12 年度発掘調査報告 (第 2 分冊)』鎌倉市教育委員会
- 8：2000年11月調査。汐見一夫 2002「材木座町屋遺跡 (No.261) 材木座四丁目 256 番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 18 平成 13 年度発掘調査報告 (第 2 分冊)』鎌倉市教育委員会
- 9：2002年8月調査。齋木秀雄・根本睦子 2005「材木座町屋遺跡 (No.261) 材木六丁目 647 番 10」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 21 平成 16 年度発掘調査報告 (第 1 分冊)』鎌倉市教育委員会
- 10：2002年8月調査。齋木秀雄・根本睦子 2005「材木座町屋遺跡 (No.261) 材木六丁目 647 番 15」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 21 平成 16 年度発掘調査報告 (第 1 分冊)』鎌倉市教育委員会
- 11：2002年10月調査。齋木秀雄・根本睦子 2005「材木座町屋遺跡 (No.261) 材木六丁目 647 番 8 外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 21 平成 16 年度発掘調査報告 (第 1 分冊)』鎌倉市教育委員会
- 12：2002年12月調査。齋木秀雄・根本睦子 2005「材木座町屋遺跡 (No.261) 材木六丁目 647 番 9」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 21 平成 16 年度発掘調査報告 (第 1 分冊)』鎌倉市教育委員会
- 22：2008年6月調査。未報告一材木座六丁目 653 番 1 他
- 24：2009年7月調査。未報告一材木座六丁目 742 番 4 外
- 26：2010年1月調査。未報告一材木座六丁目 725 番 11

長勝寺やぐら (No.305)

- 1：1984年7月調査。田代郁夫・玉林美男 1985『長勝寺遺跡(やぐら)発掘調査報告書 昭和 59 年度 鎌倉市材木座地区内急傾斜地崩壊対策事業にともなう調査』長勝寺(やぐら)発掘調査団

長勝寺遺跡 (No.313)

1 : 1976年8月調査。大三輪龍彦・斉木秀雄ほか 1978『長勝寺遺跡 中世鎌倉の民衆生活を探る』長勝寺遺跡発掘調査団 一材木座二丁目2162番2地点

2 : 1997年6月調査。土屋浩美・宗臺富貴子 1999「長勝寺遺跡 (No.313) 材木座二丁目2168番3地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15 平成10年度発掘調査報告 (第2分冊)』鎌倉市教育委員会

能蔵寺跡 (No.314)

1 : 1971年11月調査。松尾宣方 1983「2. 来迎寺北遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報I』鎌倉市教育委員会

2 : 1993年7月調査。馬淵和雄 1995『能蔵寺跡 材木座五所神社境内所在遺跡の発掘調査』能蔵寺跡発掘調査団・鎌倉市教育委員会 一材木座二丁目274番4地点

3 : 2001年1月調査。伊丹まどか・川又隆央 2003「能蔵寺跡 (No.314) 材木座二丁目297番地1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19 平成14年度発掘調査報告』

4 : 2003年5月調査。原廣志 2007「能蔵寺跡 (No.314) 材木座四丁目274番2の一部地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23 平成18年度発掘調査報告 (第1分冊)』鎌倉市教育委員会

5 : 2004年7月調査。齋木秀雄・降矢順子 2007「能蔵寺跡 (No.314) 材木座二丁目294番3外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23 平成18年度発掘調査報告 (第2分冊)』

6 : 2006年8月調査。未報告一材木座二丁目293番2

光明寺旧境内遺跡 (No.316)

1 : 1977年12月調査。松尾宣方 1983「42. 光明寺境内」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報I』鎌倉市教育委員会 一材木座六丁目854番地点

2 : 1978年3月調査。松尾宣方 1983「48. 光明寺裏遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報I』鎌倉市教育委員会 一材木座六丁目846番1地点

3 : 1978年11月調査。齋木秀雄・河野真知郎・手塚直樹 1980『光明寺裏遺跡 鎌倉市材木座所在北区立鎌倉学園用地内の中世遺跡発掘調査報告書』北区鎌倉学園内遺跡発掘調査団・東京都北区教育委員会 一材木座六丁目846番1地点

4 : 1984年10月調査。齋木秀雄 1986『浄土宗大本山天照山蓮華院光明寺 開山記主良忠上人700年遠忌記念事業に伴う埋蔵文化財の調査』光明寺境内遺跡発掘調査団

5 : 2003年5月調査。福田誠・鈴木絵美 2006「光明寺旧境内遺跡 (No.316) 材木座六丁目855番21外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書22 平成17年度発掘調査報告 (第2分冊)』鎌倉市教育委員会

新善光寺跡内やぐら (No.335)

1 : 1987年7月調査。原廣志・福田誠・田代郁夫 1988「昭和62年度鎌倉市材木座地区内急傾斜崩壊対策事業に伴う調査」『新善光寺跡内やぐら発掘調査報告書—中世墓の発掘調査—』新善光寺跡内やぐら発掘調査団

弁ヶ谷東やぐら群 (No.456)

1 : 1999年7月調査。鈴木庸一郎・木村吉行 2000「平成11年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策工事にもなう発掘調査」『かながわ考古学財団調査報告 94 弁ヶ谷東やぐら群』財団法人 かながわ考古学財団

遺跡No.	遺跡名称	遺跡No.	遺跡名称	遺跡No.	遺跡名称
169	弁ヶ谷横穴	254	弁ヶ谷奥遺跡	284	崇寿寺跡
248	最宝寺跡	255	実相寺旧境内遺跡	380	長善寺やぐら群

第二章 調査の概要

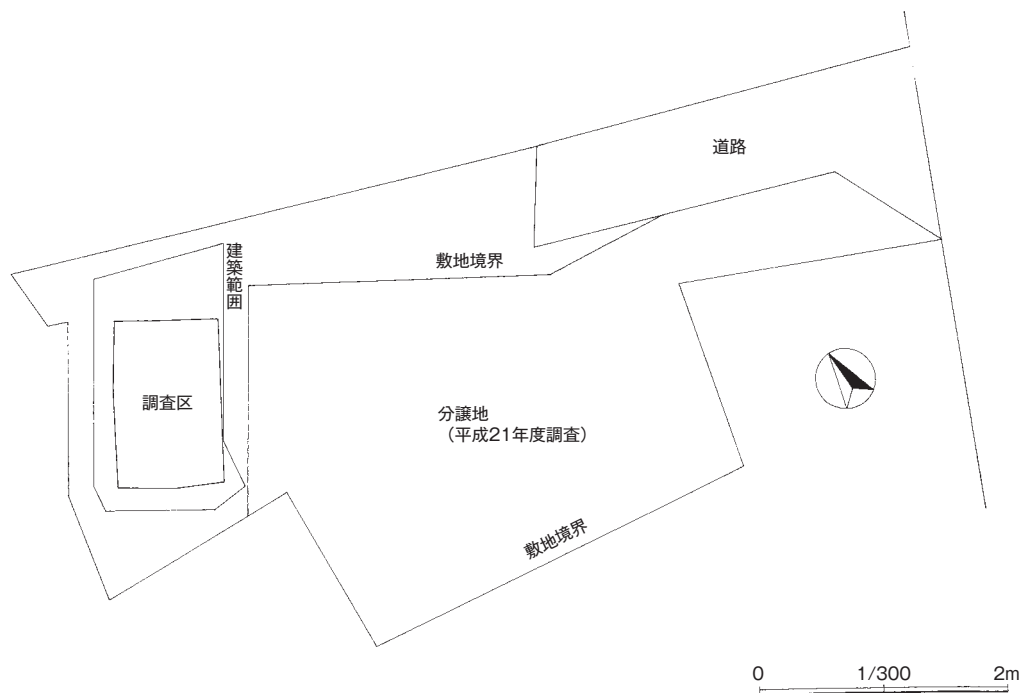


図2 調査区と建築範囲

1. 調査の経緯と経過

本地点の発掘調査は、個人専用住宅建設における地盤の柱状改良工事を原因として、鎌倉市教育委員会が実施した。平成20年5月22日、建設予定範囲内6㎡を対象として鎌倉市教育委員会による確認（試掘）調査が実施され、その結果、地表下120m以下より中世遺物を含む堆積層を確認したため、本調査実施の判断に至った。その後、文化財保護法第57条の2の届出手続きを行い、施工者との工程調整に続き、平成20年8月25日から現地での発掘調査を開始した。敷地面積162.10㎡のうち、建築面積は49.63㎡であり、鎌倉市教育委員会文化財課の判断で隣地境界線から安全距離をとり、建築範囲内24㎡を調査区に設定した（図2）。また、施工業者の配慮により、掘削残土置き場は隣地の分譲地を使用させていただいた。

確認調査結果をもとに、8月21日に重機による表土掘削を行い、地表下120cmほどで中世遺構面を確認したのち、人力による作業で調査を進行した。その結果、4時期の中世遺構面を確認し、測量・写真撮影などの記録保存を行った。調査途中、建主側の諸事情により調査予定期間が大幅に縮まることになった。そのため、東壁側にトレンチ調査を行い、多量の湧水等の影響で崩落の危険性を踏まえ、安全な深さまで土層の確認をした。現地終了時には遺物天箱6箱分の遺物が出土した。

以下、作業経過を抜粋する。

8月21日（木）

現地調査開始。重機による表土掘削。

8月26日（火）

機材搬入。調査区周辺環境整備。



图3 国土座標位置图

8月28日(木)

調査区周囲に測量用のグリッドを設定。
鎌倉市3級基準点及び4級基準点より標高値と国土座標値を測量点に移動。

9月1日(月)

1面全景写真撮影。全測図実測。

9月4日(火)

2a面全景・個別写真撮影。全測図実測。

9月5日(水)

2b面全景写真撮影。全測図実測。調査区南・西壁写真撮影および土層堆積図実測。

9月8日(月)

2c面全景・個別写真撮影。全測図実測。

9月9日(火)

調査区東側にトレンチ調査開始。

9月10日(水)

トレンチ写真撮影及び全測図実測。

調査区東・西・南壁写真撮影。

9月11日(木)

調査区壁土層堆積図実測。撤収準備。

9月12日(金) 現地調査終了。機材撤収。

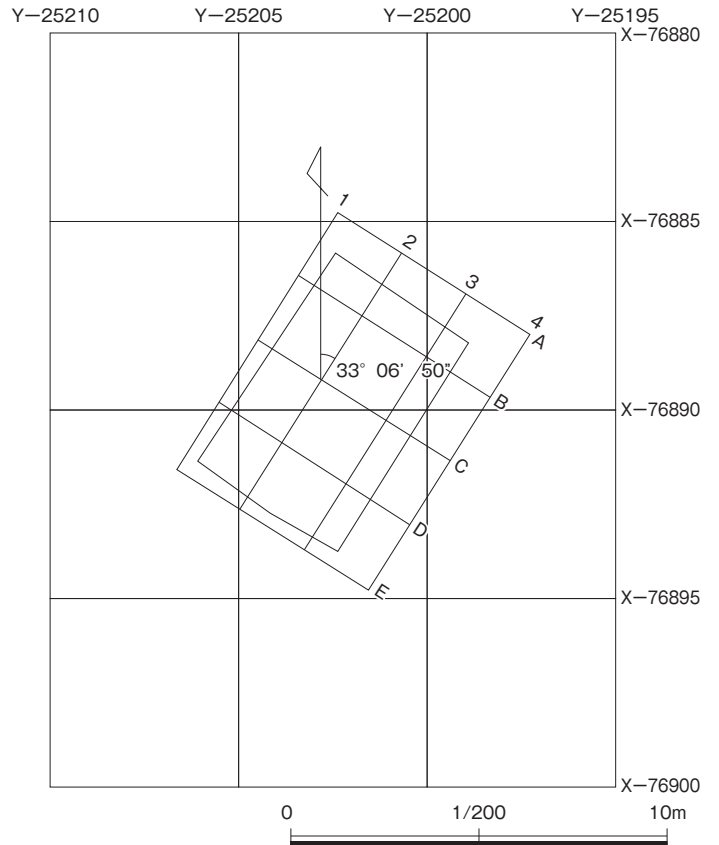


図4 国土座標とグリッド配置図

2. 調査における測量

現地調査の測量は、調査区にほぼ平行した任意の方眼軸を設けた。そのため、国土座標上の方眼軸とは不一致である。測量軸の設定には先行して調査区北にA-2杭、任意点B点を予め設定した(図3)。調査地南側を東西に走る道路に設置してある鎌倉市4級基準点C001とC002を用いて、調査測量基準点にあたるA-2杭とB点到国土座標上の数値を移動した。測量軸は2m方眼による軸線を用い、南北軸線には北方からアルファベットA~E、東西軸線には西方から算用数字の1~4を付してグリッド設定を行った。グリッド南北軸線は真北からN-33°06'50"-Eの傾きを測る。また、本報では便宜上、調査区の北東側を北、南西側を南とする。

国土座標値は、現地調査時において日本測地系(座標系AREA9)を用いて測量を行った。後に整理作業段階において国土地理院ホームページに設置されている座標変換ソフト『web版TKY2JGD』により世界測地系第IX系の座標数値へ変換したものを図3に記し、調査地点と国土座標系の詳しい位置関係は図4に示した。標高値は、調査地点より西に350mほどの九品寺交差点付近に設置してある鎌倉市三級基準点No.53412(標高m)を基に移設した。なお、提示した地図は鎌倉市が所有する都市基本計画図(2004年発行)を使用している。

3. 堆積土層の観察

調査区北・東・西壁の土層観察を行った(図5)。現地表は標高14.6m前後を測り、表土としたコンクリート片などを多く含む近・現代層が120cmほど堆積していた。標高13.4~13.6mにかけて、10cmほどまでの泥岩を多量に含む青灰色弱粘質土(1層)とその直下に1層より大きい泥岩を含む2層の堆積があり、両方が1面を構成する堆積土であった。調査区南部には100cmの青灰色泥岩層(9層)が拡がり、北部に向かって2a面を構成する4層と5層が堆積している。2a面の標高は13.2mを測る。1面と2a面の間層として粘性ある暗灰色砂質土(3層)が10~20cm堆積していた。4・5層を除去すると、10cm前後の厚さで堆積する2b面を構成する6・8層がみえる。以下、10~90cmほどは2c面の池状遺構の覆土が堆積している。池状遺構覆土の下はトレンチ調査のみで一部確認した。9層の下には10cmほどの堆積がみられる12層と黒褐色粘質土の中に30~50cmの泥岩塊が詰まる13層が確認できた。これらが基盤になっており、木端を多く含む暗灰色粘質土(10層)や締まりのない灰色粘質土(11層)、泥岩粒少量含む黒褐色粘質土(15層)が堆積していた。15層以下は地表下290cm、標高11.7mから15mまでの泥岩を多量に含む16層が堆積しており、最大深度310cm、標高11.5mまでの土層まで確認した。

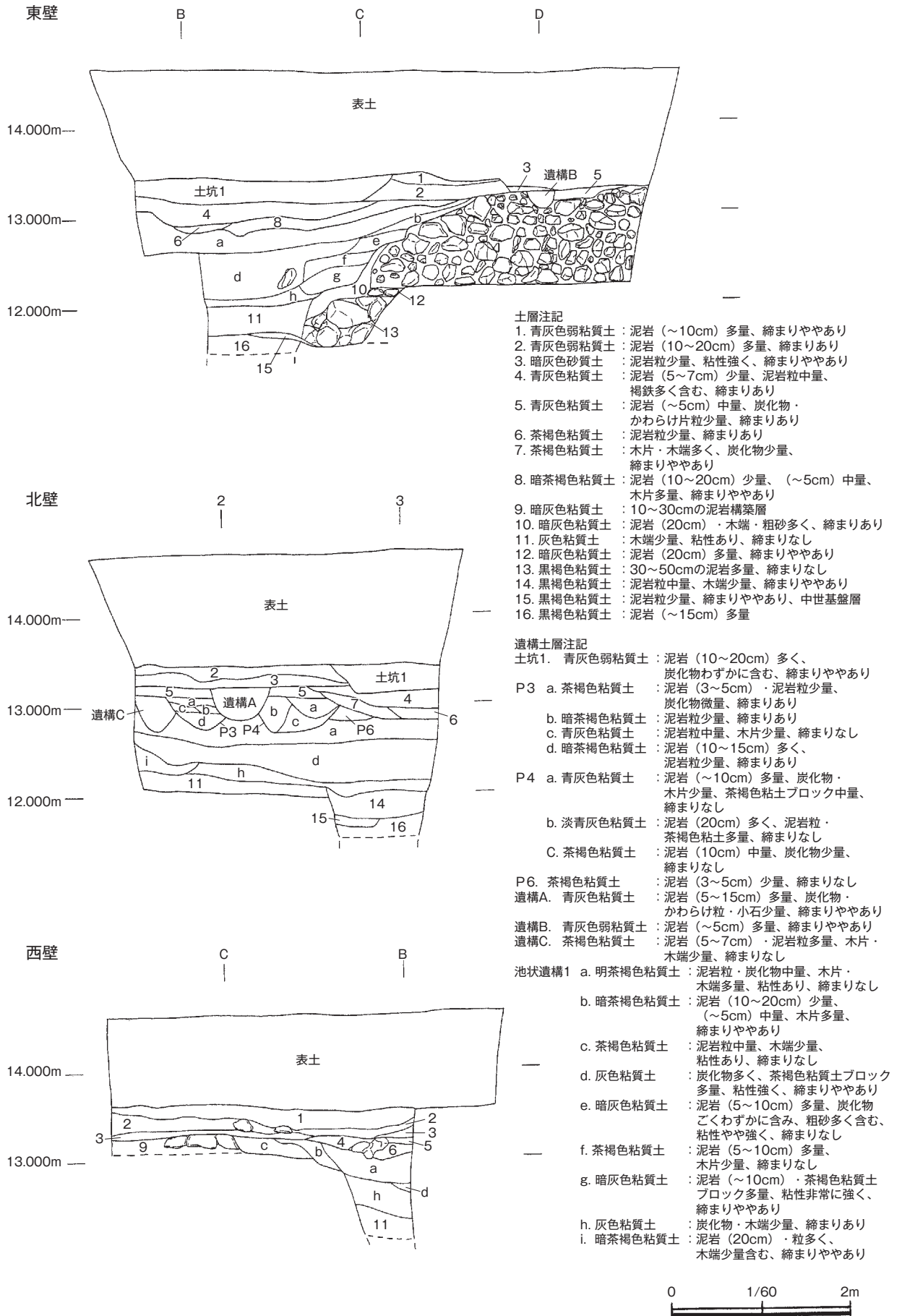


図5 調査区土層堆積図

第三章 検出遺構と出土遺物

調査区内では4期の遺構面を確認し、池状遺構1基、柱穴16口を検出した。

本報では遺構に付した名称は調査時において便宜的に付したもので、遺構の新旧関係などに関するものではない。また、図示できなかった遺物は認知できる範囲の個体数で、それ以外は破片数を一個体とする形で、層位と遺構(一括)の出土箇所を分けて表4にまとめた。なお、各遺構の説明にあたっては遺物が出土している遺構を優先し、そのほかの遺構については概略として、各面の末尾に表示した。

1. 1面の遺構と遺物

(図6、図版2)

厚さ120cmの近～現代の堆積土を除去すると、遺構検出面である標高13.4～13.6mの高さに青灰色弱粘質土が拡がる1面を検出した。北側の試掘坑や現代攪乱による削平がみられた。近代以前の土坑と思われる遺構が1基、南側には検出面より10cmほど下がる落ち込みを検出した。しかし、1面検出精査時に出土した遺物は大小かわらけ片1点ずつであり、土坑や落ち込みからも遺物の出土が認められなかったことから中世期の遺構かは不明瞭である。

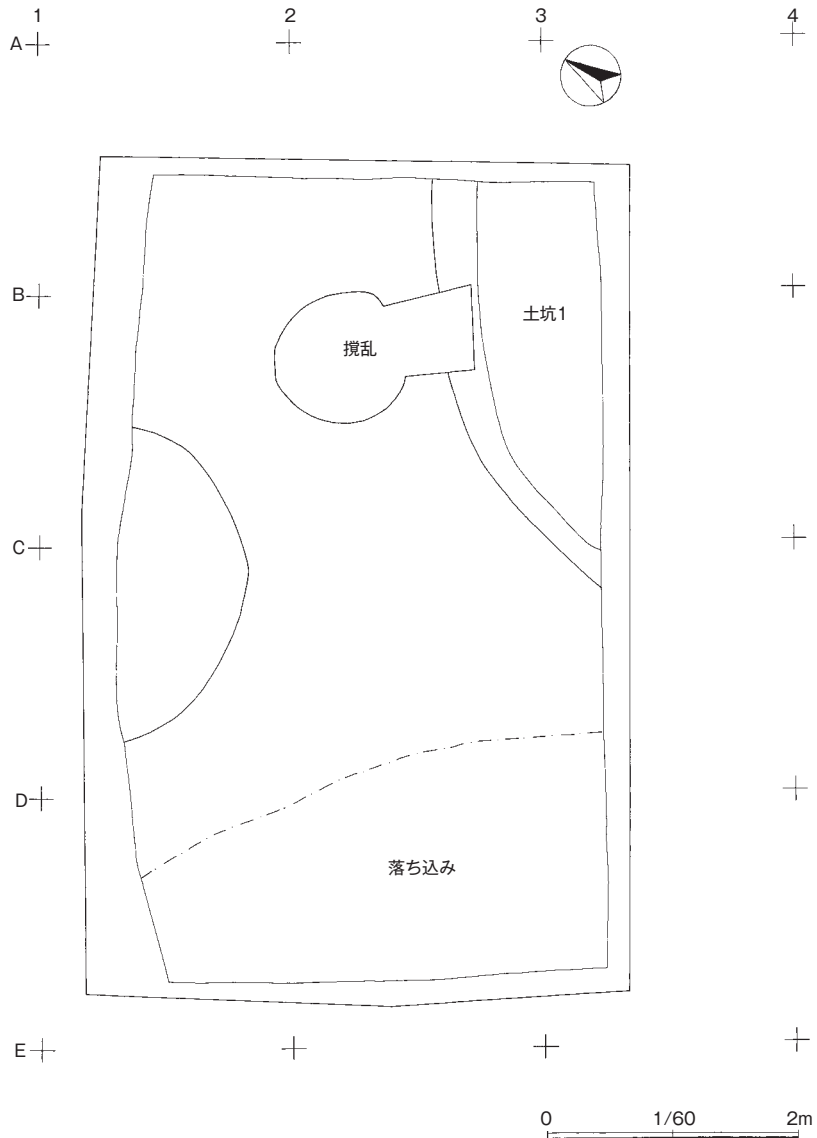


図6 1面全測図

2. 2a面の遺構と遺物

(図7、図版2～3)

当面まで掘り下げ時、主に北壁から多量の湧水があるため、北側120cm部分は崩落の危険性を考慮し未完掘である。2a面としたのは、南部泥岩版築面が基盤となり、北部に遺構面を検出したためである。調査区南部には10～50cmの土丹による粗雑な版築面、北部には青灰色粘質土が拡がり、地表下140cm、標高13.2mで検出した。

当面では柱穴5口を検出した。全て浅い掘り込みの小型の柱穴である。P1とした遺構から、かわらけ小皿小片が一点出土しているだけで、その他の遺構からは遺物の出土が認められなかった。また、P5は泥岩版築面内で検出した。泥岩版築面は2b～2c面時の基盤層にもなり、どちらかに掘り込まれた可能性も否めないが、ここでは当面の遺構として捉えておく。

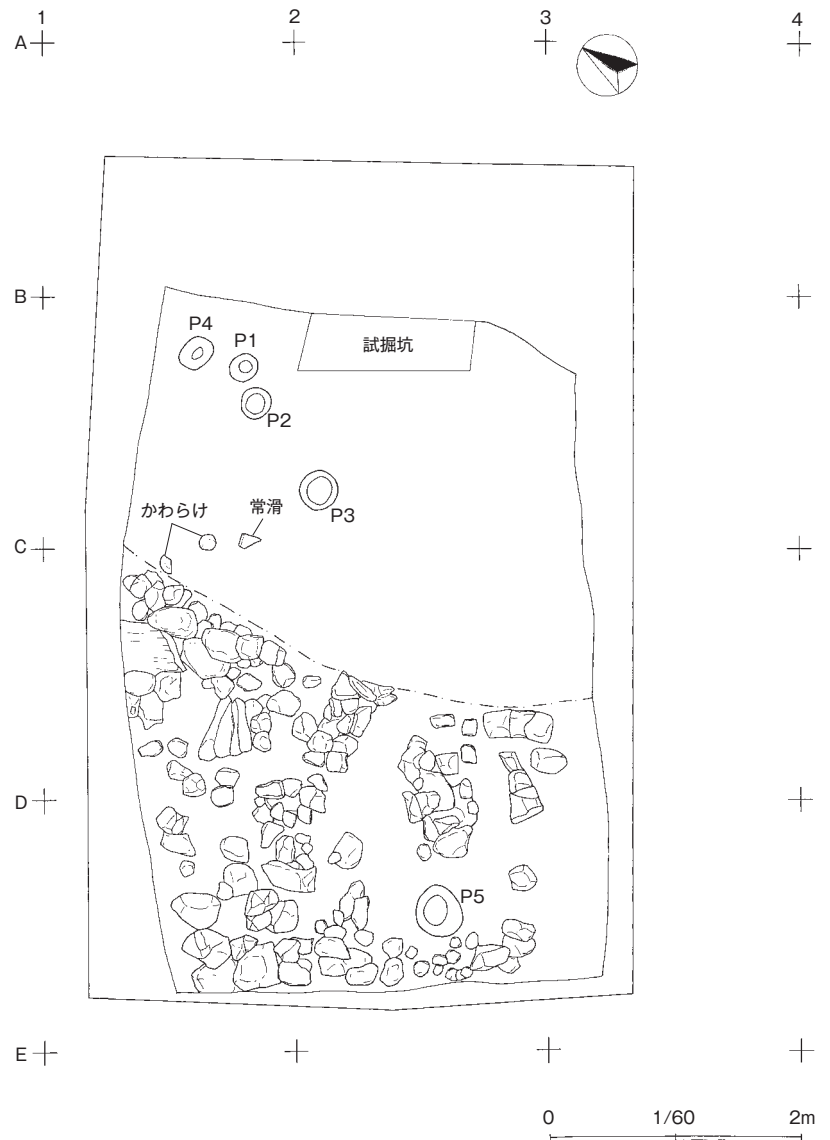


図7 2a面全測図

遺構名	平面形	検出標高	東西径	南北径	底面標高
P 1	円形	13.26 m	24cm	23cm	13.20 m
P 2	円形	13.25 m	23cm	25cm	13.20 m
P 3	円形	13.24 m	30cm	31cm	13.20 m
P 4	隅丸円形	13.25 m	28cm	26cm	13.16 m
P 5	不整円形	13.23 m	37cm	40cm	13.13 m

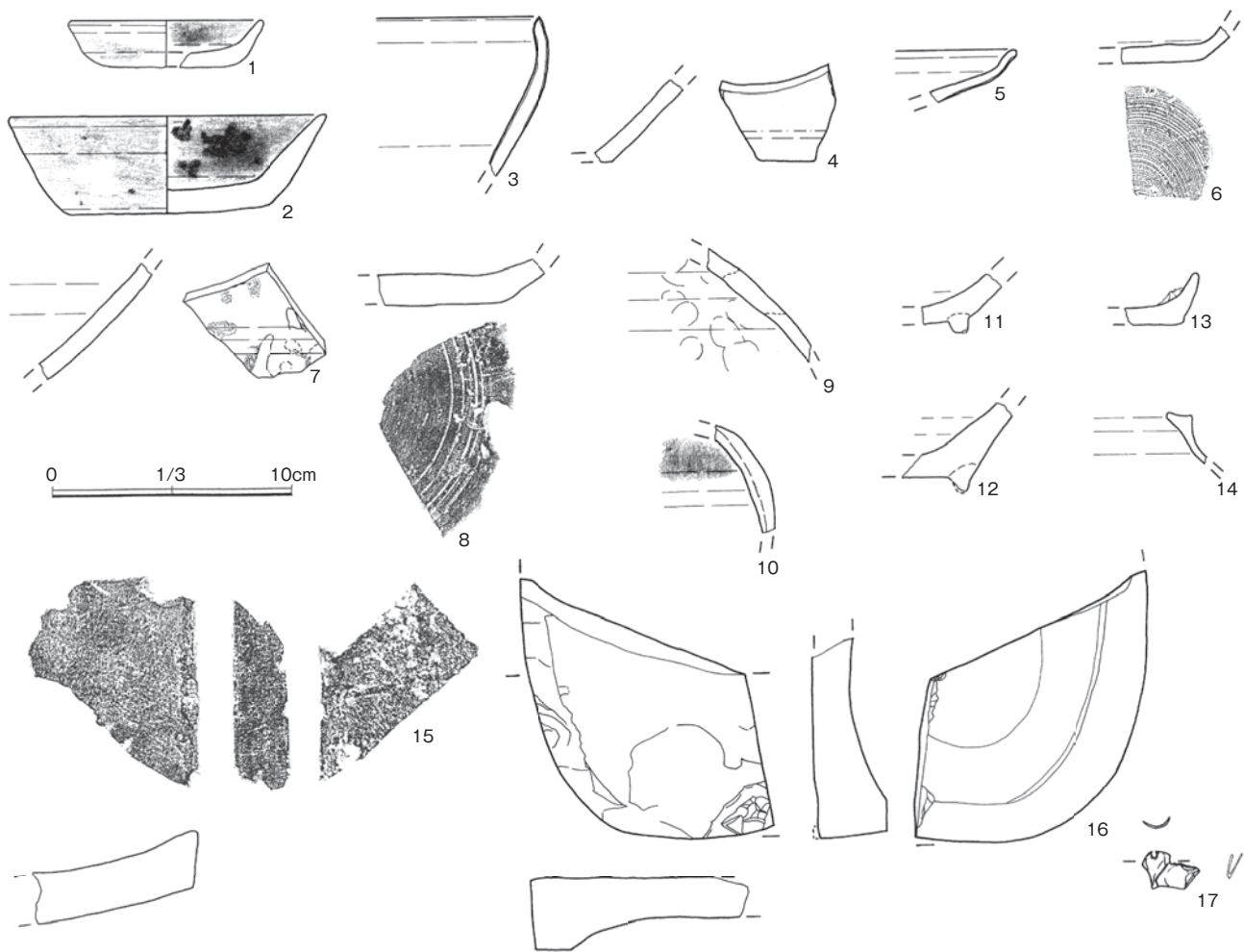


図8 2a面遺構外出土遺物

2a面遺構外出土遺物 (図8、図版6、表1)

1面構成土と2a面構成土上に堆積する図5-1～3層中から出土した遺物、総数65点中17点を図示した。かわらけ小皿(1)・大皿(2)、同一個体である瀬戸窯天目茶碗(3・4)、瀬戸窯の皿(5・6)、鉢(7・8)、壺(9～11)、内面に磨滅がみられる常滑片口鉢I類(12)、坩堝として使われたと思われる東海諸窯の皿(13)、伊勢土鍋(14)、格子叩き目ある平瓦(15)、中国安徽省歙州石で作られた推定長さ7寸×幅5寸とされる楕円硯(16)、折れ曲がり残存状態が部分的だが、一部穿孔箇所があり、薄く丸味を帯びた鑄造をしている用途不明銅製品(17)などが出土している。

3. 2b面の遺構と遺物

(図9、図版3)

調査区南部の泥岩版築面を基盤とし、その北限から70cm前後の範囲で2b面構成土(図5-8層)が2a面検出時には確認できていた。後述するが、2c面時の池状遺構が埋まってから、2a面を形成する段階途中で遺構が掘られている。調査区中央あたりから北側にやや落ち込み、わずかに平坦になる。泥岩版築面では2a面と変わらず標高13.2m前後、北側西部では13.1m、東部に向かい緩やかに低くなり、12.9mを測る。柱穴11口を検出した。

各遺構から出土した遺物はごく僅かで、P3・9から常滑窯甕小片1点ずつ、P4から常滑窯甕片2点、P8からかわらけ大皿小片1点であり、どれも図示不可能な遺物であった。

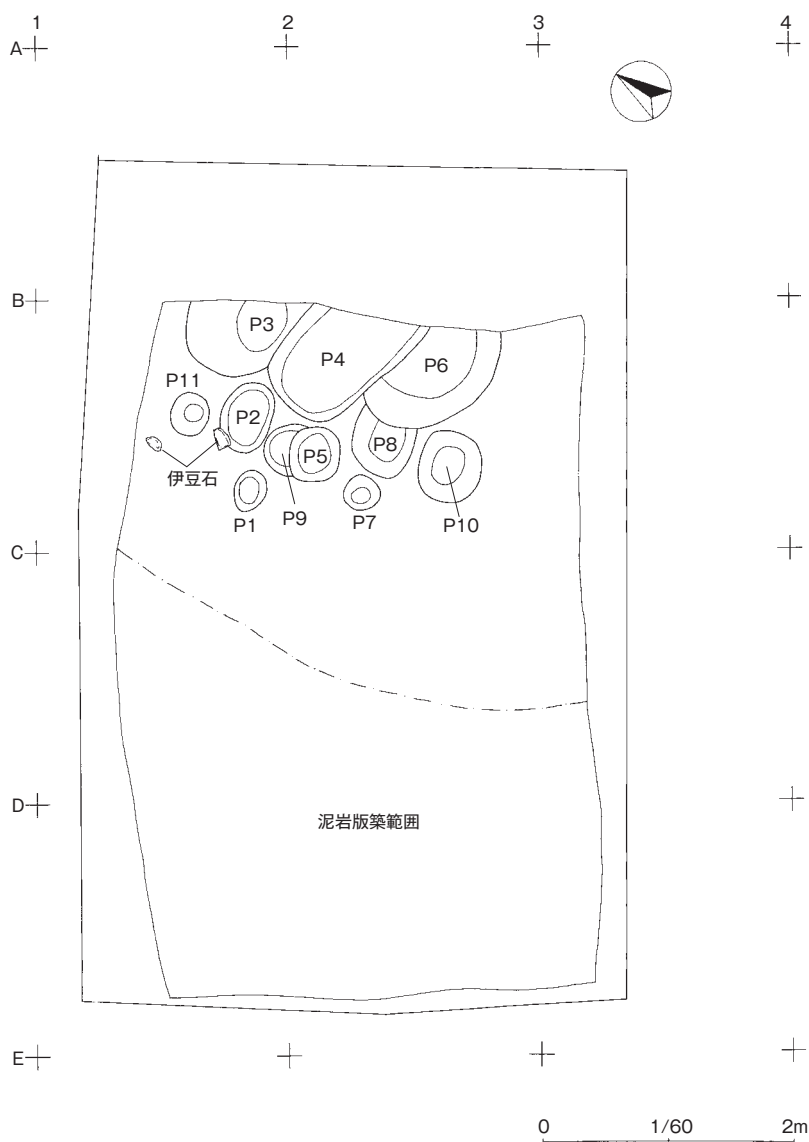


図9 2b面全測図

遺構名	平面形	検出標高	東西径	南北径	底面標高	重複関係
P 1	楕円形	13.10 m	32cm	34cm	13.07 m	—
P 2	不整形	13.10 m	42cm	57cm	13.05 m	—
P 3	不明	13.10 m	98cm以上	69cm以上	12.72 m	P 4より古い
P 4	楕円形	13.10 m	80cm	98cm以上	12.70 m	P 3・6より新しい
P 5	不整形	13.10 m	40cm	44cm	13.01 m	P 9より新しい
P 6	不明	13.10 m	66cm以上	94cm以上	12.82 m	P 4より古い
P 7	不整形	13.10 m	30cm	28cm	12.99 m	—
P 8	不整形	13.10 m	49cm	40cm以上	12.97 m	P 6より古い
P 9	不明	13.10 m	30cm以上	42cm	13.07 m	—
P 10	不整形	13.10 m	50cm	56cm	12.89 m	—
P 11	円形	13.10 m	31cm	35cm	13.02 m	—

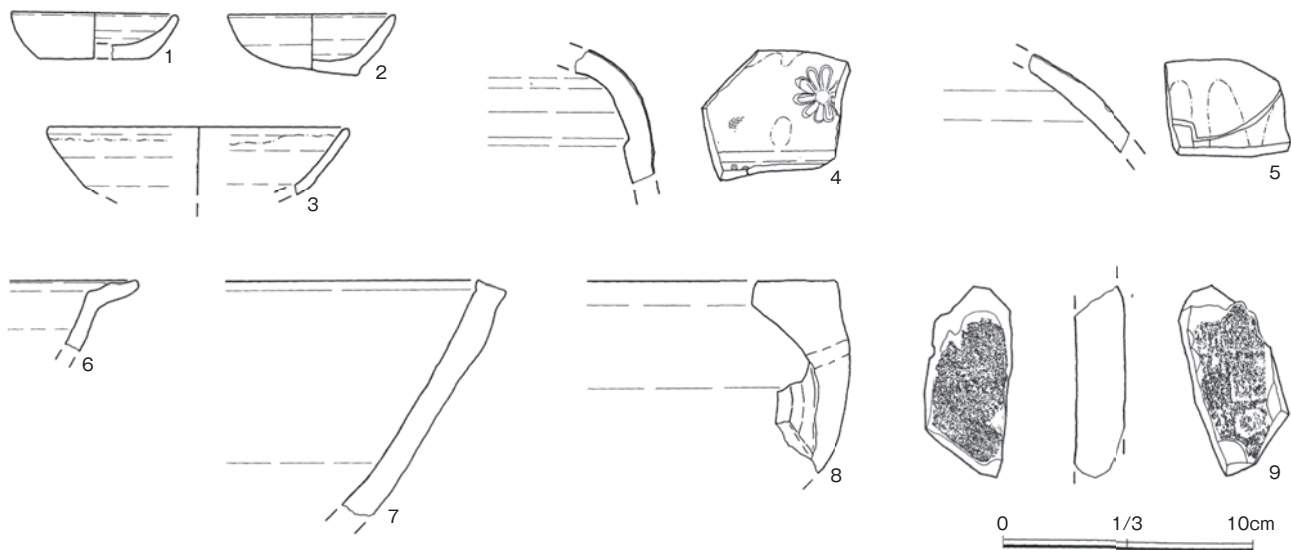


図10 2b面遺構外出土遺物

2b面遺構外出土遺物

(図10、図版7、表1)

2a面から当面検出時までの掘り下げ段階で出土した遺物を2b面遺構外出土遺物として一括した。図5-4・5層に該当し、かわらけ、瀬戸・常滑窯製品、瓦、火鉢、伊勢鍋、鳥骨、緑泥片岩を含むがいずれも小片のため、総数64点中9点を図示した。

図示した遺物は、かわらけ小皿(1・2)、瀬戸窯緑釉小皿(3)、外面に12弁の菊花文スタンプを施す瀬戸窯仏華瓶(4)、外面線刻がみられる瀬戸窯の四耳壺(5)、瀬戸窯折縁深皿(6)、常滑窯片口鉢Ⅱ類(7)、河野分類Ⅵ類の火鉢(8)、全体摩耗が著しく、凸部格子叩き目を施す平瓦(9)である。

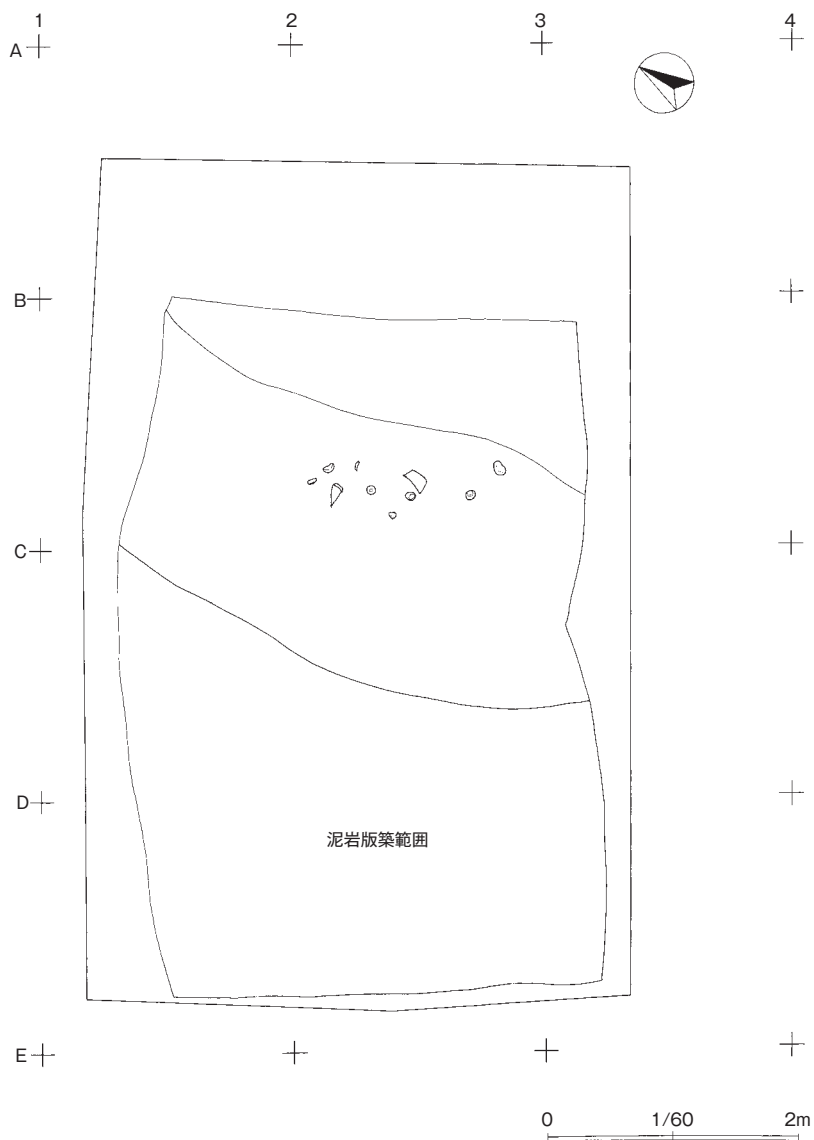


図11 2c面全測図

4. 2c面の遺構と遺物

(図11、図版4)

2a面泥岩版築面から落ち込み、2b面構成土直下に池状遺構1基を検出した。

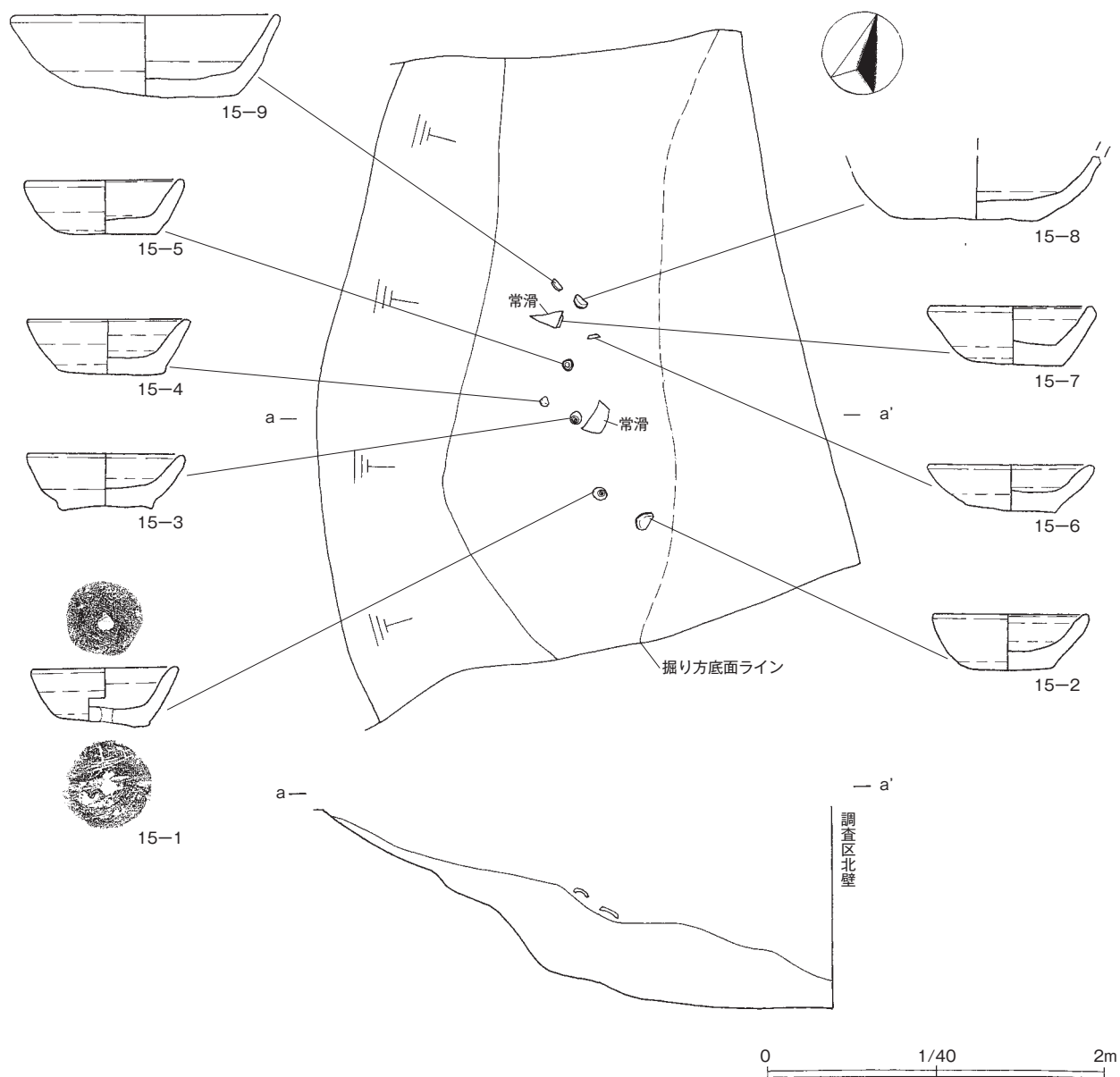


図12 2c面池状遺構1

池状遺構1 (図12、図版4)

2面基盤層である泥岩版築面から落ち込み、2b面構成土直下で検出した。池状遺構とした経緯は、覆土の堆積状況や土層観察もしくは立地的な面などから判断した。東側での掘り込みはDラインから北に80cm、西側ではCライン上に位置し、真北を軸とした場合、北方向から南東方向へとやや湾曲している。主軸方位はN - 17° 20' 00" - Wを測る。調査範囲内では泥岩版築面から底面にかけての一部を確認した。おそらく横幅は半分以下の検出で、南部以外は調査区外に拡がる。掘り方は、調査区中央から北壁方向に向かって傾斜角約30°で落ち込み、さらにそこから約45°の傾斜になり、底部平坦になっている。底面標高は西側で12.3m、東側で12.0mを測る。覆土は図5に示したように、斜面に沿ってc・e～i層が堆積したあとに、覆土中最も堆積量が多いd層が埋まり、a・b層が堆積した様相である。

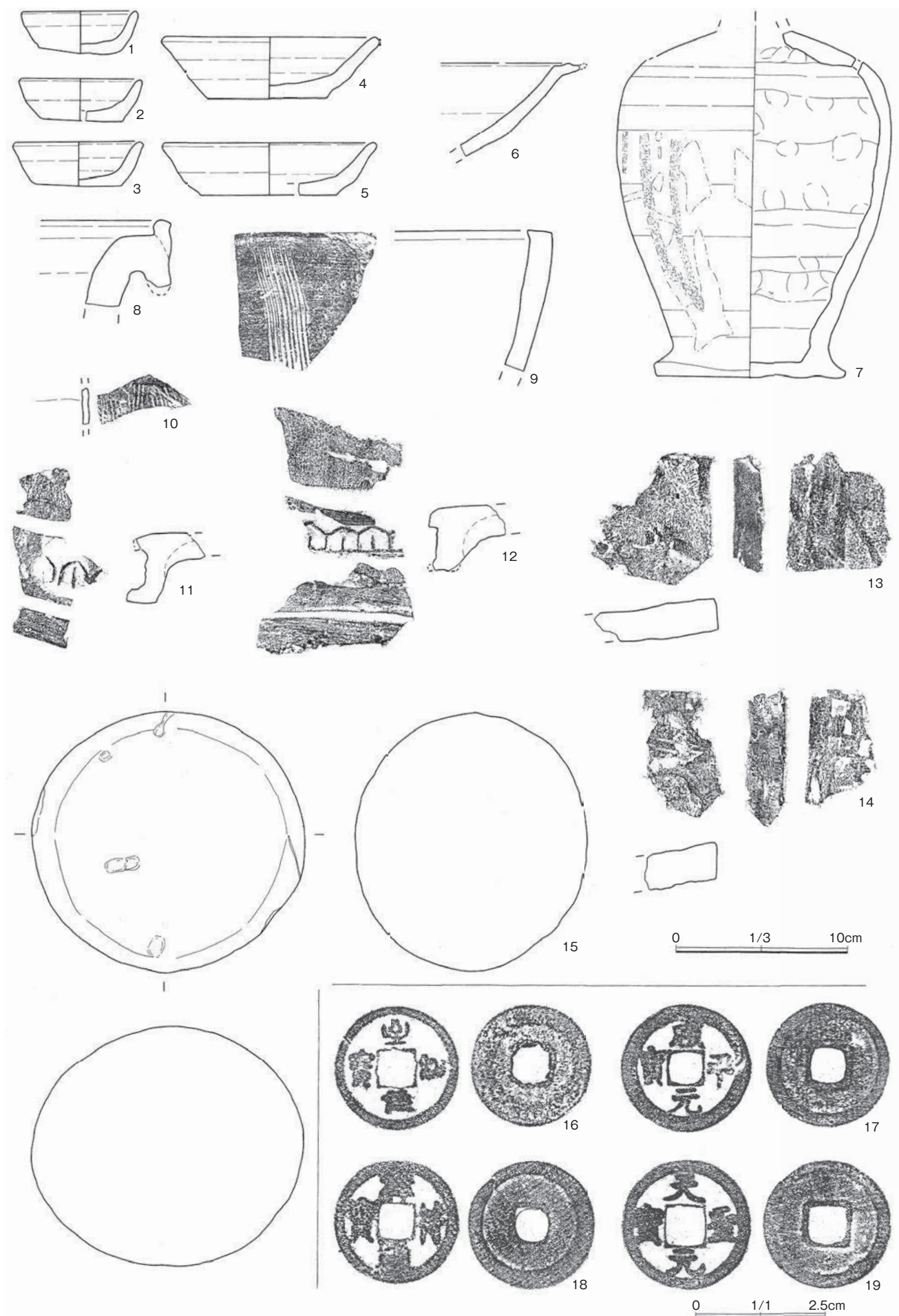


图13 2c面池状遺構1覆土中出土遺物(1)

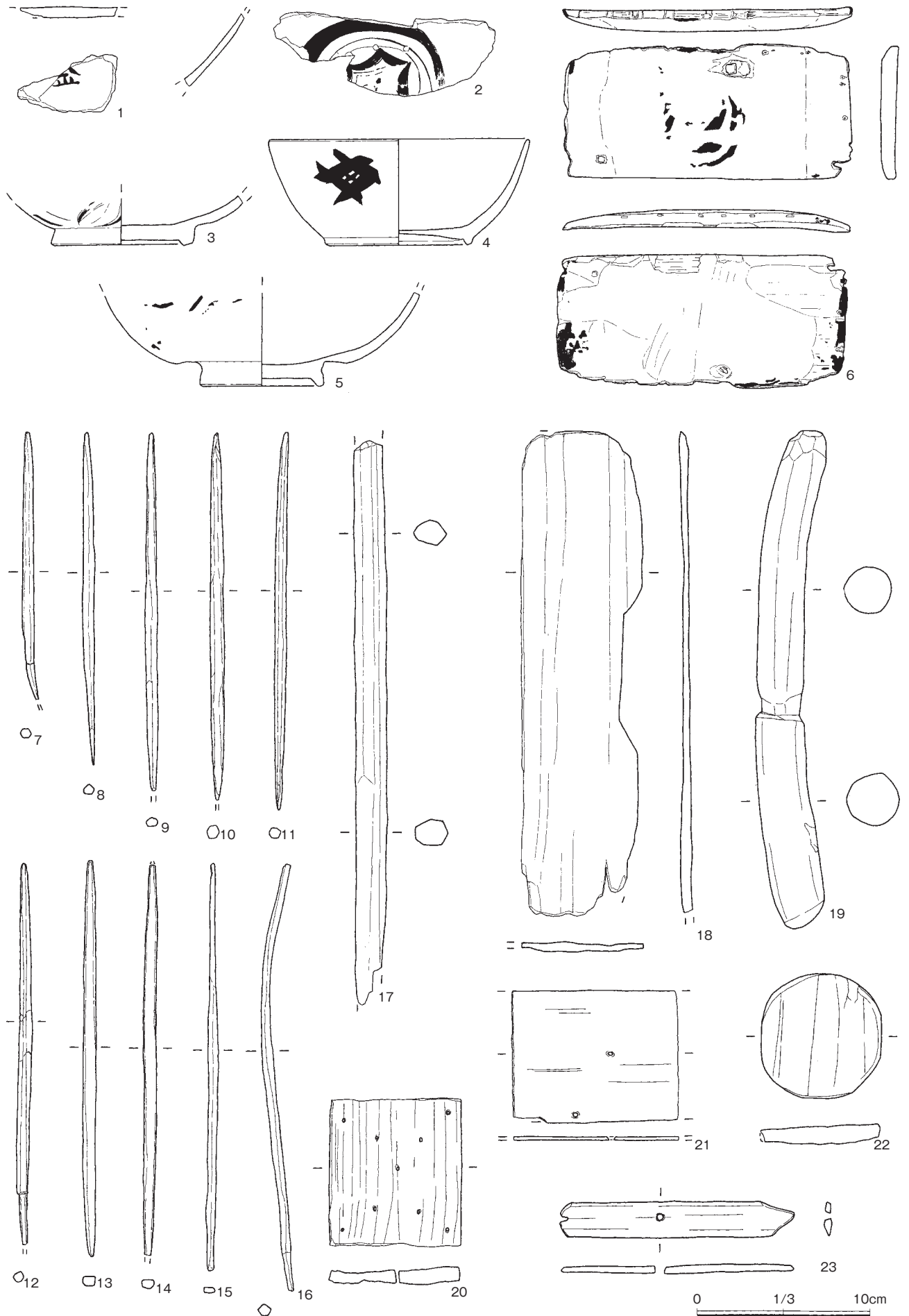


图14 2c面池状遺構1覆土中出土遺物(2)

池状遺構 1 覆土中出土遺物 (図13～15、図版7～10、表1～3)

図5-a～f層より出土した遺物を図示した(図13)。当遺構からは、自然遺物も含め、後述する最下層出土遺物を合わせると229点を数え、そのうちの115点が覆土中より出土している。主に木製品が主体となる。かわらけ小皿(1～3)・大皿(4・5)、瀬戸窯折縁深皿(6)、古瀬戸中期様式の瓶子(7)、8型式の常滑窯甕(8)、備前播鉢(9)、伊勢羽釜(10)、同一個体である上向き剣頭文を施す軒平瓦瓦当部(11・12)、凹面模骨痕、凸面縦位の叩き目を施す平瓦(13)、凸面市松状の叩き目がある平瓦(14)、至和元寶(16)、威平元寶(17)、祥符通寶(18)、天聖元寶(19)が出土している。15は自然的か人工的にやや楕円形状を呈しているのか不明だが、重量4.4kgを計る球状の砂岩である。五輪塔水輪の形状に類似してはいるが、その岩質や作成技法には基づくものではないという(古田土氏の見解による)。人工的とした場合、用途は様々だが、「重石」としたいところである。

また、木製品が多量に出土しており(図14)、内面朱漆で塗布され、外面底部に「金」と朱漆で描かれた漆器皿(1)、内面朱漆を塗布、外面には構成文を描く漆器碗(2)、そのほか図示した以外に14片あるが、細かく接合できる状態ではなかった。3・4は共に内面に朱漆が施され、外面に手描き文様が描かれる漆器碗。後者は井桁文が描かれている。全体に黒漆を施し、朱漆で手描きされているが剥離著しく不明瞭である漆器碗(5)、四周面取加工され、上端部に組み接ぎ状の切り込みや下端部に不等間隔の穿孔が6箇所、表面に巴文と思われる墨書が残る箱物状の木製品(6)が出土している。7～16は木製の箸で四角や多角形に削り加工されている。両端部欠損しているが、長さ30cmを超える菜箸(17)、板草履芯(18)、段状の削り加工による持ち手部分を細工した播粉木(19)、正方形の薄い板に×印状の穿孔がある板締染めの型板と思われるもの(20)、薄く削り加工してあり、2つの穿孔が残る用途不明木製品(21)、周縁部面取り加工を施す円板(22)、全体平坦に薄く、中央に穿孔がみえるトンボの羽根(23)が出土している。

図15のかわらけは、図12にも示したように最下層の上面に廃棄されてあった一群を取り上げた。常滑窯甕も出土しているが、図示するには至らなかった。1～7は口径7cm前後を測るかわらけ小皿、1は底部中央に穿孔がみられる。8・9は大皿、8は口縁部が欠損しているが、9と類似する形状をしており、推定口径12cm弱とみられる。

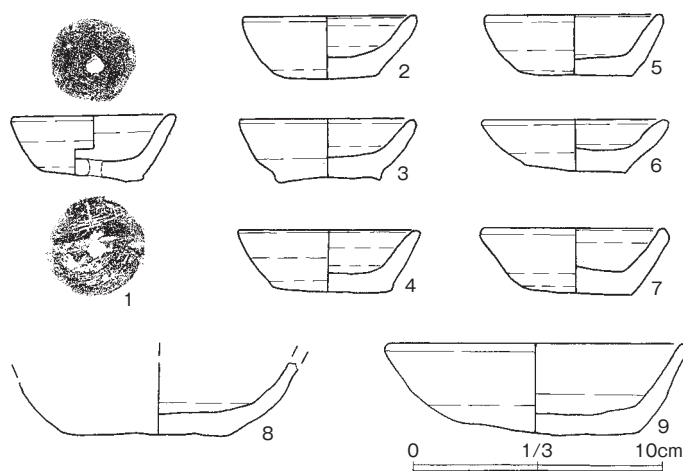


図15 2c面池状遺構 1 覆土中出土かわらけ

池状遺構 1 最下層出土遺物 (図16、図版10～11、表3)

図5-g・h層より出土した遺物である。当遺構内から229点の自然遺物を含む遺物が出土しており、そのうちの114点、覆土中からの出土遺物と比べ多く廃棄されてある。半分以上が木製箸であった。

1～4はかわらけ小皿、3・4は再火を受け変色している。5は古瀬戸中期様式Ⅲ～Ⅳ期の平底末広碗、6も同じく古瀬戸中期様式の平碗で高台付きであるが、おそらく焼成前に潰れてしまったと思われる。7は凸部格子叩き目を施す平瓦の小片、8は鉄製の鍋弦だが、廃棄された状況により形状が変形している。9は内外面に黒漆が施され、朱漆で情景文を手描きされている漆器の碗、10は漆器碗の胴部片、

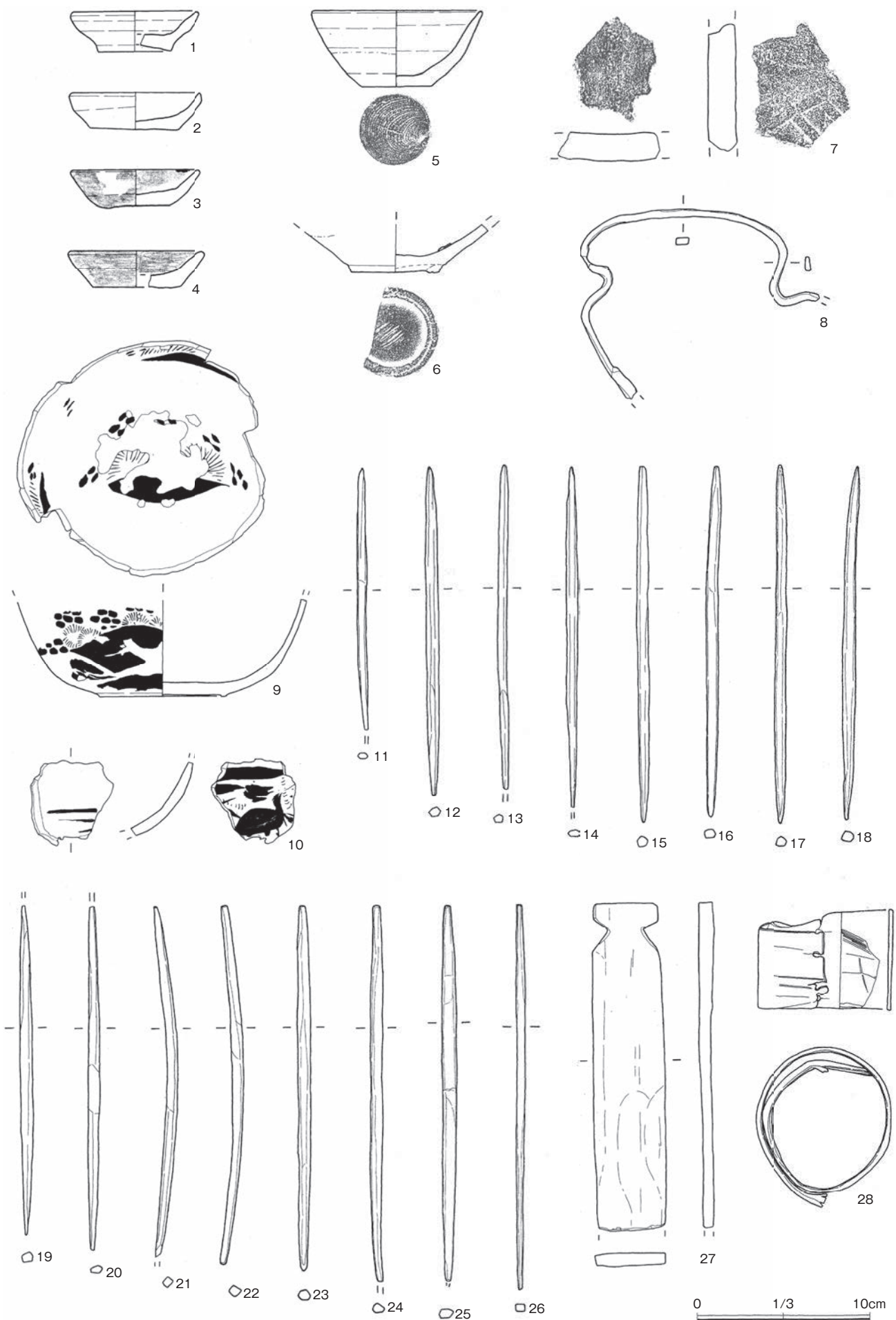


图16 2c面池状遺構1最下層出土遺物

亀と思われる動物を含む情景文が手描きされている。11～26は長さ15.0～21.9cmを測る木製箸である。27は上端部両側面からV字の挟り加工がされている木製の荷札、28は曲物。側板に綴じ合わせたあとの穿孔痕が残る。廃棄状況により縮小した状態で出土した。

5.2 面下トレンチ

(図5・17、図版5)

調査区東壁側に沿って幅80～100cmの南北方向のトレンチを入れ、下層を確認した。南側部分は図5-9層を除去したところまで掘り下げた。底面標高12.20mを測る。Cライン南側60cmほどからさらに掘り下げ、北側では底面標高11.50mまで確認した。一部水抜き用に11.25mまで深掘りしたが層位に変化は認められなかった。また、2c面池状遺構1の範囲をわずかながら確認するため、北側の未掘部分を一部拡張した。結果、池状遺構1の堆積層は変わらず、上層部分での判断だが、調査区外に拡がる様相であった。

10・11層も池状遺構1の覆土の可能性はある。9・12・13層の泥岩層を削平して、20cm大の泥岩・木端・粗砂多く含む暗灰色粘質土(10層)と木端少量を含む灰色粘質土(11層)の堆積がみられたことから、10・11層も池状遺構1の覆土の可能性ないしは時期

的な差がある同類の遺構と思われる。以下、泥岩粒少量含む黒褐色粘質土(15層)が薄く堆積し、15cm大までの泥岩が多量に含む黒褐色粘質土(16層)堆積している層位まで確認を行った。トレンチ内からの遺物の出土は認められなかった。

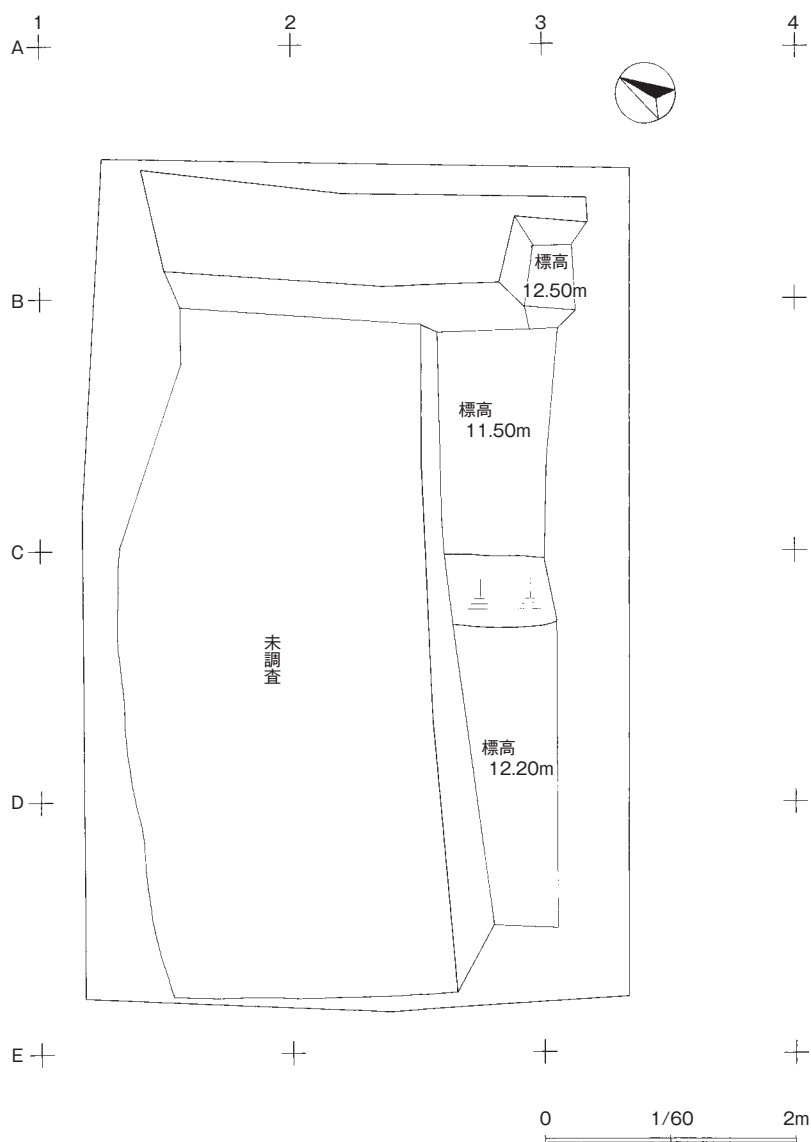


図17 2c面下トレンチ

第四章 まとめ

本調査地点は、鎌倉市南東部に在る弁ヶ谷内の中央支谷入口に位置する。弁ヶ谷には現在では廃寺になってしまっているが、寺院址の記録が多く、宗教的空間地であったことがみてとれる。周辺の調査例からもそのような痕跡が成果として挙っている。本調査でもその一端と想像させる遺構や遺物を検出したが、狭小な調査面積に加え、多量の湧水や調査期間の縮小などの影響により、不明瞭な部分が多い。

1～2 c 面までの4時期の遺構群やトレンチ内の土層観察のみ検出したが、大別してⅣ期に分けられることができる。以下、各期古い順に様相を述べながら、それぞれ推測を兼ね、若干の考察をしてみたい。

Ⅰ期

2面下トレンチ内で確認した堆積層に相当する。後述する池状遺構1の直下に堆積する粘質土層は泥岩版築層を削り込んで堆積している。覆土中から木端が含まれており、極く狭い範囲もあり、遺物が出土しない状況であったが、30～50cmほどの人工的と思われる泥岩層(図5-13層)より新しい。池状遺構1の前身である遺構の可能性もある。その直下、地表下310cm、標高11.50mの位置に泥岩粒を少量含む黒褐色粘質土を確認し、その下層も同様の堆積をしていたため中世基盤層とした。

年代は出土遺物がなく、周辺調査からの類似性などからも比較が難しく、Ⅱ期の年代から考えると14世紀以前としか言い得ることができない。

Ⅱ期

2c面池状遺構1のみが該当する。土丹版築層から掘り込まれた深さ1.2mの遺構である。粘土に近い覆土に木端や木葉が含まれていることから、水と関係する遺構である要素は強いが、可能性としては、河川といったことも考えられる。その場合、現在の弁ヶ谷内の立地を見ると谷戸内を流れる川は、豆腐川のみである。現在はほとんどが暗渠になっており、第1章3節で述べたが材木座六丁目640番2地点(図1-No.249内7地点)では13世紀半ば頃の豆腐川の護岸が検出されている。鎌倉時代中期には現在見える豆腐川の位置はあったようで、そこから推察すると谷戸東部から源流があったと思われる。当遺構は北から南東方向に湾曲し、高低差もあることから流れを考えるなら南東方向に流下していると思われる。そうすると、中央支谷から流れ、南側に流れる豆腐川に合流する流路があったとも考えられるが、周辺の調査結果により明らかになるであろう。

年代については最下層から瀬戸中期様式の碗や器形がわずかな丸みをもつが直線的に開く傾向と、器壁がやや厚くなるかわらけが出土していることから、14世紀中～後半頃と考えたい。覆土中からは、器形が直線的に開き、器壁が厚くなるものが大半を占め、古瀬戸中期様式と思われる瓶子や常滑窯甕8型式、漆器碗の形状から15世紀前半期と考えられ、池状遺構の年代は14世紀中頃～15世紀前半と幅広く、1世紀に亘り、存続していたと考えられる。

Ⅲ期

池状遺構が廃絶後の2b・2a面に相当する。池状遺構が泥岩版築面上の高さまで埋まりかけた途中に2b面がある。建物などの柱穴といった要素はなく、浅形の遺構に遺物もほぼ皆無なことからゴミ穴の可能性も薄く、性格は不明である。2a面も同じく、池状遺構が埋まったあとの泥岩版築面と平坦に整地された面であるが、遺構も希薄である。

年代は、2a・b面共に14世紀後半からみられる遺物が出土しているが、各面を構成する堆積層中から出土しており、ここでは整地する際に混入した遺物であろう。2a面と2b面との年代差は、あまり大差ないと思われ、Ⅱ期との年代を考えると、15世紀前半～中頃としたい。

Ⅳ期

1面が相当するが、直上が現代の表土層であり、遺物が出土してないことから中世遺構面と断定するには及ばず、近世以降の遺構面の可能性がある。

本地点は新善光寺があったとされる支谷の開口部に位置し、すぐ北側から谷奥に向かい傾斜が強くなる。出土遺物は池状遺構からの木製品が主体であるが、それを除いてみると、瀬戸窯製品の出土が目立ち、舶載陶磁器が全く含まれていない。これはこの地点での特徴であり、鎌倉遺跡群の中での遺物組成からすると寺域内における要素が窺える。新善光寺境内の一角となるかは想定の域を出ないが、寺院址の一角であると想定している。池状遺構を「池」と断定した場合、武家屋敷も含め、それらに伴う庭園の一角と考えられる。

平成21年度に本調査地点の南東に隣接する分譲地の発掘調査を筆者が担当し、実施している(図2)。調査成果から若干様相が異なる部分があるが、今後の報告でさらなる検討をしたい。

[引用参考文献]

大河内勉 1993「漆器とかかわりの器形比較と相関性について」『鎌倉考古 No.26』鎌倉考古学研究所

根本志保 2010「弁ヶ谷遺跡(No.249)の調査」『第20回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会 発表要旨』特定非営利活動法人 鎌倉考古学研究所

表1 遺物観察表(1)

()=復元値 []=遺存値

挿図番号	出土面・遺構	種別	遺存度	寸法(cm)			観察項目 a:成形・整形 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:焼成 f:備考
				口径	底径	器高	
8-1	2a面遺構外	かわらけ	口縁部1/5 ～底部1/4	(8.0)	(4.5)	1.9	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 やや粗胎 c.黄橙色 e.やや良好 f.内面口縁下煤付着、外面胴部にも薄く黒色残る 燈明皿か
8-2	2a面遺構外	かわらけ	口縁部1/3 ～底部完形	13.0	8.5	4.0	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 泥岩粒 やや粗胎 c.淡橙色 e.良好 f.全体に煤付着 燈明皿か
8-3	2a面遺構外	瀬戸 天目茶碗	口縁～胴部片	—	—	[6.5]	b.灰白色 砂粒 白色粒 良好 d.黒色不透明 内面～外面下部施釉 e.良好 f.図8-4と同一個体
8-4	2a面遺構外	瀬戸 天目茶碗	底部片	—	—	[3.9]	b.灰白色 砂粒 白色粒 良好 d.黒色不透明 内面・外面上部施釉 e.良好 f.図8-3と同一個体
8-5	2a面遺構外	瀬戸 皿	口縁 ～体部小片	—	—	[2.1]	b.灰白色 良好 d.灰釉明灰緑色透明 内面口縁下～外面施釉 内底部自然釉付着 e.良好
8-6	2a面遺構外	瀬戸 皿	底部片	—	—	[1.3]	a.外底糸切痕 b.黄灰色 砂粒 黒色粒 良好 c.黄灰色 e.良好 f.内面わずかに重ね焼き痕あり
8-7	2a面遺構外	瀬戸 鉢	胴部片	—	—	[4.7]	b.黄味灰白色 良好 d.灰釉灰緑色半透明 外面施釉 部分的に剥離 e.良好
8-8	2a面遺構外	瀬戸 鉢	底部片	—	—	[1.8]	a.外底糸切痕 b.灰白色 良好 d.灰釉灰緑色半透明 外面施釉 内面降灰部白色 e.良好
8-9	2a面遺構外	瀬戸 壺	肩部小片	—	—	[4.7]	a.外面周回する二条線 b.暗灰白色 砂粒 白色粒 良好 c.内面淡灰緑色 外面降灰部暗灰色 e.良好
8-10	2a面遺構外	瀬戸 壺	肩部小片	—	—	[4.5]	b.灰白色 白色粒 良好 c.内面暗灰色 外面降灰部灰緑色 e.良好
8-11	2a面遺構外	瀬戸 壺	底部片	—	—	[2.3]	a.貼付高台 内底部糸切痕 b.黄味灰白色 良好 d.灰釉灰緑色半透明 外面施釉 内面自然釉付着 e.良好
8-12	2a面遺構外	常滑 片口鉢Ⅰ類	底部片	—	—	[3.6]	a.貼付高台 b.灰白色 砂粒 黒色粒 白色粒 やや粗胎 c.灰白色 e.良好 f.内面磨滅
8-13	2a面遺構外	東海系 皿	底部小片	—	—	2.1	b.灰色 砂粒 白色粒 やや粗胎 c.灰色 e.ややあまい軟質 f.内面鉄塊付着 垢場か
8-14	2a面遺構外	伊勢 土鍋	口縁部小片	—	—	[2.1]	b.黒色 砂粒 雲母 赤色粒 やや粗胎 c.淡白褐色 e.やや良好 硬質 f.図示不可能な同一個体2片あり
8-15	2a面遺構外	平瓦	左上端部側	長[7.3] 幅[6.7] 厚2.0			a.凹部布目痕 凸部格子叩き目 離れ砂 b.明灰白色 砂粒 黒色粒 白色粒 赤色粒 小石 やや粗胎 c.灰色 e.良好
8-16	2a面遺構外	楕円硯	左硯背部	長[7.9] 幅[8.8] 厚2.8			a.表面わずかに緑あり 硯背覆手加工 b.頁岩 c.青灰白～薄紅色 f.中国安徽省歙州石(広東省端石の青) 推定長7寸×幅5寸(汐見一夫・垣内光次郎両氏の見解による) 参考資料：鎌倉市埋蔵文化財緊急速報報告書20(第1分冊) p124.図34-24
8-17	2a面遺構外	用途不明 銅製品	不明	長1.5 幅1.0～1.5 厚0.2			a.上部先端に穿孔 全体薄く丸味を帯びる f.折れ曲がった状態で出土
10-1	2b面遺構外	かわらけ	口縁 ～底部1/4	(6.6)	(4.3)	1.8	a.轆轤 外底糸切痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 やや粗胎 c.橙色 e.やや良好
10-2	2b面遺構外	かわらけ	口縁部 1/6欠損	(6.6)	3.5	2.2	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 やや粗胎 c.黄灰色 e.やや良好
10-3	2b面遺構外	瀬戸 緑釉小皿	口縁～ 胴部1/8以下	(11.8)	—	[2.6]	b.黄味灰白色 砂粒 黒色粒 良好 d.口縁部施釉 黒色 e.良好 硬質
10-4	2b面遺構外	瀬戸 仏華瓶	胴部片	—	—	[5.1]	b.黄味灰白色 白色粒 良好 d.灰釉明灰緑色透明 e.良好 硬質 f.外面12弁の菊花文スタンプ
10-5	2b面遺構外	瀬戸 四耳壺	肩部片	—	—	[3.8]	b.灰白色 白色粒 黒色粒 良好 d.内外面淡褐色 外面灰暗灰緑色不透明 e.良好 硬質 f.外面線刻文様あり
10-6	2b面遺構外	瀬戸 折縁深皿	口縁部小片	—	—	[2.8]	b.灰白色 砂粒 白色粒 良好 d.灰釉明灰緑色半透明 e.良好 硬質
10-7	2b面遺構外	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片	—	—	[9.3]	b.赤橙色 砂粒 白色粒 黒色粒 粗胎 c.外面赤褐色 内面降灰淡茶色 e.良好
10-8	2b面遺構外	瓦質 火鉢	口縁部片	—	—	[7.5]	b.黄味白色 砂粒 白色粒 黒色粒 粗胎 c.灰黒色 e.良好 f.河野分類Ⅵ類
10-9	2b面遺構外	平瓦	部位不明小片	長[7.5] 幅[3.1] 厚1.9			a.凹部布目痕 凸部格子叩き目 離れ砂 b.淡赤褐～黄灰色 砂粒 黒色粒 赤色粒 小石 粗胎 c.灰色 e.やや不良 f.全体磨耗著しい
13-1	2c面 池状 遺構1 覆土中	かわらけ	口縁部 一部欠損	6.4	4.7	2.35	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.淡黄緑～黄灰色 e.やや良好
13-2	2c面 池状 遺構1 覆土中	かわらけ	口縁～底部 5/6	6.75	4.7	2.4	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.淡橙色 e.良好
13-3	2c面 池状 遺構1 覆土中	かわらけ	完形	7.1	4.7	2.5	a.轆轤 外底糸切痕 b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.淡橙色 e.良好
13-4	2c面 池状 遺構1 覆土中	かわらけ	口縁部1/2 ～底部完形	12.2	6.9	3.5	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.橙色 e.良好
13-5	2c面 池状 遺構1 覆土中	かわらけ	口縁1/3 ～底部1/4	(12.0)	(7.8)	3.0	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.黄橙色 e.良好
13-6	2c面 池状 遺構1 覆土中	瀬戸 折縁深皿	口縁～胴部片	—	—	[5.3]	b.灰黄色 砂粒 黒色粒 やや粗胎 d.灰釉淡灰緑色不透明 内面～外面上部施釉 e.良好 f.内面口縁下磨滅
13-7	2c面 池状 遺構1 覆土中	瀬戸 瓶子	胴部1/4 ～底部完形	胴部径 (15.6)	10.9	[19.8]	b.灰～灰白色 砂粒 白色粒 精良胎 c.内面灰色 外面淡茶褐色 降灰部明灰緑色 e.良好 f.内面肩部焼けている 古瀬戸中期様式
13-8	2c面 池状 遺構1 覆土中	常滑 甕	口縁部片	縁帯幅(2.3)			b.灰色 砂粒 黒色粒 白色粒 小石多い 粗胎 c.暗褐色～褐色 e.良好 f.中野編年8型式
13-9	2c面 池状 遺構1 覆土中	備前 播鉢	口縁～胴部片	—	—	[8.0]	a.内面8条の櫛描き播り目 b.灰～赤灰色 黒色粒 白色粒 褐色粒 やや粗胎 c.内面灰黒色 外面暗赤褐色～暗灰色 e.良好

表2 遺物観察表(2)

() = 復元値 [] = 遺存値

挿図番号	出土面・遺構	種別	遺存度	寸法(cm)			観察項目 a:成形・整形 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:焼成 f:備考
				口径	底径	器高	
13-10	2c面 池状遺構1覆土中	伊勢 羽釜	胴部小片	—	—	[2.1]	a.外面縦位櫛描き状の文様 b.暗灰色 白色粒 良好 c.白橙色 e.良好
13-11	2c面 池状遺構1覆土中	軒平瓦	瓦当左端部	長[3.9] 幅[5.5] 厚1.5～3.6			a.瓦当部上向き剣頭文 凹部横位指ナデ 凸部離れ砂 端部へラ削り b.灰白色 砂粒 黒色粒 白色粒 粗胎 c.灰黒色 e.不良 f.図13-12と同一個体
13-12	2c面 池状遺構1覆土中	軒平瓦	瓦当中央部	長[4.3] 幅[9.2] 厚1.8～3.5			a.瓦当部上向き剣頭文 凹部横位指ナデ 凸部離れ砂 端部へラ削り b.灰白色 砂粒 黒色粒 白色粒 粗胎 c.灰黒色 e.不良 f.図13-11と同一個体
13-13	2c面 池状遺構1覆土中	平瓦	狭端右側	長[7.8] 幅[7.0] 厚1.9			a.凹部模骨痕 離れ砂 凸部縦位叩き目 b.淡桃灰色 砂粒 黒色粒 小石 粗胎 c.灰黒色 e.良好
13-14	2c面 池状遺構1覆土中	平瓦	広端右側端部	長[7.1] 幅[4.1] 厚2.0			a.凹部模骨痕 凸部市松状の叩き目 端部へラ削り b.白灰色 砂粒 黒色粒 白色粒 粗胎 c.灰黒色 e.良好
13-15	2c面 池状遺構1覆土中	球状石製品?	完形	長14.9 幅15.7 厚13.7			b.砂岩 c.明灰色 f.重量4.4kg 自然に球状となったか
13-16	2c面 池状遺構1覆土中	銅銭	完形	外縁径2.35 内縁径1.94 孔径0.62			f.至和元寶 北宋 1045年 篆書
13-17	2c面 池状遺構1覆土中	銅銭	完形	外縁径2.48 内縁径1.91 孔径0.61			f.威平元寶 北宋 998年 真書
13-18	2c面 池状遺構1覆土中	銅銭	完形	外縁径2.43 内縁径1.96 孔径0.68			f.祥符通寶 北宋 1009年 真書
13-19	2c面 池状遺構1覆土中	銅銭	完形	外縁径2.43 内縁径2.06 孔径0.76			f.天聖元寶 北宋 1023年 真書
14-1	2c面 池状遺構1覆土中	漆器 皿	底部片	長[3.3] 幅[5.6] 厚0.6			a.内面朱漆塗布 外面黒漆地に朱漆で「金」の手描き
14-2	2c面 池状遺構1覆土中	漆器 椀	胴部1/5	長[4.3] 幅[12.6] 厚0.3～0.5			a.内面朱漆塗布 外面黒漆地に朱漆で構成文を手描き f.ほか胴部片14片あり
14-3	2c面 池状遺構1覆土中	漆器 椀	胴部1/6～底部完形	—	7.1	[2.7]	a.削り出し輪高台 内面朱漆塗布 外面黒漆地に朱漆で手描き文様あるが不明
14-4	2c面 池状遺構1覆土中	漆器 椀	胴部1/2	14.6	7.7	6.95	a.削り出し輪高台 内面朱漆塗布 外面黒漆地に朱漆で井桁文を手描き
14-5	2c面 池状遺構1覆土中	漆器 椀	胴部1/4～底部1/5	—	(6.4)	[5.3]	a.削り出し輪高台 内外面黒漆塗布 外面朱漆で手描き文様あるが剥離著しく文様不明 f.高台～高台内部調整不良
14-6	2c面 池状遺構1覆土中	木製 箱物か	部位不明	長7.5 幅16.4 厚0.8～1.2 木釘径0.6 穿孔径0.1～0.35			a.四角面取加工 表面中央に墨書(巴文か) 上端中央に木釘残る 両端下部・左端に穿孔 裏面粗い削り調整 上端部組み接ぎ状の切り込み加工 下端部不問隔で6つの穿孔 f.所々煤付着
14-7	2c面 池状遺構1覆土中	木製 箸	先端部欠損	長[15.3] 幅0.3～0.6 厚0.5			a.多角形に削り加工
14-8	2c面 池状遺構1覆土中	木製 箸	完形	長19.0 幅0.2～0.7 厚0.6			a.多角形に削り加工 先端鋭く尖る
14-9	2c面 池状遺構1覆土中	木製 箸	先端部欠損	長[20.4] 幅0.4～0.7 厚0.5			a.多角形に削り加工
14-10	2c面 池状遺構1覆土中	木製 箸	先端部欠損	長[20.9] 幅0.3～0.7 厚0.7			a.多角形に削り加工
14-11	2c面 池状遺構1覆土中	木製 箸	完形	長21.5 幅0.3～0.65 厚0.6			a.多角形に削り加工 両端やや丸みを帯びる
14-12	2c面 池状遺構1覆土中	木製 箸	先端部欠損	長[21.8] 幅0.4～0.7 厚0.6			a.多角形に削り加工
14-13	2c面 池状遺構1覆土中	木製 箸	完形	長22.5 幅0.3～0.7 厚0.5			a.四角形状に削り加工
14-14	2c面 池状遺構1覆土中	木製 箸	両端部欠損	長[22.2] 幅0.4～0.7 厚0.5			a.四角形状に削り加工
14-15	2c面 池状遺構1覆土中	木製 箸	完形	長23.1 幅0.3～0.6 厚0.3			a.四角形に削り加工 両端やや丸みを帯びる
14-16	2c面 池状遺構1覆土中	木製 箸	完形	長24.3 幅0.5～0.7 厚0.7			a.四角形状に削り加工 両端角張る
14-17	2c面 池状遺構1覆土中	木製 菜箸	両端部欠損	長[32.1] 幅1.5～1.8 厚1.0～1.4			a.全体横幅広く、多角形に削り加工
14-18	2c面 池状遺構1覆土中	木製 草履芯か	約1/2?	長[27.4] 幅5.6～6.9 厚0.3～0.6			a.全体薄く平坦に削り加工 裏面粗い調整で加工途中か
14-19	2c面 池状遺構1覆土中	木製 播粉木	完形	長28.2 幅2.5～2.8 厚2.6～2.9			a.全体丸く削り加工 末端部やや細く、中央下部に段状の削り加工 先端部磨減
14-20	2c面 池状遺構1覆土中	板締 染め型板か	完形	長8.2 幅7.5 厚0.5～0.8 孔径0.2			a.正方形形状に削り加工 斜めに9つの穿孔 f.型板裏面か
14-21	2c面 池状遺構1覆土中	用途不明 木製品	不明	長7.5 幅[9.4] 厚0.2 孔径0.4			a.全体薄く平坦に削り加工 2つ穿孔
14-22	2c面 池状遺構1覆土中	木製 円板	一部欠損	長7.0 幅6.9 厚0.7～1.0			a.周縁部面取り加工
14-23	2c面 池状遺構1覆土中	木製 トンポの羽根	完形	長2.0 幅13.3 厚0.3～0.5 孔径0.4			a.全体薄く平坦に削り加工 ほぼ中央に穿孔 端部丸く面取りし中央に切れ込み加工 一端は弱く尖らせる削り加工
15-1	2c面 池状遺構1覆土中	穿孔かわらけ	一部欠損	6.5	3.8	2.6	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.橙色 e.良好 f.底部中央穿孔
15-2	2c面 池状遺構1覆土中	かわらけ	完形	6.9	3.8	2.4	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.淡橙色 e.やや良好

表3 遺物観察表(3)

()=復元値 []=遺存値

挿図番号	出土面・遺構	種別	遺存度	寸法(cm)			観察項目 a:成形・整形 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:焼成 f:備考
				口径	底径	器高	
15-3	2c面 池状遺構1覆土中	かわらけ	口縁2/3～底部完形	7.0	4.5	2.3	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針多い 泥岩粒 やや良好 c.淡橙色 e.やや良好
15-4	2c面 池状遺構1覆土中	かわらけ	完形	7.0	4.8	2.4	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 小石粒 やや粗胎 c.淡橙色 e.やや良好
15-5	2c面 池状遺構1覆土中	かわらけ	口縁部4/5～底部完形	7.0	4.6	2.3	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.淡橙色 e.良好
15-6	2c面 池状遺構1覆土中	かわらけ	口縁2/3～底部完形	7.4	4.0	2.1	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 小石粒 やや粗胎 c.黄灰色 e.やや良好
15-7	2c面 池状遺構1覆土中	かわらけ	口縁～底部2/3	(7.4)	(4.6)	2.7	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 海綿骨針 小石粒 やや粗胎 c.黄灰色 e.やや良好
15-8	2c面 池状遺構1覆土中	かわらけ	底部完形	—	6.7	[2.8]	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.淡橙色 e.良好
15-9	2c面 池状遺構1覆土中	かわらけ	一部欠損	12.0	7.3	3.6	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.淡橙色 e.良好
16-1	2c面 池状遺構1最下層	かわらけ	口縁～底部1/4	(7.1)	(4.2)	2.3	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.淡橙色 e.良好
16-2	2c面 池状遺構1最下層	かわらけ	完形	7.4	5.1	2.1	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 やや良好 c.淡橙色 e.良好
16-3	2c面 池状遺構1最下層	かわらけ	口縁1/2～底部完形	7.2	4.0	2.0	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.黄橙色～暗灰色 e.良好 f.全体再火により焼けている
16-4	2c面 池状遺構1最下層	かわらけ	口縁～底部1/3	(7.6)	(5.0)	2.0	a.轆轤 外底糸切痕 b.砂粒 雲母 やや粗胎 c.黒褐色 e.不明 f.全体再火により焼け強く硬化している
16-5	2c面 池状遺構1最下層	瀬戸 平底末広碗	完形	9.6	3.9	4.3	a.外底糸切痕 b.砂粒 良好 d.灰釉明灰緑色半透明 内面～胴部施釉 内面粗い貫入 e.良好 f.古瀬戸中期様式Ⅲ～Ⅳ期
16-6	2c面 池状遺構1最下層	瀬戸 平碗	胴部1/6～底部1/3	高台径5.0		(2.8)	a.貼付高台 高台内へラ削り b.黄白色 砂粒 黒色粒 良好 d.灰釉明灰緑色不透明 内面・外面上部施釉 e.良好 f.内面重ね焼き痕あり 古瀬戸中期様式Ⅲ期か
16-7	2c面 池状遺構1最下層	平瓦	部位不明小片	長[7.1] 幅[5.9] 厚1.5			a.凹部模骨痕 凸部格子叩き目 b.淡橙色 砂粒 白色粒多い 赤色粒粗胎 c.淡黄灰色 e.良好
16-8	2c面 池状遺構1最下層	鉄製 鍋弦	両端部欠損	長[10.9] 幅[11.7～13.5] 厚0.7			a.断面長方形に鍛造 f.廃棄状況により形状変形している
16-9	2c面 池状遺構1最下層	漆器 椀	胴部1/3～底部完形	—	6.8	[5.5]	a.削り出し輪高台 高台置付木目露出 内外面黒漆地に朱漆で情景文を手描き
16-10	2c面 池状遺構1最下層	漆器 椀	胴部小片	—	—	[4.2]	a.内面黒漆地に朱漆で線状の手描き文様 外面黒漆地に朱漆で亀などの情景文を手描き
16-11	2c面 池状遺構1最下層	木製 箸	先端部欠損	長[15.0] 幅0.5 厚0.4			a.扁平な多角形状に削り加工
16-12	2c面 池状遺構1最下層	木製 箸	完形	長18.8 幅0.3～0.7 厚0.5			a.多角形状に削り加工
16-13	2c面 池状遺構1最下層	木製 箸	先端部欠損	長[18.5] 幅0.3～0.5 厚0.5			a.多角形状に削り加工
16-14	2c面 池状遺構1最下層	木製 箸	先端部欠損	長[19.5] 幅0.3～0.7 厚0.4			a.扁平な多角形状に削り加工
16-15	2c面 池状遺構1最下層	木製 箸	完形	長20.4 幅0.3～0.6 厚0.6			a.多角形状に削り加工
16-16	2c面 池状遺構1最下層	木製 箸	完形	長20.0 幅0.4～0.7 厚0.5			a.やや丸みを帯びる形状に削り加工
16-17	2c面 池状遺構1最下層	木製 箸	完形	長20.4 幅0.4～0.6 厚0.5			a.多角形状に削り加工
16-18	2c面 池状遺構1最下層	木製 箸	完形	長20.2 幅0.4～0.7 厚0.6			a.多角形状に削り加工
16-19	2c面 池状遺構1最下層	木製 箸	末端部欠損	長[18.9] 幅0.3～0.7 厚0.5			a.多角形状に削り加工
16-20	2c面 池状遺構1最下層	木製 箸	末端部欠損	長[19.7] 幅0.3～0.6 厚0.45			a.多角形状に削り加工
16-21	2c面 池状遺構1最下層	木製 箸	先端部欠損	長[20.1] 幅0.6 厚0.6			a.多角形状に削り加工
16-22	2c面 池状遺構1最下層	木製 箸	完形	長20.4 幅0.3～0.6 厚0.6			a.四角形状に削り加工
16-23	2c面 池状遺構1最下層	木製 箸	完形	長20.8 幅0.3～0.7 厚0.6			a.多角形状に削り加工
16-24	2c面 池状遺構1最下層	木製 箸	先端部欠損	長[21.5] 幅0.4～0.7 厚0.5			a.多角形状に削り加工
16-25	2c面 池状遺構1最下層	木製 箸	両端部欠損	長[21.4] 幅0.4～0.8 厚0.5			a.四角形状に削り加工
16-26	2c面 池状遺構1最下層	木製 箸	完形	長21.9 幅0.5 厚0.4			a.四角形状に削り加工
16-27	2c面 池状遺構1最下層	木製 荷札	下端部欠損	長13.7 幅2.0～4.1 厚0.6～0.8			a.表面・周縁部丁寧な面取り、裏面やや粗雑な面取り 上端部両側面からV字の削り
16-28	2c面 池状遺構1最下層	木製 曲物	側板部 上部欠損	幅6.8 高4.6～5.8 厚0.2 孔径0.2			a.側板縦じ合わせ部分の穿孔4つあり f.廃棄状況などにより本来の形状と違い縮小している模様

表4 層位別出土遺物一覧表

種別	出土層位		1面遺構外	2a面遺構	2a面遺構外	2b面遺構	2b面遺構外	2c面遺構	合計
	かわらけ	糸切り							
国産陶磁器	瀬戸				壺3 鉢2 天目2 碗2 皿4		壺2 深皿1 華瓶2 皿1	瓶子1 深皿2 鉢1 碗2	25
	常滑				甕17 壺1	甕5	甕11 壺3	甕13	50
	常滑 片口鉢				I類2 II類3		II類5	II類1	11
	備前							挿鉢1	1
	その他				埴鍋1				1
	瓦		近世平2		丸1 平2		平1	軒平1 平4	11
土製品	火鉢				瓦質1		瓦質2		3
	伊勢				鍋1		鍋1	羽釜1	3
石製品	硯				中国1				1
	その他							球状1	1
金属製品	銅銭							4	4
	その他				不明銅製品1			鍋弦1	2
木製品	漆器							椀7 皿1	8
	加工木製品							箸86 菜箸1 曲物1 折敷2 播粉木1 草履芯6 荷札1 箱1 型板? 1 円板1 トンボ1 建具2 不明10	114
自然遺物	骨						鳥3	獣12	15
	その他						緑泥片岩1	松2 炭化米3	6
合計		5	1	65	6	64	229	370	



▲1. 調査地点遠景（南西から）



▲2. 調査地点近景（東から）



1. 1面全景 (南から) ▶



◀ 2. 2a面全景 (南から)



3. 2a面泥岩版築範囲 (東から) ▶



▲1. 2a面遺構外出土硯(西から)

▼2. 2a面遺構外出土銅製品(南から)



▲3. 2b面全景(北から)



◀ 1. 2c面全景 (北から)



2. 2c面全景 (南から) ▶



▲ 3. 2c面池状遺構 (西から)



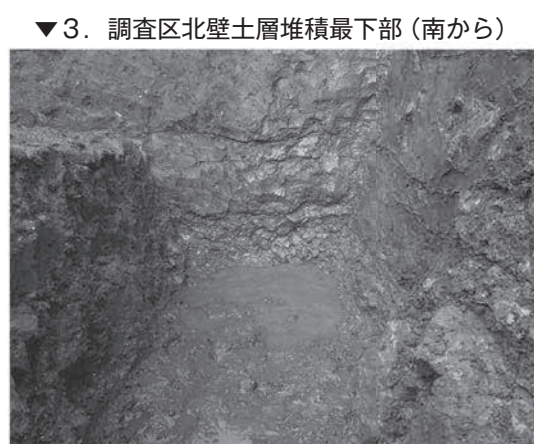
▲ 4. 池状遺構 1 覆土中出土
瀬戸碗 (西から)



▲1. 2面下トレンチ (北から)



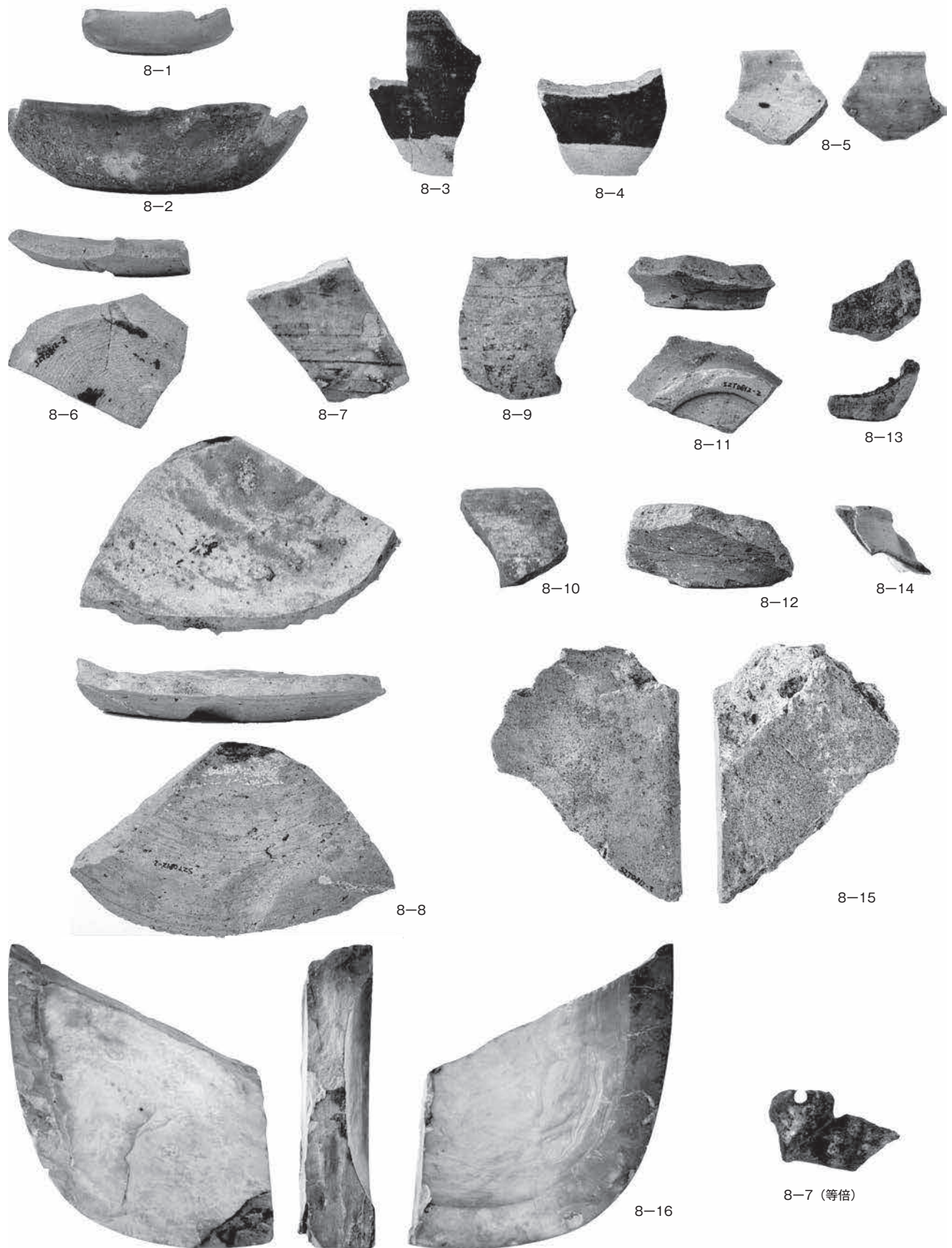
▼2. 調査区北壁土層堆積 (南から)



▼3. 調査区北壁土層堆積最下部 (南から)



◀4. 調査区東壁
土層堆積 (西から)



▲2a面遺構外

出土遺物(1)

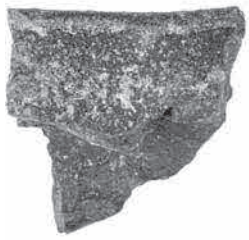


▲2b面遺構外

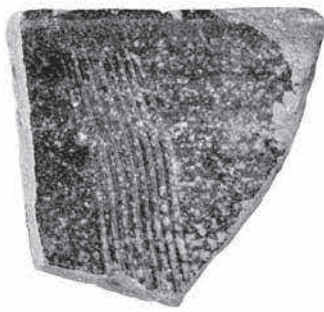
▼2c面池状遺構 1 覆土中



出土遺物(2)



13-8



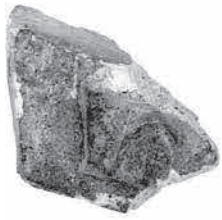
13-9



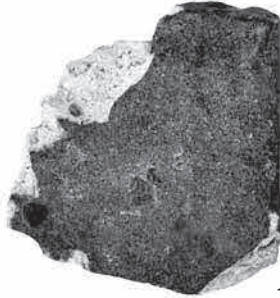
13-12



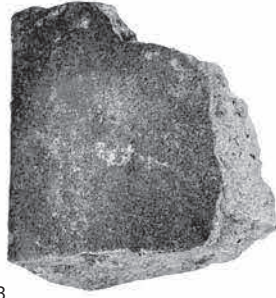
13-10



13-11



13-13



13-14



13-15



13-16



13-17



14-1



13-18



13-19

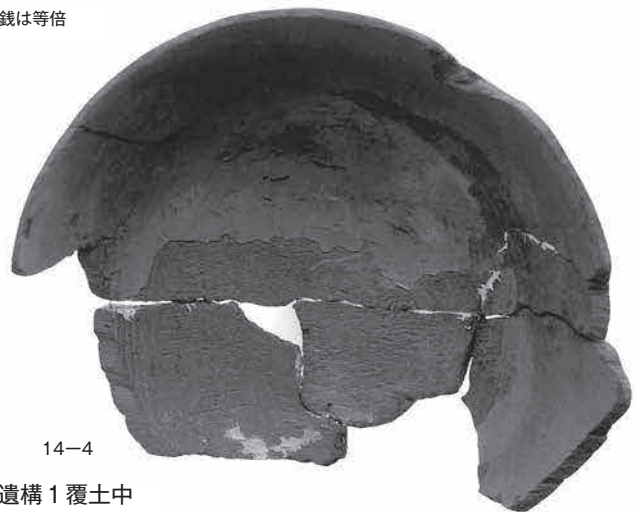


14-2

*銭は等倍



14-3



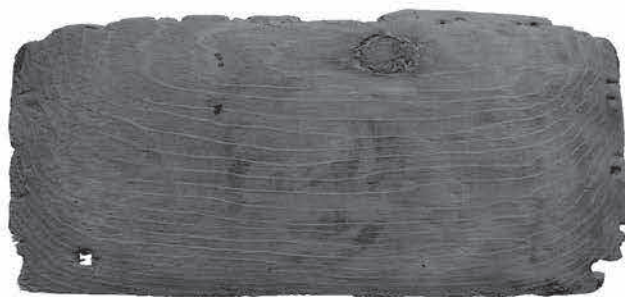
14-4

▲2c面池状遺構1覆土中

出土遺物(3)



14-5



14-6



14-7



14-8



14-9



14-10



14-11



14-13



14-14



14-15



14-7



14-8

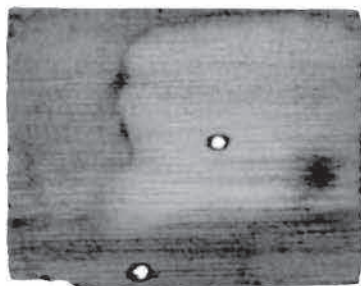


14-9



14-20

▲2c面池状遺構1覆土中
出土遺物(4)



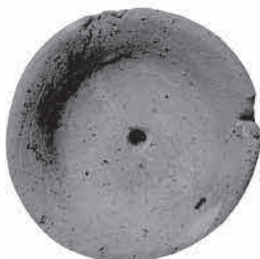
14-21



14-22



14-23



15-1



15-2



15-4



15-6



15-3



15-5



15-7



15-8



15-9

▲2c面池状遺構 1 覆土中

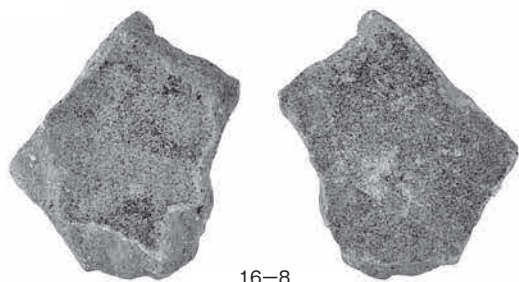
▼2c面池状遺構 1 最下層



16-1



16-6



16-8



16-2



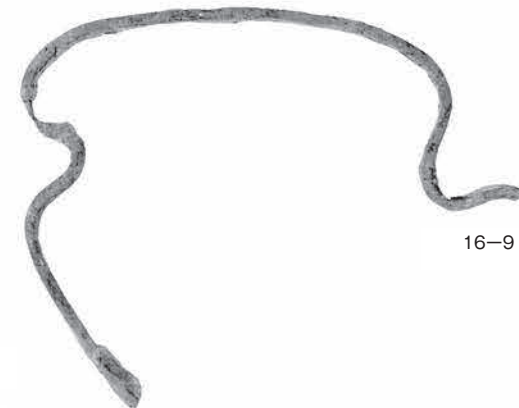
16-7



16-3

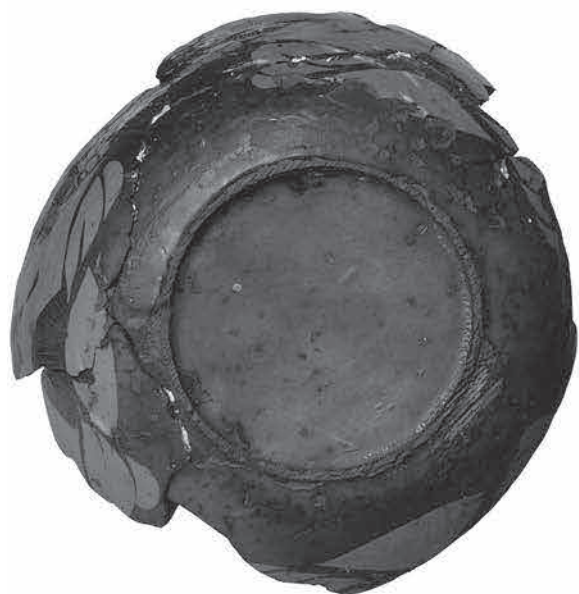


16-4



16-9

出土遺物 (5)



16-9



16-10



16-27



16-28



16-11



16-12



16-13



16-14



16-15



16-16



16-17



16-18



16-19



16-20



16-21



16-22



16-23



16-24

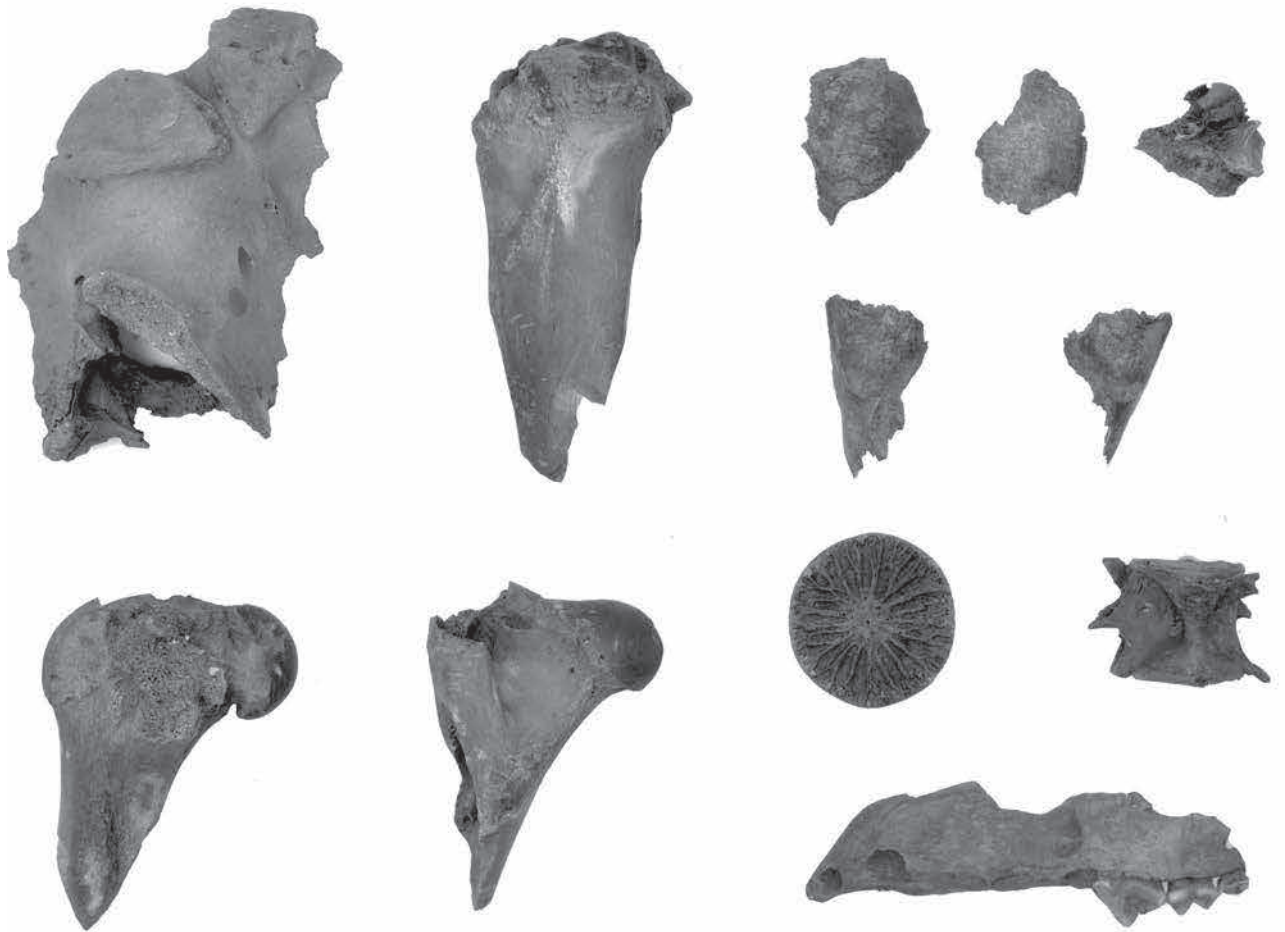


16-25



16-26

▲2c面池状遺構1最下層
出土遺物(6)



▲獸骨



▲鳥骨

▲松

▲炭化米

出土遺物(7)

米町遺跡 (No. 245)

大町二丁目 993 番 1 外地点

例 言

1. 本報は、「米町遺跡 (No.245)」内、大町二丁目 933 番 1 外における、埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は平成 20 (2008) 年 10 月 22 日～同年 11 月 10 日にかけて行い、調査面積は約 16.5㎡である。
3. 発掘調査体制は以下のとおりである。
調査担当者：山口 正紀 (鎌倉市文化財課臨時的任用職員)
調 査 員：須佐直子・須佐仁和 (鎌倉市文化財課臨時的任用職員)
作 業 員：片山直文・佐野吉男・杉浦永章 (社団法人鎌倉市シルバー人材センター)
4. 現地での写真撮影は須佐 (仁)・山口が行った。
5. 本報作成にあたっての資料整理参加者及び分担は以下のとおりである。
整理参加者：山口・須佐 (仁)
遺物洗浄・注記・接合・分類・実測・図版作成：山口
遺構トレース・図版作成：山口 観察表・写真図版作成：山口 遺物写真撮影：須佐 (仁)
原稿執筆：山口
6. 本報告に係わる出土品及び記録図面・写真等の資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。
7. 本調査にかかる出土遺物の注記は、「KM0817」と略して記した。
8. 本報の凡例は以下のとおりである。
各図における基本縮尺は、以下のとおりである。同時に、各図に縮尺を表記している。
挿図縮尺 全測図：1/60 遺構図：1/40 遺物図：1/ 3
遺構図版 水糸高は標高値を示す。
遺物図版 釉薬の範囲は・ - ・ - ・、加工・使用痕は←・→で範囲を示す。また、遺物にみられる煤痕は黒く塗りつぶし表現している。
遺物観察表 () は復元数値、[] は遺存数値を示す。
9. 本報中の「泥岩」は凝灰質泥岩、「鎌倉石」は粗粒凝灰岩を示す。
10. 整理段階において、遺物の分類及び編年は以下の論文を参考にした。
瀬戸：藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院
常滑：愛知県 2012『愛知県史別編窯業 3 中世・近世常滑系』
11. 現地調査から本報作成に至るまで、以下の諸氏、諸機関に御教示・ご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。(順不同、敬称略)
伊丹まどか、汐見一夫、原 廣志、福田 誠、社団法人鎌倉市シルバー人材センター

目 次

本 文 目 次

第一章	遺跡の位置と環境	375
	1. 遺跡の位置	
	2. 地理的・歴史的環境	
	3. 周辺遺跡の調査成果	
第二章	調査の概要	381
	1. 調査の経緯と経過	
	2. 調査における測量	
	3. 堆積土層の観察	
第三章	検出遺構と出土遺物	384
	1. 1面の遺構と遺物	
	2. 2面の遺構と遺物	
第四章	まとめ	393

挿 図 目 次

図1 調査地点周辺遺跡..... 375	図9 1面遺構外出土遺物..... 387
図2 調査区と建築範囲..... 381	図10 2面全測図
図3 国土座標位置図..... 382	図11 2面方竪1
図4 国土座標とグリッド配置図..... 383	図12 2面方竪2
図5 調査区壁土層堆積図..... 384	図13 2面方竪1・2出土遺物
図6 1面全測図..... 385	図14 2面土坑
図7 1面溝・土坑・柱穴..... 385	図15 2面各土坑出土遺物
図8 1面各遺構出土遺物..... 386	図16 2面遺構外出土遺物

表 目 次

表1 遺物観察表(1)	表3 層位別出土遺物一覧表.....
395	397
表2 遺物観察表(2)	
396	

図版目次

図版1	398	図版5	402
1. 1面全景(東から)		1. 調査区南壁土層堆積(北から)	
2. 1面全景(西から)		2. 調査区西壁土層堆積(東から)	
3. 1面溝1(南から)		図版6	403
図版2	399	出土遺物(1)	
1. 2面全景(東から)		図版7	404
2. 2面全景(西から)		出土遺物(2)	
図版3	400	図版8	405
1. 方竪1(西から)		出土遺物(3)	
2. 方竪1南北ベルト土層堆積(西から)		図版9	406
3. 方竪2(南から)		出土遺物(4)	
図版4	401		
1. 土坑3・4・6・7(北から)			
2. 土坑3・6土層堆積(南から)			
3. 土坑4土層堆積(南から)			
4. 土坑7出土瀬戸水滴(北から)			

第一章 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置

神奈川県遺跡台帳に登録される米町遺跡 (No.245) は、名越地区から長谷地区を横断する県道鎌倉葉山線と若宮大路が交差する下馬四つ角の東側、現在の鎌倉市大町二丁目に所在する (図1)。米町遺跡周辺には北東に名越ヶ谷遺跡 (No.231)、西には下馬周辺遺跡 (No.200)、南に材木座町屋遺跡 (No.261) などがあり、比較的大きな範囲の遺跡に接している。当遺跡は県道鎌倉葉山線から南、J R横須賀線線路から北側、東西700 m、南北200 mと細長く、名越ヶ谷から南下する逆川が西方向に流路を変え、再び南下する手前までを含める微地形を範囲とされている。調査地点はその北西隅、大町二丁目993番1外に所在する。

2. 地理的・歴史的環境

遺跡範囲の北限とする県道鎌倉・葉山線は、源頼朝入府以前には稲村ヶ崎から三浦半島に入る古東海道筋の一つで、鎌倉時代には商工業の中心地、「大町」であったことに由来し、大町大路ないしは町大路といわれた鎌倉の東西を結ぶ主要な交通路であったと想定されている。

遺跡内を東から西に向かって流れる逆川は、名越ヶ谷内の黄金やぐら付近を源流とし、谷戸内を流れてきた河川は横須賀線線路の北約50 m辺りでほぼ直角に折れ曲がり、西方向に流路を変える不自然な

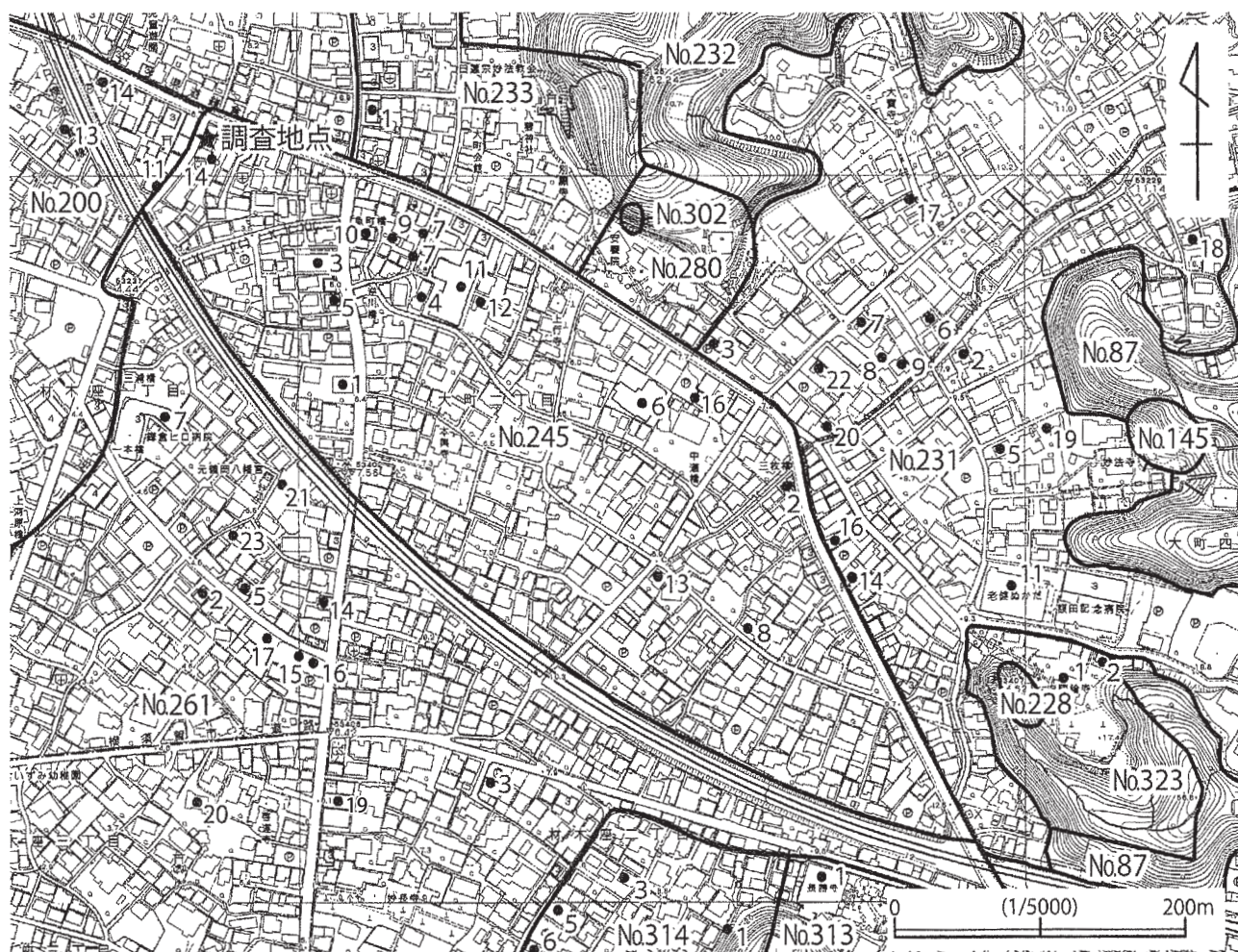


図1 調査地点周辺遺跡

流れをもつ。折れ曲がった先は、やや北西方向に下り、逆川橋辺りを境に70 m程北上し、遺跡範囲西端まで緩やかに南下していくが、これが自然的ないしは人為的によるものかは今後の遺跡地内の多くの発掘成果が必要になるであろう。

現在の町名である「大町」は、『吾妻鏡』建暦三(1213)年五月二日条に「中下馬橋給、又於米町辻大町大路等之所處合戦、」と和田合戦の記録にみられるのが名称の初見であり、この頃から大町の名称が成り立っていた。そのほか、承久二(1220)年二月十六日条に「大町以南焼亡」、十日後の二十六日条にも「大町上失火」と火災の記事の記録もある。『新編相模国風土記稿』では「鎌倉繁栄の頃は、此辺悉買区」と商業地域の一つであったとしており、小町大路の夷堂橋を境として、以北を小町、以南を大町と称したという。また、大町という呼称は、小町より町の規模が大ききという由来で大町と呼ばれたとされる。

遺跡名に使用されている「米町」については、『吾妻鏡』仁治二(1241)年十二月二十七日条に、「通若宮大路東頼米町前、向由比浦方義秀者、」とあり、朝夷奈三郎義秀が米町前を通り、海岸のほうに向かったとする記述がある。さらに明応年間(1492～1501)に成立したとされる「善宝寺寺地図」(津久井光明寺蔵)には遺跡よりやや西寄りの若宮大路と大町大路が交わる東北の家並に「米町」の注が描かれている。また、『吾妻鏡』建長三(1251)年十二月三日条の「奉行之〈云云〉鎌倉中小町屋之事、被定置處々△大町△△小町△△米町△△龜谷辻△和賀江△大倉辻△乗飛和坂山上」と文永二(1265)年三月五日条「△町御免所之事、一所、大町△一所、小町△一所、魚町△△一所、穀町一所、武藏大路下一所、須地賀江橋△一所、大倉辻」とあり、鎌倉時代に商業地区として指定する二度の法令の中に含まれている。後者の「穀町」という名称は『鎌倉事典』(東京堂出版1991)などでは、「米町」と同名の見解を示している。このように大町・米町共に範囲や位置の特定は明らかではないが、鎌倉時代から商業地域として成立していることがわかる。

遺跡内及び周辺にはいくつかの社寺・仏閣がみられる。遺跡地中央部北側には正和二(1313)年建立と伝えられる日蓮宗上行寺がある。山号は法久山、開山は日範上人で、本堂は明治19(1886)年、名越松葉ヶ谷にある妙法寺の法草堂を移築したものといわれる。県道を挟んだ上行寺の向かいには稻荷山別願寺がある。開山、覚阿上人により弘安五(1282)年に創建され、もとは真言宗能成寺から時宗に帰依し、寺号を変えた寺である。寺域内には鎌倉市指定有形文化財になっている足利持氏の廟所とされる「永享11(1439)年」の刻銘をもつ石塔がある。別願時東には開基願行房憲静、開山北条政子とする浄土宗安養院がある。源頼朝の菩提を弔うため、長谷笹目ヶ谷にある長楽寺を嘉禄元(1225)年に創建した。長楽寺は律宗、山号を祇園山と号し、開基は願行である。元弘元(1333)年、新田義貞らの鎌倉攻めの際に焼失し、現在の安養院の地にあった善導寺に統合され、北条政子の法号と合わせて安養院長楽寺と号された。また、調査地点から南200 mほどの位置には、源頼義が康平6(1063)年に京都の石清水八幡宮を勧請した、由比若宮(元八幡)がある。

3. 周辺遺跡の調査成果

これまでの米町遺跡(No.245)内における発掘調査において、本調査地点は15地点目になる。逆川橋周辺での調査が集中しており、11地点では12世紀末～15世紀前半の4期に亘る遺構群が検出され、13世紀中頃には部屋割りがみられる板壁建物群が検出されている。2・3期には木組み側溝をもつ東西方向の道路遺構が確認され、北西に位置する7地点でも同構造の道路面が検出されている。6地点では13世紀前半～14世紀中頃の方形竪穴建物や大型井戸など多数の遺構が検出されており、中世期の土地区画とは異なる7世紀中～後半代の溝が5条確認されている。東部に位置する13地点では、6期の遺

構変遷が確認され、鎌倉時代初期～末期の5期に亘る東西溝が検出されている。13世紀第2四半期頃には橋脚とみられる大型角柱が残存しており、「車大路」の側溝である可能性を示唆している。また、8世紀後半ごろの相模型坏などを含む律令期の遺物も出土している。本調査地点南に隣接する14地点では、13世紀後半～14世紀初頭にかけての方形竪穴建物を中心とした遺構群が検出されている。

北東部に位置する名越ヶ谷遺跡(No.231)内、谷戸開口部の調査が集中しており、6地点では13世紀前半期に逆川旧流路の西側護岸施設が3回以上組み直しされている。また、9地点には6地点でみられた流路の延長が確認された。西隣に位置する8地点では掘立柱建物2棟と井戸、多数の柱穴が検出されていることから、逆川西側に立地する武家屋敷あるいは寺院の一角と推測されている。県道沿いの3地点では、大町大路と同軸の掘立柱建物とそれに沿うL字形の泥岩版築通路などを含む、13世紀初頭～15世紀代の5時期の生活面が検出されている。

西部に広がる下馬周辺遺跡(No.200)内の12地点では、14世紀中頃～15世紀前半の3時期に亘る遺構群が確認された。東西・南北の直交する地割溝や方形竪穴建物などが検出され、その遺構群の軸線方向が東側を南北に通る現在の道路とほぼ平行していることから、当時の地割に影響を与えていた可能性を示唆している。西方向の横須賀線線路西脇に位置する13地点では、13世紀中～末頃の鎌倉石切石を用いた方形竪穴建物や井戸、土坑が検出されている。14地点では、すぐ北の東西に走る大町大路に直交するであろう道路と木組み溝が13世紀第2四半期頃に検出されているが、土地利用としては不明瞭である。

本遺跡南西部に位置する広大な範囲をもつ材木座町屋遺跡(No.261)においては、本遺跡に近い場所として北部のみ概観しておく。7地点では8世紀頃の大型掘立柱建物と13世紀前半から始まる道路、溝、方形土坑などの中世遺構群が確認されている。2地点は土坑、井戸、溝などが確認され、13世紀前半～14世紀の年代が考えられている。5地点でも14世紀代を中心とする遺構が検出されており、両地点とも中世基盤層が海拔3.5m前後を測る。14地点では15世紀代のかかわりがまとまって廃棄された土坑が検出されており、15地点でも同時期のかかわりが出土している。15～17地点とも13世紀初め頃からの遺構群が確認されている。

<引用・参考文献>

- 鎌倉市史編集委員会 1959『鎌倉市史 社寺編』吉川弘文館
河野真知郎 1995『中世都市鎌倉一遺跡が語る武士の都一』講談社メチエ49
白石永二編 1976『鎌倉事典』東京堂出版
貫達人・川副武胤 1980『鎌倉廃寺事典』有隣堂
三浦勝男編 2005『鎌倉の地名由来辞典』東京堂出版社

<調査地点一覧>

図1には神奈川県遺跡台帳に登録されている遺跡名称を番号のみ表記した。対応する名称は末尾に記す。調査地点番号は、その遺跡内における調査年月の古い順から番号を付してある。そのため図の範囲外にある地点番号がない場合や同一番号が重複している。また、発掘調査を対象としているため、確認(試掘)調査を含めていないことを前提とした。

下馬周辺遺跡(No.200)

11：2003年10月調査。森孝子 2006「下馬周辺遺跡(No.200)大町二丁目975番6地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報

告書22 平成17年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会

13: 2004年5月調査。福田誠 2008「下馬周辺遺跡(No.200) 材木座一丁目1002番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書24 平成19年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会

14: 2005年2月調査。馬淵和雄・松原康子・根本志保 2011「下馬周辺遺跡(No.200) 大町二丁目1001番4地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書27 平成22年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会

小町大路東遺跡(No.233)

1: 1980年4月調査。未報告。原廣志 1980「清興建設本社ビル建設予定地の調査」『鎌倉考古No.2』鎌倉考古学研究所 一大町一丁目1181番地点

名越ヶ谷遺跡(No.231)

- 2: 1993年5月調査。田代郁夫・大坪聖子 1995「1. 名越ヶ谷遺跡 大町四丁目1880番6外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11 平成6年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会
- 3: 1993年7月調査。菊川英政 1995「4. 名越ヶ谷遺跡(No.231) 大町三丁目1217番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11 平成6年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会
- 5: 1998年12月調査。汐見一夫ほか 2000「名越ヶ谷遺跡(No.231) 大町四丁目1888番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16 平成11年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会
- 6: 2000年8月調査。手塚直樹・野本賢二 2002「名越ヶ谷遺跡(No.231) 大町三丁目1826番9地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18 平成13年度発掘調査報告(第2分冊)』
- 7: 2000年8月調査。宮田眞 諸星真澄 滝澤晶子 2001『名越ヶ谷遺跡発掘調査報告書』名越ヶ谷遺跡発掘調査団・宮田事務所 一大町三丁目2356番3地点
- 8: 2001年1月調査。宮田眞 2003「5. 名越ヶ谷遺跡 大町三丁目2356-11地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19 平成14年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会
- 9: 2001年4月調査。福田誠 2003「9. 名越ヶ谷遺跡 大町三丁目2356番10地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19 平成14年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会
- 11: 2001年11月調査。宮田眞 2003「(医療法人財団額田記念会 老健ぬかだ 建設に伴う発掘調査)」『名越ヶ谷遺跡発掘調査報告書』名越ヶ谷遺跡発掘調査団・有限会社博通 一大町四丁目1901他16筆地点
- 14: 2003年2月調査。滝沢昌子 2006「04. 名越ヶ谷遺跡 大町四丁目2395番2の一部外1筆」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書22 平成17年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会
- 16: 2005年7月調査。未報告 一大町四丁目2406番1地点
- 17: 2006年1月調査。未報告 一大町三丁目1230番4外地点
- 18: 2006年5月調査。未報告 一大町四丁目1858番4地点
- 19: 2007年6月調査。山口正紀 2012「名越ヶ谷遺跡(No.231) 大町四丁目1880番の一部」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書28 平成23年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会
- 20: 2007年12月調査。未報告 一大町三丁目2353番2外地点
- 22: 2010年5月調査。未報告 一大町六丁目1708番23外地点

米町遺跡(No.245)

- 1: 1988年3月調査。未報告 一大町二丁目929番
- 2: 1988年7月調査。福田誠 1989「1. 米町遺跡 大町二丁目2411番2地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書5 昭和63年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会
- 3: 1988年7月調査。原廣志・田代郁夫 1990「4. 米町遺跡 大町二丁目933番他」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書6 平成元年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会
- 4: 1993年7月調査。馬淵和雄 1995「3. 米町遺跡(No.131) 大町二丁目2315番外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11 平成6年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会
- 5: 1996年3月調査。田代郁夫・宗臺富貴子 1998「米町遺跡(No.245) 大町二丁目391番1」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書22 平成17年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会

- 急調査報告書14 平成9年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会
- 6：1997年11月調査。宮田眞・滝沢晶子・諸星真澄 1999「米町遺跡発掘調査報告書 鎌倉市大町二丁目2338番1」
米町遺跡発掘調査団・宮田事務所
- 7：1998年12月調査。齋木秀雄・降矢順子 2000「鎌倉遺跡調査会調査報告第20集 米町遺跡―第6地点、第7地点発掘調査報告書―」鎌倉市米町遺跡発掘調査団・鎌倉遺跡調査会 一大町二丁目2312番4・10他地点
- 8：1999年4月調査。福田誠 2000「米町遺跡(No.245) 大町二丁目2404番の一部地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16 平成11年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会
- 9：1999年9月調査。瀬田哲夫 2001「米町遺跡(No.245) 大町二丁目2313番15地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17平成12年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会
- 10：1999年12月調査。瀬田哲夫 2001「米町遺跡(No.245) 大町二丁目2308番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17平成12年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会
- 11：2001年1月調査。齋木秀雄・降矢順子 2005「米町遺跡発掘調査報告書―第10地点―」有限会社 鎌倉遺跡調査会 一大町二丁目2320番1地点
- 12：2001年8月調査。馬淵和雄・鍛冶屋勝二 2004「米町遺跡(No.245) 大町二丁目2324番1外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20 平成15年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会
- 13：2003年8月調査。馬淵和雄・鍛冶屋勝二ほか 2008「米町遺跡(No.245) 大町二丁目2235番3地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書24 平成19年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会
- 14：2003年12月調査。森孝子・滝澤晶子 2006「米町遺跡(No.245) 大町二丁目992番7外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書22 平成17年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会
- 15：本調査地点
- 16：2009年6月調査。未報告 一大町二丁目2311番5

材木座町屋遺跡(No.261)

- 2：1990年1月調査。木村美代治・田代郁夫 1991「7. 材木座町屋遺跡(No.261) 鎌倉市材木座一丁目144番3」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7 平成2年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会
- 6：2000年1月調査。大河内勉・伊丹まどか・押木弘巳 2001「材木座町屋遺跡(No.261) 材木座六丁目760番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17 平成12年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会
- 13：2004年5月調査。齋木秀雄・瀬田哲夫 2008「材木座町屋遺跡発掘調査報告書―鎌倉市材木座三丁目62番19―」有限会社 鎌倉遺跡調査会
- 14：2004年6月調査。齋木秀雄・降矢順子 2007「材木座町屋遺跡(No.261) 材木座一丁目921番5外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23 平成18年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会
- 15：2004年11月調査。齋木秀雄・降矢順子 2008「材木座町屋遺跡(No.261) 材木座一丁目889番4地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書24 平成19年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会
- 16：2004年12月調査。齋木秀雄・降矢順子 2008「材木座町屋遺跡(No.261) 材木座一丁目889番5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書24 平成19年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会
- 17：2005年8月調査。齋木秀雄・降矢順子 2008「材木座町屋遺跡(No.261) 材木座一丁目149番4地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書24 平成19年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会
- 18：2004年12月調査。齋木秀雄・降矢順子 2008「材木座町屋遺跡(No.261) 材木座一丁目889番5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書24 平成19年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会
- 19：2007年2月調査。未報告 一材木座二丁目208番1
- 20：2007年12月調査。未報告 一材木座三丁目164番外
- 21：2008年6月調査。未報告 一材木座一丁目919番19
- 23：2008年7月調査。未報告 一材木座一丁目893番9

長勝寺遺跡(No.313)

- 1：1976年8月調査。大三輪龍彦・齋木秀雄ほか 1978『長勝寺遺跡 中世鎌倉の民衆生活を探る』長勝寺遺跡発掘調査団 一材木座二丁目2162番2地点

能蔵寺跡 (No.314)

- 1 : 1971年11月調査。松尾宣方 1983「2. 来迎寺北遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報 I』鎌倉市教育委員会
一材木座二丁目303番地点
- 3 : 2001年1月調査。伊丹まどか・川又隆央 2003「能蔵寺跡 (No.314) 材木座二丁目297番地1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19 平成14年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会
- 5 : 2004年7月調査。齋木秀雄・降矢順子 2007「能蔵寺跡 (No.314) 材木座二丁目294番3外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23 平成18年度発掘調査報告 (第2分冊)』鎌倉市教育委員会
- 6 : 2006年8月調査。未報告 一材木座二丁目293番2

安国論寺 (No.323)

- 1 : 1973年3月調査。松尾宣方 1983「45. 安国論寺境内 大町四丁目1947番」『鎌倉市埋蔵文化財調査年報 I』鎌倉市教育委員会
- 2 : 2012年調査。未報告

遺跡No.	遺跡名称	遺跡No.	遺跡名称	遺跡No.	遺跡名称
87	鎌倉城	228	安国論寺やぐら	280	善導寺跡
145	妙法寺裏山やぐら群	232	妙本寺遺跡	302	別願寺裏やぐら

第二章 調査の概要

1. 調査の経緯と経過

本発掘調査は、個人専用住宅建設に伴う事前の記録保存を目的として鎌倉市教育委員会が実施した。建設計画では、地表下130cmまでの深基礎工事を行うものであり、平成20年6月10日、建設予定範囲内6㎡を対象として鎌倉市教育委員会による確認（試掘）調査が実施され、現地地表下65m以下より中世遺物を含む堆積層を確認した。

調査結果をもとに建築主との協議において本格的な発掘調査を行う必要があると判断され、文化財保護法第57条の2の届出手続きを行い、施工者との工程調整に続き、平成20年10月22日から現地での発掘調査を開始した。敷地面積約102㎡のうち、北半分が発掘調査対象であり、南半分を掘削残土の集積場として利用し、鎌倉市教育委員会文化財課の判断で隣地境界線から安全距離をとり、建築範囲の中央部分16.5㎡を調査区に設定した（図2）。

確認調査結果をもとに、10月22日に重機による表土掘削を行い、中世遺構面を確認したのち、人力による作業で調査を進行した。その結果、地表から深さ120mまでの間に2時期の中世遺構面を確認し、方形竪穴建物・土坑・柱穴を検出後、測量・写真撮影などの記録保存を行った。掘削深度規制が地表下130cmまでの調査であったが、2面遺構検出時において、計画深度より深くなってしまうことから、各関係者の了承を得て、広範囲で深度を超える場合を除いて確認できる範囲の遺構は検出した。現地終了時には遺物天箱2箱分の遺物が出土した。

以下、作業経過を抜粋する。

10月22日（水） 現地調査開始。重機による表土掘削。

10月23日（木） 機材搬入。

10月28日（火） 調査区周囲に測量用のグリッドを設定。鎌倉市3級基準点及び4級基準点より標高値と国土座標値を測量杭に移動。1面全景写真撮影。全測図実測。

11月4日（火） 2面全景・個別写真撮影。全測図実測。

11月6日（木） 調査区南・西壁写真撮影および土層堆積図実測。

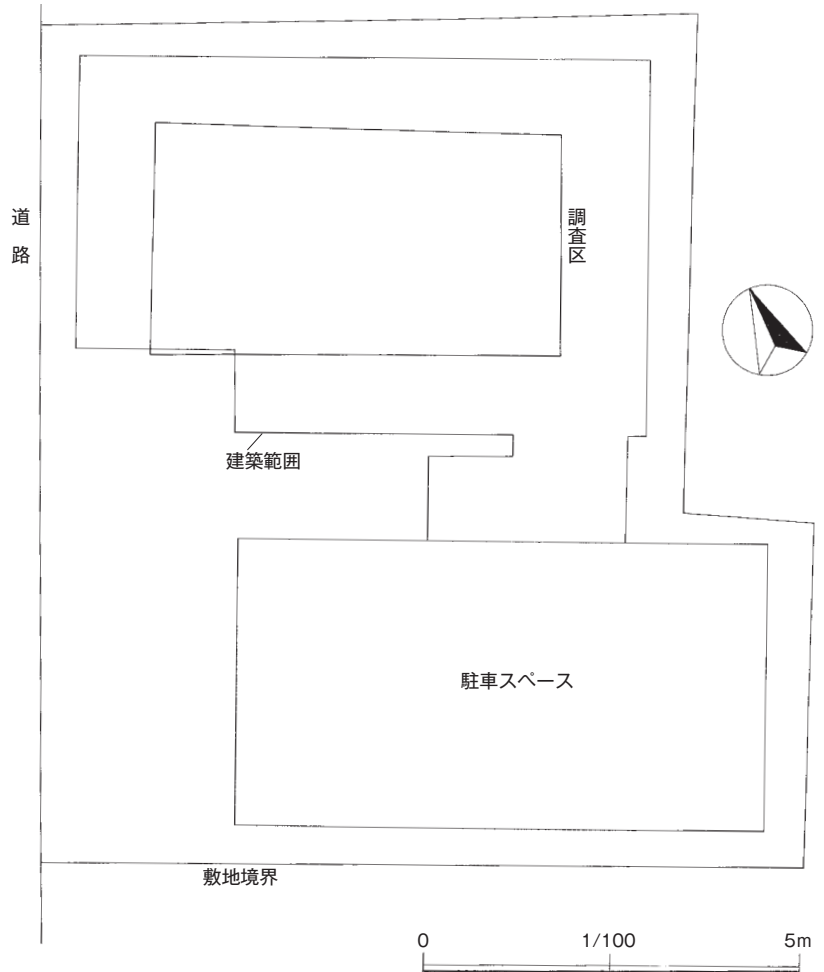


図2 調査区と建築範囲

11月10日(月) 現地調査終了。機材撤収。

2. 調査における測量

現地調査の測量は便宜上、調査区にほぼ平行した任意の方眼軸を設けたため、国土座標上の方眼軸とは不一致である。測量軸の設定には先行して調査区中央を東西に分断するよう B-1 杭と任意点 A 点を予め設定し、図 3 に示したように、調査地北側の小道上と県道鎌倉葉山線との T 字路角に設置してある鎌倉市 4 級基準点 U087 と U088 を用いて、調査測量基準点にあたる B-1 杭と A 点に国土座標上の数値を移動した。測量軸は 2 m 方眼による軸線を用い、南北軸線には北からアルファベット A~C、東西軸線には西から算用数字の 1~4 を付してグリッド設定を行った。調査地南北軸線は真北から $N - 23^{\circ} 14' 05'' - E$ の傾きを測る。

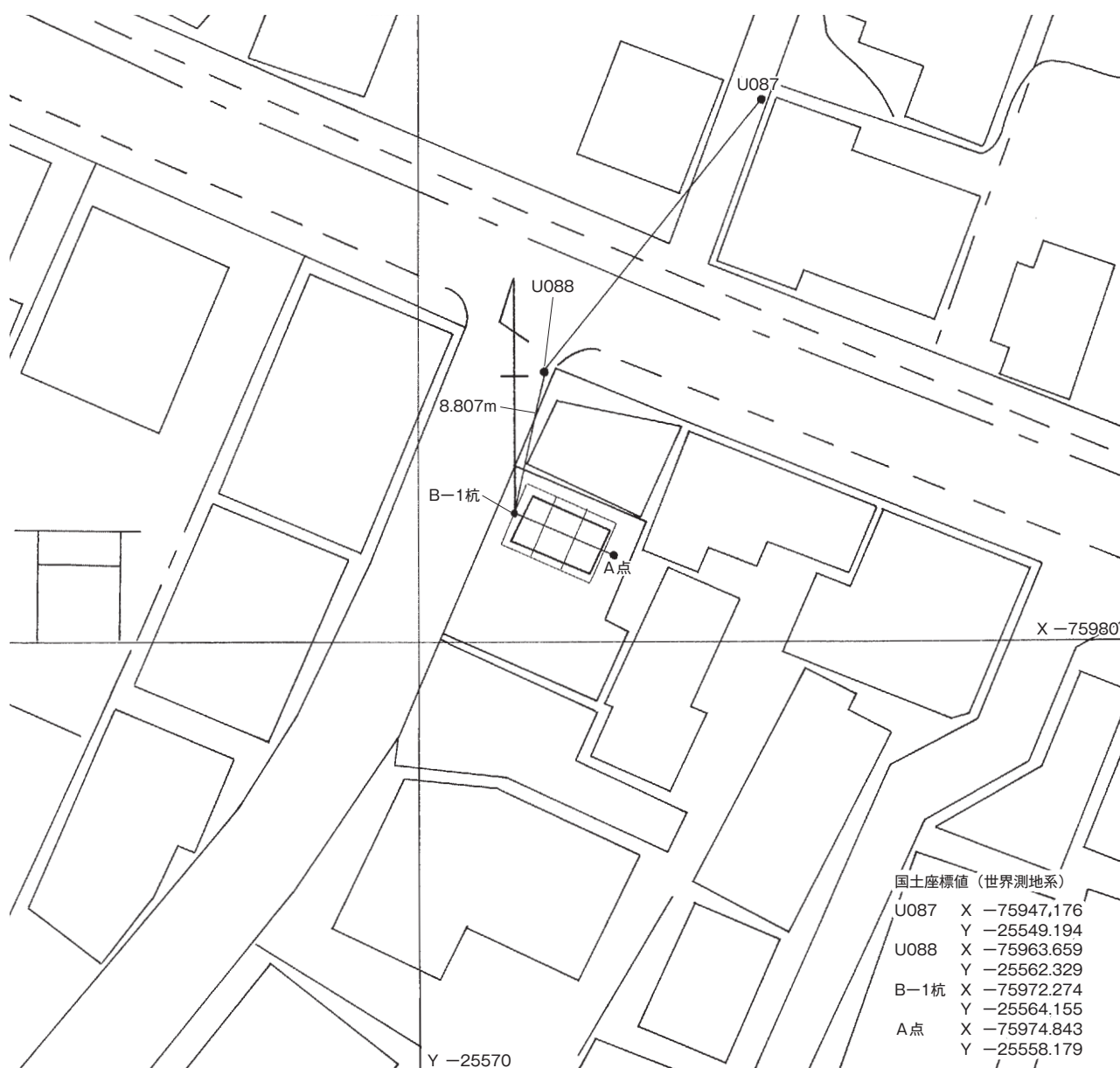


図3 国土座標位置図

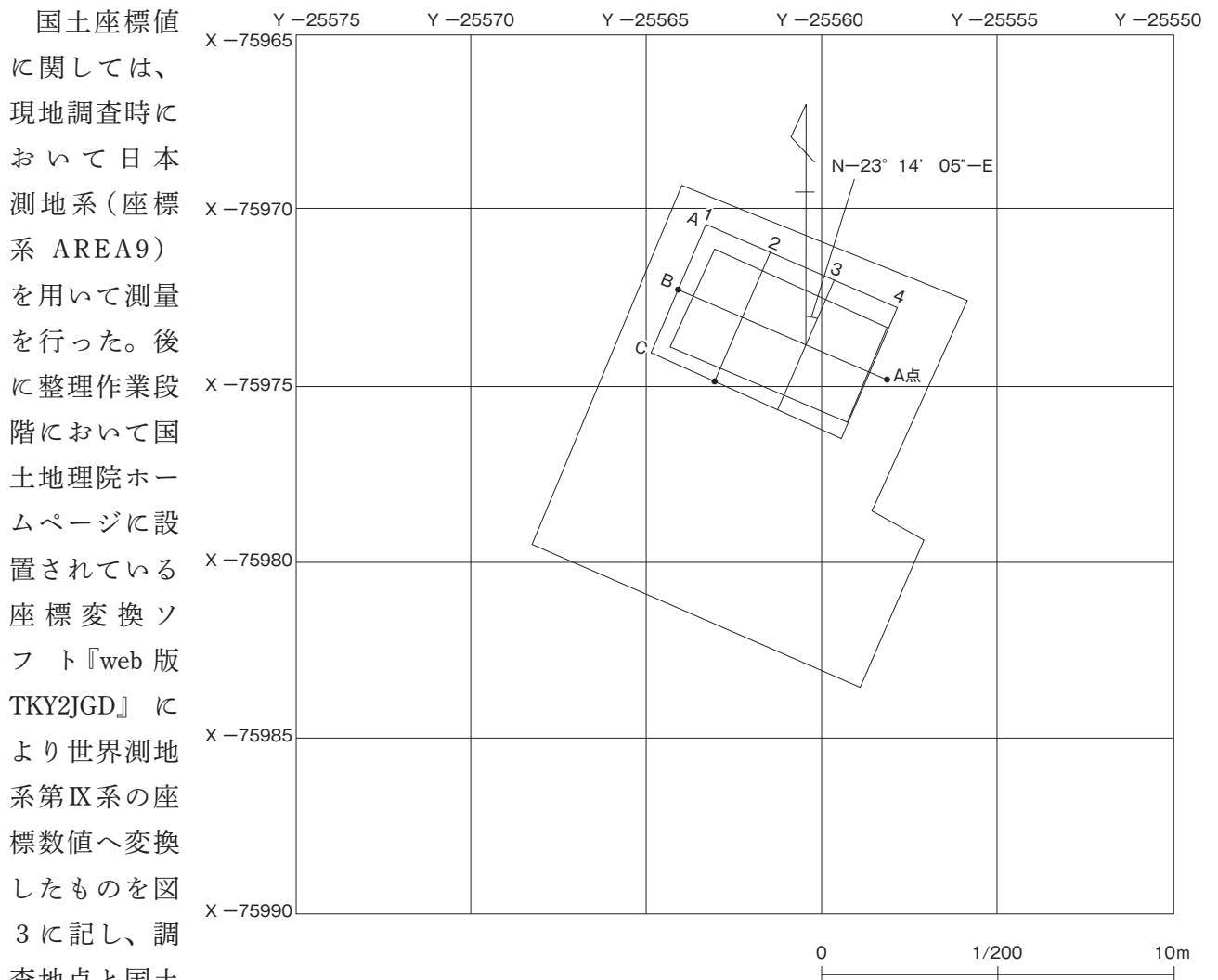


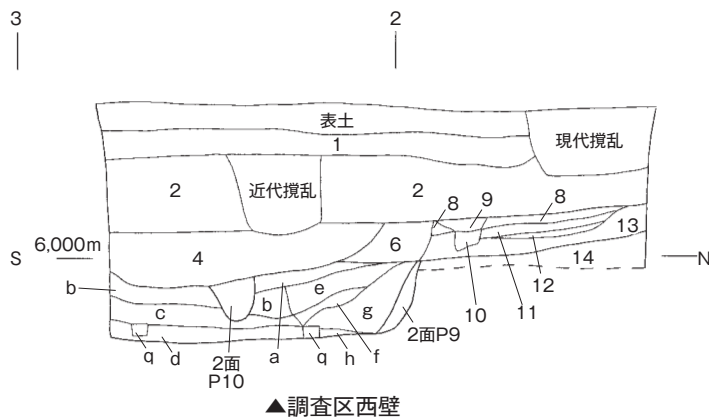
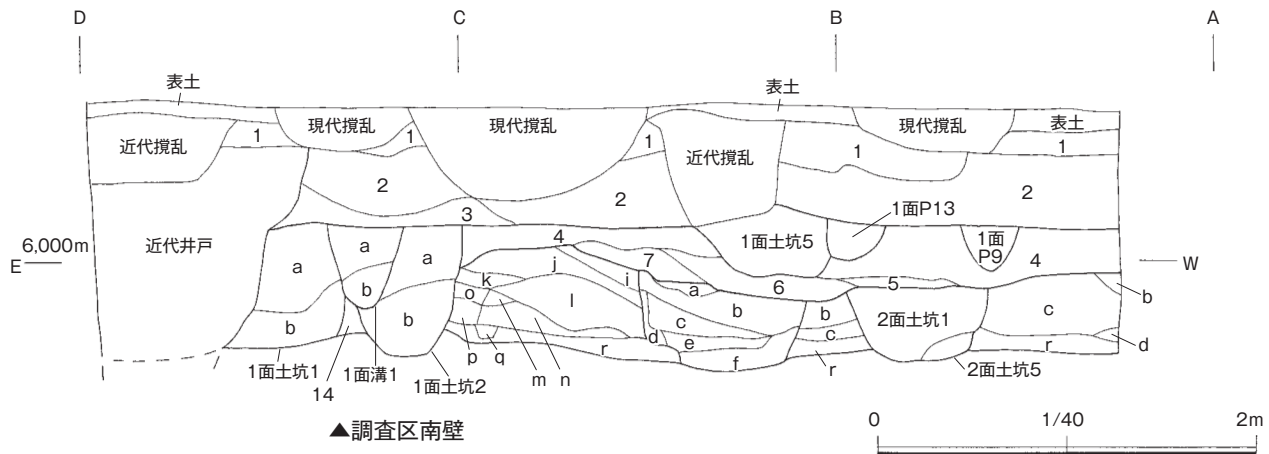
図4 国土座標とグリッド配置図

標高値は、調査地点より南に130mほどの位置にある鎌倉市三級基準点No.53231（標高4.47m）を基に移設した。なお、提示した地図は鎌倉市が所有する都市基本計画図（2004年発行）を使用している。

3. 堆積土層の観察

土層の観察は調査区南壁と西壁を中心に行った（図5）。調査区内で観られた堆積層は主に遺構の覆土が大半を占めていた。現地表は標高6.8mを測り、近・現代の客土層が10cmほど薄く堆積していた。標高6.7mから近代瓦や明治期の染付碗を含む1層が平坦に拡がり、建物の基礎やゴミ捨て坑、井戸などの掘り込みを多数検出した。2層と3層は暗褐色弱粘質土の中世遺物包含層である。4層は地表下60cm、標高6.2mの位置に堆積する黄褐色砂を多く混じる暗褐色砂質土、厚さ10～30cmで東から西に向かい厚く堆積している。西側には茶褐色砂質土の5層が一部堆積しており、調査区南西部に堆積していた。ほかに6・7層が薄く4層直下にあり、いずれも1面を構成する堆積層になっている。

2面の遺構の掘り込みは14層とした縄文海進海退期に形成された砂層で中世基盤層にあたる灰白色砂層から確認した。調査区南部は遺構により削平され、残存しているところで標高6.1～5.9mを測り、北から南に向かって緩やかに傾斜している。途中、部分的にだが8・11～13層の堆積を確認したが、遺構の掘り込み等は確認できなかったため、ここでは2面から1面に至るまでの堆積層と考えている。



遺構土層記

- 1面溝1
 - a. 暗褐色弱粘質土：泥岩粒・炭化物少量、かわらけ片粒微量、明茶褐色砂多く含む、締まりややあり
 - b. 暗褐色弱粘質土：泥岩粒多く、炭化物少量、締まりあり
- 1面土坑1
 - a. 暗褐色弱粘質土：泥岩粒多量、炭化物中量、貝片わずかに含む、やや締まる
 - b. 黄茶褐色砂質土：炭化物少量、貝粒わずかに含む、暗褐色土ブロック多量に混じる、締まり若干あり
- 1面土坑2
 - a. 暗褐色弱粘質土：泥岩粒少量、炭化物やや多く、かわらけ粒少量、締まりややあり
 - b. 黄茶褐色砂質土：炭化物多く、暗褐色土ブロック多量、締まり若干あり
- 1面土坑5
 - 暗褐色粘質土：泥岩（～5cm）・炭化物多量、かわらけ粒中量、灰色粘土ブロック多く含む、締まりあり
- 1面P13
 - 暗褐色弱粘質土：泥岩粒少量、炭化物中量、締まりなし
- 2面方壁1
 - a. 茶褐色砂質土：炭化物少量、貝粒微量、締まりややあり
 - b. 茶褐色砂質土：炭化物・貝粒少量、締まりなし
 - c. 明茶褐色砂質土：炭化物・貝片少量、締まりややあり
 - d. 明茶褐色砂質土：泥岩粒・炭化物少量、締まりややあり
 - e. 明茶褐色砂質土：泥岩粒少量、炭化物中量、かわらけ片粒微量、締まりややあり
 - f. 茶褐色砂質土：炭化物・貝粒少量、締まりなし、粘性ややあり
 - g. 茶褐色砂質土：土丹粒少量、炭化物多く、貝片・かわらけ粒微量、締まり若干あり
 - h. 暗茶褐色砂質土：炭化物・かわらけ粒・貝粒少量、締まりあり
 - i. 茶褐色砂質土：貝粒微量、黄褐色砂少量混じる、締まりややあり
 - j. 茶褐色砂質土：泥岩粒少量、炭化物多く、貝片・かわらけ粒微量、締まり若干あり
 - k. 茶褐色砂質土：炭化物・貝粒少量、締まりなし、粘性ややあり
 - l. 明茶褐色砂質土：炭化物少量、黄褐色砂ブロック多量、締まりあり
 - m. 茶褐色砂質土：暗褐色粘土ブロック多量、炭化物・貝粒微量、締まりあり
 - n. 灰褐色砂質土：暗褐色粘土ブロック少量、締まりややあり
 - o. 淡茶褐色砂質土：暗褐色砂ブロック少量、貝砂多く含む、締まりあり—裏込め土
 - p. 茶褐色砂質土：炭化物・貝粒少量、締まりややあり—裏込め土
 - q. 茶褐色砂質土：炭化物少量、締まりなし—土台材の痕跡
 - r. 明黄褐色砂質土：褐色粘質土ブロック少量、締まりあり
- 2面土坑1
 - 暗茶褐色粘質土：泥岩（～5cm）多く、炭化物・貝片中量、焼泥岩少量、締まりややあり
- 2面土坑5
 - 暗茶褐色粘質土：泥岩（15cm）含む、泥岩粒少量、炭化物かわらけ片・貝片中量、締まりあり
- 2面土坑9
 - a. 暗褐色粘質土：泥岩粒少量、締まり若干あり
 - b. 茶褐色砂質土：泥岩粒・かわらけ粒少量、暗褐色粘土ブロック多く混じる、締まりなし
 - c. 暗褐色粘質土：泥岩粒・炭化物少量、締まりややあり
 - d. 黄褐色砂質土：褐色粘土ブロック少量混じる、締まり若干あり
 - e. 黄褐色砂質土：褐色粘土ブロック微量、締まりなし
 - f. 黄褐色砂質土：褐色粘土ブロック少量混じる、締まりあり
- 2面P9
 - 明茶褐色砂質土：炭化物少量、黄褐色砂多く含む、締まりややあり

土層記

- 1. 暗褐色弱粘質土：泥岩粒中量、炭化物・かわらけ片粒少量、締まりあり、粘性ややあり
- 2. 暗褐色弱粘質土：泥岩粒多量、炭化物多く、かわらけ粒中量、締まり・粘性ややあり
- 3. 暗褐色砂質土：泥岩粒・炭化物多量、かわらけ粒少量、黄褐色砂多く含む、締まりなし
- 4. 褐色砂質土：炭化物少量、締まりなし
- 5. 茶褐色砂質土：炭化物少量、貝粒微量、締まりややあり
- 6. 暗褐色砂質土：炭化物少量、締まり若干あり
- 7. 茶褐色砂質土：褐色砂ブロック多く含む、締まりややあり
- 8. 黄褐色砂質土：炭化物少量、貝砂多量、締まりあり—土台材の痕跡か
- 9. 明黄褐色砂質土：貝砂多量、炭化物微量、締まりややあり
- 10. 黄褐色砂質土：貝砂多量、締まりあり
- 11. 明黄褐色砂層：炭化物微量、締まりあり
- 12. 灰白色砂層：貝細粒多く、締まりあり
- 13. 黄褐色砂層：縄文海進海退期の海成砂層、中世基盤層
- 14. 白黄褐色砂層

図5 調査区壁土層堆積図

第三章 検出遺構と出土遺物

本調査では近～現代遺構は調査対象には含めず、中世期のみ確認した。2枚の遺構面を確認し、狭小な調査区内で方形竪穴建物（以下、「方竪」と略す）2軒、溝1条、土坑13基、柱穴23口を検出した。

本報では遺構に付した名称は調査時において便宜的に付したもので、遺構の新旧関係などに関係するものではない。また、図示できなかった遺物は認知できる範囲の個体数で、それ以外は破片数を一個体とする形で表3にまとめた。なお、各遺構の説明にあたっては遺物が出土している遺構を優先した。そのほかの遺構については概略表として、各面の末尾に表示した。

1. 1面の遺構と遺物

近～現代の堆積土を除去して、地表下60cm、標高6.2mの位置で暗褐色砂質土が広がる1面を検出した(図6)。近世からの井戸や攪乱、確認調査坑により削平がみられるが、溝1条、土坑5基、柱穴14口を検出した。ほぼ平坦な生活面が広がっていたが、調査時の遺構検出標高は6.10～6.20mである。

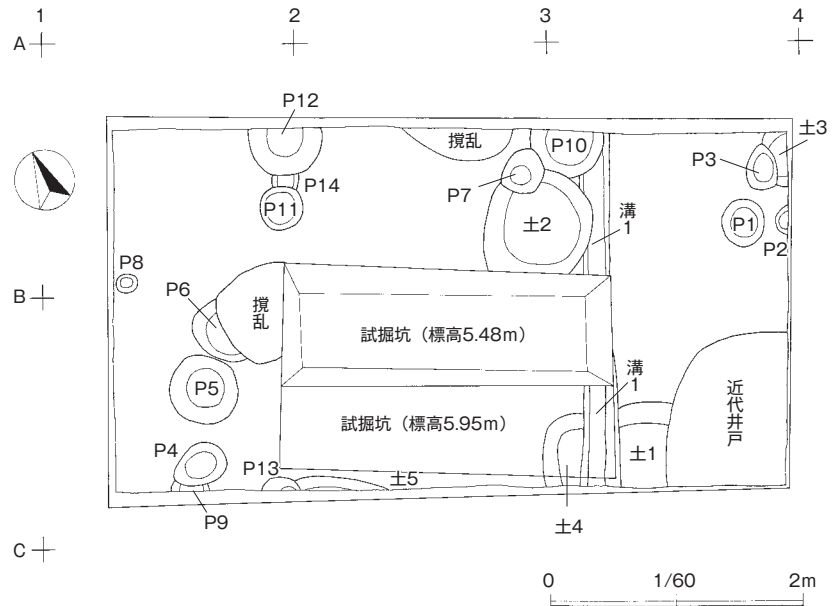


図6 1面全測図

溝1 (図7・8、図版1、表1)

調査区東部、3ラインに沿って検出された南北方向の溝で、調査区外に延びている。1面検出時には遺構範囲が不明瞭であったので2面検出途中で確認した。確認規模は南北290cm、上幅20～26cm、下幅12～16cm、深さ32～40cmである。掘り方はU字状を呈す。溝中央部分は確認調査坑により削平されていた。主軸方位はN-23°16'00"-Eを測る。北端底面の標高は5.82m、南端では5.75mを測る

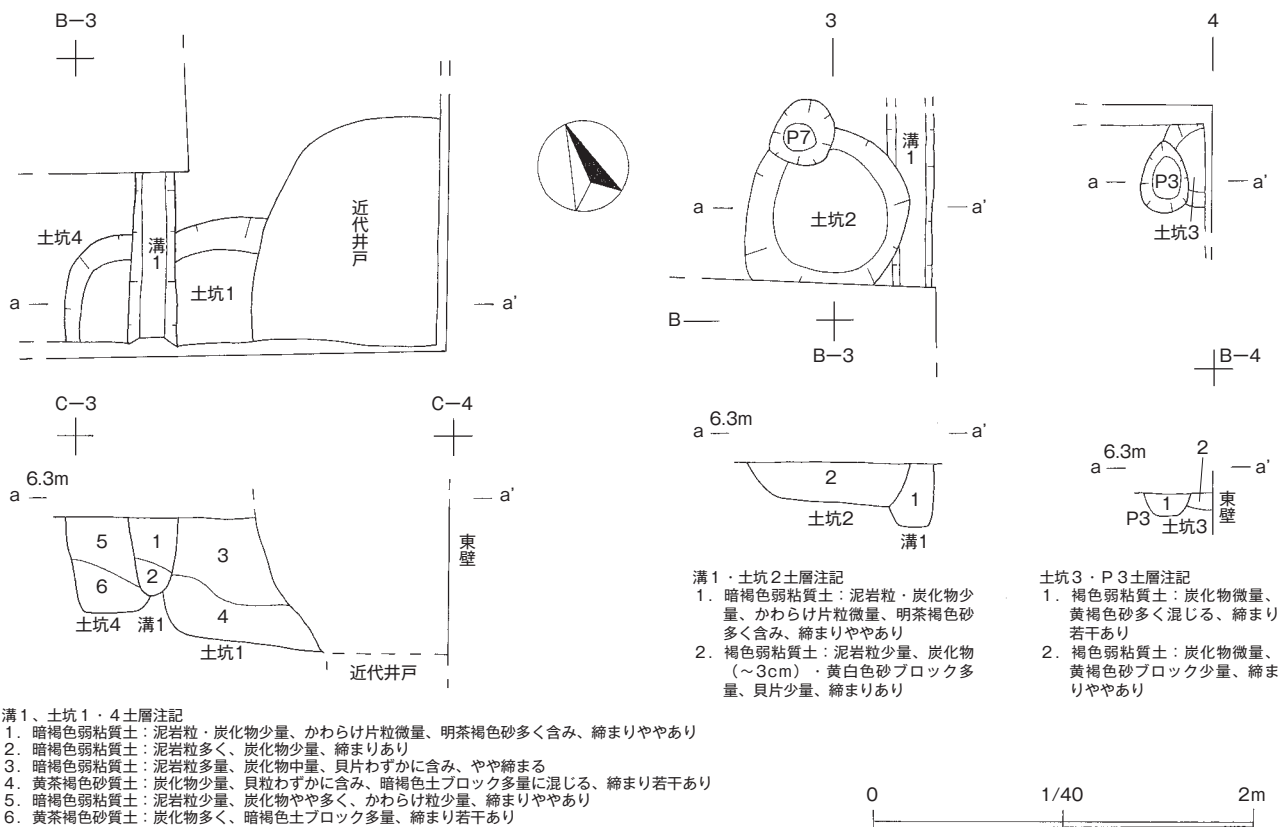


図7 1面溝・土坑・柱穴

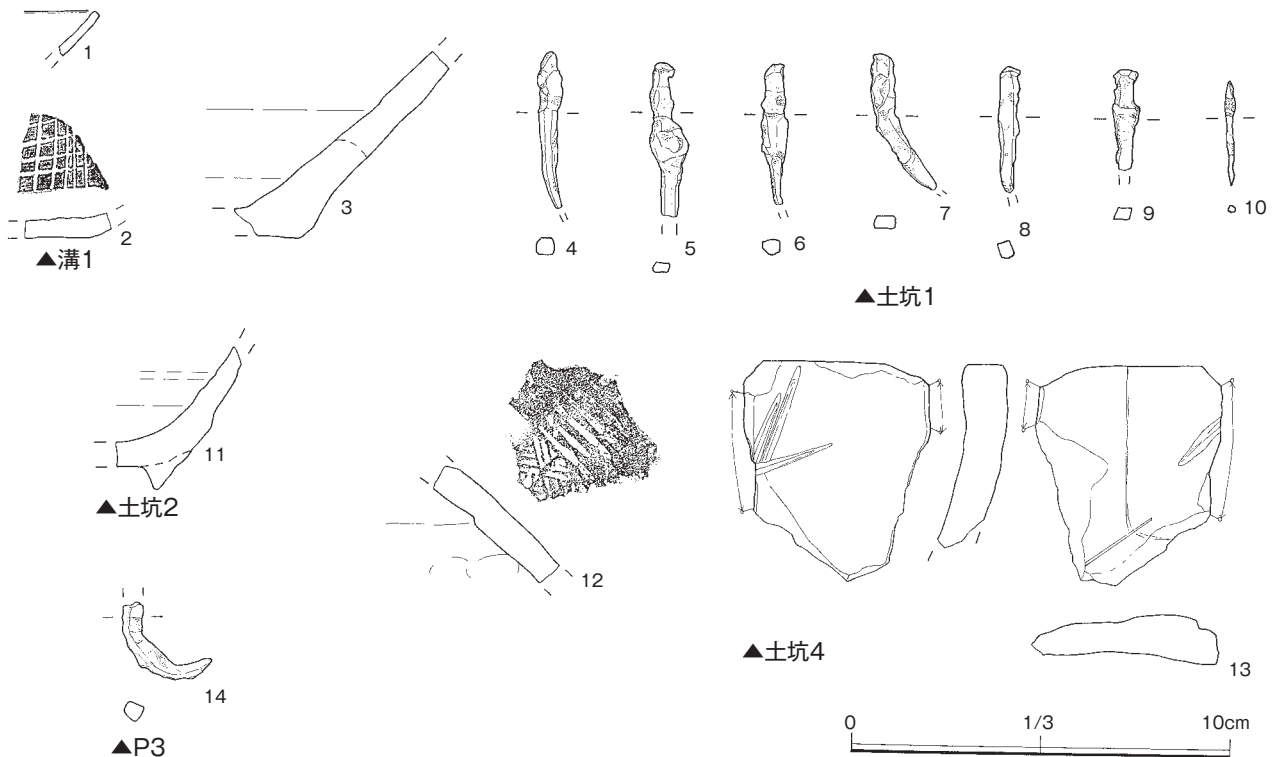


図8 1面各遺構出土遺物

ことから、南に向かって緩やかな傾斜が窺える。覆土は2層に分けられ、上層は明茶褐色砂を多く含む暗褐色弱粘質土、下層は土丹粒多く含む暗褐色弱粘質土の堆積がみられた。出土遺物(図8)は白磁口はげ皿(1)、瀬戸おろし皿(2)のみ図示可能であった。

土坑1(図7・8、表1)

C-3~4グリッド中央北側に位置する。東側は近代井戸、西側は溝1、南側は調査区外に拡がり北側からの掘り方しか検出できなかった。確認できた範囲で、南北径66cm、深さ62~71cm、底面標高5.50mを測る。覆土は土丹粒多量、炭化物中量、貝片わずかに含む、やや締まりのある暗褐色弱粘質土と炭化物少量と貝片わずか含み、暗褐色土ブロック多量に混じる黄茶褐色砂質土の堆積状況と両層東側に向かい落ちていく様相がみられた。出土遺物は、かわらけ大皿、常滑窯甕、鳥骨、魚骨が出土しており、常滑片口鉢Ⅱ類底部片(3)、鉄釘(4~9)、針と思われる鉄製品(10)を図示した。

土坑2(図7・8、表1)

B-2グリッド北側に位置する。北側一部をP7に削平され、本遺構が溝1を削平する重複関係にある。掘り方は不整円形、断面すり鉢状を呈し、東西径84cm、南北径82cm、深さ20cm、底面標高5.90mを測る。遺物は、常滑窯片口鉢Ⅰ類の底部片(11)を図示し、そのほかにかわらけ大小皿、常滑窯甕と壺が出土している。

土坑4(図7・8、表1)

調査区南西部、C-3グリッド北側に位置する。南部は調査区外、東部は溝1に削平されている状況で確認した。確認できた範囲では、東西径32cm、南北径56cm、深さ51cm、底面標高5.70mを測る。覆土は2層あり、上層ではやや締まりのある暗褐色弱粘質土、下層には暗褐色土ブロックを多量に含む黄茶褐色砂質土が堆積しており、隣接する土坑1と同様の堆積状況をしており、同時期に埋められた可能性が高い。出土遺物は、かわらけ小皿、瀬戸窯鉢、常滑窯甕、鉄釘などが出土しているが、図示可能な遺物は、常滑窯甕の肩部片(12)と滑石鍋を転用した加工品(13)である。

P3 (図7・8、表1)

調査区北東隅、B-4グリッド北側で検出した。東隣の土坑3を削平する重複関係にある。標高6.17mで検出し、確認規模は、東西径15cm、南北径39cm、深さ12cm、底面標高6.05mを測る。覆土は、黄褐色砂が多く混じる褐色弱粘質土の堆積であった。出土遺物は、鉄釘(14)のみである。

遺構名	平面形	検出標高	東西径	南北径	底面標高	重複関係
土坑3	不明	6.18 m	22cm以上	44cm以上	6.07 m	P 3より古い
土坑5	不明	6.10 m	74cm以上	12cm以上	5.92 m	P 13より古い
P 1	楕円形	6.14 m	32cm	38cm	6.10 m	—
P 2	不明	6.20 m	11cm以上	22cm	6.07 m	—
P 4	不整円形	6.20 m	44cm	33cm	5.66 m	P 9より新しい
P 5	円形	6.10 m	54cm	56cm	5.85 m	—
P 6	不明	6.11 m	43cm以上	49cm以上	5.89 m	攪乱により削平
P 7	不整円形	6.11 m	32cm	35cm	5.75 m	土坑2・P 10より新しい
P 8	楕円形	6.12 m	17cm	16cm	6.02 m	—
P 9	不明	6.20 m	29cm	8 cm以上	5.94 m	—
P 10	円形?	6.17 m	58cm	39cm以上	5.86 m	溝1・P 7より古い
P 11	円形	6.14 m	33cm	34cm	5.90 m	P 14より新しい
P 12	不整円形	6.12 m	59cm	37cm以上	5.87 m	P 14より新しい
P 13	不明	6.20 m	30cm	11cm以上	6.00 m	土坑5より新しい
P 14	不明	6.14 m	20cm	10cm以上	5.83 m	P 11・P 12に削平

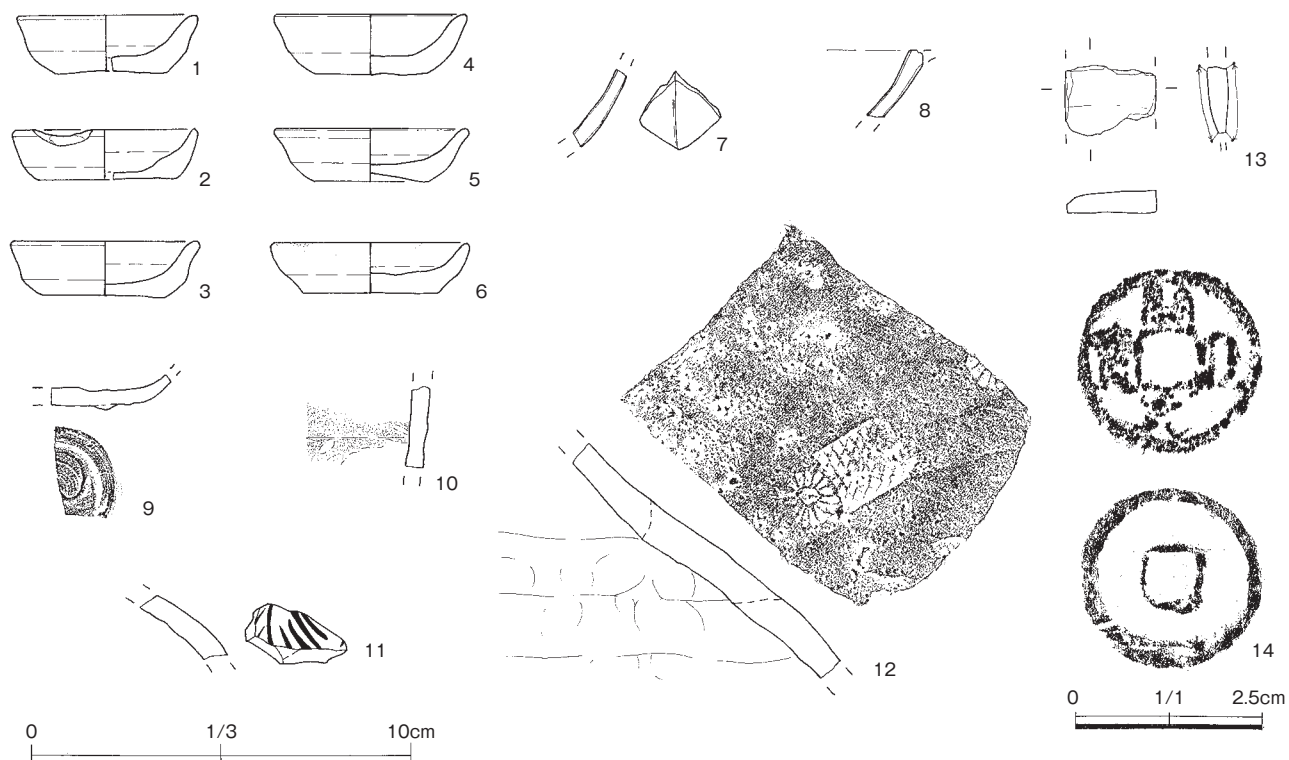


図9 1面遺構外出土遺物

1面遺構外出土遺物(図8、表1)

1面構成土上に堆積する中世遺物包含層(図5-2層)中から出土した総数88点中14点を図示した。かわらけ小皿(1~6)、青磁鎬蓮弁文碗(7)、青磁折縁皿(8)、瀬戸窯碗(9)・瓶子(10)・外面に葉文を陰刻してある瓶子の肩部片(11)、菊花文と縦・斜線文を組み合わせた常滑窯の甕(12)、上野産中砥(13)、開元通宝と思われる銅銭(14)が出土している。

2. 2面の遺構と遺物

1面構成土である4~13層を除く除去すると、地表下70~100cm、標高6.1~5.9mの位置に灰白色砂層である中世基盤層を検出した。当面で検出した遺構は、方竪2軒、土坑8基、柱穴9口である。検出標高は主に5.9m前後である。

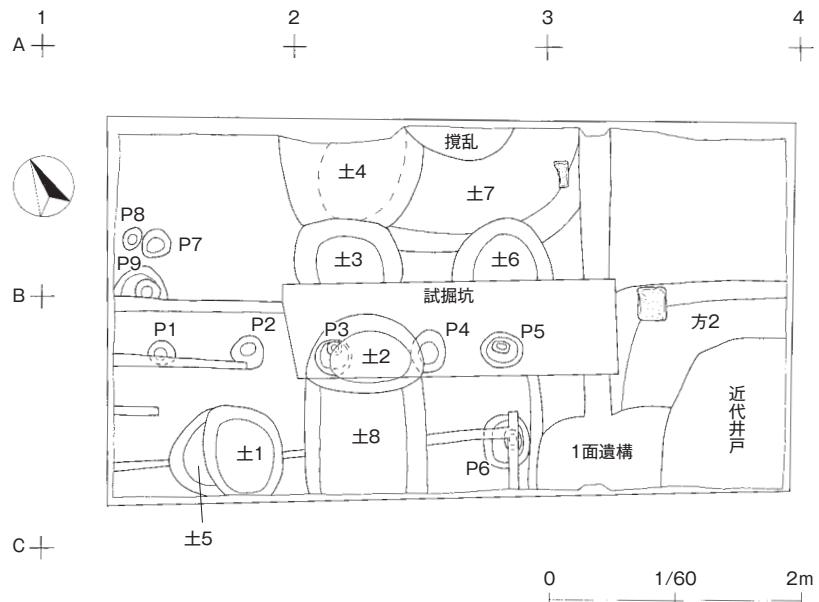


図10 2面全測図

方竪1(図10・11・13、表1・2)

調査区南西部、B・C-1~3に位置する。土坑や確認調査坑により底面まで所々削平されているが、様相としては判断できる状況である。当遺構は調査区西、及び南に拡がるため、全体規模は不明瞭、掘り方底面外周部に等間隔で柱穴が並ぶ掘立式の建物構造である。確認できた掘り方平面規模は、東西340cm以上、南北147cm以上、検出標高からの深さ52cm、底面標高は5.55m前後を測り、床面までの深さは40cmである。主軸方位はN-113°50'-Eを測る。建物内の堆積土層の様相は図5・11を参照していただきたい。

当遺構に付属する柱穴列は、東西3間×南北1間、計6口を確認し、西側からP1と順番に付した。いずれも掘り方底面から掘られている。それぞれの柱穴の芯々距離は、P1~5の東西列を西から66cm、69cm、75cm、58cm、P5とP6の南北列が75cmを測る。各柱穴の断面(図11)をみると、木材の痕跡である暗褐色砂質土(1層)と裏込め土の明黄褐色砂質土(3層)が同時に堆積している。また、P3・4・6は平面形が二段掘りになっており、断面形状では掘り方より柱痕部の方が深い様相を呈す

遺構名	平面形	検出標高	東西径	南北径	底面標高
P 1	円形	5.52 m	20cm	18cm	5.16 m
P 2	円形	5.55 m	26cm	26cm	5.09 m
P 3	円形	5.42 m	30cm	28cm	5.07 m
P 4	楕円形	5.43 m	26cm	32cm	5.12 m
P 5	楕円形	5.42 m	32cm	28cm	5.10 m
P 6	不整円形	5.56 m	36cm	42cm	5.12 m

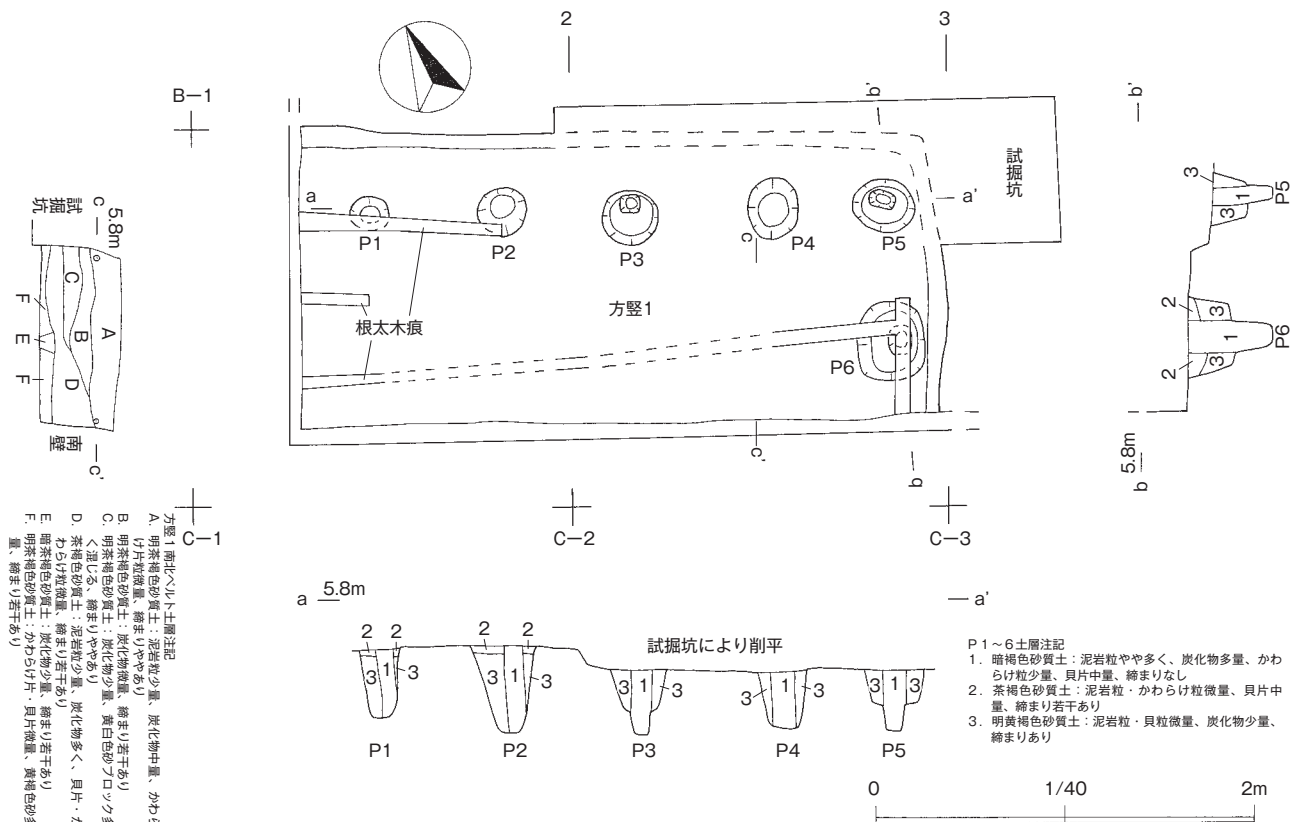


図11 2面方竪1

ことから、柱を打ち込んでいた可能性がある。

出土遺物は、かわらけ小皿(1・2)、青磁劃花文皿(3)・劃花文碗(4)・輪花皿(5)、瀬戸窯おろし皿(6)、尾張型山茶碗(7)、常滑窯甕(8・9)・片口鉢Ⅱ類(10・11)、常滑窯製品を二次利用した摩耗陶片(12)、備前窯播鉢(13)、釘状の鉄製品(14)、鉄釘(15~18)、火打金(19)が覆土中から出土している。裏込め土中から、かわらけ小皿(20)、瀬戸窯花瓶(21)、外面に斜線文の押印がある常滑窯甕(22)、床下から土師器甕(23)と鉄釘(24)が出土しており、調査区内では当遺構からの出土総数が最多である。

方竪2(図12・13、表2)

調査区南東部、B・C-3・4グリッド範囲で検出した。確認範囲内では確認調査坑・近代井戸と1面遺構により削平されている状況で、遺構の大半は調査区南東に広がる模様である。検出範囲が狭小だが、ここでは方竪として捉えた。検出標高は6.00m前後である。確認できた規模は、東西134cm、南北推定164cm、検出標高からの深さ36cm、底面標高5.64mを測る。方竪1と同軸上にあり、新旧関係では当遺構が古いが、覆土の状況は2つの層がほぼ水平堆積しており、方竪

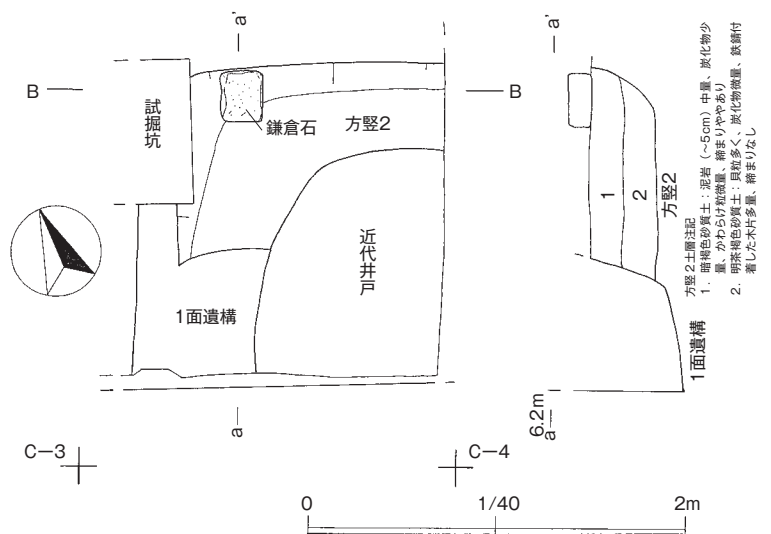


図12 2面方竪2

1に付属する張り出しの可能性とも考えられる。

北西隅に鎌倉石の切石(22cm×27cm、厚さ12cm)を検出したが、廃棄されたあとのものであり、おそらく当遺構とは関係ないと思われる。上面の標高は6.17mである。

鉄釘(25・26)と元祐通寶(27)を図示し、そのほかにかわらけ、青磁碗、瀬戸窯入子、常滑窯甕、片口鉢などが出土しているが、いずれも小破片で図示し得ることができなかった。

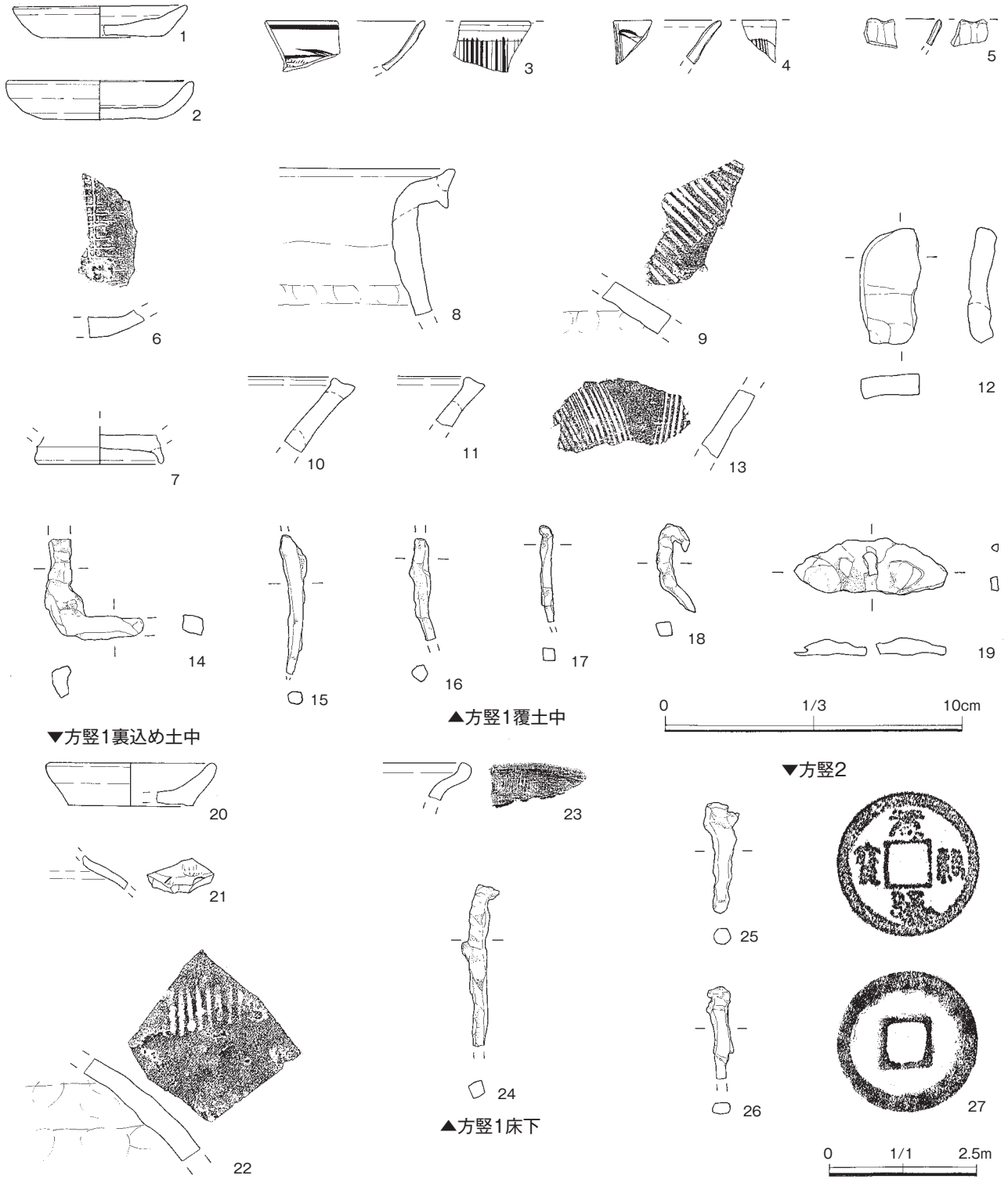


図13 2面方豎1・2出土遺物

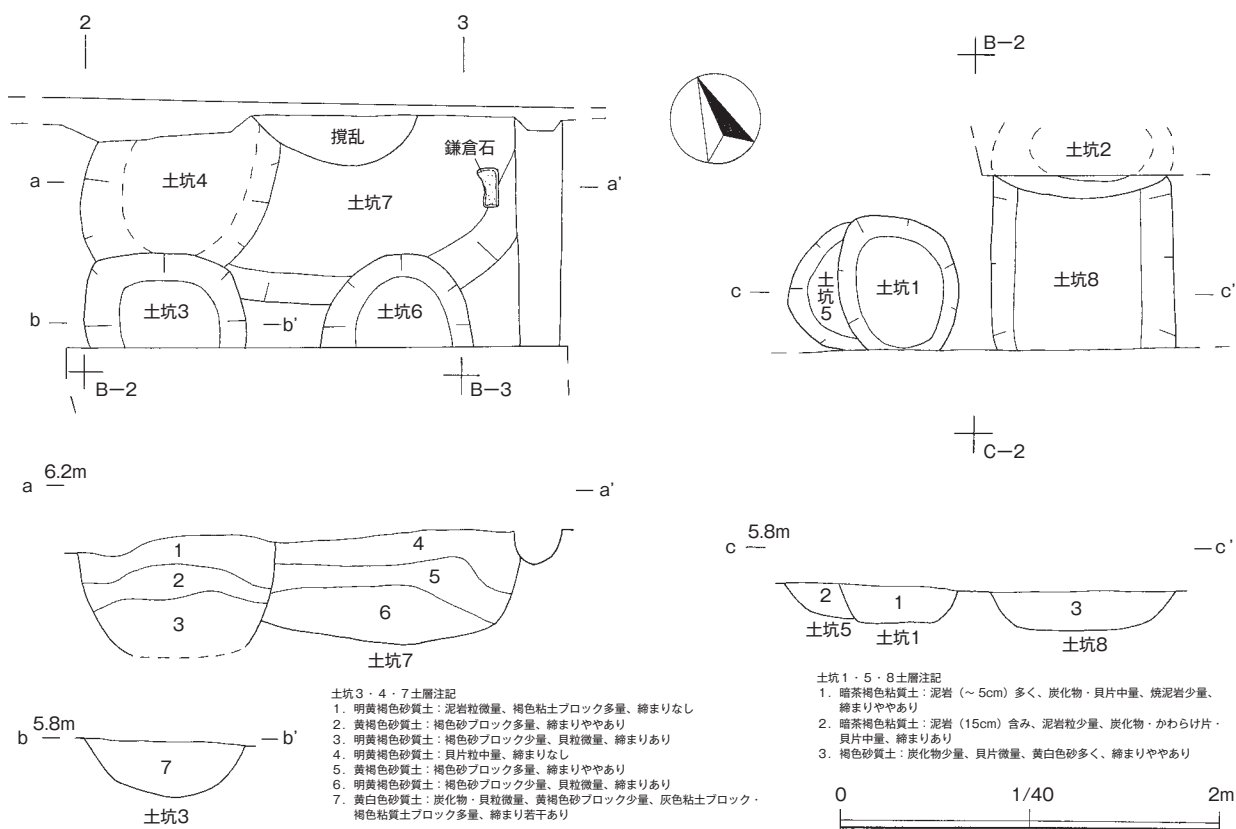


図14 2面土坑

土坑1（図14・15、表2）

調査区南西部、C-2グリッドの北西に位置する。土坑5と重複関係にあり、当遺構が新しい。南側一部は調査区外のため確認できなかった。掘り方平面形状は不整形、その規模は、東西径63cm、南北径71cm、検出標高からの深さ19cm、底面標高5.42mである。方竪1を削平した状況であったが、検出標高は方竪1の床面で確認したため5.61mを測る。調査区南壁に堆積状況が一部残っており、土層から深さ40cmは確認できる。

出土遺物は、かわらけ大小皿、常滑窯甕・壺、砥石（仕上げ砥）、鉄釘が出土しているが、摘み状の突起をもつ鉄製品（1）のみ図示した。

土坑3（図14・15、表2）

調査区中央部、B-2グリッドの北東に位置する。南側は確認調査坑で削平されている。掘り方平面形状は隅丸方形になると思われ、確認できた規模は、東西径86cm、南北径50cm、検出標高5.81mからの深さは31cm、底面標高5.50mを測る。

遺物は、常滑窯壺（2）と片口鉢Ⅱ類が出土している。

土坑4（図14・15、表2）

調査区中央北側、土坑3に削平される状況で検出した。底面は掘削深度に達したため、未完掘のまま全体を把握するには至っていない。北側は調査区外に拡がり、掘り方平面形状は不整形、東西径100cm、南北径80cm以上、最大深度65cm以上を測る。検出標高は5.83m、底面標高は5.32mである。

遺物は、瀬戸窯鉢、常滑窯甕が出土しているが、鉄釘（3）のみ図示した。

土坑7（図14・15、表2）

調査区中央部、B-3グリッドの北側に位置する。大半が調査区外にあり、周辺の遺構による削平が

調査区中央部、B-3グリッドの北側に位置する。大半が調査区外にあり、周辺の遺構による削平が著しい。全体規模は不明で、確認範囲では東西径154cm、南北径99cm、深さ60cmを測る。

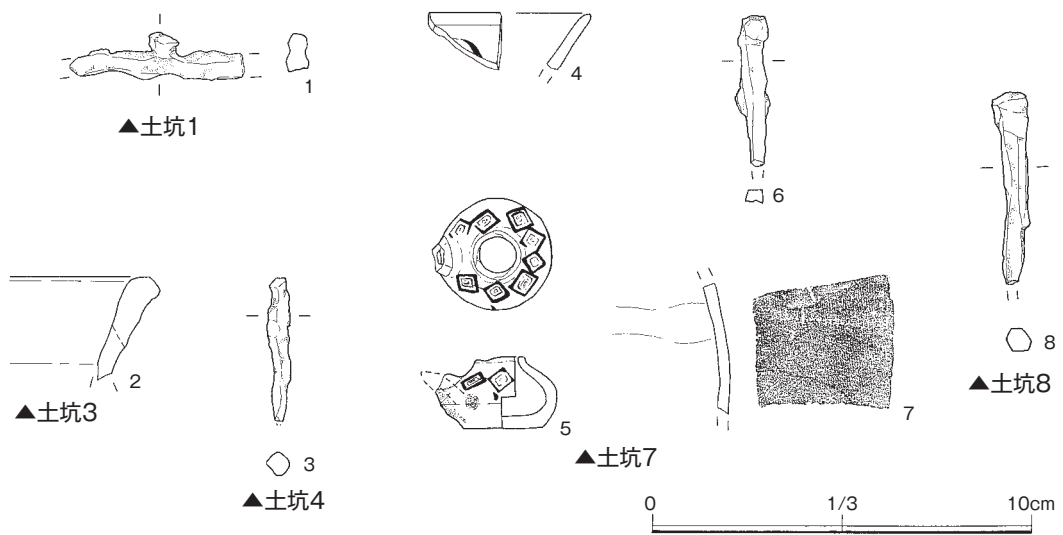


図15 2面各土坑出土遺物

検出標高は5.80 m、底面標高は5.40 mである。覆土の堆積が、西隣の土坑4と類似するため、同時期に埋められた可能性が高い。

出土遺物は、かわらけ小皿、青磁劃花文碗(4)、瀬戸窯水滴(5)、常滑窯甕、渥美窯甕、瓦質火鉢、鉄釘(6)、土師器甕(7)が出土している。

土坑8 (図14・15、表2)

調査区中央部、C-2グリッドの北東に位置する。土坑2に北側を削平される新旧関係にある。南側は調査区外のため確認できなかった。掘り方平面形状は不明、東西径56cm、南北径93cm以上、検出標高からの深さ14cm、底面標高5.42 mである。方竪1を削平してあり、土坑1と同じく、検出標高は方竪1の床面で確認したため5.58 mである。調査区南壁に堆積状況が一部残っているので、その状況から見ると、深さ46cmを測る。

出土遺物は少なく、かわらけ大皿と鉄釘(8)のみであった。

遺構名	平面形	検出標高	東西径	南北径	底面標高	重複関係
土坑2	楕円形	5.43 m	93cm	64cm	5.37 m	土坑8より新しい 試掘坑により上部削平
土坑5	不明	5.60 m	42cm以上	69cm以上	5.43 m	土坑1より古い
土坑6	不明	5.76 m	81cm	49cm以上	5.45 m	試掘坑により南側削平
P 7	楕円形	5.92 m	22cm	21cm	5.80 m	—
P 8	楕円形	5.92 m	15cm	18cm	5.82 m	—
P 9	不明	5.92 m	43cm	40cm	5.12 m	方竪1より古い

2面遺構外出土遺物(図16、表2)

2面検出までの掘削において1面を構成する4層を中心とした層位から出土した遺物を一括して「2面遺構外」とした。総数44点中、5点を図示した。

青磁碗(1)、凸部格子叩き目を施す平瓦(2)、鉄釘(3・4)、頭部大きく丸い鉄釘に類似した鉄製品(5)を図示した。

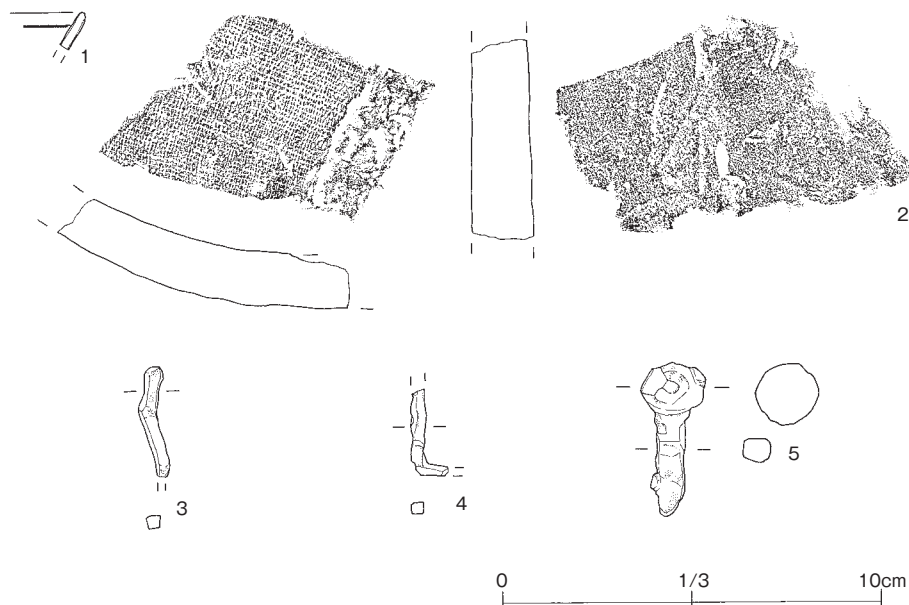


図16 2面遺構外出土遺物

第四章 まとめ

本調査地点は若宮大路下馬四つ角から県道鎌倉葉山線沿いに東へ250mほど、大町二丁目933番1外に位置する。調査地点の標高は6.8m前後を測り、近現代層や中世遺物包含層の堆積を除去した標高6.2mを測る位置に中世1面を検出した。以下、遺構年代を含め、調査成果から若干の考察をする。

2面では方形竪穴建物2基、土坑8基、柱穴3口を検出した。調査区南部で検出した方竪1は土坑により削平されている。北側の土坑群との関係は中央部の試掘坑で方竪1との新旧関係は不明であり、上層遺構の削平や狭小な調査面積から全体を把握するのは難しいが、当遺跡が開始される時期には方竪1や柱穴が造られていた様相である。おそらく、方竪が廃棄されてから1面の時期に移行する間に土坑群が掘られたのであろう。方竪1の主軸方向はN-113°50'-Eを測り、調査地西際に面している現在の道路はN-22°20'-Eの傾きである。ほぼ直角関係にあり、現在の道路軸が鎌倉時代には存在していた可能性が考えられる。また、南に隣接する大町二丁目992番7外地点(図1-14)では、標高5.5~5.7mの位置に黄褐色細砂層の中世基盤層(13世紀後半~14世紀初頭)が検出されている。本地点との標高差は20cmほどの高低差があるが、現在の地表面と同じく、南に向かい緩やかに傾斜していく地形となっているのであろう。方竪1の建物構造は、底面四周に土台材を使用しない、柱穴建ち構造をもつ。これまでの鎌倉市内の発掘調査成果から多数の方竪が検出されており、柱穴建ち構造をもつ方竪は存続年代が13世紀後半とされている(註1)。

方竪内からは小片ばかりの遺物が出土し、図示できなかったものが多い。きわめて年代を捉えることは困難であるが、青磁劃花文碗皿や常滑窯6a型式の甕などが出土していることから、概ね13世紀中頃~後半といった年代観であろう。土坑からの出土遺物はわずかであるが、あまり時期差はないと思われる。方竪1の裏込め土中や土坑内から古代の土師器片の出土がみられるが、周辺遺跡の調査成果によると古代遺構が検出されていることから、覆土中に混じってしまった結果であると思われる、中世以前の遺構が調査区内にあったものではない。さらに、手捏ね成形のかわらけも少量ながら出土しており、当面

の遺構群は1面遺構群との年代を踏まえ、13世紀後半頃と考えたい。

1面は試掘坑や近代井戸といった攪乱による削平を受けていた中で、溝1条、土坑5基、柱穴13口を検出した。溝は南北に走り、その主軸方位はN-23°20'-Eを測る。これは先述した道路の軸方位と大差なく、平行している状況である。大町二丁目992番7外地点では近世以後の削平により、遺構の残存が乏しいのも含め、この延長は検出されていない。さらに、違った軸方向の溝が検出されていることや規模から当面の溝の性格については調査区周辺の狭い範囲内における地割溝と推測せざるを得ない。

出土遺物は2面よりも総数が少なく、詳細な年代比定は難しいところである。当面では手捏ねかわらけの出土が認められず、糸切かわらけだけになる。図示できたのは小皿だけであったが、大皿も破片数であるが30点近くが出土している。大小皿には外面体部に強い稜を持ち、口縁部はわずかに外傾する傾向が多く見られた。また、古瀬戸中期様式と思われる花瓶や青磁鎬蓮弁文碗が出土していることから1面は14世紀前半～中頃の年代と思われる。

本調査では、狭小な面積の中での調査であったため、詳細な遺跡の性格等を把握することは推測の域を出ない。しかしながら、周辺の調査成果と比べてみると、町屋或いは米町・大町といった商業地域とされるその部分的な遺構の検出状況に類似する。さらに、西際道路の軸線であるが、若宮大路の軸方向と似ている。県道を挟んだ北側一帯にも同じ軸方向をもつ小道が現在も存在する。平成22年に調査された大町一丁目1034番9地点では南北道路が検出されている。この道路はN-21°-Eの傾きがあると発表されており、本調査検出の遺構軸や道路軸とほぼ変わらない。しかし、大町四つ角以東にはこの軸方位が見られない。憶測の域を出ないが、このことから本地点を含んだ北側一帯には鎌倉時代から残る地割軸の範囲があるのではなかろうか。今後の周辺調査を期待したい。

註

- 1) 鈴木弘太 2006「中世「竪穴建物」の検討—都市鎌倉を中心として—」『日本考古学』第21号 日本考古学協会

参考文献

- 押木弘己 2011「若宮大路周辺遺跡群の調査—大町一丁目1034番9地点—」『第21回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨』特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所
- 森孝子・滝澤晶子 2006「米町遺跡(No.245) 大町二丁目992番7外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書22 平成17年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会

表1 遺物観察表(1)

() = 復元値 [] = 遺存値

挿図 番号	出土面遺構	種別	遺存度	寸法(cm)			観察項目
				口径	底径	器高	
8-1	1面 溝1	白磁 口はげ皿	口縁部小片	—	—	[1.8]	a:成形・整形 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:焼成 f:備考 b.白色 黒色粒 精良堅緻 d.灰灰色半透明 口唇部露胎 内外面粗い貫入
8-2	1面 溝1	瀬戸 おろし皿	底部小片	—	—	[1.95]	a.内底部格子状へラ描き 外底糸切痕 b.黄灰色 砂粒 黒色粒 白色粒 良胎 c.灰色 e.良好 f.外面自然釉付着
8-3	1面 土坑1	常滑 片口鉢Ⅱ類	底部1/6以下	—	—	[7.5]	a.輪積み 外底砂目痕 外面胴部下縦位のへラ削り b.暗灰色 砂粒 白色粒多い 石英粒 小石 粗胎 c.暗褐色 e.良好 硬質 f.内面弱い磨滅
8-4	1面 土坑1	鉄釘	先端部欠損	長[6.3]	幅0.3～0.9	厚0.7	a.四角形状に鍛造
8-5	1面 土坑1	鉄釘	先端部欠損	長[6.2]	幅0.6～1.5	厚0.4	a.四角形状に鍛造
8-6	1面 土坑1	鉄釘	先端部欠損	長[5.6]	幅0.4～1.0	厚0.6	a.四角形状に鍛造
8-7	1面 土坑1	鉄釘	先端部欠損	長[5.5]	幅0.7～0.9	厚0.5	a.四角形状に鍛造
8-8	1面 土坑1	鉄釘	先端部欠損	長[5.0]	幅0.5～0.8	厚0.7	a.四角形に鍛造
8-9	1面 土坑1	鉄釘	先端部欠損	長[4.0]	幅0.5～1.1	厚0.5	a.四角形に鍛造
8-10	1面 土坑1	鉄針か	完形	長4.2	幅0.2～0.4	厚0.3	a.丸く鍛造
8-11	1面 土坑2	常滑 片口鉢Ⅰ類	底部片	—	—	[5.8]	a.輪積み 貼付高台 b.灰白色 砂粒 黒色粒 白色粒 やや粗胎 c.灰白色 e.良好 f.内面全体に強い磨滅
8-12	1面 土坑4	常滑 甕	肩部小片	—	—	[4.6]	a.輪積み b.灰白色 砂粒 黒色粒 やや粗胎 c.明灰色 e.やや不良 f.外面幾何学文を押し
8-13	1面 土坑4	滑石鍋転用品	口縁部片	長8.8	幅7.4	厚1.5～1.7	c.桃灰色 f.内面やや強い磨滅 内外面削痕あり 両側面一部平坦に削り加工
8-14	1面 P3	鉄釘	頭部欠損	長[3.1～5.0]	幅0.3～0.8	厚0.7	a.四角形状に鍛造
9-1	1面遺構外	かわらけ	口縁～底部1/2	7.1	4.5	2.2	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 やや粗胎 c.黄橙色 e.良好
9-2	1面遺構外	かわらけ	口縁～底部1/3	(7.2)	(5.4)	2.0	a.轆轤 外底糸切痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 やや粗胎 c.橙色 e.良好 f.口縁部加工痕あり
9-3	1面遺構外	かわらけ	口縁部一部欠損	7.4	4.8	2.2	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.淡橙色 e.良好
9-4	1面遺構外	かわらけ	口縁～底部1/3	(7.6)	4.4	2.4	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒多い 雲母 泥岩粒 やや粗胎 c.橙色 e.良好
9-5	1面遺構外	かわらけ	口縁1/4～底部1/3	(7.8)	(4.4)	2.1	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 海綿骨針 やや粗胎 c.淡黄橙色 e.良好
9-6	1面遺構外	かわらけ	口縁～底部約1/2	(7.8)	(5.4)	2.0	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 海綿骨針 泥岩粒 小石粒 やや粗胎 c.黄橙色 e.良好 f.内外面口縁部煤付着、燈明皿
9-7	1面遺構外	龍泉窯系 青磁鎚蓮弁文碗	体部小片	—	—	[3.1]	b.灰色 精良堅緻 d.灰緑色半透明 内面粗い貫入 外面細かい貫入 e.良好 f.外面蓮弁文
9-8	1面遺構外	青磁 折縁皿	体部小片	—	—	[2.7]	b.明灰白色 黒色粒 精良堅緻 d.暗灰緑色半透明 内外面粗い貫入 e.良好
9-9	1面遺構外	瀬戸 碗	底部片	—	—	[1.4]	a.外底糸切痕 貼付高台 b.灰白色 黒色粒 良胎 c.黄味灰白色 e.良好 f.内面やや強く磨滅
9-10	1面遺構外	瀬戸 花瓶	胴部小片	—	—	[3.3]	b.灰白色 砂粒 白色粒 良胎 d.灰緑色不透明 外面施釉 内面釉ダレ多い e.良好
9-11	1面遺構外	瀬戸 花瓶	肩部小片	—	—	[2.3]	b.白黄色 砂粒 黒色粒 やや良胎 d.黄茶色半透明 内外面施釉 e.良好 軟質 f.外面葉文を陰刻
9-12	1面遺構外	常滑 甕	肩部片	—	—	[9.3]	a.輪積み b.淡橙色 砂粒 白色粒 黒色粒 粗胎 c.内面褐色 外面降灰部明灰緑色 e.良好 f.外面15(16?) 弁の菊花文に縦線文と斜線文を組み合わせた押し
9-13	1面遺構外	砥石(中砥)	上下部欠損	長[2.8]	幅3.6	厚0.3～0.9	c.黄白色 f.上野産 表裏面使用による擦痕 側端面整形加工による擦痕
9-14	1面遺構外	銅銭	完形	外縁径2.47	内縁径2.13	孔径0.63	f.状態悪く銭貨名不明 開元通宝か
13-1	2面 方竪1覆土中	かわらけ	口縁～底部1/3	(8.8)	(6.0)	1.6	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒多い 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.淡橙色 e.良好
13-2	2面 方竪1覆土中	かわらけ	口縁～底部約1/2	(9.4)	5.8	2.0	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒多い 赤色粒 海綿骨針 やや粉質 やや粗胎 c.黄橙色 e.良好
13-3	2面 方竪1覆土中	青磁 劃花文皿	口縁～体部片	—	—	[2.6]	b.灰色 黒色粒 精良堅緻 d.灰緑色半透明 内外面薄く施釉 e.良好 f.内面口縁下二条線 内底部劃花文 外面体部櫛描文
13-4	2面 方竪1覆土中	青磁 劃花文碗	口縁部片	—	—	[2.2]	b.灰色 精良堅緻 d.灰緑色半透明 内外面薄く施釉 e.良好 f.内外面劃花文
13-5	2面 方竪1覆土中	青白磁 輪花皿	口縁部小片	—	—	[1.5]	a.口縁部輪花 b.白色 精良堅緻 d.明緑灰色半透明 e.良好 f.内外面蓮弁文
13-6	2面 方竪1覆土中	瀬戸 おろし皿	底部小片	—	—	[1.3]	a.内底格子状のへラ描き 外底糸切痕 b.淡灰色 砂粒 黒色粒 良胎 c.内面明灰緑色 外面灰黄色 e.良好 f.内面自然釉付着
13-7	2面 方竪1覆土中	山茶碗(尾張型)	底部1/2	—	6.3	[1.5]	a.外底糸切痕 貼付高台 b.灰色 砂粒 白色粒 小石 やや粗胎 c.明灰色 e.良好 f.内底磨滅痕

表2 遺物観察表(2)

() = 復元値 [] = 遺存値

挿図 番号	出土面遺構	種 別	遺存度	寸法(cm)			観察項目
				口径	底径	器高	
13-8	2面 方竪1 覆土中	常滑 甗	口縁部片	緑帯幅2.0			a.輪積み b.暗灰色 砂粒 白色粒 小石 粗胎 c.褐色 降灰部明灰 緑色 e.良好 f.中野編年6a型式(1250～1275)
13-9	2面 方竪1 覆土中	常滑 甗	肩部小片	—	—	[2.7]	a.輪積み b.灰色 砂粒 白色粒 黒色粒 やや粗胎 c.灰褐色 e.良 好 f.外面幅広い縦線文を押印
13-10	2面 方竪1 覆土中	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部小片	—	—	[3.8]	a.輪積み b.暗灰色 砂粒 白色粒多い 粗胎 c.褐色 e.良好 f.内面弱い磨滅 図13-11と同一個体か
13-11	2面 方竪1 覆土中	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部小片	—	—	[2.5]	a.輪積み b.暗灰色 砂粒 白色粒多い 粗胎 c.褐色 e.良好 f.図13-10と同一個体か
13-12	2面 方竪1 覆土中	常滑 摩耗陶片	体部小片	長5.9 幅4.1 厚0.8～1.1			b.灰色 砂粒 白色粒多い 粗胎 c.内面暗灰色 外面褐色 e.良好 f.上端・側端・外面下部磨耗
13-13	2面 方竪1 覆土中	備前 播鉢	体部小片	—	—	[3.4]	a.内面9～12条の櫛描き b.淡橙色 砂粒 白色粒多い 黒色粒 小 石 粗胎 c.赤橙色 e.良好
13-14	2面 方竪1 覆土中	鉄釘か	頭・先端部欠損	長[5.2] 幅5.0 厚1.0～1.6			a.四角形に鍛造
13-15	2面 方竪1 覆土中	鉄釘	頭・先端部欠損	長[7.2] 幅0.5～1.2 厚0.7			a.四角形状に鍛造
13-16	2面 方竪1 覆土中	鉄釘	頭・先端部欠損	長[5.2] 幅0.5～0.8 厚0.8			a.四角状に鍛造
13-17	2面 方竪1 覆土中	鉄釘	先端部欠損	長[4.9] 幅0.6 厚0.6			a.四角形に鍛造
13-18	2面 方竪1 覆土中	鉄釘	完形	長4.5 幅0.5～0.7 厚0.7			a.四角形に鍛造
13-19	2面 方竪1 覆土中	火打金	完形	長2.8 幅7.8 厚0.2～0.9			a.中央に穿孔 全体薄く鍛造している模様
13-20	2面 方竪1 裏込め土中	かわらけ	口縁～底部1/3	(8.4)	(6.4)	2.2	a.轆轤 外底糸切痕 b.砂粒 雲母 海綿骨針 やや粗胎 c.淡橙色 e.良好
13-21	2面 方竪1 裏込め土中	瀬戸 花瓶	胴部小片	—	—	[1.7]	a.灰釉ハケ塗り b.淡黄灰色 砂粒 良胎 d.灰緑色透明 外面施釉 内面自然釉付着 e.良好 f.外面不明文様を押印
13-22	2面 方竪1 裏込め土中	常滑 甗	肩部片	—	—	[5.6]	a.輪積み b.淡黄灰色 砂粒 黒色粒 小石 やや粗胎 c.内面淡灰色 外面降灰部灰緑色 e.良好 硬質 f.外面斜線文を押印
13-23	2面 方竪1 床下	土師器 甗	口縁部小片	—	—	[1.9]	a.外面口縁下に縦位のハケ b.赤橙色 砂粒 褐色粒 やや粗胎 c.黄橙色 e.良好
13-24	2面 方竪1 床下	鉄釘	先端部欠損	長[8.3] 幅0.8～1.0 厚0.7			a.四角形状に鍛造
13-25	2面 方竪2	鉄釘	完形	長5.7 幅0.6～1.7 厚0.8			a.多角形 先端部四角形状に鍛造
13-26	2面 方竪2	鉄釘	先端部欠損	長[4.8] 幅0.5～1.1 厚0.6			a.四角形状に鍛造
13-27	2面 方竪2	銅銭	完形	外縁径2.42 内縁径1.96 孔径0.7			f.元祐通寶 北宋 1086年 篆書
15-1	2面 土坑1	用途不明鉄製品	両側面欠損	長1.8 幅[7.0] 厚0.6～0.9			f.摘み状の突起あり
15-2	2面 土坑3	常滑 壺	口縁部片	—	—	[4.2]	a.輪積み b.灰褐色 砂粒 白色粒 小石 やや粗胎 c.褐色 e.良好
15-3	2面 土坑4	鉄釘	先端部欠損	長[5.8] 幅0.5～0.9 厚0.9			a.四角形状に鍛造
15-4	2面 土坑7	青磁 劃花纹碗	口縁部小片	—	—	[2.3]	b.灰白色 精良堅緻 d.暗灰緑色半透明 内外面施釉 e.良好 f.内面劃花纹
15-5	2面 土坑7	瀬戸 水滴	口唇・注口部欠損	1.45	3.15	2.9	b.灰白色 砂粒 良胎 d.灰釉 灰緑色透明 外面所々露胎 e.良好 f.内面自然釉付着 外面肩部に三重方形文を押印
15-6	2面 土坑7	鉄釘	先端部欠損	長[6.1] 幅0.6～1.3 厚0.5			a.四角形状に鍛造
15-7	2面 土坑7	土師器 甗	胴部片	—	—	[5.3]	a.上部斜位のハケ 下部横位のヘラ削り b.黄灰色 砂粒 雲母 白 色粒 やや粉質 良胎 c.淡黄橙色 e.良好
15-8	2面 土坑8	鉄釘	先端部欠損	長[7.7] 幅0.8～1.4 厚0.9			a.多角形状に鍛造
16-1	2面遺構外	青磁 碗	口縁部小片	—	—	[1.5]	b.灰白色 精良堅緻 d.暗灰緑色透明 内外面施釉 e.良好 f.内 面口縁下に一条線
16-2	2面遺構外	平瓦	左広端部側	長[8.2] 幅[12.0] 厚2.1			a.凹部布目痕 凸部格子叩き目 離れ砂 b.明灰白色 砂粒 黒色粒 白色粒 小石 やや粗胎 c.灰色 e.良好
16-3	2面遺構外	鉄釘	先端部欠損	長[4.4] 幅0.6 厚0.5			a.四角形状に鍛造
16-4	2面遺構外	鉄釘	頭・先端部欠損	長[3.0] 幅0.6 厚0.5			a.四角形状に鍛造
16-5	2面遺構外	用途不明鉄製品	完形	長6.2 幅1.0～2.5 厚1.0～2.5			a.頭部丸く、胴～先端部四角形状に鍛造

表3 層位別出土遺物一覧表

種別	出土層位		表土	近代井戸	1面遺構	1面遺構外	2面遺構	2面遺構外	合計
かわらけ	糸切り		小2	小1	大2 小25	大35 小27	大29 中3 小142	大1 小18	285
	手捏ね						大1	大2 小1	4
舶載陶磁器	青磁					碗4	碗7	碗1	12
	白磁						碗1 皿1		2
国産陶磁器	瀬戸				皿1 不明1	壺1 皿1 瓶子1	卸皿2 水滴1 華瓶1 入子1 碗1 鉢1		12
	常滑		甕1		甕12 壺3	甕12	甕47 壺14 磨耗陶片1	甕11 壺3	104
	常滑 片口鉢				I類1 II類2		I類7 II類6		16
	渥美						甕7		7
	備前						播鉢1		1
	山茶碗						尾張2		2
	山皿						尾張1		1
土製品	瓦		近代12	軒平1			平1	平1	15
	火鉢						瓦1		1
	伊勢						鍋1		1
石製品	硯						1		1
	砥石				1	1			2
	滑石製品						鍋転用1	鍋1	2
金属製品	釘					1	33	2	36
	銭				2	1	1		4
	その他						針1 不明1	1	3
自然遺物	骨				2		25		27
	貝				6	3	15	1	25
中世以前遺物						1	8	1	10
合計			15	2	58	88	366	44	573



◀ 1. 1面全景 (東から)



2. 1面全景 (西から) ▶



◀ 3. 1面溝1 (南から)



▲1. 2面全景 (東から)

▼2. 2面全景 (西から)





◀ 1. 方竪1 (西から)



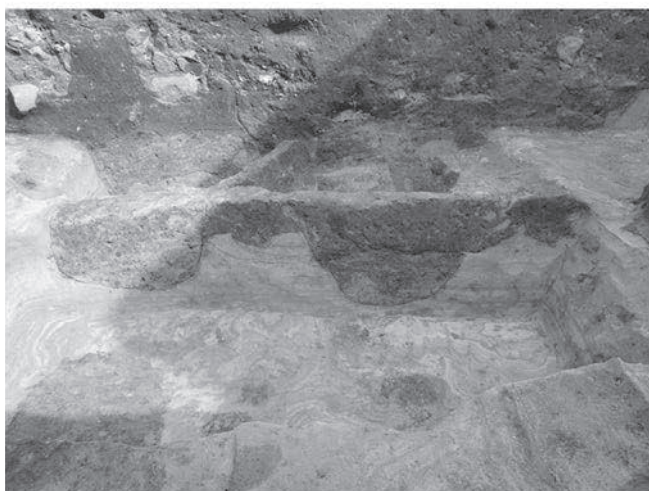
▲ 2. 方竪1 南北ベルト土層堆積 (西から)



▲ 3. 方竪2 (南から)



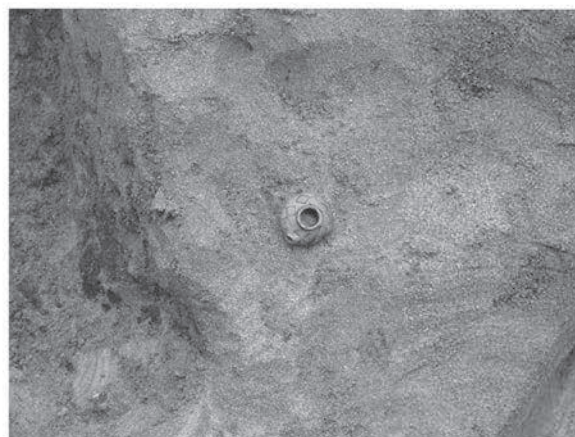
▲1. 土坑3・4・6・7 (北から)



◀2. 土坑3・6土層堆積 (南から)



◀3. 土坑4土層堆積 (南から)



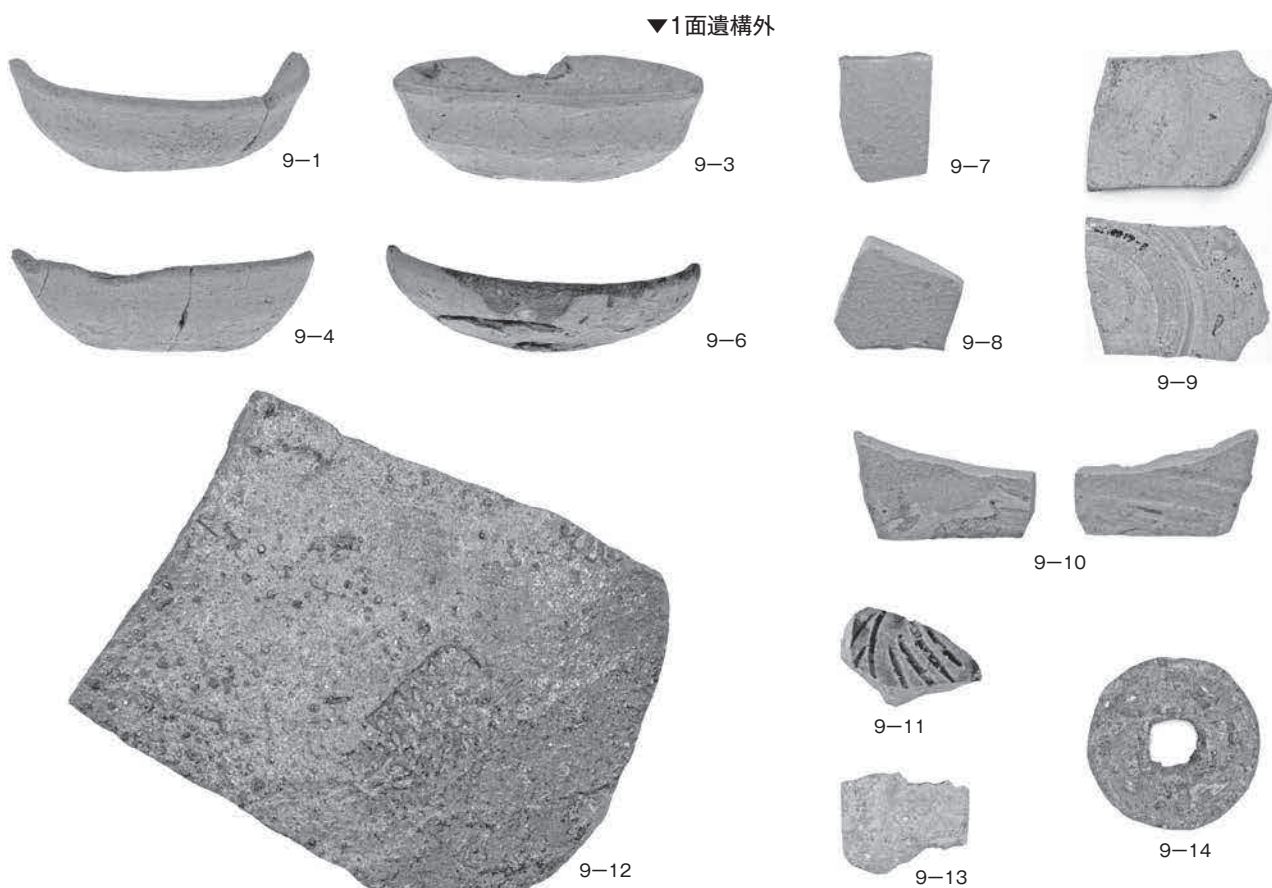
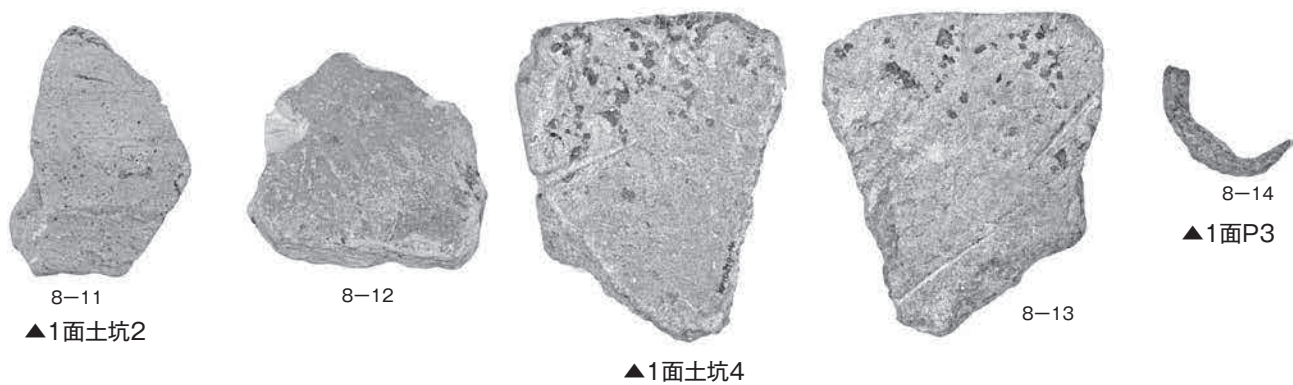
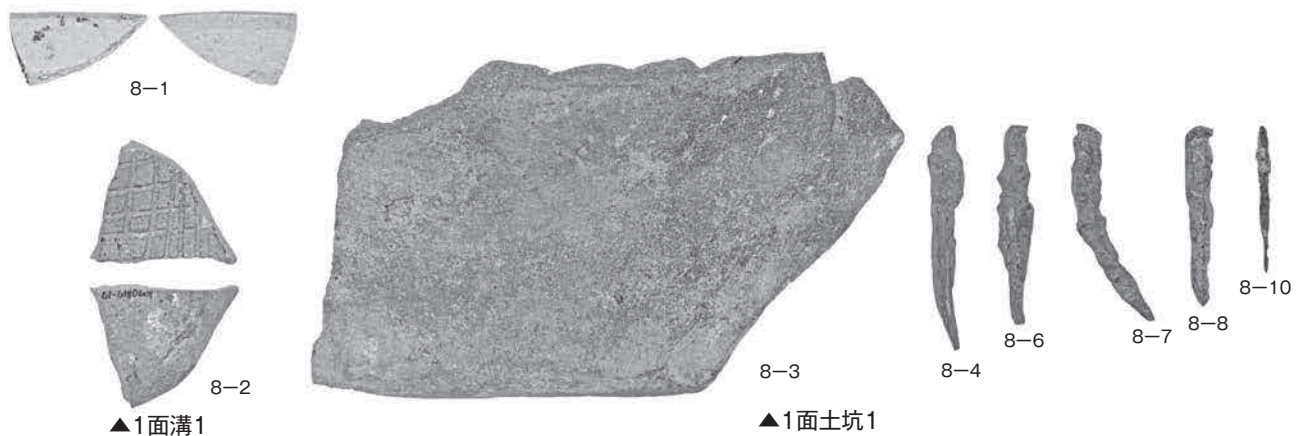
▲4. 土坑7出土瀬戸水滴 (北から)



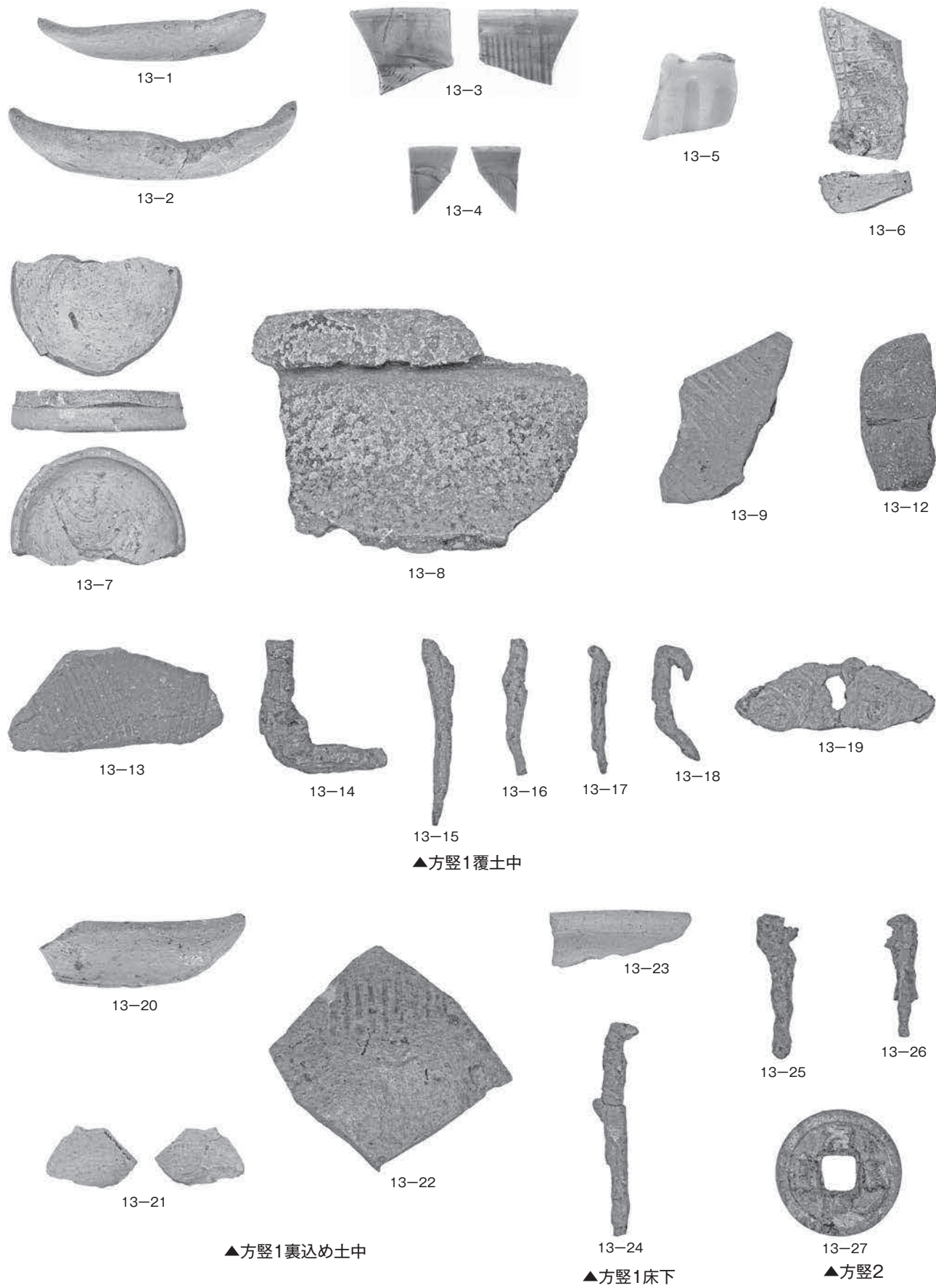
▲1. 調査区南壁土層堆積（北から）



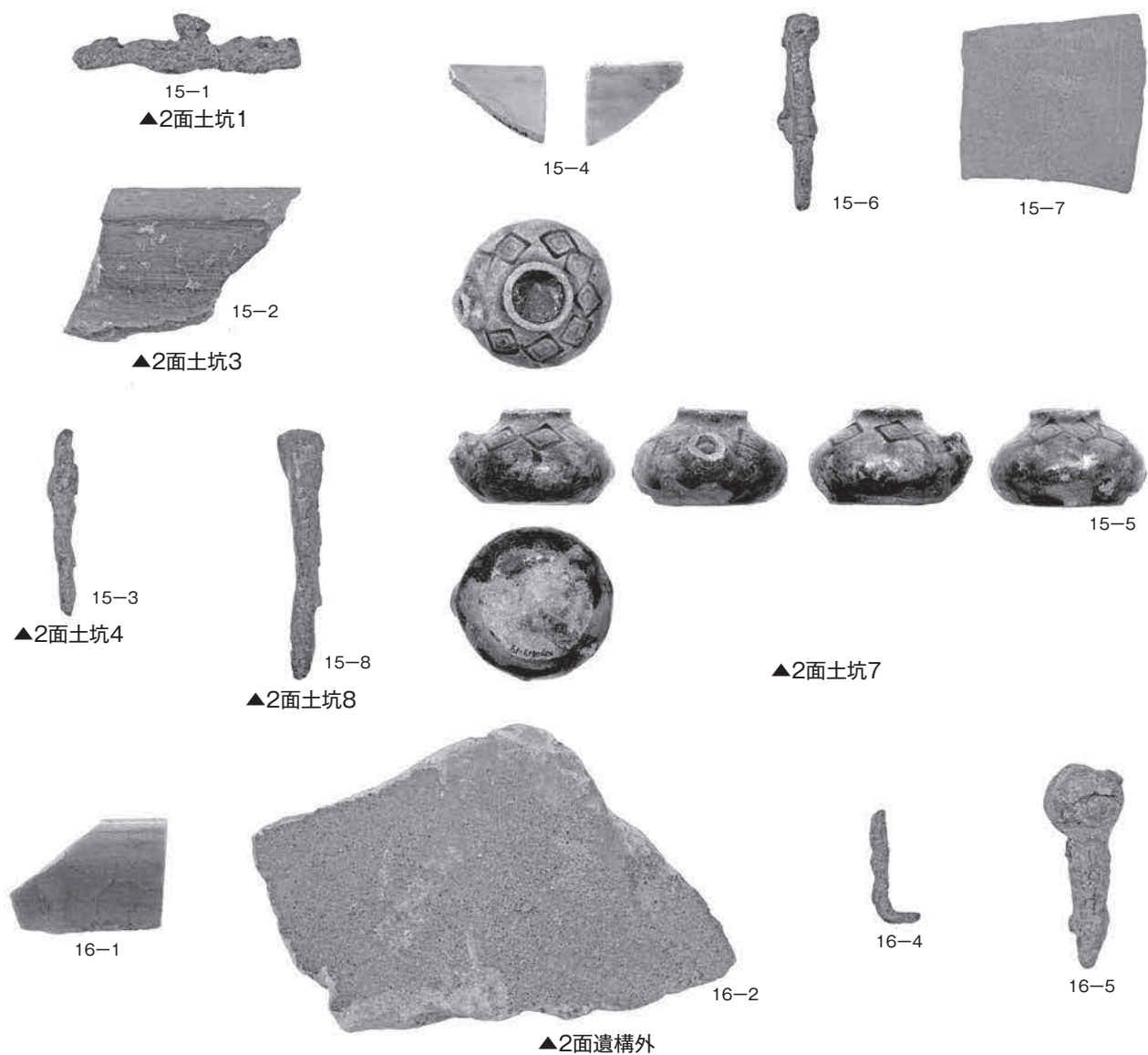
▲2. 調査区西壁土層堆積（東から）



出土遺物 (1)



出土遺物(2)



出土遺物 (3)



出土遺物 (4)

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいぎんきゅうちようさほうこくしょ							
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
副書名	平成24年度調査報告							
巻次	29 (第2分冊)							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者	馬淵和雄/森 孝子・赤堀祐子/滝澤晶子/森 孝子・赤堀祐子/滝澤晶子/山口正紀							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248-8686 鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	西暦2013年3月29日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
たまなわじょうあと 玉縄城跡	神奈川県鎌倉市 植木字植谷戸 198番	14204	63	35° 21' 03"	139° 31' 01"	20060202 ～ 20060406	98.00	個人専用 住宅 (杭基礎構造)
ささめいせき 笹目遺跡	神奈川県鎌倉市 笹目町 316番10	14204	207	35° 18' 55"	139° 32' 33"	20060615 ～ 20060724	42.50	個人専用 住宅 (杭基礎構造)
いまこうじにしせいせき 今小路西遺跡	神奈川県鎌倉市 御成町 176番7	14204	201	35° 19' 14"	139° 32' 56"	20060718 ～ 20060925	55.00	個人専用 住宅 (杭基礎構造)
えんがくじきゅうけいだいせいせき 円覚寺旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市 山ノ内字瑞鹿山 398番	14204	434	35° 20' 09"	139° 32' 47"	20070206 ～ 20070330	40.25	個人専用 住宅 (杭基礎構造)
たまなわじょうあと 玉縄城跡	神奈川県鎌倉市 植木字植谷戸 48番6	14204	63	35° 21' 9"	139° 30' 50"	20070912 ～ 20070926	21.00	個人専用 住宅 (地盤の柱状改良)
てんじんやまじょう 天神山城	神奈川県鎌倉市 山崎字宮廻 656番19	14204	384	35° 20' 38"	139° 31' 31"	20080526 ～ 20080617	49.07	個人専用 住宅 (地盤の柱状改良)
しんぜんこうじあと 新善光寺跡	神奈川県鎌倉市 材木座四丁目 579番8	14204	279	35° 18' 23"	139° 33' 22"	20080821 ～ 20080912	24.00	個人専用 住宅 (地盤の柱状改良)
こめまちせいせき 米町遺跡	神奈川県鎌倉市 大町二丁目 993番1外	14204	245	35° 18' 53"	139° 33' 08"	20081022 ～ 20081110	16.50	個人専用 住宅 (基礎工事)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
たまなわじょうあと 玉縄城跡	城館跡	中世	溝、掘立柱建物、 土坑、柱穴	土師器皿、舶載陶磁器、 瀬戸・美濃	
ささめいせき 笹目遺跡	都市	中世	土坑、柱穴	かわらけ、国産陶器、舶 載陶磁器、金属製品	
いまこうじにしせいせき 今小路西遺跡	都市	中世	土坑、柱穴、溝状 遺構、掘立柱建物 跡、板壁建物	かわらけ、国産陶器、貿易 陶磁器、瓦質製品、石製品、 金属製品、木製品、等	
えんがくじきゅうけいだいせいせき 円覚寺旧境内遺跡	社寺	中世	井戸、溝、掘立柱 建物	かわらけ、土器、国産陶 器、舶載陶磁器、木製品	
たまなわじょうあと 玉縄城跡	城館跡	中世	溝	かわらけ、土製品、金属 製品	
てんじんやまじょう 天神山城	城館跡	古墳	住居址	土師器、須恵器	
しんぜんこうじあと 新善光寺跡	社寺	中世	土坑、柱穴、池状 遺構	かわらけ、国産陶器、石製 品、金属製品、木製品等	
こめまちせいせき 米町遺跡	都市	中世	土坑、溝、柱穴、 方形竪穴建物	かわらけ、国産陶器、石 製品、金属製品、木製品、 土師器	

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 29

平成24年度発掘調査報告

(第2分冊)

発行日 平成25年3月29日

編集・発行 鎌倉市教育委員会

印刷 芝浦エンジニアリング株式会社